



ほたるたちの合言葉



—青潟大学附属シリーズ—
中学編
第三シーズン 3

舞夜じよんぬ

「こずえ、こずえ」

バス休憩所のトイレ隙間から、私はこずえを呼んだ。さっきバスから降りて、二十分間の休憩だった。そんなに行きたいとは思わなかったけれどもやはりいける時には行っておかないと。そのくらいのもりだった。こずえも同感ということで、私の次に入るのを待っているはずだった。返事は返ってこなかった。別のトイレが空いたんだらうな。他のクラスの子も五人くらい並んでいるので、私はあきらめて次の人に譲った。

修学旅行。朝、連絡船から降りた後、すぐバスに乗り込んだ。前日まで大雨だったのに、今日はしっかり晴れてくれていてちっとも揺れなかった。棧橋からすぐに乗り換えた青潟大学附属中学三年D組専用バスは、去年使った車よりもずっと大きくて、席もたくさんある。それになによりも嬉しいのは、思ったよりも揺れないということだった。今回、評議委員の私が決めたのは、「男子は前の方に固まって、女子は後ろ座席にまとまって」ということだった。三年相棒を務めている立村くんにもいぶかしがられたけれども、私の考えで押し通した。

——それにしても、こずえ、どこ行ったんだらう？

別のことで私はせっぱつまっていた。

とにかく、こずえを探さなくちゃ。

入れ違い他クラスの子とか、同じクラスの子たちと、「早く戻らないと置いてかれちゃうね」とか軽い話をしながら、私はもう一度ショートカットのくりくりした目の大親友を探した。すっかり汗ばんでしまって、ちょっと臭い。ちゃんとわきの下にしゅっしゅとするものも持ってきたのに、今用意してこなかったのは失敗だった。次の休憩所でかけよう。

「美里、ごめんごめん」

こずえが駆け寄ってきたのは、私がバスに戻ってから五分くらいしてからだった。やっぱり、他のトイレを使っていたんだそうだ。思いっきりぶん、と怒りたい。

「さっきトイレの中で呼んだんだよ！」

「だって、こっちだって都合があるじゃない。私、今朝、大の方済ませてこなかったから時間もかかったし」

——そんなおっきな声で言わないでよ！

私とこずえの席は、一番後ろの向かって右側だった。こずえが窓際だった。まだ席が二列くらい後ろにあまっているのだけれども、いろいろ荷物を置いたりしているのでそれなりに埋まっている。

「美里も今日は長丁場だし、ちゃんと控えてる？」

「もちろんよ」

朝はジュース一杯だけにしておいた。ちょっと咽が渴くけれど、ここでうっかり水分取りすぎ

たら去年みたいな騒ぎにならないとも限らない。巻き込まれたこずえもその辺はわかっているようすだった。珈琲とか、紅茶とか、いかにもトイレが近くなりそうなものは買わない。

「去年は多大なるご迷惑をおかけしました！ 反省してるよもちろん」

「もういいよそんなこと」

けろっとした顔でこずえは笑うけれど、去年の宿泊研修で起こった「女子あわやトイレピンチ」事件。バスが渋滞に巻き込まれて、女子たちが何人かトイレをがまんできなくなって、でもなんとか切りぬけたことがあった。ぎりぎりだった女子のひとりにこずえが入っていた。その時とっさに私が取った手段を、こずえはかなり感謝してくれているみたいだった。

「ちなみに、あいつには話していないんだよね、美里は」

「当たり前じゃない。向こうもしつこく聞いたりしないし」

あいつ、という人は今どうしているのかな、と前の座席を覗いてみる。ちゃんとトイレ休憩には起きたみたいで、車のそばで他のクラスの男子たちと話をしていた。今日もちゃんとブレザーを着ている。せめてシャツくらい半そでにすればいいのに。暑苦しい。

「じゃあ、女子たちと一部の男子たちの胸にそっと秘められているわけね」

「みんなだって思い出したくないよ、あんなこと。みんな紳士よね」

私も思い出したくなかったので、別の話に逸らすことにした。

「あのね、こずえ、ちょっと聞いていいかな」

まだ前の席の女子は戻ってきていない。もうバスの中はほとんどの同級生が戻ってきている。最後に立村くんがブレザーを着直して先生の真後ろ席についた。クーラーの風がくる真下だ。あの人、車に弱いからまた酔ったりなんてしないかな、とちょっと心配した。

「こずえって、あれ、もうきてるよね」

「あれってなによ」

「だから、あれよ」

心持スカートの下あたりを見つめてみる。うまく言えないのは、女子にもあんまり気付かれたくないことだから。たぶん、D組で来ていないのは、今のところ私だけみたいだから。

「あいまいな指示代名詞はわかりませーん」

「もう！ だから、あの、あれ」

エンジンのかかる音が足下で響いた。バスガイドさんが「それでは、行きまーす」と声をかけてくれた。悪いけど今日の私はバスガイドさんを盛り上げる気になれない。後ろの席でよかったと、本当に思っている。

「ほら、いつも来るって言ってるでしょ、あれよあれ」

腰を何度か擦り付けてみた。

「美里ほんとにトイレ行ってきたの？ 貧乏揺すりしてるんだもん」

「違うってだからあの」

鈍なこずえの耳に私は口を近づけた。

「せ、せいり」

こずえは無言で私の顔を見つめた。ゆっくり私のスカートひだを見つめた。

「だから、うん、それ」

片手をスカートの上においてみた。本当のことを言うと、なんだかお腹のあたりが冷たくなったり熱くなったり、ちょこっと痛くなったりと、変な感じだった。

「美里、まだだって、言ってたよね、この前さ」

——嘘言ってたんじゃないもん！

顔が火照ってくる。バスガイドさんが男子たち……立村くんではなく、貴史の方だ……に乗せられて盛り上がっているのが聞こえる。ああやってくれたらいいんだ。今の私にはそれでいい。

「あの、あれって、始まりってどんな感じなのかなあ」

私は意地でも指示代名詞を使いたいので、そのまま続ける。

「ほら、お腹痛くなったりするっていうじゃない？ それから、眠くなっちゃうとか、いらいらするとか、そういうのって、やっぱりある？」

修学旅行前、女子だけ集められて、時代遅れの怪しいビデオを見せられた。修学旅行中に生理になっちゃって、男子にからかわれたり、先生に泣きついたりする女子の話だった。私もほんとのところ、ああはなりたくないなって思っていた。たぶん大丈夫、そんな予告なんてほとんどなかったし、甘く見ていたのかもしれない。

——いや、それ以前の問題よ。私、まだ、なっちゃったってわけじゃないかもしれないもん。

こずえはまだ私の顔をまじまじと眺めている。窓を少し開けた。クーラーが利いてきているせいか、寒い。風が液体みたいに咽へ流れ込んでくる。

「美里、耳貸して」

吹き込まれたこずえの問いは、みつつだった。

「三日前からパンツ、やたらと黒くなってない？」

——いくら洗っても、きれいにならなくて焦ってる。うん。

「昨日から、トイレにやたらいきたくなくてない？」

——青大附中に入って以来、昨日初めて授業中に「お手洗い行きます」って立っちゃった。立村くんと同じ教室の時は、絶対行きたくなかったのにな。ちゃんと休み時間に行ったのに、三十分も経たないうちに。あんなこと、初めて。

「今朝から右のお腹、やたらと張ってない？」

——盲腸かなって、今朝から心配。

すぐに答えられなかった。

急停車。前がつかえているみたいだ。がくりと揺れた。私もふらりとした。

「……どうなの？」

曇み掛けるこずえの言葉に、私はほんとのことを答えるしかなかった。

「うん、今も、そう」

厳しい顔していたこずえが、バスの動き出すのと同時ににやっと笑った。

私の膝を人差し指でつついた。

「とうとう美里も念願の女の子じゃん。奴とエッチなこと、できるじゃん」

——そんなんじゃないってば！

私はこずえの腕をつかんで思いっきりつねり返した。

「もうっ、こずえになんか聞かなきゃよかった！ もう知らない！」

「羽飛に相談できることじゃあないもんねえ」

それでもまだにまにましている。入学してからずっと、「美里、生理なんていいもんじゃないから焦ることないよ」と慰めてくれていた。確か、こずえが初めてなったのが小学四年の冬だと話していた。ちっともそれっぽく見えないのに変だなと思った。クラスの子たちも中学二年くらいでどんどん、なっていったし、水泳の授業の時はかわるがわる見学をしていたりもした。生理になった時どうするか集会の時、養護の先生に「まだ生理の来てない人」ということで手を上げさせられたけれど、その時まだ三十人くらいいたのでほっとしたことを覚えている。もう十五歳にもなって、まだというのは遅いのかなと思わないこともなかったし、お姉ちゃんにもしょっちゅう「美里はまだ、はんぺんの使い方を覚えてないのねえ」といやみったらしくからかわれている。なによりも、妹に先を越されたのがちょっと複雑だったりもした。もっともお赤飯なんて炊いてもらって嬉しいものでもないし、トイレがやたらと血みどろのにおいで臭くなるのは勘弁してほしいかな、とも思う。

「で、冗談抜きでこれから質問ね。美里ってさ」

さらに耳に吹き込まれるこずえの質問。やっぱり、答えるのに時間がかかりそうだった。

「朝は平気だったの。たいてい、朝私とかだと気付くんだけどなあ、しみはなかったの」

——おろしたてのにしたんだもん。白いレースつきのにしたのよ。

「でさ、さっきちゃんと、あれ、持って行ってつけたの？」

指でひし形を作るこずえ。意味はわかる。私は首を振った。

「どうしてさ！ じゃあさっき、まだつけてないわけ？」

——だって、まさかそうなるなんて思わなかったんだもん。それに、違っていたら困るじゃない。私四枚しか持ってきてないんだもん。

「四枚、って、美里本当に？」

かなり慌てているこずえ。でも、なんか心配そうだ。

——この前、くばられていたものと、あと一応念のために、専用の下着を持ってきているけど。

話をしている間にも、なんだか足の間が気持ち悪くなってきている。気持ち悪くなんてない！ と暗示を掛けているんだけど、自分の気持ちが伝わらないみたいだった。足をそっとつぼめてみた。

「あのさ、美里、まじでやばいと思うよ。今日のおろしたてのパンツは、分厚い？ 薄い？」

——モデルさんが着ているようなもの。フリルがたくさんあってシュミーズとおそろいなんだ！

「ああ、もう最悪じゃないのよ、美里」

こずえはゆっくりと大きなため息をついた。さっきまでにやついていたくせに、私の肩を引き

寄せて、

「いい、美里。今日は私の言う通りにしな。立村の前で恥をかきたくないでしょ」

——なんで、そんなにいきなり脅すのよ！

「とにかく、次に降りる時まで、あんたの持っているはんぺんを全部、ポケットの中に押し込んでおきなさい！ あーあ、一応私も持っているけど、四日間も持たないよ。ほら、出して」

リュックの中をごそっと捜し、そっと取り出した。ピンク色の可愛いポーチだった。両手で納まるかどうかという大きさだった。ただ容量はあまりないので、四枚がやっとだった。かしゃかしゃと音が鳴らないように、注意深く制服のスカートに押し込んだ。

「あのさ、美里。ほんつとにこれしかないわけ」

「うん、だってまさか」

「とにかく！ 修学旅行なんだからね」

こずえがなぜそこまで、力強く私にお説教するのか、その時はわからなかった。

次の休憩所でトイレに入るまで。

——こずえの言う通りだわ。

可愛い下着なんて、意味がなかったんだ。

まだ本当のところ、私が本当に生理なのかどうかすらわからなかった。こずえの投げかけた質問には当てはまっていたけれども、それって先生たちもお姉ちゃんもお母さんも、あまり教えてくれたことではなかった。確かに、下着がこの三日間くらい、取り替えるので大変だったのは認める。

小学校以来、ショーツだけはいつも自分で洗うようにしていたけど、洗濯の量が増えてしかももみ洗いで大変だった。石鹼で落ちない汚れみたいで、お湯を使ってしまったのがまずかったらしい。せっかくお気に入りのピンク花柄ものが茶色いしみで台無しになってしまった。新品なのにこんなことってめったになかった。

確かに、昨日からお手洗いにいきたくてうずうずしていたのは認める。

三時間目、数学の時間。トイレに行き忘れたわけじゃない。催してしまったのはだいたい十分くらいたってからだった。四十五分くらいならがまんできなくもなかった。けど、立村くんの前でその、前を押えるなんてことをするくらいなら、さっさと「すみません、お手洗い行かせてください」の方がいい。小学校の時ならともかく、中学で静かな教室……なにせ狩野先生の授業だし……、手を上げて立ち上がって、もじもじしながら教室を出て行くのは恥ずかしい。もしかしたら今年に入って、初めてじゃないかな。トイレに授業中行ったのは。

確かに、ちょこっとお腹が引っ張られる感覚なのは認める。

家族、みな、盲腸経験者というのもあって、残りの私がいつ盲腸にならないかはわからないという恐怖がある。つい、盲腸のある下っ腹を触れてしまいたくなるのだ。今回もきっとそれかなと思っていた。

言い訳なんてどうしようもない。気が付いたら後ろの方にちょびっと、赤茶色のものがくっついていて。慌ててこずえの言う通りに、ポケットから持ってきたナプキンを一枚開いた。かしゃ

かしゃと軽い音がする。バスを降りる時、立村くんのそばを通過して、音に聞き耳立てられたらどうしようと思ってしまった。なんも考えないで寝ていたみたいだけでも。

「清坂氏、あのさ、今日のことなんだけど」

またぴくぴく引っ張られるお腹のそば。押えながら私はバス側の立村くんに向いた。

「なあに？」

言いかけて、立村くんは物言うのをやめた。

「ほら、古川さんと羽飛のことだよ、でも、今はいいや」

「途中でなぜやめるのよ」

しばらく立村くんは、私の顔をじっと見詰めた後、

「もし車酔いの薬がほしかったら、声かけてくれていいから」

とそっと笑ってくれた。はにかむように、少しうつむき加減で。こんな一歩間違えると失礼な表情も、今の私には慣れっこ。えくぼを眼一杯作って頷くことにした。

「うん、ありがと。立村くんも無理しないでね」

本当は、すぐに酔ってしまうからすぐにバスの中で寝てしまう人なんだって、分かっている。貴史が隣りの席というのは心配だけど、まあいっか。

「美里、あんたさ、大丈夫？ ちゃんと、当ててきた？」

「うん、大丈夫ついてから着替える」

「あんたの持ってきたもの見せてよ」

私のポケットから少しはみ出しているナプキンを、こずえは許可なく引っ張り出した。

「なによ！ もう人前で」

「出しっぱなしにして戻ってきたわけ。もう美里、あぶなっかすぎる！ それになんか、調子悪かってこと顔に出すぎ！」

こずえがそっとナプキンの薄さを指で計っている。こずえがもともと猥談好きなのはいつものことだから、誰も驚かない。

「一枚しかしてないわけ？」

「うん。もったいないじゃない」

「ばっかねえ、ほら美里、耳かして」

——今日は次の見学するお寺に行くまで、ずっと座りっぱなしなんだよ！

「それがまずいの？」

「だから！」

こずえはさらにいらいらしながら続ける。

「あんた体重何キロ？ 四十五キロ切ってる？」

「うん、ぎりぎり」

「その体重とお尻で、あんた、濡れたスポンジをつぶしていると考えてみなさいよもう」

——変なこと想像させないでよ！

「あんた、血ってね、ずうっとで続けてるのよ！ 今も、ずうっと！ こんど着いたらすぐにトイレよ！」

こずえの言うことは、見事に当たっていた。

最初の見学地、お寺に着いてから私は、もうこずえの言葉に逆らわないようにしようと決めた。自分の意志なんて、生理には関係ないんだということをいやと言うほど思い知らされてしまったから。それに、お腹がだんだん張ってきて痛い。胸もむかむかしてきた。

立村さんと貴史がまた近づいてきて、

「清坂氏も車に酔うことあるんだなあ」

と感慨深げにつぶやいていった。

「美里、大丈夫？ ほら、この袋使って！」

——もう、最悪！

エチケット袋を口に当てていた。実際吐くものはなくて、ただ胃液ばかりが競りあがってくるだけなのだけれども。去年のバスはもっと小ぶりで揺れたのに、平気だったのに。今日は朝から体調が最悪というのもあってか、胸がむかついてしまった。

「清坂、大丈夫か？」

他の男子たちも声をかけてくれる。立村さんに私の様子を実況中継してくれている奴もいた。前の席にいる奈良岡彰子ちゃんがわざわざきてくれて、お茶をついでくれた。

「少し飲むとすっきりするよ」

——けど、トイレ行きたくなっちゃったら困る。

こずえに少し背をさすってもらった。だいぶ良くなった。

「あんた、生理痛が結構きついタイプかもねえ。私は平気な方なのよ。だからこういう時でも平気なんだけど、ほんとしんどそう」

こずえにしか、今の私が生理痛で苦しんでいることを気付かれていないはずだ。女子にもあまり知られたくない。むしろ、酔っている振りをしたほうがいいと思っていた。でも実際、こんなに横っ腹が痛くて、胸がむかむかすると頭がおかしくなりそうになる。

——車には強かったのに！ もう悔しい！

立村くんはどうしているんだろう。いつもこんな感じなんだろうか。

私はこずえに頭をもたせかけながら、ささやいた。

「立村くんどうしているか、見て」

なのに頼もうとしてないことまで勝手にやってしまうのはやめてほしい。

「ちょっと、立村、あんた生きているんだったら来なさいよ。美里の側にいてやんなよ」

貴史の声で返答あり。

「こちらも死にかけてるから無理！」

——当たり前じゃない！

立村くんの車酔いは私なんか眼じゃないらしい。寝ている間は大丈夫だけれども、起きるともう十分くらいでつらそうな顔をしてくるんだから。いつもこんな思いしているんだったら、私もさっさとねんねしたくなる。

生理がこんなにきついものだなんて、思わなかった。

こんなに汚いものだなんて、こんな臭いものだなんて。

こんなに痛いものだなんて。こんなにむかむかするものだなんて。

きっと家に帰ってからお母さんに告げたら、お赤飯作ってくれるんだろうけれど。

——こんなのなくなっちゃえばいい！

また競りあがってきた胃液を必死に押えながら、私は涙目で咳き込んだ。

昨日の大雨が一転、青一色の空。風もほとんどなかった。大抵、バスの中で半分死人みたいな顔してひっくり返っているのがいつものパターンなのに、ほんと 奇跡としか言いようがない。地上よりは確かに揺れているはずの甲板で僕たちはジュースを飲みながら椅子に腰掛けた。赤・青・黄色とやたら鮮やかな椅子が縦 五列横八列ずらっと並んで固定されている。こんなに気分よく乗り物に乗ってられるなんてこと、今まで一度もなかった。

「と、いうことでだ。立村、もう一度あれを読ませろよ」

B組評議の難波が、僕のショルダーかばんを引っ張った。

「激愛するお方からのラブレターだってことはわかってるけどさあ、な、俺たちにも読ませてく
んろ」

昨日、カラオケボックスで恋愛沙汰のけりをつけ、今はすっきりした顔のA組評議天羽が背中から抱きつく。気持ち悪い。

「お前の言う通り例のものを用意はしてきたけどさ、ほんとにいいのか」

気弱そうな言葉をもらすのはC組評議の更科だ。

僕は目で三人に合図し、背中为天羽の腕を無理やり引き離し、かばんに手をかけた。ふと気になってC組評議の更科に尋ねた。

「用意って、更科、お前荷物の中にそのまま入れてきたのか？」

「ばれないように、袋には入れておいた」

「旅館に着くまでは持ち物検査なんてしないだろうしな」

うっかり足が着いたら一貫の終りだ。青潟大学附属中学三年D組評議委員会、男子評議たちに与えられたいくつかの裏任務。先生たちにばれたらたぶん停学だ。

——けど本条先輩も、これ本当にやったのか？

周りには女子たちも、他の連中もいない。弁当を食べたりして盛り上がっている一部の男子グループにも聞こえないよう、僕はかばんの中から一冊、ノートを取り出した。

本条先輩直筆「修学旅行裏マニュアルブック」である。

——修学旅行を迎えるにあたって・男子評議委員へ愛をこめて。

なにが愛、なのかよくわからないが、そう灰色の表紙には黒マジックでそう綴られている。ぱらりとめくり、まずは椅子の背にしがみついている難波へ渡す。周りに人がいないのをいいことに、朗朗と読み上げる難波。

「えっと、一つ目は、『その一、持ち込み禁止ではあるが持ち込まねばならないもの一覧』かあ。お前、電話で言った通りのこと、書いてるなあ」

「エロ本ってか？」

これは更科。ボーイソプラノの声が響く。天羽が更科の後ろに回り、羽交い絞めにした。僕は人差し指を口に当てる程度にとどめ、頷いた。「ここに書いている通りなんだ。本条先輩のよう

ないかにも精気溢れんばかりの人を基準にするのはどうかなって思うけどさ。でも、四泊だろう。人によってはまあ、必要かなと思うわけだし」

いくら人気がないとはいえ、船上は有る意味密室だ。この辺は曖昧にぼかす。

「男子用の臨時トイレ用ペットボトル、これはわかるよな」

僕が去年の宿泊研修でクラスの男子連中に必ず持っていくよう厳命したものだ。実際使用者がいたかどうかはさだかではない。とはいえ精神的そなえがあれば憂いなしだ。

「けどさ、『ゴム』なんてなあ」

あえて「コンドーム」とは言わない天羽。小声だ。お笑い番組演芸舞台に通いつめるおちゃらけ者、結構わかっているところはわかっている。あれでも気を遣っているのだろう。

「ほんと、本条先輩ならともかく使う奴いるのかよ」

「本条先輩だってたぶん使わなかったと思うよ」

僕はこの辺軽く流した。うちの学校はわりと、具体的な保健体育の授業……いわゆる性教育だ……を行うところらしいのだが、二年最後の授業で男子たちに配られるとは思わなかった。あれ以来、ひとり一枚携帯することが常識化している。もちろん規律委員会の持ち物検査で見つかったも没収されることはない。ちなみにその授業前から日々携帯していた男子を僕は知っている。現規律委員長の南雲秋世である。実際使用しているかどうかまでは僕の知ったことではない。

「あれだけおおびらに授業中渡されたら、隠すものでもないんでないか」

難波の言う通りだ。僕はページをめくるよう難波に指で合図した。

「で、次だ。『エロ本持参』って。ああ、まじで書いてるな」

「本当か？」

いまだに信用していない顔をするのは更科だった。女子が圧倒的に権力を握っている通称「青大附中の邪馬台国」C組の男子評議。かなりストレスが溜まっていると見た。僕が「グラビア本持参」を伝えた時、一番喜んだのはこいつでないかと思う。

「本当だ。『健康な中学生の男子たるもの、一日一度は励みたくなるだろうし、ただでさえ修学旅行はストレスもたまる。特に評議委員たる君たちは、それぞれの肉体が訴える激しい欲望を排泄したくてならないだろう』。さすが本条先輩、よくわかっている」

——難波、お前って結構、本条先輩と意見同じかもしれないなあ。

最後まで抵抗があった。自分の名誉のために言っておきたい。

「まあなあ、溜まる感覚って、なんか、すっきりしねえよなあ」

天羽のわき腹がちょうど僕の片手ぶつかる場所にある。思いっきり突いてやった。「あいってえ」と天羽の奴、僕の髪を引っ張って抜こうとした。この年で髪の毛なくしたくない。そのまま顎を脳天にのつけたまま、僕の首を軽くしめた。

「『もちろん君たちの脳内細胞に巣くうアイドルたちをイメージしつつ、励むのもまた一興。しかし、大抵はできるだけ可愛い子のグラビアなどがあった方が、色々好都合なのではないかなと思うのだが、いかに』本条先輩、やっぱわかってるよ」

「難波、そんなに納得しているんだったら、当然、持ってきたんだろなあ」

無表情で僕は尋ねた。

「ああ、『日本少女宮』の最新写真集」

船の中で持ち物検査がないことを祈りたい。

「立村、そういうお前は何かを持ってきたんだ？」

天羽が肘で頭をぐりぐりする。昨日いじめた恨みを今になってぶつけるのはやめてほしい。

「本条先輩がくれた古い写真集だよ」

「使用済みかよ。お前の抜いた後ってものを使うのか？ D組は」

天羽の手首を思いっきりひねったのは条件反射だった。

別に昨日、面倒な仕事をした恨みがあったわけではない。

「じゃあ天羽、お前はどんなの持ってきた？」

「今朝、コンビニで買ってきた」

恐れ入りました。誰も「使用」していない、匂いのものを持ってきたってわけだ。

なぜ僕たちが午前中のさわやかな青空の下、グラビア誌の下ネタに興じているのか。一応評議委員としての仕事なのだ。表向き、評議委員の修学旅行関連業務は「旅行のしおり」「クラス内の班振り分け」「事前学習」などなどあるのだけれども、他の人たちに代行してもらってもかまわないことばかりだった。修学旅行が終わったらすぐ、水鳥中学との学内交流会が行われるのでその準備なども重なっている。ほとんど女子評議の清坂美里、通称清坂氏にまかせっぱなしだった。実際、細かい作業は清坂氏の方がこなすのがうまいので百パーセント信頼して任せている。向こうも僕に頼まれるのが嬉しいみたいだ。僕の頼りなさゆえかもしれないけれども、考えないことにしておく。

三日前、卒業した一学年上の先輩、本条里希先輩から封筒が届いた。

しばらく忙しくて電話連絡しかしていなかったのだけれども、やっぱり僕のことを忘れたわけではなかったらしい。

「先輩、修学旅行のときって何してました？」

何気なく質問してみたところ、わざわざノート一冊にまとめて送ってくれた所、義理堅い人だ。

女っつらしの学年トップとして異名を馳せた本条先輩は、現在公立の青瀬東高校で演劇部に入って、遊び人に徹しているらしい。ほんと、青大附属高校、惜しい人材を手放したものだ。

そのノートを全部読み終えて、僕は即、評議委員連中男子限定で連絡を入れたというわけだ。一応A組の天羽には、前日顔を合わせる用事があったこともあって曖昧に説明した。学校だと女子の目が怖い。電話で簡単に用件だけ話した。なんせ内容からしてまずい。

一、男性向けグラビア雑誌を一冊持参すること。

一、コンドームを各クラス人数分用意すること。

一、バス内トイレに使用できるように、ペットボトルを持参させること。

こんなこと、女子に知られたら即、評議委員から罷免されること間違いなしだ。ただでさえ今年の二月以降、三年評議の間で男女の不協和音が流れているっていうんだから。比較的うまくいっている僕と清坂美里……通称「清坂氏」と呼んでいる……が懸命にとりなしているにもかかわらず、状況は悪化する一方だ。きっと言われるだろう。「男子って最低！ スケベ！」ときっぱり切り捨てられ先生に告げ口され、評議四人とも停学・旅行中旅館内にて座敷牢の可能性、ありだ。

本条先輩にお礼がてら質問したところ、

「お前、四日間、抜かないで平気でいられるか？ いや、いられないとは言わないだろうが、いらつかねえか？ いらついたらどうする？ 誰かに八つ当たりしねえとも限らんわな。その相手がお前、もし清坂だったらどうするんだ？ 清坂ちゃんを泣かしてしまったらお前どうするんだ？ とにかく、俺の経験で言わせていただければだ。自分の身体をこの長丁場、ベストコンディションに保つためには、一日一回、きっちりと排泄するってことが大切なんだぞ。お前、またつらった顔でいるんだろ？ 人間はな、抜くべき時にきっちり抜いておいて、女子たちには紳士でいる振りをする、それこそ大切なんだぞ。ま、教師連中にそのことわかる奴いるとは思えねえから、評議のお前らが少しでもトラブル防止できるよう、準備しておくんだな」

もう一つ重要事項が記載されている。

一、朝五時前後、男子評議委員は必ず、旅館・ホテル内の男子トイレに集合し、情報を交換すること。

一、他の連中がやってこないうちに、心行くまで快便を楽しむこと。

なにが「楽しむ」んだか、とは思うのだが、必要性は痛感する。

男子の場合、トイレの個室にこもるということは、かなりのストレスとなる。学校では決して立ち寄らないようにしているのも当然のことだ。でも四日間、便秘で過ごしたらそれこそ「抜く抜かない」以前の大ストレスになること極まりない。せめて評議連中だけでも、朝の内に済ませることはちゃんと済ませ、仲間内で見て見ぬふりをし、ひとりが籠っている間は誰にも邪魔させないように見張りを行う。なるほど本条先輩、頭いいと思う。これから説明するつもりでいた。

「つまりさ、本条先輩が言うには」

僕は一通り、三人に説明した。先輩のノートは僕宛に向けて書いているところがあるので、他の三人にはわかりづらいところがなきにしもあらずだ。全部目を通した三人は、にまにましながら僕のネクタイあたりを眺めている。

「四泊五日の間、できるだけみんなにストレスを溜めてほしくない、ってことを言いたいわけなんだ。まあちょっとさ、まずいよなってところもあるけど、先輩から話聞いたらそれは確かになって思った」

「エロ本のことか？」

だから声が大きいぞ、更科。天羽にまたヘッドロックを掛けられている。

「そう。誰かかしら、こっそり持ち込んでいるとは思うけどさ。一日目の夜の段階でまず、その写真集を分解して、男子たちに各一ページ渡すんだ。使う時は当然一人だろうし、人の前ではやりたくないよな。小さく破いて自由時間あたりに外で捨てれば問題もないしさ」「本、破くのかよ！ 書物に対する冒涇だ！」

難波が悲鳴をあげる。こいつは自称「青大附属のシャーロキアン」だが推理能力についてはあえて何も言わない。もうひとつの一面「古本屋マニア」という顔を持つ難波にとって「エロ本」であっても、本を破く、なんてもってのほかなんだろう。

「お前がかまわないんだったら、回し読みでもいいけどさ。ただ、見つかった時は言い訳できないだろ」

「もっと絞りだしてかすかすの奴、持ってくればよかったよ、もったいない」

今更後悔しても遅い。天羽がまぜっかえした。

「難波のはあはあ言った後の女で抜くなんて、B組もやだろなあ」

——だからなんでそんなことこだわるんだよ！

思いっきり露骨に顔をしかめた難波。そりゃあそうだろう。天羽の女子好みがいかにくせあるか、みなここ数ヶ月の騒動でよく実感している。

「とにかく。四日間もの間、いつもすることができないと思惑能力を落とすもんだと本条先輩は言いたいらしいんだ。別に、その、あの、色情狂になれってわけじゃなくってさ。俺たちがまず、四日間きっちりと生活することが大切だってさ」

「立村そんなこと言うんだったら聞くけど、お前、一日一回抜かないとしんどいの？ すぐえ溜まりやすいタイプ？」

気弱そうだが実は結構言うこという更科が尋ねてきた。本当のこと答える必要はないように思う。笑ってごまかした。

「想像に任せる」

「清坂ちゃんいるんだから、本人に抜いてもらえばいいのに」

間髪入れず僕が更科の頭をはたいたのは、当然のことだと思う。たぶんこういう時に冷静さを失ってはいけないから、本条先輩は「エロ本」持参を進めてくれたのだろう。納得だ。さわやか、青空、快晴の下で話すようなことじゃない。

「あのなあ、立村、そうかっかすんなよ」

——天羽、お前には言われたくないよな。昨日の今日でさ。

怒涛の雨嵐の中、なんのためにわざわざカラオケボックスまで行って、こいつのクラス内恋愛問題の仲裁をしてやったというんだろう。肩を不必要にもむのはやめてほしい。小さな声で「落ち着け、ほら、大きく息を吸って、ほーら吐いて」と、ラジオ体操ののりでささやいてくる。

「単に俺たちはだなあ、唯一生え抜き評議同士うまくいっている三D評議コンビを応援しているだけなんだわな、だろ？ 更科、難波」

僕の前で椅子をまたぐようにして、難波も天羽とこくこく頷く。

「天羽、さすが話が早い」

——難波よ、お前もそんなクールな顔して、つらっとした顔でさりげないこと言うしな。

「だよなあ、俺たち、間違っただことしてないぞ。立村、お前と清坂がうまくいってるから、なんとか青大附中評議委員会も空中分解しないですんでるんじゃないのかなあ」

——ずっとそんなこと関心なさげな顔をして何考えてるんだか、更級よ。

僕が黙っているのをいいことに、三人言いたいことを言い合う。

「まあ、俺が言えた義理じゃあねえよ。この前はほんっとすんませんでした！ 俺個人のことをさ、立村に手伝って片つけてもらうなんてみっともねえったらねえや。けど、これでも責任は感じてるんだぜ」

——責任感じてるならこれ以上何も言うなよ。俺だって水に流そうとしているんだからな。天羽がひとりでまた演説をぶとうとしている。いわゆる「委員会内恋愛」の失敗により一方的な相棒交代を要求し、しゃれにならないくらい相手の女子を傷つけてしまったという過去を持つ。過去というにはまだ時間が経っていない。なにせ昨日、僕の意味でもって初めての「弾劾裁判」みたいなものを行ったのだ。別に裁判官になったわけではなくて、お互いの話をすべてきいた上で一番いい方法を取ろうと思っていただけだ。元天羽の恋人だった女子が別の男子と付き合うことで丸く収まったようだった。この件については僕個人として、いろいろ言いたいことがあるのだけれども、天羽やその女子を傷つけるだけだ。どしゃぶりの雨の中、思いっきり水に流したつもりだった。だったら忘れさせてくれよな、と僕は言いたい。

「まさかさあ、評議の女子たちがここまで俺に、いや男子連中に噛み付いてくるとは思わなかったしなあ。あれだけ団結力強いと言われてた俺たち三年評議グループがだぜ。あれはあれ、これはこれって割り切ってくれたのは男子連中だけ。女子たちからはまあ、覚悟はしてたけど、総すかんって奴か。これもしょうがないわな。俺の身から出た錆だ」

——よくわかってるよな。

心で突っ込みをいれて天羽に肩をもませたままにしておく。気持ちいい。

「けど、それをうまーく、バランスとってくれてるのがお前、立村と清坂の三年D組評議委員名コンビじゃねえかよ。ほんっと、お前ら付き合っているいない関係なく、鉄壁って感じだよな。立村がテーマを決めて、清坂が割り振って意見をまとめ、最後にやっば立村の決断でまとまるってさあ。しかもお前なんも、いやな気分させないで俺たちに仕事押し付けてるし」

——押し付けてなんかないってさ。

かなりむっときた。でも返事をしない。

「これ誉め言葉だぜ、立村、すねるなよ」

難波に今度は頭をなでなでされる。ガキじゃないんだから。頭を思いっきり振って振り払った。

「とにかく、俺たちは立村を評議委員長に選んでよかったって、強調したいわけ。女子とのごたごたさえなければなあ、ほんっと最高だぜ、今の評議委員会。修学旅行が終わったら今度は水鳥中学との交流会も待ってるだろ？ お前がここでへばっちまったら俺たちも困るしさ」

「うん、青大附中評議委員会発展のためにも困るよね」

——倒れて海上自衛隊の救急ヘリコプター呼んでもらおうか。

「残念ながら、俺は評議委員会をごたごたにした張本人だ。女子連中からは一切口を利いてもらえねえ、淋しい日々だが後悔しじゃない。けどな、立村。お前にはなんとしてもハッピーになってほしいんだなあ。だろ？ これ、友情だよな」

——何が友情だったの。余計なお世話っていうんだよ。

「だからな、俺たち青大附中三年男子評議委員一同は、道中、とことんお前らふたりを応援したいのだよ、なあ、みな、賛成だよなあ！」

——人の応援するより自分のこと気にしろって感じだよな。 僕がひとり黙りこくっているのいいことに、みな言いたい放題のことを言っておる。本当だったら僕も思いっきり言い返したいことがあるし、どうせだったら一発ずつ拳骨をお見舞いしてやりたいところだ。ちゃんと三人のアキレス腱たる恋愛事情を握っている僕としては。

——天羽は言うまでもないよな。西月さんがしゃべれなくなったのはどう考えたってお前のせいだろ？ そりゃあいろいろ問題あったのも認めるさ。あれだけ張り付かれたら気持ちもわかるよ。うちの女子評議たちが勝手に西月さんを応援して、天羽がいやがるのを無視してカップル化しようとしていたのはまずかったよな。けど、お前やりすぎ。よりによって次の彼女を評議委員の女子後釜に持ってくることはないだろ？ プライドはずたずたにされて傷ついて自殺されても、俺は驚かないぞこの状態。

——難波だって人のこと言えないだろ。シャーロキアンだとか言って硬派気取っているのは悪くないけどな。いいかげん「日本少女宮」の人を基準にして女子の外見を評価するのはのはまずいと思うよ。プロポーションがいいとか、顔の作りが整っているとか、それに比べてうちの学校的女子は……って面と向かって言ったら、そりゃあ誰だって怒るだろ？ 本音と建前ってもの、使い分けろよな。

——更科も、保健室の都築先生に熱上げているのはわからなくもないけどな。あいつ年上好みだし。チャンスあらば寝込みを襲おうとでも思っているんだろう？ 見た目はそういうことに関心ないように見えるからな更科も。油断していたら危険だぞ。こいつは。

これだけ個性の強い三年男子評議からどうして僕が、本条先輩に気に入られたのか不思議でならない。いつ誰かが対抗馬にしゃしゃりでて邪魔してもおかしくないのにだ。こいつらみな、僕が何をするにしても立ててくれたし、下級生や女子たちからの反対意見を無視して評議委員長に持ち上げてくれた。

評議委員長として今学期一番の課題「水鳥中学との全校交流会」も無事に開催できそうだ。いろいろな方面から横槍が入ったり、予定とは少し違った形になってしまったけれども、その辺はまだカバーできる範囲内のものだ。

天羽は最近こそ女子たちがらみの問題を起こして株を落としているものの、派手なパフォーマンスでもって話を下級生に通してくれたりした。笑いで受けを取るのがこいつ、天才的にうまい

。 難波も僕の苦手な論理的部分をカバーしてくれて、具体的な例を適度に出しては先生たちや理屈っぽい下級生たちを説得もしくは丸め込んでくれた。女子たちに対しての辛らつな態度はちょっとまずいなあと思わなくもなかったけれども、かえってそれが効果的だったことも認める。

更科も見た目がとことんお坊ちゃん先生受けナンバーワンという人徳を利用して、評議委員会のため先生たちに取り入れてくれた。みんなのマスコットの扱いをされていて、別の意味で「ガキ」と思われがちなのだけれども、結構頭の回転がいい。難波がびしばしと言いたいことを言って女子たちを叩きのめすのに較べて、更科はとことん人の顔を見つつ意見をすすめる通す。鞭とアメコンビと呼んでやりたい。

この三人が僕の敵だったとしたら、もう評議委員会にいられなかつたらう。

味方になってもらえてよかった。この学年でよかった。よかったのはいい。だがしかし。

「だからさあ、立村、今回はチャンスじゃんかよ」

「なにがだよ」

更科ののにやにや面にととうとう言葉を発してしまった。ひっかかってはいけないと思いつつもついつい反応してしまう。

「だから、『卒業』さ」

クールに言っただけの難波。まだ中学卒業まで半年あるだろうが。

「お前、ガキだよなあ。本条先輩じゃあねえけど、つくづくそう思うぜ」

天羽がまた暑苦しく抱きついてくる。

「だからなにがだよ！」

「今回は四泊五日だよなあ。しかも最後の四日目は全員ツインルームに振り分けられるってわけだ」

「何が言いたいんだよ」

「先生たちも、他のくそ真面目な連中もみな疲れきって真夜中夢の中だ。最高のチャンスだよなあ。ツインルームったら、真夜中の入れ替えさえうまく行けば、しっぽりと」

身動きしないで僕は静かに答えた。

「お前ら夜這いしたいっていうのかよ」

「俺らがしたいじゃねえの。お前が、行けっていうの！」

「立村、お前いっちゃん最初に彼女作っておいてさ、全然進んでねえじゃん。まだちゅーもしてないんだろ？ 清坂ちゃんとのあたりで早く、なあ、一発」

「そうそう、初めての経験は一晩ゆっくり時間かけてやった方がいいっていうし、お前初めてだから時間かかるに決まっているしな。その経験談を俺たちの貴重なデータに還元してもらい、俺たちも今後には備えろ。完璧だ」

——この青空、この青い空、このすがすがしい空気。

——三人もろとも海に投げ飛ばしてやろうか。

瞬間、三人の額を手裏剣ではたき飛ばすにとどめた。

「ほーらほーら、立村ってさあ、こういうところがガキだよなあ」

眉間を軽く押えながら相槌を打ち合う三人衆を背に、僕は言い捨てた。

「とにかく、例の物は旅館に着くまで命賭けて隠せよ。ばれた時は相手を売るな、いいな」

聞いちゃいない。僕をじろじろ見ながら、さらに聞こえよがしのひそひそ話を続ける。

「立村ってなあ、俺たち男子評議四人衆の中では一番うぶだと思ってたんだがなあ。いっちゃん最初に彼女作っちゃうとは、俺らも思わなかったなあ。あれは驚いたぞ」

——天羽よ、お前のようにさっさと乗り換えるよりはましだと思うな。

「そうそう、そういうことには関心ございません、って顔していながら、やばめの写真集とか持っているんだこいつ。この前立村のうちに行った時見たぜ。さかさまに人が吊るし上げられている女の官能写真集をな。かなり本には、開いた後がついていたように思うな」

——その写真集、俺が取り上げる前、真剣に見入っていたのはどこのどいつなんだ難波よ。お前みたいに「日本少女宮」ポスター貼っていないだけでしたよ。

「この前もさ、二年の杉本のCカップに視線ちらちらさせてさ、言われてやんの。『そんなに贅肉がお好きなのでしたら、どうかお使いください。やはり立村先輩もばかな男子の一人という部分、あるのですね』ってさ。真っ赤になってるくせに、気付かないってのがやっぱり、立村らしいなあって思うよ」

——更科、俺は杉本の胸のサイズなんて目測量したことないぞ。第一、どうやって計算したんだ、そのCカップって。

最後に言うではないか。

「本条先輩が言ってたよな。『立村ってな、一晩に二回が限度だけど、お前らの友情でせめて三回はいけるようにしてやってくれよ』ってな」

——本条先輩、なんでそんなことこいつらにしゃべったんですか！

すべて事実ばかり並べ立てる奴ら。全部嘘だと言いたいのに言えない。とにかく声を揃えて言うなよお前ら。また肩を叩かれ、みな悪意のなさそうな笑顔で悪意としか思えない激励の言葉を賜った。

「この五日間で一番、ストレス解消が必要なのはお前だよ、立村」

「二日目夜は評議四人で同じ部屋だ。しっかり一時間お前のためにひとりの時間押えてやるから、しっかり励めよ」

「朝一番の集会の時も、ちゃんとプライバシーは保ってやるよ。清坂には内緒にしてやるし」

これで怒ることができなかったのは、僕もこの三年間で全く成長していない証明だ。

一言叫ぶのがせいぜいだった。致命傷を浴びせることはできない。

「人のこと言えるかよお前ら！ 天羽、難波、更科、自分の願望を俺にすべてなすりつけるのはやめろよな！」

船室には戻りたくなかった。港に近づくまでの間、僕は海に見えるデッキにて潮風を吸い込んだ。海の塩で、早く自分を清めてほしかった。

——本条先輩と約束したんだけどな。やっぱりうまくいかないな。

先輩が心配してくれているのはずっと前から気付いていた。僕がもともと、下ネタ繋がり話題に嫌悪感を覚えること、そのくせ人一倍そういう話題について興味を持っていること、周りには関心なさげに見せたいくせに、評議四人衆をはじめとして周りの友だちにはみな気付かれているということ。「あんた見た目よりずっとスケベだからねえ」とはある女子の言葉だがそれを否定できないところが痛い。

——どうして、あんな感情が存在するんだろう。

実感したのは中学一年の三学期前後だったと記憶している。

本や保健体育の授業では男子の第二性徴がどういうものか学んでいたから驚きはなかった。その時は冷静に受け止めたつもりでいた。自分の力で制御できるものだから隠し通せると思っていた。

女子たちにはわかってもらえないだろう。どのくらい毎日、ちょっとした刺激で気持ちが高ぶりそうになっているのを押えているのか。匂いや写真やテレビ番組。今まで何事もなく流れていた空気のようなものが、いきなり僕にちくちくと突き刺さってくるような感じだった。思いがけず、自分の中にスイッチが入ってしまう。もろにその感情が身体に響き、時には露骨に表へ出てしまう。

いつそのスイッチが入るのがわからなくて、二年の一学期くらいまではありとあらゆる本情報を集め、「どうしたら落ち着かせることができるか。ばれないようにするにはどうしたらいいか」ばかり考えていた。例の評議四人衆をはじめ、他の男子たちに「お前、あの時どうしてる？」と聞くことができる性格だったら、もう少し早く楽になったことだろう。今だからわかることだけれども、みなあの時期は多かれ少なかれ同じことで悩んでいたようだったから。

運がよかったのは、僕の一年先輩に本条先輩がいたことだろう。

なんであそこまでいろいろと面倒を見てくれたのだろう。初めて「使う」という意味での女性写真集をくれたのも、毎日どういう風にして欲求不満処理をすればいいか教えてくれたのも、女子との「付き合い」についてその意味を教えてくれたのも。けれど、決して本条先輩は面白おかしくそういう「性教育」をしてくれたわけではない。二年の夏休みに伝えられた言葉は決して「三年までに一晚三回は抜けるように腹筋を鍛えろ」ではない。——もっと、同期連中を信頼しろよ。まずは手始めに、毎日何回しごいているかを聞き出すとかな。

聞かされた当時は、本条先輩から打ち明けられたもうひとつの秘密で頭が一杯だったし、それほど考えることもなかったけれども今ならばわかる。本条先輩はきっと、僕が今のように、もうひとつの感情で頭を悩ませる前に相談相手を用意してくれたのだろう。

——天羽・難波・更科。

くせのある奴ばかりだ。

——あんなこと言われたあとでもさ。

遠くの水平線に、かすかに水色のひよろひよろ線と白い雲が横にたなびいていた。

バスより揺れているはずなのに、酔わない。

——しっかり、二日目の夜のこと考えてるんだよな、俺は。

一日目はD組男子連中と大部屋泊り、二日目は評議四人衆と一緒に、三日目は南雲たちと、四日目は羽飛とツインルーム。以上が修学旅行中の部屋割り当てだ。僕の方はとにかく奴ら三人の個人的時間をしっかりと取ってやらないとまずいだろう。あれはほとんど、三人の願望に他ならない。

そろそろ下船準備をしなくてはならなかった。三年D組の集まっている座敷に戻ろうとして入ろうとすると、誰かとすれ違った。後ろに行った後で気がついた。

「清坂氏、そろそろ降りる準備だよな」

振り向いた清坂氏は少し前髪をよけるようなしぐさをして頷いた。

「うん、すぐ戻るね」

僕はずっとデッキでひとり、物思いにふけったり評議四人衆と下ネタかましあっていたから船酔いからは逃れられたけれども、清坂氏たちD組女子はほとんど、船の中から出てこなかった。空気がよどむし具合悪くなくてもおかしくない。いつもだったらもっとはしゃぐ人なのに。あまり楽しそうな顔ではなかった。

——外に出て潮風吸えば、だいぶ楽になると思うよ。

一言伝えたくて振り返ったが、もう清坂氏はいなくなっていた。

辛気臭い寺とか庭園とか、あんまり興味がなかったし、やっぱり朝一番ずっと乗り物に揺られてきたというのもあって、俺はさっさと寝たかった。修学旅行で熱出してひっくりがえる寝るなんて、去年の我がクラス男子評議委員のようなことを第一日目からしたくなかったのだがしゃーない。部屋割りだけ確認して、俺はさっさと自分の部屋へと向かった。だいたい、四時半くらいだった。

「美里、どうしたんだよ、顔めっちゃくちゃじゃねえの」

やたらとうつむき加減で女子たちの集まる部屋へ流れていく美里に声をかけた。

「どうせ私は不細工ですよーだ」

ずいぶんと簡単なお返事だ。あいつにしては珍しく、バスの中でひどく酔っていたようだったし、相当しんどかったんだろう。立村がひたすら車の中で寝つづけているのに較べて、美里は目が開いてるからなあ。隣の古川がずいぶんかいがいしく面倒を見ていたようだ。すれ違いざま俺にやっと、

「あんたの幼なじみのことは心配しなさんなって！ それよか羽飛の相棒の方、どうすんの」
——相棒？ ああ、あいかわらずだっけの。

「お前の弟のことか？」

俺は親指を立ててやった。

「相変わらず死にかけた顔してたよねえ、我が弟も」

「立村はいつものことだろ、驚くことじゃねえよ」

古川なんかとたらたら話をしてもしょうがないので、まずは荷物を置くことにした。修学旅行第一日目はいわゆる普通の日本旅館に泊ることになっていて、大部屋にて男子十五人がまくら並べて寝る派目になる。ちなみに二日目はクラス別ではなくそれぞれ委員会の連中とか他クラスの連中とかと固まって部屋を取り、三日目はまた同じクラス内にて五人くらいずつ。最後の夜は最愛……大嘘……の立村とツインルーム。朝一番の連絡船に乗る都合上、どうしても港の近いビジネスホテルに泊ることになったのだそうだ。裏情報は当然、評議委員長立村上総からのものだ。

クラス男子全員がそれぞれ、自分の場所を自己主張していた。さっさと布団を敷き始める奴、いきなりかばんをひっくりがえしてポテトチップスやらチョコレートやらかましてる奴、あと膝を抱えて一人物思いにふける奴、それぞれだ。俺はというと、さっそく布団を畳んだまま真ん中においておいた。十五人だ。相当のもんだ。早いうちに場所取りをして置いたほうがいいだろう。立村はまだ来ていなかった。車の中ではあいつも青い顔をしていたし、まずは地面がゆらゆらしない状態になるまで待っているのかもしれない。

「でさ、昼に話してたことなんだけど、立村本当に持ってきたのかなあ」

「持ってこないわけねえだろ」

最近、やたらと大人っぽくなったと評判の水口要（すいぐち かなめ）……通称「すい君」…

...が話し掛けてくる。一年前はねしょんべんが直らないとかで、宿泊研修に参加することすらためらっていた奴だったのにだ。入学したての頃からつい最近までさんざん女子のマスコット扱いされていた甘ったれぶりが、三年に入ってからいきなり消えてしまったのには俺たちも驚いた。もともと成績がいい奴だったのはわかってはいたけれども、俺たちのしゃべるスケベな話題にしっかり割り込んでくるようになった。

「あの頃はすい君も可愛かったのにねえ」

と淋しそうに感慨をもらしているのは、以前、すい君の最愛のお姉さんだったクラスの保健委員、奈良岡彰子氏。まあ、中三にもなって「ねーさんねーさんてばあ」とすりすりされるのも、女子としてはやってらんないんでないかと、俺は思うが。

にやにやしなながら俺に話し掛けるすい君。こいつ、単に色気づいただけなんだと思う。

「立村だって男だ、その辺はよっくわかってるだろ。だからだよ」

「けど立村って、エロな話に入ってくることないしさあ」

——確かにな。

あいつの性格は俺もよく知っているからその辺は曖昧にしてやろうと思った。

「ま、評議委員長さまのことだ、それなりに考えもあるだろうよ。それよかすい君、ちょい来い」

俺はすい君の小耳に毒を吹きかけてやることにした。

「お前、この四日間、がまんでできるか？」

「がまん？」

立村だと「がまんって、何をだよ？」ととぼけるんだろうが、すい君はその辺堂々としている。奴に見習わせたいところだ。

「布団の中でな、噴射しねえようにしろよ」

「そんなこと言うなよ」

なになに、こいつ過去のねしょんべんのことだと思っている様子だ。違う違う。

「例えばな、夜明け方、かかない夢の中でさ、きれいなお姉さんがやってきて、いろいろしたりするだろ？ 気持ちよく目覚めてみたら、あらパンツがぐっしょりこってこと、ねえか？」

すい君はにこりともせず聞いていた。反応が予想よりも少しずれているのが気になる。

「そんなへましないって。ちゃんと絞るために、立村は持ってきてくれたんだろ？」

さすがすい君、クラス成績トップ。頭の回転は速い。

——立村もその辺、露骨すぎるくらいはっきり言えればいいのになあ。

もともと三年D組の男子部力関係というのは、リーダーが俺、すい君、あと南雲秋世の三グループに分かれている。気持ちよく十五人が五・五・五と振り分けられているのは偶然とはいえ、すっきりしている。立村は結構いいこきふりの評議委員だからその辺どのグループともうまくやっているけれども、俺の場合どうも南雲グループとそりが合わない。一年の頃からいろいろあって、しょっちゅう殴り合いしそうになる。残念ながら対決したことは一度もない。大抵立村が割って入るからだ。もっとも南雲も規律委員長。決して腕力勝負を堂々とやらかすことできな

い立場であることは確かなんだ。この時ほど俺は、自分が委員会に入っていないことを後悔する時はない。旅行中はできるだけ、大人しくしていてくれと立村に頭下げて頼まれた以上、あまり波風を立てたくないのも、また事実だ。

南雲グループは窓際の一角をしっかりと陣取り、トランプ広げて盛り上がっている。何が楽しくて「ぶたのしっぽ」やっているんだか。

——立村、当然南雲にも例の話、通しているんだろなあ。

すい君が興味津津だったことについては、立村が戻ってきてからすぐに説明すると言って置いた。寺の境内で正座している時に話を聞いたぶんだけ教えてやった。全員が顔をそろえていて、かつ持ち物検査が行われる前に分配しておきたいというのが立村の本心らしい。そりゃあそうだろう。評議委員長様がまさか。

——エロ本持っていて絞り上げられるってのは、やだろなあ。

小心もののあいつはさぞや、神経ぴりぴりさせてるんだろ。

——あいつ、どんな女の写真集持ってきたのかなあ。

きっと本条先輩が勧めてくれた代物だろう。一年の時からそうなんだが立村とはあまり、エロ本とかスケベな話とかで盛り上がることはない。聞き出したいのは俺の本音でもあるんで、無理やり引っ張り込もうとするんだが、妙に恥ずかしがって逃げられてしまう。

そんな立村がだ。

今回三年D組男子一同のために、女性グラビア写真集を持ち込んでくれたというこの事実。

他の奴らは知らんが、俺としたらすげえ進歩だと思う。

あいつ、やっぱり一皮むけたな。いろいろな意味で。

「立村、おせえぞ」

たぶんすい君と同じ理由・目的で待ちかねていた部屋の奴が、戸口へ声をかけている。立村登場だ。

すっかり疲れはてた顔をしている。まだ第一日目だったのに。いまさら軟弱さを罵ったってなんにもなんないんで、俺の隣に来るよう畳を叩いて合図した。すぐ気が付いて、肩掛けかばんと手提げをぶら下げ上がって来た。

「またお前さあ、菱本先生とやりあってきたのかよ」

まずはガムを分け合って噛む。手刀を切って受取り、立村は片膝立てて頷いた。

「今回はもうどうしようもないしな」

「宿泊研修の時みたいに派手なこと、できねえか。そりゃそうだよな」

反論しないところみると、かなりこいつ、ぼろぼろだ。

「今、風呂場、評議の連中と一緒に見てきたけどさ」

いきなり関係のないことを口走り始める立村に、俺も、一緒に座っていた別の奴数人も顔を向けた。

「大浴場なんだよ」

いや、そりゃあそうだろう。だってここは普通の日本っぽい旅館だ。ホテルなんかと違って各

部屋にシャワーなんてあるわけないだろうが。立村は肩を落とし、今度は両膝を抱えはじめた。こういう時の奴は、ひたすら内に内にと引っ込んでいって、言い方を間違えると永遠に戻ってこないかもしれないので、くちばしを挟まないでおくようにしておいた。必要な相槌だけ打ってみる。

「いいじゃねえか。広々していて。泳げるし」

「普通、いやだろ、ああいうところで風呂に入るのってさ」

——やっぱしそうか。

この性格、二年半つきあって来たけれども、全然変わっていやしない。

「立村、お前なあ、いいかげん大人になれよ」

近くにいたほかの連中とも顔を見合わせて、俺はしっかりと行ってやった。

「いいじゃねえの、見られたってな。みんな似たようなもんしか持ってねえよ」

見る見る立村の顔が真っ赤になっていくのが見ていて面白い。きっとこいつの先輩たる本条さんも、こういうところが笑えてならなかったんだらうなあ。悪いが俺の知っている同学年の連中で、この程度のネタを振ってこんなに赤くなる奴、そういない。

「それとも、お前、まだあれが生えてねえとか？」

「うるさいな！ そういう話じゃないってさ」

そうとう焦っていると見た。他の奴らの微妙な反応を観察するのもまた楽しい。「生えてる」とか「似たようなもん」とか俺が口走ったことによって、なんか、気になるとこへちんと点火してしまったみたいだ。

「違うってさ。羽飛、なんで俺が集団で風呂に入るのを嫌がってるか、わかってないだろ」「だから、まだお前自分の持ち物に自信ないんだろ？」

正しいことを言ってやっているのだが、あいつ認めようとしめない。慌ててまた早口に言い募る。

「毎年、修学旅行ってすごいらしいんだ。特に第一日目、男子風呂では必ず、誰かが防水用のカメラを持ち込んで、ひとりひとり写真を撮るんだってさ。本条先輩が教えてくれたんだ。みんなが桶に入っている時はいいさ。けど、着替えの時から身体を洗っている時から、さらには写真の質を高めるために、全員両手を上げて中に入らせるんだってさ。手ぬぐいで隠すことも厳禁なんだとさ。信じられるかよ」

「けど本条先輩はそれ、やったんだろ。たぶん堂々と見せつけたんだらうなあ。ご立派な奴を」
一瞬立村は黙った。何か考えたのだからなきっと。

「本条先輩は別だよ。そんなことよりも俺が言いたいのは、なんであんな趣味の悪い習慣を、教師連中はやらかすのかなって思うわけだ。しかもだよ、お前ら知らないだろ」

ささやかに優越感を感じている立村らしい。小声で早口で聞き取れないけれども、

「風呂場で撮った写真をどうすると思う？」

「どうするって、映っている写真をあとで俺たちが買うんだろ。青春の一ページってことで」

「そんなんじゃないってさ！」

戸口から誰かが来るのでないかとばかりにびくびくしている奴の様子が笑える。もう一度振り

振り返り確認した後、

「あれ、現像したらみんな、先生たちの間で回しあって品評会するんだってさ。信じられるか？
誰のあれはどうだとかあいつのものはどうだとか、大きいとか小さいとかいいとか悪いとか。
酒の肴になるんだってさ」

「はあ？」

立村の口走ることはよくわからない。風呂写真を品評会って、単に「修学旅行の思い出写真展」みたいなコンクールに出すとかその程度じゃないのだろうか。ま、すっぽんぽんの野郎集団なんてちっとも見て楽しいものだとは思わんが。もしこれが鈴蘭優ちゃんのシャワーシーンだったらまた考えないことも……とにか、気持ち悪いの一言につきる。

俺からしたら意味不明なんだが、一緒に聞いている連中の一人がずいぶんマジな顔で尋ねてきた。

「俺も、その話聞いたことある。立村、やっぱり、それってあるのか？」

「本条先輩によると、あるらしい」

頷きあう二人に、俺も割り込んだ。

「あのなあ、立村。ちょっと俺の頭では理解できねえんだけどさ。品評会ってなんだ？　ここか？」

股間を指差して聞いてみた。頷く立村。

「風呂場だったら丸見えだよなあ」

もう一度頷く立村。今度はもうひとりの奴も一緒だ。

「先生たちの間で回しあって品評会って、それこそ誰がどのくらいでかいとかちっちゃえとか、毛が生えてるとか生えてないとか、皮がむけているとかむけていないとか、そういうことか？」

いつのまにか他グループの奴らが無言で俺たちグループの会話に聞き入っている。トランプを叩き合っていた南雲らもこちらを見ている。

「ふうん、自分のものに自信がねえんだなあ、先生連中もさ。まあいいじゃん立村。年とったらなかなか立たなくなるっていうのも聞いたことあるしなあ。それだろきっと。まあいいじゃん。見せ付けてやろうぜ」

「羽飛、お前ってさ」

いらだちを露骨にさらしながらも、途中であきらめたんだろう。立村は言葉を飲み込んだ。

「……いや、なんでもない」

ま、そこが立村らしいといえばそうなんだが。果たしてこいつ、美里とどこまでいったんだろう？と俺は無意識に下世話なことを考えてしまうわけだ。

——こいつを、美里が、襲うのはいつなんだろうなあ？

ふつう、女子に対して考えることじゃない、か。

俺と清坂美里……三年D組女子評議委員でかつ、立村の彼女……が、いわゆる「幼なじみ」で、かつ性別はなれた大親友だということを、この三年間でやっとクラス連中に染み込ませたような気がする。別になんだっていうんだ。立村と俺がしょっちゅうつるんでいて、たまたま美里が

立村に惚れて、たまたま俺たちが三人で行動することが多くて。なにが楽しくて「三角関係」なんて言われるんだか。ま、これは俺が今だにマイアイドル・鈴蘭優ちゃんに熱を上げているからといえばそれまでだ。悪かったな。さっさと手で触れてもみもみできる彼女を作れとは、美里からもしつこいくらい言われている。

「貴史もねえ、いいかげん、誰かと付き合いなよ。ほんっと、みんな大変じゃないの」

「優ちゃん以上の美少女がいるかっての」

「この、ロリコン！」

「もう優ちゃんも今年で中学一年だぜ！ 一年と三年で付き合ってる奴いるじゃねえか。どっかがロリコンだっただけ」

どうせこいつだって立村にお熱なんだ、人のことは言えないわけだ。この二年間、立村とも修羅場はあったし、一度は美里もはっきりと別れ話を切り出されたことがあると聞いている。その仲裁に入った俺としても胃が痛かったけども、今となったらそれも「青春の一ページ」だ。現在のこのふたり、見ていて目に毒ってくらいいちゃつきまくっていらっしやる。一緒に帰るのは……俺と一緒にいるのはほとんど、空気って感じだからだろう……当然としても、評議委員会の用事かなにかでしょっちゅう肩並べあっているし、たまに目と目で会話するようなしぐさをしたりもする。究めつけは去年のクリスマスイブ、しっかり二人っきりのデートを立村の自宅で行ったとかいう話じゃないか。

美里曰く

「なんにもしてないもん！」

だが、男が惚れた女を目の前にして、何もしないですむもんか。立村のポーカークフェイスをつつきたかったけれども、残念なことに我が家の家庭事情も絡んで、今だ内緒のまんまだ。ちくしょう。

でも、俺としては美里にやっかむ気はさらさらない。

そこがたぶん、他の奴らには理解できないんだろう。

うまく言えないんだけど、立村と美里というのは、見た目いちゃつきカップルに見えるんだろうけども、「評議委員」でなくなったとたん、すんと元に戻ってしまいそうな、そんな感じがする。

立村もたまにつぶやいている。

「俺って付き合いって意味が今だ、わからないからな。清坂氏には悪いことしているかもしれない」

と。二年付き合ってきてそれはないんじゃないか？とどつきたくなるけれどもそれはあいつの性格だ。しかたない。ただ、めちゃくちゃ下半身の欲望に囚われて美里を押し倒したいと思ったことはないらしい。美里がしょっちゅう機嫌悪くしゃべっている。

「私と立村くん、何にも、ほんっとに何にも、ないんだからね！」

もし、「評議委員」から降りてふたりがどうなるのか、と考えると結局「友情」しか残らんないじゃねえかという気が、俺にはする。友達としてはすっごくいい奴なのかもしれないし、そういう態度を取りつづけていられるけれども、果たして、エロ本を読むのと同じ気持ちになれるの

かと考えると疑問なわけだ。これはすべて、俺の直感だし、立村にそんなこと聞いたらたぶん、半殺しにされるだろう。美里にちょっかいだしたら、首しめられるだろう。

だったら、俺の方で「友情」っていうものの正しい形をしっかりと見せ付けてやって、あいつらふたりには「友情」以上の何か、すなわちスケベな方面へ進んでいただきたい、と思う次第だ。今のところ、鈴蘭優ちゃん以外の女子に食指は動かない。

「じゃあ、りっちゃん、これからたぶんメシ食い終わった後ですぐ、持ち物検査やと思うからさ、今のうちに分配してしまおうよ」

脳天気な声が部屋に響いた。みな聞き耳立てて静まり返っていたってことだ。

南雲がポケットに手をつっこんだまま腰を二回ほどあやしく振った。

「あ、ああ、そうだな」

「俺もりっちゃんも立場的にばれるとまずいしさ。やっぱり女子には知られたくないしさ。これからまず風呂だろ？ まずこうしない？」

俺たちの陣地に入ってくんな！と思うものの、立村が手招きしているんだからしかたない。俺は隣にいた金沢に話し掛けて会話を盗み聞きする振りをした。俺の態度にちょっと悪いと思ったのか、立村も片手を立てて「ごめん」みたいなしぐさをした。

「とりあえず部屋の中で十五人、まず円陣を組むんだ。その時にみな、おしくらまんじゅうみたいなかっこうでさ、内側に背中を合わせるんだ。そうやって、背中に本を挟む」

——なにそんな意味不明なことやるんだよ、じゃかあしい。

「本を受取ったらまず、円陣の内側にひとりだけ振り返る。背中合わせの状態ですべてのページをちぎるんだ。これはりっちゃんも言ってたけど、自分の好みでいいよな。なんならりっちゃんが先に取ってもいいよ」

「いいよ、そんなの」

——あいつの趣味がばれればじゃねえのか？ その写真集。

「ちぎり終わって、自分のポケットに写真を入れたら、隣に渡す。渡したら次も同じく、一人だけ後ろを向いて、人に見られないように本の写真を選び、ちぎって、ポケット。隣へ渡す。これの繰り返し。こうやってくと、万が一誰かが来ても、円陣の中に本を隠して言い訳すればそれですむだろ？」

——このくそ暑い時に押しくらまんじゅうやりたがる奴もそういないと思うぞ、南雲。

「あとは残った背表紙を、ほら、そこにある花瓶の中につっこんでおくとかトイレの中に隠しておくとかいろいろやれるだろ？ 明日外に出かけた時にごみ箱に捨てればいいしさ。どう？ このナイスアイデア」

——ナイスでも全然ねえじゃんよ。

わかっている。俺が南雲に対して過剰反応しているってことは。

こんな普段の俺らしくないことをするなんて、妙だと周りの連中がよく言うもんだ。

けど、どうもこいつ、何かあると俺の気に障ることばかり言いやがる。別に俺をいじめようとしているわけではないんだらうけども、クラスの中でもなんでも、どうしてかわからねえけれど

もだ。

「それいいな。じゃあ今さっさとやろうか」

立村も立村だ。さっきまでぶうたれていたくせに、いそいそとかばんに手をかけてかき回し始めるってわけだ。なんでだろうか。この安易なのりは。俺がいくら「あーしろこーしろ」と温かい言葉を投げかけてやっても全然動かねえくせして、だ。

ああ、ほんつとにむかつく奴だぜ。どいつもこいつも。

しゃあないんで俺は、やっぱり隣にいた金沢をつつき、ちょこちょことしゃべることにした。

「なあ、お前、絵を描く時さ、ヌードモデルって使うだろ」

こいつは絵に関して天才と呼ばれている。すでに一年の段階で、金沢の描いた絵がどこぞの展覧会にて高い評価を受け、時々どっかの会社に頼まれてそれなりのものをこしらえていると聞いている。俺もまんざら絵が嫌いではないんで、その辺いろいろと気になるのだ。

「使ったことないよ」

きよとんとして答える金沢。

「けど、写真は使う時ある。デッサンとかなにかで」

そりゃあそうだろう。やたらとでかいおねえさんたちのすっぱだかが誉めはやされる美術の世界。俺にとっては少々趣味が疑問に思えるが……だってあれ、うちの母ちゃんの風呂上りにしか見えねえもん……正々堂々、裸が見られる数少ない機会じゃあないだろうか。

「ほらほら、じゃあみんな、尻突き出しておしくらまんじゅう型に腰掛けるや」

完全にクラスの男子一同、南雲に仕切られてやがる。立村が大人しく言うこと聞いて俺の隣に座り膝を抱えた。片手にはなぜか、「およばれの時・上品な訪問 着着付け」とか書かれている、大型の本カバーがかかっている本一冊。見るからにこれ、カモフラージュだとわかる。修学旅行に何が楽しくて、着物の着付け本なんて持ってくるってか。

「お前、先に見せろよ」

肘でつついてやる。今まで俺もこいつがどういう写真を好んでいるのか教えてもらったことがない。やっぱりここが立村だなんてとこで、うつむきながらはにかんでやがる。やたらと前髪をかきあげている。答えを待っていてももったいないので、俺はさっさと片手からひったくった。俺だけじゃない、興味津津だったのは。隣の金沢、後ろの水口、その他大勢が俺の後ろから覗き込むようにして本のページを追った。

「へえ、立村って、こういう趣味かよ」

「そういうんじゃないよ。前に本条先輩からもらったから」

スケベネタの出所はいつも、「本条先輩」からだ。先輩が卒業してしまった以上、もう使えないな、かわいそうな立村よ。

「おばばばかりだなあ」

別の奴がささやきかける。もつともだ。もつともおばばといつてもだいたい二十歳近くじゃねえかって感じなので、うっかりうちの姉ちゃんたちに聞かれたりしたらぶんなぐられるだろう。

「刺激的じゃねえじゃん」

「お前あまり、欲求激しくねえんじゃねえの」

言いたいことをいまくっているわがクラス三年D組男子連中。立村は一切無視すると、一緒に覗き込んでいる南雲へ目で「なんとかしてくれ」的サインを送っていた。俺に頼めと言うに。南雲もわかってるんだろう。膝を打つようなしぐさをすると、

「じゃあみんな、超スピードで片付けてしまおうぜってことで。りっちゃん先に自分の分、破っとく？」

物言わず首を振る立村。そりゃあそうだろう。自分のお気に入りが誰なのか、一発でばれるのはいやだろうよ。

「じゃあお先に俺からな」

全員おりこうな顔して、背中をくっつけ合い、後ろ背で本を回していく。

一通りめくってみたところ、それほど使い込んでいるという感じもしなかった。ただ、一ページだけやたらと折り目がついているところがあったのが気になった。別にものすごくやらしい写真ではなくて、どこかのお寺さんの庭みたいなところで横たわっているきれいなお姉さんという感じの写真だった。はっきり言おう、美里とは全然似てやしない。かなりのショートカットで、「私、家族のために身を売りにやってきました」と言いたそうな顔をしていた。

——へえ、立村ってこんなタイプ好みなのかあ。

男子たるもの、その辺気付かないわけがない。一応そこらへんは俺の好みでもないもので、もう少しはじけたモデルさんのいる写真を頂戴することにした。わざとらしくそっぽを向いている立村はあいかわらず膝を抱え、南雲相手に

「これから風呂に入ることになるんだけどさあ、また菱本先生がさあ」

と俺にさっき話していたのと同じ愚痴をこぼしている。南雲はあんまり突っ込みをしないタイプらしく、

「修学旅行だけは学校側が全権握ってるからなあ」

と同情こめたコメントをしていた。別にいいだろ、見られたって。

一通りみな、無言で南雲の指示通り、円陣の真ん中で必要な写真を全部破りとり、最後に立村の元へ回ってきた。俺が思うにたぶん、十四人の好みにあったものがあったとは思えなかった。やっぱり「おばば」が多すぎるもんなあ。

すっかりうすっぺらくなった「上品な訪問着の着付け」本を手に取り、立村は、

「じゃあ残りの分、足りない奴はみな分けた方がいいと思うけどさ」

とか細くささやいた。

「お前の分は？」

「いいよ、そんなの必要ないし」

心なしかあいつ、元気なさそうだった。

「じゃあ俺がもらおうか。俺は元気まんまんだからなあ、一発じゃあ足りねえよ」

返事を待たずにひったくり、気になったさっきのページ・くらい感じのお姉さん写真を探した

ところ、やっぱり切り取られていた。写真としてはすげえきれいだったし、やはり年増好みっているんだろうなあ。立村、よかったじゃねえか。同じ好みの奴がいて。

写真集分配は滞りなく終わった。運が良かったのは、全部片付け終わった後に菱本先生が呼び出しに来て、

「じゃあお前ら、風呂の準備しろよ！」

と声をかけてきたことだった。ほんと、円陣を見られていたら一発でばれていただろうし、立村もただじゃあすまなかつたろう。

「立村、お前もちゃんと、大風呂に来るんだぞ」

よけいなことを言うのが菱本先生の悪いとこだ。いつもこれで立村はかっとなるわけである。その典型的例が一年前の「宿泊研修バス脱出事件」だ。

「うるさいってさ」

小さい声で、俺にだけ聞こえるようにつぶやき、立村は振り返った。

「わかりました。AからDの順番で入るんですか」

「そうだ。十五人くらいだったらまあ、湯船もゆったり浸かれるしなあ」

——思ったよか小さいのか。

俺は着替えの下着類とシャンプー、タオル、手ぬぐいをそのまんまくるんだ。

「一応、ジャージか制服かって言われているけど」

「俺は絶対、制服のままでいる」

立村の変った性格その二。こいつ、ジャージとかの楽な格好が大嫌いなんだ。

本当だったら私服を持ってきたかつたんだろうが、さすが修学旅行たるこの状況で、自分の趣味を押し通せなかつたんだろう。哀れな奴。よくよく見ると、こいつやたらとワイシャツを大量にかばんへ詰め込んでいる。でかい荷物だとは思ったが、ほとんどこいつ、着替え関連ばかり用意してきたってわけだ。女子でもあるめえし。

「それとだ、まさかそんなことをする奴はいないと思うが」

菱本先生はまたもや、立村をきりきりさせそうな一言を発した。

「風呂に入る時、海水パンツなんかを穿いて入る奴なんていないだろうなあ。ぶんなぐって、すぐに脱がせるからな」

一瞬静まりかえった三年D組男子の部屋。

絶対、対象者、いたに違いない。立村はうんざりした顔で無視をこいていたが。

「この機会だ。どのくらい友だちのたまたまが成長してるかとか、そういうのを裸の付き合いでじっくり見ておけよ。俺もなあ中学の頃、人よりも小さいんでないかって悩んでいたけどな、毛の生えるのも遅いと思っていたけどな。修学旅行とか宿泊研修とかで友だちのものを見たりして安心したりしたもんだ。成長の早い遅いはあるだろうが、みんな成長それぞれなんだから、裸のまんまでいろいろ話してみろよ」

両手を握り締めたまま、怒りできりきりしている立村の熱気が怖い。

こいつ、追い詰めたら何をしでかすかわからない。

「じゃあ、C組男子が入り終わったら連絡が入るようになっているから、みな部屋で待機しているように、いいな」

——ああ、立村すっかりご機嫌斜めじゃんかよ。

背中を向けているからきっと菱本先生には気づかれなかつただろう。かばんのもち手を握り締めるようにして、

「毎度のことながら、許せないことばかり言うよな、あの人」

俺に言いかけて、すぐやめ、南雲に視線を送るのが俺にとっては「許せないこと」なんだが。

C組が全員入り終わった旨の伝達がきた後、D組男子一同は廊下へ二列に並び風呂場へ向かった。前の方でいやいやながらも立村が先導して歩いている。南雲相手にまたぐちっているんだろう。ほんと女々しい奴だ。

「あのさあ、羽飛」

必然、俺は別の奴とだべることになる。さっきからやたらと縁のある金沢に声をかけられた。こいつはどちらかいうと水口たちと同じグループで行動することが多いのだけれども、大人しい性格なのと、最近水口が目覚めてしまって激しい行動をとりたがっていることもあって、少しずれてしまったようだった。成長遅れてわけでもないんだろうが。

「さっきの写真、お前どんなのちぎった？」

いきなり聞かれた。しかたないんで俺は、ポケットにいれっぱなしの写真をちらっと見せた。

「そうかあ。立村って結構、写真の好み癖あるよね」

——気付いたのかよ。こいつ。

金沢の言葉にちょっとひっかかった。

「じゃあ金沢、お前はどんなのにしたんだよ」

「これ」

胸ポケットにきっちりと畳んだ写真を開いた。見開きで二ページ。緑色のバックで大体見当がついた。やたらと開き癖のついていた、あのページのお姉さんだ。哀愁のまなざしは金沢の芸術的感性をも捉えたいらしい。一回しか見てねえのに、覚えている俺も俺だが。思わずため息ついた。

「立村の好みって感じかなあ」

——けど美里とは雰囲気違うぞ。

言うべきでないことは言わないでおく。

「そっか、これが。かなりのお気に入りと見たぞ」

「だよな。俺もこの写真が一番きれいだなって思ったんだ」

美術感性抜群の金沢が言うんだから、そうとうなもんだろう。

「で、もうひとつなんだけどいいか」

思いっきり小さい声で指を絡ませつつ、金沢は続けた。ずいぶん内緒ごと好きそうな言葉だ。

「なんだよいきなり。ずいぶん他人行儀じゃん」

「明日の昼なんだけどさ」

金沢が次に口走った言葉は、俺にとっては仰天そのもんだった。

「ちょっとだけ、他の人たちが食べている間、抜け出すことできないかなあ」

——抜け出すっていったい？

「いや、たいしたことじゃないんだ。二日目の予定は昼に、お寺で昼メシ食って、そのあとちょっとだけ見てまわって、ってなってるだろ。俺、そこの住職さんにどうしても会っておきたいんだけどさ」

——住職？

住職、ってことは、坊さんに会いたってことかよ。

「菱本先生に言えばいいじゃねえか。親戚なんか？ お前の」

「ううん、違う。ほんとは早いうちに気づけばよかったんだけど」

金沢は肩をすくめるようにして、他の連中に気兼ねしつつ話を続けた。

「あそこのお寺の住職さん、美術の世界ではすごく有名な先生なんだ」

「美術の世界って？なんだそりゃ」

「けど、うちの学校ではあまり高い評価されてなくて、青潟でも異端っぽいこと言われててさ。めったに連絡が取れないって言われてるんだ」

けどお寺の坊さんってことは、仕事があるってことじゃないのか？ 毎日お経を拝むとか、俺たち修学旅行の生徒を迎えたりとか。

「この機会に一度、会って絵、観て感想聞きたかったんだ」

雑に包んだタオルからトランクスの赤い柄が見え隠れしている。見られても平気って顔をしている金沢なんだが、しゃべることはずいぶん真面目っぽい。

「途中で抜け出してえのかよ」

「うん、できたら食事のあたりと、その前後、見学のあたりの十分くらいだけでいいんだ。持ってきた絵を渡すだけでいいからさ」

美術関連については俺もよくわからないんだが、金沢がかなり思いつめていたのは感じ取れた。

けど、このあたりはがさつな俺よりも立村の方がしっかり対処してくれるんでないだろうか。

「立村に頼めばいいんじゃないの？ あいつ、話わかるぞ結構」

「うん、わかってる、けどさ」

ほんつとにちゃっこい声で、金沢は立村の方を見ながら、

「あいつ、前科もちだろ。学校に目つけられてるよ絶対。立村を巻き込みたくないんだ」

——まったく、立村よ、お前のやらかしたことで、こーんなどこまで影響出てるんだぜ！

しかたない。俺は風呂が終わった後で、金沢の事情についてもっと詳しく聞いてみる約束をした。

もちろん、立村には内緒でだ。

たいしたことないんだけどなあ。私からすると、毎月のことだし、めんどくさいって気持ちの方が強いけど、そんな恥ずかしがることもないんじゃないかなって思う。美里にも前から雑誌を読んだりして話をしておいたんだけども。

やっぱり、初めての時が、修学旅行なんて、ショックだったんだろうな。

ちなみに修学旅行中生理になった子たちは、ふつうの子たちが入ったあと、別グループでいくことになっている。やっぱり、見られたくないよなって、私も思うんだけどね。当日、保健委員の子……うちのクラスだと奈良岡彰子ちゃんだけど……がこっそり女子たちに聞いてまわってくれて、それから保健の先生に報告して、お風呂に入る時間帯を報告してもらうという仕組みだった。美里だってそのことは前もって知っていたはずだと思う。

「そっか、美里ちゃん、大変だよな」

絶対誰にも知られたくない！と言い張っていた美里だけれども、観念したのか頷いていた。彰子ちゃんが少し予備のナプキンを持ってきてくれていたので分けてもらっていた。

「初めての時は、いろいろ重たいこともあって大変だってお母さんに聞いたことあるけど、ちょうど重なってしまうといろいろ辛いと思うよ。大丈夫。私も協力するからね」

彰子ちゃんが味方についてくれたらまず大丈夫だろう。

「ほら、美里、なにまだすねてんのよ。彰子ちゃんに感謝しなよ」

まだふてくされたような顔してうなだれている美里を私は軽く小突いた。

「ごめんね、彰子ちゃん」

それ以上何も言わず、彰子ちゃんは美里の頭を軽くなで、

「じゃあ、先生たちにはうまく言っておくからね」

とにっこり笑ってくれた。

「そんな、お風呂に入る時だってばれちゃうじゃない」

彰子ちゃんがいなくなって、私と部屋で二人きりになった後、美里はまだまだぶうぶうすねていた。こんなこと知ったことじゃないけども。私は下だけジーンズに履き替えた。

「しょうがないよ、それにそんなたくさんいるわけないし、ゆっくり入ることができるし、それでいいじゃんねえ」

「でも、ばれちゃうんだよ」

——なんだか美里、変よねえ。

ほんと、美里としゃべっているという感じじゃない。どこか別の女の子のぐちを聞かされているような感じだった。こんな気弱な美里は今まであまり見たことがない。この子が明るく元気なクラスの評議委員をやっていること、気が強くてしっかりものと思われていること。意外と泣き虫なんだけれども、表では出さないこと。いろいろあるんだけれども、今日みたいな美里の姿は珍しい。羽飛だったらどうかわからないけれども、立村はたぶん想像していないんじゃないかなって思う。

「別に、誰でもあることなんだからいいじゃん。生理にならなかつたらならなかつたで、今度別の問題になるでしょうがよ」

「だって、着替える時どうするのよ」

——ははん、そっかあ。

ぴんときた。美里は脱衣場で着替える際、いかにも「生理です」といったげな下着類とか、汚れてしまったものとかを見られたくないってことだ。そりゃあそうだよなって私も思う。でもそんなたくさん、今日生理中って子がいるとは思えない。

「さっき彰子ちゃんも言ってたっしょうが。三日目四日目はシャワーが使えるから、みんなと入らないでもいいでしょうに」

「でも今日は一緒なんだよ！」

まだぐちぐち言っているんだろうか。なんだかうんざりしてきた私は、上を黄色のTシャツに着替え、白いカーディガンを羽織った。さすがにジャージ上下だったら暑すぎる。

「美里、何びくびくしてんのよ。生理くらいで動揺してるんじゃないよって言いたいよね。私も小学校の頃からあれだったけどさ、修学旅行も遠足もちゃんとのりきってきたんだから。それにあんた知ってるよね。杉浦さんが」

意地悪なことを言っているとわかっているけれども、言ってやる。

「もう、経験済みだってこと」

予想通り、美里の顔はひきつった。

想像していた通りだと私は思った。

「この前さ、杉浦さんと話してて、彼氏のことについて聞いたんだ。『もう、どこまでいってるの？ A、B、C？』って。そしたら、ちっちゃくCだって」

Aはチュー、Bはもみもみ、Cは男女接続。

当然、杉浦さんが言っているのは、男女接続にほかならない。

「Cができるってことは、とっくの昔に生理なんて来ているわけよ。あんたがいまうんうんうなっているようなこと、杉浦さんも、彰子ちゃんも、私もかんたん乗り越えているわけよ。それに知ってるよね。Cってものすごく、痛いんだよ。今あんたがおなか痛がっているよりももっとすごいんだよ。美里、あんた浣腸してもらったことある？」

今度は真っ赤になってしまった。どちらかいうと、エッチよりも具体的で気持ち悪い話題になっちゃいそう。でもなんか文句言いたくってならない。

「あんな感じなんだよ。男のあれが入ってくるって。美里、今からあいつとそういうことをするかもしれないって可能性考えるんだったら、生理のぼんぼ痛い痛いくらいで泣いてたらだめじゃんよ。しっかりしなよしっかり！」

きつい言葉かもしれないけれども、今の美里をしゃんとさせてやるにはこれくらいしかないような気がした。すべて直感なんだけども。ただ、今言った言葉を男子および他の女子たちの前で口走るつもりは一切ない。あくまでも、私と美里との間だからできることだ。

「じゃあ、あとでさ、他の子からナプキン寄付してもらってくるから、あんたは早く寝てな」

「絶対、私だって言わないでよ」

まだ言ってるのか、と舌打ちしたくなる。

「わかってるって」

どうせお風呂に入ったらばれるのに。

美里が神経質なくらいに、あれのことを隠す気持ちは正直なところわからないわけじゃない。特に男子たちには知られたくないと思う。お母さんや保健の先生たちはみな、「女の子になったお祝い」とかいってお赤飯を炊いたりするけれども、あれってありがた迷惑以外の何ものでもないと思う。なあにが「成人した大人」の証なんだか。単に、エッチして子どもができるようになりました。気を付けましょうってことじゃないかって私は思っている。女子ばかりやるんだったら、男子の初精通って奴もマヨネーズご飯作って祝ってやればいいんだ。さあ男子諸君どう思うんだか。

お風呂場に向かう途中で羽飛とすれ違った。男子たちがみな風呂場から上がって戻ってきているところだった。旅館に入る前にちょっとだけおしゃべりできたけれども、結局あいつの気にしていることは美里の体調のことばかりなんで、ちょっとがっかり。しょうがないよね。あいつは美里と幼なじみなんだから。

しかたないので一緒にくっついて立村をとっつかまえる。

まずは馬を射よってやつ。

「どうしたのよ、立村ってばすっかりご機嫌悪いわねえ」

「いろいろあるんだよ、それより清坂氏の様子は」

こいつもやっぱり美里のことだ。これは当然関心持ってもらわないと困る。だって立村は美里のダーリンなんだから。

「うん、まだ相変わらず体調きつそうだけど、一晩寝れば元気になると思うよ。けど今日は、そっとしておいたほういいかもよ」

「美里の奴なんかあったのか？」

口出しするのは羽飛だ。やっぱり、美里のこととなると気になってしまうみたいだ。あえて私は立村に話しかける。

「バスであれだけ酔うとね、ご飯も食べられないんじゃないかな。先生には言ってあるからさ。それよか、どうだったん？ 男子風呂は」

ほんとだったら覗いてやりたいところなんだけれども。立村は思いっきり唇を噛んで、吐き捨てるように、

「ふざけるなって感じだよな」

「なにがよなにが」

また菱本先生となんかやらかしたんだろうか。立村ってもともと、担任の菱本先生と天敵同士なのだから。しょうがないんだけどね。まさか風呂場で殴りあいなんてやらかしたなんて。羽飛が立村の頭を小突いた。

「あのさ、こいつさ、風呂場で菱本さんに覗き込まれてやんの」

「覗き込むってなにを？」

わからないわけじゃあないけど、聞いてみたい。

「お前さんもわからねえわけじゃあねえだろ？」

「あ、もしかして、あれ？」

「そんなんじゃないってさ！」

ご機嫌斜めの立村もそりゃあそうだろう。いわゆる裸の付き合いを要求されたのね。私の予想はしっかり当たっていたみたいで、立村の奴顔を上げられないでいる。それでも答えるのは、意地なんだろうな。羽飛はしっかり解説を続けてくれる。今度は肘でつつきつつ。「男子風呂ってすげえんだぞ。記念の写真撮影やったんだぞ。立村それで逃げようとしてさ、菱本さんに言われてやんの」 声音を替えて、「『立村、人の成長ってものはな、人それぞれなんだ。育ててなくたってこれからなんだから安心して混じれよ』って」

「ふうん、立村、成長してなかったんだ」

わざとにやにやして覗き込んでやる。私の「猥談大好き」キャラクターは確立しているから、誰に聞かれたってかまわない。羽飛に知られるのは最初、恥ずかしかったけど、しょうがないもの。これが私なんだから。

「だから、何みんな想像してるんだよ、古川さん、ふつう女子が話すことじゃあないだろ！」 「いいじゃないのさ、ねえ。美里には内緒にしておくからね」

羽飛がうんうん頷いてくれた。私と目を合わせて。ほんの少しラッキー。

「いったい、どいつもこいつも、何考えてるんだよ」

他の男子たちがお風呂上りみな、ジャージなのにこいつだけは真新しい半そでのワイシャツ、制服だった。なんでだろう。

「立村、あんたなんで制服なんか着ているわけ？」

羽飛がしっかり答えてくれた。にやにやと。「ジャージ大嫌いなんだとさ。ささやかながら、こいつの反抗期」

「うるさいな！」

すっかりご機嫌ななめの立村は、濡れたままの髪の毛を照れかくしなのか撫で付けながら、自分らの部屋に入って行った。片手を上げてついていく羽飛。今だけは、私が独り占めだ。

美里のご要望に百パーセントこたえられるかどうかわからないけれども、とにかく女子たちに協力をお願いしないといけないだろう。一番簡単なのは、美里と一緒に、

「私、生理になっちゃったんだけど、みんなもし予備のナプキン持ってたなら貸してくれないかなあ」

と頼むことだろう。私だったらためらうことなくそうする。絶対そうする。だって、四枚だけじゃあ絶対足りないし、ひとりが持ってくる量は少なくともクラスの女子全員が一枚ずつわけてくれれば十三枚は余裕。もし二枚以上わけてくれたら十分今週のナプキンは集まる。 たぶん、美里も他人のことだったら冷静にやるんじゃないかなって思う。

けど、自分ごとになると、きっとそれどころじゃあなかったんだろうなあ。

わからなくはない。それに、もっと言うならば美里としても、クラスの女子たちに弱み見せた

くなかったんじゃないかな。今の情けない状態を、うちのクラスの子たち……まあ一部だけどね……にさらすとなると、何言われるかだいたい想像つくし。

——清坂さんって、初めてだったんだあ。

——遅いよねえ。私よりもさあ。

——生理くらいであんなに騒ぐなんて、変よね絶対。

——初体験終わった人だっているらしいのにねえ。

まあ、こればかりは美里の自業自得と思えなくもないな。

確かに美里はよくやってきたと思う。D組の評議委員として、よく男子たち女子たちをまとめてきたんじゃないかって私も思う。このクラス、三年一緒にいてよくわかったんだけど、とにかく個性の強い連中が多い。女子はそれほどでもないかな、と思うんだけど男子たちが半端じゃない。めっちゃくちゃいかしてるくせにアイドル狂いの羽飛貴史、規律委員長で規則がちがちにならなくちゃなんないのに、自ら率先して規則違反をやらかしている青大附属中のアイドル・南雲秋世、見た目幼稚園児並みの行動のくせに成績だけはだんとつトップの水口要、すでに売れる絵を描いて生きている金沢進、英語限定学年トップでもう少ししゃべりがうまかったらもう少し女子も選り取りみどりだろうに、地味な性格のせいで「あいつとは付き合いたくないよね」と言われている評議委員長の立村上総。とにかく、外見と内面がつりあわない奴の集合体だ。まあ私からするとこれも面白いといえれば面白いけどね。

女子がいまひとつ、大人しいといえれば大人しい。でも見た目とやってることとがつりあわないということだったら男子と同じかもしれない。奈良岡彰子ちゃんは性格美人のぽっちゃりさんだけど、熱狂的ファンたちに追いかけられた挙句、現在は南雲のくどきに応じてあったかいカップルをやっている。また、穏やかで余り何も言わない杉浦加奈子ちゃんが、実はCまで行っている彼氏もちで脱いだらダイナマイトボディーの持ち主だとか。なんてたって一番は美里だって言いたい。本当だったら羽飛と幼なじみの延長でらぶらぶのカップルとなっていてもおかしくないのに、なぜ見栄えのしない立村なんかにお熱なんだろうか。付き合い始めたのは中学二年の六月くらいだったと思うけど、今だに女子たちの間で疑問が沸騰している。「立村のどこがよくて、清坂さんって付き合っているんだろうね」と。私もその一部については大共感するんだけど、さすがに美里の前では言えない。

とにかく、D組の特長というのは、「人間、見た目判断しちゃいけない！」ってことかな。

わかりやすい性格の私とか、担任の菱本先生、あと美里。本当にやりづらいクラスなんじゃないかって思う。

本当だったら「もう、はっきり言いなさいよ！」と怒鳴りたいところを、結構がまんしてきたみたいだし、時には負けた振りをしていろいろと立村に甘えたり、とにかく美里は「笑顔のがんばりやさん」を演じてきていたみたいだ。ただそこらへんが、「甘えたいときは甘えさせてよ」タイプの我がクラス女子一同には鼻につくみたいだった。弱みを見せないで、どんな時もがんばりやの評議委員、怖いもんなんて何もない！そんな感じだ。

けど、一緒につるんでいる私にはよく見えてくるんだな、これが。

本当の美里を思いっきり隠してるってことが。

たった今、部屋でむくれているような美里の顔は、教室ではめったに見せないはず。きっと立村とか、他の女子たちがいたりしたらもっと明るくはしゃいでいるんじゃないかなって思う。でも、私とか羽飛の前では違う。立村が冷たいとか、機嫌が悪そうだったとか、一年の杉本さんと仲良さそうだったとか言うたびに、しょっちゅう涙を見せる。意味不明のわがままなんか言ったりする。しつこいようだけど美里って、ほんっと、泣き虫だ。それをがっちりとかギかけているのがいつもなんだろうけども、やっぱり、「女の子」になっちゃった直後だし、そこらへんがうまくコントロールできないのかもしれない。今ごろ生理になっちゃって、周りの子から馬鹿にされたくないって負けん気もあるみたいだし。なんてったって、妹に生理が先にきちゃってかなり落ち込んでいたくらいなものね。

わからないわけじゃあ、ないけどね。実際、おなか痛い人はほんっとに痛いつて聞く。私は軽い方だからあまり想像つかないけれども、一日中おむつをしてなくちゃいけないとか、スカートについて流血騒ぎになってしまうとか、そういう面倒なことはうーん、やっかいだなと思う。美里、ちゃんと保健体育、勉強していたんだろうか。いやいや、私が一年の頃から読ませた雑誌のエッチなことちゃんと読んでいたはずだし、生理がいきなり来た時の対処の仕方なんか、ちゃんとマスターしていると思っていた。いや、まさか、ほんとにびっくりした。

とにかく、私としてはすっかり赤ちゃん返りしている美里のために、ナプキンを調達してこなくちゃいけない。

しつこいくらい「絶対、他の人には言わないでね！」と繰り返していたけれども、誰かに話さなくちゃ意思疎通なんてできないでしょうが。ということでまずは、彰子ちゃん経由で情報を知っているであろう、保健の都築先生の部屋へ行った。確かC組の先生と一緒にの部屋に泊っているはずだ。

生徒はみな、大部屋に男女各全員詰め込まれているはずなのに、先生たちは二人部屋。しかもバストイレがユニットだけど設置されている。これってずるい。軽くノックして、先ず声をかけた。

「都築先生、いますか？」

「いますよー」

語尾を伸ばすような明るい調子で、都築先生の声が響いた。明るいソプラノだった。

「D組の古川ですけど、入っていいですかあ」

「こずえちゃん？ 入っていいわよ。ほら、更科くん、これでいい？」

——ちっ、男子がいるんだあ。

男子だけじゃなかった。C組の殿池先生も一緒だった。まったくもって、美里には悪いけれど、切り出しにくいこのタイミング。さすがに男子……C組の更科だ……は部屋の中ではなく、入り口のところでスリッパ踏みつけながら座り込んでいるだけだけ。

「やあ、お元気」

——なにがお元気よ。

三年学年一緒だと、クラスが違ってても大抵の男子たちとは顔見知りになる。C組の更科といえば、見た目がいわゆる「女子たちのマスコット」タイプで、めちゃくちゃ可愛いと評判の奴だった。うちのクラスの水口要……通称すい君……と対を張ることができるかもしれない。ただ、一年からずっと評議をやっているということもあり、すい君よりは大人っぽく見られる傾向があったと思う。立村とか美里とかとも仲良くしゃべっていて、その関係で私もしょっちゅうかかって遊んだりしていたのだけれども。ただ、はっきりしているのは、立村と違って下ネタには耐性がある。「修学旅行は夜這いに燃える予定？」と聞いたところ「夜這い、いいなあ、よっし、ゴム持って準備だ！」とはしゃいでいたから。あのお坊ちゃん顔で。

「ちゃんと、あれは持ってきたの」

「しいっ、ここではだめだめ」

別にいいじゃんと思はる。C組の殿池先生率いる女子一団といえば、とにかくうるさいくらい元気で、その分男子たちの影が薄いと評判だ。典型的更科タイプの男子たちの多いクラスだけになおさらだ。

「ほらほら、更科くん、男子の教室に戻ってね」

殿池先生がにこやかに更科を追っ払おうとする。この先生、まだ結婚していないそうだけど、いったい歳いくつくらいなんだろう。更科に言わせると「四十半ばらしい」とのことだが、見た目はそこまで年取っていないように思う。たぶん普段から、私たちが着ているような若作りファッション……セーラー襟の幅広いワンピースとか、白いパンツスーツとかが多いかな、今の時期だと……をしているから、ごまかせているところもあるのかもしれない。私からしたら「化粧、濃いつすね」くらいかな。

「あのあの、先生、まだ相談あるんだけど」

「もう少し経ってからね」

都築先生は困った顔をしながらも、首を振った。どうやら二十代前半・都築先生に保健体育からみのご相談中だった様子だ。悪いね、邪魔しちゃって。

未練ありありの顔で更科が、

「じゃあ、ほんっとに後でお願いします！」

私を恨めしげに見つめて去っていった。

——けど、やりづらいなあ。

もともと殿池先生は私自身、ちょっと苦手なタイプだった。

「アマゾネス王国C組」と呼ばれるクラスの担任だから、もっと強い感じの人かと思っていたのだけれども、実際体育なんかで接してみるととんでもない、めちゃくちゃ可愛い感じのキャラクターを持っている人だった。決して悪い人じゃない。ただ、なんというか、はっきり言うようではっきり言わないというか、甘えているようでいつのまにか自分の意志を押し通してしまうというか。

まあはっきり言ってしまうと、私の嫌いな女子のタイプ、そのものなのだわ。

かわいこぶりっこしているくせに、いつのまにか話が女子向けにまとまっていて、男子たち

も気が付くのが遅くて、ってことが本当に多い。合唱コンクールの時も「ええっと私、わかんないなあ。ねえ男子のみんな、どうかなあ」と舌ったらずの言葉でもって意見を集めようとし、いつのまにかC組女子たちが団結してしまう。「先生が困っているのに、なんで男子は協力しないわけ？」と怒った拳句、結局女子たち一同がまとめてしまう。いつものパターンだ。これが三年間、続けられてきたと、私は更科とかC組女子評議のゆいちゃんから聞いている。

もっと、「馬鹿な男子は大嫌い！ フェニズム主義万歳！」と叫ぶ人だったらいいだろうけれども。なんか、「女の武器」を利用してクラスをまとめているというきらいがなきにしもあらず。私は正直言って、D組でよかったと思う。

むしろ、今私の隣でジーンズに履き替えている都築先生の方が話しやすい。

「どうしたの、こずえちゃん」

「もう情報は入っていると思うんだけど」

女同士なのに殿池先生もなぜかトイレで着替えている。「やはり、人にみられちゃうのってはずかしいし」だそうだ。

「ううん？」

「うちのクラスの、美里のことなんだけど」

「清坂さん？」

ひそひそしないでいいけれども、殿池先生もいるので小さい声で話す。

「あれ、なっちゃったみたいで、ちょっと今、パニックなんだ」

「あれ？」

ジーンズのボタンをかけて、ブラつけたままコットンの水色シャツに着換えた都築先生は、普段白衣を着ているのを見慣れているせいか一気に高校生逆戻りしたって感じだった。先生っていうよりも、お姉ちゃん、だ。

「そう、あれ。バスの中でさ、スカートにもちょっとついたみたいで、かなりショックだったみたいなんだ。それに、ナプキンも持ってきてないし」

「まあ、そう？」

厳密に言うと、持ってきてはいたのだけれども、たった四枚しかなくて、しかも第一日目であつという間に使いきってしまったという。

「一応、私の分もやったんだけど、やっぱり足りないよね。先生、予備もし持っていたら、分けてくれないかなあ」

「それは大丈夫よ。ちゃんと持ってきてるから」

都築先生は見た目寝袋入れのような感じの黒いバックを開いた。ぐちゃぐちゃしているのがちょっと意外だ。もっと整理整頓得意そうな人に見えたのだけれども。

「でも、一回りしちゃうよね。五日目は帰る日だもんね」

「もうまったなかでさ、初めてでさ、そりゃぱにくるよね」

「そうなんだ、初めてなんだあ」

美里に聞かれたら半殺しに会うかもしれないけれども、思わず都築先生と目を合わせてにやっとしてしまった。

「私の方が先輩だし、それに今の美里、かなり女の子モードでナーバスなんだ。あまり、クラスの女子にも知られたくないみたいだし。だから、先生に先ずお願いってことかな。今日の目的は」

「いいけど、清坂さん、今どうしてるの？」

まだ彰子ちゃんから情報は流れていなかったみたいだ。女子の生理組が入るお風呂の順番ってどうなっているんだろう。

「おなか痛いってとにかく、横になってる」

「着替えて？」

どうだったろう。たぶんジャージにはきがえていると思う。

「あ、そうだ、先生もうひとつきいていい？ この辺、コンビニってある？」

ナプキンだけじゃなかった。まるで美里の世話焼き母さんしているみたいな気分で私は尋ねた。

「ほら、あれの日用のビニールついたパンツ、あれってコンビニに売ってるかなあ。美里、一応一枚持ってきているけど、それしかないってお風呂に入ること自体、ためらってるんだ」「そうよね、お風呂よね」

——都築先生、もしかして、生理組のお風呂のこと、忘れてたって言わないよね。なんだかそれっぽかった。都築先生はさっぱりしていて、きさくで、彼氏がいること隠さない人だ。女子もさることながら男子たちからも人気が高いと聞く。ウルフカットにざくざくまとめた髪に、ちょっとクールなまなざしが色っぽいんだそうだ。女子からすると、かっこいいお姉さんって感じでいいんだけどな。ただ、少し抜けているっていうか、片付け関係とかが思いっきり抜けていずばらっぽいところが玉に傷。保健室のお片づけはほとんど彰子ちゃん代表とする保健委員がやっているという噂だ。

「先生、忘れてたっしょ」

「今思い出したからちゃらにして」

肘をつつきあう。

「それよか、そうなのよね。女子のお風呂は時間ずらそうか」

——先生、もう生徒の方ではそう思い込んでます。

「まあいっか。とにかく、私の方でなんとかするわよ。こずえちゃん、じゃあこれを清坂さんに持って行ってあげてね。車の中で結構酔ったんだって？」

「うん、かなり具合悪そうだったんだけど」

真っ最中だからしょうがないといえばしょうがないんだけど。受取った紙袋を覗き込むと、ピンク色のはんぺんが五枚、入っていた。

「ごめんね、全部上げられないの。他の女子たちにも協力してもらって集めた方がいいと思うな。本当だったら私の分も上げたいとこなんだけど、ほら、動くじゃない。いつも私、タンポン使ってるからね」

「タンポンって、やっぱり、感じます？」

思いっきりぽこんと叩かれた。ジーンズ姿の都築先生は笑っている。なんか先生っぽくないか

ら安心して私も猥談かませる。こういうのって、保健の先生相手でないといけないし、女子でなかったらしゃべれない。やっぱり私、女の子でよかったと思った。

「大人になってから、こずえちゃんもた一つぷり、感じなさいよ！」

ずいぶん時間がかかったのか、殿池先生が花柄のワンピース姿で現れた。それほどどふりふりじゃあないけれど、いわゆる上下が繋がった、ちょっぴりフリルが覗いた袖と襟。たぶん先生が二十才若ければもっと似合ったのかもしれないけれども、どうも化粧が濃すぎて怖い。髪型はてっぺんにお団子っぽくまとめている。どうみても、不釣合いだ。美里にこの辺、ファッションチェックをお願いしたい。

「古川さん、もしなにかあったら、遠慮なく言ってね」

歳とは合わない甘い声と笑顔で声を掛けられた。ちらりと都築先生の方を観ると、私にだけわかる程度のまゆしかめをしていた。

——うわあ、かわいそうだなあ、先生。

明らかに殿池先生は、都築先生と相性よくなさそうだった。いわゆる「オールドミス」VS「若いぴちぴちギャル」との対決が五日間行われるんだろうか。同情したい。

旅館のスリッパを慌てて履いて後、D組の女子部屋に戻ろうとした時だった。

「あれ、こずえちゃん」

C組のゆいちゃんが上下深紅のジャージ姿で立っていた。お風呂準備の格好だった。どうせゆいちゃんにもナプキンの融通をお願いしようと思っていたとこだった。ラッキーと思って口を開きかけたたん、

「美里、初めての『あれ』になっちゃったって、ほんとなの？」

ゆいちゃんごめん、思いっきり私、つば吹いてしまいました。

「ど、どこでそれ聞いたのよ、美里から？」

「ううん、違うのよ」

やっぱり女子の秘密は女子にしか聞こえないように声を潜め、

「うちのクラスの男子たちが、噂してたの。D組の清坂さんが、今日あれになったばかりで、すっかりヒステリー起こしてるって」

——そ、そんな本当のことをなぜ！

やばい、やばすぎる。あれだけ美里が「隠しておいてね！」と言っていたのにだ。私がいくらおしゃべりだとはいえ、今相談に乗ってもらったのは、都築先生だけだ。なんでC組の男子どもが知っているのか？

「ゆいちゃん、そのことについて、何か男子たちに文句言った？」

アマゾネスC組のことだ。他クラスとはいえ、女子の生理とかそういうことについての恥ずかしいことを暴露されたと聞いたら、きっと怒るに違いない。ゆいちゃんは長い髪を低いところで一本にまとめながらさらに続けた。

「ううん、言えないよ。そんなことしたら返って大騒ぎになっちゃうじゃない」

さすがアマゾネスC組をしっかりとまとめているゆいちゃん。C組女子評議委員。ほっとする。「けどこずえちゃん。男子たちが知っているってことはね、みんなにばれちゃうのは時間の問題だよ。美里、かわいそうだよ」

——確かに。

私はゆいちゃんのひたいにキスする真似したのち、D組女子部屋へと走った。走るしかないよ。

——みんなにばれちゃうのは時間の問題、だよ。ほんと！

生理だってことがまず知られること自体、女子にとっては……私にとっても……死にたくなることじゃないかって思う。しかも初めてで、具合悪くなっていて、お風呂に入ることも面倒って状態。これは恥ずかしい以外の何ものでもない。

それをよりにもよって、他のクラスの男子たちにばれるなんて！

美里じゃなくたってこれ、良識ある女子のみなさまなら絶対に許せないことだと思う。

C組の男子ってことは、男子繋がりでもD組の男子にも知られるだろうし、C組のゆいちゃんが知っているってことは、他の女子たちからD組の女子にも知られる可能性大だ。

——絶対、他の人には言わないでよ！

美里ごめん、私が甘かったわ。

片手で握り締めた紙袋がかしゃかしゃ言っている。今私が出来ることって美里の「あれ」がこれ以上広がらないようにすることくらいだけど、できるかなあ。最低でも、美里の一番知られたくないと思っている男子……昼行灯の評議委員長たる、我が弟よ……にだけは隠すこと！ これしかない！

風呂場のことは一切思い出したくない。食事の時に菱本先生にしつこいくらいむかつく言葉を並べたてられたのも聞いてない振りをして乗りきった。なにはともあれひとまず終わったところで、僕は評議連中男女問わず集合をかけることにした。旅行前からもう決まっていることだったし、それほど話し合うこともないのだけれども、一応自分らが「青大附中の評議委員」であるプライドを保つために必要な、ということだった。

清坂氏だけはそのまま寝せておくことにした。

なにせ、夕食すら食べるのが辛いということだったから。

他クラスの奴から「あれなんじゃねえの？」とささやかれたけれども、「あれ」ってなんだ？ということ流した。いろいろ事情があるんだろう。

古川さんにも、

「今日は美里をほっといたほういいよ」

と、若干命令じみた言い方で言われた。姉さんの言うことには逆らえない。

男子四人、女子三人で旅館の中庭に集合。まあここ最近の男女仲の悪さを考えて、早めに切り上げようと思っていた。僕が一方的に、

「とりあえず女子の方なんだけど、体調悪い人とかいるようだったら、俺たちの方でも協力するから言ってほしいんだ。酔い止めとか胃薬とかみんな俺が預かっているから。それからさ」

適度な事務連絡だけして、やたらとにらみ合っている連中を解散させて終り、のはずだった。素直にひっこんだはずだった。なのにだ。

——まずいな、この流れ。

蚊が飛び交ってる廊下前、なんでだろう。女子ひとり、男子ふたりでにらみ合っているのは困る。B組の女子評議は先生に捕まったらしくいかなかったけれども、C組の女子評議と、なぜか更科が矢を放ちあうような格好で立ち止まっている。少なくとも愛の告白めいた雰囲気ではない。

——霧島さん、すごい目してるなあ。

アマゾネスC組の女子評議といえば、気性の激しい女子たちをまとめていることで有名だ。見た目華奢に見える霧島さんのどこにそんな力があるのだろうと、みな噂しているけれども、評議三年やっていたらだいたい見えてくる。大抵の女子評議がらみ事件の首謀者はこの人だ。ここ数回、本当に頭が痛くなること、増えている。

「いや、あれは自然に伝わったことであって」

「自然に、そういう詳しい情報がなぜ伝わるの？」

穏やかに聞こえる霧島さんの言い方だけど、僕にはわかる。一メートル以内に近づいたら感電しそうなほどに憤っている可能性大だ。更科もさらさらの髪の毛を一本、二本と抜くようなしく

さをして、雰囲気をお笑いにしようとしている。わが身を守りたいのだろう。気持ちはわかる。「男子にはわからないかもしれないけど、女子にとっては死にたいくらい恥ずかしいことなのよ。それを男子たちのネタにするなんて、最低すぎる」

「俺はたまたま、話を聞いただけなんだよ。たまたま、先生のところに行って」

「聞いたなら聞いたでしかたないけど、どうしてそれを男子に話したわけ」

なにか失言やらかしたのだろうか、更科。

「だってさあ」

僕がふたりの側に立って全部話を聞いていることなんて気付いていないんだろうか。更科の奴、すっかりあせって足をもじもじさせている。ジャージズボンのポケットをまさぐっている。

「俺、聞いたことの半分も理解できなかったしね。それ、他の奴から聞いてみたかったんだ」「嘘。知らないわけじゃないのよ」「だって、わからないことは、ちゃんと聞いたほうがいいって、うちの先生、いつも言ってるだろ？」

どうやらC組評議同士での小競り合いがあったらしい。二年冬のビデオ演劇「奇岩城」以降、いろいろな出来事がきっかけで三年評議の男女仲に齟りが出てきたのは重々承知だ。特に霧島さんが女子たちの代表として男子たちにつっかかってくるのも、目立ったことだったし僕もたまたま説明させてもらったりしている。三年に入ってからほとんど問題が片付いたこともあって落ち着いた状態となったはずだった。

少なくとも、修学旅行前までは。

「更科どうしたんだよ」

霧島さんには視線で、できるだけ優しくみえるような感じで顔を向けた。僕の顔を見たとたん霧島さんは、唇をかみ締めるようにして口を引き締めた。

「立村くんには関係ないわよ。C組同士のことよ」

「いや、厳密にはD組関係のことだと思うけどな」

脳天気な返事を僕には返す更科。向こうの反応ありと読み取ったのか自信ありげだ。 ——

D組？

霧島さんには悪いけど、D組からみだったら僕が間に入らざるをえない。自分の経験上、「D組がらみ」の問題では何事もなく納まった経験がこれまで一度もない。因果なクラス、かつ因果な立場だ評議委員長というのは。

「おせっかいかもしれないけど、なんかあったのか？」

「うん、実はさあ」

どうやら更科の奴、言いたくてうずうずしていたらしい。またいつもの小学生ばい目つきで僕を見上げ、次に霧島さんをにやりと見つめた。

「霧島の言うことによるとさ、俺がたまたま聞いた話を、うちの男子連中に話してしまったことが悪いことだったらしいんだよね。単に、わからないからどういうことなのかって聞きたかったのにさ」

「やめなさいよあんた！」

「だってこれってさ、D組の話だろ？ それに立村もそのあたりはこれから知っておいた方がいい

いと思うんだ。だって周りの人たちだって迷惑するしさ」

「あんた常識持ってるの！ やめなさい」

心なしか、霧島さんの声には泣き声が混じっている風に聞こえた。無理強いはできないけど理由は知りたい。

「いや、無理やり聞くつもりはないよ。ただ、あまりにもあんまりだったらと思ったんだ。うちのクラスの奴で誰かのことか？」

さっき霧島さんが「女子にとっては」とか、女子限定のような発言をしていたことを考えて、たぶんうちのクラスの女子に関する事だろう。ああ、面倒だ。できればああいう女子関連のことは清坂氏に全部任せたいところなんだ。ああいうのって、本当に清坂氏は上手なんだ。僕が言ったらきっと馬鹿にされてしまうようなことでも、清坂氏が指示をするとするとするとまとまっていって。たまに古川さんから、「美里も敵作りやすいからねえ」と愚痴を聞くこともあるけれども、それはそれだろう。相棒としては最強の人だ。

「うん、ほらあいつのこと」

「更科！」

——まずい、やられるぞ更科。

腕を捕まれた瞬間、更科も次に何が待ち構えているかすぐに勘付いたらしい。

「た、助けてー！」

声はちゃんと調節済みだ。先生たちに聞こえたら別の意味で面倒だ。両手で更科の手首を握り締め、霧島さんが思い切りひねろうとする。下手したら折れる。とにかく割って入るしかない。僕は霧島さんの手を和ませるように叩いた。いやらしくならない程度に、気をつけている。

「だめだって、話を聞かないと先に進まないんだし。別に俺、話聞いても他の奴になんて言わないからさ。ただ、うちのクラスいろいろ問題抱えているから知っておきたいだけなんだよ」

なだめるように、穏やかに話すのが僕のやり方だ。前評議委員長・本条先輩だったらここで思いっきり一喝し、「いいかげんにしろ！ なんでも腕力で片付けようってのはな弱虫のやることだっつうんだよ！」とわめくんだろうが。僕にはできない。

「だめなの、絶対に、だめなの」

大抵、霧島さんはこのあたりで頷いて手を離してくれるはずなのに、今は違う。僕と目を合わせてすぐに逸らし、また更科の両手首を後ろに回してひねろうとする。もっと本気で抵抗すれば、あっさり離れるだろうに更科もなぜやられたまんまにしているのだろう。「いてえ、やめろよお」

いきなり後ろに背の高い奴の気配あり。

「今、後ろに規律委員長、通るぜ」

——青大附中のシャーロック・ホームズだ。

霧島さんの真後ろに、浴衣姿をはだけて着こなした難波だった。メガネをかけたまま、懐手で肩を揺らしていた。

「思い出したくないだろうなあ、あそこまであっさり振られたらなあ」

「難波！」

次の瞬間、更科よりも難波の方に攻撃ターゲット変更となったのは、きっと難波の読み違いだろう。遠慮なく霧島さんは、難波の腰に巻かれていた帯を一気に解き放った。見たくもない水色のトランクと浮き出たあばら骨が、僕、霧島さん、更科の前にさらけ出されたわけだ。

「あら、着てたの」

あわてて前をかき合わせる難波を憎憎しげに見つめるのは霧島さんひとりだった。僕と更科はすでに部外者になってしまっているんだと、改めて思った。

「また始まるよな」

「ああ、派手にならないうちに、片付けような」

D組女子のどうたらこうたらは後回し。まずは現在天敵同士となったB組男子評議V S C組女子評議の対決を見守ることにした。人の少ない廊下だったのが幸いだ。やっぱり評議だけに声は低めて、後ろ通り過ぎる奴には単なるたむろと思われるように。

「あれ、りっちゃん、どうした」

難波の言うことは本当だった。なぐちゃん……現規律委員長・南雲秋世が、完璧にドライヤーで前髪を固め、びしっと浴衣を着こなしてさらっとスリッパの音響かせつつ去っていった。霧島さんはしばらく無言のまま、うなだれたままだった。

——なぐちゃんに振られた女子は別に、霧島さんだけじゃあないのにな。

この辺、二年の冬までは禁句だったのにだ。複雑な関係だ。

「いいかげん女子は男子に従って大人しくしていると言っているだろう」

——また始まったよ。

更科と僕は顔を見合わせた。何度も言うようだけど、二年の三学期から始まった難波の嫌味、同じ男子としてもいらいらしてくるものがある。

「だいたい、今まで俺たちがずっと我慢してきたから、女子たちも自由に動き回れたんであって、女子たちのしでかした後始末を立村とか俺とかが片付けるのにどれだけ苦労したと思ってるんだ」

——難波、お前手伝ってくれたか？

その辺はつつこみたいところだががまんする。霧島さんが口を開きかけ、指をつきつけようとしたところを難波はきざっぽく前髪をかきあげた。悪いけどやめたほうがいい。額、今のうちから巻き上がっていることを僕たちは知っている。

「ビデオ演劇であれだけ天羽が嫌がっているのになんで女子は、西月を無理やりレイモンドに押し込もうとしたんだ？ 男子たちからしたら天羽が最初から社交辞令で西月の機嫌をとっていることなんて見え見えだったんだぞ？」

「そんなこと教えてくれなかったじゃないの！」

このあたりは僕も共感するけれど、言い方をもっと考えるべきだと思う。

「見ていればわかるだろ？ 最初から天羽の奴、西月がいそいそと寄り添ってくるなり、すぐ俺とか更科とか立村とか読んで、絶対一対一にならないようにしていただろ？」

「そりゃあ評議委員同士だもの、当然気を遣うじゃない」

「はあ？ あれだけ露骨に嫌がられてて、逃げられていたのか？」

青大附中のシャーロック・ホームズ様は相変わらず鋭いところをつく。確かに「奇岩城」事件については現三年女子に責任があると思う。僕も一度だけど、清坂氏にきついことを言ったことがある。A組評議の天羽が、二年時まで評議の相棒を務めてくれていた西月さんへ、女子たちの陰謀によりむりやり告白させられ、記念にビデオ演劇の主演カップルを押し付けられたという事件。もっともあれは天羽にも問題があった。難波は最初から気付いていたらしいけれども何にも言わなかったし、僕は全くあのふたりが仲良しだということを疑うことすらしなかった。更科だけがなんとなく、違和感ありありな顔をしていてそちらの方が気になった程度だった。女子たちが誤解してもしようがないといえば、しょうがない。ただ、ビデオ演劇の撮影が進むにつれて天羽が重たい顔をしてため息をついているところは見かけた。西月さんがドレスをまとって「ねえねえ、天羽くーん、ねえこれって、レイモンドっぽいかなあ？ 私に合うと思う？」と甘ったるい声を出してくっついてきた時、一瞬だけど顔をゆがめたのを見たこともある。そのあたりで愛想尽かしをしたんだろうと僕は思っていた。真実は全く別のところにあったことを最近になって知ったけれども、その辺は今のところノーコメントにしておく。

はっきりさせておくことは、天羽と西月さんをくっつけようとした黒幕が、目の前にいる霧島さんだということだろう。西月さんがどういうことを考えていたか想像つかないけれども、女子同士いろいろ相談したんだろう。清坂氏も一枚かんでいたらしいし、同期の女子たちはその点団結力があったから、当然のことながらいろいろ策を練ったのだろう。僕も動きがあることくらいは知っていたから見守る程度にしていた。もし、早い段階で本当のことを知っていたらと考えるたび、歯を食いしばりたくなる。悔しい。

「嫌いなら嫌いってはっきり言えばよかったのよ！ なにもあんな場所で露骨に傷つけてしまうことないじゃない。そのあとでなに？ いきなり今の彼女を評議にするなんて、天羽が何考えているかわかんないけど、私たちからしたらふざけるなってことよ！ それを責めるのがどこが悪いのよ！」

霧島さんは完全に論点を間違えている。難波にそれを突かれたらしょうがない。

「俺はなにも、天羽のことをいきなりかばっているわけじゃないのにな。最初からもっと、きちんと女子たちが西月と天羽の繋がりをチェックしておけば、不必要にカップル誕生大作戦なんてやらずにすんだんじゃないのか」

「それはもう十分あやまったじゃない。いまさらなにぐちぐち言うわけ」

西月さんがその後、振られたショックで口利けなくなり、しばらくの間霧島さんも相当落ち込んだようだ。清坂氏からいろいろ聞いている。難波と更科からしたら西月さんのことはともかく、霧島さんの様子が変わったことには「天罰なり」と思っているらしい。

「そうだな。けど女子たちがやらかしたことはそれだけじゃないよな」

また何かを訴えようとする霧島さんに難波は、はだけたゆかたをかきあわせつつ続けた。

「西月のことがほとぼり冷める間もなく、今度は杉本を煽り立ててなにやってるって感じだよな。立村がさ、必死に水鳥中学生徒会と交流会やって、困ったちゃんの西月と杉本をセットで交流会グループに押し込んでな、ふたりの立場だけでも作ってやるかってやってたんだぞ。それなの

にな、杉本を煽り立てて水鳥の副会長を追っかけまわすように仕組んだのも、霧島、お前だろ。女子って馬鹿もいいとこだって思ったよなあ」

——言い過ぎだぞ、難波！

割って入ろうとしたが、手首を押えられて断念した。更科の奴、何にやにやしているんだろう。天羽たちのことならともかく、なんで他学年の、よりによって杉本のことまで引っ張り出すんだろう。むしようにいらいらしてきた。

「あんた人を好きになったことないからそういう勘違いしたことが言えるのよね」

——霧島さん、まずいよ。勘違いしているのはそっちだよ。

男子と女子の会話ってどうして、こうもかみ合わないんだろう。

「おかげでせっかく別グループでやろうってことになっていた交流会計画も、評議の方でやるようになって先生たちからのご沙汰さ。本当だったらお前らの大好きな杉本と西月ふたりを核にして、評議とは別組織で進められる予定だったのにさ。交流会グループはいつのまにか、学年の困った奴を集めるためのサークルになってしまったというわけだ。ま、俺たちからしたら評議委員会でまとめた方がずっと楽しいけどな。女子たちが黙って俺たち男子に全部ハートも何もかも任せてくれれば、全部うまくいったのにな。そういうところ、どうして頭が働かないのか、俺は理解に苦しむぜ」

片手を振り上げようとした霧島さんに向かい、難波は帯をくるくる器用に締めながら、「で、今度は更科をつるすわけかよ。どういうことがあったか知らないが、更科が本当のことを聞いて、わからないことを同じ部屋の奴に聞き出そうとして、それがどこが悪い」「だってそれは、更科がとんでもないこと言うからよ！」

——はっきりその理由言ってしまうえばわかりやすいのに、霧島さんも。

割り込むタイミングが計れない。たくさんしゃべっているのだけど、ふたりとも最大倍速スピードを出してわめいているから、聞き取るのがやっとな。しかもその声、潜めているからなおさらわかりづらい。とにかく天羽のこととか杉本のこと、過去の女子チームの失点事実をすべて洗いざらいわめき散らしているってことだろうか。

——杉本の件については、頷けなくもないよな。

一テンポ遅れて、僕も心中、頷いた。

杉本梨南……一学年下の、もとB組評議委員。彼女が評議を降ろされたということについては、いろいろな事件やからみがあってしかたがないといえばしかたないことだった。僕なりにも考えていることはあったけれども、ただこのまま杉本を傷つけたままにしておきたくなかったというのもある。難波のいう通り、僕は水鳥中学との交流会を絡めたかたちで別グループの交流会チームをこしらえ、その中に杉本を加入させることを計画していた。すでに天羽との破局事件でA組評議を降りることになっていた西月さんも杉本の面倒を見てくれることについては賛成してくれていた。だから、いきなり杉本が水鳥中学の副会長に一目ぼれして、恋の暴走をしなければ、難波の言う通り丸く収まっていたはずなのだ。

この件については、僕も清坂氏相手にしばらく文句を言っていた記憶がある。

悪いが、三年女子評議をこの時ばかりはかばえなかった。

やっぱり男子と女子とでは、感じ方が全く違いすぎる。水鳥中学との交流会を杉本たちに仕切らせる予定が、先生たちの一存で評議委員会に差し戻され、結局難波の言う通りになってしまったわけだ。

——あれさえなければ、杉本はクラスから追い出されませんんだのにさ。

——「E組」送りなんて、体のいいやっかいもののごみ捨て場扱いされているんだ。なのに、なんで、あんなことしたんだよ！

この辺については、清坂氏に十分八つ当たりさせていただいたので、もう言う気はない。なによりも難波、お前の方こそいいかげん八つ当たりやめたらどうなんだろう。第一、あいつがわめいているほどに、女子たちからダメージを個人的に受けていないはずだ。僕をうまく補佐してくれたのはわかるけれども、難波や更科たちには特別何も女子たちは迷惑をかけていないはずだし、それほど憤る必要もないように思われる。

どっちもどっちだ。もうやるだけやってから後片付けしよう。決めて、僕と更科は一步引きながら様子を見やった。先生たちが来たらすぐに割って入るつもりだった。一番の面倒起こす奴というのは、実いうと教師連中だ。

「更科が何言ったというんだ？」

にんまりと笑いつつ、前髪をかきあげる難波。だからやめろって。

「だから、それは難波に関係ないことでしょう」

「立村には関係あるはずだろ。D組のことなんだからさ」

僕を指差す。思わず僕も頷く。

「だったらなんで男子にばれたらまずいのか、よくわからないだろうに。別に俺たちは女子の厄介ごと巻き込まれたくないしな、関わりたくないけどな。けれども男子たちが普通に話していることを無理やりドラマチックにして大騒ぎするのはもう止めろよ。犠牲者は天羽ひとりで十分だ」

「犠牲者ですって！」

声がとんがり、響いた。まずい。こんなところでけんかされたら今度こそ本当に誰かくるぞ。指で「しーっ」と何度も合図する僕たちふたりをよそに、今度は霧島さんの反撃だ。「さんざん女子を傷つけておいてなにが犠牲者よ！ もともとちゃんと天羽が小春ちゃんを傷つければ私たちだってこんなことしないですんだんじゃないのよ。杉本さんだってただ、水鳥の人が好きだから告白させてあげてよかったねですませただけじゃないの。それに何も私たち聞いてないわよ。交流会グループのどうたらこうたらなんて。そうよ、立村くん、あんたも悪いのよ！」

きた、とうとう火の粉が飛んできた。ここで難波に加勢してはいけない。穏やかに、あくまでも冷静に。僕なりに小さく首を振り、敵じゃない合図をする。

「俺が、やっぱり悪かったかな」

「あたりまえよ！」

——だから怒るなよな。

黙らせるにはどうしたらいいか、難しい。ただ霧島さんもすぐに冷静さを取り戻したのか、ささやき声に戻してくれた。

「美里にばっかり指図して、ぜんぜん他の女子たちを頼りにしてくれないじゃないの。三学期に入ってからずっとよね！」

「いや、それはやはり立場上しょうがないかと」

仲悪くなった女子たちに無理難題なんて言えないじゃないか。

「私たちだって評議委員会のために一生懸命尽くして、盛り上げたいって思っているのにいつのまにか男子たちがかたまって、みんな処理しちゃうじゃない！」

「今までだったらそうしたかったけどさ、ただ、やはり力仕事とかいろいろ動くことが多くて、やはり」

しどろもどろになりながら言い訳する。でも女子は鋭い。僕が無意識のうちに女子たちを避けて男子評議を頼りにしていたことを、見抜かれているってわけだ。西月さんのこと、杉本のこと、やはりこれ以上女子評議たちにつっぱられるのが怖い本音も無きにしも非ず。まずい、これからは気をつけなくちゃいけない。

「また、私たちが何するかって怖がっているでしょ。杉本さんを活躍させたいってことが立村くんの計画だって最初からわかっていたら、私たちだっていきなり暴走させなかったのに。全部どうして隠すのよ。だから困るんじゃない」

「あれは女子たちだけじゃないよ、他の奴にも隠していた計画だったから」

ごめん、これは嘘だ。男子評議には「奇岩城」撮影最中にちょこっとだけ話した。

「私たちって信頼されてるんだって思ったから今まで一生懸命やってきたんじゃない。それを今になっていきなり、馬鹿にされたり差別されたりするなんてひどいじゃない」

「差別なんてしたつもりないけど、もしそう思われているんだったら、ごめん」

頭を下げた。とにかく黙らせないととんでもないことになりそう。なのに難波だけは場の空気を読むことすらしやしない。火に油を注ぐって奴のことだ。

「俺たち男子評議が、女子たちの機嫌とってただけだったのに、それも気付かなかったのか。だから女子は馬鹿なんだ」

「機嫌ですって！」

まったく、こいつ本当に「青大附中のシャーロック・ホームズ」名乗ってていいんだらうか。勘の悪さ。名前を返上しろって言いたい。また広い額を見せつけながら、難波は懐手にして胸元を少し緩めた。視線を思わず逸らす霧島さん。やはり目をあわせづらいのだろう。

「『紳士たれ、淑女たれ』って校訓を馬鹿正直に守って俺たちは三年間来たって訳だ。レディー・ファーストはかまわない。女子は男子と違ってか弱い存在だから、大切にしていなくてははいけないというお言葉、確かに俺もそう思うさ。けど、付けあがって俺たち男子評議をさんざんこけにしたりするのはどうかと思うぞ」

「こけになんてしてないじゃないの。ちゃんと男子たちの協力をして」

さらに口を挟もうとした霧島さんに肉薄した。

「俺たちがしてほしいかったのは協力なんかじゃないってこと、いつになったら気付くんだ！」
——まずい、それだけは言うなよ、何度も言うことだけども、頼むよ。

「男子たちのやることをくちばし挟んで使い物にならなくするんじゃないで、ただ黙って見ていて、応援してくれりゃあ、俺たちは意地でもあんたたちをレディー・ファーストしてやったのに、そういうこと、どうしてわからないんだ！」

もう止める気もない。頭を抱えた僕に更科がささやいた。

「あとで教えてやるからとりあえず、この辺でお開きにしない？」

同意した。こともあろうに難波の奴、禁句その二まで口に出してしまう始末。

「だから霧島、他のC組女子にはOKしてもらえても、あんたにはお呼びがかからなかったんだよ。規律委員長さまにさ！」

禁句その二が難波の口から飛び出した瞬間、僕と更科は思いっきり奴の両腕を引つつかんだ。僕が右側、更科が左側。また襟元が緩んでずるずる、またまた半裸状態。霧島さんは冷静にその姿を眺めた。

「貧弱な身体ね」

もしかしたら彼女の方が激怒するかと思った。泣かれたらどうしようと思った。でも霧島さんは落ち着いた風に束ねた髪の毛を撫で、男子三人に告げ、背を向けた。

「あんた一生、童貞じゃないの」

なんか霧島さん、すごいこと言って去ったような気がする。しばらく呆然としていた僕と、立ち直りの早い更科、まだエキサイトしている難波。それぞれ落ち着くために、旅館玄関へと向かった。風呂場の側に紙パックジュースの自動販売機が並んでいる。このあたり溜まるにはちょうどいい。僕と更科、ふたりで何度も難波をなじった。

「だから、あれだけは言うなって前から言っただろ！」

「そうだよ、お前あそこで騒ぎになったら、二日目謹慎になっちゃうよ」

「本当のことを繰り返したまでだ。どこが悪い！」

お互い意地ばかり張り合っている。気にはなっていたけれど、お互い修学旅行の間くらいは大人しくしているだろうとたかをくくっていた。B組、C組、以前のA組、女子たちのパワーがすごかった。一、二年の頃は男子たちが女子たちにひっぱられるような時も多々あったし、あまりの行動力にむかっとくることがあっても「まあ、それはそれ、これはこれ」と流してこれた。でも、「奇岩城」ビデオ演劇撮影以降何かが変わったような気がする。もちろん女子たちの先走った行動はこれが初めてではないけれども、天羽がいきなり西月さんを露骨に評議委員会から追い出すという行動、これが男子たちの間になにか火をつけたらしい。

——今まで、できなかったこと、なんだろうな。

「お前が腹立てている気持ちはわかる。十分過ぎるくらいわかる。女子たちをおとなしくさせたいって気持ちも、すごくよくわかるよ。でも、あの場所で昔のこと引っ張り出してどうするんだよ。杉本のことはもう過ぎてしまったことなんだし、あいつも今はE組でうまくやっている。西月さんのことも、まだ詳しく説明していないけど天羽がちゃんとけりつけたんだ。だから、こ

れ以上騒ぎ起こすなよ。わかってるだろ、『紳士であれ、淑女であれ』って」

僕の中にも、どこか気持ちよく手で心をさすってくれるような感覚が残っている。たぶん、これが「共感」というものなのだろう。言いたいことが伝わるけれども、それを口にしたら一巻の終り、それがわかっているからあえて僕は何も言わない。でも、難波が霧島さん相手にわめき散らしたことを、僕ももしかしたら清坂氏に文句言いたかったのかもしれない。

「お前はいいよな、清坂がいるからな」

「だから、それとこれとは関係ないだろ！」

こういう余計なことを言わなければすべて丸く収まるのに、だ。

「つまり俺が言いたいのは、女子ともう少しうまくやってくれってことだよ。あの人たちだって西月さんが口利けなくなってから、ものすごく反省していたようだし、あれ以来僕たちに対してみな、一歩引いてくれるようになっただろ？ 今までだったらどんどん女子たちパワーでつつきってしまうようなことだって、みんな僕たち男子評議にあわせてくれるようになっただろ？」

「ああそうだな。協力しなくなったよな」

投げやりに難波は告げる。

「ま、俺は男子校ののりのほうが好きだけどな」

「お前シャーロック・ホームズだったらもう少し頭働かせろよ！」

僕の方がだんだんいらいらしてくる。

「俺も悪かった。霧島さんの言う通り、女子に話し掛けづらくて、ずっと清坂氏にだけ手伝い頼んでいたのは悪かったなって思う。本音を言えば男子連中の方が気心知れてるしっていうのもあるけど、あれはほんと、俺のミスだ。旅行から帰ったらちゃんと、女子のみんな集めて協力をお願いするつもりでいる。けど、難波、お前があんなきついこと、そりゃ本当のことだってわかっているけど、でも言いまくったらせつかく協力してくれるって言ってくれた女子だって、怒るに決まっているだろ」

「だから俺は協力なんてしてほしくねえって言っているだろう」

前髪をかきあげようとして、ふと一本髪の毛が落ちた。

僕はおもむろに告げた。

「難波、とりあえずそのくせやめろ。額、上がってるぞ」

更科も頷いた。やはり言葉にして伝える必要があるってことだろう。素直に難波の奴、手を下げた。

「それに、どうして昔のネタ引っ張り出すんだよ。霧島さんと南雲のことって、本当に昔々、果てしなく昔のことだろ？ 俺だって知っているくらいだから、ほとんど学校内の連中みんな知っていることだろ。そんな恥ずかしい過去をどうして」

「ああいう女子だから、南雲が振ったんだなってこと言いたかっただけ」

——それはまずいよ本当に。

ため息を吐いた。難波は心底、霧島さんを軽蔑しているらしい。

「南雲はもともと女子に人気があったから、よりどりみどりだっただけで、たまたま霧島さんがその他大勢だったただけだよ」

「けど、別のC組女子と付き合ってただろ？ 霧島が付き合いかけた直後にさ」

痛いところを突いてくる。まさに、その通りだ。もっというならそのC組女子は振られてD組保健委員の女子に激しくお付き合いを申しこんだことも、周知の事実。

「詳しいことは南雲に聞かないとわからないけど、別に聞く必要のないことだろ。一年前のことだよ、もう終わったことだろうが」

まさに、鉄砲を手に入れた子どもみたいなことをしているわけだ。難波という奴は。風呂の湿った空気が漂ってくる中、僕は自動販売機に持たれて天井を見上げた。お手上げ、ってことだ。

「素直にさ、『あたしたちが見てるから、がんばって！』とか言ってくれるだけでいいんだ。女子ってのは。何も俺たちのやりたいことにくちばし突っ込んで、勝手に好き勝手なことやらかして尻拭いさせられるようなこと、俺たちはちっとも望んでいやしないんだ。どうしてうちの評議女子連中はそういうわかりやすいこと、わからねえんだろうなあ」

——お前の理想を口にしてどうする、難波。

難波が今時古い女子好みの持ち主で、三つ指ついてお迎えしてくれるような古風な嫁さん……彼女、ではない、彼にとっては嫁さんだ……を求めているのは評議連中みな知っている。一步下がって仕えてくれるような女子なんて、青大附中にはまずいないだろう。霧島さんの捨て台詞「あんた一生童貞ね」も、しゃれにならないかもしれない。さぞ、評議女子の行動には腹が立ってならなかったことだろう。それはいい。ただ、どうしてそれを押し付けようとするんだらう。以前の難波はそんなところなかったはずだ。気の強い女子たちにも、「俺はクールなシャーロックアンを目指してるからな」とか気取ったことを言って笑いを取っていた。決して、今のような、罵りあいなんてしたがる奴じゃなかった。

おかしい。なんだかあの「奇岩城」事件以来、半年経つけれども何か軸がずれてきている。

気が付いてはいたけれど、僕も別のことで手一杯、何もできなかった。

——二日目に時間見つけて、聞いてみたほういいかもな。

根は悪い奴ではない。本当は僕の頭回転が弱いところをしっかりとフォローして、先生たちや下級生たちに理論立てた説明をしてくれる、それでいていかにも「俺がやったんだすごいだろ」というようなのりを見せない、いい奴なのだ。どうみても今の言動に理論だてたものはないけれど。

「ところで、きっかけはなんだったんだったっけ」

しばらく僕の一方的訴えに耳を傾けていた更科が、唄うようにつぶやいた。元はといえば、更科が発端だった。すっかり忘れていた。難波も話を逸らすのは大賛成らしい。にやつきながら更科に尋ねた。

「お前、情報何、仕入れてきたんだよ」

「D組にも関係あるって言っていたよな」

大きく頷く更科。

「聞きたい？」

もちろんと頷く僕らふたり。

「じゃあ、もっと耳寄せて」

ウインクの真似をする更科。

言われる通り、三人固まった。ささやき声でゆっくりと説明されるまま聞いた。

——ほんとかよそれって。

「へえ、清坂ってまだ、だったのか、意外だなあ」

「お前もそう思うか？ 俺もさあ」

「どうすんの立村、お前、チャンス到来じゃん。ちゃんとゴムも用意してあるし」 人の不幸をネタにするのはどうかと思う。ちゃんとこいつら保健体育の授業 きちんと受けてきたんだろうか。いや、なによりもこいつら、自分がもし僕の立場だったらなんて言うつもりなんだろうか。ただ無言で通そうと思う一方、なん だかしゃべらなくちゃ落ち着かない自分もいる。

「あのな、お前たち、よく聞けよ」

とりあえず、大きくため息ついて説明することにした。こんなところ清坂氏に見られていたらたぶん、その場では張り倒されているだろう。素直にねっころがるしかない。僕は難波と違って、気の強い女子たちにはなれているのだから。

「いわゆる『あれ』だろ。女子たちのことだから余り言いたくないけどさ、『あれ』の時に下手なことを口走ったら、思いっきり殴られるか怒鳴られるかのどっちかに決まっているだろ」

「ふうん、立村も興味あったんだ」

「あるんじゃないくて、大変なんだよ！」

僕の頭に何が浮かんでいるか、想像つかないんだろうきっと。

「うちの母親、月に一度、とにかく大荒れに荒れる時があって、俺と父親ふたりでいつも嵐が去るのを一週間待っていたんだ。とにかく、片付け物がきれいに畳まれていないと怒鳴る。うっかりコップを割ったりしたら一大事、俺は一回昼ご飯抜かされたことがある。たまたまテストで七十点以下だった時、見せたら一日 中部屋に籠って勉強させられた。共通点はひとつ、みなうちの母親の『あれ』の日だ」

「うちの母ちゃんそうでもないけどなあ」

無邪気な更科は首をひねっている。うらやましすぎる。

「だから女子は月一回必ず体育を休むんだな」

詳しい難波。やっぱりこいつは保健体育の授業しっかり聞いていたようだ。

「だから大変なんだよ。これから俺は清坂氏にうっかり変なこと口走れないってことだよ。そりゃあわかるよな。一ヶ月に一度一日中腹を下している状態なんだろ『あれ』って。それはかわいそうだと思うし、そりゃあ腹立つ気持ちもわかるよ。だけど、俺たちとしてはとにかく、『怖い』の一言なんだ。いいか、難波、更科」

僕はゆっくりと口止めをすることにした。わが身を守りたいだろう、お前らも。

「絶対、C組男子の中でこの情報はとどめとけ。もしばれたら、修学旅行何が起こるかわからないからな」

——清坂氏、かわいそうにな。

母さんじゃないけれど、きっと殺されそうなくらい機嫌悪いんだろう。とにかく『あれ』の間の母さんのすごさを知っている僕としては、どうか清坂氏が早く楽になってくれることを祈っている。しばらくはこちらから近づかないようにした方がよさそうだ。一日中血の腹下し状態が続いているなんて、男の僕だって気分悪くなるに決まっている。

こずえのおかげで、少しずつナプキンを集めてもらえた。

「明日ちょこっとだけ自由時間あるから、その間にこっそり買ってきなよ」

だんだんおなかの痛みが激しくなってくる。温かくなったり冷たくなったり、寒気が走ったり、自分でもどうしてこんなに苦しいのかわからなくて、思いっきり布団の中で膝を抱えてみた。

「寝てなよ。誰にもばらさないって」

——本当かな。

うとうとしていたら、仲のいいグループの子たちが、

「美里、車酔い？ 大丈夫？」

と側に来てくれた。遠目で眺めている子もいたけれど、知らないふりしてくれたほうが本当はいい。風邪気味だとか、具合悪いだけだと言ってごまかせるから。

こずえにしか、あのことは言いたくない。

ううん、こずえにもほんとは言いたくなかった。

あんなことを。あんな、臭くて汚くて、気持ち悪いことを。

「美里風邪気味だからさ、あとでお風呂入るでしょ」

「うん」

うまくごまかしてくれてほんとよかった。

生理の女子生徒たちはあとからひとりずつ、こっそり入るよにということだけど、私だけは「初めてなった」ってこともあって、本当に一番後でいいんだそう。そのあたり、こずえが保健の先生に交渉してくれたみたいだ。

「ごめん、やっぱり、都築先生には話さないとまずいでしょうが」

「やだけど、しかたない、か」

夕食が終わってからもこずえはいろいろと走り回ってくれたようだった。私がずっと、ジャージに着替えて横になったまま、ずっと動かないでいるからしかたないのかもしれないけれども。本当にごめんって感じだった。

「なに言ってるのさ、美里。おたがいさまじゃんねえ」

「だって」

言いかけると、むりやり遮られた。

「あのねえ、美里。今のあなた、ちょっとでも変なことしゃべったら、すぐにばれちゃうよ。立村に顔見られてごらんってさ。一発だよ。ああ、清坂氏ってあれなんだなあって。あいつ恐ろしいこと、南雲に言ってたらしいよ。この前彰子ちゃんから聞いたけど」

彰子ちゃんが生理のことなんて話すわけ？ こずえみたいに？

「立村の母さんって、あれの時ものすごく怖いんだって」

立村くんが「あれ」について話すなんて信じられない。なんだか気持ち悪くなりそうで、胸に両手を押えた。なんか吐きそうだった。

「だからいつも、月に一回ご機嫌斜めな時がくるんだって。びくびくしておびえてなくちゃいけない一週間。無意識のうちに立村少年は数えていて、わが身を守ったらしいって」 信じられないことだけど、でも、きっと立村くんは言ったんだろう。あの彰子ちゃんが話してくれたんだもの。彰子ちゃんは嘘つく子じゃない。でも、立村くんもそういうことを知っているんだと思ったら、なんだか胸がむかむかしてしまう。

「だからさ、他のスケベ命の男子よりはわかってくれるんでないの？ ま、今夜はとにかく寝てなさい！ 生理日で一番しんどいのはね、明日なんだから！ 二日目用のナプキンは、少し多すぎってくらい使ったほうがいいからね」

こずえに一方的お説教を食らってしまった。

「うん、わかった。寝る」

「じゃあ、おやすみなさい。私はしっかりと修学旅行第一日目夜・突入！」

こずえもさっさと着替えに入った。布団の隅からちらっと眺めた。しっかり白いブラに包まれた胸が突き出ている。やっぱり、私よりも、大きい。

他の子たちには「風邪を引いたの」ということでごまかし、目を閉じていた。やっぱり横になっていると楽なんだけど、一日目のおしゃべりに交われないのが悔しい。

——なんで修学旅行になっちゃうんだろう！ もう最悪！

同じことを考えた。

——お風呂入る時、私ひとり、だよな。

そのことが少しだけ嬉しかった。

保健の授業とか、お姉ちゃんの話とか、そういうので「生理」とか「初潮」がどういうものかくらいは知っていたし、なにせこずえが詳しくすぎるくらい詳しいからいつきてもかまわないと思っていたはずだった。ちよろちよろっと血が出て、おむつみたいにして押えれば大丈夫、誰でもなるもの、すぐ平気になるとみんな言っていた。でもそんなこと、絶対ない。下着を替えていないせいか、べたべたして気持ち悪いし、身体からすうっと上がってきた匂いが、お魚みたいで臭い。匂い消しのスプレーでなんとかごまかそうと思ったけれども、かえって具合悪くなりそうな匂いだった。それに、うまくいえないんだけど……ナプキンを取り替えた後、どこに捨てるかどうかでまた迷ってしまった。外を歩いている時のトイレには、ぐしゃっのごみ箱につっこんでおけばよかったけれども、旅館に備え付けられているトイレの汚物入れにはそう簡単に捨てられない。一応、女子の部屋にはトイレがついているけれども、さっき見たら誰も生理用品なんて捨てていなかった。もし私が、あんな汚いものを捨てたとしたら、一発でばれてしまいそうだ。木の箱で、ふたがついていて、あけなくちゃいけない。誰でも中を見ることができないのだ。そんなみっともないこと、できない。

——お風呂行く途中に、女子トイレあるよね。

何度か寝返りを打った。ポーチにはこずえがいろいろ集めてくれたものを詰め込んでおいたし

、一応着替えも枕もとに用意してある。こずえが呼んでくれたところで、こっそり出かけよう。ついでにさっきから行きたくてなんないトイレにも、寄っていこう。

「美里、順番来たよ」

こずえが呼びに来てくれた時は、いろんな意味で限界だった。助かったと思った。他の子たちには気付かれないようにしてくれるとは、こずえも変なところで気遣いある子だ。

「じゃあさ、ちょっと先生のところに行って来るね。美里もついでに来る？」

「うん」

言い訳がうまい。他の子たちも何人か、気付かれないように生理用のお風呂順番を待っていたらしいけれども、やはり人には言わないでおいたみたいだ。ひそひそ話をしている子もいたけれど、仲良しグループとは違うし、それはそれ、無視していた。

「気分悪い時は無理に入らないほうがいって先生言ってたけど、別にいいよねえ」

部屋でたむろい、背中丸めて青いとどみみたいな格好で足伸ばしている女子たちの何人かが、ひよいと顔を上げた。

「清坂さん、あのさあ、すごいさっきから具合わるそうなんだけど、どうしたの？」

思いやりっぽい声じゃない。もともとクラスでも私とは反りの合わないタイプの子だった。

「風邪だってさっきから言ってるじゃん。ねえ美里」

返事する間もなく、こずえは私を部屋の外に押し出した。

——変なこと言われていたらどうしよう。

——あれなんだ、って言われてたらどうしよう。

いつもの私じゃない。ほんとに変だ。こんなことくらいで、なんでどぎまきしてるのか、自分でもわからなくて泣きたくなる。こずえが耳もとで、

「ほら、怪しまれるでしょが。ここの風呂、女子のとももおっきいよ。あ、でもね、湯船には入らないほうがいいよって言われた」

「水、入っちゃうから？」

首を振ったこずえ。

「違うって。やっぱり血がついた風呂って、マナー違反でしょがってことよ。美里、ちゃんとあそこも洗ってくるんだよ」

「もうエッチなんだから！」

まだにやにやしているこずえの顔を見るのも恥ずかしくて、私は慌ててトイレを探した。「あ、女子トイレはこっち」

ありがとうと返事する間もなく、飛び込むしかなかった。だって、ほんとぎりぎりだったから。荷物をこずえに預け、個室に飛び込みまたがろうとした。

「美里、ほら戸、押えておくね」

恥ずかしいったらない。慌て過ぎてあぶなく、木の戸を開けっ放しにしたままやってしまうとこだった。こずえがいなかったらもう、二度と出て行けないかもしれなかった。

「あとさ、美里」

誰もいないからこずえもだんだんパワーアップしてくる。

「私の経験上、言っとくけど」

「そんなおっきい声で言わないでよ！」

「ナプキンもったいないからって、トイレ行くの我慢するのは絶対やめなよ」

「そんな、どうでもいいじゃない！ 赤ちゃんじゃないんだから！」

「お母さんにも言われたんだ。よく旅行行く時におトイレ我慢を避けるために、水飲むの我慢する人っているけど、膀胱炎になって大変なことになっちゃうからねって。女の子はちょっと恥ずかしくても、堂々とトイレ行きなさい！ ってさ」

——そんな、わかってること言わないでよ！

「それにね、生理ナプキンばっちいままだったら、スカートにつくだけじゃなくってさ、かゆくてかゆくてなんなくなっ、あそこが腫れてしまう……」

「もうやめてよ！」

こずえが詳しいのはよくわかっているけれど、そんなあけすけなこと言わなくたっていいじゃないと思う。明らかに生理なんだとわかる個室の中の匂い。丸めて捨てるナプキンの汚物入れ。息を止めて捨てようとしたら、またこずえのよけいな声が聞こえる。

「あのね美里。ナプキン捨てる時さ、ちゃんとキャンディーみたいにティッシュで包んでる？ まさかそのまんま、ごみ箱にポイじゃないよね」

——どうして、知ってるのよ！

「うちの母さんにもしっかり言われてるんだ。女の子として使った後のナプキンの始末は、きれいにしないと恥ずかしいよってあれ、どうした、美里。具合悪くなったんじゃないよね？」

——もう、いや、こんなの！

わからない、どうしてこんなに自分の気持ちが変になってしまうのかわからない。

いつもだったらこずえに「やーねえ、こずえのエッチ！」と言いつけたりできるのにだ。使用済みのものを言われるとおりに小さくティッシュで包んで捨てるそこまでは言われるとおりにした。でも、それ以上、何もできなかった。

——誰にでも来ることって言ってるけど、こんなのが毎月続くの？

大人へのお祝いだなんてみんな言うけれど、大嘘だ。

トイレに行くたびにこんな汚い血の塊を見なくてはならないなんて。

スカートに血がつくのびくびくしなくちゃいけないなんて。

こずえに言わせれば「あんたかなり便秘気味？」とかいう、勘違いした励ましの言葉をもらい、私はトイレから出た。汗と血の匂いが入り交じっていて、倒れてしまいそうだった。入りたくたってたぶん、湯船には近づけなさそうだった。

「ほらほら、ひとあびしてさっぱりしちゃいなよ。それよか、羽飛はどうなのかなあ、今日も美里のことなんだかさあ」

ほとんど聞いていなかったけれども、男子たちの泊る部屋を通り過ぎようとした時だった。第一目の旅館では、男女別に、一クラス一部屋と分けられていた。廊下の四つ角を曲がったとこ

ろに男子軍団の部屋が並んでいる。そこを通らないとお風呂場には行けない。見られたくない。タオルとポーチをしっかりと抱きしめた。

「いるかなあ、羽飛」

D組男子の部屋を覗き込もうとするこずえを、私は無理やり引きずった。

「やだってば。帰りにひとりで行ってよ」

「冗談だって。ほんっと美里、使用前と使用后、性格変わっちゃったねえ」

——なんだか、やらしいこと、言わないでよ！

立村くんとも顔を合わせたらなんて言えばいいんだろう。あの人も私がバスの中で酔って具合悪くしていたことは知っているはずだし、もしかしたら心配してくれたかもしれない。いつもだったら私が「ねえ、立村くん、いいかげん酔いやすい体質直したほうがいいよ！ ジェットコースター乗れないでしょ！」とはっばかけてあげるのに。こんな全身臭くて臭くてならない今の状態、近づいてほしくない。

ほしくないのに、よけいな時に近づいてくるのはどうしてなんだかわからない。がやがややってるD組男子部屋を通り過ぎたとたん、C組男子部屋が突然ぱかっと開いた。

「あららん、そこにおわすは、未来の藪医者、水口大先生ではないですか！」

いきなりこずえがすっときょうな声を上げた。あわてて私も水口くんの方を見る。ここ最近、ぐんぐん背が伸びてきて、へたしたら立村くんも抜かれるのではないかと噂されていて……これを立村くんの前で言うと、露骨に機嫌が悪くなるので言わないけれども……、しかもスケベな話に夢中だと聞いている。貴史も立村くんも、少々あきれ気味の水口くん最近の傾向だった。今時はやらないよ、スカートめくりなんて。さりげなく彰子ちゃんにかまそうとして、お尻でどんと突っつかれてからかわれているのはやっぱり、今までの「すい君」なんだけれども、妙に男っぽくなっている今日この頃だ。

「へへ、噂の清坂がきたぞお」

いつもだったらもっと甲高い声で「どこいくんだよお」となんも考えていない顔して尋ねてくるのに、今日のすい君はなんだか変なイントネーション使っている。声も、少し太くなっている。にやつきかたがなんだか、いやらしい。私も調子が元通りだったら元気いっぱいからかってあげるんだけど、そんな気分ではない。

「こずえ、いこ」

腕をひっぱり、すれ違おうとした。とたん、

「どう？ 初めての『しょちょう』の感覚は？」

——いま、すいくん、なんと言った？

言葉の意味がつかめなかった。つかみたくて立ち止まったことを、次の瞬間後悔した。

「やっぱ、痛い？ かゆい？ ぬるぬるしてる？」

——痛い、かゆい、ぬるぬる、してる。けど。

具体的に形容詞をなぜ使うんだろう、すい君は。おなかから下、言われた感覚が全部揃っていることに嘘をつけない。こずえがあっさりすいくんを捕まえ、思いっきりひとつぶった。

「ばっか。すいくん、楽しいエロネタは、いきなり女子にかますよりも、まずは男子に通用する

かどうか試してからにしようね」

「古川だって、いつも立村に『今朝はちゃんと立ったの?』とか聞いているよなあ」

「すいくんとは、スケベ話のキャリアが違うんだって、わかってるよねえ。何事も努力と根性よ。まずは男子たちにしっかりと『最近何回抜いているか』とかいう話を堂々とできるようになってから努力しな。ったく、すいくんってガキだねえ」

「僕……俺、ガキじゃないよ」

慌てて「僕」を「俺」一人称に直そうとするとところが、やっぱり子どもっぽい。

いつもだったら私も笑ってかわせるのに、笑えない。怖いこずえはおいといて、とばかりに今度は私にまたにやにや顔を向けてきた。

「C組で噂だよ。清坂、バスの中で『せいり』になったんだろ? だからメシも食わなかったんだろ? 今日初めてなったんだろ? 今度さ、赤飯炊いてもらうんだろ。な、な」

——聞き間違いじゃない。

確かに、すい君は「生理」と「初潮」、この単語を口にした。

私の想像している通りの意味だ。

たった今、おなかのしたのところどうようよしている、あれのことだ。

「保健体育で習ったけどさ、清坂」

こずえがすい君の後ろに回って両耳をひっぱられ「いいかげんにしないと、あとで男子風呂覗いて、すい君に毛が生えてるかどうか確認しちゃうぞ!」と制裁を加えている。私は答えることもできずにただ、タオルとポーチを抱いたまま突っ立っていた。「さ、D組男子部屋へ連行されたいか!」と冗談めかした調子でぐいぐいとすい君を前に引っ張っていく。D組男子部屋の戸を開けたこずえが、

「ひとり、勘違い野郎、おっ連れー!」

と叫び、無理やり部屋へ押し込んだ。廊下は私とこずえだけ、ほっとして腕を緩めようとし、戸が閉まる寸前、すい君の声がどかんと響いた。

「じゃあ、立村にも言ってやるよ、お祝いだよなあ!」

——立村くん。

——部屋にきつと、いる、よ、ね。

たぶん、D組の男子部屋、全員に聞こえているはずだと思う。

「ど、どうしたのよ、美里いきなり廊下を走らないっ!」

規律委員みたいなことをいきなり叫ぶこずえを振り切り、私は廊下を駆け抜けた。すっころびそうになり、ポーチが落ちた。また拾って風呂場へ走り込もうとした時、制服きたまんまの誰かさんとすれ違いそうになった。

「清坂氏、あの、大丈夫か?」

すい君の声は聞いていないはず。そう安心すればよかったのに。風呂あがりでもしっかり制服きている立村くんが、私の方をじっと見つめていた。いつものさりげない感じじゃない。後ろにはC組評議の更科くん、B組評議の難波くんが……はだけた浴衣姿だった……ふところに手を突

っ込んで拳骨をこしらえていた。

——いつもだったら。

いつもだったら、「あれ、立村くん、どうしたの？ 秘密の男子限定評議会？」と話し掛けること、できるのに。

だんだんおなかの右がちくちくしてきた。さっき取り替えたナプキンも当てかたがうまくいかなかったせいか、中でずれているのがわかり気持ち悪い。

「お、お風呂に入るんだ、じゃああした、ね」

言葉をとぎらせてしまう自分が悔しい。

「わかった、明日」

短く答える立村くんには私は無理やり笑顔をこしらえようとした。その努力をぶっこわしたのは、B組評議の難波くんだ。

「やっぱり、噂は本当だったか」

「噂？」

思わず問い返してしまった自分の無神経さに、また後で後悔するはめになってしまうなんて思ってた。立村くんが目をひんむくようにして難波くんを舌打ちをし、隣の更科くんをにらむようにして、また私に向かいわざとらしい優しい声で、「あの、とにかく、明日、古川さんのこともあるし、今日はおやすみ。ほんとに、ほんとに、本当になんでもないから」

動けなかった。私とすれ違うまでは普通の顔を一生懸命しようとしていたくせに、私とすれ違ったとたん、すごい勢いで走り出した男子三人を見送るしかなかった。更科くんが振り返り、意味ありげにやっと笑ったところが、なんとなくさっきのすい君に似ていて、また全身あっつくなってしまった。絶対、今の私の匂い、かいで臭いと思っただろう。生魚の匂いって感じだっただろう。涙が出そうだった。

——立村くん、知られてるんだ。

——どうしよう。

黙っているうちに、何か目の中がごろごろしてきた。

「美里、さっき立村たちとなに話してたのさ」

わざとらしい明るい声で、追いかけてきたこずえ。肩を思いっきり叩いた。何度も、何度も、ゆさぶるように。

「いったあ、いきなりどうしたのよお」

「こずえ、あんたがばらしたの？」

すぐに「ちえっ」といいたい顔をしたから、有罪だと判断。咽もとが膨らんできて声が出なくなりそうだった。

「私、あれだけ、言わないで、って、言ったでしょ！」

「言っていないよまさか、男子になんてさ。私が言ったのは保健の都築先生だけだって！ ほら、あんたのナプキンもらうために」

「先生に言ったわけ？」

あれだけ、絶対に、言わないでって頼んだのに、あっさり約束破るこずえなんて信じられない。私はさらにタオルを思いっきり押し付けるようにしてやった。動かないのはやっぱり罪を認めている印かもしれない。

「だって、さ。他の女子たちに頼むことも考えたけど、ばれたらまずいっし。先生ひとりに頼めば大丈夫かなって思っただけだって」

「けど、ばらしたなんて最低！」

「保健委員の彰子ちゃんだって、あんたがお風呂に入ることできるようになって、ちゃんといろいろしてくれたんだよ。なにそんな焦ってるのよ美里。さっき言えばよかったけど、言いそびれちゃって、ごめんごめん」

言い返さないであやまるのは、やはり自覚があるんだ。

「だって、なんで男子が知ってるのよ！　だって、さっき、立村くんが」

「ああ、いたよねえ、男子評議三人でつるんでたねえ」

立村くんの眼が明らかに、「噂」の内容を知っているという感じだった。永年……二年だけ……の付き合い、やっぱり、知っていることを私に知られたくないんだってことくらい、わかる。

「『噂』になってるんだって！　どうして、そんな早く、そんなことわかるの！」

「あの馬鹿、そんなこと口走ったわけ？」

こずえに聞かれても返事できない。首を振りながらしゃべりつづけるだけ。

「だって、すい君、さっき『初潮』だとか『生理』だとか言ったよ。ほんとに言ったよ。それに、もう、D組の部屋にいるってことは、もうばらされてるかもしれないんだよ！」

「すい君は、単なるスケベ話が面白くてなんないだけ。ちびが大人になっただけ、祝ってやりなあって、ほら美里、早くお風呂入ってきなよ」

「なんでばれてるのよ！」

——痛い？　かゆい？　ぬるぬるしてる？

また、すい君の口走った感覚が蘇ってきて、思わずおへそのあたりを押えてしまった。しゃがみこみたかった。ポーチとタオルを両手で抱きしめると少しだけ楽になる。こずえが心配げに「どうしたのよ、美里、本当におなか、痛い？　入れないくらい、痛い？」と声をかけてくれるけれども、私は首を振ることしかできなかった。とうとう声すら出なくなってしまった。

「美里、ね、ごめん、私ももっと考えればよかった、ね、美里」

——こずえなんて、大嫌い。

——なんで今日に限ってこんなことになっちゃうんだろう。

——立村くん、なんで、なんでなの？　なんで、知ってるのよ！

頭の中の混乱を押さえつけることができない。こんな感覚初めてだ。いつもの私じゃない。あふれてしまいそうなのはおなかの中の汚い血かもしれない。そんな感じがして、ちょっと膨れ気味のおなかをさすってみた。

——もういや、こんなの私じゃない。近寄らないでよ。なんでこんなにくさいんだろう。もういや。なんで立村くんとすれちがっちゃったんだろう。絶対この匂い、かがれてるよ。もう、帰りたい！

声が裏返りそうだった。つま先だけ立てるようにして私はお尻つけて床にしゃがみこんでいた。はいていたスリッパがべととして気持ち悪かった。一緒にしゃがみこんでくれたこずえが一生懸命さすってくれているのを感じた。

「美里、ほんと、どうしちゃったのよ。ほらほら、泣かないでよ。早くお風呂に入りなっ！もう、赤ちゃん戻りしている暇ないんだから。もう、ほらほら」

ちょうど顔を埋めるのにちょうどいいタオルを持ってきていた。顔をうつぶせるようにしてごしごし拭きながら、私はおんなじことを考え、ただ泣いた。

——立村くに知られちゃったなんて、もう、いや。

とにかくこういう場合、パニック起こしている当人をなだめるより、ちゃんとなだめてくれる人を探すこと。そっちの方がベストだと私は思っている。だって美里の泣き喚き方といったら半端じゃなかったんだから。ほんっと、赤ちゃん状態。効く耳なんてどこに置いてきたんだか。しかも理由が「生理」だなんて簡単に口に出せない内容ときたら、いくら美里の大親友羽飛貴史とか、いとしのダーリン立村上総なんか、当然うちの担任菱本先生になんて声かけられやしない。だからといって女子の友だちに応援たのもうったって、美里が今までしてきたことから考えると、そう簡単に味方になってくれるとは思えないし。いやいや、せっかくみんな、部屋の中で楽しくエッチな話に盛り上がっているはずなんだから、邪魔すること自体だめだめだ。

——女子に言わないでって言ったってねえ。

——無理よ、無理。ほんっとに困った子なんだから！

「じゃあちょっとここで大人しくしてなよ。風呂、入らないの？」

首を振ってまたしゃくりあげつづける美里。このまま誰かに見られたらもう、修学旅行始まって以来の恥さらしになってしまう。さすがに友だちとしてそれはかわいそう。

私は美里を軽く押し返すようにして、さっき通った廊下へと戻った。使える人っていったら、やっぱり、天下の保健の先生、これしかない。

大人の使えるところを利用しなくっちゃ、子どもとしてもったいない。

「せんせー！」

もちろん、呼びかけたのは都築先生だけのつもりだった。お姉ちゃんタイプのあの先生、ナプキンをもらいにいった時もそうだけど話がわかる。元気な女子たちには人気があるんだけどな。美里も都築先生だったらそんなにいやがったりしないんじゃないかな。もし殿池先生しかいなかったら万事休すなんだけれども。C組アマゾネス軍団の担任といえ、そうとう迫力ある先生かと思われがちなんだけどそんなことない。なんかぶりっこしたまま歳だけくってしまったっていう、勘違いかわいこちゃんおばさんだ。そんな人に付きまといわれたら美里だってうっとおしいだろう。

「どうしたの？」

戸を開けても声がしないので、しかたなく部屋まで膝をついた。やっと振り向いてくれたのは、都築先生だった。奥の方でなぜか髪の毛を丁寧にお下げに編んでいるのが殿池先生。だからいい歳なんだし、古きよき時代の女学生ごっこするのはやめなっていきたい。同じこと考えていたかどうか知らないけれど、都築先生は「なんかねえ」とちらっと見ながら私の方へとにじり寄ってきてくれた。

「ちょっと、先生来てほしいんだけど、だめ？」

「え、ええ？」

いきなり困った顔をされてしまった。どうやらタイミングが悪かったらしい。どうしたんだ

ろう。けど切り出さずにはいられないので早口でささやいた。「あの、実は、清坂さんがね、ちょっとお風呂場のとこで泣いちゃってて、手に負えないんだけど。さっき男子たちにエッチなこと言われてからかわれて、それと『あれ』がごっちゃになっちゃって、もうパニック状態なんです。だから」

あれれ、都築先生妙にうんざりって顔をしている。気持ちはどっか別のところって感じだ。「泣いちゃっててって、でもお風呂に入れば少しは落ち着くんじゃない？ 少し一人にしてあげれば大丈夫よ」

私は両手を顔に当てて、美里みたいに泣きじゃくるまねをしてみせた。すぐに外した。「見てればわかるって、とにかくすごいでしょ」

「あらら」

「いくらなんでも『あれ』のことだから菱本先生にも言いたくないし、もし言ったら美里に縁切られるし、頼みの綱ってことでお願いにきたのになあ」

私が都築先生だったら、これくらい頼み込めば素直に頷いてくれるだろう。一緒に来てくれるだろう。そう思っていた。都築先生は立ち上がり、一度二度足をもぞもぞさせた後、「ごめんね、これからどうしても、用事があるのよ。すぐに戻るからまず、お風呂に一緒に入れてあげて、少し落ち着かせたほうがいいと思うのよ」

——どうしたんだか、先生。

妙に都築先生は頑なだった。早く解放してよ、と言わんばかりだった。どうしたんだらうこんなにあせって。さては誰かと密会するんだらうか。一瞬妄想「青 潟大学附属中学教師同士の愛と憎しみ」劇場を繰り広げた際に、都築先生はスリッパをさっさと履いて、言い残し去っていった。なんとなくだけど、おっぱいをちょっと抱くような感じで手を置いていたのは私がスケベなせいだけかな。

「殿池先生がいるから、先生に頼めばいいわ。こういう時一番頼れる人だしね」

——何言ってるのよ！ 教師でしょうがあなたってば。

思わずかっとなりそうだった。言い返せないのが悔しかった。年齢からしたらやっぱり、あそこの万年ぶりっこおばさんの方に軍配が上がるに違いないもの。筋は通っている。けどだ。

——やっぱり私がくっついていった方がいいのかなあ。大人って使えない時はほんと使えないよね。

「どうしたの？ 古川さん」

迷っていた私が馬鹿だった。

全部髪を太いお下げ編みにこしらえた、殿池先生が、だいぶたれた目とほっぺたを、しゃがみこんで私に近づけてきた。化粧つけないから本来の年齢よりはるかにふけて見える、なんてこと言えない。

——美里、ごめん、最悪のパターンよね。

美里の立場からしたら、全身が血と汗の匂いでいっぱい、下着は汚い状態の自分を他人に見られたくないって気持ちでわけわかんなくなっているんだらう。私以外の人には誰にも知られたく

ないって神経質すぎるくらい神経質にわめくのも、女子同士だものわからなくはない。

でも現実問題、私ひとりでなんとかできるものでもないような気がしていた。結構私だって、ひとりでいろいろと片付けることができるタイプだ。ちゃっちゃか自分の荷物、弟の荷物、父さん母さんの荷物、全部まとめてしまい「さ、あとは寝るだけ」とひっくりかえる、そういう感じが私だろうと思う。けど、やっぱり私の手に余るなあってことは世の中たくさんあるわけで、そういう時はやっぱり他の子や大人に頼み込んで手伝ってもらう、そういうのも必要じゃないかって気がしている。そっちの方がうまくいって、相手がじゃましなくって、結末がハッピーエンドだったら文句なしってとこだ。今回のことも、なんとなくそうじゃないかなって気がしていた。

私が初めて「あれ」になった時は小学校四年の昼休み、短パンで鬼ごっこしていたら、男子に「あ、古川尻染みついてるぞ」とからかわれ、即、保健室へ。まだ四年だと性教育なんてやってないし、そりゃあ驚いた。とりあえず全部、保健室の先生にお世話になり、生理用のパンツに履き替えて家に帰った。ただ、私の場合周りの男子たちがぼんやりだったのと、女子たちもまだその経験がなかったこととかもあいまって、次の日には自慢げに「私、とうとう妊娠できる体になったのよ！ すごいだろー」と言い放ってしまった。周りからは恥ずかしいという声はなく、ただ純粋に「すごー、なにそれ」という質問の嵐だった。

もともと五、六年に上がると生理が始まる子たちもかなり増え、男子たちも色気づいてきているいろいろからかってきたり……今のすい君みたいに……するので、私にもそれなりの羞恥心ってやつが芽生えてきた。今じゃあさすがに、クラスの中で「私さあ、アレでさあ、痛くってさあ」なんて言えない。羽飛がない時ならかまわないけど、やっぱり、いると、ためらう。私も恋する乙女なんだから。

「あ、あの」

この先生いったい何考えているんだろう。都築先生は素直にジーンズ姿だっていうのに、殿池先生の格好ときたら、花柄の水色ワンピースだ。夜に着るもんじゃないよねって感じだった。

「清坂さんが、どうかしたの？」

笑顔は嘘っぽくないのだけれども、なんか押し付けがましさを感じるのは私だけ？

「いえ、あの、その」

どもるしかない。そういえばC組評議のゆいちゃんが言っていた。

——殿池先生、男子たちを応援するようなことを言っているまにか女子の目的を通してしまおうんだ。すごいよねえ。

確かに。C組は女子の方が圧倒的に力を持っているけれども、ぼおとしたタイムトリップタイプの担任が心配で、周りが盛り上げなくちゃと焦っている、そんな感じなんじゃないだろうか。ねちっこくも笑顔で、さらに詰めてくる。

「さっき、お風呂場にいるって言ってたわよね」

「はい」

全部聞かれていたのだろうか。信じられない、地獄耳。

「どこにいるのかしら」

——かしら、なんてお嬢さまぶりっこしているのが気持ち悪いって！

おぞけが立つけれどもしかたない。私は美里に心の中で謝っておいた後、肩を思いっきり落として廊下へ出た。これが美里への「ごめんなさい」のつもりなんだけど。にこやかな殿池先生はわざわざ、自分用の真っ赤な花柄布製スリッパを取り出し、しっかり履いてお風呂場へ先頭切っで走り出した。ああ、たぶん修学旅行中美里、口利いてくれないな。

廊下で何人かの女子が美里の様子を見ていたらしくひそひそ声で何か言っていた。さすがに美里も人前ではしゃくりあげるのをこらえていたらしく、タオルとポーチを抱きしめたまま風呂場の前で立ち尽くしていた。さっさとお風呂に入ってれてさっき言ったのに言うこと聞かないんだから、困ったもの。殿池先生は五メートルくらい離れたところでいったん止まった。私が追いつくのを待っていたみたいだった。

「お風呂、まだみたいね。そうよね」

独り言みたいだったんで、私は頷くだけにしておいた。

「古川さん、悪いんだけど、清坂さん用の浴衣、手付かずのがあれば持ってきてもらえないかしら」

また、「かしら」だ。もぞもぞして気持ち悪い。

「それと、もうひとつ、お願いなんだけど」

なに頼むつもりなんだろう。私に向ける笑顔が妙に人懐っこすぎて、重たいんだけど。

「風呂敷でもなんでもいいの。清坂さんの着替え包むものがあれば、それも持ってきてほしいの。あとは大丈夫よ」

——なにが大丈夫なんだか。

つくづく、恨みたくなる。どこぞの誰かとデートに出かけたであろう……この辺は妄想だけど、そういう理由でもないと納得できない……都築先生を。しかたなく言われた通りにするため背を向けた私は、後ろで声をかけている殿池先生の様子をちょこっとだけうかがった。

「清坂さん、大丈夫よ。お風呂、まだね。じゃあ、こちらの部屋へいらっしやい」

背中をさするようにして、殿池先生が美里を片腕で抱くようにして誘うのが見える。

——美里ももっとしゃんとしなよ！

言いたくなる。振り返った私のにらみつける目を見て、またしゃくりあげた後、うなだれて小股に歩いていった。ずっとさすり続けている殿池先生の手、気持ち悪くないんだろうか。普段の美里だったら言うだろうにな。「あの先生、なんか歳に合わないぶりっ子って感じで、気持ち悪いよね」と。そう言わないで素直になっているってのが、どうも私には気に食わない。

先生の言うことは絶対なんだからしかたない。私がD組女子部屋に戻ると、十三人の女子連中が私を興味津々、といった顔で出迎えた。そりゃそうだろう。美里が部屋を出て行くところからして、疑惑ありげだったんだから。みな詳しい事情、そりゃあ聞きたいでしょう。私だって状況が状況でなければ素直に話すけれども、そういうわけ、いかない。

「あのさ、美里どうしたの？」

この言葉は仲良しなグループの子。この子には後で話してもいい。

「清坂さん、さっきおなかおさえてたよねえ。どうしたの」

こちらはちょっと美里と反りの合わないタイプのグループ。この辺には内緒にしとこう。

「さっき男子たちが話してたの聞いたんだけどさ、清坂さん風呂場の前で泣いてたってほんと？」

こちら美里と一回どんぱちやったことのある子だ。やめておこう。

もし別グループにしっかり女子たちが住み分けされて、それで固まってるのだったら「実はね、美里あれになっちゃってちっとばかり、情緒不安定なのよねえ」と話すこともできるだろうが、今はなぜか全員、布団の上でジャージ姿、膝を抱えている。きっと美里のことでネタ、盛り上がってたんだろう。

けど、言えないよ、本当のことなんて。

美里の親友として、この辺の仁義は通す。

「いや、ちょっとね、具合悪くなっちゃったみたいなんだよね。美里。だからちょっと、別の部屋で休んでるんだ。なんでもないってば」

そう言いつつも、二十六の瞳にしっかり見つめられている私の立場。しっかり風呂敷か紙袋を探し、美里の布団からのりの効いた浴衣を引っ張り出し、ついでに赤い帯も持っていく。これって、何かがあったんだとしか思えないだろう。そうだろうそうだろう。

「こずえ、どうしたの？ 美里、別の部屋ってどこ？ 私も手伝おうか？」

もうひとり、こちらは美里応援派。唯一事情を知る彰子ちゃんがその子の肩に手を置いて、いきなりトランプを取り出した。私には笑顔だけ。たぶん南雲がなめるように愛しちゃっている天然の彰子ちゃんスマイルを振りまいて、

「美里ちゃんにはあとで様子、私見てくるから。トランプやろうよ！ 負けた人は一曲歌いましょ！」

と、無理やり真剣勝負のトランプ大会に引きずり込んでしまった。女子たちは基本として、音痴が多いから、負けたくないだろうなと思う。関係ないけれど二年時のクラス対抗合唱大会でさんざん馬鹿にされたのは、うちのクラスだ。まったくもってもう。

——彰子ちゃん、サンクス。

あとで美里にも謝らせないとね！ 「ぶたのしっぽ」用にぐるっとトランプを丸く広げた彰子ちゃんへ両手を合わせ、私は必要なものを全部持ち、行くべき場所へ行くことにした。ほんと、女子同士のお付き合いは面倒極まりない。

廊下を通り、たぶん美里が連れ込まれているであろう部屋へと向かった。

途中、やっぱりというかなんというか、羽飛がD組男子部屋の入り口で待ち構えていたのにはちょっとあきれたけれども。私の顔を見るなり、軽く手を挙げて呼び寄せるしぐさをした。私のことではそんなこと、全然しないくせに。美里と鈴蘭優のことだけは別みたいだ。

「なによ」

もう向こうは私の気持ちを重々承知で、その上で振ってくれちゃっているんだから、隠し立て

することはない。

「美里のことでしょうが」

羽飛は浴衣姿だった。よくわからないけれど男子たちは大抵、ジャージで寝るって聞いていたんだけどな。背が気持ちいいくらい伸びていて、やっぱり惚れてしまう。三年になってからいかにもスポーツマンっぽい雰囲気が出てきて、うーん、帰宅部なのもったいないって思ってしまう今日この頃だ。ほんと、バスケット部に入ればもててなんだろうけどな。「なんか騒ぎだつてな」

「立村から聞いたの？」

彼女が恥ずかしさで死にそうになってるのに彼氏の風上にも置けない奴だ。成敗してくれる、と思ったらあっさり否定してくれた。

「違う。全クラスの男子連中が知ってるってな」

「うそお」

口が埴輪になってしまいそうだった。私の持っている美里用の着替え浴衣をちらっと見て、「あいつ、泣いてるのか」

「どうせ知っているんだったら言うことないんじゃないの。あんたが心配なのはよくわかるけど、この辺は女子でないと片付かないことだから、そっとしておいてやんな」

「それならそれでいいけどなあ、古川、ただな」

あたりをちろちろ見渡し、くそ真面目な顔で私にかがみこんだ。これ、私だけのためにだったら「ハッピー！」って踊っちゃうのに。ああ、美里でなくちゃ、こういう気持ちにさせられないんだねきっと。一瞬、こいつの大好きなアイドル「鈴蘭優」に魔女っ子バトンで変身できたらなって、叶わぬことを考えちゃった。

「『生理』ってそんなに泣き喚きたくなるほど、痛いのかよ」

「はあ？」

羽飛じゃなかったら、すい君と同じように耳を引っ張り上げて、「あんた時と場合を考えなよ、こういう話はね、ギャグと一緒にするもんなんだって。こういうしゃれにならない時に聞くと一気に暗くなるんだわよ」と、最後股間に蹴り一発決めて終わるのだけれども、そういうわけには行かなさそうだ。私が、できない。

「あいつが泣くなんて、よっぽどのことだぞ」

——やっぱり、美里のことだけは、心配してるんだ。

ちろっと、心のどこかが痒くなった。

いつも見ない、聞かない、知らない振りして羽飛に話し掛けてきたけれども、きちんと話をしてくれたりするのは美里と立村がらみのことばかりだった。私のこと、個人的話は全然、興味持ってくれない。

「あんただって性教育男子の部ちゃんとやったでしょうが」

「美里が全男子のネタになるようなことだとは聞いてねえぞ！」

——やっぱり、あんたも美里なんだ。

すっごく美里が私にとっていい子だから、黙って聞いていられるけれども、もし羽飛に熱を上

げている他の女子だったら決していい気はしないと思う。羽飛が言うには、美里こそ自分にとって一番の仲良しだし、男子の親友……のようには見えないけど……の立村の彼女だし、女子の仲でも特別な位置にあることは知っている。「恋愛感情」とは別なんだっていつも何かの降りには話している。けど、ごみみたいにそんな分別できるものなのかな？ 恋愛感情って。私には、みな同じにしか見えない。美里がなんとなく、他の女子たちから一線引かれた態度をたまに取られる理由の一つには、そこんところもあると思うんだ。

「まあねえ、確かにしんどいことはしんどいよね」

羽飛にエッチねたをかますのは抵抗があるけれど、しかたない。

「てかね、おなかが痛いからじゃないんだわ。美里がパニックってるのは」

「じゃあなんだ？」

「私もわかんないけどね」

しかたない。さらに下ネタ好きの古川さんとして、羽飛に聞いてやろう。

「あんた、初めての精通っていつ？」

「立村に聞くことと同じこと、聞くよなお前」

——お前、だって。

なんとなくどきんとする。

立村もそうだけど、羽飛も答えない。男子も言いたくないんだろうな、と思う。

「それってさ、私も青大附中の性教育しか受けてないけどさ、きれいなもんなの？」

「きれいって古川もずいぶんすげえこと聞くよな」

「きれいかきたないか、どっちかって聞いているのよ」

すい君だったらあっさり「パンツ夜中でも履き替えなくちゃいけないからめんどうなんだあ」と言うだろう。実際そう言っていたのを聞いたことがある。羽飛は思いっきり顔をしかめ、片手を腰にやった。背中を向け、また私に向いた。

「きれい、じゃあねえよなあ」

「でしょが。美里も同じなのよ」

私はさらに畳み掛けた。

「ただおなか痛いんだったら胃薬飲めばいいのよ。ただね、生理ってのはなんてっか、あんたらの精通とおんなじく、きれいなもんじゃあないわけよ。人に見せられるもんじゃあないわけよ。羽飛さあ、あんた、夢精して白いねばねばマヨネーズがくっついているパンツ、人に見せられる？」

あらら、私もすごいこと言ってる。口をあけかけている羽飛には悪いけど、私だってさっきの美里の態度には少なからず傷つけられているんだから。少しは責任取りなさいよ。

「古川、お前さあ」

「まあ男子だったら昼間にそういうことってめったにないだろうから、あまり気にしないかもしれないけど、女子の場合は大変なのよ。授業中も、バスの中も、お風呂の中も、みんな汚いものを見なくちゃいけないわけなんだもん。基本的に女子は汚いもの嫌いだからね。美里だってそんなもの見たらそりゃあパニくるわよ」

理解したのかどうか知らないけれど、羽飛は首を二回、三回と回した後、私を見た。

「すげえわかりやすい解説、サンキュ」

ほんとにわかったんだろうか。私は黙って羽飛が部屋に入っていくのを見届けた。

まだ都築先生は帰ってきていないみたいだった。やっぱり誰かとデートなんだろうか。

「ありがとう、古川さん」

美里はいなかった。どうやらシャワーを浴びているらしい。小部屋の方で水音がかなりしていた。私が持ってきた手提げ紙袋を手渡すと、殿池先生はそそくさと美里の着ていたジャージ一式を袋に詰めた。

「あ、たぶんナプキンは持っていると思います」

「あらよかった。それでね古川さん。今夜、清坂さんはこの部屋でひとりで寝たほうがいいんじゃないかと思うのよ。そのあたり、菱本先生にも話しておくから」

あちゃあ、それはまずいよ。思わず口を開きかけた。

「少し彼女も、動揺が激しいみたいだから」

それは私だってわかってるって。この先生、いったい何考えているんだろう。修学旅行、そりゃあいろいろ美里が大変なことになっているのはわかっているけれども、友だち同士で夜中語り合うことを楽しみにしてるかなんて全然気付いてないんだろうな、この先生。

「あのけど、都築先生だっていると思うし」

「ああ、都築先生はね、別部屋で泊ることになっているの」

ええ？ つまりなにか？ 都築先生ってもしかして、もう殿池先生とバトルやらかして部屋を替わったとかそういうわけなんだろうか？

「だから、私ひとりだし、清坂さんひとりくらいだったら大丈夫なのよ」

殿池先生はにこやかに微笑んだ。この顔がまだ私たちと同年代だったら、可愛いとも思われるんだろうけれども、四十過ぎていると思われる身体つきと骨ばった腕、たれた頬。これは気持ち悪い以外の何者でもないだろうな。かわいそうな美里。勝ち目、ないね。

紙袋に詰めた衣類を先生は素早く口閉めをした。

「ここの旅館ね、コインランドリーがあるから、すぐに洗濯できるのよ。しかも自動乾燥機までついているんだもの。便利よね」

「洗濯するんですか」

てっきりそのまんま持って帰るんだと思っていた。先生は首を振った。

「やはり匂いが、どうしても気になってしまうでしょう。大人だったら香水とかオーデオロンを振り掛けるという手もあるけれど、さすがにそれは校則違反でしょ」

まあ、それはそうだと思う。

「下着もジャージも全部洗濯して、さっぱりしたらだいぶ気分も変わるわよ。そうだ、せっかくだったら古川さんも一緒に洗ってあげようか？」

遠慮させていただきます。楽しそうに世話焼きに勤める殿池先生を観察するにとどめた。またシャワーのある小部屋へ向かい、「清坂さん、下着も一緒に持っていくから。大丈夫。今夜中には全部乾くからね。それと着替えはこちらの新しいもの使ってね。それと、ナプキンは二枚、

つないでとめたほうがいいわよ。お布団はひいておくからね」

——この人、やっぱり変だよね。

私も相当、世話焼き女だと思うけれども、殿池先生の手をしてくれていることって美里の喜ぶことなのかどうか、わからない。

「じゃあ、せっかくだし、古川さんも清坂さんが上がったら、ハーブティーを飲んでいきなさいね。飲んだことある？」

ありませんって。

「ちゃんと専用の急須とお茶碗も持ってきたのよ。気を取り入れるためにはガラスとかプラスチックよりも、ちゃんとした陶器の方がいいのよ。風水ではそうみたいなのよ」

——風水って、この先生、いったい何考えているんだか。

私がぼかんと口を開けている中、殿池先生は嬉々としてティーパックを取り出した。

美里が髪の毛に櫛を太く通した状態でシャワーの個室から出てきた。私の持ってきた浴衣に着替え、赤地に白い刺繍をほどこした帯を締め、殿池先生に向かい一礼した。

「ごめんなさい、ありがとうございます」

「古川さんに、あやまってあげてね」

私がむっとしている顔しているのに気付いたんだろう。いきなりうるうる目になっちゃった。

「こずえ、ごめんね。私」

「いっていいって。それよかさ、殿池先生がお茶出してくれるって」

ほんとはもう一言二言文句言ってやりたいけれど、また泣かれたら手におえないもんね。

ハーブティーというのは私も飲んだことがなかった。名前だけは聞いたことがある。ピーターラビットのお母さんが、おなかを壊したピーターラビットに作ってあげるおかゆの原料ということくらいは知っている。美里なら詳しそうだ。

「あんた、ハーブティーって知ってる？」

「うん」

言葉少なだった。

「今夜、ここに泊ってくの。ま、それのほうがいいかもね」

少し考えて私もそう思えるようになった。だって、たぶん女子部屋の中でも美里があれだってことは知れ渡っているはずだもの。どうせ明日になったら男子にもばれればだだってことが判明するんだし仕方ないといえればそれまでだけ。なにせ羽飛にも聞かれたんだから。「もう、戻れないよね」

「まあいいじゃん。明日は明日の風が吹くって！」

先生がお上品に淹れてくれたハーブティーを二人一緒に、すすった。苦い。お茶っていうよりも、これって薬だよ。漢方薬って奴だろうか。

「先生これ、毒入ってないよねえ」

「やっぱり古川さんには口に合わなかった？」

にっこりしたまま殿池先生はさらに、ビスケットを一箱広げてくれた。

「でもね、カモミールのハーブティーはね、神経を落ち着かせる作用を持つのよ。清坂さんも、これを熱いうちに少しずつ飲んでいくと、だんだん気持ちが穏やかになってくるのがわかるはずよ。今夜は、早く休んで、また明日元気におなりなさいね」

また汗をかきそうだ。隣でうなだれている美里を見ると、なんだか殿池先生の魔法にかけられたような顔をして、神妙に口に運んでいる。

「ごめんなさい、私、どうかしてました」

「初めてだもの、びっくりしてしまうわよね。でも、早いうちにこういう時、どうすればいいかを覚えておけば、明日から上手にできるでしょ。結果オーライ、万事よしよ」

——ほんとなんだらうか。

無理やり苦いお茶を飲み干した後、私はD組の部屋へ戻ることにした。

「美里、じゃあ明日呼びに来るからね」

「ありがとう、ごめんね」

しおらしい美里は伏せ目勝ちに、お礼を言ってくれた。この調子だと明日は大丈夫だろう。

部屋に戻った。女子部屋では「ぶたのしっぽ」が2グループに分かれて行われている様子だった。辛気臭い美里たちの部屋空気を忘れたいので、彰子ちゃんグループに混ぜてもらおうと座り込んだ瞬間、別グループの女子のささやきが耳に入りぞっとした。タイミング、悪すぎるって、美里。

「なんかさあ、おねしょが直らない人がまだいるらしいよ」

髪を指先で少しずつ丸め、ピンで上手に留めながら一人が言う。相槌打つのはもう一人。悪いけど美里とは仲良くない子だから私は無視を通す。

「ええ？ 中学生にもなってまだ布団に地図なんて描いてるわけ？」

「だから、都築先生と一緒に部屋に泊ることにするんだって。適当に理由つけて。そいで真夜中に起こしてもらってトイレにいった、して、また寝るんだってさ」

「信じられないよね。けど、どこのクラスの子かなあ」

「知らないけど、あとで先生たちの部屋に行けばわかるんじゃない？ たぶん、女子だよ」「うわあ、恥ずかしすぎるう！」

その噂は前々から聞いていた。小学校の修学旅行でもおねしょが直らない男子がいた。勇気ある告白を、現在色気づき真っ最中のすい君もしていたじゃないか。去年の宿泊研修中、しっかり菱本先生と立村に起こしてもらった約束してたって。

けど、今、あの部屋で一緒に寝ることになっているのは美里なんだけどな。

殿池先生の様子だと、美里以外あの部屋で寝る人はいそうにない。都築先生も別室に行ったということらしいから、噂の彼女はきっと、そっちで泊るんだらう。女子合わせて六十人いるかないかなんだから、明日になったら一発でわかる。

——けどなあ、美里、誤解されてもしょうがないシュチュエーションだよなあ。

この部屋には戻ってこないだらう。今夜のそこは。そうなったら、美里とにらみ合いしている

D組女子一部グループは今の話を美里に当てはめて考えるかもしれない。本当のことをちゃんと話して誤解を解いておけば別にかまわないんだろうけれど、「美里がさあ、生理になっちゃってパニックって泣いてひどくって、殿池先生のところでお守りしてもらおう予定なんだ」なんて言ったら半殺しにされちゃうだろう。死んでも今の美里は「生理」だなんて二文字を口には出せない。

—— 頭、痛い。どこまで誤解生じるんだか。だからあっさり「生理になっちゃったの」って告白すればよかったんだよ！ まったく、手間の掛かる子なんだから！ 美里ってば！

奴が部屋に戻ってきたのを見た段階で、火山噴火警報が俺の中でちかちかしていた。D組男子部屋の連中がみな、美里のことでやらしく盛り上がっている中、立村は背を向けたまま浴衣に着替えた。いきなりどこから持ち出したのか、いや持ってきたんだかわからんものを床に軽く突きたたてた。一応立村の隣は俺が寝ることになっていたんで、少々びびったのを認めないわけにはいかない。もとい紫色の組紐を握り手のところに施した、おもちゃのちゃちな小刀だった。木製の懐刀、よく悪代官に手籠めにされそうになった女子殿が、「近づいたら死にますわよ」とばかりに自分の咽下へつきたてる、あれだ。そういえば旅行先研究で習ったっけ。ここの地域は木材が有名で、木製の民芸品が有名だとか。長い木刀を買っていったある男子が、しっかり菱本先生に取り上げられ「修学旅行が終わるまで預かってくぞ！」と怒られたのを俺は見ている。となるとたぶん、売店で買った今、手に入れたのかな。

「いいか、今から俺に話し掛ける奴は」

立村が切れたら怖い、とは俺も前から知っていたけれど、声が震えそうなくらい激している、というのは初めてかもしれない。もちろん奴の性格根っこは大人しくそ真面目野郎だし、それを崩すことはない。けど、なんていうかな。水の入った風船を限界まで膨らまして、ちょっとでもつついたら水浸しになって大騒動、って感じのエキサイト状況だった。腹の中であいつ爆発させるからな、何もかも。

「相手かまわず、これでぶん殴るからな」

——ぶん殴る、ときたかよ。

突き立てたまな板程度の木製小刀……しつこいようだが、絶対おもちゃだ。しかし殴られたら確実に痛い……を立村は枕の脇に、おっそろしく静かに置き直した。さっきまで水口の奴が、「なあ、立村ってさあ、清坂があれだって知ってるのかあ？」とか「あれだったら、妊娠しないからチャンスだろ、狙ってるだろ、避妊なしで」とか、頭痛くなるくらいエロネタを叫んでいたのだが、さすがに退いたらしい。みな、素直に黙りこくった。

襟元をкаっちり締め付け、帯も俺たちよりはかなりきつく結んでいるみたいだった。修学旅行中は絶対ジャージを着たくないというのが、立村なりの反抗だとか。よくわからん。でもまあ、今夜は暑いしジャージよりは浴衣の方が気持ちよく寝れそうだから、俺もしっかり浴衣のお付き合いをさせていただいたけどな。D組男子一同の総合意志で、「なんでいきなりお前怒ってるの？立村」ってものが浮かび上がっていたのは俺なりにも感じていたんで、

「あ、あのさ、立村」

声をかけてみようとした。瞬時、

「黙れ」

ときたもんだ。俺もさすがにびびった。にらむ目つきが尋常じゃない。漫画じゃないけど炎が宿っているようだ。目に力が入っている。

「今、お前らが俺に何を聞きたいのか、言いたいのかは十分承知している。夜、何を俺に聞きたいかとかそんなこともな。けど、言っとくけど、そのことで俺は一切、返事をするつもりなしだ

。話す気もない。言うなら勝手に言ってる。だがな」 片膝を布団の中にすべらせ、もう片方の膝を立てた。小刀をもっと深く、立村は握り直すしぐさをした。牽制って奴だ。

「そのことでもし、クラスの連中が女子に対して変なこと言ったところ見つけたら、俺は本気で『弾劾裁判』開くからな。覚悟しとけ」

——立村、お前どうしちゃったんだ？

——まさかやばい薬とか飲んでねえよなあ。

ひそひそ声については一切釈明せず、立村は俺たちから背を向けた。横たわり、ご丁寧にも小刀をしっかりと胸に抱きしめ、一切動かないまま眠れる物体となった。

普段だったら、「おい、立村、お前何様のつもりなんだ？」と一発のすのがお約束なんだろう。いくらクラス評議委員で、しかも評議委員長様のお言葉。反発したっておかしくない。けど、なんか部屋の連中は顔をそれぞれ見合わせた後、しずしずと立村から離れた場所にグループを作って、ひそひそ話をしはじめた。女子っぽい雰囲気だがそれもまあ、仕方ないだろう。気まずい雰囲気を何とか取り持とうとするのが立村なんだが、今日は俺が担当になっちまったらしい。しかたない、言うしかない。

「まあしゃあねえだろ。立村も明日になったら少しは機嫌直すだろ？ じゃ、俺たちだけでオールナイトフィーバーしようぜ。おやすみなさいましてな」

しかたないんで、青大附中D組影のリーダー……と人は言う……の俺が間を取り持つことになった。眠れる物体小刀付きが一瞬、あお向けになりぱっちり目を開いた。俺と目と目、見詰め合ってしまった。話し掛けても絶対返事しない、というのは約束どおりだったけれども、視線で柔らかいものがすうっと飛んできた。「感謝！」って返事っぽかった。

立村とは三年目の付き合いだ。奴のサイン、見逃すような俺じゃない。

——やっぱしお前、美里に惚れてるじゃねえの。ったく、めんこい奴。

まず南雲グループが窓際の椅子とテーブルを占拠した。立村のことなんてすっからかんに忘れてみたく、ひたすらレコードの話ばかりしている。よおわからん。気に入らないのは南雲の奴がしっかり、一切乱れないかっこうで浴衣着ているとこだ。この部屋内で、浴衣着ているのが俺と立村、あと南雲だ。なにきどってるんだかと南雲に関しては言いたくなる。しかも帯、手馴れたみたいにしっかりひし形っぽく結ばれているのが謎だ。俺なんて適当に二回縛っただけだったのでにだ。そんなの関係ないんで俺たちも、立村からできるだけ遠くに避難すべく、壁寄りの布団に陣取った。残り、立村の脇あたりでエロ話に盛り上がり始めたのが水口グループ。絶対聞いてるぞ、立村は。弾劾受けても知らねえぞ。

しゃべる声はどんなにちっちゃくしたって丸聞こえなのは仕方ないことだ。本当だったらカモフラージュにテレビの音だけつけておきたかったんだが、なんと百円入れて三十分しか見られないというしけた代物。二年の宿泊研修だってもっとましだったぞ！ と俺は叫びたいところだが、現状を受け入れるしかない。三グループの会話に、聞きたくねえのに耳を側立てながら、俺は同じグループの連中と噂に興じることになった。女子みたいなことだが、やっぱりいい奴がネタになるのはしかたないこった。立村、覚悟しろよ。今夜はとことん、お前について、聞こえ

るように、ネタにするからな！

「なんであんなに切れるんだ？ 立村の奴」

「まあなあ、奴も、惚れてる弱みってものがあるんじゃないか」

俺たちのグループはとにかく、立村と美里の二人を素直に応援してやっている。男と女のべたべたしたことなんて本当はどうだっていいし、南雲みたいに女をとっかえひっかえして、今は奈良岡のねーさんに夢中という節操なしは別としてもだ。なんか恋愛って匂いのあんまりしない立村と、男子連中とは妙に話が盛り上がる美里、取り立てて叩く必要もない、ってのが本音らしい。やっかみはなぜかない。俺以外みな、下の学年で彼女を見つけているってのもあるのかもしれない。いいのさ、俺は優ちゃんに操を立てるのさ。

「羽飛もなあ、もう少し妥協してだなあ。鈴蘭優なんかどこがいいんだ？」

「お前、やっぱり生身の女に関心のもてないかわいそうな奴だとか？」

誤解されたくはないんで、答えておこう。

「ねえわけじゃねえけどさ、めんどくせえ」

ついでに、我が心の恋人、鈴蘭優ちゃんのプロマイドを生徒手帳から取り出してやる。新曲だって完璧に歌えるぞ。修学旅行でできるだけ金を使いたくないのは、優ちゃんの最新LPが来月出るからなんだな。二千五百円というのはかなり懐痛いけど、愛のため仕方ない。

「お前鈴蘭優一筋なのはわかるがなあ」

Tシャツをぱふぱふさせながら、俺に聞いてくる奴ありだ。おおなんでもこい。

「たとえばさ、榛野七草（はるのななくさ）とか、お前好みじゃねえのかよ。鈴蘭優なんて、いっちゃあなんだが、ただろりろりしてるだけだろ？ もっとさあ、胸がつんとしてさあ、スタイルよくてさあ、色っぽい感じの子ってだめなのか？」

ちなみに質問発した奴の彼女は、まさにそのタイプだ。美里に胸の厚みを分けてやりたいもんだって子だ。言ったら双方に半殺しとなるだろうから、あえて言わねえが。

「ほら、清坂に似てるだろ？」

清坂、って苗字に過剰反応している奴がいる。当然、あの水口だ。南雲もちらっと俺の方を見た。眠れる浴衣物体は特段何も動きなし。でも聞いているだろう、奴の性格だと。

「似てるかあ？」

昔、美里が付き合っていた奴が「お前は榛野七草に似ている」とか言っただけだ。まあ、やたらと目がおっきくて、唇がおちょぼなところは似てるといえなくもないが、けど美里は裸にしても楽しくないぞ、きっと。やめとけやめとけ。胸も榛野七草はDカップだってことだし、ついでに言っちゃあなんだが尻もかなりでかい。美里なんて色気さらさらしないし、どこがって俺は思うわけだ。

「立村もなあ、今回のことでかなり動揺しているみたいだなあ」

「一緒に、あれになっちゃまったって感じだよなあ」

「ばあか、ってことはあいつ実は女だったとか？」

盛り上がるんだけどすげえばかばかしい話にうつつを抜かず俺たち。

「いや、やっぱし『女』になっちゃったんだろ？ 清坂の奴も」

さっき古川が、「きたないものを見なくちゃいけないから、美里は動揺している」みたいなことを言っていた。古川は正直、嫁の貰い手ないんじゃないかってくらい激しい猥談をかます女子だが、それは鋭い言い方だと俺も思った。ひとりで抜いている時に出る臭い液体、そういうものを一日中女子は見なくてはならないってことが正しいのならば、だ。洋服とかやたらと女子っぽいものに興味ありげな美里が、大泣きしちまうのもわからなくはない。

あぶない、普通の声トーンで話続けていたら、絶対「眠れる物体」にぶん殴られる。

俺なりに気を遣って、もう少し立村から離れられる場所に座りなおした。あぐらをかいて裾のところがすかすかさせた。トランクスが見えるのは別にかまわない。さっき風呂場で中身まで見せびらかしたあとなんだしな。

「部活の後輩でさあ、清坂にちょっくら惚れている奴がいるんだわ」

思わぬ爆弾発言。さあどうする立村。まだ寝たままか？ 俺なりに発言を求められている以上、火を煽り立ててやりたい。いくぞ。

「そりゃあ物好きな奴だなあ。性格知らねえからなあ、そんなこと言えるんじゃないの？」

「そこに寝ている誰かさんも、物好きなのか？」

一年の三月に美里の奴、卒業する先輩に告白されたいらしい。これも古川からの情報。

もちろん立村命だったあいつは、あっさり振ったらしい。それが美里だ。

上から下からさらに中からも、ほんとに好かれておめでたいこった。

まあ、美里はもてても立村以外目に入っていないから、関係ないか。

「俺なりに奴がなぜあんな動揺したかを想像するとだ」

せっかく美里の話のをうまく別ネタに持っていこうとしたのに、無理やり蒸し返す奴がいる。ああそりゃあそうだろう。女子の「生理」って俺もよくわからねえもん。いくら保健の授業で習ったとはいえ、毎月尻から血が出るなんて、女子が全員「痔」になるなんて悲惨だなあと思った程度だった。冗談で小学校の頃から、「修学旅行であれがこなればいいね」なんてからかったりしていたんだが、その時の美里は「あんたもおねしょしなければいいよねえ」だった。小学四年までねしょんべんの直らなかった俺には、否定できないお言葉だった。

「たぶんあいつ、まだ付き合ってることしてねえんじゃないの？」

——付き合ってることって、なんだよ。

「手を出してねえよなあ。たぶんな」

これも俺が確認したことじゃないからわからない。ただまあ、立村も俺なりに考えてはいるらしく、ふたりっきりのクリスマスパーティーを自宅で開いたり.....なんてたって手作りの料理を全部用意したってんだから、相当力が入っている.....、時々デートなんかもしちゃってるわけなんだから、何もないってわけではないだろう。俺の知らんところで、ちゅーとかしても不思議じゃない。ただ、美里がもしそういう経験した場合、今までのパターンだと俺が一発で見抜く。立村は隠しとおせるかもしれないが、美里はやっても無駄だ。顔に「私は立村さんと.....しました」って言葉が書いてあるようなもんだ。残念ながら、美里の演技が上手になったんでなけ

れば、そういう文字は見えない。

「その理由ってのが、まだ清坂が『女』でなかったからってことだったらどうする？」

——「女」でないって？

なんか生々しいなあこいつら。尻から血ってことだけで、「女」になるかならないかってことになるのか？

「やっぱしさ、やるには、『女』でなければならねえだろうし。ま、羽飛みてえにロリコンなら」

言いかけたのをやめさせるには俺の腕力と優ちゃんへの愛で十分だ。

「いてえ、本気だすなやな、腕ひねっちまうんじゃねえの」

「優ちゃんのどこがロリだって言うんだっての」

「だってお前想像つくか？ 鈴蘭優が生理だってとこ」

こいつら命知らずだな、としか言いようがない。思いっきり電子あんま格好でマッサージしてやろうかと思った。

「や、やめろって！ 羽飛本気出すなな」

「冗談やめとけて」

俺が二本の足を持ったまま、ぶうらぶうらと揺らしてやると、口へらねえ奴はまだまだ危険な言葉を発してくる。

「いやなあ、羽飛っていくらでも選り取りみどりに見えるのになあ、もったいねえなってなあ」

——なあにが選り取りみどりだよ。

俺は奴のまたぐらにしゃがみこみ、軽く突きを入れてやった。もちろん、しゃれでだ。急所刺激で悶絶させなんかしない。

「俺の大切なところをなにするんだ羽飛あ！ こ、こいつスケベもいいとこ。おおい、立村、評議委員長さま、助けてくれよお」

もちろんおふざけだってこと、立村も寝ながら感じているんだろ。一切動かない。

しばらくアホなことをしあって、たまには軽くプロレスの技かけあったりして、夜はふけた。俺なりにいろいろと考えるところもあったのだけれども、修学旅行の夜に意味不明な堅いこと言ってもしょうがない。立村が一切動かないところとか、他のグループ連中がだんだん我を忘れて盛り上がりはじめているところとか、特に水口の奴が美里をはじめとする女子たちのプロポジションチェックと例の写真集の検証についてでかい声で叫んでいるところとか。うるさいはずなんだが立村は全く起きようとしなかった。八割の確率で立村の奴、絶対布団の中で目を開けていると思うんだけどなあ。

「わりい、ちょっとくそしてくるわ」

ポテトチップスを食いすぎたのか、腹の調子が悪い。

「ほおお、とうとう旅館にて初うんちっすか」

出すものは出しておいた方がいいってことだ。男子にとって個室で気張ることってかなり神経質になるのはわからなくもないのだが、なにせ長丁場だ。無理なんかせんほうがいい。ただし備

え付けのトイレでっけのは俺もさすがに、何されるかわからないんで……覗かれる、トイレト
トペーパー投げ込まれる、実況中継される……身の安全を図って風呂場近くのトイレに行くこと
にした。

「じゃあ、お前らも無理すんなよ！」

気合入れて声をかけ、少々張った腹を押えつつ俺は廊下に出た。やっぱりA、B、C組みな男
子連中、盛り上がっているってことが廊下からもわかる。時間を考えるとそろそろ先生連中の身
回りが始まるので、このあたり気をつけねば。

——美里、なにやってるんだよ。泣くんじゃねえよったく。

女子の部屋前を通る。さっき古川がしゃべっていたことからすると、そうとう美里も精神的
に参っているらしい。いわゆる「生理」の初めてって奴がきちまって、ばにくっているって話だ。
まあ、きれいなもんじゃないっていうんだったらわからないこともないが、立村に八つ当たり
してどうするってんだという気もする。

——相当、からかわれたかばかにされたかのどっちかだな、立村。

俺が古川の話を書く前に、水口たちが「あのな、清坂な、はじめての『初潮』とかで大泣きし
てるんだってよ」と楽しげに教えてくれたもんだから、もうD組の男子連中だれも知らない奴
なして状態だった。まあ俺だって、古川につっこまれるまでもなく三年間青大附中の保健体育
は授業受けていたし、知らんわけじゃあなかった。すんません、満点だったもんなあ。その個
所は。

けど、他の女子たちが……特に夏、水泳でプールに入る日……とかに、ずっとサイドでジャ
ージ着たまま眺めている姿を見たりしていると、それなりにいろいろ、想像しちまったりもする。
ああ、やっぱり、血が出るのかなあと、まあスケベなことをちらっと考えないわけじゃあない
。その女子たちが妙に腹を押えて苦しそうにしているのを見ると、やっぱり女子はめんどくせ
えなあと、自分が男子に生まれたことを感謝したくなるってわけだ。小学校時代のガキだっ
たらともかく、まさか今更水口のように盛り上がって騒ぐこともないんじゃないかと思う。

けど、古川もずいぶんすげえこと言うなあ。あいつ、嫁の貰い手、ねえぞって感じだ。 ——
マヨネーズだぜ、マヨネーズ。

あいつの弟、立村にめちゃくちゃそっくりで古川姉さんはいつも、立村に使っているスケベ
ネタをかまして凍らせてやっているって話だ。きっと朝パンツ無理やり下げられてベそかいてる
んだろうな。哀れなり。

ま、古川がくっついてるんだったら、二日目ご機嫌斜めだろうが、懲りないすい君にからか
われようがなんとかなるだろう。この辺、男子たる俺が心配することじゃねえな。それに、今
回いっちゃん驚いたのは立村の懐刀だ。

自分の彼女がだ。まあああいうことになっちまって、やいのやいの言われるのは覚悟してい
ただろう。

たぶん、「そんなの関係ないだろ！」とか言って話を逸らそうとするんだと思っていた。奴ら
しいから。

あとで美里の機嫌を取るためにいろいろ動くんだろうとも。けど、立村はやっぱ本気だったんだな。まじで戻ってきた時の目つきは、ぶっちぎれていた。その前に風呂場で裸同士のにらみ合いがあったし、さんざん身体のパーツ関連で菱本先生に批評されたりなんかしていたし、エキサイト指数が高かったのは頷ける。でも、なあ、あそこまでクラスの男子に言うとは。

——「俺の女にスケベなネタでつつこもうもんなら、しばくからな！」ってこと言ったようなもんだしなあ。

まさか、立村がそこまで、とは。あいつもほんと、大人になったもんだ。風呂場で懸命にこそこそしながら身体のパーツ隠さなくたって、俺としては十分あいつを「男」として認めてやるさ。

すっきり、と一仕事した後、俺は部屋に戻ることにした。

美里の様子が気にならないこともないんだが、古川とふたりでいる時ならともかくも、女子連中と集まっている中にひとりで入っていくのは自殺行為だ。小学校の頃だったらともかくも、今じゃあ夜中、外で自転車の後ろにのっけて知らない街をぐるり一周なんてできやしない。

少し汗ばんできたんで、襟元を緩めてみる。夏だったらきっと、うちわと枝豆、ビールは未成年のため禁止ってのりであぐらかきたい気分だろう。まだ一日目、もう少し気張ってみるか。真夜中まで。

「ただいま帰ったぜっと！ ん？」

スリッパの山にしゃがみこむような格好で、誰かがいる。

「どうしたんだよ、あら」

「羽飛、悪いけど、少しだけ話聞いてもらえないかなあ」

——ああ、明日のことだよな。

金沢が黄色いTシャツとジャージ下姿で、俺の顔を見上げた。

さっき風呂場行きがけに切り出した、あのことだろう。

悪くない、なかなかこいつの度胸も気に入った。

「オッケー、ここでいいか」

「みんな、あの写真持って、議論してる」

立村がみんなに千切らせたお姉ちゃん写真で、みんなが盛り上がっている間に金沢の事情も聞き取ってしまう。

俺は金沢のしゃがんでいる隣に、少し立てひざ気味にあぐらをかいた。裾をぱたぱたさせてみた。

「明日行く坊さんのところに、絵を届けるだけだろ？」

「時間的にはたぶん、それが精一杯だと思うんだ。けど、できたら」

「できたら？」

金沢も鼻の下をこすりつつ、唇をぴんと張って、言い切った。

「このままこういう絵を描いてていいのかどうか、聞いてみたいんだ」

——はあ？

とにかく、最初から話を聞かないと、俺の頭ではついていけない。青大附中D組は全体成績がめちゃくちゃいいわけじゃあないのだが、特別な才能ってものを見せつける奴らが非常に多い。懐刀を抱いて眠る自動語学翻訳機にせよ、スケベに目覚めた学年トップにせよ、はんぱじゃない。俺ってやっぱり普通なんだろうかって情けなくなる。

「とにかく、最初から話せ。でねえと俺、ついていけねえよ」

弱みを認めることができるのが羽飛貴史のよさだって頼む、優ちゃん、誉めてくれ！

下が真っ赤なトランクスだってことを、俺は風呂場で確認している。で、今は真っ黄色のTシャツだ。やっぱり金沢の美的センスは派手だ。目がやたらと細くて一見陰気そうに見えるんだが、話してみるとそうでもない。メガネをかけていないのにやぶにらみっぽいのが少々、女子受け悪そうなところあるんだが、結構いい奴なんだよな、金沢は。女子のことなんかでの悪口言い合いに関わろうとしない。ストイックに絵、一筋。確か一年の冬休みに、大人と一緒にの展覧会で賞をもらい、売れてしまったりしたという話を聞いている。立村曰く、「さすが天才画家」。天才かどうかはわからねえけど、金沢の描く絵はお上品というか、丁寧というか、こまやかというか。とにかく、目に見えたものとか景色を丹念に細い筆で描いていく。現代美術っていうか、どっかぶっこわれたガラクタを並べたりした絵とか、意味も無く真っ黒い紙を張りまくった部屋とか、そういうものが好きな俺とは正反対の好みだとは思う。けど、悪くはないなあ。職員室に飾られている「校舎風景」は、青大附中の教室の中で、一番きれいなとこばかり捉えたものだった。こんな教室、普通ねえよ、って感じだ。

才能は認める、すげえと思う。けど、俺の好みじゃねえ。ごめんな、金沢。

そんな俺の本音は、とっくの昔に金沢へ伝えてある。だから遠慮ない。

「あのさあ、今年になってから、美術の先生、代わっただろ」

せっかく、明日行く予定の寺坊主について教えてくれるんだと思ったら、金沢の奴、いきなり話を逸らしやがった。ああそうだな、代わったなあ。二年間お世話になった駒方先生がやめちまったからなあ。今はE組専属の先生やってるってことはここではさておいてだ。

「なんか、俺の絵って、いまいち受けないみたいなんだなって、最近思うんだ」

ごめん金沢。今の美術の先生、武山先生っていうんだが、俺好みではあるんだ。

「この前の写生の時も、俺が描いた絵を見て、『もっと本気で描いてみろ！』って言われるしさあ。俺、絵には本気も手抜きもないけどさあ」

「好みだって、しゃあねえじゃんかよ。俺だってお前の絵、好みじゃあねえもんな。うまいって思うけど」

「そう言ってたな。羽飛も」

言っとくが、俺はすべて金沢の絵を否定しているわけじゃあない。二年の宿泊研修中に奴が描いた文集表紙、「虫たちが覗いている宿泊研修の様子」、あれは面白かった。叢の陰からいろんな虫たちがドアップで、バレーボールに熱中している俺たちを観察し、話し合っているっていう怪しい絵だった。いつもの金沢が、ただそのまんまりアルに景色ばかり写し取っているんでないところが面白かったなあと思う。まあ、わらじ虫、コガネムシをえらく実物感たっぷりに描かれ

ても怖いものがあるがそれもつっこまないでおこう。

「そういうアンチ金沢派な俺が言うのもなんだけどな、それぞれ好みがあるんだし、先生たちだってそれぞれだと思うけどなあ。今だって駒方先生はお前の絵絶賛してるんだろ？」 金沢は頷いた。けどすぐに首を振った。

「駒方先生の好みは、とにかく物がきれいで上品で、それでいてわかりやすい、そういう絵なんだ。だから、俺の絵は気にしてもらえたんだって、最近わかった」

そうか、言われてみりゃあその通りだ。

「それで、この前の美術で写生した絵、落とされてさあ」

——落ち込むよなあ。わかる、わかるぞ金沢。

まだ後遺症が残ってるってわけだ。俺としては当然、肩に手を回してとんとんと叩いてやりたい。

「あれは悔しいわなあ。気持ちは察するぜ」

しばらく金沢はうつむいていた。唇を噛んで、細い目をさらに糸目にしていた。

金沢が落ち込みのどん底に突き落とされた事件というのは、五月末の美術で、二時間取って写生を学校内にて行ったと言うあれだ。二時間いろんなところでみなグループ組んで、エンピツや色塗ったりやらで遊びまくった。好きな場所で描くことができるっていうのだから、これは二時間の休み時間と同じだ。悪いが俺が描いていたのは最後の十分間だけ。あとはひたすら腕相撲とかプロレスとかやって遊んでいたのは内緒だ。

すでに俺たちD組の中で金沢の絵については、誰も異論を挟むものなんていなかった。それこそ「天才画家」としてみんな敬っていた。こいつも別に、鼻にかけることはなかったけれども、誉められるのは嬉しいらしく、リクエストにいろいろ俺たちの自画像なんかをプレゼントしてくれた。

毎年そうなんだが、この写生授業にて飛びぬけて上手な絵を、美術の先生が選んで廊下に数枚貼る、というのが毎年のお約束となっていた。当然、今年も金沢が三年連続飾られるもんだと疑っていなかった。

「なんであいつが飾られるんだって感じだよなあ」

「わかるよ、なぜだか」

口籠もりたいのも俺にはよーく伝わってくる。なんと今年飾られたのは、A組の片岡司っていういろいろな事情もちの奴だった。すげえ金持ちのぼんぼんで、一年の頃やらかした下着ドロ事件を認めて、女子たちからは今だに鬨感を買っているって噂を聞いている。授業一緒になることなんてねえし、A組は遠いからどんな奴かわからないし。片岡本人にはあまり関心なんてない。けど、飾られた絵は確かに、すごいもんだった。

だって、紫陽花の花をだぜ。油絵みたいな感じでチューブから絵の具絞って塗ってってるんだぜ。

とにかくどぎつい色を使っている。目が飛び出るかと思った。うまく言えねえけど、金沢の絵が写真みたいできれいだとしたら、片岡の絵はインド料理屋のポスターみたいな感じだった。別

名「サイケデリック」っていうんだか。

「駒方先生だったら絶対にOK出さないタイプの絵だな、ありゃあ」

「けど、やっぱり、すごいよな」

金沢ってこういうところがやっぱり、いい奴だなあと思う。

こいつ、自分が絵の評価で負けたことをわかっていて、それでも相手のいいところ、しっかり認めてるんだ。

話が飛ぶけど、立村もこういうところ、しっかり見習えよって言いたい。

鼻をこすりながら、金沢は目を少し厚めに開いた。

「あの、A組の奴の絵見て、やっぱり俺の絵って、つまんないんだなって思ったんだ」

「だあかあ、金沢、人の好みはいろいろあるって俺が言ってるだろ！」

「きっと、他の奴もみんなそれ、わかってるよ」

わかってないわかってない。美術音痴の立村は絶対に。

金沢は唇を尖らせながらさらにぐちぐちいい始めた。

「みんな、俺の絵って写真みたいできれいだって誉めてくれたよ。けど、写真みたいな絵って、写真にはかなわないだろ？」

「そんなことねえよ」

「あの、A組の奴の絵は、写真みたいじゃないよな」

「あんな紫陽花が咲いていたら、俺、怖くて寝れねえよ」

ホラー映画じゃあるまいし。

「これから先、いろんな奴の絵を見ることがあるかもしれないけど、あのA組の奴、あいつの絵って誰もが一発でわかるような気がするんだ。どこに行っても、どこに出回ってても。けど、俺の絵はそうじゃないよな」

声を震わせ始めた金沢。おいおい、泣くなよ泣くなよ。

「写真とほとんどかわんないなんて、つまんないよ。だからわかった。武山先生の言ったこと」

だからなんで泣くんだ金沢。俺、ちり紙もハンカチも持ってねえぞ！

「俺、個性がないんだよ」

ふすまの影で、他の連中には聞こえないように意識しているのか、泣き声は立てなかった。

——あれだけ描けりゃあすげえじゃねえか、って問題じゃねえよなあ。

不必要な慰めには意味がないような気がしてならないんで、俺は黙ってもう一回、裾を捌き直した。

俺が金沢の絵を好みでないように、きっと武山先生もそうなんだろう。正直言うと、あのサイケデリックな片岡の絵は、俺にとってかなり頭に一発がちんとくるものだった。ちなみに立村の感想は「怖い」の一言だった。もう少し言うことねえのか、立村！

けど、それはそれで別だろうとも思う。今ここで、ぐしゅんぐしゅん鼻詰まらせている金沢の価値が減るわけでもないだろうし、駒方先生以外にもあいつの画才を絶賛する奴はたくさんいる

わけだ。女子なんて「金沢くんの絵、宝物にするねー！」とかいって盛り上がっている。変な言い方だけど、女子向けなんだな、画風が。そういうところにアピールして、ついでに女子と仲良くなれば金沢にとってハッピーなんじゃねえかと俺は思う。

けど、金沢の言う「俺、個性がないんだよ」という落ち込みについては、納得したくなることもある。

確かに金沢の絵は、つままない。これは俺の好みからしてそう、ってだけであって、あいつの分析している通り「写真みたいな絵」なんだな。構成が変わるとすげえおもしろくなる……例の宿泊研修用文集イラスト……のも確かなんだが、普段の金沢はほんっとその辺のどうでもいい景色ばかり描いている。延々と続くバスの中から見える山々。ずっと眺めていると眠くなる、立村は例外的にバスに酔う、そんな絵なんだな。

「じゃあ、個性、出せばいいじゃねえか」

だいぶ鼻のすすり上げが納まったところで、俺なりの意見を一言。

「俺も絵のことよくわからねえけどな、あのA組の絵のような真似、したらまずいのか？」

「してるけど、うまくいかない」

あっそ、確かに画風。正反対だもんなあ。

「だからさ、俺なりに昨日、描いてみたんだ」

やっと話が繋がった。その絵、今回の旅行に持ってきたってことなんだな。

「どんな絵だよ、見せろよ」

「今はだめだ。リュックの中に入ってる」

残念。まあそりゃそうだな。こんなところで公開したら、すい君らの餌食になるのは時間の問題だ。

金沢の話は以上だった。

明日行く予定の寺の住職さんは、どうやら金沢の大尊敬している画家さんらしい。その辺は俺もよくわかんないんだが、普段はお寺でお経をあげつつ、暇見つけて芸術的な絵を描いているんだそう。前からその人に一度、絵を見てもらいたいと熱望する金沢の気持ちはわからないでもない。けどそれならさっさと、定形外郵便筒型の入れ物に絵をつっこんで、送りつけりゃあいいのに。

「そんな、たくさんいるんだよ。絵を見てほしい人が。俺だけすぐにとってできないよ。よっぽどのことなくちゃ」

「けどなあ、お坊さんだって仕事あるだろうが。いきなりやってきて、すいませんが絵を見てくださいったって、普通は逃げるだろ」

「だからだよ。だから飛び込みで見てもらうんだ」

——よくわからねえなあ。

漫画だと出版社の編集部に見てもらおう持込みってやり方があるらしいけれど、金沢みたいな絵の世界でもそれって通じるのか？「だってなあ、その坊さん、寺にいるかどうか、調べたのかよ。それこそ小坊主こき使って、お経上げている真っ最中だったらどうするんだ？」

「調べてない」

——アホか。

「金沢、まさかと思うけど、お前、準備ってしてねえのか？」

いやあな予感がした。まさかとは思うんだが。ここまで思いつめておいて、まさかおい、ほんとに、飛び込みか？ 俺の眼から視線を逸らし、まさにその通りって顔で、金沢の奴、うなだれた。

「立村にも相談してないって言ってたよな」

「修羅場になるだろ。去年の宿泊研修みたく。へたしたらあいつ、停学になっちゃうよ」

「じゃあなんで俺にいきなり、今になって相談するんだあ？」

あっさり答えられてしまい、退くに退けなくなってしまったのは、やっぱり俺の性格か？

「羽飛が、影のD組リーダーだろ？」

こういう場合、一番頼りになるのは、怒らせたら怖い立村だってこと、誰もがよおく理解しているはずなのだ。「宿泊研修バス脱出事件」さえ起こさなければ、こんな面倒な相談、全部奴が片付けてくれたんだ。

前もって準備して、お寺の坊さんに電話するなり、抜け道を見つけたり、うまくしたら先生利用したりとか。

評議委員長の裏技を酷使して、立村は全力で金沢の希望を叶えてやったに違いない。それを何か？ 何もそういうノウハウ持ってねえ俺に、「影のD組リーダー」として、同じことやれっ
てのか？

「わあった。とにかく明日もっかい相談するか」

やっと笑顔が戻った金沢に、俺は膝を打って立ち上がった。今夜はほんと、徹夜で相談だ。せっかくひきちぎったきれいなお姉さん写真には悪いが、しばらくかばんの中であはんうふんともだえていてもらおう。

立村にもしくはらくは内緒だ。奴の、停学回避対策だ。

足音忍ばせて廊下に出た。かすかにがたごと人の声がするけれど、待ち合わせ場所の男子トイレ前には天羽しかいなかった。

五時集合というのは早すぎたかもしれないけれど、六時前には普通起きるだろう。旅館の従業員さんらしき人が通り過ぎるたびに戸の中へ隠れ、また様子を見計らって外に出る。天羽と顔を見合わせてただ笑い合う。

「難波も更科も、すっかり忘れてるよな」

肩をすくめて「あいどんとの一」とやってのける天羽。いつもの口調で、
「そりゃあしょうがねえじゃんかあ。お前みたいに、品山から毎日自転車漕いできているわけじゃあねえんだからさあ。ま、今朝は俺とお前、久々に連れぐ……」

「それ以上言うなよ」

僕は戸口でしゃがみこみ、襟元を深く合わせなおした。朝はまだ冷え冷えとしていた。調理室だろうか、かちゃりかちゃりと音がするのは朝食の準備だろうか。腹が空いて来た。「便秘防止のためにな、これ、飲めよ」

取り出したのは、ミネラルウォーターの缶だった。二本両手に持っている。さっき僕の顔を見るやすぐに、百円分おごってくれた。ありがたく受取り、一気に飲んだ。

「あーあ、生きてるって感じだよな」

つい、口に出た。身体の中の汚いものが全部洗い流されたって感じだった。

「じゃあ、じゃんけんで決めるか、立村」

「そうだな、グーとパーで」

一、二番の順番を決め自然なことをさっさと済ませることにした。

本条先輩の命令は、とりあえず僕たちふたりが守ったってことにした。

終わらせたら自分らの部屋に戻って三十分くらい布団に入ってもいいんだが。なんとなく戻るのがかったるかった。もう一度、浴衣の帯を締め直すと天羽がにやにやと座り込んだ。

「お前、昨日、すごかったんだってな」

「なにがだよ」

——もうばれているのか。

しょうがない。寝ながらちょっと言い過ぎたかな、とは思っていた。目が覚めたらきつとクラスの連中からは「お前、ちょっと顔貸せよ、何様のつもりなんだ」くらい言われてもしかたないだろう。

——他の連中に目が覚めたら素直にごめんと謝らなくちゃな。

「短剣畳に突き刺して、『俺の女に手を出すな！』発言したんだってな」

——微妙に意味が違ってるような気、するよ、天羽。

しよせん、おもちゃのちゃちな短剣だ。頭を冷やせばそんな無駄なことしたって意味ないじゃ

ないか、そう思える。でも、やっぱりなんか「溜まって」いたんだろう。あの時の自分の行動が、思い出すたびみっともなく泣けてくる。

——まだまだ先は長いのに、俺何やってるんだかな。

「勝手にそう思ってくれ。申しわけないけど、今俺は猛烈な自己嫌悪に陥ってる」

説明的な台詞を天羽に伝えた。

「そんなことねえよ。お前、男だな」

背中に手を回された。ふだんだったらその行動、気持ち悪くって手に一発噛み付いてやるんだが、なんだかそれすらどうでもよくなっていた。天羽はもともと「スキンシップ」を求めることが非常に多い。一年、二年の頃はその行動がどうもいらいらする元凶だったのだけれども、今の僕はだいぶ慣れてきたのかもしれない。

「変なこと言うなよ」

お礼を言うのはやっぱり、変だ。男子たちの返事は、照れ隠しだけれども、肯定でもある。

女子にはきっとわからないところかもしれない。

清坂氏のこと……いわゆる、女子のご機嫌がものすごく悪くなるある一週間……のことを聞いてから、僕なりにどうしたらいいか考えてはいた。

一応保健体育の授業はきちんと受けていて、あまり怪しまれないようにテストでは中途半端な点数を取るよう心がけたりしていた。だって、排卵日とか妊娠しづらい日とか避妊方法とかの内容を全部答えて満点なんて取ろうもんなら、男子女子関係なく何言われるかわからない。羽飛だけはしっかり勉強して満点取っていたし、それで叩かれることはなかったけれども、それは羽飛の立場がそれだけがっちりした足場のもとにあったからだ。僕なんか、どうなったかわからない。

——うちの母さんと同じになったら怖いよな。

——とりあえず、二日目はあまり変なこと言わないようにしておこうかな。

もちろん、それがかえっていやらしいと言われたらそれまでだ。でも僕の認識の中では、清坂氏の状態が決して楽なものではないだろうということは想像できた。あの、なんでも一人でちゃちゃとやってしまう性格の清坂氏がだ。古川さんの手を全部煩わせるようなことをして、泣きじゃくっているというんだから。きっと僕に知られたこと自体、屈辱的だったんじゃないだろうか。もう少し僕も、風呂場で顔を合わせた時にうまいことを言えればよかった。難波と更科…… やっぱりあいつらが目の前にいたら、僕のことだ、嫌味をまた一発二発口走っているかもしれないな……の言葉でまた、清坂氏の感情に火をつけてしまったのは大誤算だった。ほんと、僕の頭の悪さ加減には、大失態、としかいいようない。

「お前のせいじゃあねえだろ、女子のことはさ」

慰めの言葉かどうかかわからないけれど、天羽がひとりでしゃべってくれる。

「清坂のことはA組にも伝わってるな。ま、女子の方はどうかかわからねえけど、うちの近江ちゃんは清坂のことを激愛しているからな。うまく守ってくれるだろ。D組だって古川がいるしな。ま、しばらくあいつのお下劣なギャグに付けねられるのはあきらめとけよ」

「慣れてる、大丈夫」

大きくため息をついてしまう。こういうみっともない顔を、まさか天羽の前でさらけ出せるようになるとは、一年前の自分は決して思っていなかった。

「うちのクラスのことは、なんとか俺が黙らせるように頼むかなんかするけどさ」

もう懐刀での脅しは通用しないだろう。わかっている。たぶん菱本先生に通告されて、旅行終わるまで刀は取り上げられる。

「でも、他のクラスのことは手は回らないしさ」

「お前、ほんっとに清坂のこと惚れてるんだなあ」

「天羽の近江さんに対する愛には負けるよ」

そういう恥ずかしいことを言えるのも、おとといの天羽に関する恋愛騒動が若干関係していたのは否めないだろう。天羽を挟む女子の三角関係に、終止符を打つ場所へ、僕はいた。当事者ではないけれども、すべてを知ることができた。言いたいこと、ちょっとひどいじゃないかとおつこみたいこと、いろいろあるけれども、今の天羽の態度を受取るとそれすら言えなくなりそうだと。

「ま、A組の野郎どもについては、俺もうまく手、回しておくからさ」

「助かる。感謝だ」

「それに難波も更科も、責任感じてるだろ。あいつらもあいつらなりに、反省して」

「ないよきっと」

清坂氏のことだけではない、と言わなくてはならないだろう。しかたなく僕は、昨夜の言い合い、難波と霧島さんとの男女評議対決を説明した。あまり互いの名誉にならない内容も話さなくてはならないけれど、今の天羽には、素直に話せる。

だいぶはしょって説明したけれど、天羽はすぐに頷いた。髪の毛をかき混ぜるようなしぐさをした。

「そうかあ。霧島もなあ」

「確かに言いたいことがあるのは認めるけど、古いことを持ち出すのは反則だと俺としては思う」

「女子のことはもう、放っておいた方がいいのになあ。なんでだか」

今度は天羽の方が深くため息をついた。

「俺が言うのもなんだけどなあ。なんで霧島はあそこまで男子を攻撃したがるのか、その理由わかっているらば、だいぶ違うと思うんだけどなあ」

「理由なんてあるのか？ 単純に男嫌いなだけじゃないのか？」

「いや違う」

天羽は首を振った。くしゃみをひとつちいさくした。

「話聞いたことあるけど、霧島のうちな、典型的な男尊女卑の家なんだと。とにかく異常なほど、男がえらい世界なんだと」

「それはうらやましい世界じゃないか」

なんとなく聞いたことがある。

「食事は父親弟、すべて二品特別なおかずが出るんだと。風呂は当然男が先に入るし、父親が帰るまでは食べることも寝ることもできないんだと。毎日三つ指ついて父親を迎えて、弟に対しても同じように振舞うことを要求させるんだと。あそこのうち、なんでも着物屋やってるだろ」

呉服屋の間違い、と言いたいのを我慢する。

「後継ぎはとにかく、ガキのころから大切にされるらしいんだ。けど嫁にいつちまう長女ははっきり言ってどうでもいい。むしろ言うこときちんと聞いて、玉の輿を見つけることができればそれでいい。と、まあ、現代日本においては信じがたい環境下にくらしてらっしゃるわけっすよ。霧島姉さんは」

——それ、西月さんから聞いたんだな。

だいたい清坂氏から、そのあたりの事情は聞いていた。大変なんだな、とだけ同情していた。裏を返せばその横暴さは、我が家では母がいた頃、日常的に行われていたことだが。

「その反動か」「そ。けどあの性格だろ。霧島は一日中親に反発するなりなんなりして、家出したり、いろいろやったらしいぞ。ほら、殿池先生のうちに逃げ込んだこともあるらしい。噂だけだな」「逃げ込んだっていうか、単なる泊りってことにしてだよな」

それも噂というか、清坂氏から聞いている。

「ところが、親は全然捜しにこなかったらしい。あとで聞いたことによるとだ」

「お前なんでそんな知っている？」

「なんか知らねえけど知ってるんだよ」

天羽はちらちらと視線をちらつかせながらささやいた。

「別にいてもいなくてもどうでもいい。いざとなったら養女に出したっていいって、おっぼかれたんだと。さすがにこれ、聞いた時は俺も哀れだなあって思ったぜ」

——確かに。

僕がもう一度ため息ついたのは、虐げられているらしい霧島さんに対してではなかった。

——天羽、やっぱりお前、評議委員長に向いていたはずだよな。

くったくなく笑う天羽に僕はいつも、思う。

今だから言えることだけでも、僕の代、評議委員長になるのはたぶん天羽だと思っていた。本条先輩に一年終り頃、

「いいか、立村、お前委員長候補だってこと、忘れるなよ」

とささやかれるまでは、僕が委員長指名されるなんて想像したことすらなかった。本当だ。一年の頃は当時の委員長、結城先輩からも、

「今年の一年野郎組、長男が天羽だろ、次男が難波、三男が立村で、末っ子が更科ってところか」

と呼ばれていたことからして、僕の評価がいかに低かったかわかるだろう。自分と同じ認識だったし、それはそれでしょうがない。周りをお笑いののりで和ませて、さりげなく女子たちにも明るく「よっ、ご両人！ いい雰囲気どすなあ〜」とインチキ関西弁で乗せていく。多少きついことを女子たち、先輩たちから言われても、「そりゃあどうも失礼いたしやした！ 反省、反省

だよなあ、男子一同はな」と笑って流す。すでに一年の段階で天羽の態度は他の連中にくらべてはるかに大人だった。こう言ったらまずいだろうが、天羽と二年まで女子評議としてコンビを組んでいた西月さんよりはるかに、頭が切れる奴、という認識を持っていたのは確かだった。

後で本条先輩以外の一年上先輩たちに聞いたところによると。当時の評議委員長、結城先輩は天羽を次期評議委員長として仕込むことを提案したという。それはそうだろう。本条先輩が僕のことを強く推して押し切ったらしい。あの頃の僕は、クラスのごたごたとか計画失敗による責任を背負ったりとか、とにかくみっともないことばかりやらかして、たぶん次期評議委員には選出されないだろうと覚悟していた頃だったのにだ。本条先輩がなんで、あの頃の情けない僕を評価してくれたのか、今だにわからない。

もっとすごいのは、天羽がその事実を知っても、全く僕に対して態度が変わらなかったことだろう。

本来、自分よりも格下の奴にトップの地位を奪われたら……トップだったって結局は雑用係なんだが……、やっかんだりいやがらせしたりしても、何の不思議もないだろう。特に僕みたいに数字に弱くて女子たちからも受けが悪い陰気な奴だったら。それに本条先輩ときたら、僕たちが二年に上がってから当然のごとく、僕が評議委員長になるであろうという仮定のもとみんなに話をするようになったのだ。他の同期連中が受け入れてくれたのは、みんな思いやりのある性格だったから、と納得できるものはある。けど、もし天羽が僕に対して少しでもやっかみとか感じていたとしたら、僕の性格上必ず気が付くと思うのだ。ちょっとしたことでやたらと神経質、というのが僕の性格における最大の難点だ。直感で、悪意を強く感じてしまった時にはどうしてもうわっつらでしか話ができない困った性格なんだからどうしようもない。天羽は僕の悪意用アンテナに全くひっかからず、かえって一生懸命手伝いをしてくれた。

そうだ、一年前、僕がとち狂って宿泊研修中にバスを脱出して大騒ぎとなった時だってそうだ。

あれには僕なりに言い分はあるし、やったことに後悔なんてこれっぽっちもしてはいない。

ただ、A組に絡んだ出来事でもあったし、次の日天羽と放課後顔を合わせるのが苦痛だった。

——天羽の奴、一言だけだもんな。

「立村、うちの担任の電話番号、どうして俺に聞かなかったんだよ」

もっと天羽に詳しい相談を持ちかければよかったのだと、あとあと反省したものだった。一年前の僕は同期よりも、一年上の本条先輩にばかり頼りすぎていて、天羽たち同期男子評議たちとは一線を引いていたきらいがあった。もっとつつこんだことを話しておけば、もっと要領よく問題を解決できたはずなのに。もっともその件については、数ヵ月後本条先輩の厳しいお言葉や制裁によって、いやおうなしに彼らを最高の盟友として受け入れられるようになったけれどもだ。

今だってそうだ。トイレの前で朝一番、待ち合わせ、の約束を守ってくれたのは唯一天羽だけだった。

一度約束したことは絶対に忘れない。義理堅い。やらねばならないことは必ずやり遂げてくれる。しかも、周りのご機嫌を悪くさせないようにして。これって、評議委員長に求められる最大の要素じゃないだろうか。

——俺はやっぱり、器が小さいんだよな。

評議委員長に正式任命されてから三ヶ月。毎日、クラスや委員会、他の中学のことなどで落ち込むこと多々有り。

やっぱり僕には向いていないのか、とも思い泣きたくもなる。

ただ一年前と違うのは、しんどくなって泣きそうになった時かならず、評議三人衆がいろいろ声をかけてくれたり、僕が頼みもしないのにどんどん仕事を進めてくれたりと、協力してくれることかもしれない。今までは本条先輩しか見てこなかった僕なのに、いつのまにか周りが僕の失敗を埋めて行ってくれている。憶測だけでも、たぶん三人の中では一番仕切りのうまい天羽が、うまく難波や更科をまとめて僕につないでくれているのだろうと思う。

——影の評議委員長だといっても、おかしくないよな。天羽は。

——けど、なんでだろう。

めったに天羽とふたりで話をする機会はない。

こうやって廊下の炊事準備の音を聞きながら、臭い匂いのするトイレ前でしゃがみこんでいるだけだ。

「天羽、今、聞いていいか」 どうしても、これだけは聞いておきたくて、口走っていた。

「ああなんだ？ もしかして、禁じられた愛の告白？」

「それは相手が違うよ」

茶化しておいた後、僕は尋ねた。

「お前、もっと上手に西月さんを振ることできたらどう？ なんであんな、下手なやり方したんだ？」

笑ってごまかされてもしかたないだろう。もう終わったことだと僕も思っていた。でも、聞かずにはいられなかった。

「天羽、お前だったら、もっと要領よく出来ただろ？ いいか悪いかの問題じゃないんだ。どうしてあんなやり方した？」

天羽は答えなかった。ちらっと隣の僕を見つめ、唇をぎりぎり突き出すようにとんがらせて、小さく口笛を吹いた。

「要領よく、かよ」

「そうだよ。天羽だったらわかっていたはずだよな。西月さんの気持ちがお前に向いているってことわかった段階で、さらっと『実は好きな子がいるんだ』みたいにごまかして、友だち付き合いにしてしまうとかさ。お前が西月さんを嫌いな理由については俺自身、何も言えないけど」

「へえ、そうか。同感？」

それには答えなかった。

「でもさ、どんなに天羽の本音が限界だったとしても、相手が被害者になったらその段階でお前、勝ち目なくなるってこと、気付かないほどばかじゃないだろ？ どんなにお前、西月さんにしつこく付きまとわれて限界に達してたとしても、口きけなくなるくらい傷つけた段階で言い訳できなくなるんだぞ。そのくらい、わかっていないお前じゃないよな。俺ならともかく、天羽、お前ならさ」

なんでだろう。こんなこと、南雲くらいにしか話したことなかった。

なんで、天羽になんだろう。

——なんで……。

天羽はしばらく唇をとがらしたまま真っ正面の壁を見つめていた。僕の方をちらりとも見なかった。

冬休み明けに頭を丸刈りにしてきてから、だいぶたっているせい髪毛もだいぶ伸びている。

かき回してぼさぼさにするのも、さまになってきている。

「立村には世話になったもんなあ」

ひとりごちた。

「わかった、言うわ」

ジャージ下のゴムを伸ばし、へそのあたりで手を重ねてぐいと押した。

「去年の八月な、お前が電話をしてきた頃な」

——宿泊研修の時か。

次に続いた言葉に、僕は息を止められた。そのまま、視線は同じ一点、真正面だけ見据えていた。

「俺、童貞、捨てたんだ」

——童貞、って、つまり。あの。

保健体育の中では一切出てこないけれども本条先輩と一緒に見た、アダルトビデオの世界。いや、雑誌の中でからみあっている男女の身体。妙になまなましい、重なり合い。

天羽の横顔にはちっとも曇りなんてなかった。汗もかいていない。いつも見慣れた天羽のままだった。

「やっぱし、驚いたか？ 立村」

「いや、あの、去年の夏？」

「そうだ。お前がうちのクラスの女子のことで、電話かけてきたあの一週間くらい前なんだ」僕は浴衣の裾を直して、ぺたんと座りこんだ。トイレの前の床なんて汚いと分かっているけど、そうせざるを得なかった。腰が抜けた、というんだらうか。頬が熱い。一緒に全身、血が駆け巡っている。

「捨てたって、誰と」

「抜けた団体のおばさん」

もういちど「おばさん」と繰り返した。なんだか「何食べてるの？」と聞かれて「おにぎり！」と答えた時のようなほのほとした感じだった。

「ほら、俺、去年の八月まで、宗教団体に入ってたって言っただろ？ その人」

「おばさんって、歳、幾つくらい」

尋ねるのにもぶっくらぼうになってしまう自分がある。

「三十五って言ったな」

——うちの母さんと同じくらいじゃないか。

「二回やって、それ以降は会ってねえよ。だから二回だけ」

「けど、やったんだろ」

やる、という動詞が妙に生々しく聞こえた。自分で言葉を叩きつけるために「やったんだろ」とか言っているのだけれども、実際の行動とが言葉にかさならない。「やる」といえば、自分ひとりで写真集を見て処理をしたりするのもそうだし、ものを渡したりプレゼントしたりするのも、そうだ。でも、今の天羽は「やる」イコール、あの行為を意味している。

「誰かにそれ、言ったのか？」

「まさか。俺だってそこまで変態じゃねえよ」

「けど、お前うちの学校で一番最初かもしれないのにさ」

なんかまぬけなことばかり僕は口走ってしまっている。腰のあたりからずうっと冷えてきて、また熱くなったりして頭の中がごちゃごちゃしてきている。天羽の相手が三十五のおばさん……うちの母さんと同年代……というだけでも信じられないのに、全然変わることなくしゃべっている隣の天羽も僕には化け物に見える。

「南雲はまだなのかなあ」

「わかんないけど」

——ゴムは持ち歩いてるけどな。あの頃から。

何度か袋を破いて、伸ばしてみたことのある、薄いゴムの指ざわりを思い出した。また、妙に身体がほてってくる。天羽に「立村はまだなのか？」と聞かれたらどう答えたらいいんだろうか。もちろん、まだもなにも、始まってなんていないと言うしかないのだろうけれども、そんなことしたら、一層天羽が遠くなりそうだった。コンドームの薄く伸びる感覚が、どこか一線を引いた世界にも似て震えがきた。

天羽は僕自身のことについてはなにも、質問してこなかった。

「けど、お前、中学生とそういうことしたら、そのおばさん、未成年者を連れ込む犯罪者ってことになるかも」

認めたくない。法律にかじりつく。

「俺も、向こうも無理やりやったわけじゃねえよ。ただ、やれたからやった、それだけだ」

——やれたからやった？

恐る恐る、僕はひとつの質問をした。

いくら口にしても、僕と天羽が同じ位置に立てない、わかりきっていても。

「その人のこと、気に入っててか」

「まさかだろ。俺、更科と違って年増ごのみじゃねえよ」

「じゃあなんで」

「やらざるを得なかったし、やるようになかったからなあ」

——かっこう？

いくら鈍い僕でも、その意味は通じる。

「かっこうって、けど相手、好みじゃなかったのか？」

「あのな立村」

少しあきれた風に僕の名を呼んだ。一年の頃と同じ調子だった。

「嫌いな奴でもそうなっちまうんだよ。一回覚えたら、そうなんだ」

一瞬、頭の中が思いっきりちーんと鳴った。

「嫌いな奴でも、ってもしかしてそれ」

「立村、お前清坂のこと好きだろ。なら絶対そうなるよ。けど、俺の大っ嫌いなタイプの女だって、やりたくなったらそうなっちまうんだ。なっさけねえよなあ」

以下、僕の中は完全に凍り付いていた。そのフリーズ状態に気付いて、天羽は言葉で溶かそうとしてくれたのかもしれないけれど、逆効果だったのは否めない。僕はただ、天羽が話してくれた事実と例の事件とを絡めてみて、ああそうか、と認識するのがやっとだった。学校に戻れば僕の方が評議委員長としての肩書を持ち上に立っているのだろうけれども、やはり天羽とは差がありすぎる。

——どうしてだよ、天羽。

つぶやく声を聴きつづけながら、僕は天羽の話を無言で聞いた。

「俺が去年の夏まで、宗教団体に入っていたってのは聞いたよな。なんで俺が夏冬休み通じて全く評議委員会の合宿に参加できなかったのかとか、なんであそこまで人づきあいよさな顔をしていたのかって、変なところあっただろ。いろいろあって俺もその団体から家族一緒に抜けることが決まって、いろいろと後準備をしていたんだ。準備ってなにか、まあ経典を捨てるとか、一緒に活動してきた連中にバイバイしたりとまあいろいろとさな。けど、生まれた時から一緒につるんできた連中なんだ、そう簡単に別れられるわけねえよな。で、去年の夏、いつも面倒見てくれていた女の先輩に呼び出されたんだ。そこの集会場の中でふたりきりで。脱会、絶対させないっていうつもりで説得しようとしたんだらうなって今になれば思う。けど俺もその先輩女としていまいち好みじゃなかったし、絶対ふたりっきりで部屋に入ってもそんな気になるわけねえって思ったから、そのまんま、一緒に部屋に泊ったってわけだ。もちろんうちには、結城先輩の家に泊っているって事にしてごまかした」

——一緒に部屋に泊るだけなら、好きでもない人に、そんな気になるわけないよな。そうだよな。

「けど、いろいろ話をしているうちに、俺もだんだん、一回くらいならいいかなって気になってきたわけなんだ。女子だったらなくすものもあるし、妊娠してしまう恐れもあるけど、男子が童貞なくして損することってほとんどないだらうって思ったからさ。筆おろしをさっさと終わらせて、はいさよならでいいかなって、ガキだった俺は思ったわけなんだ」

——損、することはない、か。

「終わった時はそんなたいしたこともなかったんだ。言っとくけど、変なことされたとか、縛られたとか、たたかれたとかそういうわけじゃねえ。本条先輩と同じようなことをしたってだけで。結局終わって後、俺はやっぱり脱会の意志が変わらないってことを言って、本当にバイバイし

てきたわけなんだけどな」

天羽は具体的な行為の説明を一切しなかった。

「やっぱり、男になったなあって感動はあった。俺知っている限りだと、やったことある中学生って、本条先輩くらいだろ？ まああの人には数がすぎえからな。比較対照にはならないってわかっているけど、やっぱり俺の方が一步早く男になったよな、って自慢したくてなあ。そのこと誰に話そうかってわくわくしてたんだ。一週間くらい。もう水着の写真なんてばかばかしくて見られねえし、実際みた生のものもう一度見たくなったりと、かなりエロな妄想ばかりしてた」

——わくわくするんじゃないって言いたいよな。色々裏事情あるのはわかっているけどさ。

天羽の言葉には、相手の女性に対する感情がほとんど感じられなかった。一年前のことだし、忘れてしまっているのかもしれない。もともと天羽は切り替えの早い奴だった。

「で、一週間後。評議の用事があって学校に行って、たまたま当時の女子評議とふたりっきりになった時な」

——西月さんか。

苦そうな顔をしてつばを鳴らしたのは、気のせいだろうか。

「もともとあの頃から俺、あの女子評議のことが好きになれなかったってこと、認めていたんだ。もうこのあたりもお前は知っているからわかるよな。立村、お前の言う通り、最初は別に好きな子がいるって建前にして逃げるつもりだったんだ。向こうのいかにも恋人気取りなアプローチをどう避けようかって考えたら、それがベストだなって気がしてな。それに、うちのクラス当時、お前の知っての通り女子でひとり退学者出してただろ。なんとかクラス、なんとかせねばなあって思って頭が痛かったんだ」

意味ありげに僕を見つめ、また目をそらした。わかっている、僕の「前科」だ。

「向こうは意識してたかしてねえかわからねえけど、ノーブラでさ。まあそれほどたれてないのは見てとれたし、別にそれくらいたいしたことなかったのかもしれないしな。けど、見たとたん、一週間前の『祝・チェリーボーイ卒業！』って映像がばばばって頭の中を、駆け抜けたって感じになっちゃったんだ。うまく言えねえけどさ、立村わかるか」

——わかるよ、すごく、よくわかるよ。

頷いた。聞いているし、理解している証拠として。

「俺、慌ててしゃがみこんで、してもいねえコンタクトレンズをなくした振りしてしばらく這いつくばってたんだ。わざとらしい甘ったるい声、俺なりに出して『小春ちゃん、悪いけど、先に行って待っててえなあ〜』とか関西芸人の真似。冗談じゃねえよ。まさか、あいつにまで、ああいう反応しちまうなんて、俺としては思ってなかったんだよ。わかるか、立村」

「健康な男子」としての自然な反応。

——あの頃から、天羽は西月さんのことが大嫌いだったんだよな。

「わかるどころと、わかんないところがある。それが本音だ」

僕にはこれしか答えることができなかった。

やっぱり照れもあるのだろう。天羽はところどころにお笑いを入れて話をしてくれた。話だけ聞いていれば、ささいなこと。そんな風に思えてしまう。本当は宗教関係の複雑な事情とか、口には出せないくらいの修羅場を乗り越えてきたはずの奴なのに、天羽の言葉にはそんな汗臭さがみじんも感じられなかった。

「ま、今まで信じてきた神さまの前で破廉恥なことやっちゃったってことで、とっくに破門になったっていいような気するけど、これも運命ってやつかしらんねえ、立村ちゃん」

けど、僕の顔があまりにも暗かったのと、そろそろ部屋から顔を出し始め……男子は特に、僕たちと同じ目的でもって……トイレの様子をうかがおうとする奴が結構いたこともあって、途中尻切れトンボで終わってしまった。

「立村の質問にはまだ、答えてねえな」

僕が問い詰めようとする前に、天羽はさっさと先回りしてさらっと言っただけのけた。

「どうせ今夜、男子評議連中と部屋で溜まるだろ。続きを話す余裕はあるって。そんなすねんなよ」

——すねてなんていないさ！

——俺はただ。

言葉がうまく出てこない。浴衣の襟と帯をいじりながら僕は立ち上がった。スリッパの足裏がべたべたしていた。

「けどな、立村、お前清坂のこと、本気だな」

「本気もなにも、一応は付き合っているさ」

意味不明な言葉で返してしまった。平然としている天羽にどうすればいいか、僕だって困る。

「だったら、チャンスがあれば、いいじゃねえか」

「なにが、だよ」

さすがに他人様特に大人連中に聞かれるのを恐れたんだろう。声を潜めて天羽はささやいた。

「女みたいなこと言うようだけどさ、やっぱり、いっちゃん最初は惚れた子とした方があとあと気が楽だぞ」

「そんななに考えてるんだよ！」

「俺、はっきり言って、三年になるまでずっと後悔のしっぱなしだったんだぞ。せっかく『卒業』したのにさ」

「ええ？」

男子にとって、経験済みという印は男子限定で高い評価に繋がるけれども、天羽は反対のことを言うのが不思議だった。

「だってな、嫌いな女にもむらむらきちまうのは、やっぱり変だろ」

——それは写真だって一緒だろ！

「軽蔑されるかもしれないけどな、立村、俺がもしあのまま西月さんと付き合っていたとしたら確実に」

——まさか！

D組の男子大部屋前で立ち止まった。どくりと血が下に溜まっていくのがわかる。天羽が僕の

肩を軽く叩いた。

「一ヶ月以内に嘘つきまくっておせじ言いまくって、とにかくやらせてもらおうとしてたって、断言できるんだ」

——天羽、それがまさか。

「……答えか」

自分でも浴衣の胸元あがりがかいた汗をかいてきていることに気が付いた。歯ががたがた言っている。そんな僕は天羽にどう映っていたんだろう。声を荒げることもなく、かといってふざけているわけでもなくて、ただ本当のことなんだってことを伝えようとしてくれる。僕が去年の夏、宿泊研修の時に天羽宛に泣きつきの電話を掛けた時も、こんな冷静さで答えてくれた。やっぱりこいつには人を掴み取る何かがある。

「やっぱり立村、わかるか。ほら、中さ先に入れ。俺も戻る」

言われた通り、素直に戸へ手をかけるしかなかった。すでにD組連中の一部は布団をぐるぐる巻きにして起き上がっているようすだった。閉め際に後ろを振り返った。天羽の姿はもうなかった。

——天羽がなぜ、あんなへまな形で西月さんを振ったのか。

僕の中に働いている言葉作りの機械ががたがた動き出している。

——好きでなくても、やれるってほんとうかよ。

——しかも、うちの母さんと歳そんなに変わらない相手とだぞ？

——無理やりじゃなくて、ちゃんとできたって、ほんとかよ。

もちろん僕だって、もう少し場所とシチュエーション、あと相手が違っていたら別の切り返しができただろう。難波や更科だったら、「今後のために詳しい事情聴取をさせてほしいんだが、いいか？」と言い返し、相手を照れさせたりおののかせたりすることが可能だろう。けど、天羽の家庭事情をすでに詳しく聞かされている身としては、軽く冗談めかした形にはどうしても納められなかった。

天羽一家がとある宗教団体に去年の夏あたりまで、家族で入会していたということは、先日の件で聞いている。

しかもそこではいろいろと因縁があって、やめるのに一騒動あったということも。その宗教団体はその二ヶ月後に新聞の社会面へでかでかと載るような事件を引き起こし、結局はなりを潜めたと聞いている。ぎりぎりセーフで天羽たちは抜け出した、それはよかったな、で済ませられると思う。

三十五歳女性との初体験は、そのごたごたの流れで起ったことなのだと判断するのはたやすいだろう。天羽も「祝・チェリーボーイ卒業！」とふざけていたけれども、一番最後に「三年になるまでずっと後悔のしっぱなし」だと言ったところみると、決して幸せな経験ではなかったんだろう。残念ながら全く未経験の僕には想像がつかない。ただ、男子にとって一刻も早く童貞から卒業できることは、誇りであることも認めるしかない。本条先輩がふたりの彼女と均等に付き合い、数限りないその経験を重ねてきたことについてはいろいろ意見があるかもしれないけど、僕

の本音としては「すごい、やっぱり本条先輩はすごいんだ」という誉め言葉になってしまうだろう。僕にはまだ果てしない先の経験を、日常的にこなしているのだ。うまくいえないけれども、男子にとって初体験が早いことは恥ずべきことではない、というのが認識としてあるわけだ。僕だってそのくらい、わからないわけではない。クラスでももう済ませている奴はきっといるだろうし、そのことにとやかく言うつもりもない。ただ、すごいな、それだけだ。

けど、天羽の話によると、早く経験したからといって、「男」の誇りを持つことができる以外の副作用もかなりあったみたいだ。半年以上も後悔するしかなかったというその結論。天羽が西月さんをとことん嫌っていたことはすでに判明している。そんな相手でも、身体がしっかりと体勢を整えてしまう。それに、

——俺がもしあのまま西月さんと付き合っていたとしたら、確実に一ヶ月以内に嘘つきまくっておせじ言いまくって、とにかくやらせてもらおうとしてたって、断言できるんだ。

そこまで、そんなにまでして、したくなってしまうものなのだろうか。

グラビア写真集では間に合わないくらいに。

わからないとは言わない。僕の身体の中にもその機能や衝動はしっかり埋め込まれているし、日々罪悪感を感じたりもしているわけなんだから。でも、そこまで激しい欲望、欲情っていうのが湧き出てしまい、嫌いな女子でもかまわない、やらせてくれる相手だったら誰でもいい、そんな気持ちに天羽を追い詰めてしまうようなものってなんなのだろう。

——やっぱし、いっちゃん最初は惚れた子とした方があとあと気が楽だぞ。

本条先輩は全く反対のことを言っていたっけ。

——立村、お前、初めての筆下ろしはな、教えてくれるお姉さんにしろ。俺みたいにゴムのつけ方もわからねえうちにやっちまうと、あとあと苦労するぞ。それに初めてだっということが惚れてる相手にばれると、一生尻に引かれるからな。

関心ないなんて、絶対に言えない。今ももう、着替えしながらも頭の中には天羽の言葉が繰り返し走りつづけている。言葉だけで天羽と謎の三十五歳女性……さすがに母さんと重なるのはおぞましいので顔を想像したりはしないけれど……の、写真で見るような怪しい絡み合いがうごめいている。消したくても、どんなに忘れたくても、言葉の端で蘇る。

——だからか、天羽。

布団を畳み、隣でまだ寝ている羽飛を懐剣で軽く叩いて起こし、南雲に昨夜の謝罪……もちろん一礼程度で笑顔が返ってきたので一安心なんだが……をし、すっかり布団をはいで寝ている水口が地図を描いていないかとかをチェックし、いつもの僕の振りをした。できるだけ細かい作業を片付けることで気を紛らわせるしかなかった。だってどうして言えるだろう。

——嫌いな女子にすらそうなるんだったら、俺はどうなるんだろう。

少なくとも嫌いじゃない女子と、これから顔を合わせなくてはいけない僕の身にもなってくれ。その時僕は、また怪しい天羽の言葉を思い出すのだろうか。理性でなんとしても押しとどめたい。また思い出すたびどくどくと耳元で鳴る血の流れるような音を、清坂氏の前で聞きたくない。

朝六時。時計の針が縦に一直線。枕もとの時計が見えた。そろそろ起きないとまずいかな。上半身を起こした。隣で寝ていた殿池先生はもう布団を畳み、部屋備え付けの黒電話に向かっていて。誰かと話をしているみたいだ。

「……ああ、そう。それはよかった。それでは朝食もそちらの方がいいかもしれないわね。おかしいもの口にしたら大変だから。それではこれから行きますね」

受話器を置き、私の方を振り返り、殿池先生は顔をくしゃくしゃにして笑った。

「清坂さん、おはよう。だいぶ楽になった？」

「は、はい」

ほんとなんであんな大騒ぎしてしまったんだろう。思い出すと恥ずかしくってならない。こずえにも「あんた、誰でもなることなんだからそんな騒がないでさ」と叱られたし、何にも出来なくてただ泣きじゃくるしかなくって、まるで赤ちゃんだった。カーテンを開けて入ってくる光が白くとりけていて、なんだか気持ちやすうとした。

「そろそろ朝食だけど、気になるようだったらもう一度シャワーを浴びる？」

「え、いいですか？」

夜、シャワーを使わせてもらって、おさかな臭い匂いも消えていた。でも、やっぱり気になるものは気になる。殿池先生は頷いて、

「あとで古川さんが着替えと荷物持ってきてくれるって言ってたわよ。だからゆっくりしてらっしゃい」

「ありがとうございます」

やっと冷静にお礼が言えた。

いつもの私だ。

ちゃんと寝る時に大きめのタオルをしいて寝たのでよかったけれど、着替えの汚れとかしみとか、あとで片付けなくちゃいけないと思う。なんだかみっともない。もし、この状態をD組女子部屋で見られていたらと思うと、怖くなる。

シャワーを浴び、こずえの持ってきてくれた制服を着て、髪の毛を梳かした。

少しごわついている。なんか似合わない。直すのが面倒だった。

やっぱりおなかもまだごろごろしているし。

——だって、しょうがないじゃない。

自分につぶやいてみる。こんな自分がひょこっと顔を出してしまうなんて思ってなかった。うちのお姉ちゃんだって妹だって、生理になったからといってそんな大騒ぎなんてしたことなかったし、ただ単に「あのさー、私アレだから、ナプキン借りるね」と母さんに話しているくらいだった。お姉ちゃん、おなかこんなに痛くなかったんだろうか。こんな、寝ている時にいつのま

にか、シーツに血がついてしまっていてあせったりしなかったんだらうか。私が「生理」で習ったことは「女性の身体が成熟に向かうにしたがって怒る自然なこと」という程度だった。修学旅行前に見せられた古臭いビデオでも、生理が始まってパニックになって、男子たちからかわれて先生に泣きつく、そんなヒロインが登場していたけれど、あれって今の私そのものだ。映像で見るんだったら指差しして笑えたのに、今の自分そのものになってしまったとたん、恥ずかしくて目をそらしたくなる。

恥ずかしい、その一言。

——立村くん、も、知ってるんだ。

立村くんとよりによって顔を合わせなくちゃいけないなんて、思ってもみなかった。本当だったら立村くんと四日目の夜について相談しなくちゃいけない計画があったんだけど、今の私は顔を合わせるなんてこと、絶対にできない。あの魚臭い匂いを全部かがれてしまい、男子評議にもさんざん物笑いにされて、それに、立村くんにだって。

——立村くんに限って、そんなことないって信じているけど。

私はそう信じたかった。

——貴史にもっと気が楽だったのにな。

「美里、髪の毛直したら？ 私、やったげるよ」

来てくれたこずえが私の返事を待たずに、素早くブラシを手に襟首を押え、なでなでしはじめた。髪の毛を整えるというよりも、犬や猫の毛並みを整えるグルーミングのようにだった。

「こずえ、ありがとう」

「いいっていいって。しょうがないじゃん、初めてなんだからさ」

殿池先生が出してくれたローズヒップのお茶を二人でいただきながら、食事をする準備をした。集団でみな、大食堂で食べる予定なんだけどまだ時間がある。

「他の人たち、変なこと、言ってなかった？」

「ううん、別にね」

ちょっとこずえが口籠もった。なんかいやあな匂いがする。

「ねえ、ほんと？ うそじゃないよね」

「変なことって、うちのクラスの女子なんだからしょうがないじゃん」

こずえは曖昧な答えをまたした。

「まああんた少し変だったからねえ」

「変もなにもないけど」

わかってる。私、昨日はすごく変だった。こずえは

「わかってるくせに」

と唇とんがらせていた。

「いつもの美里なら私がやってたことをいつもしてたよねえ」

なんか今朝のこずえは意地悪だ。

「ごめんって何度も言ったじゃない！」

いらいらしてきた。せっかくこずえのために、四日目の予定こっそり立ててあげてたのに、そんな嫌味言うんだったらもうなんにもしてやんない！

「ごめんごめん、けどさ、美里もちよっと耳貸しな」

私にまたささやこうとする。殿池先生が顔を洗っているのを様子伺いながら、

「うちの女子たちと合流することになったら、少し覚悟はしといたほうがいいと思うんだ」

「覚悟ってなに」

いやあな予感がする。やはりいろいろと悪口言われていたんだろうな。人がいないところでは大抵女子ってそうだもの。髪の毛をごしごし梳かしているこずえの手、痛い。

「まあ、いろいろ言われるよね。火のないところに煙を立てたいって人たちがいるじゃない。うちのクラス、あんたに対しては永年の恨みはらさでおくべきか、って忠臣蔵めいた発想の人たちが」

——いるよね、確かにね。

思い当たらないわけじゃない。けど私は私なりに、正しいと思ってしてきたことを、逆恨みする人たちがクラスにたくさんいるってこと。球技大会、宿泊研修、遠足、クラスのロングホームルーム、その他いろいろ。評議委員会でもごたごたがないわけじゃあないけれど、他クラスの子たちとは一日中顔を付き合わせるわけじゃないし、お互い話し合う時間も濃い。クラスの女子の場合、ずうっと同じ教室に閉じ込められていて、ひとつところの空気を吸う時間は長い。けど、しゃべることったら大抵つままないことばかり。

「なんで清坂さん立村と付き合うわけ」とか「羽飛とはほんとになんでもないの?」とか「清坂さんはいいよね、いつもいいほうにばかり考えるから。そんな甘いことばかりじゃないのにさ」とか「自分がしゃきしゃきと物片付けられるからって、出来ない人を馬鹿にするのはやめてよね」とか。

——そんなの私の勝手じゃない！

最初の一、二問についてはもう言い返す気なんてない。こずえにだっていつも言われていることだし、他の子たちと私の好みが違うこと、文句言われたってしょうがない。まあ、言われてもしかたない相手ではあるんだけどね。けど、「いい方にばかり考えるから」なんて、そんなことでどうしてふくれられるのか、私にはわからない。だって楽しいじゃない。いいことを考えておけばいいことが起きるって、なんとなくほんとのことだと思えるから。悪いこと考えてるとろくなことないもの。なんでひがむんだろう。

「出来ない人を馬鹿にするのはやめて」たって、私、馬鹿になんてしてない。ただ、いつもとろとろしている人とか、先生たちに「すぐに並べ!」と怒鳴られているのに身体くねくねさせてとろとろ歩いている集団見ていると腹が立ってくるだけ。すぐに整列させて「もっと早く来なさいよ!」と言うくらいのことだ。どうして馬鹿にしてるなんてことになっちゃうんだろう。

——あ、そうそう、もうひとつあった。

「清坂さんって男子にばかり色目使ってさ。女子を馬鹿にしてるって感じ」

いかげんにしろって怒鳴りたい。そりゃあ私は貴史と親友付き合いしているし、立村くんともそれなりにそうだし、他の男子たちとも普通に話をしている。小学校の頃からそうだった。い

つか貴史とはそういうこともできなくなるかも、と思ったことがあるけれども、そんな取り越し苦労、まさに、「いいほうばかり考えていた」からうまくいったってこと。こずえだって男子にエッチ交じりの話をかましたりしているし、目立つようなこと、私、していないと思う。

——普通にしているだけなのに、みんなが勝手にいろいろ想像力たくましくするだけなのよ。なんでだろ。

「美里、もう一回言っとくけどさ」

私のかばんに入っているブロースプレーを吹きかけ、こずえは怖い声で続けた。

「何言われても、あんた、黙ってなよ。そう思われて当然ってシュチュエーションなんだから」

「なにそれ？ だからなんなのよ！」

「ほら、修学旅行で先生と同じ部屋に泊まる人ったらどういうパターンが多い？」

これは地声。聞きつけたのかもしれない。殿池先生が丁寧なお下げ編みの髪型でトイレから出てきた。洋服はカラーデニム、黄緑っぽい色合いのワンピースだった。小学校の卒業式でよく女子が着たような、縦ピンタックをたくさん取っているぶりっこ服だ。

「おねしょ、って言いたいんでしょ。古川さん？」

露骨にいやあな顔をするこずえ。こっちの方が恥ずかしくなる。さっきはぎとったタオルに、寝ている間ついた血が残っていることを思い出してしまったから。殿池先生はどう思っているのかわかんないけれど、私とこずえの顔を交互に見て、空のカップを両手で手に取った。

「誤解されるのもしょうがないかもしれないわねえ。清坂さん。でもね、今回はちょっと違うわよ」

「どう違うんですか？」

思いっきり反抗心まるまる見え見え、こずえの言葉。刺がある。

殿池先生はスカートの裾を広げるようにして私の隣に座った。正座した。

「この学年、いろいろな事情を持っている人がいるの。さっきのおねしょが直らない人ももちろんいるかもしれないけれども、それは理由のひとつだけかもしれないのよ。あまり他の人のプライバシーに関係することを話すわけにはいかないけれども、特別な病気のために病院から配布されたものしか食べられない、そういう子もいるのよ」

——病院で配布って、けどそれって、お菓子も駄目ってこと？ なんのための修学旅行かわからないじゃない！

信じられない。こずえと顔を見合わせた。またこずえってばひょっとこみたいな顔をして首を振る。

「私も何度かいろいろな生徒さんと一緒にお泊りしたけれども、生理が始まってって人もたくさんいたわよ」

つかかないでよ、こずえって言いたい。殿池先生は私の前髪を指ですくい、

「清坂さんの髪の毛って素直できれいね」

と、わかりきってるお世辞を言った。

「人それぞれいろいろな事情がある以上、詮索されてもしょうがないのよ。清坂さん、なに言われてもこの旅行中は堂々としていれば大丈夫よ。古川さんもいるし、恥ずかしいこともないのよ」

。そうね、仮に清坂さんが、おねしょの理由だったとしても、決してそれは恥ずべきことじゃないの。そうだから、そうなった、それだけのことよ」

——そうだから、そうなった、それだけのことって、それだけのことじゃあ！「もし何か、困ったことがあったら、まず古川さんに相談してみれば一番よね。先生の立場としては、一番最初に頼ってもらいたいのが本音だけでも」

——絶対、いや！

「いやに決まっているわよね。だから、まずは友だちに話してみて、ちょっと手に負えないなあって思ったところで初めて先生、という方が楽かと思うのよ」

殿池先生という人については、評議の霧島ゆいちゃんから聞かされているんだけど、ちょっと不思議な雰囲気の人という印象をもっていた。二十四時間生徒のことばかり考えているといううちの菱本先生みたいなタイプでもないし、かといって狩野先生みたいにある程度放任してよっぽどのことがなければクラスのことには手を出さない、って人でもない。いつもにこにこしながら教壇に上がって、男子たちがいろいろ問題起こしたりするたびに軽く流して、それに反発した女子たちに全部言い合いをまかせてしまう。いつのまにかそれで問題は収まってしまい、「ああ、うちの担任ってほんっと世話が焼けるおばちゃまなんだから！」とため息がひとつ残る。そんな感じらしい。普段からズボンは大嫌い、女性らしいお上品なワンピースかフレアスカートばかりはいているのだけれども、メイクや髪型もそれに合わせるもんだから顔のしわとつりあいが取れなくて、日々馬鹿にした笑いがこぼれてしまうという。C組アマゾネス軍団の統帥、と呼ばれているけれども、女子が元気いっぱい男子がちょっと地味なくらい、D組のように評議と担任が最悪の相性だったり、A組みたいに恋愛感情問題爆発で手に負えない、なんてことはない。

身支度を整えて、まずは朝ご飯を食べに食堂へ向かった。場所は夕食と同じところだと聞いている。私とこずえが廊下に出てきたところをちょうど見られてしまったのが、うちのクラスの女子集団だった。

「おはよ！ 美里ちゃん大丈夫？」

「ちゃんと挨拶しときなよ」

こずえにささやかれてすぐに手を振った。

「大丈夫、ごめんね騒いじゃって」

かえってきた一人の返事。

「元気ならいいんだけど、もし何かできることあったら言ってね」

こずえの言ったことって取り越し苦労っぽい。そう思って少しほっとした。にっこり笑えた。

「あーあ、表面と裏ってあるよねえ」

「なにが裏なのよ」

ちょっといやみっぽい。むっとした。

「ま、いっか。美里もさ、なんでもないんだったらなんでもないってことにしときなよ。どうせ生理なんて誰にでもあることなんだからさ」

「だからそれは言わないでよ！」

もうばればれだってわかっている、やっぱり隠したい。これって変？「立村だってわかって

るんだから、あと誰にばれたっておんなじじゃあないのさ。すいくんあたりがリビドー爆発させそうだけど、ああいう輩の扱い方、美里はわかってるでしょ」

——真っ正面で「しょちょう」だなんて言わないでよ、ほんともう！

なんだかまた思い出したくないことを言われてしまった。水口くんどうして、あのこと、気づいたんだろう？ こずえがもしばらしてないとしたら、あと思い当たる節ってなんなんだろう。立村くんだってどうして、あんな変な態度取ったんだろう？ わからなくなりそうだ。うつむいて廊下を歩いた。

「おはよ、美里、大丈夫？」

背中から声をかけてくる人がまたひとり。こずえが先に振り返り、
「あ、ゆいちゃん、おっはよ！」 と元気に挨拶を返した。

霧島ゆいちゃん、C組アマゾネス軍団の評議委員だ。私の前にすぐ回ってきて、いきなり頭を下げた。びっくり、立ち止まるしかなかった。

「あ、ゆいちゃん、どうしたの」

「ごめんね、美里、私、守ってあげられなかったね」

朝っぱらから、あの気の強いゆいちゃんがしおらしくうなだれている。声を詰まらせているってことは、泣きそうってことなのかな。私よりも先にこずえが顔を覗き込んだ。

「どうしたのさ、ゆいちゃんももしかしてあれになっちゃったとか？」

からかうこずえの額をこつと叩き返すゆいちゃん。無理やり笑顔を作ろうとする。こじんまりとしたかわいらしいお顔は、童話に出てくる親指姫の雰囲気。こんな可愛い子なのにどうして彼氏がないのか？といわれるけれども男子たちからすると、ゆいちゃんの言いたいことなんでもいう気性がどうも苦手らしい。もったいないな。私の代、評議委員の女子の共通点、とにかく一途な恋をすることだった。

「ばーか、そんなんじゃないって。けど、やっぱりあいつら、最低よね」

「あいつらって？」

そういえばC組評議の男子評議、更科くんも、そういえば私のことを知っているっぽかった。なんだか男子の視線が怖くなってしまう。勝手にどきどき心臓が鳴っている。

ゆいちゃんは唇をぎゅっとかみ締め、天井を指で指した。

「うちの男子評議連中よ、ほんっと腹が立つ！」

「またなにかあったの？」

こずえと顔を見合わせてみる。ゆいちゃんが二年の終りから三年に入って以来、評議の男子たちと折り合いが悪いことは気になっていたし、私も立村くんに相談したりしていたから驚きはしない。けど、よりによって私のことがきっかけなんだろうか。もっと恥ずかしい。

「なんであんなこと言いふらすんだろうね。あの馬鹿も。修学旅行中に一発、ぶんなぐってやらないと納まらないわよ。それが解剖してやるか！」

よくわからない。同じことを思ったのかこずえが、ゆいちゃんと並んでゆっくりと話を聞きだそうとしはじめた。廊下で立ち止まったままだとやっぱりまずい。

「へえ、ホームズ様とまた」

ホームズ様、とはB組の男子評議、難波くんのことだ。コナン・ドイルの傑作「シャーロック・ホームズ」シリーズをこよなく愛し、冬のビデオ演劇で「奇岩城」を推した張本人だ。ちなみに「奇岩城」の作者はドイルじゃなくてルブラン。「怪盗ルパン」シリーズの作者だ。いろいろごたごたが起こったきっかけの「奇岩城」ビデオ演劇。思い出すと泣きたくなる。「なあにがホームズよ。あんな骨ばっかの身体してさ、女なんて一生より付いてこないわよ。さいってい！」

ゆいちゃんの親指姫顔からは全く想像ができない言葉の羅列。私は慣れているからいいけど、ゆいちゃんの外見から入った人はきっとショック受けるんだろう。「あの更科日記にちゃんと抗議したのにさ、何を血迷ったのかわかんないけど難波が入ってきてさ、『評議委員会がおかしくなったのは女子のせい、特に私のせいだ！ 女子は大人しくやまとなでしこでいろ！』みたいなことを言うわけよ。なあにが、ってふざけんなばかって言いたいよね。私たちがいたから、評議がうまくいったんじゃないのさって言いたい！」

——ゆいちゃん、どうしたんだろう。やっぱり相当ひどい言い合いしたみたい。

更科日記、とはC組の相棒評議委員、更科くんのこと。苗字が古典の「更級日記」とは微妙に違うんだけど、その辺も知らんぷりしておく。

「そりゃあ、小春ちゃんと天羽とのことは私も読み間違いしたし、反省してるわよ。まさか天羽の馬鹿があんな思わせぶりなことしておきながら、小春ちゃんをもて遊んでただけだなんてさ。けど本気だったんだよ小春ちゃんは純粹に想ってたのに。口利けなくなるくらい、傷つけられる筋合いないじゃない！」

元A組女子評議だった西月小春ちゃんのことからんでいたのか。

このあたりは私も一枚かんだし、同罪かもしれない。

「それにまだ言うんだから。杉本さんのことをさ、勝手に煽り立てたのが私だっていうのよ。男子って人を好きになるって知らないんだろうね。ガキだから。あんなに一途に、水鳥の副会長にお花捧げたいって訴える杉本さんをよくそんなひどい言い方できたわよね」

現在二年、やはり元女子評議だった杉本梨南さんのことだ。これも私、一生懸命杉本さんを応援していたしいろいろ準備手伝いもした。あとで立村くんいろいろな文句言われたけど、そうしてあげなくちゃ杉本さんだって想いを伝えることができなかつたんだからしょうがないじゃないの。

「美里には悪いけど、立村もそうとうのボケよね！ もっといい男たくさんいたじゃない！ 美里っていい男見慣れているから変なのがかっこよく見えちゃうんだよ。あんないつもぼんやりしてて、みんなに文句言われていても頭下げまくってるだけなんてさ」

ぐざりと刺さる言葉。立村くんと付き合っていると、これは避けられない。

もう男子たちが相当揃っている中でゆいちゃんを怒らせるわけにはいかないし、私も立村くんの悪口を聞きたくない。

「ごめんね、ゆいちゃん。かばってくれたんだね」

話を逸らすことにした。ゆいちゃんは背伸びして私の頭に手を伸ばし、

「大丈夫、また馬鹿男子どもが変なこと言ったら、私が守ってあげるからね！」

いい子いい子してくれた。ほんとは、見かけでいったら私が「いい子いい子」する方が自然なんだけどな。

頭を上げてゆいちゃんと顔を合わせようとした。真横を向いていた。誰かいるのかと目を凝らした。

「おはよう、彰子さん、遅いよ」

話し掛けながら南雲くんが私たちの横をすり抜けていった。声の向きは食堂に入る直前の彰子ちゃんに向かってだった。ゆいちゃんはその姿を黙って見つめていた。こずえが意味ありげに私の方をちらっと見るけれども、私は答えることができなかった。だって、みな、知っていることだ。南雲くんと彰子ちゃんが大の仲よしだということを認めると同時に、ゆいちゃんはたぶんずっと、叶わない恋のままなんだということ。

ゆいちゃんにとって憧れの王子様が南雲くんだったということ。私の恋する相手が立村くんだと、評議の女子に知られた時、ゆいちゃんはいつもぶつぶつ言っていた。

「美里ってレベル高い男子の多いクラスにいるから、目が曇っちゃったんだよ」

と。女子の人気は私たち同学年では貴史、上級生が南雲くんそれぞれトップだったと聞いて、正直青大附中の鑑識眼っていったいなに？と思ったことを覚えている。ちなみに立村くんは現在過去ともにランキング外。今だに「立村のどこがいいの？」の声がかかるのが何よりもの証拠。

たぶんゆいちゃんは南雲くんをD組男子の基準として考えていたんだろう。しばらくは胸に隠していたようだけど、とうとう二年の四月くらいに南雲くんを呼び出して告白し、瞬時に玉砕した。なんでも、「俺、あまり話をしたことない人といきなりそういう関係になるのは苦手なんだ、ごめん」だったらしい。当時の軟派な南雲くんだったらそのくらい言いそうだ。

見た目お姫さまだけど、内面アマゾネスC組の女酋長とまで呼ばれているゆいちゃん。その実面食いだった。

とにかく南雲くんは全校の女子から学年問わずもてていたし、もし振られてしまったとしてもそれはしかたないこと。競争倍率が高いのは覚悟の上だったはず。振られた直後はゆいちゃんも、

「しょうがないっか。私、やれることはやったし。今度は新しい恋に生きるんだ！」

と笑顔で敗戦の弁を語っていた。まさか、その直後に同じC組の女子が南雲くんの彼女になっちゃうとは思っていなかっただろう。さらに、その何週間か後、南雲くんがその子を振って、彰子ちゃんに激しくアタックするなんて、どんなに想像しようたって難しかったに決まっている。私だって、こずえだって、想像していなかったんだから。初めて南雲くんと彰子ちゃんが自転車で連れ立って朝学校に来た時のゆいちゃんは顔面蒼白だった。

「なんで、あの子なの？」

ゆいちゃんの名誉のために言うておくけれども、一時期の彰子ちゃんバッシングは決してゆいちゃんの差し金ではない。むしろゆいちゃんはクラスの女子たちを押えようとしてくれたはずだった。本心不承不承だったかもしれないけれど、私や小春ちゃんたち二年評議が懸命に「お

願い、これ以上いじめみたいなことになるのはやめて！」と頼んだのもあったんだろう。結局南雲くんが彰子ちゃん一筋を貫いてきたこともあって、最後にはみなあきらめムードに入った。今までのアイドル南雲くんがいなくなった後は、自然と第二のアイドル探し。ひとり身の貴史に人氣が集中するようになったわけだ。あいつが鈴蘭優しか見ていないことはさておいても、まあ南雲くんと彰子ちゃんのカップルに余計なちゃちゃが入らなくなったのはいいことだと思う。

もちろん、南雲くんを「学校のアイドル」として見ている人たちはそれでよかったかもしれない。

けど、ゆいちゃんにとっては、それだけではきっと終わらなかったんだと思う。

「男子って結局女の子らしい子が好きなんだね」

評議委員会の夏合宿、女子たちみんなで恋話をしていた時、天井見上げてつぶやいたゆいちゃんの言葉を思い出す。

「性格が女の子らしくて、男を立てる奴でないと、だめなんだね」

——女の子らしい？

問い返そうとしたら、

「結局、男のご機嫌取りをしないと、誰も好きになってくれないってことだね。けど私」

ぐいっと私たち女子評議をにらみつけた。お人形さん顔が般若に化けた。

「男に頭を下げるくらいだったら、一生嫌われものになってもいい！」

あの時の迫力を思い出すたび、私は怖くなってしまう。女子にはめっちゃくちゃやさしくて、けど男子に対しては決して頭を下げない、そんな意地、どこから来るのかなんとなくわかったような気がしたからだった。

食堂に入ると、もうD組の男子連中は席に着いていた。各クラス一列ずつ、向かい合う形になっているのだけれども、前側に女子が、出口側に男子というふうに分断されていた。いつも男子と女子一緒にいることが普通だったせいか、違和感ありだった。貴史たちは女子たちと顔を合わせて「早く食わせてくれ、頼む！」と手を合わせていた。立村くんは入り口の方で何か小さい声で挨拶してくれたみたいだけど、私の顔を見ようとしなかった。眠いのだろう。

「ねえ、どうしてなんだろうねえ、納得行かないよねえ」

せっかく貴史と一緒に顔つき合わせて朝ごはんぱくつくつもりだったんだろう。こずえがぶつぶつ言っている。

「うーん、ご飯の奪い合いになるからじゃあないかなあ」

私の隣に座って、女子グループみんなにご飯を盛り付けている彰子ちゃんがにこにこしながら答えた。二の腕のところが少し揺れているのが目についた。

「彰子ちゃんナイス！ 鋭いねえ。そりゃあうちの男子どもの食欲、性欲、共にマックスだと思うなあ」

一人で納得してるんじゃないの、と言いたいところだけど余計なことを言うと悪目立ちしてしまいそうなので言葉を飲み込む。彰子ちゃんとかずえの間に挟まっているおかげで、他の女子たちから「ねえ、どうして昨日先生のところで」みたいな質問を投げかけられずにすんだ。結構多

いんだ。女子同士って。ちょっと髪型を変えたくらいで「彼氏が代わったんじゃないの？ 立村と別れたんじゃないの」って聞かれるし、先生に貴史と一緒に呼び出されたりすると……別に怒られるために呼ばれたわけじゃないのだけでも……「やっぱり清坂さん羽飛と付き合っているんでしょ。立村はカモフラージュなんですよ」って言われる。全員揃ったところで菱本先生の号令により、「いただきますーす」の大合唱。

小学生じゃないんだから。それに意味なくなっている。もうとっくに貴史とか他の男子たちはのりと卵を混ぜ混ぜしながらご飯にぶっかけて食べまくっている。こずえじゃないけど「食欲」はマックスな連中だ。

「ほら、立村がこっち見てるよ」

男子たちの席は私たちの真後ろだった。大きな炊飯器を二台、男女の境とて置かれている。わりと私の方からは男子連中がどんな顔して私たちを眺めているかとか、何を平らげているかとか、だいたいわかる。でも昨夜のことがあったし、きっとすい君を代表としていろいろ「やーい、お前『日の丸』なんだろ！」とか言われるのは覚悟していた。騒ぎすぎた私がいけないだもの、しょうがない。

「ほらほら、立村も低血圧な奴だから、ぶすっとしてるねえ。はっとば一、なんか分けようか？」

こういうところでアピールを欠かさないのもこずえだ。ちびっこい誰か……たぶん水口くんだろうな……が、

「お前今日は大丈夫なのかあ？」

と意味不明な言葉を発し、貴史に頭をはたかれている。妙にみな、私の顔を見て意味ありげに立村くん話し掛けるのだけれども、すい君以外変なことを言ってこない。助かるけど、かえって緊張しそうだった。

「美里も元気だってこと言ってやんなよ、ほら立村、あんたもなんとかいいなよ！」

——言わなくたっていい！

こずえって私のことを理解してるのかしてないのかわかんない時が、たまにある。顔、正面から見られるわけ、ないじゃない。

男女の境に位置しているのは彰子ちゃんと南雲くんだった。彰子ちゃんの名誉のために言うておかなくちゃいけないことなんだけど、決してD組のらぶらぶカップルが計画立ててそういう並びにしたんじゃない。少なくとも彰子ちゃんは。南雲くんがどう思っているかはわからないし段取りを立てていたのかもしれないけれども、彰子ちゃんは絶対、関係ない。べたべたしたいわけじゃあないと思う。

「ねえねえ、彰子さん、魚半分食べてやろうか？」

「ううんいいよ。あきよくんこそ、納豆私もらおうか？」

——けどやっぱり、いちゃついている。

きっと彰子ちゃんは他の男子たちにもこうやって笑顔のまま、かわしているんだらうなと思う。えこひいきしないところが彰子ちゃんの良さだってわかっているんだけど、他の女子たちにはきっとそう見えないんだらう。反対側の女子たちと、私たちの隣列に陣取っているC組女子た

ちの視線をじんじんと感じてしまう。男子たちからはそれほど聞こえてこないけど、女子たちにだけははっきりと感じられる空気の冷たさ。きっと南雲くんはわかっていないんだろうな。こんなおおっぴらに彰子ちゃんへ甘えるなんて。

——ゆいちゃんも、見てるんだろうな。

さっき、「ごめんね、美里」と頭を下げてくれたゆいちゃん。

彰子ちゃんともゆいちゃんとも友達だから何にも言えない。今の立場だった。

このふたりが仲良くなればなるほど、悔しくてならない人がたくさんいる。

決して彰子ちゃんのせいじゃないけれども、一途な思いって男子にとっては迷惑でしかないのかもしれない。

評議委員の女子たちに関係する、恋の出来事を見つめているうちに、私がなんとなく感じたことだった。

——男子って。自分からいっぱい好きになれる人には、一生懸命になれるのに、男子って残酷だね。

けど、誰にも言うことができなかった。

男子には、たぶん立村くんも含まれているから。

D組の男子ときたら、南雲くんがそれぞれに耳打ちしたとたんみな、一斉に食堂を出て行ってしまった。食事の後は後片付け。これが常識。当然男子連中もみな、手伝ってくれるもんだと思っていた。なのにだ。立村くんがなんだか何度も後ろを振り返っていたのだけが救いだった。もっとも南雲くんは背中を押されて出て行ったのは同罪だけでも。

「ねえさん、サンキュー」「ほんっと、日本の女の鏡!」「今度肉まんおごるぜ!」

やたらと威勢のいいお礼の言葉は、どうやら彰子ちゃんに向けられているらしい。本当はクラス全員で片付けるのが当然なのに。しかも女子だってそれに釣られた振りして戻ってしまった子もいる。彰子ちゃんは全然困った顔しないで、鼻歌歌いながらお茶碗をまとめている。C組みたいに、男子たちがなんと言おうときちんと命令させて、全部片付けるのが正しいと思う。ずるいと思う。私もこずえと同じ意見だった。

「ほら、あんたら、早く片付けな! ほらあんたも味噌汁せっかく出されたもん、残すんじゃないって。箸はちゃんと男女分けて!」

C組側の食器を片付ける係はゆいちゃんのようなようだった。うちのクラスみたいに一部の女子たちだけが全部片付けの手伝いをしているのとは違う。おびえているのかC組の男子たちも必死にお茶碗を重ねたり箸をまとめたりしている。言い返そうともしないのは、あとが怖いからだろうか。他の女子たちもまだテーブルを囲んで男子たちの行動を監視している。ちなみに女子たちは、やっぱりゆいちゃんの号令で片付け終了している。

後ろを見やってこずえも頷く。

「彰子ちゃん。やっぱりここはC組を見習って、男子連中にも一声言うべきだよねえ。これってずるいって」

「いいよいいよ。さっきね、あきよくんが言ってたんだけどね」 私も焼き魚の盛られていた

皿を、残り物と一緒にまとめる手を止めず、耳を傾けた。またにっこりと、彰子ちゃん。

「今朝はずいぶん男子、大人の行動してるねえって聞いたら、立村くんが男子たちに命令したんだって言っていたよ」

「え？」

そんなふたりきりの会話に、立村くんの話が混じっているなんて思わなかった。こずえがまた私を肘でつつく。

「おもちゃの短剣片手に、もし美里ちゃんのことをいじめたりからかったりしたら、叩くぞってすごんだらしいよ」

「ま、まじ？」

声が出るわけない。思わず口を押えるこずえがいる。相変わらずぽちゃぽちゃのほっぺたをゆらすようにして、彰子ちゃんは続けた。

「私ね、それ聞いて、やっぱりD組の男子はいい人ばかりなんだなって感動したんだ。だから、あきよくんに伝言したんだ」

「伝言って、何を？」

彰子ちゃんは残りの残飯を小さく固めて、専用のトレイに全部放り込んだ。手が汚くなるのも気にしないで。

「その心意気、私が女子代表して、受取ってあげるって。立村くんがそう言ったのもえらいと思うよ。けど、もっとえらいのは、その言葉をちゃあんと受け取って、美里ちゃんに『紳士』の行動をしてくれたうちのクラスの男子じゃないかなって思う。だから、後片付けくらい、全部やってあげるってことにしたの。あきよくん、喜んでたよ。男子も、きっと嬉しいと思うんだ」

——彰子ちゃん、どうしてそう考えられるの？

私が呆然とテーブルを押えていると、彰子ちゃんは空いたところをふきんで軽く拭いて、「やっぱり、私の周りの人たちっていい人ばかりだなあって思えたんだ。美里ちゃん。D組でよかったね！」

みんな、私が前向きすぎるっていうけれど、彰子ちゃんにはかなわない。

——立村くんが？

そっと目を閉じ、立村くんの食事時の表情を思い出そうとする。

顔なんて見られなかった。

どんな顔で私を見ていたかなんて、気づかなかった。

不機嫌そうに箸の先かじっていたんだろうとしか思わなかった。

——私のために？

荷物をまとめ、殿池先生にお礼を言って、旅館玄関前に整列し、D組一同の点呼を取っている間も、立村くんは私の眼を見ようとしなかった。どうしてだろう。合いそうになると逸らす。

「立村くん、あのね」

「荷物、持つよ」

全員揃っている。そのことを伝えた後に、どうしても言わなくちゃと思って声をかけたのに、返ってきたのはその一言だけだった。私の返事を待たずに、立村くんは目を伏せたまま、私の一番大きい荷物を片手で持ち上げた。

「今すぐ使うものないだろ。なら預かるよ」

「え？」

「今日泊る旅館に着いたら、入り口まで持っていくからさ」

どうして目を見てくれないのか、わからない。この人の癖で人見知りっぽいところがあるのはわかっているけれども、空が明るすぎてまぶしすぎるからだろうか、目をやたらと細めている。

「いいよ、だって立村くん、目立っちゃうし」

いつもだったら私が立村くんの手伝いしてあげるのに。なんか順番が逆だ。私は指を絡めて、立村くんの顔をもう一度見ようとした。ついに視線がかち合ったとたん、びくんと身体をこわばらせた。

「私のことで、からかわれたりしない？ 恥ずかしくなんない？」

——あんな、すごいこと、男子たちに言っちゃったなんて、いつもの立村くんなら絶対しないよ。

——どうして、私のことを？

言葉を飲み込んで反応をうかがう。ゆっくりと立村くんは、私の方を見つめて言い切った。かばんの柄は手放さないままだった。

「恥ずかしくても恥ずかしくなくても一緒だ」

また視線を逸らすと、立村くんは一番前に並び、菱本先生へ、

「全員揃いました」

私のかばんを足下に置いたまま、報告した。

——やっぱり恋女房には惚れぬいてるんだなあ、あいつ。

——短剣持ち出してだぜ、「俺の女に手を出すな！」だもんなあ。

——アレになっちゃった彼女だもんなあ。超恥ずかしいよなあ。

他のクラス男子がささやき合っているのが聞こえる。

——立村くん、聞こえてないわけ、ないよね。

「それでは、A組からバスに乗り込んでください。順番を崩さないように」

先生たちの指示に従い、バスの乗車口へ向かうまで、私の隣に立村くんはいた。移動する間何もしゃべってくれなかったけれども、両肩に重たそうなかばんを抱え、真っ正面を向いたままでいた。

うちの学校の修学旅行ってのは、どうも公立と全然違っているみたいで、結構自由時間というものが多い。俺も公立の連中から噂で聞いた程度だし、はっきりしたことはわからないけれどもだ。いかにもお寺とか、いかにも博物館とか、いかにも遺跡とか、そういったご立派なものを見て歩く予定というのがそれほどない。

三日目、四日目がまるまる自由時間で、いろいろと好きなのところを自分らグループで組み立てて歩け、っていうのもさすが私立、太っ腹だなあと思う。まあ、俺からしたら「見るところのないところへ行くんだから、自分らで少しは行くところ考えろ！」っていう、学校側の手抜きだと思うんだが、いかに？

「四日目の夜は、一応最大イベント、ほたる観賞ってのがあるぞ」

バスの中で相変わらず、菱本先生は熱く男子連中と語り合っている。どうやら一日目夜、深夜の野郎部屋見回り時間を活用して、他のクラス男子たちに「人生とはなにか？」「将来の夢とはどんなだ？」などなど、いろいろと吹っかけてらしい。俺たちのクラス部屋にはちらっとしか顔出さなかったのはそれで時間食ったせいだろう。昼間、しゃべるだけしゃべったからまあいっかってことだろうか。その辺は俺も知らん。

「青潟から中学修学旅行で行くことのできる距離は、限られているからなあ。そのくせ四泊五日なんていうとてつもなく長い旅行ってのは、やはり、人間形成のためってことでな、少しでもお前らが自分の力で楽しんだり勉強したり、努力したりすることを学べっていうことが目的なんだぞ」

——よおわからねえなあ。

俺からしたら、修学旅行のお約束みたいに、みな列に並ばされてつまらん博物館を見せられて、ちょっと騒いだら怒鳴られるってパターンから外れるだけでも満足なんだが。明日から始まる自由行動予定は、二日分かなり細かく設定させられたけれども、まあそれはそれでいいかって感じだ。

立村曰く、

「本条先輩が教えてくれたよ。最初の一時間で行くべき場所のスタンプとか、写真とか、そういうものをカメラで撮っておいて、残りの時間は好きなのところに行くんだってさ。本条先輩が行くところといえば決まっているけれど、そんなところでもなくていいんだってさ。あ、そうだ、カメラの日付、解除しとくのは絶対忘れるなよ、って念押しされた」

——なるほどな。こうやって、ガキは大人になっていくわけだ。

つくづく知恵がついてきたなと俺は思う。えらいぞ、立村。

「でなあ、羽飛、お前も知っていると思うが、いかにも修学旅行の行事ってのが、今日一日こっぴりしかないんだぞ。帰ったら修学旅行文集作るからな、このあたりのレポート必ず書かせるから、しっかり聞いておけよ」

——有名な画家さんが坊さんしている寺だもんなあ。

後ろの方で水口の隣に座り、さぞやどきまきしているであろう金沢の顔を見たかった。

「おーい、金沢、いるかあ、こっち向け！」

バスの中でのゲーム大会を行うに当たり、俺としてはだいたいどういう顔をみんなしているか、チェックしておきたかった。前々からわかっていることだけれども、バスの中で評議委員長の立村はまったく使い物にならない。俺が完全、バスの中限定、D組のリーダーにならざるを得ない。それにもっと痛いことに、

「おーい、美里、生きてるか」

「死んでないわよ」

——死んでる声しているくせに。

あいつが無理しているってことは、腹をしぼったような声を出していることからして明らかだ。こういう病人を場の盛り上げのためにだけ引っ張り出すのは人道的にもよろしくないと思える。美里がどうして死んでる声出しているかについては、昨日いろいろあったし、いやおうなしに俺たちも保健体育の試験内容思い出すはめになり、最後は立村に怒鳴られるという前代未聞のおまけ付きで理解するに至る。

今俺の隣でしっかり寝た振りしている立村をそのままにしておき、俺はバスガイドのおばさんに、

「すみません、マイクもう一本貸してほしいんですけど」

にっこり笑顔で尋ねさせていただいた。最近の俺は妙に、全年齢女性に受けがいい。なぜなんだ。

「はいはい、毎年担当させていただくけれど、本当に青大附中の学生さんって、明るくてのりがよくていいわよねえ」

——一部、除く、な。

すっかり乗っている担任もいるしだ。お世辞か本音かわからんが、菱本先生はすっかり乗り気、下手したら音痴な唄をひとりで熱唱しかねない。バスの空気をにごらせるくらいの、音程の外れ方。あれを一度聞いたらバス酔い者続出だ。俺は腰を上げかけた。しっかりチェックされた。さすが担任。

「羽飛、よっし、お前に任せた！　じゃあお前の仕切りで何をやるんだ？　『古今東西』か『男女対抗歌合戦』か」

やっぱりこれっきゃないだろう！

「とりあえずは校歌斉唱で行くか！」

後ろ側から女子の声援が飛んでくる。約一名、割り込む声もある。

「鈴蘭優の新曲、はとばあ、振りつきで歌ってよお」

どうやら俺の永きファンのお声らしい。しかし今回の優ちゃんの曲は、夏向けアップテンポってことで、かなり恥ずかしい。いや、踊れないわけがないじゃないか。新譜発表の段階で雑誌の付録を手に入れ、そこから振りまでちゃんとマスターした。すごいだろ。がしかし。

「一緒に踊ってあげようかあ？」

あわわ、と両手を合わせておちゃらけるしかない俺。

——古川頼むそれだけはやめてくれ！

つくづく、今年のバレンタインデーにこいつからチョコレートを単独でもらうことを拒絶したことを後悔した。

古川の性格がそういうことをねちっこく覚えているようなタイプではないことを二年の付き合い上、知らないわけではない。決して悪い奴ではないのだ。むしろ、恋愛感情なんて余計なものなければいい奴なのだ。ただまあ、俺としては優ちゃんへの操を立てたいとばかりにつき返してしまった。ちなみにそのチョコは立村に渡し、立村が俺たち仲間内に細かく砕いて配り、一応俺も少しかけらを食った。悪い、古川、これが今の俺の誠意なんだ。ということで。けどやっぱり感情を傷つけたことを反省せざるをえない。ごめん、悪かった。俺が悪かった。と立村みたいに頭を下げたくなる。

「羽飛、俺も見たいぞ、やれやれ。場所もほら空けてやる」

ひつまめ髪のバスガイドさんも自分の椅子に座り、ちゃんと俺用のダンスステージ空間を通路に作ってくれている。もっと頭痛くなることに、運転手さんとバスガイドのおばさん、目と目を合わせて頷いてるぞ。いいのか仕事こんないいかげんで！

「は一と一ぱっ！ は一と一ぱっ！ 待ってましたっ！」

暖かい声援は全員からと言えない。一部の男子どもが胡散臭そうに俺をにらんで、無視してジュース飲んでいるのを見た。

こういうのって、宣戦布告っていうんだよな。よっし、やったるか！

「任せろ！ じゃあ行くぜ！ 『ダンシングロリータ』の常夏バージョンだあっ！」

狭いバス内空間が一気に汗臭くなったのは気のせいだろうか。俺が動いたら熱気でたぶん、空気はすごいことになるだろう。たぶんその犠牲者として酔っちまうだろう、今寝ている隣の奴は。起こさない方がいいかもしれない。

うるさそうな顔して、窓を見ていた立村が薄目を開ける。頭が痛そうだ。

「頼むから、音程外すなよ」

それだけつぶやき、またあいつは目を閉じた。

アンコールも入って三曲熱唱した後、ようやくバスは本日のメインたるお寺さんへと到着した。「聡明寺」とかいう、禅寺だと一応「修学旅行のしおり」には載っている。けど俺たちにそんな詳しい歴史なんて知る必要さらさらない。唯一、金沢から教えてもらった、超有名な画家さんが住職だっという情報だけだ。なんでそんなところにまる一日、いなくちゃいけないのか、そっちの方がなぞだ。俺には今だに理解できない。

いかにも寺、だけどやたらと建物の雰囲気は、今建てたばっか、といった感じだった。

物凄く古い寺とは聞いていない。きれいなことはいいことだ。門の奥には、だだっぴろそうな建物がどかんと待ち構えている。けど果てしなく遠く見えるのは、その前にやっぱりちょっとした公園程度のめちゃくちゃ広い芝生が広がっているからだ。途中で鯉が何十匹か泳いでいそうな池とか、石橋とかそういうもんもあったけれどもその辺のよさは俺もよくわからない。名所としてくるようなところではないな、というのが正直な感想だった。

外の空気を吸ったとたん生き返った立村にその辺は聞いてみることにした。

「あのさあ、なんで俺たち、こんな寺なんかにあ」

「ここで昼を食べて、それから中に並んでいる庭とかを見学して、それから少しこの中で自由時間をとって、って形の方がいいんだってさ。俺もこの辺よくわからなかったけれど、やっぱり広いな。一日いても飽きない寺って本当だな」

修学旅行前の情報集めおよび資料では、かなり広い仏教の寺らしくて、写経だとかお坊さんのありがたいお言葉とか、その他墨絵などなど体験学習ができるようになっていっているらしい。俺の聞いたところだと、当日何をやるかなんて全然聞いていない。立村も情報をかなり集めたらしいけれども、本当のところはわからないらしい。

「体験学習ってのやるのか？ 俺やだぞ。正座して黙って文字書きつづけるなんてさ」

「こんな暑い中でやるはめになったら死ぬよな」

六月だっただのに妙に暑い。立村きつと長そでの上にブレザーなんて非常識な格好できたことを絶対後悔しているに違いない。でもまあ、立村に対しては、少し写経でもやって、自己を振り返ってもらった方がいいんでないだろうか。特に昨夜の言動、ありゃあ、ちょっと頭冷やせって言いたくなるぞ。いくら惚れた女のためといってもな。理性を一応は取り戻したらしい立村は、「修学旅行のしおり」本に貼り付けたパンフレットを開き、ご丁寧に読み上げた。

「『写経・墨絵・写仏』のうちどれかをたぶん、やらせられると思うんだ。けど、一体何考えているんだろうな。俺だったら学校にいる間にみな、誰が何をやりたいか、振り分け終わらせるけどな」

「振り分けって、おい、もうされてるんでねえのか」

ちらりと、「墨絵」をやりたであろう金沢の顔が掠めた。あいつどこいったらう。

「希望者が殺到すると困るから、先生たちの方でその場になって発表だってさ。本当は最初、女子全員精進料理作りに割り当てて、男子だけこの三つにしようかって話があったらしいんだ。けど、一部から『男女差別』って声があがって、急遽中止」

「おお、俺だったら精進料理やりてえなあ。だって食えるだろ？」

家庭科は結構好きだ。もちろん調理実習限定だが。野郎だったらこれは本音だろう。けどそういう声が男女差別のお声により却下された以上、あるものを選ぶしかないってわけだ。俺は立村と並んで歩きながら、なにげに尋ねた。

「お前、何やりたい？」

立村は白い砂利を踏みしめながら、でっかい松の木を眺め、やたらときんきらした寺の門の前で立ち止まり、頷いた。

「やっぱり『写経』が楽かな」

——わかってるじゃん、お前、自分に何が必要かって。

ばらばらに寺の芝生に入ってきた我が青大附中一同だったが、全員揃ったところで一応整列させられた。同時にでかくて白い普通の建物から、暑苦しそうな袈裟姿のお坊さん五人がそろそろと現れた。あの中に、その有名な絵描き坊さんってのはいるんだろうか。ちらっと金沢の方に目

で聞いてみると、なんとなく、「いる」って顔で大きく頷いた。本当なんだろうか。全然なんでもなさそうな顔しているし、そんな有名人がなぜ、修学旅行生なんかを迎えねばなんないんだろう。

一番えらいんであろう、その坊さんはめがねをかけた、ずいぶん若い感じの人だった。——いや、ほんと、こいつなのか？

なんか、A組の狩野先生を思い起こさせるあくのなさ。

——芸術家ってもっと、キーっとか言って猿みたく騒ぐってイメージあるんだけどなあ。ごめん、世界の芸術家のみなさま。

——けど、芸術家だったらもっと、情熱的なごあいさつとかするんじゃないかなあ。

俺なりに期待はばりばりにしていた。が、しかし。

穏やかな顔でもって、静かに一礼した後で、

「今年も青潟大学附属中学のみなさまをお迎えできて、私たちは大変嬉しく思っております。人と人との出会い、一期一会と申しますが、この一日においてみなさんの心に何かを、ほんの少しでも残すことができれば、幸いです。本日はどうぞよろしく願います」と、めちゃくちゃありふれたお言葉のみ。見かけだけじゃない、内面もなんだかA組担任の乗りだ。悪いけど、金沢の描いた風景画を見た時と同じような感想を持ってしまった。——ごめんな、金沢。やっぱし俺は、アバンギャルドな方が好きなんだ！

今日の予定は集団でうろつくのが目的ではない、という別の坊さんの説明の後、とりあえずは各クラスごとに行動するように指示された。広い敷地っていうのには意味があるらしく、俺たちみたいな修学旅行生とか、観光客を相手に、「体験学習」みたいなことをさせるのがメインだということを、やっと俺は理解した。だから「写経・墨絵・写仏」だったんだろう。俺にはこの三つ、何をやるんだか全く見当つかないけれども、もしやるんだったら墨絵の方がいいと遠慮がちに思う程度だった。絵を描くのはやっぱし、好きだ。

三十人で男女二列になり、立村と美里が先頭となり、案内してくれる坊さんの後ろについて、まずは寺の中を一巡りした。いや、寺という感じじゃあない。ごくごく普通の旅館、って雰囲気だ。和室ばかり、唯一奥の方に仏像っぽいものが覗いていたけれども、なんだかありがたみが全然感じられない雰囲気だった。同じことはみな思っていたらしく、ありがたい部屋それぞれの説明にも、誰も聞いちゃあいない。みな一つのことしか考えていないんだろう。「昼飯まだか」って。

「それでは、まず、昼ご飯にしましょうか。では、よろしくお願いいたします」

菱本先生とお坊さんは二言三言、なんやかんやと話をした。その後、静かに坊さんが去っていった。ちゃんと了解済みって感じだったけれども、立村も美里も、その辺全くわからないらしい。おとなしく様子をうかがっていた。いつもだったら立村がこの辺、さっさと仕切るところなんだが、宿泊研修と違ってやっぱり修学旅行は大人の権限が強いつてことなんだろう。くやしいべな、とちょっとばかり同情じた。

——まあいっか、美里とこの旅行中、かなり進展しそうだしな。俺なりに応援してやっか。

にんまりと俺はウインクを送ってやろうとした。後ろの南雲と目が合い挫折した。

まあいつもよりも朝飯は軽かったし、入らないことはない。好き嫌いなんてない、とにかく食いたい。寺の中に入ってみると、なんというか、やたらと広い。池と橋があってあとは砂利と芝って感じの、一種の公園だ。せっかくだったらここで敷物広げてねっころがっていたいのが本音だが、そこが禅寺。しっかり修行させようってことなんだろう。

菱本先生は俺たちD組一同をざざっと眺めた後、立村と美里に、
「まず、背の順で先頭から五人ずつに分けてくれ。評議はみな自分の背の順のところに並んでくれよ」

と指示を出した。これって立村にはかなり酷だろう。特に背丈についてかなり気にしている性格の奴にはだ。哀れだがしかたない。立村がまんなから辺に入り、その後で数字点呼を取り、
「それでは、悪いけど五、十、十五のところで分かれてもらえないかな」

立村は数えるのが非常に不得意なので、D組でこういう風に数字が絡む場合は、こうしてやっていた。ちなみに美里のアイデアだ。さっすが彼女。奥が深い。

背の順番となると、当然俺は当然後ろの五人組に混じることとなる。立村は十で区切られたグループに入っている。あいつ、背の高さをやたらと気にしているから相当悔しかったんだろう。思いっきりむっとした顔をしている。もっとも俺だって南雲と同じグループってのがかなりむかつく。何を好き好んで、だ。

「なんだよ、これって。先生、五人ずつ分けてどうするっすか？」

南雲が面倒くさそうな声を上げた。たぶん俺と同じこと考えていたんだろう。お互い様だ。天敵同士が同じグループってのを知ってか知らずか、菱本先生は答えた。

「一部屋五人ずつに分かれて、まずは精進料理を食うことになる。いいな。楽しみだろ」

いきなり俺の頭をぽんと叩く奴がいる。木魚じゃあないんだから。振り向くと相手は菱本先生だった。

「どうした納得いかなさそうだなあ、羽飛どうした」

——まさか南雲と別のグループに入れろなんてガキじゃねえし言えねえよ。

その辺、俺だってそれなりにデリカシーってもんがあるんだ。ちらっと南雲と目が合った。思いっきりむっときた。こいつもたぶん、俺と顔つき合わせるなんてたまったもんじゃねえと思っている。たぶんだけど、俺と立村をトレードしたいんだろう。立村がもし前もってクラスの食事組をまとめてくれていたら、火と油の俺と南雲を組み合わせるんてことしないだろう。なにげに立村の顔を覗き込むと、すっかりふてくされているってのが見え見えだ。女子たちも似たような感じらしい。好きな奴同士のグループで大抵動くのがいつものパターンだったんだが、この旅行については基本的にみな、「背の順」を最優先するらしい。大人たちの発想だ。立村ならば決してそんなことしなかつただろう。

けど、つまらない思い出ばかりで終わらせたくない修学旅行ってのもある。

「先生、あのさ」

思いついたことをだめもとで言ってみた。もちろん菱本先生の耳もとに、こしょこしょ話する

みたいいだ。他の奴に聞かれたらまずいだろう。

「ちょっと、折り入って相談にのっていただきてえことあるんだ。金沢のことで」

「金沢か？」

ちなみにあいつはちびだから前の第一グループ五人組に入っている。

「できればさ、金沢を混ぜた格好で話したいんだけど、だめかなあ」

菱本先生は俺の顔をいぶかしげに眺めた。それほど「こいつばかじゃねえか」みたいなことを思われているわけではなさそうだ。変な話だけど、俺は菱本先生に思いっきりひいきされている自覚、大いにある。

「ほう、それはなぜに」

「ちょっと、できればさ、三人だけでさ、聞いてもらいたいんだわな」

教師に対して敬語を使わないと怒られるのはよっくわかってるが、時と場合により親しみ出すと、この先生結構喜ぶことも過去三年間の経験でマスターしている。俺だって学習能力それなりにあるんだ。「そうかそうか。今すぐなのか？」

「もちろん、この寺にいる間でねえとな」

「それはどうしてだ？」

「実はさあ先生」

なにげなく「先生」という言葉も混ぜておくと、効果的だ。二十九歳、男、独身、彼女いるらしい。菱本守くんはさっそく俺にかがみこむようにしてきた。いい調子だ。後ろで露骨にいやな顔して空見上げているのは立村だ。何もそんな見え見えのことしなくたってよかろうに。

「金沢は今、人生の岐路に立ってるんだ。けどやっぱ、こういう時、人生経験豊富な男でないと、話にならねえって思ってさ」

悪い、金沢。ちょっとばかし、フライングしちゃった。でもまあ、たぶんうまくいくからいいよな。

ぶるんと首を振って俺は金沢に呼びかけた。

「おーい、金沢、ちょっと俺のところさ来いよ！」

——あいつ、俺に人生任せたって言ってたしな、まあいっか。

結局、菱本先生の判断により、俺と金沢が同じ班になり、立村がその穴埋めをする形で南雲たちのいる後ろ五人組に入った。一番いい形じゃねえかと俺は思う。

俺が昨日の夜から今朝にかけて、金沢の人生相談を聞いているうちに思いついた案というのが、

「菱本先生を丸め込み、正々堂々と絵描きのお坊さまに会わせてもらう」

ってことだった。金沢の希望としては本当だったら、

「いつぞやの立村みたいにこっそり抜け出し、直接絵描きのお坊さまのいる場所に飛び込んでいて、『頼みます、どうか俺の絵を見てください！』と土下座する」

という形だったらしい。

夢見る少年よ、それは甘いと俺は思った。

だって、いきなりクラスから抜け出してみろ、まず誰かかしらにとっつかまってしまい、下手したら明日以降の自由時間、旅館の中に閉じ込められるはめとなる。冗談じゃねえ。しかも協力者も一緒におだぶつという可能性だってあるわけだ。俺としてはそれは避けたい。

もっとも金沢にそのことを説得するには時間がなかったんで、結局こういう抜け駆けをするはめになってしまったんだが。悪かった。

「羽飛、なんでしゃべったんだよ。恥ずかしいよなんだか」

「まあいいってことよ。悪いようにはしねえよ。金沢、お前の心意気を無駄にはしねえよ」 金沢は怒っていなかった。ただ、顔をやたらと真っ赤にして、

「けど、やっぱり、目立つよ、恥ずかしいよ」

を連呼している。そりゃあ動揺しているだろう。結局担任にばらされちまったんだから。立村だったらこんなこと、絶対にしないだろう。菱本先生を天敵だと見定めて戦うことしか考えていない立村だったら、だ。たぶん俺にも金沢は、同じ対応を求めてきたに違いない。けどだ。

「大丈夫だつうの。な、金沢」

俺は菱本先生が入ってくる前、金沢へささやいた。

「楽なやり方だって、うまくいくことには変わりねえだろ。安心しろよ」

菱本先生を丸め込むことにした理由。

俺、金沢、そして菱本先生は三人前の方に固まった。他の三人、水口を中心とする輩はひたすら味の薄いごま豆腐とか、量の少ないお粥だとか、サトイモの煮っ転がしだとか、そういうものを食いまくっている。十五歳男子にはあまりにもカロリーが少なすぎる。なによりも精進料理って、肉がない。殺生を禁じているというのが、食う前に説明してくれたお坊さんのお言葉なんだが、俺はたまらなく肉が恋しくてならなかった。お膳のすみからすみまでなめまくったが、まだ腹が半分空いている状態だった。金沢はまだ、六面体のサトイモを口にほおぼりながら、ぼそ、ぼそ、と言葉を発している。白い障子に六畳間、ちっとも旅行に来たって感じじゃない。水口たちを無視してひたすら俺たちはひとつの相談に専念した。

「いやな、本当は何か持ってこさせようかとも思っていたんだよな。金沢もめったにこういう直接、絵について話を聞かせてもらう機会少ないだろうしな。でも、他の先生たちがな、ひとりだけ特別扱いするのはちょっとな、というご意見だったんでな。いや、悪かった」

菱本先生、完全に俺の読み通りだった。この先生、立村が思っているほど話のわからない大人じゃない。入学した時からその辺は十分承知していた。少なくとも俺が小学校五、六年の時に受け持たれた沢口みたいな奴とは違う。ちゃんと納得するまで俺たちの話を聞いてくれたし、時には徹底して俺たちの味方になってくれたりもした。立村は気付いていないかもしれないけれど、二年の夏、宿泊研修でやらかしたあいつの脱走劇、あれだって最終的に菱本先生が身体張って、他の先生たちに緘口令をひいてくれたから、なんとか停学食らわずにすんだらしいと聞いた。立村の奴、なんでここまで菱本先生を嫌いまくってるのか、俺にはとんと理解不能だ。そりゃあ、班ノートに熱く人生論を語られると、こちらとしては聞くしかなくて「はあ」しか言えない時

もある。いろいろ裏で悪さやったこともある。けど、この先生の扱い方をマスターしたら、これほど味方になってくれる大人もいない。そう思うのだ。だから俺としては当然、金沢のために、「だろだろ、金沢、俺がやっぱり正しいだろ！」

ちゃんと、裏で手をひいてやったというわけだ。まだ納得いかないのか、金沢は食っているものを飲み込もうとしない。

「せめてさ先生、金沢が持ってきた絵くらい、その絵描きのお坊さんに届けることってできねえのかなあ」

俺としてはその辺だけでもなんとかしてやりたかった。俺には理解できないシンプルすぎる絵だけれども、金沢にとっては、「俺って絵を描いていていいの？」と真剣に悩んでいるだから。たかが絵一枚くらい、外されたからって人生が真っ暗になるくらい悩まなくたっていいと俺は思うけれども、そういうことが人生の大事だって奴もいる。俺は立村と付き合ってからそのことを、いやというほど教えられたと思う。

俺と同じ腹の軽さなんだろう。ぐうっと腹の虫が鳴いている菱本先生。

縁側から風が吹き抜けてきた。暑いからか、水口が細く障子戸の細長い部分だけ開けたらしい。

「そうだな。せっかく持ってきてくれたんだ。よしわかった。お前たちふたり、これからちょっと来い」

ご馳走さまを言わないうちにいきなり、菱本先生が立ち上がった。水口たちがぎょとんと見上げている。つられて立とうとしたところを、しっかりと阻止された。

「すぐに戻ってくるからな、お前らはここで待ってろ。金沢、それと羽飛、俺について来い！」

——ひゃあ、かっこつけてやんの。昔の青春ドラマそのまんま。

だから菱本先生ってそんなやな奴じゃあねえと俺は思うんだが。

金沢がおどおどしながらも、筒の小さい入れ物を抱えて立ち上がり、俺の方をじっと見た。なんだか思ってもみない展開にどきどき状態のようだ。そりゃあそうだろう。夢がかなうんだから当たり前ってことだ。

「俺もついてっていいのか？」

「だって、菱本先生が来いって」

すぎるように俺を見るのはやめてくれ。その目は優ちゃん以外からほしくねえよ。

けどすがられたら、ついていくしかねえじゃねえか。

「羽飛、遅いぞ、来い早く」

我らが担任のフライング行動。きっと修学旅行終わったら、さんざん他の先生連中にいじめられるなあ。同情するぜ。

俺たちは菱本先生の後ろにくっついていき、線香くさい廊下をたつたと走っていった。金沢もさっきまでの「どうして内緒話先生に言うんだよ！」というような不満げな表情はなかった。卒業証書を入れる筒みたいなものを、しっかりと握り締めていた。あいつの渾身の作が、きつと入っているんだろう。

「本当はいけないんだがな、礼儀知らずかもしれないがな、芸術にはそんなこと関係ないだろう。直接、渡して来い」

菱本先生は、廊下の突き当たりで顔を合わせた、いかにも坊さんらしい格好をした人をとっつ構えた。この暑い中、真っ黒い着物にど派手な袈裟をかけている、けど髪の毛はちゃんと生えている人だった。後ろの俺たちふたりを従えて、菱本先生は、

「申しわけありません、住職をお願いしたいのですが」

と、金沢の会いたがっている絵かきのお坊さんの名前を告げた。ごめん、俺、その住職の名前覚えていない。金沢がその名前聞いた瞬間、しゃきんと凍りついたところみると、その人なんだろう。菱本先生はさらに続けた。

「この子は、住職の描かれる絵を深く敬愛しております。本当でしたらこういうことは許されないので、自分の絵を一度でいいから観ていただきたい、という思いから、こっそり絵を持ち込んだそうです。せめて、お渡しするだけでもお許しいただけませんか」

俺の聞いている限り、菱本先生もものすごい説得をしたわけではない。ごくごく普通に、そんなことを丁寧に言っただけだった。OKしてくれるか、それとも「非常識な！」と怒鳴られるか。あまりにも行動が早すぎて、俺も金沢も、ただ立ちすくむだけ。

いや、ほんとにあっという間だった。

難しいこと考える間なんてなかった。

「それはお安い御用ですよ」

話し掛けたお坊さんときたら、あっさりOKしてくれたばかりか、金沢ににっこり笑顔まで見せてくれたじゃねえか！

一番驚いていたのは、目の前の展開をあんぐり口あけて見るしかなかった金沢だろう。絵の情熱に燃える少年が俺ではなくて、このちんまい神経質そうな奴だとすぐに見抜いたのか、金沢に向かい、

「さ、こちらにおいで」

目の前のふすまを開けると、地下室へと続く、下りの急な階段が見えた。

「こちらは住職のアトリエなのですよ。ご希望のある時はいつも、こちらにお通しするようにと申し付けております」

——あ、あいつ足踏み外すんじゃねえか？

俺、そして菱本先生。男二人、しばらく呆然としたまま、降りていく金沢を見送っていった。たぶん、菱本先生だってここまですんなりいくとは思っていなかったんだろうなあ。

——世の中、こんなうまくいくもんか？ いっちまったよな。

金沢が真夜中泣きながら語った「自分の絵を尊敬する人に見てもらいたい」という夢。

俺が菱本先生を動かし、直接話を通してもらうことによってあっさり解決したわけだ。泣きおとしをかけたとか、土下座したとか、そんなこともしないで、あっさり希望をかなえることができたわけだ。

——ほらな、金沢、俺の言った通りだっただろ？

計画をすぐ実行した俺も、正直びっくりしている。立村みたいに命がけ、停学覚悟での行動なんてやだったし、だったらおおっぴらに問題なくできることを、としたことがこんなにあっさりOK出るなんて、普通思わないだろ？

「どうした、羽飛」

「いや、先生、やっぱすげえなあ」

俺たちは元いた部屋に戻り、待ち構えしつこく問う水口を交し、

「いや、人生ってこんな、うまく行くもんなんだなあ」

という真理について語り合うことにした。しつこいようだけど、俺は菱本先生が嫌いじゃない。むしろ好きな方だ。だから、一対一で、お茶を酌み交わしながら語るのも悪くない。

「けどさあ、先生」

まずは水口たちに、さっきの展開……金沢が敬愛する絵描き坊さんに、絵を観てもらうために飛び込み営業した……という話を説明した後、俺はため息つきながら茶をすすった。食べ物は薄味だけど、ここのお茶、まじでうまい。濃くて、匂いが香ばしくて、いくらでも飲める。

「ほんとはさあ、金沢ももっと、派手にやりたかったと思うんだよなあ」

「どんなふうなんだ？」

「ほら、去年の宿泊研修みたいにさ」

立村のことを匂わせてみた。俺たちの間でもあの事件は、なんとなく禁句みたいになっていたからだった。水口が決まり悪そうにうつむいたのは、たぶんあいつがあその当時、寝小便直っていなかったってことを隠したかったからなんだろう。もう直ったからいいじゃねえか。

「立村みたいにか？」

「うん、まあそんな感じ。やっぱりああいう感じで、クラスの中からこっそり飛び出して、脱出、ってのは憧れるだろ。俺も最初その案を検討したんだけどさ」

水口はやっぱりガキなんで、茶々を入れた。俺の真似をして襟のネクタイを緩めた。

「じゃあかっこよくやればよかったのになあ、羽飛ってやっぱ、地味だよ」

——地味、かよ。

ちょっとむっとしたけど、言われてみればしゃあない。後で後ろ手回してやる。

「だってな、俺、修学旅行しっかり楽しみたいしさ、後で立村みたいにさんざん惨めな思いするのはやだったしさ。俺はやっぱり一番ベストって方法を、ベストなやり方で決めたいなってことで、今回、優等生なやり方しちまったってわけ」

「教師に頭を下げるのが、どうして優等生なやり方なんだよ」

俺は菱本先生にたいこもちよろしく、でかい急須を抱えて茶を注いだ。

「だってやに決まってるだろ。俺たち反抗期だし」

「服装違反している程度でやめとけよ。損だぞ校内暴力なんかやったってな」

「まあな、損だよ先生。言う通り」

言葉を切った。なんとなく、立村の二学期以降しばらく気まずかったクラスの雰囲気を出

した。

あの後はなんだか修羅場があったんだよな、と思い返した。

「ま、今回俺は、金沢にとって一番うまくいくのが、菱本先生、先生、大将ってお願いだと判断して、ぶちまけたわけなんだけど、やっぱりなあ。水口、俺やったことって優等生に見えるか？」

あっさり頷いた。やっぱりあとでこいつ、しばくぞ。

「だって、立村だったらこうはしなかったんじゃないか？」

——当たり前だったの。立村なら絶対こうしなかったよな。

俺は頷いた。菱本先生はすっかりご満悦、にやにやしながら歯を爪楊枝でこすり始めた。つばを数回吸うようなしぐさをしてから、

「羽飛、お前って教師を利用するもんだ、と思ってるんじゃないのか？ 生徒として」

「当たり前じゃん、そのために大人がいるんだからさあ」

菱本先生の好きなところは、無理やり「これは正しい、これは間違っている」という枠にはめようとしなくていいところだ。立村もそういうところに早く気付くよな、って思う。たぶんなんだけど、菱本先生、相当学校側とやりあってるぞ。俺たちのこと、特に立村とか金沢とか、あのあたりとさ。『E組』設立の時も、

「なんで子どもたちにいきなり差別化するようなことを行うんですか！」

って文句いいに言ったって話だし。立村からしたら、単に大学の講義を受けるだけの補習みたいな感じだと思っていたらしいけれども、あとから聞いたところによると、いらぬ奴の寄せ集め、しかたないから面倒みてやっかって感じの集団らしい。そんな寄せ集め集団の扱いされてプライド傷ついてねえのか、お前ってとづきたくなる。でも、立村はそういうところ意外と鈍感な奴だから、喜んで通っている。面倒みてくれているA組の狩野先生に懐いている。狩野先生なんて感情があるかどうかわかんない、建前でしか物事を見ようとしぬ奴だなんて俺も美里も思っているんだが、立村にとってはそうじゃないらしい。世の中、やっぱり感じ方、違いすぎる。

もう少し自分の担任をよく見ろってことだ。俺の言いたいのは。

立村がやらかした一年前のことは、俺なりにけりがとつくについているから言いたくもない。けどもう少し、あったかい人のことを認めてやれよって説教してやりたくなる。ま、そんなこと言っても立村は聞く耳持つわけねえんだが。

しばらく俺たちは残った食べ物を肴にしてしゃべり続けた。金沢はなかなか戻ってこなかった。

「まさかさあ、いきなり座禅させられて、どつかれてたりして」

俺が冗談めかして言ってみると、その場にいた連中大笑いして、障子がかすかに揺れたような気がした。

「ところでだ、羽飛」

いきなり暑苦しく肩に手を回すのは、いくらいい先生だとしてもやめてほしい。やっぱり、男同士だと暑いんだよな。これが。

「彼女にしてやんなよ彼女に、先生、そろそろ三十路だろ？」

「少しまっとうな話するから聞け。羽飛はお前、将来の夢とかそういうもん、持ってないのか？」

——ずいぶんストレートな話題できたなあ。

俺が返事をする前に水口が「はいはい」と手を上げる。

「どうしたすい君」

「羽飛の夢はさ、鈴蘭優のヒモになることで一す！」

また爆笑。ほんと、あいつ、どっかで根性叩き直す必要あるな。当然言い返した。

「水口、お前もエロエロの医者になりたいくせに何言ってるんだよ」

「エロエロは余計だよ、もちろん医者になるに決まってるもんなあ」

——こいつのうちは病院だもんなあ。

また笑い出す俺たち。菱本先生は、機嫌よく水口へ、

「そうかあ、すい君はもう今から医学部目指していると考えていいんだな？」

「もちろん！」

——こいつ、本当に成長しているところとしてないところ、露骨に分かれてるよな。

変なところで感心した。旅行一ヶ月くらい前から始まった、水口の「性の目覚め」ってのは相当強烈なもんだった。昨日美里を相手に相当際どいことをねたにしたらしい。相手を選んだ方がいいんでないか、と俺は思うんだが、まあ暴走したくなる気持ちもわかるし、俺だって全く関心ないわけじゃあないからなあ。優ちゃんの水着ポスターまじでほしいしなあ。と思う。ただ、どこもかしこも隠すことなくしゃべりつづけるってのは、やっぱり女子に嫌われる第一段階だと思う。立村もそれを心配して、陰でいろいろ注意をしているらしいが、衝動が簡単に納まるわけないだろう。立村がおもちゃの短剣取り出したのは、その辺の危険性も考えたんだろう。やっぱり自分の彼女を守るなら本気になるんだ、あいつは。

「話を逸らすなよ、羽飛。すい君を見ろ。お前と違ってちゃんと将来の夢、しっかり持っているだろ？」

「うん、えれえなあ」

単純に答えると、またがしっと背中から抱きしめられるような格好で肩を組まれた。

「ここだけの話だけだな、金沢は本気で、美大に行きたいらしいんだぞ」

——誰もが知っていることではしょうが、先生。

俺にも、他の奴にもしょっちゅう美大のことは話しているのを聞いたことがある。

「けどな、美大に行くとなると、別の勉強をしなくてはならなくなるし、塾とかそういうところにも行かねばならなくなるだろ。いろいろあるらしいぞ」

——なんかその辺難しいところわからねえけど。

A組の奴に絵の勝負で負けた、って悔しがっているところみると、相当本気だとはうかがえる。でもいきなり俺にそんな話してどうするんだ。先生。

「早い段階で将来について考えた方がいいって先生、言いたいわけ」

「なんでもかんでも早く決めすぎるのはよくないと思うがな」

「じゃあ聞くけどさ、先生、教師になるって決めたのはいつくらいなわけ？」

確か前に、青春ドラマの熱血教師に憧れたとかいう話を聞いたことがある。相当若い頃、って考えていだろう。頭を掻きながら、やっぱり俺の思っていた通りの答えを返してくれた。

「高校の時だな、やっぱり。テレビドラマで、生徒に対して一生懸命だった先生がいてなあ、あとは学校にも本当にいい先生がいてなあ」

——ふうん、高校の時だったら、まだ俺にも時間あるじゃんかよ。

心ひそかに余裕をかましたところを見抜かれたのか、またぐいっと両腕を絞られた。まじで痛い。

「羽飛、お前に前から聞いたかったんだがなあ、お前、今一番好きなことってなんだ？」

いきなり聞かれたら答えるしかない。そりゃあ鈴蘭優ちゃんの……。

「鈴蘭優のおっかけだなんて答えはなしだぞ！」

「じゃあ何もねえよなあ」

今度はぼかっと頭をはたかれた。茶、吹くかと思った。にやにやししながら水口たちが見守っている。俺ってばただいま、完全に見世物だった。まっとうに答えろって、一番好きなこと、うーん、難しい。運動は大抵なんでもこなせるつもりだけれども、一番好きかどうかと問われるとうーんとなるし、勉強が好きだとはお世辞にもいえない。テレビドラマとか野球とかアニメとかも結構観るけど物凄くってほどではない。やっぱり優ちゃん一筋の俺には選ぶ範囲が狭すぎる。

——ほんと、狭いよな。

頭をごちんと、電信柱にぶつけたような衝撃。がしんときた。

——俺、好きなことって、ないのか？

「……ねえなあ、やっぱり優ちゃんからみかなあ」

ぼつとつぶやいてみた。ほんとに、なんも、ない。

すっごく違和感ある空気が漂い出す。両隣の部屋では笑い声が聞こえるんだけど、なんか俺の将来に関する話題がきっかけで、ネタが切れてしまったって感じだ。

「じゃあ羽飛、今年の夏の自由研究、俺が決めてやろうか」

菱本先生、こういうところがやっぱり好きだ。次の科白でかなり俺は救われた。

「鈴蘭優のよさについて、レポート、絵、曲、その他いろいろなものを集めて、俺に納得できるようなものを作ってこい。これなら、できるだろ？」

——なんで、今いきなり、夏休み自由研究ネタが出てくるんだよ！

まあ、俺にとっては嬉しい内容ではあるのだけれども。ひゅうひゅうと騒ぎ出す水口にピースサインを送って俺はありがたく、その案を受けることにした。

「完璧に俺、すっげえレポート作る自信、あるぜ。先生、ありがとな！」

金沢が戻ってきた。言葉は少なかったけれども、だいぶ目の輝きが戻ってきているようだった。うなぎを食った後って感じの精力ばりばり、お前のパンツと同じ情熱赤い、って言ってやりたいくらいだった。

「よ、どうだった」

菱本先生が今度は金沢を隣に座らせて、肩を叩いた。頷いていた。

「ありがとうございます」

ちゃんとお礼を言うってことは、うまくいったってことか。

絵描きお坊さんとの対面は。

「絵、どうだった」

「そのままでもいいって」

か細く答えた。さらに菱本先生が、

「ほらほら、どんなだどんなだ」

としつこく突っ込んでいたけれども、取り立ててそれ以上の答えを返そうとはしなかった。あとで写経か何かさせられる時、聞いてみようと思った。

ひとまず食事が終わった後は、もう一度クラスごとに集まって、それから「写経組・墨絵組・写仏組」に分けられることになる。こちらは一部屋ごとに固まってまとめられたわけだったが、女子たちの様子がなんだか妙だった。美里だけが気の強そうな顔でもって、唇をぎゅっと結んでいた。古川が困りきってあちらこちらの女子たちにお愛想を言っていた。女子どものことは面倒だから俺も入る気、さらさらしない。美里だったら大丈夫だろうし。

男子連中にはいつのまにか、金沢の突撃お坊さん絵を観てちょうだい事件が広まっていたらしい。南雲たち一団が「すげえなあ、やっぱ本気ってすげえよ」と褒め称えているのが笑えた。あいつらは本気で金沢みたく、真剣に考えることなんてめったにないんだろう。よおわからんがその辺は保留にしておいた。先生が心配していたよりも、みな、好意的に金沢の爆発行動を受け止めていたようだ。とあるどこかの誰かさんみたいに、いきなり面倒を起こすのとは違ってだった。

「金沢、あのさ」

と、思ったらやっぱり、奴が金沢に話し掛けている。俺の隣ではにかんでいた金沢は、立村の顔を見上げて、小さく「ごめん」と言った。なんで謝る必要あるんだ。

「いや、謝ることなんて」

——立村、明らかにむかついてるな。

「ねえよ、こいつになんで謝るんだ、金沢」

俺も親切に言ってやった。が、かえってご機嫌を損ねてしまったらしい。どうやら立村の奴、金沢から謝り文句がほしくて近寄ってきたらしい。立村との付き合いは長いし、その辺の読みは簡単だ。相当奴、むかついていると見た。

——ちょっと、後で言っという方がいいな。

すばやく俺は割ってはいることにした。

「立村、あのなあ、金沢がなんで謝らなくちゃなんないんだ？ お前には関係ないだろ」

「関係ないけど、ただあのさ」

——評議委員だから、義務だからってくるのかよ。

頭に來たわけではなかった。一年前の俺だったら、たぶん「ちょっと外来い！」とか言ってびんた一発かましていたかもしれない。不思議なくらい俺は落ち着いていた。立村を見る時、ものすごくかっとなって怒鳴ったりわめいたりする必要がないんじゃないか、そんな大人っぽい気持ちになっている自分が、いつのまにかいた。南雲相手には一発に初殴りつけてやりたい、って気持ちが立村には湧いてこなかった。

——やっぱり、俺って大人？

明らかにご機嫌斜めの立村に、俺はゆっくり、説明することにした。

「お前さ、本音言っちゃえよ。本当は淋しかったんだろ？」

ちょっと切り込んだだけで立村の奴、だんだん青ざめてきてやがる。こいつが動揺した時の行動というのは単純でただ黙る。言い返す余裕なく、ただ言葉を飲み込む。

「こういう時さ、大抵の奴は評議、しかも評議委員長さまたるお前に相談しなくちゃまずいって思うのが普通だろ。金沢もきっとそうだったと思うぞ、けどさ」

俺はゆっくりと立村の前であぐらをかいた。

「お前、前科あるだろ」

もちろん、にっと笑ってだ。奴の顔、まじでこわばっている。南雲たちには聞かれないように気を配った。

「もしさ、お前が金沢のために、とあるお坊さまへ対面させてやれるように取り計らったとする。きとお前、大人なんて頼みにしようなんてしねえよな。絶対そうだぜ、お前絶対菱本先生なんか使おうとしないよな」

「だからどうなんだよ！」

——図星差されてあわててやんの、あいつ。

「つまりなあ、立村」

俺の気持ちはやっぱり穏やかだった。俺って今、仏の心か？」

「お前が計画すると、大抵菱本先生との修羅場になる可能性大だろ？ そしたら金沢もお前も停学食らうかもしれないだろ？ けど、俺からしたらさ、どう考えてもあっさり大人たち利用すれば、丸く収まるものにしか見えないんだよな。だから、あっさり菱本先生に相談させたってわけ。簡単だろ」

「けどさ、もし駄目だっていわれたらどうしてたんだよ！」

こいつ、完全に決め付けてやがる。菱本先生のいいところ、全然見ようとしてないでやんの。俺はやっぱり腹が立たなかった。立村の細い腕をつかんで振ってやった。こわばってる。

「いいじゃんいいじゃんよ。今回は俺が全部まとめて簡単に面倒みたって。これでお前に前科二犯なんてつかなくなったし、金沢はあっさりお坊さんに会えたし、誰も傷つかないですんだし、俺は俺で陰のリーダーとして仕事ができたし。いいこと尽くめじゃねえか。お前、無理になんでも一人でやろうとしねえでさ、半分は仕事、俺にも任せろや、な」

言い忘れていた。最後に一言付け加えておいた。

「大丈夫だつうの、立村、あいつが今心配すべきことは、美里のことだけだつての。頼んだぜ、評議委員長様！」

相当頭に来たんだろう。立村の奴、寺を出てからバスの中に戻るまで一言も口を利こうとしなかった。

予想通り金沢と同じグループの「墨絵」で、手を真っ黒くしながらお絵かきに専念していた俺に、

「あのさ、立村怒らせたんじゃないかなあ。悪かった。ごめん、俺のために」

さらさらとお得意の風景画を描き上げた金沢は心配そうに俺の顔を覗き込んだ。

けど俺は全然心配してやしない。

「いいっていいって、どうせ一日寝れば、あいつのことだ、あっさりご機嫌直してるって。運良く今夜は、別の部屋で泊ることになってるしな。明日の朝、にっこり俺の方から『おっす、元気か！』ってやれば一発ってことよ」

「けどさあ、やっぱり、まずくないか？」

芸術家の自信がついたのかどうか、それはあとで金沢に聞いてみよう。せつかく立村抜ききの部屋に今夜泊るのだ。めいっぱい、例の住職さまにどんなお言葉をいただいたのか、金沢の芸術人生に役立つ何かを得られたのか、そして。

「金沢、後で聞きたいんだけどなあ、お前いつから、絵の道に進みたいって思ったんだ？ その辺、後で教えろよ」

どうやら、この旅行で最大の収穫は、将来の天才画家・金沢との語り合いみたいだった。それもまあ、俺の人徳か、悪くない。

立村が今日、精神集中必要な「写経組」に振り分けられたのはある意味必然だろう。あいつには少し冷静になる時間が必要だと、お寺の神様もそう思ったんだろうな。

俺はひとりふてくされている立村に言ってやりたかった。

——そう簡単に、俺とお前の繋がりが切れちゃうわけねえって。俺は二年間よっくお前に勉強させられてきたつての。な、立村？

今夜の旅館は少人数部屋。一部屋四人から五人程度だ。学校側の指示もあって、クラス関係なく仲良しグループでお泊りしてよしとの通達が出た。けれども裏で動いたらしい評議委員グループの手により、

「委員会に参加している者で差し支えない人たちは、それぞれ同じ部屋に固まって泊ること」

という形に決められて。私は図書局だけど実質は部活と同じだから、委員会とは別扱い。関係ない。あまったD組の女子たちとつるめばいい。美里の場合は評議の三人と一緒に部屋にしないでちゃいけないのだそうだ。評議委員の四人組はもともと仲のいいグループだったけれども、今年の四月からA組の女子評議だった西月小春ちゃんが外れてしまい、代わりにクールビューティーの近江さんが入ることになった。事情もいろいろあって当然、いい顔しない評議のみんな。しかも近江さんときたら、やたらと美里のことがお気に入り、なにかかしら用事を見つけては美里にくっついてくる。女子同士の「ねえねえ、一緒にトイレいこ」ではなく、男装の麗人っぽいので.....近江さんはもちろんスカートだけど.....「清坂さん、こっちへいらっしゃい」とくるんだから、すごい。別に、あの子は私も嫌いなタイプじゃない。けど、一緒に泊る羽目になったゆいちゃんたちの立場はどうなると私は言いたい。

それにしてもだ。

あまり文句言いたくないけど、美里もずいぶん自分の立場がわからなすぎ。

——なんで、あの後に仕切りたがるわけ？

そりゃあ美里はしっかりものの三年D組評議委員だし、いつもみんなをまとめることに力を注いできてたし、ちゃんと実力もついているってことくらい、私もわかっている。でも、昨日の今日だよ。いや、昨夜の今日だよ。もう面倒見切れないよ。

荷物を持って自分の割り当てられた部屋に向かい、まずはさっさとお風呂にに入る準備をしたかった。昨日泊った旅館とは違って、男子と女子がそれぞれ別棟に振り分けられる格好となっている。夜這いはちょっとむずかしいかもしれない。ここの旅館、温泉が出るらしくって、しかも露天風呂まであるという。中学の修学旅行ごときに温泉だなんて！と怒る先生もいたらしいけど、いいじゃんいいじゃん。

「なによ、こずえなに怒ってるのよ！」

かばんを持ったまま.....美里はダーリン立村に運んでもらったらしいので手ぶら.....まずは互いの部屋がどこらへんのかを確認した。男子たちもさっさと荷物を片付けたらしく、あいている時間を使って見学にきている奴もいる。

「あんたさあ、自分の立場もうすこし理解しなよ」

さすがに人前で怒鳴るのはまずいと思った。他のD組女子たちがだんだん険悪な気分になって

いるとこ、普段の美里だったら気付かないわけないと思うんだけどな。

「美里、お寺のご飯の時からそうだったけど、いつもののりで仕切りたがるのやめなよ。あんた、今クラスでどういう風に思われてるか自覚ないよねえ」

「あるわよ、あるけど私悪いことしてないもん」

——悪いことはしてないけどさ。

普段の美里だったら許されるだろう。なんでもできるし頭の回転も速くてしかもおしゃれセンス抜群ときたら。多少きつい言い方をして女子たちに指示を出したっておかしくない。でもだ。美里、昨夜はどこで寝てた？ どうして寝てた？

「箸をくばったりご飯盛ってあげたり、そういうことが悪いって言ってるんじゃないの。あんた、一緒にいた子たちがなんであんなむすっとしてたか考えたことあんの？」

「私がむかつくからでしょ。しょうがないわよ。背丈順でわけられるなんて思ってなかったもん」

今回痛かったのは、奈良岡彰子ちゃんが混じってくれなかったことだ。全部丸く納めるように動いてくれただろう。ご飯を盛るのも、後片付けをするのも、

「いいよ今日は、美里ちゃん無理しなくてもいいよ」

って言うてくれたに違いない。たまたま昼ご飯を一緒に食べたグループは美里と仲の良くないタイプだった。しょっちゅう美里が、

「もう少ししてきばき動いてよ！ 集合に間に合わないよ！」

とか、

「もっと手伝ってよ！ みんな困ってるんだからってば！ 男子ばかりに力仕事させるのってよくないと思うんだ！」

とか、とにかくはっぱをかけていた子たちだった。

シュチュエーションにもよるけれども、私も美里の言いたい気持ちはよくわかるから、ちゃんと手伝う。けど、美里のようになんでも上手に出来てしまうタイプの子って、わかんないんじゃないだろうか。どんなについていきたくたって、追いつけない、おっかけてもおっかけても逃げられてしまうそういう性格の子が。

いや、その子たちが別に美里へ文句をびしびし言ったわけじゃあない。ただむっとして、じろっとにらみ返した、その程度のことだ。私からしたら「もっとはっきり言ってすっきりしなよみんな！」と喝を入れたいところ。。いつもだったらその辺でお開きにするんだけど、今回だけはちょっと、そうもいかなかった。

「美里、いいかい、あんたさあ、周りでどう思われているかわかってるよね」

「けど！」

あえてこの辺できついこと言っておかないと！

「彰子ちゃんがうまくごまかしてくれたけれども、他の女子たちね、できれば美里が生理じゃなくしておねしょしててほしいって思っているんだよ」

「はあ？」

とんがった声で思わず他のクラスの子たちが振り返る。慌てて頬を両手で押えているところみ

ると、そう思われたくないんだろうなやはり。だから私は繰り返す。

「みんなわかってるよ本当のところは。いくら美里が必死こいて隠したって、あんたが初めてのあれになっちゃって目の前真っ暗になっちゃったってことくらい」

「そんな、私」

また私を責めたそんな顔するので無視してしゃべる私。

「ほとんどの女子はみんな心当たりあることだからね。けどさ、美里、あんたが今までしてきたこと、ゆっくり考えてみなよ。もしあんたじゃなくて、別の子がそうならあんたどうしてた？」

うなだれてくるところみると、やっぱりわかっているみたいだ。美里は目をそわそわさせた。「たぶん、『誰にでもあることだから、そんなめそめそしてちゃだめ!』とか言ったんじゃないの？ それが悪いとは言わないけどさ、他の子たち、正直いって、美里にざまみろって思っているんだよ」

——ちょっと言い過ぎたかなあ。

——けどそのくらい言わないとなあ。

恨めしそうにならむ美里にもう少し聞いてもらいたい。今後のためにも。

「あんたのダーリンがしっかりと男子連中押えてくれたからあっちの方は大丈夫さね。けど、女子たちとしてはなんとかして美里を、おねしょ直っていない赤ちゃんみたいに言いたいわけよ。『いつもえらそうに鼻膨らませていた清坂さんも、おねしょが中三になっても直っていないなんてねえ』ってさ」

「私そんなの違うもん！」

「違ってたって違わなくたって同じなの！ 美里、いいかい、黙ってききな」

とうとう一喝。周りに何聞かれてももうしょうがない。

横を通り過ぎようとしたC組の霧島ゆいちゃんが、心配そうに美里の側に近寄ってきた。「こずえも美里もどうしたの？」

「まあこの機会にね、ゆいちゃんも聞いてくれる？」

「こずえ！」

周りに何言われようがかまわない。悪いことなんにも思っていないだし。

「いい、美里。あんたが今まですごく努力してきたことはわかるよ、なんでもやってきたしさ、できることはなんでもやってきたはずだよ。でもね、あんたが一生懸命にやっていることをできないで、困ってる子だってたくさんいるわけだよ。昨日の夜、あんたがぱにくってる間、うちのクラスの女子たちと話しててさ、思ったよ」

——やば、告げ口になっちゃうぞこれじゃあ。

いろいろ思うところはあるけれども、それこそ悪口陰口のままにしとくのは、私にとっても、美里にとってもよくないと思う。ここんところオープンでいく。

「去年の宿泊研修の時もそうだったよね。使い物になんない立村の代わりに一生懸命だったよ。女子たちの大ピンチを救ったところとかさ、いろいろあるよね。それはわかるよ。けどね」

めちゃくちゃバスの中で、乙女の口では訴えられない切迫した欲求っていうんですか？ すっかりぱにくってしまった私と他数名の女子が、美里の機転によって女の子のプライドを守っていただいたという、ちょっとした話。この辺の話は男子たちにも緘口令が布かれていて、立村もたぶん知らないんじゃないかと言われている。具体的説明は今回パス。

「けどさ、昨日のあんたの様子見てて、ほんっと赤ちゃんそのもんだって思っちゃったよ。いやさ、ああいう状態の中で冷静になれとは言わないよ。私もあんたがあんなに騒ぐのはしゃあないよって思うよ。でもね、あんなになっちゃったらもう少し他の子のことも考えなよ。思い遣ってやんなよ。今のあんたはね、完璧な評議委員の清坂さんじゃあないの。初めて女の子になっちゃって泣いちゃってる、ちょっと晩生な子なんだって周りの子はみんな思ってるわけよ」

興味しんしんといった顔で、今度はC組の更科が美里の背後に立っている。本当は同じクラス評議のゆいちゃんに用事があるんだろうな。ちょっとまずいなとは思ったけど、しょうがない言いかけたことを言わないでおいて、便秘になっちゃうのは絶対いやだ。

「だからさ、少しおしとやかにしなよ。今だけは」

私は曖昧な言葉を搜すことにしてみた。男子にはわからないようにする方法として、お上品な言葉を使う。

「今まで美里にさんざん怒られてきた子たちが、少しは『私も清坂さんより上なんだ、ああいうとこだけは』って思っているんだよ。そう思いたいに決まってるよ。だったら少しは、そうさせてやんなよ。妙に意地になんないでさ。あんたが少しぼろだしても、かえってうまくいくことだってあるんだからさ」

ゆいちゃんと目が合った。この子、結構勘がいいのだ。

「今夜は評議の子と一緒に泊るんだよね。だったら少し頭冷やして考えなよ。ゆいちゃん、悪いけど少し美里の話、聞いてやってくれないかな。私もちょっとさ、疲れてるのかもしれないし、明日はずうっと美里と一緒に自由行動だしさ。ここでいっぺん頭のお通じをすっきりさせたいんだ」

ほんっと、これが私の本音。ゆいちゃんはしばらく私と美里を交互に見ていたが、

「そうだね、美里、今夜は一緒に話そ。ね」

女子限定に見せる笑顔を浮かべてくれた。ありがたや。そんな貴重な笑顔だというのに、美里は思いっきりむくれている。少しはゆいちゃんにお礼言えればいいのにだ。

「あとで、部屋に行くね」

私を思いっきりすねた眼で見つめると、美里はてぶらのまんま、いきなり廊下の奥へ駆け出してしまった。美里は答えたくない時とか、顔見られたくない時、とにかく走るのがくせだ。ああいう時はそのまま好きなようにさせとくに限る。取り残された私とゆいちゃん、ついでにもの言いたげな更科、三名だけが無言でいた。

ゆいちゃんが更科を見つけて、笑顔を引っ込めにらみつけた。びびりまくる更科。そりゃ怖いよね。

「あ、あのさ、霧島さま、あの、ちゃんと、男子連中には、話したから」

なに焦ってるんだか。ゆいちゃんは無表情に更科を見つめると、ほっとため息をついた。

「本当ね」

「もちもち。うちの先生にも釘刺されてる。立村にも、変なこといたらぶん殴るって言われてるから」

——なんで立村出てくるの。

「わかってるならいいのよ」

それ以上ゆいちゃんは、更科に対して返事をする事なく、

「こずえちゃん、一緒にお風呂入ろうよ」

と腕を取った。

「クラス別じゃあないの？」

「うん。女子棟と男子棟、別々のお風呂だから、広く使えるんだって。学年全員入ってもいいって話だし、美里は今日も、うちの先生の部屋のシャワールーム借りるでしょ」

——あ、そっか。美里まだ二日目だもんね。二日目って量が多いからなあ。

私もいらいら指数が上がりまくってて、そっちの方まで気が回らなかった。あのどぶりぶりおばば、殿池先生のことだ、美里をうまく丸め込んで、またあの薬臭いお茶飲ませるかなんかするだろう。その辺は放っておいてよさそうだ。

「しかし、ゆいちゃんってほんと、黙ってればいくらでももてるのになあ」

何度でも言いたくなる誉め言葉だ。ゆいちゃんの、小柄ながらも、生まれたところはチューリップの花の中じゃあないの？と言いたくなるようなお姫さまぶり。あくまでも口を開かせなければ、の話だが。

「どうでもいい男子にもてたって、嬉しくないわよ」

——だからそういう言い方がまずいよやっぱし。

両手を合わせて見送る更科に聞こえるように、ゆいちゃんは吐き捨てた。

「修学旅行のしおり」を見ると、確かにゆいちゃんの言うとおりであった。一日目はクラスごとに順番つけて入ることになってたけれども、二日目は「夕食までに」というお約束のもと、みな好きなように湯船に使っていい湯だなを歌ってろ、って感じらしかった。美里、教えてくれなかったしなあ。私が知っているのは温泉だってことくらいだ。

同じ部屋の女子たちもてんでばらばらに、仲のいい子たちと一緒に行動してくれたんで気を使わないですんだ。シングルも悪くはない。

「じゃ、先に温泉楽しんできまーす！」

「行ってらっしゃーい！」

私はさっそく、ゆかたと帯、下着とシャンプー石鹸、いかにもお風呂場セットってものを持っていった。評議委員女子四人と一緒に泊る部屋の前に立って、

「ゆいちゃーん、行くよ！」

と声をかけた。美里とはやっぱりあのあとだと、気まずい。

「お待たせ！」

開いた戸の中には、ゆいちゃんしかいなかった。美里の大きな肩掛けかばんだけが、床の間の

花瓶前にどすんとおかれていた。

「さっき立村くんがさ、持ってたのよ。美里の分だって」

——彼女のためってことするのに慣れてきたのかな。

「で、さっき立村くんに話してくるって、どっかいったら」

——さっそくデートですか。

「いろいろありそうだけどあのカップル、よく持ってるよね」

——そりゃあみな誰もが思うでしょうよ。青大附中の七不思議。

「けど、やっぱり美里にはもっとしゃきとした男が合うと思うんだけどね」

——それは言わないお約束。

ゆいちゃんはふわふわのソバージュっぽく髪の毛を広げて、数回指先で伸ばした。今日はお下げにしていたのをほどいたらしい。今朝見た時は違う髪型だったと思ったんだけどな。となにげに聞いてみると。

「ほら、お寺で写経にまわされたでしょ。筆ペンで文字なぞっていく時に髪の毛邪魔だと集中できないでしょ。髪の毛お下げにしたほうがすっきりするかなと思って、編み込みにしたの」

——そういえば、写経にまわされた奴、南雲も入ってたみたいだよねえ。

ゆいちゃんといえば、つい南雲のことを条件反射で思い出してしまう。そこらへん通らないかしらん。ゆいちゃんの天然ソバージュ髪は、ちょっぴり短めの「不思議の国のアリス」のアリスっぽく見える。可愛いぞ。

「すごい似合ってるよ、可愛い可愛い」

「可愛いなんて、意味ないのよ」

一応はありがと、と言いたげに微笑んだ後、ゆいちゃんは下を向いてつぶやいた。

髪の毛を洗ったらたぶん、ごく普通のストレートに戻ってしまうだろうし、夕食の時は一つか二つに結んでおかないと先生たちに怒られるだろう。

せっかくの可愛いゆいちゃんヘアーを他の男子連中に見せびらかしてやりたかったのだけど、残念、ちらっと視線を留めたのは、ゆいちゃんの大敵ひとりだけだった。青大附中の「シャーロック・ホームズ」もどきの彼が、眉間にしわを寄せて何か一言文句言いたげにロビーのところで立ちすくんでいたが、ゆいちゃんは一切気付くことなく通り過ぎた。

——あーあ、名探偵、まずは自分の内面を探索しなさいよ。

私はいくつか、記憶の奥にしまい込んだものを引っ張り出して、B組男子評議委員あてにテレパシーで呼びかけておいた。当然、テレパシーなんて繋がるわけもなく、奴は男子側の棟へ歩いていった。

女子同士、風呂場で何をチェックするかというと、まずは下着の色とかデザインだ。美里が今回、一番気合を入れて選んだのがそのあたりだと初日に聞いたけれども、いきなりの初潮でもってはかなく夢は費えたってわけだ。しかたない。あまりぶりぶりしたものは好きじゃないので、薄茶ストライプのスポーツブラとショーツ程度にしておいた。これだったら万が一覗かれても、ビキニの水着だと言い張ることもできるから。他の子たちのものも何気なくチェックしてみ

ると、おしゃれに決めている子もいれば、おへそがしっかり隠れるくらいの真っ白いパンツ姿の子もいる。中にはブラしない子もいた。なあんだ、意外とみんな、下着って気にしてないわけね。

「ゆいちゃん、ちゃんと気合入れてきた？ 勝負パンツとブラ」

「誰に勝負するっていうのよ」

薄桃色のそれこそゆいちゃんらしいブラスリップ。このままレースのケープを羽織って、裾の短いネグリジェっぽく着こなしても可愛いと思うのになあ。たぶんゆいちゃんは「可愛い」という表現でもって誉められることを好んでいない。だから、

「いいセンスだよねえゆいちゃんってさ」

とさりげなくささやくにとどめる。

「しかも、ゆいちゃんってプロポーションいいよねえ」

「胸はこずえの方があるでしょが」

「ボインがいいのか悪いのかは好みにもよるけどさ。ほら二年の杉本さんみたいにあふれんばかりの胸でもさ」

「うん、そうだね」

私の知っている限り、青大附中一番のビックバスの持ち主は、二年の杉本梨南さんだろう。彼女の初めてのブラを買いに付き合った私が言うのだから間違いない。中一の段階で八十近くっていうのは、ちょっとすごい。もっとも本人にとっては「うっとおしい贅肉です。痩せなくては」とか勘違いしたこと言っていたけれど。

「けど、いくら体つきよくたって、関係ないよね」

ゆいちゃんは手ぬぐいを垂らすように胸から下をきれいに隠した。しぐさもお人形さんみたい。ほんと、黙っていればいくらでも男子たちが選り取りみどりだろうに。今だに彼氏なしなんていうのがもったいなさ過ぎる。

「意味ないもん、外見なんて」

また、きつい口調で一言言い切った後、ゆいちゃんはまず室内の大浴場へと向かった。だいぶ色とりどりのポーチが籠の中に放置されている。下着ドロでも来なければ、まあ大丈夫だろう。私はとりあえず下だけ隠して、先に入っていた子たちに手を振った。湯気で最初は目つぶしされ、いかにも温泉腐った卵、というような匂いに顔をしかめたけれども、やっぱり温泉っていい。簡単に汗を流して髪を洗い、一気に飛び込んだ。ゆいちゃんも続いた。うちのクラスでは彰子ちゃんが上がりの少し階段っぽくなったところに腰掛け、胸とおなかをちょこっとさらけ出したまま、おしゃべりをしているのが見えた程度。あとは他のクラスの子ばかりだった。ゆいちゃんがちらっと彰子ちゃんの方に視線を向け、すぐに逸らした。首までしっかり浸かり、手ぬぐいを髪に巻きつけた。ターバン風に巻き、前髪をきれいに隠している。彰子ちゃんたちから離れた方に正座して、背中を向けた。顔を洗い、ふうっとため息をついた。

「こずえ、いいかげんにしろって思ってるよね」

「なにがよ」

なんとなく、勘でぴんときたけれど、そ知らぬ振りして尋ね返した。

「私、こんなに執念深い性格だなんて、思ってなかったんだよね。今までは」

うつむきかげんでゆいちゃんがつぶやく話は限られている。相槌を打った。

「しょうがないじゃんよ。ゆいちゃんだって女の子なんだし」

「だから、悔しいよね」

たんたんと、でも切々と。

「一年前のこと今だひきずって、なにやってるのさって思ってね」

ゆいちゃんはもう一度、顔をお湯で洗った。何度も頬のところをこするようにして、ばしゃばしゃと温泉の湯を救いとった。最後に頬を両手でばしっと叩きつけ、

「だからこういう女子って大っ嫌い！ 女々しすぎ！」

といきなり怒鳴った。一瞬だけ静まり返ったけど、また何事もない雰囲気に戻ったのは幸い。私はゆいちゃんの後ろに回って、肩を指先でマッサージしてあげた。

——ゆいちゃんは一途過ぎるんだよねえ。

去年の今頃、ゆいちゃんはC組女子たちの「打倒・奈良岡彰子！ 南雲を元彼女の元にもどせ！」運動を押えるのに非常に苦労していた。美里とA組の西月小春ちゃんとが懸命に「お願い！ これ以上いじめが始まるのをやめさせて！ ゆいちゃんしか説得できないよ！」と頼み込み、複雑な心境のゆいちゃんは懸命に事態を沈静化させたってわけだ。

——彰子ちゃんが悪いわけじゃないし、本当だったら南雲を吊るし上げればいいことだったんじゃないのかな。

彰子ちゃんに惚れぬいた南雲が、かつての派手な恋愛沙汰をすべて捨てて、全身全霊で告白し、「奈良岡彰子を我がものに！」と派手な行動を取りまくり、周りからは大鬨。南雲には女性ファンが全学年から多数いて、かわいそうな彰子ちゃんはその女子たちのジェラシーを全身に受けまくってしまった。もっとも彰子ちゃんの「私の周りの人はみんないい人だから大丈夫！」っていう楽観的思考により、なんとか納まったけれどもだ。

——女子ってどうしてもそうなんだよね。悪さした男子よりも、相手の女子を恨んじゃうんだよ。

ゆいちゃんも内心は、彰子ちゃんのことを快く思っていないだろう。

美里たちに頼まれた以上は嫌な顔をしてはいけない、無表情で通そう、そう決めたのだろう。

「ゆいちゃんは強いよ。私、そういうゆいちゃん大好きだよ！」

あの時のゆいちゃんが、どれだけ傷ついていたかはたぶん、ほとんどの人が気付いていなかったと思う。そりゃあそうだろう。一ヶ月前に告白し全く希望も持てずに玉砕し、次の瞬間同じクラスの女子が彼女に選ばれただけでも辛い。さらにその一ヵ月後、その彼女も振られ、自分の全くライバルとも思っていなかった相手に熱を上げられてしまう。最後にそのライバルをかばってやってくれと頼まれる有様。これが悔しくないとどうしていえようか！ と私は強く訴えたい

。

——美里ももう少し考えたらよかったんだよ。ゆいちゃんに頼むのは考えもんだよって。

——だって今だにゆいちゃんは。

「ありがとね、こずえってどうしてなんだろうね」

「なにがよなにが」

ゆいちゃんは水の滴る顔を向けてつぶやいた。

「羽飛はどうしてこずえちゃんのおよき、気付かないんだろうね。ほんっと男って馬鹿だよ」

——ありがと、ゆいちゃん。そのお言葉だけで、マッサージ代十分いただきました！

お互い、届かない恋をしているもの同士、連帯感があるのかもしれない。美里はさておいても、ゆいちゃんや小春ちゃんと私がよくつるんでおしゃべりし、恋の相談を持ち掛け合ったりしたのは、やはり同じ失恋組だったからかもしれない。もっとも小春ちゃんが口利けなくなるくらいのダメージを受けるとか、ゆいちゃんがライバルのために力を注がねばならなくなったりとか、あまりにも悲惨な結末を迎えているのに、私はひとりのほほんと片思い続行中。露骨に振られ、チョコレートも突っ返されているけれども、なんだかんだ言ってお友達ではいてくれる。恵まれているのは私の方だろう。少なくとも、「好きでいる」ことを拒絶されてはいない。それだけでもたまらなく、羽飛っていい奴なんだと思えるひとつの理由だった。

「ゆいちゃんさあ、やっぱり新しい恋をしようよ。いくらでもゆいちゃんの超プリティーな魅力にいちころの男子は転がっているよ」

「だからそういう馬鹿な男子なんか相手にする気なんてないの！」

「こういっちゃあなんだけど、南雲もそんなかっこいいとは思えないよ」

彰子ちゃんには聞こえないように心して。

「こずえは羽飛が一番なんだからしょうがないよ」

「へへ、それはご名答」

今度は拳骨で肩を叩いてあげた。

「けど、ゆいちゃん」

リズムよく、「ゆいちゃんお肩を叩きましょ！」と歌いながら私は続けてみた。反応を知りたいひとつのこと。

「約一名、ゆいちゃんにベタぼれの男子がいるよ。ゆいちゃんさえOK出してくれればすぐ、私めが愛のキューピットさせていただきまーす！」

「よけいなことしないでいいの！ 私、そんな切り替え早くないんだからね！」

——そうだね、人のこと、言えないか。

私はそれ以上よけいなことを言わないで、ゆいちゃんにマッサージサービスを施しつつづけた。

あらためて女の子らしい体の魅力について再考させられた私。

今度はもう少し、プロポーションよく見える下着を選ばないと、と反省しきりだった。ゆいちゃんってやっぱり、きついことさえ言わなければ童話の中のお姫様そのものなのに。浴衣に着替えて、きちんと髪の毛をお下げに編み込んでいる姿に見とれた。

「じゃあ、美里のことなんだけど、お願いしていいかなあ」

「うん、わかった。大丈夫だよ。美里、落ち着いたらちゃんと話聞いてくれる子だし、それにね」

ゆいちゃんはさっさとスリッパを履いた。ちょっと厳しい顔をした。

「食事が終わったら、評議委員全員集まって、ミーティングやる予定なんだ」

「ふうん、それは公認なわけ？」

「ううん、立村くんの指示みたい。夕食終わったらどうせ暇だし、夜九時半までは男子棟にも出入り自由みたいだし」

それは知らなかった。いろいろ評議委員も修学旅行中お忙しいのだろう。

「そこで立村さんと顔を合わせたら、少しは落ち着くんじゃないかなあ。あ、それとね」 ゆいちゃんはもう一つ付け加えた。「うちの更科日記にも命令しといたけど、美里のこと、もしなんか男子たちがからかうようなことしたら、今度は私が制裁加えるからって言ったの。だから大丈夫」

「制裁っていったい」

やることがこの子、過激だ。用心して聞く。

「やった奴、私の手ですっばだかにして、ざんげの札ぶら下げて廊下歩かせるの。もちろん女子の部屋の前よ」

ああ、この顔、このお下げ髪で言わないでほしい。ゆいちゃん、やっぱり黙っている方が絶対いいと、私は思う。

それぞれの部屋の前でゆいちゃんと分かれたため息をつく。

——女子の恋って複雑だよなあ。

本当だったらいくらでも、私が面倒を見てあげたいのだ。特にゆいちゃんに関してはいろいろ事情も知っているし、可愛くて大好きだし、幸せな恋をしてほしいと思っている。黙っていてもダーリン立村にほれ込まれている美里はとりあえずそのままにしておいてもだ。

南雲は確かに派手で目立つ。私らの学年女子たちが一目見るなり熱に浮かされたようにファンクラブをこしらえ、告白合戦になったりしたのはわからなくもない。私や美里のように最初から全く問題外、という扱いをしている女子は少なかったんじゃないかとも思う。私が南雲に関して「いい奴だ」と認識したのは、やっぱり二年に入ってから奴が立村とつるむようになり、その繋がりじゃべるようになってからだろう。外見では全くタイプじゃなかった。私も相当の面食いだと思うけれども、だ。カッコいいタイプの男子に恋することはちっとも珍しいことじゃない。むしろ謎なのは美里の立村好みってところだけれども、この辺は「謎」ってことで片付けてよしだ。

競争率が高すぎて振られてもそれはしかたない。だって南雲はひとりしかいないんだから。光源氏の女人たちみたいな立場でもよければ話は別だけれども、ゆいちゃんだってそんなことは望んでいなかっただろうし。

ゆいちゃんが今、辛いのは、きっとあきらめきれないからなんだろうと思う。

——どんなに自分に気がないってわかってても。

——告白したこと自体、覚えられていなかったとしても。

——一度好きになった相手、そう簡単に忘れられるものかって。

だって、私だって同じなんだから。羽飛にいくら

「悪い、お前のだけは受取れねえわ。悪く思うな。ほんっとこれが俺の誠意なんだっつうの」とチョコレートを突っ返されても。他の男子に目を向けろって言われても、たぶんそんなこと無理だって言うに決まっている。ゆいちゃんにとって南雲って奴は、たぶん、そういう存在だったんだと思う。

けど、今の南雲状況を見る限り、彰子ちゃんとのらぶらぶ関係が解消される可能性はほぼ、ゼロに近い。あんなにめろめろになって彰子ちゃんを想う南雲の姿を見てあらためて、彰子ちゃんパワーのすさまじさを思い知らされた。前向きに笑顔、それさえあればゆいちゃんの抜群なプロポジションが勝負をかけたとしても、あっさり切り捨てられてしまうだろう。つまりそれだけ、彰子ちゃんへの想いは強いわけだ。叶わない恋だとゆいちゃんだってわかっているはずだ。

——けど、ゆいちゃんあまりにも今の状態はかわいそう過ぎるよ。

——ほんと、立ち直らないと辛すぎるよ。

美里も本当に残酷なことをしたもんだと、今になって思う。もちろん彰子ちゃんのためを思って頼み込んだことなんだろうけれど、

「瞬時に振られて忘れられ、ライバルを救うために力を注げと命令される」

そんな理不尽なことを要求されたゆいちゃんの気持ちも少しは考えてほしいもんだと思う。

ゆいちゃんはえらかった。ちゃんと頼まれた通り、頭を下げて、C組女子たちを押えたいらしい。どんなこと言ったかは知らないけれども、夏休み前までには彰子ちゃんへの悪口、いやがらせはあっさりやんだ。「ブス・デブ・南雲くんになんて似合わないよ」だいたい三つのパターンの悪口だったっけ。本当に悔し泣きしながら悪口言いたかったのは、本当のこと言うと、ゆいちゃん本人だったんじゃないかと改めて思うのだ。

今でも覚えている、ある日の光景。

確か二年の夏休み直前。夏服のゆいちゃんはC組の教室からぼんやりと、外を眺めていた。

教室には誰もいなかったし、私もゆいちゃんと友だちだったし、断りもなく入って行って声をかけた。

「何見てるの？」

「今、通ったんだ」

ゆいちゃんが答えたのは一言だけだった。視線の向こうには、南雲と彰子ちゃんが仲良く砂利道を歩いていく姿。ちょうど南雲がデートにこぎつけて後、無事にふたりで仲良く登下校するようになった頃だった。遠目から見ても、南雲と彰子ちゃんとの体格差はあらわだった。鉛筆と筆箱を立てて歩いているって感じだろうか。彰子ちゃんごめん。でも本当にそうとしかいえないカップルだった。

「ゆいちゃん、ファイト！」

それしか言えなくて、私はさっきみたくゆいちゃんの肩を軽くマッサージしてあげようと手をかけた時だった。

「ふうん、次期規律委員長さまのお通りか」「難波くん！」 注目。この時はまだ、難波のことをゆいちゃんは「くん」付けで呼んでいた。

いつのまにか背後に忍び寄ってきたらしい。青大附中の自称シャーロック・ホームズのくせに、人間心理を全く読めない困った奴。理屈っぽいところだけが推理小説の影響ありかっていう、少々暗めの顔をした男子だった。B組男子評議ということもあり、私とも顔見知りだった。が、私の方なんて全然見もせず、ゆいちゃんの方にわざわざ回り込んでいった。正面から見据えようとしたわけだ。思わずゆいちゃんが一步退いた。

「何なのよ！ 宿泊研修のこと？」

「あいつも見る目あるよな」

全くゆいちゃんの質問に答えることなく、難波の奴、目線を歩いていく南雲・彰子カップルに向けたままつぶやき続けた。「知ってるか。奈良岡って外見は相撲取りだけど、性格がパーフェクトで、他の学校ではファンクラブが出来てるらしいぞ。南雲が焦って奪いに勝負に出たんだと」

「ふうんそれが」

いかにも攻撃したような難波の口調に、ゆいちゃんがわざと無関心を装おうとした。ちらりと難波も顔をあげ、ゆいちゃんに向かって舌打ちをした。

「やっぱり、女子は性格なんだ。わかったか」

「はあ？」

これは私の相槌だ。一切、難波、無視。

「女子は性格良くて、暖かくて、男を立ててくれる子が一番いいってことだ。顔なんかどうだっていいんだってこと、覚えとけ」

「はあ？ ちょっと頭やられたんじゃないの、暑くって」

この時、ゆいちゃんは何も言い返そうとしなかった。私としては女子の端くれ、このあたりの暴言を見逃すわけにはいかない。

「なあにが『男を立てて』だって？ なあにが『顔なんかどうだって？』だって？ それってまず彰子ちゃんを誉めているように見えてかなり貶してるし、目の前にいるゆいちゃんを思いっきりばかにしているってことじゃないの？ なにがホームズなんだかあんた、意味不明じゃん！」

ここまで文句を言ったにも関わらず、妙なことに難波は一切ゆいちゃんから視線を逸らさなかった。私の反撃を聞いているのか聞いてないのかわからないけれども、しばらく浅黒い顔をじっと向けて、唇を何度か震わせるようにして、

「言っとくがな、南雲は霧島のことなんか覚えてないぞ」

「ちょ、ちょっと待ちなよ！」

相当憎憎しげに私には見えただけでも、本当のところはどうだったんだろう。難波は指をまっすぐにゆいちゃんの胸元へ指すようなしぐさをした。

「南雲は、自分が惚れた女子以外、全く、関心ない奴だ。付き合いかけられた女子多すぎて、顔、全然覚えていないんだそうだ」

突如、難波の目が正気にもどった。かくんと二歳くらいがきっぽい真ん丸い目になったかと思

うと、いきなり私の顔に気がついたらしく、慌てて廊下へ飛び出していった。

取り残されたゆいちゃんは、いきなりしゃがみこみ、口を覆った。しばらくそのままだったが、すぐに立ち上がり、

「もう大丈夫。帰ろう」

とだけ言った。私が一方的に難波ホームズの悪口をまくし立てている間も、何も言わなかった。美里から聞いたところによると、それから冬休み半ばまで男子評議委員とのいざこざはほとんどなかったらしいとのことだった。ゆいちゃんはそれまで、難波の暴言を心の奥に隠してきたのだろう。ゆいちゃんが難波を「くん」抜きで罵倒するようになったのは、二年三学期以降のことだったと聞いている。

いろいろな出来事が絡み合い、評議委員会事情のよしなごとを美里や立村から聞き知ったりして、たどり着いた私なりの結論。

一年前の夏と同じまなざしで、さっき廊下ですれ違った時も、難波はゆいちゃんを見つめていた。思い出していくうちに一番、問題を悪化させた原因は私にあるのでは、と思わず焦った。

——うわ、そうだよそうだよ。いくらなんでも他のクラスの女子がいてさ、言えないよね。

——南雲は、自分が惚れた女子以外、全く、関心ない奴だ。付き合いかけられた女子多すぎて、顔、全然覚えていないんだそうだ。

あの後にもう一言、難波は言うべきだったんだと思う。

ゆいちゃんを真っ正面で指差したまま。

——俺も自分が惚れた女子以外、全く関心ない奴だ。
って。

夕食が終り、一応クラス別の集会も無事に終り……つまり僕と菱本先生とがいざこざを起こさずにすんだという点においてだが……、あとは男女混合で話し合いのできる時間帯、二十一時までの間に評議委員会を開くという予定となっていた。二日目の夜はできるかぎり、同じ委員同士で組んでほしいという願いを出して、大抵の委員は快く受け入れてくれた。もちろん外れてしまった人たちは同じクラス同士でもいいけれども、その辺も特別問題は起こらなかったように聞いている。男子評議については、全く問題なく片がついたけれども、問題は女子評議だった。今まで通り、A組女子評議が西月さんだったらとりたてて騒ぎになることはなかったのだろうけれども、近江さんというのがちょっと頭痛いところだった。なにせ、委員交代の事情があまりにもあんまりな内容だったので、女子評議たちが怒るのも無理はない。幸い、近江さんと清坂氏が仲良しだったということもあって、なんとか無事に納まるのではないかと僕は期待している。

いや、それはささいなことだ。

——けど、これは恐れていた事態、発生だよな。

「要するに、男子たちは女子が邪魔だって言いたいわけ？ 難波、何とか言いなさいよ！」

「前からそれはしつこいくらい言ってるだろ！ 女子たちが余計な手を出さなければ、みーんな丸く納まったってのがわからないのかよ」

「私たちは一生懸命、準備もしてきたし、協力もしてきたつもりよ。それをなんなの？ 余計なことですか？ 私たちがいないほうがスムーズに進むってそういう風に取りれるけれど」

「確認しなくたってその通りだ。女子は黙っておとなしくしているのが一番役立つんだ」

——難波ももっと言い方気を遣えよな。

修学旅行の行動予定関連については滞りなく確認も済んだ。ひやひやししながら様子をうかがっていた僕だけでも、胸をなでおろしてさっさと解散させようとたくらんでいた。が、しかし。霧島さんがいきなり「修学旅行終わってからの、水鳥中学との交流会についてなんだけど」と議題を持ち出して、頼みもしないのに難波が噛み付いて、ただ今收拾がつかなくなりつつある。これはまずい。隣の更科、向かいの天羽も僕と視線をからませて「どうする、どうする？」と合図を送りあっている始末。清坂氏だけが、「ゆいちゃん、旅行終わってからのにしようよ」と霧島さんをなだめに入っているけれども、他の女子たちは無関心だった。霧島さんが激昂すると誰も押えられないというのは、みな経験上わかっているからだろう。同時にA組評議の近江さんとしては、あまり霧島さんとうまくいっていないこともあってかわり持ちたくないだろう。僕は清坂氏の側に膝ついて寄り添い、

「悪いけど、先に戻ってもらえないかな」

と頼むことにした。当然、不満そうにする清坂氏。唇を尖らせた。

「けど、こんなじゃまずいよね」

「この機会だ、一回とことん話し合わせた方がいいかもしれないしさ」

少し言葉を切り、思い切って付け加えた。

「かえって難波たちふたりだけの方が本音出ると思うんだ」

清坂氏は僕の顔を見つめた。旅行が始まってから機嫌が悪すぎて、近づくのも怖かったけれど、今はそれほどでもなかった。いつも通りに戻っているようだった。ちゃんと話の通じる、しっかりものの評議委員に、僕の相棒に。

「そっか。そうだね。そうかもしれないね」

「近江さんと一緒に、抜ければいいよ」

名前を口にしたのを聞きつけたのか、近江さんも清坂氏の後ろに近寄ってきた。ついでなので近江さんにも、

「悪いけど、清坂氏、体調崩しているみたいだから、先に休ませてやってもらえないかな」

と伝えることにした。どうせ、今晚寝るわけないんだ。僕たちと同じこと考えているはずだから。耳もとまでざくざくのショートカットで近江さんは、きれいなウインクを送ってくれた。

「委員長、安心してよ。あんたの彼女は私が守りますって」

——彼女、って言うていいのか？

なんだか照れくさいものがあるけれども、とにかく難波と霧島さんの二人だけにした方がいいのだから、こだわってなんかいられない。僕はB組の轟（とどろき）さんにも同じく目で合図を送り、怒涛の男子評議委員宿泊室から追い出した。なんかわかんないけど、近江さんは清坂氏の片手を握り締めて連れ出してなかったか？ ちょっと気になった。

「とにかくだ、今回の合同交流会は立村が全部仕切る形になっているんだ。だからもう決まったことに手を出すんじゃないって俺は言ってるんだ！」

めずらしくもホームズ難波が声を荒げた。こいつが女子に対してきつい言い方をする場合、最低限の礼儀を守って皮肉っぽい口調を遣うのだが、霧島さんにだけは違う。露骨、というのだろうか、それとも下品というのだろうか。とにかく男子同士のけんかに用いる言い方だ。

「ふざけないでよ！ 評議委員がなんで各クラス男女一人ずつ選出されることになってるかわかってるの？ 協力しあって一緒にいいもの作りましょ、ってそういうことじゃないの。ま、うちのクラスのように男子がろくに働かないで何にもしないで、結局私たち女子が動くしかないってこともあるけどね」

ちろりと、更科の顔を見る。更科は肩身狭いのか、神妙な顔をして膝を抱えている。でもしっかり上目遣いで様子をうかがっているところみると、考えている何かはあるんだろう。

「ふうん、そう思ってたのか？ 更科もかわいそうになあ。あいつがどれだけ陰でお前の尻拭いをさせられて冷や汗かいていたかなんて考えたこともないだろうなあ」 これは初耳だ。僕も聞いたことがない。難波の口調は全くもって滑らかだ。霧島さんを貶める言葉に関しては尽きることがないらしい。

「なあにがアマゾネスC組の女酋長ってな。さんざんとりまきがひゅうひゅう盛り上げて、ご機嫌とって、それはようございますねえって誉めあっているだけだっただけにな。陰で更科はじめC

組の男子連中が一生懸命、活躍しているのも見えないってのか」

「見えないわね。去年の宿泊研修だって、合唱コンクールだって、学校祭だって。難波、あんただってB組でなにしてたわけ？ ただ黙って、私たち女子評議が準備したりしていたのを眺めていただけじゃない？ いきなり今ごろになって文句言い出すって男らしくないわよね、最低！」

まあ、これも、非常に難しいことだけでも本音でもある。難波をはじめ、他の男子評議連中が僕の手伝いを積極的にしてくれるようになったのは、本条先輩がだんだん席につかなくなった二学期以降だ。学校祭あたりからかなとも思う。それまでは僕も本条先輩べったりだったし、その他いろいろな問題も抱えていたりして、他の評議連中との話し合いをする暇がなかった。どうしても清坂氏を代表とする女子評議たちにまかせっきりになっていたところもある。けど、難波も結構僕のことを気遣ってくれていたのだと、本当は言いたいのだが。

「余計な手出しして、ろくなことにならないよりは、黙って流れに任せておいたほうが本当はいいってことだってあるんだ。何のために安楽椅子探偵って奴がいるんだ」

——それは話とずれていると思うぞ、難波。

論理的な語りをモットーとする難波なのに、なぜこうも壊れると走り出してしまうのだろう。霧島さんに対してはいつもそうだった。厳密にいうと、今年の上学期以降からだった。霧島さんの行動がとにかく気に入らないらしくて、とにかくけちをつけまくる。いや、つけたいことはわからなくもないし、男子たちにもその本音がちらちら覗いたことも否定できないけれども、ただなんでこうも、難波は霧島さんばかりを責めたてるのだろう。

「流れに任せてその後慌てて修正するってのね」

「ああそうだよな。もう今更言いたくないけどな、西月や杉本のこと……」

これはまずい。注意を促す必要ありだ。

「難波、今の話は抜かせ。とにかく、合同会のことだけにしぼれ」

まるでセコンドだ。霧島さんは僕を始めとした他の男子連中が固唾を飲んで見守っているのをなんとも思っていないようだった。きれいなお下げ髪で、陶器のお人形さん、雰囲気は「不思議の国のアリス」に登場するアリスだろうか。黙っていれば鈴蘭優にも負けないアイドル歌手になれるような気がする。ほんと、黙っていれば、の話だ。

「どっちにしてもだ、俺が言いたいの、今年四月以降から男子評議だけで合同会の準備をしていったら、信じられんくらいにうまく話が運んでるんだ。これってどういうことだ？」

「あんたたち男子連中が私たちに情報流さないで、陰でこそこそやるから私たちも手伝いできないからでしょうよ。手伝ったらもっといいものになったかもしれないのに、なによ。結局合同会は、私たち、お茶やお菓子を出すだけ？ 発言権もないわけ？ それって男女差別よね」

「お前らがばかなことを計画しなければ、そんな小細工もしないですんだっての。それに、一応は清坂が立村の手伝いに回ってくれているから、それで十分なんだ」

どうも、「手伝い」という言葉に反応したらしい。目が釣りあがった霧島さん、僕の方をすさまじい勢いでにらみ付け、また難波に噛み付いた。

「手伝い、ねえ。男女平等のこの世の中において、女子は男子の『手伝い』しかさせてもらえな

いわけなの？ もっと計画のひとつひとつから、どういう内容の話し合いをするかとか、互いの学校の交流の題材を何にするかとか、いろいろ私たちが参加できるようなもの、あったじゃないの。どうしてそれなしで、ただ私たちはお手伝いさんになるわけ？ 要するに、花？ ばかにしないでよ。発言もこの調子だと全部、立村か天羽にまかされるわけよね。私たちの出番はなくて」

「あたりまえだ。言いたいことみんなが言ったら混乱するに決まってるだろ！」

——その通り。そうなんだが、しかしな。

僕なりに二人の会話に割り込みたい気もする。でも、ここで下手に口をはさんだらかえって話がややこやしくなるだろう。ふたりの言いたいことは単に「なぜ、水鳥中学との合同交流会準備に女子を混ぜなかったのか？」という一点にある。もちろん前後にいろいろ面倒な事情はあったけれども、この点については一切持ち出してほしくない。もう評議をやめて、辛い立場にいる人を巻き込みたくないし、その一環を担った天羽の気持ちも汲んでやりたい。また、僕が下手に霧島さんをうっかり責めたりしたら、そのとぼっちりが清坂氏や同じクラス評議の更科にいかないとも限らない。できれば難波と霧島さん、ふたりの会話で終わらせてほしい。

霧島さんはせっかくきれいに着付けた浴衣と、きちんとした橙色の帯前を何度も叩きながらわめきちらしていた。よく似合うのに。さすが呉服屋のお嬢さん。とみなささやいていることをきくと気付いていないんだろう。風呂から上がった後、男女みな全員、浴衣に着替えることになっている。男子たちは適当でよかったけれども、女子たちは旅館の仲居さんたちに手伝ってもらって、本当の浴衣用帯を貸してもらいちょうちょ結びにしてもらったと聞いている。こう言っただけは失礼になるかもしれないけれども、清坂氏の浴衣姿はなんとなく、着物に「着られている」風であまり似合っているようには感じなかった。近江さんは背が高いせいかつんつるてんだっだし、女子評議の中ではやっぱり、霧島さんの格好が一番さまになっているような気がした。だから黙っていればいいのに、と僕はひそかに思う。

「口も利かせてもらえないわけ？ 私たちが一生懸命……」

「その一生懸命さによって、俺たちがどれだけ迷惑したか考えてみる！」

同時に怒鳴りあう二人。妙に怒鳴りあいのリズムがぴったり合っている。難波も昨日の夜とは違ってだいぶ、はだけないような格好での着つけをしてもらっている。僕は何度か親に着つけの方法を教えてもらっていたので自分で着たけれど、他の男子連中はかなり、前をはだけて見るに耐えないものを見せびらかしたりしている状態だった。これは注意すべきところなんだろうか迷うところだ。昨日さんざん、素っ裸寸前にさせられた難波はしっかり前をかきあわせあぐらをかいたままさらに指差しした。

「いいか、俺たちが陰でこそこそやっているってのは、水鳥の副会長と立村がまず、話し合いを持っているってことなんだ。水鳥中学もいろいろ面倒なことが多くて、先生連中にばれたら大変なことだってあるんだ。そこで、どうやって水鳥中学の先生たちと、俺ら青大附中方面の連中とがうまく話しあってもらえるかを裏工作しねばなんない。けどな、女子にその辺の情報うっかり流してみろ！ すぐばれて、また元の木阿弥になるに決まっているだろう。女子連中の論理はひとえに、『だれだれのために』だ。『だれだれがかわいそうだから』『だれだれが被害者だ

から』『傷つけられたから』そんな余計なことをされて、本当の目的に向かうのを邪魔されたら
たまったもんじゃねえよな」

「杉本さんのことを言ってるわけ？」

まずい、これも注意だ。僕は霧島さんに右手でさして促した。無視された。

「どうして杉本さんのことを応援したらいけないのよ！ それとこれとは別でしょ！」

「お前らが杉本を煽り立てたから、合流会のサークルは消えて、掃き溜め『E組』になってしま
ったってわけだ。あれさえなければ、合同交流会サークルの連中が活躍して、評議は完璧裏方
に回って、それこそあんたら女子たちもどんどん参加できたってのにな。要するに！」

霧島さんが何度も口走っている「要するに」をいやみったらしく難波は述べた。

「自分で自分の首を締めたのは女子なんだ。結局俺たちは、その尻拭いをするために、修学旅行
ぎりぎりまで眠れぬ日々を過ごしたってわけなんだ。感謝されても責められる筋合いはない！」

「何様のつもりよ！ 馬鹿にするのもいいかげんにしなさいよ！」

またいつものパターン。結局のところ、霧島さんがヒステリーを起こすともう誰も止めようが
なくなる。いや、止めることができなくもないのだが、やり方を間違えるとまずい。これはC組
の相棒、更科に頼むしかない。僕は更科の帯を軽くひっぱった。同じことを反対側から天羽もや
っていた。互い、帯を持ち合って、ぎゅうぎゅうひっぱっているわけだ。膝を抱えて上目遣いで
眺めていた更科は、ぐいと顎を上げ、あどけない声で発した。

「あの、霧島さん、悪いんだけどいいかなあ」

——待ちました！

難波以外の男子連中はみな、合いの手を入れたに違いない。もちろん僕も同じだ。

——だてに三年同じクラスってわけじゃないよな、更科。

昨日の清坂氏がらみのからかいはやはりまずかったんじゃないかと思う。うちのクラスの水口
も似たようなこと口走っていたけれども、その辺は木刀で黙らせたのでどうでもいい。僕の知っ
ている限り、更科と霧島さんが露骨に大喧嘩やらかしたというのは、そうそうないんじゃないだ
ろうか。少なくとも難波相手のようなことは、たぶん、ない。

「俺、思うんだけど、難波の言い分って少し、きついような気がするんだよなあ」

「あたりまえよ、あんたも難波と同じ意見だなんて言わないでしょうね！」

「言わない言わない、たださ。難波もぶきっちゃだからどうしても、誤解を招くこと言っちゃう
くせあるからさあ」

「俺の言っていることに何か文句あるのかよ更科！」

このあたりはちょっと様子見をする更科。余裕があるみたいだ。両隣で僕と天羽が膝を立てて
様子を見ている。難波もむっときたらしい。

「ホームズ、少し落ち着けよ。お前言いたいのは、裏を返せば、合流会の時、霧島さんを始めと
する我が三年女子評議のみなさまを見せびらかしたいってことなんだろう」

「見せびらかして」

口をあけかけたところを制する更科。更科相手には難波もおとなしい。もともとこのふたり、

入学した頃から仲がよかったのだ。

「ほら、霧島ねえさんも知らないかもしれないけどさ、俺たち男子としてはやっぱり、うちの学校の女子がどれだけいい女揃いかを水鳥の連中に知らしめたいってわけ。それ本音としてあるわけよ。だってさあ、何度か水鳥に行ったけど、女子のレベルってとにかく差、ありすぎ。ほんと、難波とふたりで訪問した時は絶句したもんなあ、な、ホームズ？」

更科は難波のことを、気安く「ホームズ」と呼ぶ。黙るしかないと思ったのか、難波はうつむいている。

「たぶん話し合いというか交流関係の話ってのは立村が向こうの副会長と煮詰めているし、先生目の前にしているもんだからあまり過激な話題って出せないと思うんだよね。ほら、聞いたところによるとさ、水鳥中学で五月に、うちの『ビデオ演劇』を参考にして時代劇のラジオドラマを放送したんだって。そのテープを持ってきて、一緒にうちのこの前作った『奇岩城』のビデオと比較するってことにするんだって。もちろん、それはいいと思うんだけど、やはりさ、女子にはきついことが多かったろ。あの事件もあって」

と、隣の天羽に視線を向ける。霧島さんがせせら笑う。

「自業自得よね」

——さて、どう出る更科。

僕だったらこのあたり、霧島さんのご機嫌取りに徹するだろう。「やっぱり霧島さんが一番目立つし、その点まず、気合を入れる意味で先にお茶運びとかしてもらえればなって思ったんだ」とかなんとか。でも霧島さんの性格を考えると「会議の花」という扱いは絶対許せないに違いない。男子と女子、平等に扱え、というのが霧島さんの要求なのだから。更科もたぶん、同じことをしようとしているに違いない。でも、どう出るかはこいつの計算次第。

「実言うと、そのこと、向こうの生徒会もみんな知っているらしいんだ。立村が全部話したらしいんだ」

「しゃべってなんかいないよ、何言ってるんだよ！」

断固、抗議する。確かに向こうの生徒会はみな、事情を理解してくれているけれども、元の情報は僕経由ではない。一学年下の評議経由だ。すぐに肘でつつかれて僕も黙った。何か言いたいことあるらしい。

「で、立村も言ってたけど、すごく同情されているらしいんだ。あそこの生徒会もいろいろごたごたがあって、俺たちほどではないけれど苦労することが多いんだって。でも、その中でもって俺たち青大附中の評議委員会はきちんと運営されているし、あんなひでえことがあっても、女子はみな男子を守り立ててくれている。すごく心の広い人ばかりで、しかもすげえべっぴん、ときている。って。だろ、立村？」

頷く。まんざら間違っていない。

「だろだろ、立村もそう言ってるだろ。だから向こうの生徒会連中からすると、うちの評議委員会の女子ってのは、信じがたいくらい高嶺の花でかつ、憧れのマドンナなんだよね。話を盛り上げすぎたかもしれないけれども、みな想像が膨らみまくってるみたいなんだ。だろだろ、立村」

——とも、いえないけど、まあいいか。

だいたい更科の落としこみ方が読めてきた。そういうことならあわせるしかない。天羽にも目で合図した。親指を霧島さんに見えないように立て、頷く天羽。この辺、男子の呼吸は整っている。難波だけが唇をへの字にして懐手にしている。文句言いたいけれど、男子評議同士のあうんの呼吸、無視することもできないし、ってところだろう。頼む、難波、耐えてくれ！と僕としては叫びたい。

「だから、俺たちとしては我が自慢の青大附中女子評議たちを露骨に男子連中みたいな扱いで低レベルに扱いたくないわけだよな。正直なところ、立村すげえなやんでたんだ。霧島ねえさんたちには話せなかったけど、『男女差別』扱いかもしれないけど、向こうの奴らって単純だからきれいな人には弱いんだよなって。それにほら、立村もそうだけど、俺たち男子ってそんなにかっこいいことじゃべれねえじゃん」

いきなり今度は男子を卑下する。これも計算のうちか。難波、怒るなと念を送る。

「一応、台本は前持って俺たちがこしらえる予定だけど、それだってうまく行くかどうかかわからないし、たぶんただ読み上げるだけだよ。絶対とちるし、きっと物笑いになっちまう可能性、大なんだ。けどさ」

出た、更科の幼稚園児真っ青のあどけない笑顔。赤ん坊攻撃とひそかに呼んでいる。

霧島さんの表情にほんのわずか、女子らしい口元のほころびが見えている。

いまいましそうににらみついている難波だけが浮いている。

「俺、やっぱり霧島のねえさんがしっかり女子たちの代表として動いてくれたら、きっと勇気が出ると思うんだよなあ。今までもそうだったけど、うちのクラスの男子連中ってそうだよ。女子たちにひっぱられてなんとかやってきたってのも本当だし、それ以上にさ、うちのクラスの女子って他のクラスに較べて、わりといけてる子が多いだろ。だからなおさら、燃えるんだよな」

——女子連中、部屋に戻しておいてよかった……。

これは問題発言だ。C組女子たち以外は不細工ってことにも繋がるぞ。

「もちろん、立村も天羽も、難波もそうだけど、手伝いだけじゃなくて、もっと大きな仕事を当日にお願いしようかなって思ってるんだ。ただ、先生の許可がまだ下りなくて内緒にしているけどね。だから、旅行終わるまで、ちょっくら待ってもらえないかなあ。お願い！」

両手を合わせてすりすりする。猛烈に爆発寸前の難波があぐらをかきなおして、じっと霧島さんを見据えているけれども、当の霧島さんはそんなの全然気にしていないようすだった。いきなり襟元をさりげなく指先で触れたり、髪の毛のほつれ毛を上げたりと、無意識なのか意識的なのかわからないけれど、妙に芸能人っぽいしぐさをしてみせる。それがまた、きれいに決まっているところがなんともいえない。やはり、霧島さん、口利かなければ、と思う。最後にかすかな微笑みを浮かべたところ、羽飛には悪いけど、鈴蘭優よりはるかにきれいだと思う。

「口がうまいよね、更科は」

「だって、永年のお付き合いじゃありませんか！」

今度は天羽だ。こいつも下手したら、霧島さんに「小春ちゃんをあんな振り方して！」と怒鳴られるかもしれない。おちゃらけ得意、場の盛り上げなら任せとけ、日本の伝統演芸愛好家の天羽が、太鼓持ちをしないわけがない。続ける続ける。

「もちろん俺たちいろいろあったけど、そんなくらいで絆が弱まるわけ、ないっしょうがよ。ねえ、霧島ちゃん、頼むよ、俺たちみたいな腑抜け揃いの評議委員を守ってやってちょーだい！」

また両手を合わせてお願いポーズ。今度は僕か。精一杯明るく呼びかけたいところだ。

「俺も、今まで霧島さんにいつも迷惑かけてばかりで、ほんと悪かったって思うんだ。今の更科の言うこともそうなんだけど、当日、本番の時は、ちゃんと女子にお願いすること、お手伝いだけじゃなくていろいろ用意しているところなんだ。ただ、俺なりにどうしても、他のほら、評議から外れた人たちとか、一年とか二年の面倒、どうしても見られなくて、清坂氏にばかり頼んでいて、なんだか申しわけなくてさ。今度、いいかな、霧島さんに少し頼っても。ごめん、ほんと俺が馬鹿だからさ、申しわけない！」

この辺は地でできる。ほんと、僕は評議委員長として、全然実力がなくて毎日思い知らされているわけなんだから。今のことだって、霧島さんのほころぶ笑顔を引っ張り出すことができたのは、更科のお世辞たらたらのお言葉だったんだから。

——そう、天才的、あれはお世辞だ。

三人男子連中が手を合わせて、ご機嫌取りに徹している間、肝心要の難波は何も言わずに知らん振りを決め込んでいた。本当だったら「俺たちに続けよ！この馬鹿ホームズが！」と怒鳴りたいところだけれども、よんどころない事情もあってそのままほっぽいておく。

「あんたたち、そんな見え透いた嘘付いているわけじゃあ」

「そんなわけないって、俺たちのことを、信じてほしいよ、なあ立村、天羽」

ふたり、大きく頷く。当然難波は無視のまま。

「しょうがないわね」

ふっと唇から静かに息をつき、うなじに手を当てる霧島さん。本当に、お人形さんのようだ。僕が見とれていると思ったんだろう、霧島さんは静かに、

「立村くん、今の言葉、忘れないでよ。ちゃんと当日、私たち女子評議を、こき使うのよ」と念を押した。

「もちろんだよ。女子がいないと俺も困るし、何もできないし」

「うそつけ！」

余計なことを言う難波には後でお灸を据えておこう。

「どこかの馬鹿とは違って、やっぱり話わかる人はわかるのよね」

——本気で信じてるよ、この人。

僕たち男子評議三人は何度も頷きつづけた。難波以外。

小柄で楚々とした歩き方、着物を着慣れた人独特の、裾を広げない歩き方。

やっぱりこうしてみると、霧島さんは他の女子たちと違うとつくづく思う。

部屋を出る寸前にまた、霧島さんが振り返り、僕たち三人へ、

「今の言葉、全部女子たちに伝えるから、忘れないでよ。忘れたら、今度こそ素っ裸にするわよ！」

やはり似合わない言葉で締めくくった。興ざめだが、これもまた現実だ。

しばらく毒気を抜かれた状態で僕たち男子評議四人は座り込んでいた。難波はしっかりあぐらをかいたまま、更科は膝をかかえ、僕は片膝立てて、天羽は正座。霧島さんの気配が消えた後、ほうとため息をついた。かすかに残る石鹼の残り香。更科が一言、

「これ、石鹼じゃないよ、絶対香水だよ」

と言い放った。さすが年上の女性へ想いをかけるだけある、詳しさだ。

「色気づきやがってあの女があ」

吐き出すように、帯のあたりに向かい吐き捨てる難波。前髪をまたかきあげはじめた。だからこのくせやめろって言っているのに。髪の毛抜けるぞ。僕は立てた膝に顎を乗せるようにして、「難波」と呼びかけた。

「お前、いいかげん霧島さんにつっかかるのやめろ」

「あんなわけわからんこと言われて、なぜ黙ってなくちゃあいけないんだ！」

更科が面倒くさそうに「ホームズ」と呼びかけた。

「お前もいいかげん、キリコの扱い方覚えろよ」

誰もいない中では、霧島さんを「キリコ」と呼んでいる更科の口癖。知られたらたぶん、身包みはがれる程度ではすまないだろう。

「そうだな、難波、気持ちは俺、すっげえよくわかるけど」

天羽が締めた。しみじみと。

「世の中、おだてて丸く納まっちゃうことも、あるんだって、勉強したよほんと」

石鹼の匂いが消えていくと同時に、僕たちも男子同士の言葉を紡ぐことができるようになった。なぜかわからないけれど、女子がひとりでもいると、妙に緊張感があっとうまく言葉が選べなくなるのが最近多々ある。清坂氏がいるだけでも、「これは言ってはいけないのでは」と省いたりすることがあるし。僕は恋愛感情なんてよくわからないけれども、ある程度そういう「意識」があるということは、それなりに清坂氏を想っている証拠なのかもしれない。よくその辺はわからない。

ちょうど九時、男子も女子も、それぞれの部屋に戻る事となる。話し合いも一通りすんだ。ということで、これからは男子同士の水入らず、とことん語り合うことになる。布団を四人分敷いて、ぬるくなったジュースを四人で分け合い、しばらくぼんやりと天井を眺めていた。眠いんだけど、まだまだ話したいことがたくさんある。

「そうだ、船で話したことだけど、四人がそれぞれプライベートな時間を持つってというのは？」

一応は確認を取っておくつもりだった。もう他の三人を見る限り、とつてもだけども写真を眺めてストレス解消を図りましょ、という気分ではなさそうだった。うまいいえないけれど、ひとりの時間はどうせ旅行後で十分取ることができるし、四人の時間の方をもっと貴重なものとして扱いたい、そんな気がしていた。僕にしては珍しいことだった。

「いい、俺、そういう気分じゃない」

「同じく」

「俺も合わせるぜ」

三人の答えが同じだったのにほっとした。僕は布団に横たわり、思いっきり伸びをした後、起き上がった。隣の天羽に一言つけた。

「さっきは、悪かったな」

なんとなく謝っておかないとまずいような気がしていた。

「いってことよ、立村ちゃん。この辺お互い様って奴よ」

——相変わらず、いい奴だよ、天羽は。

けらけらと笑う天羽に、僕は心の中で手を合わせた。本当だったら思い出したくもない、天羽本人の恋愛事情をネタにされ、忘れたい相手のことまで持ち出されそうになったわけなのだから。僕が天羽の立場だったら部屋を飛び出して逃げ出しているに違いない。けど天羽はそんなことしないで、霧島さんの心ない言葉を笑って受け止め、さらりと流した。

天羽の隣に場所を取った難波に声をかけた。

「今夜は言いたいこと、何でも聞くから、言えよ、さっきの分もさ」

「わかった、立村、お前もな」

——やっぱり、難波もいい奴だよ。

まだ完全に機嫌が良くなったわけではないけれども男子たちに対しては、紳士に戻っている。今なら「ホームズ」と呼んでやってもいいような気がする。

一番部屋の奥に寝転がる予定の更科へ、少し大きめに呼びかけた。

「それにしても、いつもあんな風に霧島さんはおとなしくなるのか？ 三年間、あの調子でか？

更科、やっぱりお前すごいよ」

「キリコはねえ、とにかくちょっとおだてればあとは何でも言うこと聞いてくれるよ。簡単さ。俺からしたらむしろ、清坂とか近江とか、いくらおだてたって本当のことを一発で見抜くようなタイプの女子とうまくやっている立村や天羽の方がすごいと思うよ」

——まあ確かに、あんなみえみえのお世辞であつという間に機嫌よくなるなんて、霧島さんの方が天然記念物的存在かもしれないな。見抜いた更科はすごいよ。

それぞれ、三人の評議仲間に、照れくさいながらも賞賛を送っておいた。

まだ夜は、これからだ。言葉が溢れんばかりに、咽もとで待ちかまえている。

八畳くらいの和室で、布団を全員分敷いて少し余裕がある程度。窓辺の椅子に更科が腰掛け、窓を半分閉め、カーテンをひらひらさせている。まだ十一時にもなっていない。部屋にテレビがないにも関わらず、会話が繋がっていくのは、やはりこのメンバーだからだろうか。僕は戸口の壁に背を当てて、茶碗で三杯目のオレンジジュースを飲んだ。

「そういうわけ。単純だろ」

難波は足下側の砂壁にもたれ足を投げ出したまま、「単純じゃねえだろ」と言葉を返した。

天羽は腹ばいになり枕を抱えた格好で、「ほう」とため息を吐いた。

「要するに、キリコは人に誉めてほしいの、すごいんだって言ってほしいの、そんだけ」

——単純な結論だよな。確かにな。

僕は頷いて、そのまま更科がたんたんとしゃべりつづけるのに耳を傾けていた。C組のクラス事情はあまり詳しく聞く機会がなかったし、男女の力差についても前から知りたいことがたくさんあったし、こういう時はただ黙っているに限る。更科は浴衣の帯を完璧にゆるゆるにさせ、前をかきあわせずに膝を組んでいる。難波と並ぶとどう見ても兄弟。同学年とは思えない。どこかでこんなでこぼこな組み合わせを見たことがあるような気がする。思い出せなかった。

「うちのクラスは女子上位の男子下位とか言われてるだろ。アマゾネスC組とかって。それはまあ、俺も狙っていたところだし、それはそれでいいんじゃないかって思うんだ」

「けどひどすぎるんじゃないか、あのいばりっぱなしって状況は」

難波が不機嫌そうに口を尖らせる。まあまあ、と更科は笑う。

「することはほとんど、女子が片付けてくれてるんだ。まず、食事の片付けとか、今朝はキリコが俺たちに命令なんぞしていかにもてきぱき行動させてたように見えるけど、あんなのみんな俺たちお見通し。ちゃんと取引してるからな」

「取引？」

僕が小さい声で問い返すと、更科はなんともないという顔で頷いた。

「女子が食いきれない納豆とか、魚とか、そういうもんあるだろ。それをちゃんと俺たちが頂戴して、うるさい先生連中に『やーい、お前ら食事残すな！』と怒鳴られないようにする。そういう仕事があるんだよ。女子たち、偏食児童ばっかだから、しょっちゅう怒られるんでキリコが交換条件持ってきたわけ。前もって、食事の席に付いたら、苦手なものをほしい男子に全部撒いて、処理してもらってな。俺たちはいくら食っても食い足りないから嬉しいし、そんならいだったら後片付けのお手伝いなんてちょろいもん」

——それってすごいことなんだろうか。

僕にはわからないので、まずはそのまま聞いた。

「それにさ、合唱コンクールあっただろ、二年の秋にさ。あんととき女子ばかりがんばって、男

子が全然やらなかったってキリコは思っているようだけど、これも大嘘」

——いや、それは言い訳にならないんじゃないかと思うぞ、更科。

つつこみを入れたいところ、天羽が代わりに、

「証明してみろ、信じられねえぞ」

「つまりさあ、うちのクラス、ほらC組は部活の弱い青大附中の中で、唯一部活動に燃える奴の多いクラスじゃないかよ」

「うんうん」

天羽の相槌に僕も釣られて頷く。

「運動部の連中、この時期秋の大会とかで、悪いけどクラスの行事にまで手を出している暇がないんだよね。俺みたいに評議一本って奴は珍しいよ。ま、部活に燃えてたって、弱いものは弱いからしょうがないんだけどさ」

——新井林が作った『青大附中スポーツ新聞』の一面を飾りたい奴らだな。

更科の言う通りではある。確かにC組の男子には部活動中心が多いと聞いている。

「けどうちの学校ではクラス一丸にならざるを得ないってことになるよ、さあどうする。男子連中としては頭を痛めるわけだよ。女子たちがヒスを起こす前に手を打っておかねばってね」

——あれでも十分なヒスだと思うんだが。

さっきの霧島さんを思い起こせば、身震いするのも無理はない。

「でだ。俺が何をしたかっていうと」

今まで秘められていた……たぶん難波は知っていたのかもしれない、小さく目を伏せたまま頷いているとこみると……裏技を公開しようとする更科。僕は知らないから耳をとがらせる。

「まずさ、女子たちをおだてあげたんだ。俺たち男子は音階もろくに取れない。それどころかどうしようもなく下手。社会の騒音。どうしようもねえ、って」

「そしたら女子だって言うだろうさ、『じゃあもっと練習しなくちゃいけない』って」

さりげなく聞いてみると、更科はもちろん、と言った顔で頷いた。

「そこで終わらないよ。だから、まず、合唱コンクールに使う曲をできるだけやさしい曲にしてほしいと、キリコに提案したんだ。このあたりは前もって結城先輩たちに相談して、曲を選定してもらって、三曲くらい選んで持っていったんだ。ほんとのところいうと、キリコとしては、難易度がめちゃくちゃ高い曲で、最優秀賞を狙っていたらしいけれど、そんなん選んだら、練習だけでも馬鹿にならないし、第一ついていけないよ」

がんばっても結局は二位だったC組。最下位のD組よりはましだろうが、話によると霧島さんはコンクール終了後相当荒れたらしい。男子たちにとっても、そこまでひっぱられなかった自分自身にらしいけれど、それは更科からの言葉なのでよくわからない。

「そこで、俺たちとしては簡単な曲を最低限の努力でうまく見せかける努力をしようとしたわけ。一応は朝練にもみな参加して、女子たちにひっぱられる男子って演技をしまくったよ。けど、うちの学校の合唱曲、一番重要なパートはみな女子なんだ。女子は相当苦労したらしいけどね。結局、うちのクラスが合唱コンクールでこけたのは、男子よりも女子の音程が外れたせいなんだよね」

——なるほどな。

言われてみるとそうだ。評議委員男子はみな指揮者にまわされることもあって、一応は全クラスの唄を聞くことができたのだけれども、D組は別としてもB組の合唱は女子たちのパートがでしゃばりすぎていて、バランスが悪かったように記憶している。もちろん誰にも言わなかった。そんなこと口走ったら霧島さんに、「なにさ、D組なんてろくに音程取れないくせに、みんなやたらと楽しげにわめいていたから『特別賞楽しかったで賞』を受賞したんじゃないのさ！」と怒られること必至だ。

「そういうこと、いつもこのパターンなんだよね、C組のクラス活動って」

「あいつががんばればがんばるほど、めためたになっていくっていい例なんだ」

注釈を入れてくれたのは難波だった。まだ恨み、覚めやらぬ。

「まあまあ、ホームズ」

腹ばいになったまま、天羽も片足をばたばたさせてなだめる。プールで泳ぐ格好に似ている。

「だってそうだろ、この三年間お前も知ってるだろ、天羽」

苛立ちはかんたんに納まりそうにない。難波は続けた。

「あいつ、頭悪いんだって。それもな」

あいつとはもちろん、霧島さんのことだろう。ここにいる男子たちがみな知っていて、決して女子たちの前では口に出せない真実を、難波はつぶやいた。

「人一倍努力してもどうしようもないくらい、あいつ頭悪いってこと」

更科が大きく一度頷いた。天羽はやけに真剣な顔をしたまま、枕に顎を寄せ真っ正面を見据えた。僕しか相槌を打てそうにない雰囲気だった。しかたない。

「人のこと言えない人間がここに、約一名いるんだけど。特に数学においては」

「立村は努力して、他の分野で結果出してるだろ」

一言却下。難波はどうしても、霧島さんを「頭が悪い」と決め付けたいらしい。全員に納得させたいらしい。否定できないことを知ってて、言う。

「あいつはな、どんなに努力しても、どんなに一生懸命クラスのために尽くそうとしても、結局迷惑をかけてしまう、どうしようもない奴だってこと、どうして誰も教えてやろうとしねえんだよ！」

「そうか、そうだよな、キリコはたしかに、おばかだよな」

——相棒を貶してどうするんだ、こいつら。

でも顔かずにはいられない部分もある。僕としては、ちょっとだけ天羽が古傷痛んでいるのではないかと心配だ。はたして天羽は、修学旅行出発前にカラオケボックスで話し合った恋愛事情の修羅場について、難波や更科に話したのだろうか。前もって聞いておけばよかった。

僕は決して青大附中で成績のいい方ではない。文系科目については人並みのレベルをなんとかキープしているつもりだけれども、結局のところ数学などの理系科目で足を引っ張られている。小学生の時に見つかった生まれつきの数理障害みたいなものあって、今でも年に数回、学業状況の報告をしにそういう施設へ行く。今ではだいぶ開き直って、人前でも平気で口に出せるよ

うになった。三年に入ってから例の掃き溜めクラスと呼ばれる特別クラス『E組』で放課後、狩野先生につききりで補習してもらっているありさまだけど、僕としてはそちらの方が楽し、だいぶわかりよくなっているし、それほど気にならなくなっている。

そんな僕だから、学校の定期試験の時などは数学がめちゃくちゃな成績で終わるなんて日常茶飯事だった。「いくら数学が出来ないとはいえ、立村よりはまし」というのが慣用句になりつつある青大附中、これは悲しい事実でもある。

でも、そういう僕でも何度か、霧島さんには何度か勝ったことがある。もちろんいつもではないし、たぶん霧島さんもあまり熱心ではないというだけなのだろう。霧島さんの問題というのは、数学以外の科目、すべてにおいて全く、最低ラインを突破しているという状態のことだろう。

「一言で言うと、授業について行ってねえよあの女」

難波が吐き捨てるように言う。うんうんと更科も頷く。

「さぼってるわけじゃあないから、なおさらたち悪いよね」

「そうそ。努力したって無駄なんだよ」

ふたりが貶しあっているように聞こえるこの会話だけれども、僕も頷かざるを得ない。

「努力しても結果が悪いってのは、辛いことだよ、少し考えてやれよ」

「わかってる、その辺はかわいそうだって思うよ」

更科も返事する。天羽だけは動かずに黙って考え込んでいた。難波が後を引き取って続ける。

「数学、立村に負けるってのは、どうしようもないと思うぞ」

「それは俺に対して失礼だと思うんだが、難波？」

「そういうわけじゃねえよ、ただな」

難波がさらに悪口を吐き散らそうとしたところを、割り込んだのはやっぱり更科だ。このふたり、一年の時から微妙なバランスを取りつつ話し掛けてくるのが常だった。

「しょうがないよ。本当の意味でのコネ入学者なんだよ、キリコの場合は」

「え？ けど、なんでC組にいるんだよ。コネ集団は俺らA組の代名詞じゃねえの」

天羽がとろとろと尋ね返す。

「なんでも、いろいろ事情があって、殿池先生が面倒みることに最初からなってたんだってさ。これ、キリコの弟から全部聞いた」

「霧島さんの弟？」

いることは知っている。今年的一年に、結構成績の素晴らしくよい男子が入っていることも。もちろんそいつはコネではないらしい。それにしてもずいぶんチェックの早いことだ。霧島さんも、自分の弟が青大附中へ入ったことをあまり話そうとしていなかった。難波と顔を見合わせて、「ああ、そうだな」と言いたげに合図しあっている更科。

「そ、キリオはキリコ姉ちゃんと違って、ウルトラスーパー秀才少年。そいつから話を聞いて、だいたい今までの謎が解けたぜ。立村、知りたいか？」

「知りたいけど、俺に話すっていろいろまずいことないのか？」

なんというんだろう、個人のプライバシーを暴露するというのはちょっとひっかかる。ためらうことなく更科は、

「いや、どっちにしても俺たちにも関係あることだし、立村にはいつか話しておかねばなんないことだし」

と、すでにしゃべる体制に入っていた。耳に入る、ってことならば、怒られないでもすむだろう。

「その前に、俺にジュース、もう少しちょうだいな」

「へえへえ」

しかたなさそうに天羽が這いつくばってジュース缶へ手を伸ばした。更科が椅子から動こうとしないので、天羽は思いっきり顔をしかめ、立ち上がりしずしずと注いだ。

「いつもなら自分で注げって一喝したいんだけどな、俺も気が弱くなっちまってるんだ」

「その辺もあとで詳しく、聞かせてちょーだいな」

おどけて更科が、また赤ん坊の笑顔を見せた。

「キリコの場合、当然青大附中に受かるような成績じゃなかったんだってさ。小学六年の段階でな。けど、いろいろ親も考えるところあって、寄付金とその他いろいろやって、無理やり押し込んだんだと。本来だったらそれこそ、天羽たちと同級生になるところだったんだらうけど、やっぱりキリコの性格を面接の時見抜いた殿池お嬢がな、面倒みるって約束しちまったんだと」

「殿池お嬢って、すげえ言い方だよなあ」

天羽が感慨深げにつぶやく。明らかに顔と服装が似合っていない摩訶不思議な女性教諭、C組担任の殿池先生。「お嬢」という言葉にすべての意味が詰まっているところが怖い。僕の母さんよりもずっと年上なのに、うちの母さんが子どもの頃でも絶対着なかったようなフリルのついたドレスを学校に着てくること自体、すごいと思う。

「けどなんで、弟がそういうことまで知っているわけなんだ？ 計算してみると、三年前だろ、その話は。小学校四年の段階でそういう裏事情をなぜ、弟くんは知っているわけなんだ？」

僕なりに疑問をぶつけてみた。

「そりゃあそうだよ。キリオくん、すげえあいつは秀才だもん。ガキの頃からおばかな姉ちゃんのやることなすこと、みんなお見通しだったみたいだぞ」

——あとで霧島さんの弟について、調べておかないとまずいな。

別の頭の方でそんなことを考えつつ、僕はさらに尋ねた。

「それに、更科、なんで弟くんと話そうと思ったわけなんだ？ 俺は初耳だよそれって」

「悪い、俺も一緒に付き合った」

少し黙り加減だった難波が、僕に謝った。なんでだろう。

「更科とふたりでな、あいつの弟から全部話、聞かせてもらったってわけだ。足で情報を集めないとってことでだ。けど立村にはあとで報告するつもりではいたんだ、悪い」

「いいよ、それより続き聞きたいな」

僕が怒っているのではないかと恐れたのだろうか。そんなことないと安心させたかった。

「で、知ってるだろ。あそこのうち、キリオくんの出来がそりゃあもうばっちなもんだから、キリコの立場は非常にかわいそうなもんだってこと」

「きわめて男尊女卑なうちだって聞いたことあるよ。確か、毎日お風呂が一番最後で、食事も父親と弟が揃わないと食べられないって」

「ああ、それはデマ、大嘘」

いきなり却下するのは意外だった。難波も更科に指で「そうそう」と合図している。

「確かにキリオくんの立場は、呉服屋の後継ぎってこともあってそりゃあもうしたにも置かない扱いらしいよ。それはほんと。だけどキリコもそれこそ呉服屋のお嬢さまだし、なによりも父親がキリコのことを溺愛しまくってるらしいんだ。あいつは全然そんなこと言わないらしいけど、とにかくキリコの望みは何でもかなえてやりたい、何でもほしいものをやる、そんな感じらしい。そのかわり、母親がきついらしいけどな」

ずいぶん詳しい。いったい何のためにこいつら、「キリコ・シークレット」を仕入れてきたんだろう。そのあたりの事情が読めない。僕にもいつか話すつもりだったと言っているし、何か裏があるのだろうが、今のところは全く想像がつかない。

「とにかく、キリコを見ていると全然甘やかされたように見えねえけど、実際はもう、真綿に包まれたお嬢さまそのまんなんだ。どうしてああいう性格になったのかは謎だけどさ。父親がキリコの願いをかなえるために寄付金を納めるなんて、なんの不思議もないことらしいんだ。ただな」

言葉を切った。更科が意味ありげに頬を引き締めた。

「当のキリコは、それを全く知らないんだ。家族内でもシークレット。キリオくんはお父上の行動やお母上のちょっとした言葉なんぞ、あとお姉さまのどう考えても青大附中には届かない成績、このあたりから見極めて判断したらしいけれども。キリコは現在にいたるまで、自分が実力でもって青大附中に入学したもんのかだと信じきっている」

「ちょっと待て、ということは、霧島は何にも知らないのかよ。弟に思いっきり馬鹿にされてるってことをさあ」

「その通り」

なぜ、天羽がそこで反応したのかはわからない。それが、という顔で更科は流したけれど。

「キリオくんはねえ、出来の悪い姉がみっともないやら恥ずかしいやらで、もう頭に来ているみたいだよ。お父様が頼りせんばかりに可愛がっているのに、あだで返すような態度とってるし、反抗期そのまんまで家出するわわがまま言うわで、腹立ってなんないみたいなんだ」

それはそうだろう。評議委員会での霧島さんの行動は、たぶん家でもっとパワーアップしているはずだし、僕もあの人の弟には絶対なりたくない。

「当然、キリオくんはその素晴らしい頭の回転および能力でもって、キリコおよび家族全員に自分の力がいかに上かってことを証明しているってわけなんだ。ホームズ、お前の論理がかなうかどうかは難しいところだって思っただろ」

返事をしない難波。悔しかったのだろうか。

「食事をなぜ全員揃ってからにするのか、キリコ姉さんが文句を言ったら瞬時に、『家族全員で暖かく食べることによって、家族の思いやりが深まるものじゃないか』と一発正論をかます。母さんが当然だと頷く。父さんも頷く、誰も味方になってくれない。お風呂に入る順番にしても『

一番これから働かなくてはならない相手が最優先で、何にも努力をしていない、もしくは努力したといえない人間が後というのはおかしい。母さんが一番最後に入るのは、時間をたっぷりかけてほしいからであって、一番役立たずのキリコ姉さんが贅沢いうのはおかしい』と。これもお母さん納得、父さんもOK、キリコには味方なしてことだ」

「これは悲惨だな」

以前、清坂氏や天羽から聞いた時には、さもありなんと思ったのだけれども、更科の話を知ると同情するしかない。

確かに弟君の言い分が間違っているとは言えないだろう。努力していても、その結果を出せない……たぶん、霧島さんの場合は成績なんだろう……でいる人と、成績をきっちり出しているらしい弟君とだったら、扱いが異なるのは仕方ないのかもしれない。それに、後継ぎ扱いされているのだったらなおさらだろう。

「去年の年末に、キリコにとって最大の屈辱を浴びせられたのがな、あの家出事件のきっかけとなった、あれだよ」

——あれってなんだ？

天羽と難波に尋ねたいが聞けない。更科は少し呼吸をおいて、窓のカーテンを閉めた。小声で、

「呉服屋の後継ぎから外されたってこと。あれでぶちぎれて、キリコは殿池先生の所へ家出したってわけ」

——ああ、そういうことか。

やっぱり、直接そういう詳しい事情を聞かないとわからないものだ。

「あの頃からだろ？ キリコがパワーアップしてヒステリックになりだしたのはさ」

「ごめん、自分のことで精一杯で全然気づかなかった」

去年の冬といえば、僕は本条先輩や新井林、杉本のことで忙しくてとてもだが霧島さんのことまで気が回らなかった。けど、言われてみればその通りだ。それまでは比較的、霧島さんは若年気が強いとはいえ、男子たちに普通の接し方をしてくれていたような気がする。天敵・難波とも、さほどかみ付き合うようなことはしなかったように思う。冬休み中の「奇岩城」が終わるまでは少なくとも。

「あいつ、ほんと、ばかだよな」

頭を整理しながら難波の言葉を聞いていた。

「今までさんざんやらかしてきたことでもって、後継ぎになれなくなったってこと、あいついまだに認めてねえよな」

「わりいよく意味わからない、難波、もっとわかりやすく説明してくんろ」

天羽のリクエストに、難波はゆっくりと答えた。

「あいつ、自分が後継ぎの権利を奪われた原因を理解してねえんだよ！ もっと人の手伝いして、もっと人に思いやりある態度とって、もっと自分から仕事して、もっと相手に人当たりよくしてって、やっていけばもしかしたらちゃんと認めてもらえたかもしれねえのにさ」「うう、やはりわからねえぞ。難波、つまりなにか？ 霧島と弟との間で、後継者争いってのが行なわれて

いたってわけか？」

僕もその辺がわからないので教えてほしかった。やっぱり天羽は、しっかりしている。

「そ、そういうことだ」

「ホームズ、俺にまかせろ」

また後を引き取るのは更科だった。こういう時難波の理屈っぽい説明よりも、更科の柔らかい話方のほうが理解しやすいのもまた事実だ。

「つまりさ、キリコんちは呉服屋だろ？ 女だと結婚して嫁に行くってのが前提にあるわけだよ、それはわかるよな、立村」

よくわかる。ちゃんと理解した合図をする。

「また男だと、家業を一応は継ぐってのが、頭の中にあるわけだよ。それもわかるよな、天羽」

「もちろん。けど弟って去年の段階だと、小六だろ？ そんなこともう考えてるのかよ！」

僕も同感だ。まだ、将来の仕事のことなんて、いや、高校の進学のことだって本気で考えたことなんてない僕たちにとっては信じがたい。

「そ、俺もその辺わかんないけど、キリコはかなり早い段階で自分のうちの仕事を継ぐって決めていたらしいんだ」

「あいつが商売なんてできるかよ、だからあいつ馬鹿だっていうんだよ」

「ホームズ黙れ、混乱するから」

このあたりもほんと、バランスが取れている二人の息だ。僕と天羽は二人、感嘆中。

「要するに、キリコひとりが呉服屋のおかみさんになる気でいたんだけど、両親は現実を考えてさっさとキリオくんを後継ぎに決めちゃったってこと。商売人 どころか基本的な接客マナーなんてないに等しいキリコに、腰の低い仕事なんてできやしないだろ？ 俺も想像できないよ、なあホームズ？」

難波だけじゃない、僕たちも頷いているのがすべての答えだ。

「ただ、なあ、その言い方が他人ながらも、ちょっとまずかったんじゃないかって俺は思うんだ」

「どういうこと言ったんだ？」

天羽の問いかけにさらに、

「ほら、キリオくん出来が良すぎるだろ。また自分でキリコとのレベル差を不必要なほどに感じちゃってるだろ。だから、親が言えばそれほど角も立たなかったところをさ、キリオくんが言っちゃったんだよ」

弟君、何を言い出したのだろう？ 気になる。

窓から風が吹き抜け、一斉に冷え冷えとした空気がみなぎった。

更科の言葉が続く。

「自分の始末もできないで、他人に迷惑ばかりかけて、結果も出せない人間が家を継げるわけないだろうってさ。まあ、その通りだよって俺も思うけど、口で言うのはちょっと、な」

——仮にも自分の姉さんにだぞ。そんなこと言っていていいのかよ。

他人事じゃなかった。なんだか息苦しくなって、僕は膝を抱え直し、もう一度ジュースをな

めた。茶碗を口元に当てたまま、身動きしないでした。オレンジジュースの汁がゆれて、泣きたくなくなった。

もし今、ネタに上がっているのが霧島さんではなく杉本だったとしたら、もっと軽く悪口で盛り上がっていることだろう。こいつらも、杉本に対してはかなり辛らつな本音を抱えている。いなくなってすっきりした、いや、もういないからどうでもいい存在だ、そんなことを思っているに違いない。それこそ、「弟にこき下ろされてほしかった後継ぎの座まで奪われた、頭の悪い同期女子評議」の話なのだから、本当だったら「へへ、ざまーみろ！」とせせら笑ってもおかしくないのかもしれない。

そんな悪口では終わらない、そこに僕たちの繋がりがあるのだろう。

どんなに貶しあっても、ばかにしあっても、切れない絆のようなものが。

同期でも、男女関係ないところで、確かに見える。

言った後の更科は、さっき天羽に注いでもらったジュースをこくこくと飲み干し、「はあっ」と息を吐いた。

難波は足を細いハの字に開いて、股間を覗き込むような格好で動かずにいた。

天羽はやはり、うつぶせのまま枕を顎に載せて正面を見据えていた。

みな、黙りこくっているだけだった。

——今、みんな、霧島さんの気持ちのことを考えてるのかな。

考えるだけの余裕がある、考えることを選んでいる。霧島さんの立場にみな、身を置いているように僕には見えた。

そうするだけ意味のある、仲間だからだろうか。

「更科、いいか」

首だけ亀のように上げて、難波がくぐもった声で口を切った。

「なんだホームズ」

「それって間違ったことだと思うか？」

いきなり、意味不明なことをホームズ難波は問う。ついていけずおたおたする僕は、そんなとこ見られたくないのもそのまま茶碗の縁をなめていた。天羽がやっぱり代わりに質問してくれた。

「何がだよなにが。『それ』って指示代名詞はどこに繋がるのか、言え」

「あいつの弟が言ったことって、間違ったことだと思うか？」

——難波、お前そこまで……。

さすがに僕も口を挟みたくなかったけれども律した。

「俺も、更科と同じ場所にいて話を聞いたし、大体の流れはつかんでいる。実際、あいつがどうしようもなくばかで、成績の結果も出せねえで、周りからはみんなばれればれのコネ入学者で、家族からも軽蔑されてるってこと、あいつだけが知らないんだろ？ それを教えてやったってことは、正しいことなんじゃないのか？」

難波は決して、霧島さんを「あいつ」としか呼ばない。僕はおずおずと言葉を発する。

「いや、本当のことを言うだけが能じゃないと俺は思うけど」

「もちろん時と場合によるさ。本当だったら、思いやりもってごまかしてやるのもいいかも知れない。けどさ、さっきあの女が俺たち相手にさんざんわめき散らしていったところを見ると、あいつ、自分が周りからどう評価されているかなんて気付いてねえぞ。自分は正々堂々と青大附中に入学して、努力もたっぷりしている、クラスの評議として活躍してます、だからえらいでしょ、後継ぎになったっておかしくないでしょ、当然でしょ、そう思い込んでいるわけだよ。当たり前だよな」

——そりゃあまあ、そうだけさ。

たぶん、一切気付いていないと僕も断言する。

「更科の言う通り、シュチュエーションおよびもう少し言い方はあったかもしれない。けどな、弟の言っていたところによると、そうとう限界に来ていたってことも確かじゃないのか？ 自分は後継ぎです、当然のことですっていう態度がな。学校の評議だったら、所詮クラスのことなんだ、どうにだってなるけれども、呉服屋のおかみになるって決めて家の中でいばりくさっていたとしたら、弟の立場、相当むかついてたんじゃないかと思うぞ」

「ということは、難波、お前は霧島の弟の肩を持つわけだな」

「そういうわけじゃねえよ！」

いや、そう言われても否定できないと思うんだが。妙にきつい言い方だった。髪の毛を両手でかき回すようにし、額を何度も撫でるようなしぐさをした。絶対、髪の毛、落ちまくっていると思うんだが。心配だ。

「納得させたいんだったら、見せ付けてやればいいんだ。あいつの頭が救いようないほど悪くて、どんなに徹夜で勉強したって成績が上がらない見込みのない奴で、アマゾネスC組とか言われて浮かれているようで実は更科の掌で転がされているだけだとか、呉服屋のおかみになんて逆立ちしたってなれるわけないとか、本当は親が涙涙で金を包んで青大附中に押し込んでやったんだとか、あいつが家出とかやらかして大騒ぎしたことによって、なおさら自分が跡取の資格なんてないんだってことが証明されたんだってこととかさ、いろいろあるだろ。本当のことを全部どうして言ってやらないわけなんだ？ 弟の言い方はな、そりゃあ悪かったかもしれないけど、いつか誰かが本当のことを言わないと、あいつあのまんま勘違いして、他人さまに迷惑かけまくるぞ」

「じゃあ言った後でだ、誰が責任取る？」

更科の合いの手に、難波は黙った。

「ホームズの言い分は正論だよ。でも、もし他の奴らがキリコに説教しても、あいつ聞く耳持つと思うか？ 俺もやんわりとこの二年間、匂わせるようにしてみたけど、キリコが耳を傾けるとこったら、『私はC組の女酋長・馬鹿な男どもをひっぱっているすごい人なのよ』ってことくらいだ。一度さあ、外見のことで若干、本気も交えて誉めたことあるけど、かえって怒られちゃった」

「外見のことって、あのなにか？ 霧島さんはきれいだとか、そんなことか？」

思わず口に出てしまう。僕以外の三人、困りきった顔を合わせているのはなぜだろう。なんか、僕、悪いこと言っただろうか。

「立村、お前それ清坂にだけ言ってやれ」

天羽が近づいてきて、思いっきり僕の頭をはたき、また元どおりうつぶせに横たわった。文句言う暇もなかった。

「キリコは自分の外見誉められても喜ばないんだよ」

更科はやんわりと、かすかに唇をゆがませながらつぶやいた。

「あいつ、見かけしか誉めてもらえないんだって思いこんでいるからな」

妙にしみじみした口調なのは難波だった。

「つまり、霧島は自分の能力を誉めてほしいけど、かんじんかなめの能力がすっからかん。本当に誉められてもOKなものはなんの価値もないって思ってるんだ。わかったか立村。気を付けろよ」

なんで僕が責められるんだか。天羽を軽くにらんでおいた。でもだいたい、意味はわかった。

女子たちが自分の見かけ、容貌に対して異常とも思えるくらい気を遣うのには気が付いていた。なにせ清坂氏の洋服に対するこだわりをちよくちよく拝見していたし。同時に、なぜ一部の女子たちが奈良岡さんに対して「あんな不細工な子がなぜ南雲の彼女になるわけ？」とブーイング活動をしていたことも違和感もって感じていた。南雲の好みと、多くの男子好みとは違うだけであって、別にそんな騒ぐことではないだろうと思っていた。

——きっと、そうなんだな。

清坂氏たちから聞いた、C組女子たちの、奈良岡さんブーイング事件。

霧島さんも南雲に告白して振られ、しかも存在そのものを覚えてもらえずにいるという。

奈良岡さんを恨む筋合いはないと思うのだが、悔しいことは悔しいだろう。変な言い方だけれども、霧島さんと奈良岡さんをふたりならべてみたとしたら、たぶんほとんどの人は霧島さんに見とれるだろう。外見というのはそのくらいの差だ。

でも、南雲は霧島さんのアリス風な雰囲気は一切目を留めず、ためらうことなく肝っ玉母さんの奈良岡さんを選んだ。

奈良岡さんには選ばれるだけの魅力があったしそれは当然かもしれない。それに南雲は女子に対して外見よりも気持ちを優先したがる性格だ。どんなに霧島さんが努力しても、無駄といえば無駄だ。あのきつい性格だったら、どんなに見かけがよくても僕も逃げる。怖い。うちの母さんみたいな性格の女子に告白されたとしたら、僕も速攻断るような気がする。

「ひとつ聞いていいか。ここだけの話なんだけどな」

僕は茶碗のはしをちろちろなめながら尋ねた。

「霧島さんのことって、南雲のこともからんでいるのか」

また沈黙。どうしてみな、黙り込むのか。僕は本当に地雷を踏むようなこと、言っているのだろうか。しかたないから一人で尋ねる。

「霧島さん、もしかしてさ、自分の外見が南雲に受け入れられなかったことを、かなり恨んでいるのかな」

「立村わりい、もっとわかりやすく言ってくれ」

天羽にも関係あることだし、ゆっくり言ってみた。

「ほら、うちのクラスの奈良岡さんを南雲、選んだだろ？ で振られた女子が多数でただろ？ 変な話、奈良岡さんと霧島さん、どっちがアイドル歌手にスカウトされやすいか考えると、大抵の場合霧島さんの方がってなるだろ？ 性格を抜きにして考えれば」

うまく言えない。これぞ女性蔑視って怒られそうだ。

「俺自身はどっちがどっちって言えないけれども、ただ、霧島さんくらいの外見だったらいくらでも、そういう対象の奴っていそうな気がするんだよな」

「ああ、性格さえ抜けばな」

吐き出すような難波のつぶやき。

「俺もその辺わからないから想像だけど、女子たちはきっと、奈良岡さんよりは自分の方が上だって思い込んでたんじゃないかって気がするんだ。もちろん霧島さんも同じくさ。でも、外見ではずっと評価が高い霧島さんが記憶にもとどまらない形であっさり振られたってことは、そうとうプライド、傷つけられたんじゃないかな」

また沈黙。天羽だけだ。しかも恐る恐るってのはどういうことだ。

「それに今聞いた、後継ぎの話と、あと成績のことか。俺、これは自分の中で思うことなんだけど」

小さい声でつぶやこうとしたらまた天羽に注意された。

「もう少しでかい声で話してくれよ、立村ちゃんよ」

「俺よりも数学の点数が低いってのは、かなり落ち込むと思うよ。クラス違うからなんとも言えないけど、霧島さんって勉強も運動も人一倍努力しているって聞いているんだ。ほら、放課後『E組』で補習してもらっている時も、霧島さん来て、一生懸命質問していくんだ。参考書とか教科書とか、ノートとか抱えて。あの姿みていたら、どう考えたって勉強していないとは言えないよ」

「らしいよ。キリオくんも言ってた。勘違いしたとこばかりヤマかけて勉強して自滅してるって」

根本的になんか間違っている勉強方法なんだろう。僕は続けた。

「俺も、数学関係で小学校の頃から、努力しても普通の人に追いつけないって経験山のようにしているし、最近も、まあ評議委員関係のことでごたごたしたし、落ち込むことがないってわけじゃないさ。けど、俺は運よく、周りから認めてもらえたり、誉めてもらえたり、それこそ自分に不釣り合いなものとかたくさんもらったりしてやってこれているんだよな。どうしてかわかんないけどさ」

みな、なぜそこで頷くのだろう。ちょっとむっとくる。

「けど、霧島さんはどんなに努力しても、どんなにがんばっても、自分のほしいものが手に入らないんだよな。それは本当に辛いと思うよ。言い訳できないよな。どんなに見かけがよくたって

、それって使えない外国の札束、ほら、マルクとかドルとか元とか、そういうもんばかりで、いくら差し出してもガム一個買えないっていうのかな。うまくいえないけど、こんな悔しいことってないと思うよ。その一方で、奈良岡さんとか弟君とか、そういう人たちが軽々とほしいものに入れててさ、本当にほしいものに手を伸ばしていたら、あっという間にさらわれて、『お前にはそんなもの手に取る資格なんてない！』ってののしられるわけだよ。これは辛いよな」

——本条先輩みたいになりたい。新井林みたいになりたい。

——完璧な評議委員長になれば、きっと本条先輩は俺を認めてくれる。

不意に、身体が氷で包まれたような感触を覚えた。頬の痛み、耳鳴り。

気のせいだった。誰も側にいないし、目の前には評議三人衆がそれぞれちらばっているだけ。外から流れる風は夏初めのもの。冷たくなるとことはない。なのに、奥からひゅるひゅると冷たく凍りつくような、かちかちとした音が響いてくる。目を閉じると、半年前の自分が見える。闇の中で、ちょうど今くらいの時間帯だった。わめき散らして目と咽が飛び散らんばかりに泣き喚きつづけている自分のシルエットが見える。金縛りという言葉はたぶん、今の僕のためにあるのだろう。唇をかみ締めた。

「立村、どうした」

「ごめん、悪い」

天羽がうつぶせていた半身を起こし、僕の方をげげんそうに見る。

「いつものくせだ。気にしないでくれ」

無理やりかっこつけてごまかした。天羽がもう一度僕の側へやってきて、軽く僕の頭上に手を置いた。

「お前も苦労したもんな」

一言だけ残し、そのまま天羽は大きく息を吸い、いつもの調子で、

「今の話、一通り聞いてな、やっぱこれは俺もしゃべれないとまずいわなって思ったわけっす。てかさあ、俺、霧島の弟の気持ちが非常によくわかるっていうか、それとおんなじこと、つい最近やっちゃったもんでさ」

——天羽、お前。

息を呑む気配がした。隣の部屋からただはしゃぐだけの声が響く。僕たちのいる四人部屋だけが、不思議な静けさに支配されていた。なんでかわからない。僕も、きっと他の奴らもわからないだろう。この四人で部屋を共有して、いろいろな馬鹿話ヨタ話で盛り上がっていたことは何度もあるけれども、カーテンが揺らぐ音すらも聞こえそうな程に空気がしんと鳴っていたのは初めてだった。きっとこの四人では、一度もない。

難波も更科も、僕の前に立ちだかる格好の天羽をじっと見据えている。

——きっと、話していなかったんだなあのことを。

——きっと、西月さんとのことをだ。

かばれる形で僕は首を竦め、浴衣をかきあわせる格好で膝をかかえきった。

「更科が今言ったようにさ、本当のことをしゃべっちゃうと、後始末が大変だってのはすげえよくわかるんだ。実際、修学旅行が始まるまでこの後始末、時間がかかったし、たぶんまだ終わってねえよ。けど、難波が言ったろ？」

更科、難波、交互に見ている様子だ。後ろから、首の動きでよくわかる。

「本当のことを、いつか誰かが言わないと、相手が勘違いしまくるってのも、確かにそうだって思う。お前ら知ってると思うけど、俺が以前の評議委員コンビ組んでいた相手との関係も、まさにその通りでさ。立村には面倒かけたよな」

僕の方を振り返り、頷く。返事しなくていい、と首を小さく振った。

「けど、俺としては、言わねばきっと前に進めなかった。結果として相手を救いようないくらいに傷つけて、一生償わねばならないくらいのことをやらかしてしまったけど、いつかは本当のことを言わねばならなかったんだ」

「西月に、か」

更科のか細い声が、途切れ途切れに聞こえる。

「そ。けどそれは、さっきの霧島の話とおんなじことでさ、相手に受け入れられるかどうかは別だったの。霧島はまだああいうぶっ千切れた奴だからさっさと行動して発散したけどさ、俺の場合はだめだった。俺がどんなに努力されても、相手のことがへど出るくらい嫌いだって気持ちが変わらなくてさ。どうやったらおっぱらせるか、もう二度と顔なんて見たくない、そんな気持ちでいるなんてこと、本当のことだからって伝えようとしても受け入れてもらえなかった。けどそれはしかたねえよな。受け入れてもらえるわけがねえっての」

「けどお前が西月にされてたことは、確かにそうだな」

難波は両腕を組んで、しみじみと頷いた。

「だから、修学旅行前にな、立村に頼んで最後の話し合いをカラオケボックスでさせてもらったわけなんだけどな。なっさけねえことに俺、思いっきりわんわん泣いちゃったよ。もちろん相手の前じゃあねえよ」

——泣いた？

僕も意味がわからず、天羽の背骨に目を走らせた。

「俺が西月に口走ったこと、あれは大嘘で、単に近江ちゃんのことを気にいっちゃって、うまく表現できなくて、暴力的な表現になっちゃったこと、ごめんって、まさに言い訳だよな。気持ちとかは全然変わってねえんだぜ。西月みたいな偽善女なんて今でも一番嫌いなタイプだってこと、全く変わってねえよ。社交辞令を本気に取られてしつこくされて、親切の押し売りされてもうたくさんだっていうのが、俺のきったねえ本音。全く変わっちゃあいねえ。なのにな、それを全くの嘘だって否定して、『小春ちゃん』なんぞと大嘘言ってまとめたんだ。結果、どうなったかっていうと」

——知ってるよ。見ていたんだから。

「どんなに俺が本心本音で語ってもあきらめてくれなかったのが、まろやかあな言葉でしゃべったとたん、あっさり別の男に鞍替えしてくれて、それっきり近寄らないでくれるようになったんだ。俺がいやなこと言わなくてもいいように、別の奴と一緒にくっついてくれるようになった」

。なんでかわからないけどな、俺、あの時のショックはすごかった。もちろん相手の奴が西月のことを心から惚れてるってこと知ってたからできたことだけど、でもな」

たぶん、西月さんを迎えにきたA組の男子のことだろう。名前はええっと、誰だか忘れたけど

。

「狩野先生にも言われた。『誠意を持った嘘』を持って接しろってさ」

「『誠意を持った嘘』？」

難波が繰り返した。

「そ、俺からしたら嘘ばかり並べて、奇麗事ばかりで、あの女のしてきたことと同じじゃねえかって思ったけどさ。でも、相手を不必要に傷つけないためには、嘘も方便なんだなって、思った。負けちゃったって感じながら思った。つまりさあ、俺が早い段階でやんねばなんなかったのは、本当のことを並べて、わざわざご丁寧にテープに取って渡すことじゃねえ。嫌いな相手でも、ちゃんと思いやりもって嘘を吐いて、遠ざけることなんだってさ」

「けどそれはまずいんじゃないかよ！」

なぜか難波の声がとんがる。更科が「ホームズ、落ち着け」となだめようとしているが聞かない。

「確かに、その通りかもしれない。天羽、俺も西月の行動については不愉快きわまるものあったし、お前が近江を選んだのも納得する。けど、お前ははっきりと本当のことを伝えた、それは間違っていないと俺は思う。お前が覚悟を決めて、全部伝えたことが、間違っていると俺は思わない」

「そう思ってたよ、俺もさ。けど結果は、西月はしゃべれなくなってしまった、これが全てだ。俺はその責任が取れなかった。傷つけるだけ傷つけて、逃げ出して、結果大事になっちゃった」

一呼吸置き、天羽は難波にもう一言、やさしく告げた。

「けどさ、難波。お前なら覚悟あるだろ。たとえ霧島に罵詈雑言吐き散らされて、首の骨折れるくらい文句言われても、とことん言いつづけるだけの覚悟、あるだろ？」

——え、難波、どういうことだ？ あの、天羽も？

とまどい、ゆれる。ぐらぐらと目の前の映像が変わっていく。自分の想像していなかった言葉が、僕も消化できない。悔しいことに更科は冷静に天羽の言葉を聞いている。どうしてだ、なぜなんだ。

「さっき立村が言った通りさ、霧島はかわいそうな立場にいると思うんだ。俺は西月より霧島の方がはるかにおもろいやっちゃって思うけど、今言ったみたいに言いたいことを全部言って、責任取るだけの覚悟はねえよ。だから、更科の意見に同意する。俺たちの方に害が及ばないように、うまく機嫌を取ってごまかしていく方があと半年間乗り切っていく上では問題ねえと思うんだ。けど、今立村が代弁しまくってくれたようにさ、霧島はかわいそうだよ。なぐっちゃんには全くアウトオブ眼中だしさ、せっかくのべっぴんもあの狂犬的性格が災いして、男っ気もなし。弟くんだけ？ あったまいい奴だったらなおさらだろうな。役立たずだって思ってるさきっと。だから、都合よくC組で利用されまくっているのを、自分のこと必要なんだっておめでたく解釈してるんだろな」

うん、うんと三人で頷く。こうやってみると僕たちはずっと、誰かの言葉に相槌を打ち合うことしかしていないのかもしれない。

「けど、今の俺は霧島に対して、同じ評議同士って連帯感以外のな一んも感情がねえよ。それは更科も一緒だろ。だから、もし俺たちがそういうことを正義感面して言ったとしても、西月の時の二の舞になっちまう可能性が大だ。俺たちが迷惑するから、頼むから現実見ろよってこと言うだけだしさ。立村なんてそんなこと、言えると思えないし、こいつだったらかえって丸め込まれるよな。もし、本気で霧島のことを考えて、どんな文句言われても、何されても、覚悟していて、それこそ霧島が手首切るかもしれないくらいの時に命賭けて止めてやるって気持ちがあれば、そういうことって言えねえと思うんだ」

——命賭けて、止めてやる、か。

天羽は僕をちらっと見た。意味があるのだろうか。

「難波、まだ今のところ時間があるし、考えてみる余裕もあるだろ」

今度は難波へ視線が集まった。いつもだったら「うるせえなあ、何いきなり俺に説教するんだよ天羽！」と怒鳴りそうな難波なのに、腕組みした手は動かなかった。ずっと、股間のところを覗き込むような格好で、考え込んでいる。

「あと、更科、霧島の弟とはあとどういう話したんだ？」

そうだった、僕もそれは聞きたい。僕に伝えなくてはならない話があったはずだ。なんで忘れてしまうんだろう。あわてて僕は天羽の影から顔を出した。

「ああ、あれね。そのウルトラ秀才キリオくんなんだけど」

少し痺れてしまったような難波を無視して、更科はまた赤ん坊的笑顔を向けた。

「どうやらさ、この秋、生徒会に参加したいみたいなんだよ。評議委員は姉貴の馬鹿さ加減をいやというほど見るはめになるから参加最初からする気なかったんだって。けど、これから先は生徒会の時代だよって教えてやったらさ、やる気満々。だから立村も何気なく目をかけてやってくると助かるなあ。ほんっと頭いいぞキリオの弟は。姉貴と大違い」

しばし僕は絶句していた。天羽がかわりにたずねてくれた。

「そんなん、すごいのか、奴って」

「あれじゃあキリオなんて、相手にされねえよなあ。俺としては、キリオくんの生徒会希望の話を立て評議委員長に伝えておいて、俺が怖い姉貴の面倒を見ることを交換条件に、言っといた」

「何をだよ」

なんか面倒なことになりそうだ。せっかく更科にも感謝したい気持ちでいたのに、いらいらしてくる。

「少し、家の中でキリオのこと、持ち上げてやれよって。まあ無理かもしれないけど、せめてさ、二歳早く生まれてきたんだから、その分の敬意はお世辞たっぷりでもいいから、用意してやれよってさ。ほんと、簡単だよ。キリオは。他の女子たちに対してべたべたのお世辞を言うよりも、ほんの少しだけ『キリオさんあなたは天才！』って誉めてやるだけで、すぐ舞い上がっちゃうんだ。ほしくてほしくてなんないんだよ。うそでもいいから、誉め言葉がほしいんだよ。

顔じゃなくて頭を誉めてほしいんだよ。あそこまでよだれたらしてちょうだいコールしているのを見るとさ、あきれのを通り越して、可愛いよな。ペット」

思わず笑いをかみ殺した。その通り。難波と天羽は遠慮なく腹を押えて笑い転げていた。

「更科、ナイス！ 名言！」

「これからあいつの暗号は、『ペット』だな」

それからの流れは、真面目な会話が一転、下ネタのオンパレードとなるのはしかたのないことだ。

隠し持ってきたグラビア写真を布団の上に広げ、それぞれの好みを語り合いつつ僕は、目の前の三人衆を眺め、考えた。

——もし、本気で霧島のことを考えて、どんな文句言われても、何されても、覚悟していて、それこそ霧島が手首切るかもしれないくらいの時に命賭けて止めてやるって気持ちがあれば、そういうことって言えねえと思うんだ。

難波を見つめて天羽が告げた科白。なんの疑問もなく見つめていた更科。反論せず考え込んでいた難波。

——難波、もしかして、お前、そういうことだったのか？

「日本少女宮」の千切ったグラビア水着写真を食い入るように見つめる難波の視線を追った。ごくごくふつうのアイドル写真に興奮しているだけに見える。でもその奥に、僕が今まで見ようとしなかったものが隠れていたのだろうか。ただの舌戦、気が合わなくなった評議委員同士、口喧嘩の陰には、難波の覚悟のようなものが、確かに潜んでいたのだろうか。

女子評議四人部屋、もちろん和室なのだけど、男子の部屋と違っているのは外から見える夕暮れがきれいだったこと。それだけで私は旅行の神様からいい子いい子されているみたいな気分になった。なのに、

「なんだか地球が破滅しそうな色よね」

とゆいちゃんに切って捨てられてから、なんだか口に出しづらくなった。ゆいちゃんってもともときれいな風景とか美術とか音楽とか、全く興味を持たない子だった。

「美しいとかきれいとか、そんなのは掃除の時だけあればいいのよ」

——うわ、ゆいちゃん、せっかくこんなに可愛いのに。

もちろん私もゆいちゃんと永年の付き合いだし、彼女に対して「可愛い」という誉め言葉を遣う場合は気をつけなくちゃと思っている。いつか十歳くらいのひらひらしたドレスを纏った点画のかわいらしい少女画を見たことがあるのだけれど、ゆいちゃんはまさにそれだった。誰かが「女の子は砂糖菓子で出来ている」ということを言っていたけれど、私みたいに煉瓦か粘土細工っぽいタイプと違ってゆいちゃんはお菓子屋さんのデコレーションケーキに乗っかっている薔薇の花みたいに、食べるのをためらってしまいたくなるくらいなのだ。今はお下げ髪にして地味にまとめているけれども、浴衣がまだ乱れることなく襟を逆三角形のままに保っているし、咽から流れる肌が真っ白い。私みたいに、浅黒い感じじゃない。ほっぺた触ったら、ぽろっとお菓子が壊れてしまいそうな可愛いお姫様。なのになんでゆいちゃんには「可愛いよ」って言えないんだろう。

戸口側から四枚川の字型に布団を敷かれていた。一応順番としては、ゆいちゃんが戸口側、隣が私、その隣がA組の近江さん、一番奥がB組の轟琴音（とどろき ことね）ちゃん。本当は琴音ちゃんがゆいちゃんの隣に行きたかったらしくて、

「ゆいちゃんの隣は私だよ？」

と上目遣いににやにや見上げていた。なんだかわかんないけれど、ずいぶんおどおどした態度だと思う。最近私は琴音ちゃんの態度が勘に触ってならないのだけれど、ずっと同じ女子評議同士、特に悪いことをしたわけでもないんだからってことで知らないふりをしている。

「いい、私、美里の側に行くから」

ゆいちゃんってその辺、感情がはっきり出る。近寄らないで、ってメッセージがほんの一言二言でびんと伝わってしまう。たぶん今の言葉、琴音ちゃんにもわかったんじゃないかな。

——ちょっと言い過ぎだよ、ゆいちゃん。

まあ私も、琴音ちゃんの隣に行くのはなんとなく気詰まりだったので、ゆいちゃんの言う通り二番目の布団をキープした。それはまあそうだろう。さっきこずえとけんかしたところ見られちゃったし、例のあのこと、だいぶおなかも楽になったのだけれども食欲はやっぱりないあれ。あとで鎮痛剤をくれると言ってくれたっけ。きっとゆいちゃんは、C組の男子の代わりにな

って、私に謝ってくれているんだと思う。こんないい子、なかなかいない。口がきついとことか、男子を罵る現場に居合わせなければみんな大賛成してくれるはずなのにだ。琴音ちゃんは一瞬だけひょっとこみたいに頬と口もとを膨らませたけれど、ほんとにあっという間だった。すぐにまた、ゆいちゃんを目で追うようにして、両手をついて、

「寝る間だけだもんね。あとでおしゃべりするもんね」

ひくひくさせながら笑った。なんと言えればいいんだろうか。どうして私って今まで、この二年間、琴音ちゃんの態度に平気でいられたんだろう。原因がわからない。

「美里も、ねえ、そうだよねえ」

「私、やっぱりちょっと横になっていい？」

うまく角を立てないようにして私は横になった。浴衣の帯はとっくの昔に解いている。くっついていた紐を両脇の下から通して蝶結びにして、楽な格好になっている。襟はゆいちゃんとちがって、だいぶだらっとしている。男子がいなくてよかった。

「美里、まだ痛いのか？」

優しい感じではなくて、だいぶきつい口調。ゆいちゃんが自分のおふとんから私の顔を見下ろした。立てひざになって、

「二日目だもんね」

「うん、ごめん」

さっき、男子評議の部屋に行って口げんかして戻ってきたのだろうか。途中で立村くん途中退場を命じられて女子評議は、ゆいちゃんを残してもどってきたのだけれども、私としてはかなり心残りだった。旅行始まって以来立村くんの態度には、かなり毅然としたものがあるんじゃないかなって気がするし、私も不必要に逆らいたくなんてない。けど、ゆいちゃんがたった一人、男子たちの中で、理屈っぽい難波くんを相手にするなんて、ほんと大変だったんじゃないかなって思う。

「それにしてもさ、この部屋どうしてテレビ、ないのかな？」

ご機嫌を伺うような口調でまた、琴音ちゃんがきょろきょろし、ゆいちゃんに話し掛ける。もし小春ちゃんがこの場にいたらすぐ、琴音ちゃんとふたりで話を合わせていたのだろうけれども、A組女子評議が近江さんに替わっている現在はそれも望めない。

「昨日だってそうじゃないのよ！」

いらいらしているのが、よくわかる。ゆいちゃんはぺたんこ座ったまま、まだ私の頭後ろにいた。きっとゆいちゃんも、琴音ちゃんのへりくだった態度にうんざりしていたんだろう。あとでふたりになった時にでも聞いてみたいなって思った。

「ところで、A組はどこに？」

さんざん冷たくあしらわれてもまだ琴音ちゃんめげない。私の左隣にいるはずの、近江さんの布団をぽんぽん叩きながら尋ねた。

「そうね、近江さんどこいったんだろう」

私の手を引いて戻ってきた後、何かを思い出したらしく、反対側のロビーへと向かった。聞けばよかった。まだ戻ってきていない。近江さんの場合だと、決してA組の女子がいる部屋に遊び

に行くとは考えにくい。かといって男子部屋に向かったとも思えない。

ゆいちゃんは少し首をかしげるようにして、

「他の部屋にさっさと行ってくれればいいんだけどね」

これまた、はっきりきっぱりした言葉を吐いた。

——ゆいちゃん、いくらなんでもそれはきついよ。

おなかよりも、右側の背中がずきずき痛い。私は寝返りを打ちゆいちゃんに話し掛けた。

「けど、今夜は戻ってくると思うよ」

「それにしても立村もなんでこんなむちゃくちゃな部屋構成したんだろうね！」

「ゆいちゃん、そろそろ近江さんも戻ってくるし聞かれてしまったらまずいよ」

もちろん私も、ゆいちゃんが怒りを爆発させたい気持ちが伝わらないわけではない。二年終りまで一緒だった、評議仲間の小春ちゃんが、近江さんと天羽くんの陰謀……と、ゆいちゃんは信じきっているけれど、ほんとはかなり違うと思う……により言葉をなくしてしまうくらい傷ついたこと。もともとゆいちゃんと小春ちゃんはとりわけ仲良しだったからなおさら腹が立つんだろう。あんな気の強いゆいちゃんが、小春ちゃんの黙りこくった様子を確認したとたん、抱きつくようにして「ごめんね、ごめんね」って泣いていたのだから。

小春ちゃんを傷つけた張本人がああ、A組現女子評議・近江さんということになっている。

——けど、近江さんも悪い人じゃないって思うよ。小春ちゃんのこととはともかく。

「美里、ちょっと起きてよ」

「え？」

関係ないことばかり考えていたら、いきなりゆいちゃんが私の両腕を取り、ぐいと引き起こした。外の窓は半分空いていた。ゆいちゃんはちらっと琴音ちゃんの顔を見て、目で窓を閉めるようにと合図した。こくこくと過剰なくらい頷きながら、琴音ちゃんが笑顔で立ち上がる。とにかく、ゆいちゃんにかまってほしいうのが見え見えだ。

「ずっと前から思っていたんだけど、ちゃんと言わないと気持ち悪いし、裏表あるのっていやだから言わせてもらうね。ほら、ちゃんと座ってよ」

「な、なに？」

ゆいちゃんもきちんと座りなおした。なぜか帯はまだゆいちゃん解いていなかった。後ろの方から、

「ねえどうしたのどうしたの」

と覗き込もうとするのだけど、ゆいちゃんは片手で、「くるな」の合図を送っていた。私だったら素直に後ろに引っ込んでいる。でも琴音ちゃんは気付かない振りして、また頷きを顎で何度も繰り返しながら、ゆいちゃんの隣に座った。私と一対一。その脇に琴音ちゃん。なんだか親にお説教されているような図だった。

「つまりね、さっきのことだけど」

「難波くんのこと？」

「あんな馬鹿のことで私怒るわけじゃないじゃない！」

——怒っていたくせに！

以下、約十分くらいの間、私はゆいちゃんのお説教を聞くことになった。もちろんゆいちゃん隣にいる琴音ちゃんは、背を丸くして、顔にぴったりくっつくボブヘアを何度も振っていた。頷き過ぎで目障りだけど、ゆいちゃんが無視してしゃべるから、私も無視してうなだれていた。その通り、ごもっとも。ごめんなさい。

砂糖菓子だと思って食べようとしたら実は硝子で口を怪我した。そんな感じのゆいちゃんだった。

「あのね、美里。あんた初めてのあれだってことで、相当いたい思いしていたのはわかっているわよ。私だってあるし、女子は大抵分かっているはずよ。けどね、こずえちゃんに対して、あれはないでしょ、あれは！」

まず一発目、がちときた。言い返せない。

「さっきもお風呂でこずえちゃんに会ったけど、もうさらっと流していたわよ。私だったら思いっきり一発二発ひっぱたいていたかもしれないけど、明日こずえちゃんたちと一緒に自由行動だし、すぐに仲直りしなくっちゃって笑っていたのよ。私ね、お風呂でほんっと、こずえちゃんてえらいなって思ったのよ」

——わかってるってば。

いつもそうだ。ゆいちゃんはこずえと較べて私の方が赤ちゃんみたいだって扱いをする。ちょっとむっときたので黙っていた。

「ナプキン集めてくれて、うちの殿池おばちゃんに交渉してお風呂の準備までしてもらってだよ、ふつう友だちだっていっても、そこまで丁寧にやってくれる子、普通いないよ」「うん、わかってる」

「わかってないわよ、美里！」

また雷が落ちた。そと後ろを振り返った。誰もいない。ちょっと前に見上げた空には星がまんべんなく散らばっていて、黒いところが少なくなっていた。こんな空みたことないって、話逸らそうかと思った。できなかった。

「で、さっきはなに？ 八つ当たりしてたわけ？ こずえちゃんが優しいのをいいことにしてわがまま放題って、あれなに？ ああいうことして許されるってわけ？ だからあんた、男子に馬鹿にされるのよ！」

「ゆいちゃん、ごめんなさい」

つい謝り文句が口を出た。立村くんみたいで自己嫌悪。

「それにもっと言いたいんだけど、最近の美里、なんか変だよ」

ゆいちゃんはさらにヒートアップしていく。たぶん、難波くんとの口げんか、負けたか五分五分かのどちらかだったのだろう。八つ当たりしているのはゆいちゃんの方じゃないって言いたいのをこらえた。

「男子に妙に媚びているみたいでさ。もちろん意識なんてしてないって思うよ。美里のほんとのところは私も知ってるもん、けどね」

「私、媚びてなんていないけどな」

やっと反論のチャンスあり。冗談じゃない。ゆいちゃんもそんなこと言う権利ないはずだ。

「だって、さっき荷物、立村が持ってきてくれたじゃないの」

「それは、今朝立村くんが勝手に」

そうだった。重たい方の荷物を、朝バスに乗り込む前、立村くんは自分の方に引き寄せて部屋に到着するまでずっと預かってくれていた。私のあのことが男子全員にばれているってこと聞いて、私を辛かったら半殺しにすると男子たちを脅して、私を守ってくれようとした。いつもの立村くんじゃないみたいだった。うまくいえなくて、つい「ありがとう」とも言えずじまい。

——あとで、お礼言っておこうかな。

思いかけたところにまたゆいちゃんがきつい言葉を落とす。痛い。

「荷物を持ってくれた時、私見ていたんだけど、美里、いつものように軽く流さなかったでしょ。なんで？」

「何でって言われても、ただ」

言いかけたところにまたゆいちゃんがぼつちりと切り裂くようなことを言う。血が流れそうだった。

「美里って、羽飛たち他の男子だと、ああいう時『いいよいいよ、私平気だから』って言ったよね。男子になんて頼りたくないって堂々としていたよね。けど、立村にだけは違うよね。やたらと顔色を見てさ、立村ごときの弱弱しい男子に対して、顔赤らめちゃってさ。いつも見てて、私ほんっと腹立ってたのよ。別に私、評議委員長として使えない馬鹿って言っているわけじゃないわよ。美里だってああいうひよわなタイプが好きなんだったらそれは止められないなって思ってたし。それにすぐ、別れると思っていたし、だからみな祝福したのよ。カップルになった時」

——だからそんなのわかってるって！

わかっていますわかっています。立村くんが私に似合わない男子だってこと。ひよろひよろしていて、言葉もはっきりしていないし、暗いし、数学は出来ないし、唯一英語が得意で、女の子に生まれた方が絶対幸せなタイプなんだって馬鹿にされているってこと。そんな男子を選んだ私も一緒にまぬけのお馬鹿なんだってこと。わかっているけど、今のところ私、自分から別れる気さらさらないんだから、しょうがないじゃない。立村くんと付き合い出してこの六月で一年になるけれど、いろいろなことがあったし、けんかもしたし、振られそうにもなった。ひっぱたきそうにもなった。でも、それでも私にとってはたったひとり、違うことをいえる人。そういう人だから、付き合いたい。それだけのことなのに。

「けどね、この一年ずうっと見てきたけど、美里はだんだん立村にひっぱられて、すっごく甘ったれになっているような気がするんだ。女子にいい影響を与えていないって言えばいいのかな。初めて会った時の美里は、間違っていることは絶対間違っている、納得いかないことは絶対納得行かない、先生だろうが馬鹿男子だろうが、嫌われようがぶつかっていく、そんなところがあったじゃないのよ。なのに今は何？ 立村の言いなりじゃないの！ さっきだって！」

また話が飛んだ。ゆいちゃんの場合、話の着地点がほんっといろんなところに飛んでしまい、ついていくのに苦労することが多い。どうしてかわかんないけど、たぶんゆいちゃんの中ではす

べて細い糸で繋がっているんだろうけれど。テグスの糸って遠くからは見えない。ゆいちゃんに見える糸が、私には聞いている間、皆目見えないままだ。

「なにびっくりしてるのよ。ちゃんと聞いてよ。私、美里だから言うんだからね！」

——単に八つ当たりしてるだけでしょ。

ここで本音を言ってしまったらまずい。小学校時代、いや去年までの私だったらためらうことなく嘔み付いて取っ組み合いの喧嘩になってしまったような気がする。なのになぜか、素直に聞いている。やっぱり、このあたり立村くんの真似している。

ゆいちゃんはお下げ髪を肩の後ろにぽんと放った。

「あのね、私が言いたいのは、立村なんか美里のいいところを変えてほしくないの。今日のことだってそうだけど、美里、自分が女子だから、頼って守ってもらえるなんて甘えた根性、持っているような気がしてならないのよ」

「そんなことないよ、ゆいちゃん、私は甘えたくないもの」

隣で首を振ったり頷いたりしている琴音ちゃんを見たくなくて、ゆいちゃんにだけじっと視線を向けた。ゆいちゃんならば、このあたりわかってくれると信じたかった。いつもきついことばかり言って、男子たちからは煙たがられているけれど、なぜか嫌われないところがある。

「じゃあどうして、今みたいに生理のことくらいで騒ぎ立ててしまうのよ。私も美里の気持ちはわかるってさっき言ったよね。それを責めたりなんてしないよ。けどね、男子にちょっと見え見えの優しさ押し付けられたくらいですぐに、ころっと男子を許してしまう、その態度が私は許せないの。腹が立つなら腹が立つ、いいかげんにしてほしかったらいいかげんにして、そうはつきり言いなさいよ。でないと、男ってね、ちょっと甘い顔するとすぐつけあがって、女子を押しさえ込もうとするのよ。最低の人間なんだから。許せないんだから！」

「違うよゆいちゃん、それとこれとは違うよ。私、そりゃ傷ついたよ、けど！」

きっとゆいちゃんは、C組男子経由で知れ渡った、あのことについて、もっと私が怒るべしって訴えているのだ。ゆいちゃんの性格、正義いっぱい、気持ちは伝わる。ありがとうって本当に言いたい。けど、ゆいちゃんの言うように、「せっかく紳士になってくれた男子たち」にまで「許せない！」と怒る必要はないんじゃないかって気がした。今朝の食事時間でも、彰子ちゃんが南雲くんからいろいろ教えてもらい、そのお礼に自分たちだけで食卓の片付けをしようと申し出たってこと、なんだか気持ちが変になって口がうまく動かなくなってしまった。もちろんありがとうって言う言葉が一番いいんだろうけど、それがうまくつりあいとれなくて、変になってしまった。

けど、それを頭ごと「違う」って言い張るのって、なんか違う。

ゆいちゃんはまた話を別の方向へ向けた。ほんっとゆいちゃんの言葉ってわかりづらい。困る。怒りたくても的を絞れない。

「さっきだって！ 立村は何をしたと思う？ 私と難波の馬鹿との言い合い、うんざりしたんだろうね。早く片付けたくてならないって顔をして、女子たちだけ追い出したんだよ！ 女子だけよ！ もし公平にあいつがジャッジをしてくれるっていうんだったら、男子もあいつだけ残して全部追い出すとか、もしくは美里と立村が残ってなんとかするとか、いろいろあったじゃない

のよ。なのに、ずっと私、男子の中でひとりっきり、誰も味方がいないまま、男女同権を叫んでいたのよ」

——ああそっか。ゆいちゃんってば。

ゆいちゃんには踏んではいけない地雷が隠れていた。

難波くんも、立村くんも、そして私も。今日三連発で、思いっきり踏みにじっちゃったのだ、きっと。

隣の琴音ちゃんはずっと頷き続けている。どこか冷めた目で私は、

——首、痛くなんないのかな。

とってしまった。最後に歯を見せて、声を出して

「えへへ」

と笑顔を作られた時には、思いっきりひっぱたいてやろうかとさえ思った。

ゆいちゃんのうちが呉服屋さんで、何一つ女性を大切にしてもらえていないうちなんだということは、前から聞いていた。

特に最近は、「女だから」という理由ひとつで、将来の跡継ぎの権利を奪われたとも。

後継ぎって、今から決めるのは変だし、これから先何があるかわからないんだからと私や小春ちゃん、琴音ちゃんは慰めたけれども、ゆいちゃんは親指を静かに下げ、

「もしあいつが跡継ぎになっちゃうっていうんだったら、私はどんな汚い手を使っても奪い取ってやるんだ。うちの店は私のものだって、子どもの頃から決まっていたのに！」

と言い放った。大人の世界のことだし、まだまだ希望はあると思う。ゆいちゃんの弟だって二歳下だし、もしかしたらお店なんて継ぎたくないと言い張るかもしれないのにだ。

「あんなわけのわからないことばかり言って、うちの親たちもなぜ逆らわないのよ。私が頭悪い？ ふざけないでよ。これでも私、青大附中に受かるだけの頭はあったんだから！ 今は成績悪いかもしれないけど、まだ本気だしてないだけだもん。本気でやったら絶対、青大附中の文系トップは狙えるんだから！ 公立だって、青大附中に受かるってことは、高校も青潟東には受かるはずなんだもの！」

小春ちゃんもそうだけど、ゆいちゃんは頑張りやだ。どんなに評議委員の仕事が忙しくなっても、ちゃんとテスト勉強や予習復習しっかりやっている。私なんて時々こずえや立村くんに英語のノート見せてもらったりしているのに。けど、結果で言えば私の方がゆいちゃんよりも上だった。きっと、要領が悪いのかな、と思っていた。

「でも、学校の勉強と店の運営とは違うのよ。絶対に違うの。だから私がうちを継ぐの！」

口癖のように言いつづけてきたゆいちゃんにとって告げられたという、「家は弟に継がせる」という言葉、どう受け止めたのだろう。少なくとも今見る限りだと、ゆいちゃんは全く、跡継ぎになる道をあきらめていない。やはりゆいちゃんは強い。負けず嫌いというには言葉が弱すぎるような気がする。私には真似できないこと。

そんなゆいちゃんからしたら、私のここ最近取っている態度は、許しがたいものに映るんだろう。

たかがおなかが痛くなって下着が汚くなっちゃうくらいでヒステリー起こして、友だちに八つ当たりなんて、もし呉服屋の跡を継ぐような人格者だったら決してしないことなんだろう。男子たちに負けるなんてもってのほかなんだろう。私のように、つい甘えて立村くんに荷物を預けてしまうなんて、とんでもないことなんだろう。

ゆいちゃんは続けた。

「立村のことはどうでもいいのよ。たぶん美里だってもっといい男と出会ったらさっさと別れると思うしね」

——別れないってば。

目をきょときょとさせて琴音ちゃん、もうこちらを見ないでさっさと寝てほしい。

「けど、立村みたいなぼおとした奴が、美里のあのことを知ったとたん、なに？ いきなり『もし美里に手を出したら半殺しにする？』ですって？ なに気取ってるのよ馬鹿って言いたくなるよね。あんな奴に守られて何が嬉しいのよ。美里はむしろ、同等になるか、立村より上に立ってこき使う方が合っているのよ。男っていつもそう。ちょっと女子の弱いところを見つけたとたん、ガキははやし立て、ちょっと大人になると『守ってあげる』なんて言葉で白々しく守り立てようとするの。ふざけないでよ。あんなみたいな汚い毛だらけの腕やすねに守られたってどこが嬉しいってのよ」

——立村くん毛深くないと思う。

「いい、美里。今はちょっとちやほやされているだけでもいいかもよ。成績で評価してもらえるもの。頭がいいとか評議委員の仕事ができるとかで。顔とかそんなくだらないもので評価なんてされないからね。男子とも平等で今は、いられるの。けど、それはあくまでも学校にいる間。社会に出たとたん、一気に『男尊女卑』みたいな扱いをされちゃうのよ。どんなに優秀な女性でもそうなのよ。エリートだとか女子総合職だとか言われても、結局は、男の手下、召使。冗談じゃないわよ」

「うん、わかる、わかる」

胸に、ちくりと針がささったみたい。素直に思いっきり頷いた。

「わかってくれた？ そうよね、美里そういうの大嫌いだもんね。本当の美里だったらね」

「本当の美里」というところにかなり強いアクセントを置いた。続けた。

「けど、最近は女性も賢くなったから、どんどん言い返せるのよ。そのために私だって毎日勉強してるの。男子が勘違いしたことしでかしたらすぐに抗議するようにしてるの。今後大人になって、社会に出て、総合職になって、男をこき使う時のためにね。でもそうすると今度、男子たちはもっと酷い手を使うのよ」

「酷い手って？」

「嘘ばかり言って、お世辞ばかり言って誉めるのよ。あなたはきれいだ、あなたは美しい、あなたは仕事ができなくて顔さえよければいい、ってね。第一聞きたいんだけど、顔の美しさって、そいつの好みで決まるもんよ。私のことを勘違いして、うちで小さくなって三つ指ついてお迎えする性格だなんて思う奴いるけど、そういう奴こそ反省してほしいもんだわ。人間の価値はね、顔や外見じゃないの。頭なの、頭が一番必要なの。男にかなわない頭が必要ななの。

そう やって見下せば、必ず男たちは私たち女子の下で非常識なことをしたりしない。美里があれになったからって言っても、傷つけたりしないし、もちろん知らん振りしてくれるし、むしろそういう意味で親切にしてくれるわよね」

「だったら立村くんも、きっと、そうしてほしかったんじゃ」

思わず口を挟もうとしたとたん、またゆいちゃん言葉が別の方向へと飛んだ。だから疲れる。

「なに勘違いしてるのよ美里！ 立村はね、あれは違うのよ」

女子同士の部屋にいと、かならず一回は立村くんのこき下ろしが始まる。覚悟していたけど、辛い。ゆいちゃんはびんと張った背筋をげんこつで数回叩いた。また正座しなおした。

「立村は要するに、美里の弱さを見つけたとたん、勘違いして踏み台にしようとしたのよ。最低じゃないのよ」

「踏み台、ってどういうこと？」

どきどきする。私の背を踏みつけるってことだろうか。部屋で心配そうな顔をして見送ってくれた、立村くんの浴衣姿が思い出された。似合っていた。ずっと、他の男子よりもきちんと着ていて、まるでゆいちゃんの男子版みたいに。

「いい、立村ってね、今まではずっと、踏まれつづけてきたのよ。男子連中はおろか、美里にも。美里を好きになって告白したってことは、かなりの身分違いの行為よ。美里、断って当然だったのよ」

「ゆいちゃんお祝いしてくれたじゃない！」

隣の琴音ちゃんの顔きへらへら笑いに文句を言うつもりだったけど、ゆいちゃんをなじった形になってしまった。動じないゆいちゃん。

「仕方ないわよ。美里が好きになっちゃったんだから。けどね、美里。立村がずっと、美里を見上げてきたのはいいけど、いきなり美里が弱いところを見せ付けられて、がぜんはりきっちゃったんじゃない。こうなったらきっと、自分の方が強くなれるはず。美里を踏み潰して自分が上になれるはずってね」

「そ、そんなことない」

絶対に、ない。私のプライドを持って言いたい。立村くん、そんな人じゃない。ゆいちゃん、誤解している。

「立村のように人の顔をいつもおどおど見上げて、顔色ばかり見て、もしかしたらこうやった方がいいんじゃないか、こうやった方が喜ばれるんじゃないか、って自信なさげにおびえているところ。見てて腹立つのよ。ほんつとに。こういう奴って、いつも下手に出て、へらへらして、わざとらしい笑い声立てて、受けを狙うの。そうでしょ」

「違う、立村くんそんな奴じゃない！」

思わず声が立った。また隣の琴音ちゃんがひよつとこの顔をして、雰囲気や和ませようとしたのか、それとも笑わせようとしたのかわからないけれど、おどけてみせた。ゆいちゃんが言うのは、むしろ琴音ちゃんのことだ。いえないけど、そう言いたい。

「でも、自分の土下座していた相手がいきなり弱いところ見せてしまったとたん、下克上を狙

っちゃうのよ。男っていつもそう。なにかあればいつも、女子より上になろうとするチャンスを探しているの。そして、ちょっとほっとして心許したら最後」

ずきずきずき、言葉が突き刺さる。

「『君を守ってあげる』とかいう言葉でもって、自分の行動を正当化するのよね。私少女漫画とか、そういうもの大嫌いなんだけどね。いつも男は女を守るもの、って決め付けようとするのよ。ふざけないでよ。女は守られることによって、男に踏んづけられるだけじゃないのよ。そんなことされるくらいなら、私、一生結婚なんてしたくないわよ。結婚したらその段階で、男の足元に死ぬまでひれ伏すのよ。家族を守る、とか、大切なものを守る、とかいう言葉で家庭の中に押し込めて、最後に馬鹿にするの。所詮女は、何もできない。守ってやらないと、な一もできないんだって」

はあはあ、激しい息遣い。また頷き、にやにや笑いと、「はは」と言葉の発音がはっきりした笑い。

——ゆいちゃんが言ってるのはね、琴音ちゃんのことだよ。

——立村くんは、絶対、ゆいちゃんの思っているような人じゃない。

それに、と私は、もうひとつ言いたかった。

「ゆいちゃん、去年まで、そんなこと、言わなかったじゃない。どうして今になって？」

咽からぐわっと、熱いものがこみ上げてきて、泣きそうになりながら。

「ゆいちゃんも、南雲くんのこと、今でも好きでしょ」

「振られたんだからしかたないわよ。そこまで私も汚くないわ」

——わかってないよ、ゆいちゃん。

自分の右肩越しに、私はもう一度、窓の夜空を眺めた。距離があって星までは見えなかった。きっとゆいちゃん、私をあやの夜空と同じくらいの距離で見つめて、怒っているんだと思う。言いたいことは、途中納得することもある。男女平等でありたいのに、なぜ女子だからという理由でやらせてもらえないのかとか、そういうものはたくさんある。けど、立村くんを、ここまで叩きのめすのだけはやめてほしかった。私はずっと、窓枠、もっと近いところから立村くんを観察しつつつけてきた。ぶきっちょなところ、様子見ばかりして勘違いしてばかりいるところ、目の前にいる琴音ちゃんみたいなことをしていること、みんな、見つづけてきた。

それでも、私は立村くんでなくちゃ、いやだった。

他の男子、貴史ですらも、立村くんの代わりにはなれなかった。

「あ、あのねゆいちゃん」

——男子だからってすべて決め付けるのはよくないよ。男子だって、いい人ちゃんといえるのに。

——立村くんをろくにみないで決め付けるのだけはやめてよ！

のろけてる、そう言われたとしても、私はきっぱりとゆいちゃんに言い切るつもりだった。

「ねえ、清坂さん、お取り込み中悪いんだけど、ちょっと明日の自由行動のことで話したいこと

あるんだけど」

ふすまの向こうから声がした。ゆいちゃんと琴音ちゃんが私の両脇から向こうを覗き込んだ。めんどくさそうに、退屈をもてあましているような、たるたるした女子の声。

「ちょっと何よ、あの人」

ゆいちゃんの言葉は荒々しい。琴音ちゃんがまた、小柄な体を猫背にして、指を差してはゆいちゃんの顔を見て頷いている。

「入ってきなさいよ」

「じゃあお邪魔するわ。清坂さん、ちょっと、いい？」

まだ帯をしっかり締めたまま、片方にチラシのような赤い文字の印刷物を持った近江さんが立っていた。柱にもたれるようにして、ショートカットのすっきりした頭を振り、私にだけ、声をかけてきた。

「え、いいけど」

「ちょっと待ってよ美里、話まだ」

金切り声を出すゆいちゃんに、ごめんの一言を言おうとした。近江さんが片手をひらひらさせ、ゆいちゃんを見下ろすようにして、

「悪いけど、男女同権を気に入っている男子って、誰も霧島さんのこと好きにならないじゃないの」

と一言継げた。その後、

「むしろ、霧島さんを見下したい相手にしか好かれてないこと、いいかげん気付けば？」「ちょっと、なによ！ あんたこそ、私、小春ちゃんにあんたと天羽がやったこと、許してないんだからね！」

——だからなぜそういう話になっちゃうのよ！

だからゆいちゃんは論点が固まらなくて話するのが疲れるのだ。割って入ってくればいいのか、琴音ちゃんはまた、ゆいちゃんの隣で頷きつづけているだけ。味方だってことをアピールしているだけだ。

「ああ、あのことは旅行終わってから詳しく話そうと思っていたけど、しょうがないわね」

近江さんはきらきら光っている爪を一本立てると、額に当てた。唇を左にゆがめて笑った。

「委員長はただ、清坂さんのことを『宝物』のようにして守りたいだけなのにね。守られたことのない人にはわからないんだから、これ以上話すのは時間の無駄よ。清坂さん、廊下の自動販売機のところに行きましょうよ」

また、指先を絡めるように繋がれた。「ああ？」といやらしい声でもって、琴音ちゃんが指を差す。なんでこういう子になっちゃったんだろうか。ぶちぎれそうなゆいちゃんよりも、私はむしろ、琴音ちゃんの伴奏をやめさせてほしかった。

「それに、もうひとつ聞きたいんだけど」

「なによ」

「『女だから』という理由で差別は確かにあるけれど、今までどのくらい霧島さん、あなたが『女だから』という理由で差別されたのかな、って思っただけよ。むしろ、霧島さんが『霧島さん

』自身だから、そうされているだけなんじゃないのかなって今までのこと見てて思うんだけど。委員長も同じじゃないかしら。『女だから』ってことではなくて『清坂さんだから』って、どうしてそう考えられないのかな、ってふと思ったのよ」

「あんた最低、むかつく！」

「私は別になんとも感じないけど、ただ、男とか女とか意識するのって、だるいわよね」

ぶっきらぼうに答えるゆいちゃんに、近江さんはさりげないひとさしをした。

絡めた指はそのままだった。大人っぽく長い爪は私のまんまるいものよりもずっときれいだった。

「ゆいちゃん、ごめんね、ちょっとだけでね。またあとでね」

かなり強い腕の力で引っ張り出され、私はスリッパを履いた。目と目が合って、近江さんがさりげなくウインクしてくれた。

——似合ってる。

帯を締めたままにしておけばよかった。すらっと背の高い近江さんの着物姿は、足首がちょこっとでていて男の子っぽく見えるけれど、帯がひし形を背負っている形のせいか、高校生っぽく見えた。私だったらやっぱり、つりあわない。

「私、頭の悪い人、嫌いなのよ」

人気のない自動販売機前の丸いパイプ椅子に腰掛けてすぐ、近江さんは大きくため息を吐いた。浴衣の裾をぱさりと直して、足首のところで交互に組んだ。

「だって疲れるでしょ。清坂さんみたいに切れる人の方が好きよ」

——え、私が？

思ってもみないことを言われてしまい、返事に困った。私のどこが、頭切れるっていうんだろう？ さっきまでゆいちゃんに「あんたは騒ぎすぎ」と怒られていたのに、そのどこがなんだろう？。

「信じていないでしょ、やっぱり可愛いわ」

「あ、ありがとう」

誉められているんだから素直にお礼を言う。近江さんは、つい数分前まで部屋でゆいちゃんを言い負かした時とは打って変わった表情で、さらっと笑った。

「素直だし、優しいし、それに切れるし。三拍子揃ってたら、委員長も手放したくないわよね」

最後の言葉がどうもきつめに聞こえたのだけれども、やっぱりこの人も、私と立村くんが似合わないと思っているのだろうか。うまく返せなくてまた、うつむいてみた。廊下に出ると空気もだいぶ冷えてきて、少し呼吸しやすくなった。ほっとした。やはりゆいちゃんたちと言っている間、息がつまりそうしそうだった。近江さんが割って入ってくれて少し楽になった。

感謝、感謝だ。

聞かれていたらいやだな、って気持ちもある。

——あのこと、ばれてないかな。

——だって、よりによって昨日が初めてだなんて、遅れてるよね。

今まで気にならなかったことが、今、どうしようもなく恥ずかしい。

——近江さんはやっぱり、絶対、始まっているよね。きっと。

背が高くて、すらっとしていて、腰が細くって、凜々しい人が、まだ生理ないなんてこと、絶対ないだろう。なんだか私だけが赤ちゃんのままだったんだと思うと、それだけでまた落ち込みそうになる。

「どうしたの？」

また優しく聞いてくれる。どうして近江さんは私に対してだけこうも暖かいんだろう。こんなにいい人なんだから、ちゃんと評議とかA組の女子とかにも声かけてあげれば、きっと人気者になるだろうに。

きっと小春ちゃんも、最初から近江さんのいい人らしいところを見抜いて、懸命にクラスへなじませようとしていたんだろう。結果、小春ちゃんは心をずたずたにされてしまったけれど、近江さんの隠れたよさを評議のみんなに知らしめるにはよかったのかもしれない。そう、無理やりにでもあの事件をプラスの方に持って考えようと思った。

「ううん、さっきは、ありがとう。なんだかみっともないんだけど、ね」

「みっともないのは霧島さんの方よ。今の悪口、私と清坂さんとの内緒ごとね」

口元に人差し指を立てた。

「ああいう頭の悪い話聞かされていると、だんだん私もいらいらしてくるのよ。無視しているのが一番なんだけど、清坂さんの立場を考えるとそうも行かないしね」

「え、私の立場？」

近江さんは肩を怒らせて、ゆっくりと下ろした。

「三年も顔つき合わせているんだから、波風立てたくないわよね。あの人たちにいくら頭にきても」

——え、そんな。

違うよって言い返せなかった自分にまず戸惑い、私は近江さんの顔を見つめた。横顔全然、かわっていない。他の女子たちが、「ねえねえ、すごいわかつくよね！」と人の悪口を言っているのと違う、さっぱりしたほっぺたが印象的だった。

「自分の実力が伴わないくせに、人が輝いていることみて嫉妬して、八つ当たりして、同じところに置いとこうって感じの人。ああいうの観ていると、あなたひとりで片付けてよって言いたくなるのよね」

——あなたひとりで片付けて？

なんだか、近江さんの言葉は突き放しているようだけれどもところどころ、悪口ではない私の本音、って気がしてくる。何でだろう、不思議な感覚だった。こずえとか他の女子たちと話している時とは違った雰囲気だった。近江さんは続けた。

「大抵の場合は言われている相手にも、十分すぎるくらいの責められる理由があるんだもの。でもね、清坂さんの場合は違うと思うのよ。自分ではどうしようもないことをあげつらって、霧島さん自身が自分のことを『私はえらい、すごいんだ』と確認したがつているだけ。何か違うと思ったわけよ」

ゆいちゃんの見つきが思い出された。もっとも私はずっと、ゆいちゃんよりも琴音ちゃんの媚びるようなまなざしの方がむかついたけれども。ゆいちゃんはストレートに感情が見えてくるから、返ってほっとする。言ったあと、すっきりする。今のけんかもきつと、あやまったら全て終わる。

「いざとなったら私が少し、何か言えるかもしれないから頼ってね」

「うん、ありがとう、でも、ゆいちゃんだってきつと、悪いつもりで言ったんじゃ」

言いかけたところ、また近江さんはため息を。

「清坂さんってほんと純粹で可愛い。だから大好きよ」

「私のどこが純粹なの？」

何気なく聞いてみた。今、ここに来てからの近江さんはずっと、私のことを褒め称えてくれている。もともと四月以降、いつも評議委員会は私と一緒に行動してくれたし、私と仲良くしたい風な態度を取ってくれていた。小春ちゃんとの交代劇、天羽くんを奪った恋愛事件、それぞれの事件が絡んでいて、近江さんは「ダーティーガール」というイメージが強く出ていたように思う。ほとんどの問題は天羽くんのいいかげんな態度が全てだと思うんだけど、女子としては最大の悪女

として近江さんを捕らえていたんじゃないかと思う。本当はこんなに優しい人なのに。もったいない。

だから私はできるだけ、近江さんと仲良くしたいって思っていた。おいしいケーキで有名ならしい喫茶店にも連れていってもらったこともあったっけ。こずえとも相性が合って、修学旅行グループの仲間に入れてあげたりもした。さっぱりしていて、クール。そんな近江さんだけど本当は熱い。冷たいように見えて、時々優しい。不思議な人だ。

——あ、そうだ。さっき何か用があるって言ってなかったっけ？

思い出して尋ねることにした。そうだ、目的があったんだ。近江さんが私を呼び出した理由。

「あああれね」

近江さんは、ゆいちゃんへの悪口をいったんひっこめて、修学旅行明日の自由行動に戻した。「実は、本当に残念なんだけど、私、明日とあさってどうしてもひとりで行動したいことがあるのよ」

明日は午前中だけ観光スポットを一回りして、午後はそれぞれ分散して行動する予定だった。たぶん天羽くんのいる男子グループと一緒に動くんだろうと思っていた。午前中から、ということだろうか。ごまかさないと大変だわ。

近江さんは、はにかむように口元を緩めた。

「清坂さんにだけは言っちゃおうかな。実は、明日とあさって、若手芸人たちの野外オーディションがあるらしいのよ。ほら、私、漫才好きだから」

近江さんの、普通の女子と違うところ。熱狂のお笑い・漫才・あと落語・そういうのが大好き。はまったのは中学三年になってからだと言っていたけれど。天羽くんと初めてのデートに誘われた場所が、落語の会だったと教えてくれた。それ以来らしい。天羽くんがもともと関西系のギャグ番組大好きでしょっちゅうしらけるギャグを飛ばしていたことを思い出すとわからなくもない。けれど近江さんによれば「もともとはまり込む素質があったから、運良く目覚めただけよ」ということだった。なんだか変。

「漫才なの？」

「たぶんね。人気はまだまだないかもしれないけれども、これからのスター誕生かもしれないでしょ。そういうのってかなりわくわくするよね」

——歌手のオーディション番組を観ているような感覚なのかな。

残念ながら私は、そちらの方に共感できない。ごめんね、近江さん。

「私、自然よりも合成品の方が好きな、変わった性格なんだわ。未完成な努力の結晶よりも、つくりものでも完璧に見えるものの方がね。だから、本当だったらトップの人のいい芸を観るほうが好きなのよ。でも、やっぱりそういう人たちはどんどん歳とっていくでしょ」

「うん、そうだよね」

頷くしかなかった。近江さんの口調が熱筆ってきている。クールな表情がいつのまにか、漫才のことになると親しみやすいあったかいものにとろけてくる。こんな表情、どこに隠してきたんだろう。小春ちゃんには悪いけど、天羽くんが近江さんに心動かしたのは、そういうギャップのある表情なんじゃないだろうか。わかるような気がする。

「私、デビュー前からどんどん実力を挙げていく人を追っかけてみたいって、この三日間くらいいろいろ考えていて、思ったのよ。完成品が好きだとか言ってみただけど、最近私のしていることってどう見ても信じられないことばかり。第一、一年前の私なら、天羽くんと『お付き合い』なんて絶対考えられなかったものね」

——やだ、うわ、言っちゃった！

彼氏の話なのに全然赤くならない。むしろ冷めた口調。そういえば天羽くと近江さんは、おとこの弾劾裁判に出席したはずだ。本当はそのことも聞いたかったのだけでも。チャンスだろうか。どきどきした。袖をひっぱってみた。

「近江さん、そのショー、天羽くと行くの？」

「まさか、ひとりよ。それぞれ用事があるのに無理やり巻き込んでどうするのよ」

「ごめんね」

「ううん、でも私のこと、気にしてくれてありがと」

近江さんは何にも照れのない表情で私を見つめた。

「本当だったら清坂さんと二人でデートしたかったんだけど、やっぱり委員長がいるとね、そうも行かないでしょ」

「あ、あのね、近江さん」

ゆいちゃんのお説教で、立村くんの話が出てきたのもあって、つい頬が熱くなるのがわかる。やっぱり私って子どもだ。近江さんには気付かれたくないな。頬に手は当てない。

「もし、よけいなことだったらごめんね。私、ずっと聞いてみたかったんだけど」

「清坂さんにだったら、教えてあげる」

「どうして、天羽くと？」

付き合ったの、とまでは聞けなかった。私の本音は、「近江さんに天羽くんは、絶対もったいないよ！」ってことだった。悪口言うわけじゃないけれど、近江さんのようなしっかりして凛々しい人に、お調子者の天羽くんは似合わない。別に小春ちゃんがしっかりしていないとは思わなくても。小春ちゃんはむしろ、私と同じぽよんとした感じ、近江さんはずっと上に立って、周りを見下ろしているって感じ。最初から足下が、違う。

「天羽くと付き合ったわけ？ 聞きたい？」

「だって近江さん、たくさんの男子にもてそうだから」

私が男子だったらきっと、近江さんに憧れたらろう。よく女子校の話で「お姉さま」と憧れの先輩を呼ぶ慣わしなどを聞くのだけれども、近江さんを見ればそれも頷ける。カッコいいもの。何をしても、自分の考えをしっかりとっていて、揺らぐことがないんだもの。私もさっきのように、ゆいちゃんの言い分が八つ当たりそのものだって思っている、言い返すことができなかった。あんなふうにつきぱり、ぐうの音も出ないくらいに言い返せたら、カッコいいだろうなあとと思う。でもやっぱり納得いかない。

「天羽くんの悪口を言うわけじゃなくて、近江さん、物凄く天羽くんのことが好き、っていう雰囲気じゃないのに、仲良しなのが不思議なの」

うまく言えない。一応、A組の評議委員同士のカップル。三年では私と立村くんが続くカップ

ルなのだろうけれども、あまり甘ったるいものがない。私だってあるとは言えないけど。でも、近江さんと天羽くんの付き合いって、私と貴史の繋がりに似ている。好きとか嫌いとか、そういう単純に割り切れないものがある。

「世間一般で言う、好きってイメージじゃあないかもね」

近江さんは私をじいっと見つめた。内緒ごとを告白するみたいに、私のほっぺたに口を近づけた。

「天羽くんは私と感覚が似ているのよ。付き合うとか付き合わないとか、そういう以前に感じる事がすべて近いのよ。落語とか漫才のよさが分かり合えるというところもそうだし。だから一緒に話をしていると楽しいのよ。うん、それだけだしそれだけだからこそ、貴重なのかな」

「え、もっとゆっくり、教えて」

「うーんとね」

近江さんは足を組み直し、また浴衣の裾をぽんと叩いて直した。

「本物を見抜く感覚、かな」

——それってもしかして……。

——小春ちゃんの、こと？

思い当たるふしがある。天羽くんは小春ちゃんにはっきりと別れを告げた時に「お前は偽善者だ、だから俺は大嫌いなんだ！」と言ったらしい。ショックで小春ちゃんは言葉がいまだに話せなくなってしまった。元気を無くしただけでない。A組でばかにされている男子と無理やり付き合うように命令された、とも聞いている。それを知ったゆいちゃんの激昂は当然だと思う。天羽くんを罵るならわかる。小春ちゃんが天羽くんに尽くしたことが「偽善」といわれてしまうんだったら、もう怖くて恋なんてできなくなってしまう。私だって、似たようなことしているかもしれないんだから。立村くんにも、私も「偽善者！」と罵られる可能性、大なんだから。

「もし、話したくないなら言わないでもいいんだけど」

言葉を選び選び、私はきっかけをこしらえてみた。

「近江さん、小春ちゃんはやっぱり、偽善者だと思う？」

驚いた風な目で私を見つめた。言葉に詰まっていた。

「私、他の人とか、立村くんとか、そういうところからきた情報しか持ってないし、どうしてもそうなる、近江さんの方が悪いってことになりそう。でも、私、直感でなんだけど、近江さんは悪くないような気がするの」

曇り掛けた。黙っていた近江さん、天井から光る蛍光灯で頬が蒼く見えた。

「だから嫌いになんてならない。けど本当のことは知っておきたいの。近江さんの今から言うこと、私信じたいの」

立村くんが口癖のように「俺は直感でなんでも判断するからな」と言うけれど、そのくせ、私にうつっちゃったらしい。今の私は、近江さんのことを直感で、いい人だって決め付けたいみたいだ。別にゆいちゃんのことを絡んでいるわけではないのだけれど。

「本当？」

妙に真剣なまなざしにちょっとびびったけど、頷いた。

「嬉しいな」

うつむき加減でかすかに口元をほころばせると、近江さんはちょっと、彼女らしくないあどけない表情でうつむいた。こういうところも、やっぱり天羽くんはチェック済みなんだろうなと思った。

「もちろん私と天羽くんが、西月さんに言ったことは残酷だったんだと今は思う。でも、ずっとしつこく付けねられて、断りたくても断れない天羽くんに張り付いて、さらにもうまでねだって、最後まで苦しめた結果として私は見てきたのよ。たぶん天羽くんじゃなくて委員長だったとしても、私は西月さんを軽蔑したと思うけれども」

「そうだったんだ」

立村くんがカラオケボックスに席を用意して、最後の話し合いを天羽くんと小春ちゃんにさせたという二日前のこと。私は参加させてもらえなかったけれども、それは近江さんの味方が多すぎると小春ちゃんの立場が辛くなるからという心遣いだったらしい。私どちらでもかまわなかったのに、と思うけど。

「さっきの霧島さんのこともそうだけど、私、基本としてあまり人と関わりたくないのよ。特に頭のアんまり良くないやり方する人とは付き合いたくないのよ。さらっと流したいだけなの。でも、世の中そういうわけにいかないし、何よりも、それで迷惑かけられる人のこと考えてよって言いたくなっちゃうの。さっきの清坂さんのようにね」

——え、私、迷惑かけたほうじゃ。

いくらゆいちゃんの八つ当たりとはいえ、私にも落ち度はあったのだから。

「西月さんは天羽くんのが好きだった。それは勝手よ。クラスを情熱的に燃え立たせたい、これも彼女の本音ならしょうがないわよ。でも、そこから逃げたい人、それが苦痛な人にま無理やり押し付ける筋合いはないんじゃないかと私は思うわ。誰もが球技大会で一位を取りたいわけでもないし、誰もがクラス一丸で合唱コンクールに燃えたいわけでもないはず。もちろん義務は果たします、でも心の奥に隠している本音だけは口出さないでほしい、そう思うのよ」

——わかるなそれ。

近江さんがD組にいないでよかった。菱本先生の性格とだったら水と油だっただろう。

「だから、言ったのよ。うちの担任に、『これ以上西月さんを傷つけない代わりに、私たちにも西月さんのやり方を嫌う権利をください』って。けんかして、握手して、仲直りしてほしいってのが大人の本音だと思うのだけど、どうしようもないのよ。西月さんのやることに対しての嫌悪感は拭えないの。西月さんがクラスのために努力している姿は見せられたわ。いやというほどね。でもそれを見てどう感じるかは、私の自由のはず。むりに共感させられる意味はないわ。それに努力したことで満足するのは、自分だけでしょう。なぜ、みんなのためにという大号令で、私たちは西月さんの努力を褒め称えなくちゃいけないのかしら」

——クールでも、なんだかわかる。

「ここまで言って、私のこと、嫌いになった？」

おそるおそるといった風に、静かに尋ねてきた。私は急いで首を振った。

「たぶん、私の感じ方は異常なんでしょうね。共感してもらえないのもしかたないことだわ。でもそれを他人に共感しろとは言いたくない。そうされたくないもの。押し付けがましく、『私はこんなに努力しているのに、どうしてみんなやらないの』って顔で見上げられるとひっぱたいてやりたくなるのよ。私はただ無視するだけよ。でも天羽くんに対しては、酷すぎるわ」

「天羽くんって、『奇岩城』以降のこと？」

「ううん、違うわ。天羽くん、最初っから西月さんのように人の顔色見ながらいいことしようとする人が大嫌いだったのよ」

——やはり、そうなの？

「俺は最初から、西月のことが大嫌いだったんだ！」と叫んだ天羽くんの言葉は知っている。宗教上の理由でどうしても、嫌いな人間を作るわけにいかなかった天羽くんは、大嫌いな小春ちゃんを「友だちとして」好きな振りをし続けた。評議で一緒になってからも同じく演技していたらしい。でも、近江さんと出会ってからは考えが大きく変わって、「嫌いなものははっきりと嫌いと言うべき」という結論に達したんだという。残酷だけれども、ずっと生ぬるいままでいるよりは、きちんとけじめをつけるべき。迷惑なことにはNOというべし。それは間違っていないと私も思うけれども、ただ傷ついた小春ちゃんの立場も否定できない。そこまですることだったんだろうか？ ふつうに「俺、好きな子がいるんだ、ごめん」で終わらせられないなにかがあったんだろうか？

「天羽くんは、懸命だったのよ。ぎりぎりまで西月さんのことを傷つけないように遠ざけようとして、一生懸命だったのよ。でも、どんなに訴えても西月さんは迷惑行為を止めなかったのよ。指輪を作れとねだられて、薔薇がほしいといわれてね。清坂さんも想像してみて？ 清坂さんの大嫌いな男子に、毎日くっついてこられて薔薇の花差し出されたりしたら。断っても断っても、わかってもらえない日本語が理解できない相手だったとしたら？ それが善意だと言い切られてしまったら？」

「でも、それならもっと方法が」

「そうね。私と見え見えなかつこうで付き合ったのもそうだし、うちのクラスの男子を代わりに用意してあげたのもそうよ。天羽くんの努力はそれこそ涙ぐましいものよね。でも、どんなに苦勞しても西月さんには伝わらなかったのよ」

「え、小春ちゃんが？」

そんなことないよ、と言おうと思えば言えただろう。小春ちゃんとはばかじゃない。天羽くんの態度をあえて見ないようにして、必死に好きになってもらえるよう、努力したに決まっている。でも、もし私が男子で同じことをされたとしたらきっと天羽くんと同じことしそうな気がするのも本音だった。

小春ちゃんがもともと世話好きで、クラスから浮き上がっている人たちをなじませようと骨を

折るこだということは有名だった。ちょっと暑苦しいと思われるところもあるのだろうけれども、純粹に、笑顔でしていたことだし私は別に驚くべきことではないと思う。でも、もしその男子をだしにして、天羽くん「私ってすごいでしょ！」とアピールしていたとしたら.....考えられないことではない。そう言う答えが出てしまうのが悲しかった。

——そういうとこ、確かに、あった。

「修学旅行前に委員長主催の弾劾裁判がカラオケボックスであったでしょう。あの時、天羽くんは、西月さんに通じる言葉を使って、なんとかして別れようとしたの。本音を伝えても逃げられるだけならば、嘘でもいい、やさしい言葉をいっぱいまぶして、それで納得してもらおう。真実を受け入れない耳の持ち主には、受け入れられるような表現をして、なんとかこれっきり付き合いをやめさせてほしい、そう訴えたの」

「受け入れられるような表現って？」

「西月さんを持ち上げて、ちっとも嫌いじゃないというような大嘘について」

——ちっとも嫌いじゃない、という言葉が大嘘なの？

小春ちゃんの涙顔が思い浮かんだ。

「西月さんが幸せになってもらわないと悲しいとまでね。本当は天羽くん、一刻も早く縁を切りたくてならなかったらしいのよ。しつこい相手を振るために、どうしてここまで自分の真実を曲げなくてはならないか、そうとう苦しんだらしいわ。私も最初その言葉を聞いた時は耳を疑ったけれどもね。もし本心でそんな言葉を使うのだったら、私も天羽くんと付き合いやめていたわね。でも、どうしようもなく嫌いな相手だからこそ、どんなに嘘をついてでも遠ざけたかったのよ。そのくらい、西月さんは天羽くんに嫌われていたわけよ。他の人はどう思うかわからないけれども、西月さんの行動は嫌われて当然だと私は思うわ。一生懸命やるのはいい。努力するのもかまわない。ただ、他人に迷惑をかけないところで、ひとりでやって。一人で自分を誉めて、自分で満足して。自分で自分を誉めてあげることが大切だとよく言うでしょ。他人に誉めてほしがらないでよ迷惑だから、って意味がたぶん、あの言葉には込められてるのよ」

——決め付けたらいけないと思うよ、近江さん、けど。

本当は仲良しの友だちの悪口なんだから、怒ったりなんなりしてもいいのに。でも、思わず頷いている自分がいた。ひとつひとつ、思い当たるふしがあったから。

小春ちゃんとは、評議委員会で初めて顔合せした時から、すっごく一生懸命でいい子だなと思っていた。すぐに仲良くなっているんなおしゃべりをするようになったし、恋の話とかも始まったのは早かったと思う。私は当時、絶対に立村くんへの想いを知られてはならないと思って必死に隠してきたけれども、小春ちゃんは天羽くんへの気持ちを女子たちには隠さなかった。

「あのね、天羽くんがね、今日私に、『球技大会、男女一緒に一位になれたらいいよな、がんばろうぜ』って言ってくれたの。それでね、初めて私のこと、ちゃん付けで呼んでくれたの。だから、私もがんばる。これからA組で朝練するように言わなくちゃ」

大抵の子から聞けば、単なるのろけにしか聞こえないのかもしれないけれど、小春ちゃんの場合はすぐに、ひとつの目標を設定してそこに向かうという癖を持っていた。天羽くん「ちゃん

付け」で呼んでもらえた。がんばろうって言ってもらえた、だから、その分A組に還元しなくっちゃ、って感じだった。自分だけでわあいと喜んでいただけではだめ、みんなにもそのおすそ分けをしなくっちゃという風に。もちろん、球技大会にせよ学校祭にせよ、小春ちゃんの目標が達成されることはそうなかったけれども、その努力だけはびんびんと伝わってきた。だから私も、ゆいちゃんたちも小春ちゃんに負けないようにがんばらなくちゃ、といつも思っていた。特にゆいちゃんは、私よりももっと小春ちゃんと仲よしだったから、ふたりでいつも励ましあっていたはずだ。

「一生懸命やればかならず、夢はかなうものだと思うの」

それが二人の口癖だった。努力家同士。もちろんゆいちゃんの方はかなりきつい言い方で、「やる気のない男子どもを面倒みていくためには、女子ががんばらないとね！」

ふたり手と手を取り合って。

こんなふたりの夢がかなわないなんてこと、ありえないって去年までは思っていた。

一足先に私が立村くんと付き合うことになったのが二年の六月だった。こっそりと恋の打ち明け話をしたりもしていたのだけれども、告白まで持って行っていたのはゆいちゃんだけだった。もともと親指姫のかわいらしい雰囲気をもつゆいちゃんだ。外見だけならば絶対に男子で断る奴はいないだろうとみな思っていた。当然、「南雲くんってかっこいいよね、いいなあ、女子に対しても思い遣りあるし、いいよね！」

と、ひそかに狙っていたゆいちゃんが体当たりしたのはむしろ当然のこととと思っていたし、むしろ振られてしまったことのほうが意外だった。その後で南雲くんの本命が奈良岡彰子ちゃんだったことを知った時は、正直驚いた。

「ま、こんなこともあるよね！ でもまだチャンスがなくなったわけじゃないしがんばる！」

「そうだよゆいちゃん。ちゃんと一生懸命がんばればいつか、南雲くんも振り向いてくれるよね！」

でも、奈良岡彰子ちゃん以外に目を向けない南雲くんの姿が、だんだんおおっぴらになってくるにしたがって、ゆいちゃんの「一生懸命」が全く役立たないものになってくるのに気が付いた。小春ちゃん自体はもともと彰子ちゃんとも友だち同士だったし、それもしかたないと思っただけでもゆいちゃんはそうじゃなかった。なんというか彰子ちゃんって子は、いつもにこにこ笑顔で誰にも抱きしめたいって思わせる性格の持ち主だった。ただぼっちゃりタイプで、某学年トップの男子からは「ドラム缶のねーさん」と呼ばれている。顔だけだったらゆいちゃんにはかなわない。そんな彰子ちゃんに南雲くんがのめり込んでいく姿を見つめているのは辛かったことだろう。他の南雲くんファンと称する女子たちが、「なあんだ、別の男子だっているしいいや」と割り切り早かったのに対して、いくらでも男子選び放題に見えるゆいちゃんがどうしてあそこまで、南雲くんにこだわりつづけるのかが不思議だった。ちょっとおとなしい顔をしていれば、ラブレターの嵐になること、想像するの難しくないのに。

あれ以来ゆいちゃんは変わったんじゃないかって思う。

南雲くんに秒速で振られた後、

「顔なんて何にもなんない。好きな人に振りもらえない顔なんてどこがいいのよ」

ぼそっとつぶやいたのを聞いたことがある。

みんながゆいちゃんのことを可愛い可愛いと誉めても、

「こんな顔のどこがいいのよ」

とすぐに冷たく返すようになった。ゆいちゃんだって南雲くんには振られるまでは自分の顔やプロポーションにちょっとは自信を持っていたんじゃないかなと思う。少なくとも彰子ちゃんに外見上では勝っていると自覚していたんだろう。一時期は雑誌のおしゃれヘアスタイルコーナーを必死に研究していたところも見たことがある。

どんなに努力しても南雲くんの気持ちは揺らがなくて、たったひとつの武器「一生懸命」すらも全く役立たず。どんなに努力しても、何にもならない。そんな現実をゆいちゃんは、必死にクラス運営で紛らわせようとしていたのだろう。

努力して、かなう夢。

懸命に夢見てかなえた青大附中への合格切符。

ゆいちゃんの一世代の奇跡。

決して成績はいい方じゃない。数学もたまたま立村くんには負ける結果だし、私たちにもわかるくらいだ。けど断言できる。私の知っている限り、ゆいちゃん以上に一生懸命毎日ガリ勉している子って、ほとんどいないと思う。評議委員会の時も、「絶対今度トップ狙うんだ！」と難しい参考書を読んでいて。あれだけ一生懸命勉強しているのに、どうしてテストになると最下位になってしまうのか、それが相当くやさかったらしい。けどめげないのは、青大附中に受かったという事実、これが支えなんだって、ゆいちゃんは話していた。。

小学校時代必死に勉強して、奇跡が起きて、ばかにしていた連中を見返せた時、

「私、きっと変わったと思うのよ。奇跡が起きて、あのにわとり頭の霧島がああ青大附中に受かったんだって見せつけることが出来た時にね。だから今でも思う。一生懸命やれば必ず夢はかなうし、信じることによってきっといいことがあるんだって！ だからC組の女子にもはっぴかけてるんだ。私みたいな頭でも、せいっぱいやれば男子たちには負けないんだって！ 小春ちゃんも一緒に頑張ろうね！ 絶対、天羽くん振り向いてくれるよ。あんなに一生懸命だもん」

——そうだね、一生懸命だもんね。

小春ちゃん、ゆいちゃんにとって「一生懸命」という言葉は、決して裏切られることのない魔法の言葉だった。私にだってそうだ。去年の十月頃、立村くんと一時期険悪になった時も、信じてれば必ず仲直りできると信じてきた。一生懸命、努力すればなんとかなる。そう信じていた。結果ちゃんと夢はかなったし、今でも私の「彼氏」でいてくれるのは、あの時私が「一生懸命」ぶつかった結果だったんだと思う。私はうまくいったのに、でもどうしてゆいちゃんと小春ちゃんには魔法の言葉が全く効果なかったのだろうか？ 私もがんばったけど、ゆいちゃんも小春ちゃんも、自分の持てるだけの力を尽くして、必死に夢に向かってぶつかっている。女子としては痛いくらいに伝わってくるのに。でもどうして。

小春ちゃんがどうして天羽くんには、「うざったい」とまで言われて言葉がなくなるくらい嫌われてしまったのか。

ゆいちゃんが二年の杉本さんの恋を応援したくて手を回したことが、かえって青大附中評議委員会を揺らがせるだけの大事件になってしまったのか。

どれもこれも、ふたりの「一生懸命」が裏目に出た結果だった。私もかんでいたし、その辺は何もいえない。でもゆいちゃんも小春ちゃんもただ、二人の夢をかなえようとして、できれば友だちもうまくってほしい、みんなも仲良くしてほしい、そういう善意でもってぶつかったはずだ。生半可な努力じゃないのに、どうしてふたりが好きになってほしい男子たちははみなあの二人を拒絶するのだろう。迷惑をかけたいわけじゃない。ただひとつだけ、好きになってほしい、嫌わなくてほしい、それだけなのに。

近江さんは今の話を聞いている限りだと、一生懸命というお守りをあまりありがたく思っていないようだった。むしろ、小春ちゃんの、「天羽くんへの努力」を、「大迷惑」と受取っているようだった。付きまとして、苦しめて、最低の人間だと。しかも、小春ちゃんが「善意」でしてあげたことが実は「偽善」だったとも。そんなわけない！と以前の私だったら近江さんを怒鳴ることができたように思う。でも、それができない、むしろ近江さんのそばで頷きたいって気持ちにぐらぐらさせられているのはどうしてなのか、わからない。

「近江さん、一生懸命やることって、迷惑なのかな」

「え？」

はっとわれに返った風に、近江さんは私を見た。相変わらず私に対しては優しくかった。

「今、近江さんの言う、小春ちゃんのしてたこと、もしかしたら私も立村くんに、してたかもしれないから」

「委員長に、清坂さんが？ まさか」

声を出して笑った。廊下に響かないかと思ってどきどきした。

「違うわよ。私が西月さんのわざとらしい行動を許せないのは、関係ない人に迷惑をかけてくるからよ。自分だけで自分の夢をかなえようっていうんだったらそんなことどうだっていいけれど、私にまでそれをごり押しするのはやめてよねって、それだけ。それも自分は正しいんだと信じきってて」

「でも、それ私きっとやってる！」

やっぱり私は、近江さんみたいになれない。大人になれない。なんだか悲しくなってきた。また泣きたくなりそうだった。立村くんが私のやり方に耐えられないといって別れようって言った時、私は無理やり条件だして、付き合いを求めてしまったってことになる。いつ、立村くんに行行半を突きつけられてもしかたないってことになる。だって、そうしないと耐えられなかった。立村くんと、別れるなんてこと、考えたくなかったもの。小春ちゃんだってきっと同じなのだ。天羽くんに嫌われないことだけが唯一の望みだったはず。

「清坂さん」

近江さんの手が肩に置かれた。浴衣の薄い布地から、ふんわりと伝わってくるぬくもり。

「私、評議委員会に入って思ったのは、清坂さんを除いてどうしてみな、こうも自分に自信のない人たちがばかりなんだろうってことなのよ」

「自信がない？ そんなことないよ！」

だってゆいちゃんだって小春ちゃんだって、堂々と自分のやりたいことを訴えている。琴音ちゃんはちょっと二股膏薬でどんなものかな、って気はするけれども、小春ちゃんとゆいちゃんが自信ないなんてこと、絶対がない。

首を振ってまた微笑んだ。やはりきれいだ。大人だ。いいなあって思った。

「今の霧島さんだってそうよ。私の想像なので違っていたら悪いんだけど、霧島さんは自分の能力や顔に自信がないのよ」

「あんなにゆいちゃん可愛いのに？」

頷きながら近江さんはさらに、私の肩を引き寄せるようにした。

「第三者から見たら、確かにあの人は美人の部類に入るわ。ああいう幼く見えるタイプって、女子を押さえ込んで我が物にしたい性格の男子に受けるのよ。そうね、さっき私が言った通り、女子を見下したがるタイプの男子のご用達ね」

——ちょっと、それはまずい。ゆいちゃんの大嫌いなタイプじゃない！ 外見だけじゃ。

ついさっきの難波くんとバトルを思い出した。下手したら難波くんとお似合いってことになってしまう。

「だからそういう相手向けに媚びを売ればいいのに、勘違いした相手にばかりアピールするから、顰蹙買うだけなのよ。もし霧島さんが少し視点を変えて、西月さんのように別の相手を選んだらまた、満足できるかもしれないのに」

——でも小春ちゃんだってそれは本心じゃないと思う。

下着ドロした男子と付き合わなくてはならないなんて、考えるだけでも怖い。

「一生懸命勉強しているのはよくわかるけれども、成績が上がらないのだったら別の部分でたっぷりアピールすればいいのよ。運動部に入ればああいう根性一途な人は活躍できるはずだし、へたにリーダーにならなければきっと輝くはず。どんなにしごかれてもあきらめないあの性格は、評議委員会やC組、清坂さんを責めることに使うよりも、他人に迷惑をかけない個人の部活動で発揮してもらったほうがどれだけ助かるかしないわ。あとそうだわ、旅行が終わったらすぐ水鳥中学との合同交流会があるでしょう。ずいぶんヒステリー起こしていらしたけれども、もし私が委員長の立場だったら、霧島さんに原稿を渡して、読み上げるだけの司会をさせるわ。ちゃんと原稿は振り仮名つきのものを渡して、一言一句、読むだけ。アドリブなんて絶対にさせないの。霧島さんは人の与えてくれた原稿を読むだけだったら絵になるし、いかにも前線での仕事をしたって思い込んでごきげんになるだろうし、男子たちはあの人の美貌に見とれるものね。そう、そうなのよ」

ぽんぽんと肩をたたいた。

「霧島さんは本来、リーダーをするべき人じゃないのよ。いろんな場所の花として周りの目を楽しませるだけの人よ。そうすればいくらでも、水をやりたい肥料をやりたいと手を挙げる男子がたくさん出てくるわ。さらにあの暑苦しい努力と根性があれば、花はもっときれいに咲くはずよ。無理やり木の実をこしらえたいなんてこと考えないで、美しく咲くことだけ考えてほしいだけよ。花がきれいだと誉めて誉めてなんてこと言わないで、ただ黙って立っているだけでいい夕

イブの人よ」

言葉が出なくて私は凍りつく、ただそれだけだった。近江さんはやわらかく、でもはっきりと断言した。

「むしろ、怖がるべきはね」

次に発した近江さんの言葉に私はまた震えた。

「轟さん、彼女には気をつけたほうがいいわ。たぶん、轟さんはすべてを見抜いて、ああいう行動しているのよ」

——琴音ちゃんが？

「彼女は、自分の外見に自信がないからああいう態度取っているだけで、頭だけだったら私たちになんて負けないっていうプライドを持っているわ。見ていてなんとなくそれはわかったの」

確かにそうかもしれない。琴音ちゃんは決して不細工というわけではないのだけれど、ただ歯が不ぞろいで前歯が少し出ている。しゃべり方も空気を変に吸い込むくせがあるためか、アクセントが少しずれている。これは琴音ちゃんのせいではないことだとわかっているけれども、やっぱりゆいちゃんや小春ちゃんの顔を見慣れていると違和感がある。ただ、成績はガリ勉集団のクラスB組だけあって、かなりよい。いつも人目につかないところで書類づくりとか、机運びとかを積極的にしているのは琴音ちゃんだった。「私、ブスだから」というのが琴音ちゃんの口癖だ。目が深海魚のように飛び出ているように見えるのも、損している原因かもしれない。でも、ちょっとぼっちゃりタイプの彰子ちゃんが南雲くんにあれだけ想われているのを見れば、琴音ちゃんだってもっと自信を持ってもいいんじゃないかと思う。自信なさげに、媚び媚びする態度を見てどうしても私はむかむかしてしまう。

「媚びるのはね、きっと自分を下に見せておけば、周りは安心するからだと読んでいるからよ。霧島さん、成績のことでどうしようもなくコンプレックスもっているでしょ。そこらへんを刺激したらいじめられないとも限らないじゃない。でも、『私はブスで出っ歯、出目だし』って自分を馬鹿にしておけば、とりあえず霧島さんは安心するわけよ。私は轟さん以下に落とされることないわってね。でも本当のところは違うのよ。轟さんは霧島さんのことをとことん、馬鹿にしているわ。もし霧島さんが何かの拍子でボスから下ろされたら、大喜びで今度は自分の方から仕切り始めるわよ。だから、私がもし委員長だったらね」

もちろん全部小声だった。

「あの人を裏方に回して、全部難しい仕事をさせるわ。それだけの能力がある人だもの。自分を低くみせて相手を欺くことによって、なんとかなると思っている人だけど、いつかは自分もすごいんだって見せ付けたがってるわけよ。そして、『轟さん、ありがとう、やっぱり女子で一番頼りになるのは君だよ』みたいなことを言うのよ。すると、あの方は大喜びするわよ。自分は男子に相手にされないご面相だって思い込んでいて、お世辞言われても信じようとしたくないじゃない？ その辺は霧島さんと同じだけれども、頭を誉めると変わるわよ。霧島さんよりも、たぶん私や清坂さんよりも頭の回転速いことはあの方の誇りのはず。その辺をうまく刺激してあげれば、委員会の仕事楽になるわよ」

どうしてたった三ヶ月でここまで見抜いたんだろう。私がなんとなく、言葉にできない感覚で捕らえていたものを、どうして近江さんはこうまで断言できるんだろう。頷くしかないのだ。私はゆいちゃんや琴音ちゃんをかばえない。そうそう、その通りとしか言えない。

「どうして、そんなにわかるの？」

「だって、自分に自信のない人たちに迷惑かけられるのは、明らかに清坂さんひとりだもの」
——私だって、自信ないのに。

震える声で私が尋ねると、近江さんは立ち上がり、私の頭てっぺんに、顔を軽くぶつけるようなしぐさをした。匂いかぐようなしぐさだけど、確かに髪の毛に近江さんの肌がくっついたはずだ。

計画どおり、午前中で一仕事した後、俺たちの自由行動班は昼めし前に解散した。もともと旅行先というのはそれほど見るべきところもない。とにかく美術館、博物館、寺、公園、その他を一箇所につき五分程度の滞在時間でもってこなすとなんとか二時間以内で片がつく。一応出かけた記録を残すために、ちゃんとスタンプ帳を渡されてはいる。前もって立村が本条先輩から得た情報によると、

「特に時間の記録は必要ないみたいだから、何も考えないでスタンプ押しまくるだけでいいみたいだよ」

つまり、午前中で全部やるべきことを片付けた後は、ゲーセンでたむろうが、デートしようが、何しようが関係ないということだ。別に俺としては、連中と一緒にその辺遊んでもよかったのだが、立村からかなり無理やりの提案をされた。

「悪いんだけどさ、女子たちのグループから話がきててさ」

——お前も色気づいたよな。

美里と古川、あとA組の近江たちを連れて回ってほしいという。A組ではただ今恋愛事情が複雑とかで、同じクラスでの行動が難しい近江と天羽をどうにかして、自由にさせてやりたいという立村の親心だ。評議委員長様も大変だ。もっともこいつの本音は、美里と少しでもいちゃつきたいってところだろう。わかってるんだぜそこらへんは。昨日だって美里の荷物わざわざ持って行ってやったじゃねえか。

美里よ、ほんと、よく我慢したよなあこの一年。おかげで立村はお前にめろめろだ。

「じゃあ、食うだけ食ったら、またそこからさらに二：二に分割していっか」

「いや、そういうわけじゃないよ、たださ」

また口籠もるところを見ると、立村もやはり恥ずかしいんだろう。今までクールに通してきた評議委員長様だったのに、目覚めてしまったところを見られるのはやっぱり照れるだろうしな。相談してくれるんだったらいくらでも聞いてやるぜってとこだ。

まあこれは昨日の昼までの話だ。その後寺で、金沢に絡んだちょっとした騒ぎに巻き込まれて、立村とは今朝までちょっとばかし絶交状態となった。俺としては全然気にしていなかった。あいつなりのプライドもあっただろうけれども、一日寝れば、あいつだって頭を冷やすだろう。俺の読みはどうやら当たったようだ。朝、

「立村、今日は予定通りだろ？」

と声をかけたらはにかむように、頷いていた。どうやら俺と縁を切って個人行動する気はなさそうだ。いささかほっとした。 ということで、ただ今俺と立村は最終見学地、高期公園にいる。歴史的に有名な戦いの場所らしいが、昔の武士たちの血まみれな場所に行って運がよくなるとは思えない。他の連中もさっさと俺たちに片手挙げて消えてしまった。自由行動二日間もある学校ってこういうもんじゃあないだろうか。

他の奴がいると、それほど気まずさもなかったんだが、やはりふたりになるといろいろ、言う

べきこともあるような気がした。公園前の誰かわからん武士の銅像前に立ち、俺は腰に両手を当てて眺めた。女子はとろいからなあ。いくら美里や古川が素早いとはいっても。

立村は銅像の日陰になる位置にもたれて、ブレザーを脱いだ。さすがに暑いらしい。

「腹、減ったよなあ」

「ああ」

無難な会話を交わす。

俺は立村の顔をなにげなく眺めた。人のこと言えた義理じゃあないが、あいつすっかりと顔色が青いじゃあないか。どうやら、寝不足とみた。見えないところで生あくびしてるし、まったく何語り合っていたんだか評議連中で。

「そっち、寝たの何時くらいだ？」

「朝、四時近く」

——こいつ、クラス連中と一緒にの部屋だと、さっさと寝ちまうくせに。

言葉では出てこないけれどもやっぱりこいつ、クラスよりも評議を最優先しているってことがよくわかった。むっときて俺も黙った。天気ぴっかり晴れているとはいえ、うっすらと雲が広がっていて、いつ雨が降ってもおかしくない。

「そっちはどうなん」

「俺も同じくらいだ」

嘘じゃあない。結局、金沢の将来に関する話題から、俺の未来についてとか、学校進学先とか、なんとかかんとか。いろいろあったっけ。昼間では絶対に想像できないくらいマジな話をしまくったような気がした。立村ともこういう話題、出したことがないくらいに。

「ふうん、そうか」

「お前の方はどうなんだよ」

「評議委員会のこととか、いろいろ」

——結局、ごまかすのかよ。こいつらしいよな。

立村とはかなり長い付き合いだし、どういうことを考えているか想像つかないわけではないのだが、やっぱり穴がすうすう空いたような気がしてならない。

目をこすって眠気ざまししている。俺は知らん振りして女子連中の現れるのを待った。

「ごめーん、羽飛、お待たせ」

「おやまあ、はええなあ」

やっぱりこいつらは女子の範疇に入らないかもしれない。待ち合わせ時刻十二時に十分も早く来るなんて思ってもみない。古川が大きく手を振りながら、にやにやと笑った。

「まず食べよ、食べよ」

「お前食うことしか考えてねえのかよ」

わあわあ騒いでいるのは古川のキャラだしわかっていないわけではないのだがやたらと浮き上がっている。そういえば目の前にいる女子って二人しかいないんじゃないのか？ 古川、美里、あともうひとり……。

「清坂氏、近江さんは？」

後ろから立村が尋ねている。ずっと地味な顔して古川の影に隠れている美里がかぼそく、「今日、個人行動しなくちゃいけなくなつてごめんって言ったの」

つぶやいていた。また女子となんかやりあったんじゃないだろうな。

「なんかあったのかよ」

「ううん、今日、どこかの公園で若手芸人さんのショーがあるから、そこに入り浸りたいんだって。ひとりで」

「ひとりで」というところにアクセントが入っているようだった。そうか、天羽と一緒にないんだ。

「ひとりでいくんだ、そうなんだ」

立村がひとりで納得している。噂によると近江はかなりの漫才マニアらしい。外見はおフランスとかそのあたりのお上品な世界がお好みというイメージなんだが、なかなか味があるじゃないか。性格としてはまんざら嫌いなタイプではないんだが、どうも俺の中で危険信号が鳴っている。なんだろうな。

「とりあえずなんか早く食おうぜ。とにかくスタンプ押しまくることしか考えてねえから、エネルギー使い果たしちゃったって感じなんだぞ」

「ハンバーガー屋さん入ろうよ。さっき見たら、結構がらがらだったよ。お昼時なのにね、人いないんだね」

昼は安くすませて、午後にどこか別のところでお菓子かなんかを食おうという話になっている。高期公園でだべってもいい。俺たち……美里を基準に考えるとだが……はジュース一本とポテトチップス一袋あれば十分帰りまで時間をつぶすことができるわけだ。立村も、たぶん古川もその辺に異存はないだろう。

がしかし。立村が妙に美里の方を見つめている。いつもとは違う。立村も、美里も、妙におとなしい。まさか俺の知らんところで、この二人新しい展開……AかBが行ったのか？

肘でこづいてみる。

「おいおい、どうした立村、妙に行動が目覚めてるぞ」

「目覚めてなんかないよ」

とかいいながら、また肩ごしに眺める。まあ気にならないこともわからなくはない。この旅行が始まって以来、美里がすっかりおとなしくなっちゃまって落ち込んでいるのを気付かなかったわけではない。女子同士いろいろごたごたしているんだろうし、もっというなら、いわゆるあの、女子特有の、あれってもんもあるんだろう。立村が怖い顔してにらむから聞けないけれども、俺なりに気にしているところはある。やっぱり、禁句ではあるだろう。けど美里がたかがそんなことくらいで性格変わるとは思えない。なんだか変だった。

「おい美里、お前暗いぞ」

「わかってるってば」

——何もわかってないだろうが。

女子は食わせれば何はともあれ、元気になるもんだ。いつのまにか左隣にいる古川と頷きあい、俺たちは道路向こうのハンバーガー屋へと向かった。とにかく食おう、それしかない。

大抵、美里と一戦やらかした時は、とにかくなんか食って仲直りするのがパターンだった。女は色気よりも食い気だな、とはいつも思うんだが、せっかくうま そうなカツレツサンドを前にしても、美里のごきげんは全く直らなかった。俺に、というよりは立村と古川に対して、と言った方が正しいんだろうな。一応は俺相手に、

「このカツレツバーガーって、おいしいよね。油っぽくないし」

「信じられない！ こんなにウーロン茶、いっぱい入ってるなんて！ 青瀧の店ではこういうとこないよねえ！」

とか、とにかく食べ物のネタばかり振ってきている。たぶん古川とは今日で三日目、顔を合わせっぱなしだったってことで、いろいろあるんだろうなあ。美里の性格が鼻につく奴はつくだろうし。もっとも古川だって負けていない。立村相手に、フライドポテトを差し出ししながら、

「ほーら、立村、お口あーんしてみてごらん」

「は？」

「食べさせてあげるからさ」

「何考えてるんですか、いったい」

取り合わず、ひたすら照り焼きバーガーを二つに割って食っている立村。横目でちらちらと美里の方を見ては、

「あのさ、清坂氏、こっちの照り焼きバーガーもおいしいと思うんだけどさ」

勘違いした話題を振っている。美里は少し視線を落として、

「あ、そうだよ、うん」

と短く切り返す。

「おいおい、なに相変わらずの痴話げんかやらかしてるんだよお前ら」

「そんなんじゃないもん！」

「いや、けんかはしてないと思うけど」

古川も大きなため息をこれ見よがしに吐くと、

「美里、立村が淋しがってるからもう少し甘えてあげなよ」

俺も共感する言葉をつぶやいた。

「せっくなあ、カップル行動できるチャンスだろうが。お前らなんでこういう肝心な時にさあ」

「いや、なにもそういうことを考えていたわけじゃ」

立村が言いかけるがとんでもない、と思いきり頭をはたいてやった。

なにせ、一番三日目、四日目の自由行動について燃えていたのは立村なのだ。

先生たちには内緒で午後以降の予定を組むよう指示したのはこの立村評議委員長なのだ。

ばれたらたぶん、即、停学だろうな。

こいつもやっぱり色気づいてるんだわ、きっと。

「とにかくお前らのために、少し時間も作ってやるしさ、しょうがねえ、あまりもん同士の古川よ、俺と一緒に行動すっか」

言ったあとでしまったと思った。

こいつ、俺のことを、なんだよな。友だちだって割り切れば楽しいんだろうが、やっぱり古川がしてほしがっていることは別なんだろうし、そう答えてやれないのがなんだか悪い。カツレツのジューシーな汁をすすっている間、俺はそんなことを考えた。けど、目の前でにやにやしつっこロッケバーガーに食いついている古川を見ているとどうでもよくなった。まあいいか。しゃべるに退屈でない相手がベストだベスト。

「あ、いいの？ 私、あきらめてないよ」

痛いところをつくなあ、こいつ。

「それとこれとは別だっけの」

「まあいっか。もちろんオッケーよ。美里と立村はとにかく少し仲直りしなさいや」

「だから別にけんかなんてさ」

やたらと言いつける立村だ。こっそりと耳もとにささやいてみる。

「お前、美里となんかしたのか？」

「してないよ、なんでだか」

首を振る。ということは、単に美里が八つ当たりしているってだけか？ しょうがないんで俺は美里の方にかまかけてみることにした。

「そういえばな、お前にずいぶん、近江は熱上げてるみたいじゃねえの？ なんかあれって一歩間違えると百合族って感じだぞ。天羽もかわいそうになあ」

「違うよそんなんじゃないよ」

妙に堅く言い返す美里だった。このあたりに何か、ひっかかりがあるんじゃないだろうか。俺の勘としては。もう少しつつこんでみつつも、目の前の古川と立村の視線処理に困る。

「だってなあ、立村、お前も思うだろ？ それこそ近江ってな『男装の麗人』ってのか？ 女子がきゃあきゃあ騒ぎそうな少女歌劇ってかそういうものみたいじゃねえか。ま、美里にはいくらあいつアタックしても無駄だけどなあ。立村がいるし」

「やらしいこといわないでよ！」

ぶちぎれそうになる美里。思い当たるふしがないければ、こんなに荒れないだろ。やはり変だということに、古川も気がついたんだろう。割って入ってきた。

「いやあ、男子同士だったらいろいろ、やばい世界があるかもしれないけどさ、女子はそういうのってないと思うよ。私も普通だったら美里にそういう気持ちになる可能性大、かもしれないのになあ。そっちは気になんないの？」

「なるわけねえだろ、色気が足りねえっての、古川、もっと努力しろ」

「ははーい！」

古川が間に入ってくれているおかげで、なんとか食事でも無事食べ終わることができた。美里の落ち込んでいる理由の一つが近江がらみというところまでは読めたが、だからといって立村たちに入つ当たりをすること自体理解できん。美里だけはもっとオープンに腹割って話し合えらと思ってたんだが、なんか妙だった。

「美里、ちょっとさ、おいでよ」

とうとう行動を起こしたのは古川だった。

「実はさ、ちょっと、今回、小道具用意してきたのさ！」

「ははん、さては化粧道具か？」

俺がまぜっかえしたとたん、わざとか「きゃっ！」と頬を押える振りをする古川。

「羽飛もねえ、あんたの方こそだんだん『色気付いてきた』んじゃないのかなあ」

「うるせえ、俺の操は優ちゃんに……」

「聞き飽きた！　じゃあちょっと失礼！」

なんだかこののり、俺がいつも美里相手にかましているのと同じじゃねえか。

女子二人、店内奥のトイレに向かい、ひそひそ話に徹したいらしい。いろいろあるんだなこの辺も。俺もその間に立村と作戦会議を開くことができるわけだ。

「いったい何、あったわけ？　あいつら」

「俺もわからない、けど」

言葉を濁すところを見ると、立村も戸惑っていたのだろう。こいつまだ、半分ウーロン茶を残したままだ。

「昨日の夜のこと響いたのかな」

「昨日ってなんだよ。またお前ら」

「いや、俺たちじゃない。他の評議同士でまたごたごたがあつてさ」

簡単に説明してくれた。俺も別ルートでいろいろ聞いていたことだった。本人の希望としては「シャーロック・ホームズ」を名乗りたいらしいがしょせん、「日本少女宮」のつぐみちゃん命野郎だ。

「ふうん、そっか。難波とC組女子との修羅場ねえ」

「俺もよくわからないことだしあまり触れない方がいいかなとは思うんだけどさ、ただ、そのとぼっちりをもしかしたら、清坂氏、受けたのかなとか」

「美里だったらけんか売られても一発ぶん殴るかするだろ？」

立村は首を振った。

「今の三年女子評議は、かなり険悪になりつつあるんだよ。近江さんの存在とか、あと二年評議の取り合いとかいろいろあるし。あの四人が同じ部屋で寝るってこと自体、爆弾しかけたようなものかもなって今になって反省中というわけ」

「過ぎたことだしいいじゃねえか」

心配する気持ちもわからなくはない。C組女子評議の霧島っていえば、幼女風美少女の外見にも関わらず、アタックした野郎どもが霧島の野獣な性格におののいて逃げ出すと聞く。たまに口を利いた感じでは、周りが騒ぐほど性格が悪いという気はしない。言いたいことははっきり言うぶん、腹の中には何にもないしわかりやすい女子だと思う。顔が性格と正反対なのがかわいそうなところだったのと、以前流れていた「児童ポルノ」がらみのけっこうやらしい噂なんかもからんでいて、現在のところ彼氏のできる予定はなさそうだと聞く。別の噂では南雲に秒速で振られたらしいが、それは霧島本人のためにもいい展開だったと思う。顔さえもう少し不細工ぽくして

毒舌個性派タレントめざせばけっこういい線いけると思うんだが。美里とぶつかり合ったら障子の一枚二枚は軽く破れることだろう。

「いや、霧島さんの方はいいんだよ。言い合いしてもすぐに仲直りするし、単純だから」

「ずいぶんお前、女子に詳しいなあ」

「むしろ単純じゃない近江さんの方だ。あの人は頭がいいから、霧島さんを口でとことん叩きのめして立ち直れなくさせてしまう可能性があるんだ。近江さんはもともと霧島さんのこと大嫌いだからさ。あっという間に一本背負い決めて精神的に病院送りくらいさせかねない。そうになると、今度は清坂氏の方に悪影響が流れるわけで」

「ははあ、そういうことか」

つまり、立村が心配しているのは霧島と美里の大喧嘩ではなく、「あっさり理屈と正論でたたきのめしてしまった近江の行動」なのだろう。正しいことイコール、うまくいくこととは思えないけれどもだ。美里は霧島とも近江とも仲がいいので板ばさみになっちまうってことだろう。

「たぶん清坂氏は近江さんの方が正しいと言うだろうな。だけど霧島さんの方が再起不能になるし、そうなったらまた男子の方に影響が出るしさ。誰が正しくて誰が間違っているかはどうでもいいんだよ。誰が勝つか負けるか。ああなんかな、食欲なしだよな」

「女子のことは女子に任せておけよ。美里だって、ほら、今日はD組の連中と泊りだろ？」

「そうだな」

立村は頷くと、ようやくウーロン茶のストローを加えてすすり出した。

「お前さあ、前から思っていたけどな」

くわえたまんま、目だけ俺に向けた。

「美里のことはとにかくとしても、他の女子たちのことまで気遣う必要ねえぞ」

「別に気遣ったわけじゃないよ。ただ同じ評議委員だし」

「それが余計だったの」

時計の画面が曇ったのを、袖口でこすりながら言ってやった。

「たぶんな、美里が機嫌わりいのは、お前があいつのこと以外のことばっかし考えてるからだろう」

立村は黙った。そのままストローの茶色いウーロン茶を動かさないままにしていた。

「今から旅館に戻るまで、お前、美里のことだけ考えてろ。それが一番、いい方法だと俺は思うぞ」

「なんでそう断言できる？」

気弱そうな言葉が返ってきた。

「いや、なんとなく」

「俺は違うと思うな」

一気にしゅるしゅるとウーロン茶を飲み干した。　　言いかけたところで女子二人が戻ってきた。化粧したのかどうかよくわからん。

「ちっとも化粧した風に見えないんだがなあ」

「あーら、それは殿方、チェックが甘いわよん」

相変わらず美里は無言だった。やっぱり今のMVPは古川に一票だ。

「でねえ、一つ提案なんだけど」

すぐにちゃっちゃと腰掛け、古川はいきなり立村の腕を取った。思いっきり退き加減の立村に、顔を接近させて、

「ね、今日は立村をちょっと貸してもらっていい？ 美里？」

こっくり頷く。美里も無表情だ。

「で、明日は二人仲よし行動よねえ、羽飛」

「な、何を言いたいんだ、お前ら」

妙に色っぽいしぐさに、完全にたじたじ状態の立村。哀れなり。俺の隣で美里はしばらくうつむいていたが、

「うん、それがいいと思う。立村くん、ごめんね」

さっそく古川はちっちゃい女子用のバック……ポシェットっていうんだってな……から修学旅行前に配られた絵地図を広げた。飲み物のしずくですぐふにゃふにゃしちまっている。気にしていないところがやっぱり、古川だ。

「じゃあさあ、とりあえず三時半まで、自由行動ってことにしようよ。で、ここに三時半集合。そのあとそれなりに四人でたむろって、ってことにしようよね」

「美里、いいのか？」

念のために無言の美里にも尋ねる。

「いいよ。それがいいと思うんだ」

「じゃあ、羽飛、あとは美里をお願いっ！ 私はダーリン立村を独り占め！」

すげえことを言っている古川だが、真意、全く理解できない俺。ダーリン立村も最初の「おいおいなんだよ」状態から立ち直り、すぐに切り返しはじめた。

「なあにが、ダーリンだよったく。古川さんこそいいのかよ」

「いいっていいって。じゃ、いこうかデート！ あんたの奢りでねえ、ここの喫茶店に行こうかねえ」

「な、なんで俺の奢りになっちゃうんだよ！」

「だってさ、レディーファーストっていうじゃないのさあ」

「古川さん、男女平等とか謳ってなかったか？ 学校ではさ」

「それはそれ、これはこれ！ さ、じゃああとのお二人はおっ楽しみねえ！」

俺はただ、立村に小さく手を振った。隣の美里も納得顔のままこくと頷き、二人を見送った。あいつらがデート、ってなんというか、あいつら恋人同士じゃねえよ、雰囲気。どうみても、姉と弟って奴だよ。突然笑い出したくなった。

けど、いいのか本当にこれで？

たぶん、美里と立村が一緒に行動するんだろうとは思っていたのだが。

「美里、お前どうしたんだ？」

「いいよ、さっきこずえと話して決めたことだから。明日は別の行動パターンでいこうね」

「もちろんそれでいいけどな。それよかお前」 聞きたいことは山ほどあるが観光したいのだから

うか、美里？

「いいよ、貴史。あんたとも少し話したいしさ」

「へえ、それは光栄なり」

俺と美里との行動ってことだったら別に、それほど金のかからんところでもいい。どっかのコンビニにかスーパーで、食べ物と飲み物を買まくって、さっき待ち合わせした公園のベンチあたりで時間をつぶそう。なんて経済的なカップルだ俺たちは！

「そうだね、私もそうしたいんだ」

なんだか妙に素直な美里に、俺は少々調子を狂わされていた。美里が食べ物分を全部払っちゃったことに気付いたのは、外に出てからだった。男女平等、あとまわしってとこだ。

外は相変わらずのぴっかり天気だった。たまに青大附中の制服を着た連中らしき奴が通り過ぎていったけれども、俺たちには気付かなかっただけらしい。男子連中は分散する午後の時間帯を、ボーリング場かカラオケ、あとはゲーセンで過ごす予定らしい。女子はどうなんだろう。美里に聞いてみた。いかにもスーパーって感じの店に入って、パンとペットボトルのお茶、ポテトチップとクッキーとガムと飴玉、そんなもんを選びつつ買い捲っている美里。顔を上げ、

「そうだね、女子はねえ、やはり服とかアクセサリとか買うんじゃないかな。あとはおしゃべりとか」

「そりゃあそうだな」

自分が食うものも入っている関係上、ビニール袋は俺が持った。ぷらぷらと公園に向かい、人気がないのを確認しつつ、屋根のあるベンチに向かい座った。やはり何組か大人のカップルとか外でふら付いている人とか見かけたが、うちの学校の連中はいなかった。

「やっぱりさ、こずえや立村くんには言えないこともあるんだよ、最近はね」

意味深なことを言う美里だが、他人様が思うほどたいしたことはないのを俺は知っている。

「ほほうなんだよ」

「貴史、あんた、どう思う？」

まずペットボトルから紙コップに注ぎ、美里は一杯こくっと飲み干した。

「人間に、無駄な努力って、あると思う？」

——いきなりくそ真面目な話題ときたかよ！

この旅行が始まってからというもの俺は、立村以外の連中からずいぶん、人生における堅苦しい話題ばかり振り向けられている。いや、それも悪くはない。悪くはないんだが、この前の金沢のことといい、さっきの立村の話といい、そして今の美里といい。

——お前ら、いったいなんでそんなマジなこと考えてるんだ？

「無駄な努力かあ、そうだなあ」

とにかく言葉出してごまかす。

「ねえとは言わないけどなあ」

「さっき、こずえに聞いたら絶対そんなことないって言ってた。けど、貴史は違うかなって思っ

たの」

「まあそりゃあそうだけだなあ」

なんでいきなりこういう話題なのかを説明してほしいもんだ。隣で紙コップにもう一杯お茶を汲み、美里はもう一度こくと飲んだ。

「たとえば貴史、鈴蘭優と結婚したいとして、どんな風に努力する？」

「絶句させるのもいいかげんのしろっての！」

俺はしばらくむせ込みそうになった。いや、俺のそりゃあ夢としかいいようのない夢をだ。いきなりなぜ美里は語るんだ！

「そ、そりゃあなあ、今のままじゃあ無理だろうなあ」

「あたりまえでしょうが。だからどうするかって言ってるのよ」

我がいとしの優ちゃん。そりゃあ、生で会いたいことは会いたい。コンサートの最前列、チケット取りたいくらいのことは思う。

「結婚」となると、想像の範囲をはるかに絶する。

「まずは、近づくんじゃねえだろ。コンサートの時に差し入れするか」

「できるの？」

「できねえ。本気の大人ファンたちがいてな、絶対に俺たち中学生以下のファンは近づけてくれねえの。唯一のチャンスが、握手会。けどそれ以前に、青潟へ来ることってめったにねえからなあ」

鈴蘭優ファン倶楽部が公式の組織としてないわけではない。中二の終りまでは会員だった。群れが好きになれねえってこともあって、現在は一匹狼に徹している。例の「日本少女宮」命の難波とは違う。どうしてもチケットは取りづらいし、「今日、優ちゃんはこちらにいるぞ！」という情報も手に入れにくい。好きな女を追いかけるのに、群れる必要あるのか？と俺は問いたい。奪い合いになっちゃうじゃねえか。

「じゃあ、どうやって近づくの？」

「仮にだ、俺が本気で優ちゃんに迫るとしたらな」

俺はいくつかのパターンを並べることにした。美里も面白そうに前かがみになり、こくこく頷いている。ハンバーガー屋でのぶすつとした態度とは打って変わって爆笑してやがる。やっぱし、これがいつもの美里だ。

——鈴蘭優ちゃんと結婚するための方法と対策・羽飛貴史・発——

一、まず、優ちゃんの活躍している地域へ引っ越す。

二、ファン倶楽部に入り情報を集める。

三、ファン活動中心にできるように、それなりの学校に入学する。当然青大附中から退学。

四、優ちゃんに顔を覚えてもらえるよう、コンサートに毎回出る。

「これくらいは普通だわな」

あの「日本少女宮」ファンの難波が「ファンの心得」として聞いたという九か条を並べる。
「そこまでは？」
「してる奴もいるらしいぜ」

五、楽屋の出待ちを行なう。コンサートが終わってから楽屋へダッシュ。そこでお土産かなんかをメッセージ付きで渡す。

六、情報を集めて泊っているホテルで出待ち。
七、ファンの集いみたいなのには必ず参加する。

「なんかさあ、貴史、お金ばかりかかりそうなんだけど」
「夢だからいいだろ、さ、次だ」

八、そのうちにだんだんスタッフさんと顔なじみになってくるのも時間の問題。そこで優ちゃんへつないでもらえるよううまくアピールする。ここまでくればまずはお友達になるというところまでこぎつけられる。

「えー、そんなうまく行くわけないないよ！ だってファンってたくさんいるんでしょ」
「美里、頼むから現実に戻すなよ」

九、その後は優ちゃんの気持ち次第。写真週刊誌に密会場面を撮られないように注意してデートを重ね、あとは普通の恋愛一色で勝負！押しだ！ 押しだ！ 押しだ！

「なんか、後があっさりよね」
「まあなあ。俺も想像つかねえよ。それこそファン倶楽部入ってねえからなあ」

語りまくりすぎて、咽が渴いた。笑いすぎてベンチにのけぞっていた美里がついでくれた。
「ずいぶんと女らしいのう」

「でさ、でさ、これで成功すると思う？ あんた冷静に考えて」
「冷静に考えればこんなこと、出来ねえよ！」

ふっと息を吐いた。当たり前だ。第一考えてみる、アイドルを追っかけるために引越しまでする根性あるかっての。どこで金都合する？ 親の通帳から盗むなんて姑息なことはしたくねえし、アルバイトでも厳しい。もっとも難波の場合、今年のゴールデンウィークに「日本少女宮」のコンサートに行くため、貯金をはたいて交通費をまかない二日くらい泊りで行ったと聞く。俺もさすがにそれ聞いた時は、負けたと思ったな。

「夢だからできるんだっての。それに学校辞めるなんて考えてねえしさ。なによりも、俺、ファン倶楽部ってなんか苦手なんだよなあ」

一回入ったことはあるんだが、二年の終りくらいにやめた。金も続かなかったというのもある

けれども、ファン通信のいじいじした雰囲気についていけねえものを感じたからだ。やはり好きな子を好きなように応援するのがベストじゃねえのか？

「ファン同士って面倒でさ、応援している年数によって運動部みてえな先輩後輩の序列が出来ちまうんだ。俺もちらっと聞いてぞっとしちまった。俺がなぜバスケット部に入らなかったのか、美里にはわかるだろ？」

「まあね、そりゃあそうよねえ」

「だから、ファン倶楽部での情報集めというの、パス。となるとあとは出待ちかあ。けどなあ、これもそれこそ序列みたいなのがあって、先輩を差し置いて近づいてはいけない！とかいう決まりがあるらしいんだ。それもなんかなあしんどいな」

数えてみると、なんだかうっとおしい理由がたくさんでめまいがしそうだ。天辺の葉っぱが少しすれて、毛虫が落ちてきた。美里が見たら悲鳴あげるだろうから、払ってやった。

「なるほどねえ。そこまでして、鈴蘭優と結婚したいとは、思わないわけだ」

「まあな。そこまで努力してってより、やはり青濁で一人静かに優ちゃんの歌やビデオ、写真をめめている方がいいかなあと俺は思う」

自分でも暗いと思うが、やっぱりそれが本音である。

「そこまでの努力をする必要は、感じないってことか」

「まあなあ」

隣で美里はやたらと茶ばかり飲んでる。俺のしゃべりにくくと受けていたのに、話が落ち着いたとたん、急におとなしくなった。

「貴史、そうだよ。自分の本当に叶えたい夢とは、違うもんね」

「叶えたい夢？」

「たとえば、将来何になりたいとか、どこの学校に行きたいとか、あるよね。そういうものとは違うよね」

——おいおい、金沢と同じこと美里言ってるぜ。

俺は腹をくくった。この偶然性、なんか意味があるはずだ。

昨日、寺の中で金沢と某有名な住職さまとの対面を果たさせた俺は、その夜ひたすら金沢と人生について語り合った。といっても半分以上金沢の一人がたりで終わったのがひとつと、その時に出てきた大量の画家の名前に辟易してしまい、途中寝てしまったというのがひとつ。要するに半分以上頭から抜けていたんでどうい話かは説明できない。ただ、金沢の将来はきっと、美術に関わっていくことになるんだろうとは思った。このまま青大附属のエスカレーターコースに乗っていくことだけは絶対ないだろうとも。

簡単に昨日の寺事件に関する経緯を説明した。膝を広げて天を見上げた。鳩が足下にあつまってこっここっこいっている。

「俺にはわからねえけど、努力するったらやっぱりこのくらい本気の気持ちになれるもんでねえときついんじゃないかなあ」

「金沢くんはそうだよ。将来の夢、画家だもんね。本気だもんね」

美里もしみじみつぶやいた。

「でもさ、今の段階ですぐに決めちゃっていいと思う？ 将来の夢とかを」

「決められねえよ。俺そんな美術の才能なんてねえし」

「立村くんだって決めてないと思うよ、英語の才能あれだけあるのに」

そういえばそうだった。俺もあまり男子連中と将来の夢についてなんてしゃべったことがない。例外昨日の夜、だけだ。たまに、「いつか俺は青潟市の商人に！」「いや俺は将来医者を目指すんだ！」とかふざけて騒ぐ奴はいるけれど、表を切って話す奴はそうそういない。

美里、お前はどうなんだ？

「私？ 私だって、決められないよ。とりあえず高校は普通科に行こうと思うくらい」

「今俺の選べる未来ってば、それだけだよなあ」

「たぶん立村くんの将来も、英語科に進むってことくらいしか決まってないんじゃないの。貴史、あんた立村くんと将来について語ったことってないの？」

「ねえな」

言ってみて気が付いた。そうだない。立村と俺との間にはそういうものがほとんどない。

「で、さっきの話に戻すけど」

美里は暑そうに指をうちわがわりにぱふはふさせた。

「もしよ、もし、本当に目指す夢があるんだったら、努力するのは当然だよな、でももしその努力が全然報われないとしたら、その場合って努力は意味なくなるのかなあ」

「それはねえだろ」

これは俺も立村、古川と同感だ。

「もしね、私とか貴史が将来叶えたい夢があったとしてよ、その夢が絶対かなわないってわかっていることだったとして、それでも努力する必要があると思う？ そういう無駄なことしないで言ってあげたほうがいいと思う？」

「つまり何か？ 俺が本気で優ちゃんと結婚したいと思って、その夢がかなわないってことがわかっている、それでも家を引っ越したり中学止めたりしたほうがいいとか、そういうことか？」

」

「貴史えらい、あんた天才、その通り」

ぱちぱちとおふざけの拍手。

「俺はやらねえなきつと」

「最初からやめちゃうの？」

俺は首を振った。

「違うっての。本当に俺のやりたいことかどうか、冷静に考えたらたぶん違うと思うからなあ」

「それってやる前からわかるものなの？ 私、わかんないよ」

美里の声が震えている。

「だってそうだよ。私、その夢がかなわないってことわかっているったって、本当になかないって決まっているわけないんだよ。だったらとことん追っかけるのが正しいんじゃないかって思うの。けど、どんなに努力しても、どんなに一生懸命かなえようとしても、周りの迷惑になって

しまうとか、かなわないことがわかりきってるとか、そういう時、あきらめなくちゃいけないのかな。周りに迷惑かけてしまう努力は、しちゃいけないのかな」

「そんなことはねえんじゃねえの」

軽くまぜっかえそうとした。美里はまだ首を振っている。

「立村くんだって、もし科学者になりたいとか数学者になりたいとか思ったとして、けど絶対無理だって私たちはわかっていて、それでも目指した時、私たち、立村くんを止めるべきなのかな」

「絶対ありえない仮定だけどな、俺は止めねえな。あいつが決めることだろ」

「けど、絶対無理だってわかってるのに？ 立村くんには出来ないこと、周りはみんなわかってるんだよ。でも理系の大学に何年でも浪人して入学するとかしたら？」

「別にそれはそれでいいけど、あいつ、自分の才能とか能力わからねえほど、ばかじゃねえよ」

美里の声が高まった。足をとんと踏んだ。ちらばっていた鳩が何羽か飛んだ。

「やっぱり、自分の能力とか才能がわからない人って、おばかさんなの？」

「そうは言わねえけど、遠回りだなんて気はするよな」

何気なく答えたつもりだった。なのに美里は顔真っ赤にしている。理由がわからん。

「じゃあ貴史、もし、自分の能力と才能を勘違いして努力している人がいたら、それは違うって言ってあげた方がいいと思う？ あんたにはそんな能力なんてない、でもこんないいところあるんだよって、教えてあげた方がその人のためになると思う？」

話が飛んで少しわけがわからなくなっている。

「美里、お前は どうするんだよ。俺に聞くよりも、お前が どうするかだろ」

「私なら」

言葉を切った。じっと俺をまっすぐ横から見据えて、

「去年までの私だったら、きっと、言った」

しばらく黙らざるを得なかった。俺も言葉を捜す時間が必要だった。

「とにかく、食おう、それからだ」

「そうだね」

また鳩たちがわらわらと足下に集まってきた。美里がパンのかけらを投げようとしたが、すぐに手を止めて自分の口に運んだ。小学校時代の美里だったらためらうことなくパン屑を投げて鳩に感謝させていただこうに。ふと見ると、目の前の木々にプレートで、「ふん公害のため、鳩にえさを与えないでください」とでかでかと張られていた。こんなものを見て注意するようになった美里がいた。

前もって立村から状況を聞いていたことと、美里の説明が結構わかりやすかったこともあって、すぐに状況は理解した。やはり、女子同士のごたごたした問題だったらしい。美里がそういう関係の出来事に巻き込まれやすいのは、俺も物心ついた時から気が付いていたし、しょっちゅう俺も加勢したもんだ。最近はあまり手を出さない方がお互いのためじゃあねえかという判断のもと、観察だけしている。俺が口出し手出しするのは、立村の関係することくらいだけだろう。

「そうなんだ、立村くん、やっぱり心配してくれたんだ」

ほわっと笑う美里。やっぱり嬉しいんだな、ダーリンのことが。

「そりゃあそうだろう。仮にも自分の彼女だぜ、評議委員長、その辺はお見通しってことだぜ」

「何にも私には言わなかったけどね」

「言えるわけねえだろ。お前があんなにぶすっとしてたら」

「そっか。反省だね」

自分でわかってるからいいじゃねえか。あまりぐちぐち言うのもなんなんで、俺はさっさと具体的問題点に入りたかった。美里を含めて女子の場合、問題そのものをどかんと出すのではなく、「こういう考えどう思う？」という風に、いささか抽象的、雲つかむような言い方をする。さっさと「鈴蘭優と結婚するんだったらどうする？」とか、今のように話してくれりゃあ、俺だって三枚目さらけ出すことなく返事ができるんだが。

「霧島はなあ、悪い奴じゃあないからなあ。あの顔が、ネックなんだよなあ」

「あれだけ可愛いのに？」

「お前がさんざんばかにしている『ロリコン』だったら、さぞ喜ぶだろうがなあ。俺たちのようなタイプにはノーサンキューってわけだよ、ああいう系統の顔はな」

「ふうん」

俺からしたら、優ちゃんみたいな可愛さの方が好みなんだが、世間さまはどうも美里や古川タイプの女子を好む。言いたいことをずばずば言って、顔は十人並みだがやたらめたらけらけら笑って、しゃべると楽しい相手。俺はそういう奴を「親友」にこそできるけれども、「恋愛」とはまた違うんだなと思う。他の奴らからすると贅沢言っててなに考えてるんだこの野郎、ってことになるらしい。

「可愛いだけじゃあだめなんだよね」

「人の好みもあるしなあ」

——美里には言わねえほう、いいだろうな。

俺はC組女子評議の霧島に関する、極秘情報を腹の底にしっかり収めた。

A組女子評議の近江が霧島相手に一回戦KO勝ちを果たし、さっさと美里をさらって語り合ったというのがおおむねの内容だった。最初は霧島が、美里の態度にぶっちぎれて説教していたらしいんだが、それを聞いてうんざりした近江が割って入り、

「見下されているのは霧島さんが霧島さんだからでしょ」

みたいなことを言っただけという。霧島としては、自分がどうして男子および家族の連中に見下されているのか、その理由を「女子だから」という男女差別の問題に持っていきたくはない。悲惨な情報を考え合わせるに、そう思うのも無理ないわな、とは思っている。けど、それは「勘」であって、周りからすると近江の言い分の方が正しくあったまい考えだということも頷けるわけだ。たぶん百人中九十九人は、近江の肩を持つだろう。

サンドイッチ状態となった美里だが、その後評議に関する運営のアドバイスを近江より一方的に受け……俺が思うに、近江の狙いは美里といちゃつくことだけだったのではないかと思うんだがな……美里はその毒気にやられてしまい、修学旅行残りの二日間を哲学するはめになったわけだ。

「あくまでもだな、俺個人の考えだぞ。男子連中がどう思ってるかは知らねえぞ」

前置きしておいた。この辺、誤解されることもねえと思うんだが。

「近江が言うには、霧島を『壁の花』扱いにしといて、轟を裏の番長に祭り上げて、美里は立村といちゃついてって形にした方がいいってことか」

「違うってば！ 私は関係ないの！ ただ、ゆいちゃんにはあまり重要な仕事を任せない方がいいんじゃないかっていうのが、近江さんの意見なの」

鋭いところを突くなあと素直に関心する。霧島は裏表のない味のある奴だと思うんだが、いかんせんおつむが少し弱い。一生懸命勉強して、入学以来逆トップの座を譲らないということも泣かせる。周りが見えない性格ってのもマイナスだ。たまたまC組男子評議の更科が裏に手を回しているいろいろなフォローしているので二年の頃まではぼろが出ずに済んだらしいが、最近の評議委員会はかなりごたごたが続き、立村もベルトの穴が二つくらい縮むような精神状態らしかった。霧島が見た目を利用して「評議委員会のかわゆいアイドル」と売り出せば、問題の半分は解決するような気がする。

「美里はどう思うんだよ」

「私？ 私は」

どうもこのあたり歯切れが悪い。以前の美里だったらもっとはっきりと、「私、近江さんも言いすぎだと思うけどゆいちゃんも悪いと思う」とか言うんじゃないだろうか。だいたいあいつの思考回路は読めているところがあるんだが、それでもだ。ずいぶんぐちぐちしている。後ろから軽く頭をはたいた。

「あのなあ、美里、俺は直接聞いたわけじゃねえし、どっちがいいとも言えないってことわかってるだろ！」

「わかってるってば。けど、だから困ってるんじゃない！」

頬が少し焼けていた。頬をこするようにして美里は深呼吸し、

「近江さんの言うことは、その通りなんだって思うの」

「簡単じゃねえかそれなら」

「違うってば！ けどね、貴史」

言葉をとぎらせるようにして、

「じゃあ、やっぱりゆいちゃんに言うべきだと思う？ 『評議委員会ではあなた迷惑だから、私たちの邪魔しないでお人形さんになっててよ！』って？」

「それをうまくおだてろって言ってたのは、近江だろ？」

「わかってる。おだてればゆいちゃん簡単に喜ぶってのはわかってる。けど、そんなことしたら、相手を裏切ることになっちゃうんじゃないの？ 本当のこと、知ってるくせに。それにね」

美里はまた、別問題を引っ張り出してきた。具体的内容だ。まだいける。

「ほら、あんたも知ってるよね、西月小春ちゃんと天羽くんのこと。修学旅行前、小春ちゃんに天羽くんはちゃんと謝って許してもらったらしいけど、最初に酷いこと言って小春ちゃんを傷つけちゃったでしょ。けどそうしないと、わかってもらえなかったんだって天羽くん言ってたらしいんだ。私、話最初きいた時は小春ちゃんかわいそうだって思ったよ、けどね」

深刻な話は聞いていた。A組評議同士の恋愛トラブルだ。

美里はまた一呼吸おき、つぶやいた。

「そこまで言わないと、伝わらないってことも、あるんだなって」

ポテトチップの袋を開けた。美里が膝に広げてぱくぱく食いはじめた。俺も手を伸ばした。

「今だに、西月は口きけねえのか？」

「うん。それで、今噂になっている男子がずっとくっついていて、小春ちゃんのこと見守ってるんだって。私も見たよ」

ああ、金沢の美術的ライバルの片岡だな。

「じゃあいいじゃねえか。天羽も近江とべったりだし。それぞれハッピー」

「そうだよ、今の小春ちゃんは絶望しちゃってると思うけれど。でも、本当のことをちゃんと伝えただからしかたないんだよね」

新しい男子がいればそれはないんじゃないのか？

「貴史、そうだよ、やっぱり言うしかないよね。ゆいちゃんに」

「そうすべきだと思ったんだったら、そうすりゃあいいじゃねえか？」

そこまで言ってふと、かき一んと頭が鳴った。

別に太陽の熱で頭がぼーとしたわけじゃあない。

——美里、お前、霧島と近江、どっちと仲いいんだ？ それによって判断変わるぞ。

「美里、ひとつだけ聞いてえんだけどさ」

俺は、ポテトチップを五枚くらいまとめて分捕り、口にほおばった。

「お前、ほんとは、霧島のこと対して好きじゃねえんじゃないの？」

こほこほ美里がむせた。どうやら、俺のかき一ん直感は当たっていたようだった。

いや、たいしたことじゃない。

俺も女子に関してのうっとおしい情報についてはあまり知ることもない。

立村に言ったことだが「女子のことは女子に任せておけ！」なのだ。

ただ、なんとなくなんだが、美里は霧島よりも近江の方に最近べったりし始めてるような気が

してならない。いつだったか視聴覚教室で二人語り合っていて、かわいそうな立村が待ちぼうけ食らわされていたことがあった。妙にいちゃいちゃした雰囲気が残っていて、むしように腹が立ったことを覚えている。決して嫌いな女子タイプではないんだが、なんだか気になる。

霧島タイプの腹にはなんもない、単純明快な女子とばかり美里は今までつるんでいたような気がするんだが……例・古川だな……、近江タイプの女子とはあまりお付き合いがなかったはずだ。なんかなあ、思いっきり、影響されちまってるんじゃないか。

——あまり、俺の好きでない方向にさ。

「嫌いじゃないんだよ。私、ゆいちゃんのこと」

あっさり和美里は認めた。

「けどね、考え方がちょっと違うんじゃないかってことは、よく感じるよ。誰でもそういうのあるよね」

「じゃあ、近江はどうなんだ？ 明らかに俺らの繋がりにはねえタイプの女子だわな」

「そうだね。近江さんタイプの子ってのはじめてだね。たぶん、去年の私だったら、小春ちゃんみたいに文句言ってたかもしれないな」

A組の西月に関しては、正直あまりいい感情を持っていない。なんというか裏のありそうな親切でアピールするってか、そういうタイプの女子がどうも俺は好きになれなかった。立村もたぶんそうだろう。ぼそっと「なんか女子版菱本先生って感じなんだよな、西月さんは」とつぶやいていたし。真面目で尊敬すべき性格だってことはわかるんだが、俺の知る三年男子の九十九パーセントは「天羽が振って当然」と判断しておる。まぶしすぎる日の光を浴びせ掛けられすぎて、俺たち葉っぱたちはすっからかんに乾いてしまうような感覚だ。

「やっぱり近江さんの言うことは正しいように思えてならないんだ、私」

「そっか」

「もしも小春ちゃんが、天羽くん振られることをさっさと受け入れてくれてれば、こんなにことが大きくなることもなかったんじゃないかって思う。ゆいちゃんがもし、杉本さんの恋を応援していなかったら、交流会サークルが解散させられることもなかったかもしれない。ゆいちゃんがもし評議にならないで地味ににこにこしていたら、絶対彼氏できていたかもしれないし」

霧島にはかわいそうだが、俺もそう思う。同学年少数とはいえ、ロリコンはいるもんだ。何も、南雲みたいな女ったらし……現在は奈良岡のね一さんが餌食だが……のことばかり考えなくとも、いくらでも男は反応するぞ。。

「美里、お前、それいつぐらいからそう思った？」

「四月くらい」

意外と早い時期からだ。少し驚いた。

「じゃあなんで言わねかった？」

「言えるわけじゃない。近江さんと小春ちゃんが入れ違いになるまでは、そんなこと私も気付かない振り、してたし、それに」

言葉を切って、かけらのポテトチップを口に含んだ。

「今はまだ、私が近江さんとゆいちゃんとの間に入ってるからうまくいってるけど、もし私がここで、近江さんにつくなんてことになったら、どうなると思う？」

「そりゃあ、修羅場だな」

美里は大きいチップを口にくわえがりりと噛んだ。野獣だ。その顔。

「はっきり言ってゆいちゃんが評議を降りた方が絶対、うまくいくと思うんだ。小春ちゃんが近江さんに負けたのも、かわいそうだけど当然なんだって思ってる ところあるもん。天羽くんが露骨に小春ちゃんを嫌う理由も、私わかんなくない。しつこすぎるってところ、あるもんね。近江さんの言う通り、ゆいちゃんは言われるとおりのことして、可愛くにつこり笑って、周りから憧れの的として見られるような扱いが一番似合ってると思う。それにゆいちゃん、このままだったら絶対に青大附高に進学できないもん。評議から降りて、必死に勉強する時間に当てた方が絶対いいと思うんだ。私、これが本音。だけど」

まくし立てた後、美里は俺の方をひょいと見た。

「それは違うよな、美里」

俺はたどり着いた答えを、ぼそっと出した。

「霧島に余計なこと言うのやめとけ」

「え……？」

「お前にはそれ、霧島に言う権利ねえよ。美里、お前霧島のこと、馬鹿にしてるだろ」「そんな」

美里は絶句していた。考えたこと、そんなことない、そう言いたそうだった。

「お前さ、前から思ってたけどな、霧島の顔とかにすげえいらいらしてたんじゃないか」

少し方向を変えてつつこんでみた。これも前から気になっていたことだ。

「どういうことよ」

「ほら、良く言ってただろ。霧島と一緒に歩くとやたらとカメラ持ったおっさんたちに付けねられるってな。ほとんど撮られるのは霧島一人で、美里はいつも刺し身のつま扱いだってな。この前も言ってたじゃあねえか」

「だってゆいちゃん、写真撮られるの苦手なのよ。すっごく嫌ってる」

「美里、お前いつもそれでむかついてただろ？」

俺は無視してたたみかけた。

「霧島みたいな女子ばかりちやほやされて、どうして私は無視されるんだか、って風に俺には聞こえたんだよなあ。いや、美里だけじゃねえよ。他の女子たちも似たようなもんだろ。あいつになびかないのは性格が野獣だからであって、顔だけだったらその手の男子連中にいくらでも好かれるだろってな」

だんまりを決め込む美里。自分でもどういうことかわかっているからこそ、だ。

「けどな美里。俺からするとそっちの方でお前が八つ当たりしてる としか思えねえんだよな」

「私八つ当たりなんか」

「美里、お前、霧島には顔でいくらしても勝てねえから、成績上だし頭悪いしってことで、見下し直してるようにしか見えねえんだよな」

「貴史、そんな、なんでよ！ 私をそんな奴だって思ってたわけ？」

「違う少し落ち着け、ばか」

こいつを冷静にさせるには、軽く頭をぶってやるのが一番いい。やはりおとなしくなった。ただ唇をおもっきりとんがらせていた。

「俺が言いたいのは、ただ霧島を馬鹿にしたいというだけで、近江の言うことこのみにすんのやめろってことだけだっただけ。近江はしゃあねえよ。いろいろあったみたいだからなあ。けど、美里は霧島と同じことされたわけじゃあねえだろ。少し考えりゃあ一発だろうが」

すっかりむくれた美里がうらめしげに俺を見返す。

「だったら別の方法考えろよな」

「どんなよ」

「そうさなあ、どんなだろうなあ」

具体的になにが、と問われると、俺も返事ができない。しばらく首をぐるぐる回し、
「俺も、そんなんわからねえよ。女子のことだしな。立村にそこんところ相談しろよ」

ごまかした。美里もししばらく考え込んでいたが、すぐにもう一杯茶を飲み干し、

「ごめん、ここ、トイレないかな」

立ち上がった。

美里がきったねえ公衆便所に駆け込んだのを確認し、俺は側の別ベンチに腰を下ろした。このあたりはやたらと烏がうごめいていて汚い。こんなところで俺も小便なんぞしたかあねえよ。美里もちらっと覗き込み、

「貴史、ごめん、いいわ」

浮かぬ顔で戻ってきた。俺からすると美里、かなりやばそうなんだが。

「大丈夫かよ」

「平気、平気。たいしたことない」

また顔を真っ赤にした。俺は知らん振りを決め込もうと決めていた。古川相手だったらまた下ネタトークで盛り上がるだろうが、今の美里にはそんなことできそうにない。それにまた、例の「あれ」がからんでいるみたいだし、俺も女子のヒスには余り付き合いたくない。

「で、悪いんだけど、できたら屋根のあるところに移動したいんだけど、いいかなあ」

またうつむいてる。どうしたんだか。別に俺も異論はないが。

「じゃあさっきのハンバーガー屋に行くか？」

「ううん、あそこの喫茶店がいい」

美里が指差したのは、こじられた感じの喫茶店だった。白い煉瓦風の壁と真っ赤な屋根。なんだか俺ひとりだと絶対素通りするようなとこだ。こっぴどかしいったらねえ。

「なんかなあ、俺たち目立つぞ、制服だろ。それに立村がたとバッティングしたらどうすんだ」

「じゃあいい、別のところでも、とにかく家の中に入りたいの」

「そんならゲーセンでも」

「いや、そういうとこは！」

しばらく互いの要求をすり合わせたけれども、らちがあかない。

「じゃあ外でも別にいいだろ、美里。食べ物結構あるし」

「だって、あそこだと」

口籠もり、ちろっとさっきの公衆便所を見た。

「トイレあそこしかないよね」

「汚ねえけどあるだけましだろ」

「うん」

しかたなさそうに美里は元のベンチに腰掛けた。しばらく無言で膝をつつくようなしぐさをしていたが、

「貴史、覚えてる？ 小学五年の時のこと」

小さな声でささやいた。誰も聞いてねえってのに。

「どんなことだよ」

「私が、教室で、白山さんとのことでしたこと」

——ああ、あれな。

わざと五時間目の授業中にしょんべんちびって自分で始末する、とかいう賭けをやったよな。たまたま体育館でちびった女子がいて、その女子をかぼうつもりで美里が立ち上がったところ、たまたま俺と美里がターゲットになり怒涛のごとくけりいれられまくり、血迷った美里は「じゃあ、私教室でやってみて、自分ひとりで片付けて見せるから！」と宣言したという、あれだ。ある種のマニアには喜ばれるかもしれねえがとぼっちり受けて隣で始末するはめになった俺の立場はなんなんだと言いたい。

「あの時ね、私、ほんとに、自分で片付けられるんだって思ったんだよ」

「片付けただろお前」

「ううん、できなかつたよ。あんたが隣にいたから、なんとかかなっただけ」

多少は俺の存在価値もあったってわけだ。あまり自慢できねえが。

「私、あの時、本当のことをちゃんと言ってあげるのが親切だし、自分でやらかしたことは自分で始末するのが当然だって思ってたんだ。だから白山さんがしちゃった時、どうして前もってトイレ行かなかったのかとか言っちゃったんだよね。間に合わないんだったら、どうして途中で体育館から抜け出さなかったんだって、言っちゃったんだよね。最近まで私も、そう思ってたんだ。その後詩子ちゃんが、すごくやな感じに変わっちゃって、私もすごくいやで絶交しちゃったりして。すばすば言えることが一番大切なんだ、べたべたしないことが一番だって、思ってたんだ。だけど、どうしてもね」

耳までこいつ赤くなっている。いったいなんなんだ。

俺もかなりえらい目にあった。女子たちの戦いも相当なもんだったが、美里はもともとまっすぐすぎるくらいまっすぐな奴だったし、担任とのバトルも半端じゃなかった。なんというか、五年から六年くらいにかけての女子つつうのは、どうしてああも噛み付きたがるんだ？ 霧島なんてまだ可愛いほうだぞ。しかも中途半端に「誰々は誰々のことが好き」とかいうありもしない噂を流しまくる。美里もそうだが俺もかなり被害をこうむった。第一言わせてもらえれば、なんで

俺と美里と一緒に真面目な話していると、いやがらせしに水をかけたりなんなりするんだ？ 話の合う奴なんだから男女関係ねえだろうが、と今なら平気で言えるだろうが。

「けど、今の私なら、そんなことたぶん言えない」

「そんなことってなんだよ」

またもじもじと膝をすり合わせるしぐさをする。

「なんで白山さんが、体育館でトイレに行きたくなかったのにいえなくてそのまましちゃったのかとか、どうして詩子ちゃんがあんなに私に対してべたべたするようになったのか、今ならわかるもの。私、そうしなくなっちゃった気持ち、今になってやっとわかったんだ。正しいことを何でも言えば、いいんだって思っていたけど、そうじゃないんだね。本当のこと、言われて、傷ついたら責任とらなくちゃいけないんだよね。だから、だよ、貴史」

やっぱり美里、哲学している。俺もそんなすごいこと言ったつもりはなかったのにだ。

「さっき貴史が、ゆいちゃんには余計なこと言わないほうがいい、って言ったでしょ。最初、私がやっかんでるからだとか言ってたけど、そういう意味じゃないよね。私、もしゆいちゃんに本当のことを言って、傷つけてしまった時、ちゃんと責任とることができるかどうか、ってことなんだよね」

頭の中を整理しているつもりだった。黙るしかなかった。

「今までの私なら、そんな責任なんて考えないで本当のことずばっと言えたと思うんだ。天羽くんと同じく、もしゆいちゃんが傷ついて、言葉じゃべれなくなったとしても、ゆいちゃんがそれは悪いんだって言い切れたと思うんだ。でも、今は言えない。近江さんみたいに正しいって思うことをばきばき言えない」

俺としてはどう返事したらよかったんだろうか。しばらく残りの菓子パンを食いながら、俺は美里が唇をかみ締めながら一言ずつ絞り出すのを聞いていた。

「じゃあ、あれか、お前、これ以上犠牲者を出したくねえってことか」

「そう。だって、私、もしゆいちゃんみたいに言われたらきっと傷つくと思う。もし立村くんに、私なんていないほうがいいって言われたら、泣いちゃうかもしれない。今だったら私、泣かないって思ってるけど、いざその時になったら、どうなっちゃうかわかんないよ」

「それはねえだろ今んところは」 茶々を入れてみるが、真面目モードに突入した美里には届かない。「でもこのまま何にも言わないでいることが正しいとも、思えないの。もし、小春ちゃんの時に天羽くんが、本当は近江さんのことを好きだったんだってみんなに知らせることができたら、小春ちゃんは傷ついたかもしれないけれども、もっといい方向に向けられたんじゃないかって思うもん。近江さんのやり方も間違っていないと思うけど、あのやり方でゆいちゃんがずたずたに傷つくもも避けたいし」

「ならなあ美里、俺なりにひとつ提案」

俺は美里に手付かずのクッキーを一枚手渡しした。

「それ、全部、立村にぶつけてみるよ」

目を真ん丸くするのは思っても見なかった提案だったからだろうか。

「あいつだって胃が痛いってぐちってたぞ。さっき俺も『女子のことには口だししねえほうが

いい』って言っただけで、お前から話を持っていけばそういうわけにもいかねえだろ。気が気でねえことだけど、男子側としては勘違いされたくねえし、本当は口出ししたくねえよ。けど、美里から女子の情報を出してみても、その上でだ」

「その上で？」

「お前一人の意見だったらな、さっき俺が言った通りやっかみって思われるかもしれねえよ。でも、立村含む男子側の都合と、あとそうだな、霧島の気持ちなんかも考えれば、近江案のような過激なことやらかさねくても、いい方法見つかりそうな気、するんだけどなあ」

ベンチを両手で尻に押し付けるようにし、美里はうつむいた。小さい声で、「見つかる？」とつぶやいた。

「わからねえけど、それだったら霧島を見捨てることにはならねえだろ」

答えを待たずに俺は時計を見た。まだ二時を回っていない。

「美里、とりあえずなあ、さっきの喫茶店入るか？」

ビニール袋に残りの飲み物とクッキーを詰め込んだ。ごみは燃えるごみ、燃えないごみに分けた。「え？ でもあんたいやなんじゃあないの？」

「あんなちかんの出そうなトイレだとお前、したくねえんだろ」

「た、貴史あんた！」

思いっきりけりをいれようとする美里。が、いきなりまたうつむいた。そっと膝をさするようにした。はにかむように、

「貴史、あんたの言う通り。ごめん。すっごく、助かる」

美里がさっきから、行きそびれたトイレのことばかり考えているんだなというのは、足下の動きと落ち着きのない目でだいたい見当がついた。本当は聞かないほうがいいのかもしれないと思うのだが、俺は立村のように気がつかないところでさりげなくレディーファーストをするのが苦手なタイプだ。やたらとナーバスになった美里には、少し考えないとまずいかなとも思う。

てか、どうしてほしいか、言ってもらわないと困る。俺がずうっと立村に言いつづけてきたことだが、今回美里にまで言うことになるとは思わなかった。歩きながら、唇をぴんと張ったままの美里に話し掛けた。

「あのなあ、美里」

いくら幼なじみとはいえ、やはり緊張するものがある。こういう話題、生々しく言うの初めてだからなあ。

「なに？」

「今から聞くこと、スケベネタじゃねえからな」

「何よ、スケベって、またこずえみたいなこと聞くんもり？」

「絶対に怒るなよ、怒鳴るなよ」

「怒らないわよ。あんたのスケベなネタはこずえ経由で全部聞いているもんね」

ほんととかどうかわからんが、ほんと、今後のためだ。聞くしかない。

「最近お前、すっげえ小便近くねえか？ やっぱお前、『生理中』だからなのか？」

「貴史！」

「だあかあ、スケベ心からじゃねえって言ってるだろうが！」

顔がまた赤らんでくる。俺もそうだが立ち止まった美里も凍りついてた。またもじもじと指を絡めて立ち止まる。

切り出し方、あやまったか？ でも、明日の自由行動も考えたら、女子の体調をある程度知っておかないとまずい。保健体育では基本のお話ばかりで、実際女子をどう扱えばいいのか...いや、決してやらしいことをする方法とかじゃねえよ。ゴムの使い方とかでもねえし.....特に美里は、いわゆるその、「初めて」らしい。古川にあそこまで当たり散らすってことは、そうとうしんどいだろう。だったらどうすりゃいいのか、本人にインタビューするしかない。そこまで保健体育の教科書にも、エロ本にも書いていねえもん。俺たちが今すぐに知りたいのは、Cをする時のテクニックじゃねえ。どういう風に女子が自分らを扱ってほしいか、だけだ。

彼氏たる立村にそこまでの質問度胸を求められないというのは俺もよくわかっているの、こっちが切り出すっきゃない。

「貴史、あんた、本当にスケベな意味で聞いたんじゃないよね？」

「俺男なんだからそういうことわからねえし」

美里はぐっとうつむきながら、しばらく考えている様子だった。

「お前の例の話は、水口経由でそりゃもう派手に伝わってる。やっぱり俺も男だからそういうこと関心ねえってことねえよ。けどな、美里、お前が一番困ってることったらなんだろうなってこと、本人に聞かねえとわからねえことだろ？」

答えない。なんだかおかつぱの髪が揺れている。唇を噛んでいる。

「とりあえずは立村が、お前にそういうネタでからかわないようにとおふれを出した。けどあいつも、仮にも惚れてる女子に『生理で一番困るのはなんだ？』なんて聞けないぞ」

まだ美里は黙っていた。

「だからな、もしそういう時にやたらと小便に行きたくなるってのがわかってれば、さっきみたいな怪しい公衆便所しかねえところには行かないようにするしな。腹が痛くてあまり動けないってんだったら、それなりに行動予定も変えるしな。しつこいようだけど、男にはそんなの全然わからねえんだよ。美里」

ゆっくりと顔を上げ、美里はこっくりと頷いた。相変わらず顔はトマトしていたが、

「ありがと、貴史」

それだけつぶやき、またはにかむようにうつむいた。

「三十分おきくらいにトイレのある建物の中に入ることができたら助かるんだ。迷惑かけて、ごめん」

俺だってやっぱし男だし、そういうスケベな本とか写真とかビデオとか、関心ないなんて死

んだって言えない。正直、美里のあれのことにしたって、好奇心がむらむらしなかったとは言えない。嘘になる。

けど、そういう対象と美里とはやっぱり違う。

やはり俺の一番近い親友であって、そそり立つ対象ではない。

「女子って面倒だよなあ。無理すんなよ、美里」

ふと、こじられた喫茶店の壁がわに「不思議の国のアリス」の写真ポスターが飾られていた。金髪のめんこい白人の女の子だ。

目を留めると同時にちょっとびびった。

——美里には言えねえな。

男子連中一部の間で流れている霧島に関するある噂。今の俺は決して口に出せないだろう。

どうでもいいんだが立村相手に三時間近くツーショットってのはどんなもんなんだろう。提案した私も私なんだけど、相手も当然かなりご不満のご様子。そりゃそうよね。自分の彼女とほんとはふたりっきりになりたくてなんなかったんだろうね。ストレスはたまってるし、たぶん集団生活だと男子たるもの一発抜くこともそうそうできなかつただろうし。かわいそうだと思うんだけど、やっぱり美里のためだ。けど美里の彼氏よりもなぜ羽飛に預けるのだ私？と思ってしまった私も私なんだけどね。

「観光名所には行く気さらさらないから、その辺でお茶しよ？」

「古川さんとだと話のネタが尽きるかもな」

はは？ とんでもない。もしかしたら羽飛というよりも盛り上がるかもよ。エロ話にすぐ反応して真っ赤になったりするところが、結構弟と同じでおもしろい。最近あまりからかっていなかったから、これからゆっくりオンステージ、突入しましょうか。

「ま、あんたも明日に勝負をかけるってことで。この辺はモーテルないからねえ」

「モーテルって、いったい何考えてるんだよ！」

「説明はあとあと、さ、そこのすっごく雰囲気いい喫茶店に入ろうよ」

おごらせるかどうかは、食べたものの金額で判断ね。

さっきハンバーガーを食べたばかりだし、それほどお腹もすいていない。私はそれでもメロンパフェ、立村はサイダーを注文した。見た目はずいぶん童話に出てくるお菓子の家っぽい可愛い雰囲気なんだけれども、なんか奥に行けば行くほど、暗くなる。しかもわざわざついたてで区切っているところ。前の方に誰かが来てわからないぞきって感じだった。

入り口の席には「不思議の国のアリス」風の衣装を来た外人の女の子ポスターが飾られている。どうしようもなくゆいちゃんを思い出してしまうのは私だけ？

「俺も霧島さん思い出した」

水を向けると大きく頷いた。と同時に勢い良くサイダーをストローですすっている。かなり咽が渴いたんだねこいつ。咽の渴きは性欲に直結するとあるエロ本に書いてあった。彼も思春期なんだねえとひとり納得する。

「ところでなんだけどさ、昨日の評議委員会で何かあったの？　なんか美里ずっと落ち込んでたよ」

パフェが運ばれてくるまでの間に一つ尋ねておきたかった。

「昨日か、ああ、少しな。でも清坂氏がどうのこうのってわけじゃないよ」

「美里、哲学の人、してたよ。いろいろ悩んでいるみたいなんだよね」

「そうなんだ」

うっかり変なこと口走るとまた、私につっこまれるとでも思っているんだろうか。残念ながら立村の想像は当たっているかもしれない。美里が旅行とっぴじめに生理になっちゃって大騒ぎしたはいけども、それに巻き込まれた私、立村も相当大変だったはず。立村も「俺の女をばかに

したらただじゃあおかねえ！」発言を男子どもに放ったおかげで、今のところ美里はそれほどいじめられずにすんでいる。若干一名、「せいりー、せいりだっぺ」となんとかのつ覚え見たく叫んでいる学年トップの少年がいるけれどもそれはおいといて。

「普段の美里だったらねえ、たいしたことじゃあないんだろうけど、今さあ、うちのクラスの女子も少しだけ、美里に反逆気味なんだよね」

「反逆？」

声がいらだった風に聞こえた。また唇の端でストローをくわえている立村。

自分の彼女のことだってのに、まだ気付いていないみたいだ。

美里自身も自覚はないみたいだし切り出すのも迷ったけれども、

「ほら、美里、今回のことで弱み思いっきりみせちゃったでしょうが。いつもの美里なら、あっさりぶちかまして終りなんだけど、ねえ。たかがあれくらいでってことで、殿池お嬢のお部屋に泊まっちゃったりなんなりしちゃったでしょ。ほんっと、あれが引き金よ。私もできるだけ目配り気配りはするつもりなんだけど、限界がねえ、やっぱ、あんのよ」

昨日の夜、D組女子同士でおしゃべりしていた。美里がいなかったんで当然、会話は美里に対する不満の嵐ときた。私も、ちょっと疲れていたこともあって、話だけ聞いてすぐ寝ちゃった。美里に振り回されたからだよきっと。でも私が目を閉じている間、美里の悪口はとうとうエスカレートしていき、ありもしない噂に膨れ上がってしまっている。誤解をされるようなことを、美里はしているからしかたないんだけどね。

「女子同士だし、あまり口出ししない方がいいんだろうな」

「あーら、あんたの彼女なのに、気になんないわけ？」

「だって古川さんがおしゃべりしたら、清坂氏、怒るだろ？ きっと秘密ばらされたって」

ずいぶん腰の引けた彼氏だ。なんだかむかつく。ちょうどいいタイミングでメロンがどどかく突き刺さったパフェの登場だ。まずはメロンそのものをつまんでむしゃむしゃやる。

「古川さん、手、汚くなるぞそれだと」

「いいのいいの。ほら、あんたもストローですくって少し食べる？」

立村はしばらく黙っていたが、思い切った風にストローをグラスから抜き出し、ほんの少しだけアイス部分をすくいなめた。

「もっと食いなよ」

「遠慮なく」

こういうのって、ふつう甘い恋人同士のすることだよな。

姉弟の関係でなら、まあするか。まあいっか。美里には内緒。

しばらくパフェをつつきあいながらも私なりに考えてはいた。

——話した方がいいのかなあ。

立村も時折心配そうに見守っていたけれども、「初潮」についてはだいぶおちついたみたいだった。お腹の痛みはまだ残っているみたいだけれども、うまくコントロールすることを覚えたみたいだった。ナプキンの使い方もだいぶ慣れて、

「今朝は、汚さないですんだ！」

布団が無事白いままだったのが嬉しかったらしくて、さっきふたりの時に報告してきた。だから。そっちの方は心配してない。

ただ派生したいくつかの問題が絡んでいるのも確か。

一年前から絡んでいる問題っていった方がいいのだろうか。

——美里は知らないうちに敵作ってるもんねえ。

これはチャンス、とばかりに悪口言われてもしかたないのはしかたないと思う。

——小学校の修学旅行、おねしょする子はひとつの部屋に集められたもんね。みんな、無言ながらも了解していたしね。それ考えると、美里の行動は確かにと思われなくもないんだよなあ。だからはっきりと「私、あれなの」って言っとけばよかったのにねえ。

そう、昨日の夜、はっきりと噂が確定しちゃったわけだ。

——清坂さん、まだおねしょの癖が直ってなくて、一日目、殿池先生の部屋に泊ったんだって。もしばれたらどうしようってパニックになって大泣きしたんだって。中学にもなってまだ直ってないんだねえ。清坂さん。

いくら殿池先生が否定してくれても無駄。女子同士の噂は七十五日なんて大嘘。永遠に続いちゃうことさえあるって、みんな言っている。

「美里はねえ、自分がふだんてきぱきできるから、調子よくできない子には冷たく聞こえるようなこと、結構言いがちなんだよ。あんたに対するみたいにね」

「そんなことあまりないよ」

うそつけ、二年の秋にさんざん美里から罵倒されていたのは、あんたじゃないのさ。

「だから、自然と敵が増えているのよね。もちろん、口にはみな出さないけれど、チャンスあらばいつでも殴れるようになって気持ちみたいよ」

「怖いな女子は」

今更わかってどうするあんた。

立村はしばらく考え込んでいたけど、すっかり気の抜けたサイダーをすすりながら、「俺もあまりよくわからないんだけど、女子のする嫌がらせってどんな感じなんだ？」尋ねてきた。

「手はめったに出さないね」

「やはり口か」

「そ。口も陰口悪口のオンパレード。あと根も葉もない噂よね」

「火のないところに煙は立たないっていうあれか」

その通りだ。大きく頷いた。

「けど、クラスの中は平和に見えるんだけどな。俺もそれなりに様子うかがっているけど」

「今までの美里はパーフェクトだったからね。自分の言ったことやったこと、ばりばりとがんばってこなしていたもんね。でもさ、この一回でパー」「この一回って、たった一回だろ？」

「女子にとって、一回の失敗は一発でアウト。ゼロの掛け算みたいなものよ。どんなに百積み上

げていっても、ゼロを掛け算したらゼロになるでしょ。あ、あんた数学わからないか」

「悪かったな」

でも、まあ理解はしたみたいだった。

「敗者復活のチャンスもないのか」

「あたりまえでしょが。あったとしても、そのゼロが土台となってまた積み上げられていくから、過去の失敗は許されないままよ。美里もねえ、もう少し冷静になってくれればねえ」

ただ、美里が今まで正義という名でしてきたことの数々を考えると、当然の報いのような気もする。決して悪意があつてしたことじゃないにしても、美里によって恥をかかせられた子もたくさんいるのだし、傷ついた子もいる。そしてもっといわせてもらえれば、恥かかせられた恨みというのは、決して女子、忘れない。理由の反省なんて決してしない。少しずつ、反撃のチャンスを待って、いざつけこめると思った段階で爆発させる。うまくいえないんだけど、気の弱かった女子たちが、いきなり掌返したように相手を罵ったり開き直ったりする、そんな感じかな。

「俺は評議の中でのことしか見当つかないんだけどさ、古川さん」

立村はほとんどからになったサイダーのグラスをストローでかき回した。氷がまだ堅く残っている。

「うちのクラスで、一番清坂氏が敵を作ったであろう事件ってなんだろうな」

「あんたと付き合ったことじゃないから安心しな」

思いっきり機嫌悪げに立村はストローを噛む。

——やっぱり、宿泊研修の時の、あれかなあ。あーあ、すっごく恥ずかしいぞあれって！

「いろいろあるんだけど、まあ一番わかりやすい事件がいいかな。けど立村、あんた美里をあとで罵るんじゃないよ。美里は基本として、悪くないんだからね。それとここで話したことは絶対内緒だよ！ 美里はあんたにこのこと知られたくないって思っているんだから」

私としても、登場人物としてはかなり大きな役割を担ってしまった事件。

乙女心にも忘れたい過去の場面がいくつか溢れ帰るあの事件。

本当ならば、口にも出したくないけれども、やっぱり美里の二面性をちらっと覗いたものとしてはこれが一番って気がした。男子たちの間で事情そのものは情報として流れていただろうけれども、実際どういう状況だったかは当時バスに乗り込んでいた女子しか知らないはずだ。

名前はもちろん仮名で行きましょう。

「もちろん言わないけどさ、俺がすでに知っていることだったらごめん」

「絶対知らないよ。羽飛がしゃべっていなければね」

私はパフェを半分残したまま、覚悟を決めて話し始めた。

目の前の立村は、静かに頷きながら、時折驚きながら、私の眼を見つめていた。

「ほら、あんたが熱出してぶったおれて、ホテルに残ったことあったでしょ」

「ああ、宿泊研修か」

二年の八月末、宿泊研修のため黄葉町に泊りにいった私たち当時二年D組一同。

車酔いと発熱でひっくりがえった立村と、腹下しでバス長時間乗るのが堪えられないと訴えた……明らかにあれは仮病……南雲、ふたりを残し、黄葉町見学へと出かけたはい。その時バスを使って移動していたんだけど、結構融通の利くバス会社だったらしく、

「じゃあな、これから先生のお勧めコースがあるんでそっちいくぞ！」

とわめいた担任・菱本先生の命により、二時間ほどドライブが長引いた。ふつうないよね。決まったコース以外移動しないよね。でもなぜかそれがOKになっちゃったのだ。その時は大喜びして拍手した私たちだったんだけど、その後「女の子の口に出せない悪夢」に突入しちゃったなんてさ。

「なんだよ、口に出せない悪夢って」

「あんた想像つかないの？ 生理が女子の凶暴になる日だって認識のあんたがさ」

「ごめん、ほんとわからない」

またはにかみながらも首を振る立村。ほんと、見当がつかないらしい。あんたほんとに彼女持ちかね、と突っ込みたいのを我慢する。

「あんた、美里とデートした時にさ、休憩とか気を遣う方？」

「なんとなく清坂氏の方が休みたがるから、適当に座ったりする。公園とか、デパートの休憩所とか」

「やっぱり美里の方だよ、言い出すのは」

「ああ、まあな」

「どうしてそういうこと、女子から言うかわかる？」

いらいらしてくるけど、問い返しする。

「疲れたからだろう？ やはりさ」

「もちろんそれもあるけど、おおむね女子の本音はね。あんた覚えときなさいよ」

私は力を込めて、声低くつぶやいた。

「自然との戦い真っ最中なのよ、ほら英語であるよね、花を摘みに行かせて下さいってさ」

さすが英語のエキスパート立村、すぐに気が付いたらしい。

「トイレか……」

「そうよ。男子は今ひとつぴんとこないみたいだけどさ。女子の方からはなかなか言えないものなのよ」

「こっちは言ってもらえたほうが助かるけど、やっぱり恥ずかしいのかな」

納得した表情ながらも、ぽつとつぶやく立村。やっぱりわかってないお子様だ。

「もっというならね、待たなして状態ね、大抵の場合は。言う前の一時間近くはがまんしていると考えた方がいいよ」

「こっちはそんなに気にしないのにな」

頷く立村は、その後はとした表情でもって、

「まさか、『口に出せない悪夢』って」

本当にこいつ、噂ひとつ聞いてなかったみたいだ。

「あんた本当に知らなかったの？ あれだけの騒ぎをさ。羽飛とか、他のクラスの奴とかから」
「いや、トイレに行きたがってばたばたしたって言うのは聞いたような記憶あるけど、でもすぐどっか休憩所で止めただろうなって思ったからそれほどつまらなかった」

改めて思う。親友にも話さないでくれた羽飛、あんた、紳士だよ。

目の前の立村無視して、羽飛に惚れ直しちゃったよ。

「この辺からは美里と私以外仮名でいくからね」

きちんと断った後、話し始めることにした。

「バスの中でいきなり、菱本先生がバスツアー延長するなんて言い出したのはいいのよ。それでみんなは盛り上がっていたんだけど、やっぱり自然の要求というのは人間誰にもあるものでね。それにたまたま私を含めた女子たちは、結構水分とってたりもしたわけ。パフェとかジュースとか、あと水とか」

身動きせず立村は私に頷いた。

「男子にはわかんないかもしれないけど、女子って、いったんトイレに行きたくなると、限界ってあつという間なんだよね。今も言ったでしょが。どこかで休みたいなって言われたら、だいたい八十パーセントくらいは膀胱に溜まってると考えた方がいいよ。あとの二十パーセントなんだけど、これがね、もしいつでもトイレいける環境だったらまだ余裕。でもさ、バスの中よ。バスの中にふつうトイレなんてないじゃん」

「俺、男子連中には緊急トイレ用にペットボトル持たせたけど」

「女子にそんなはしたないこと、させられるかっての。あんた、ほんと童貞よね。女子の体の仕組み全然知らないでしょうが。いつか大人になったら覚えようね」

また真っ赤になる立村が面白い。話している内容は私の恥みたいなものだから、語るのに抵抗がないわけではない。少しほっとした。

「がまんがだんだん限界に達してきた女子たちは、四人くらいだったかな。そのうちの一人がね、はっきり言っちゃうともう時間の問題って感じになっちゃったわけ」

「限界ってったって、でもさ」

遮る。そこからが本番なんだから。

「渋滞にもつかまっちゃったし、トイレはないし、もう四面楚歌って奴？ その子はずっと腰ふりふりのスネイクダンス状態だし、百パーセント、間に合わないねってみんなで言ってたんだ」

「なんだよそのスネイクダンスって」

「見ればわかるわ。とにかくひとりがぱにくると、もうひとり、ふたりと連鎖反応起こすのよ。女子って特にね。あんた車酔いで酷い匂いかいだら一発でアウトでしょ」

「わかるなそれ」

なんでそうも納得するのか、立村。

「そこで、しっかりもの評議委員の清坂美里さん登場ってわけ。なんとかしてあげなくちゃって気持ちがあつたんじゃないの？ すぐに立ち上がって、男子たちを前、女子を後ろの席に固めたわけよ。ほら、今回のバス席と一緒に」

「それか、そうか」

初めて理解したんだろうな。立村は納得しつつ細かく頷いた。

「男子たちには羽飛が指揮して、鈴蘭優の歌を合唱させ、女子たちには万が一の時に備えて臨時トイレをこしらえたりしたわけ。ほら、後ろの席でもし洪水警報ぴぴぴって発令されても、出所がどこからなんて男子には気付かれなくてすむじゃない？ なるほどなって思ったね」

「知りたがる男子なんているか？ ああ、いるかもな」

ひとりごちる立村。やっぱり男子たちの本音は「立っちゃう」んだなあ。

「席替えして十分後くらいかなあ。よく持ったなって誉めてあげたいくらいなんだけど、第一号の勇気ある女子が口火ならぬ「尻火」を切って、あとは連鎖反応でぞくぞくと。表向きはなんとか誰一人席をぬらさないですんだってわけよ。粗相なし」

「粗相なし……？ 『尻火』を切った……？」

またきょとんとした目を向ける。ほんとわからんのかこの鈍感男。

「その第一号の勇気ある女子ってのが私。座席の陰で美里のかばんを貸してもらって、その中に勢い良くさせていただきました！ 残念でしょ、立村、せっかくのエッチなショーが観られず今後のおかずにできなくて！」

「古川さん、冗談じゃないんだよな。嘘だっていうなら今のうちだぞ」

せっかくまぜっかえしてお笑いに紛らわせようとしたのに、立村の奴本気で青ざめている。

「本当の話に決まってるでしょうが。ただ鈴蘭優の歌を合唱してくれた男子たちのおかげで音声は一切発生しなかったわよ。鈴蘭優に感謝ね」

——こずえ、この中にして！ でないとぜったいもらしちゃうよ！

——で、できるわけないでしょうが！ 美里あんたのバックだよそれ！

——いいの！ 私、あんたまで巻き込みたくないの！

美里のバックは真っ赤な合皮のトートで可愛かった代物。いくら私が切羽つまっていたといっても、そう簡単に思い切りついたわけじゃない。けど予断を許さない状態だってことは当の本人が一番よくわかっていた。よりによってこの日、私はキュロットも穿いていた。絶対絶命。

——美里、ごめん、あとで絶対弁償するから。

さすがに後ろの女子たちも、私がいきなり尻丸出しにして席の蔭にしゃがみこんだ時はぎょっとしたみたいだった。けど、みな多かれ少なかれおんなじ追い詰められ方していたはずだった。

——こずえ、あのね。他の人も、こずえの真似したよ。

——私の真似って、おいおいってまさか！

美里が通路に立ってついたらたてがわりになり、すべてが終わった私ににっこりとささやいた。

——彰子ちゃんがね、こずえみてて、ぽんって手を打って、すぐに自分のビニールバックを他の子たちに「使って！」って差し出してたの。ほら、あんなにいやがってた杉浦さんまで。

——確か、南雲からのプレゼントだと言っていたっけ？

——惜しげもなく差し出せる彰子ちゃんってやっぱりすごいよね。

席に座りなおしてちらっと後ろを覗き込むと杉浦加奈子ちゃんが中腰の姿勢から立ち上がると

ころだった。顔を覆っていた。他の子ふたりも、さっきまでの我慢ポーズはとっていなかったけれどもショックだったみたいで、すすり泣いていた。

——大丈夫だったのに、ね。

突き放した言い方の美里が、どこことなく気にかかった。

——じゃあ、私先に立村くんに話してくるね。

ホテル到着後、かなりの男女は一刻も早くトイレに飛び込みたい顔をしていた。しかし美里は妙に冷静だった。周りの子たちとほとんど変わらないくらいに飲み物飲んでいたはずなのに、ずるいな、と正直思わずにはいられなかった。でも体質なんだからしょうがない。私は先に自分の部屋へ戻り、美里のかばんを丹念に洗っていた。

——清坂さん、平気なんだ。あんな長い時間バスの中でも。

——なんだか、ずるいよね。

そんなささやきを耳にしていたかどうか私もわからないけど、美里はバスの中でも、玄関でも、全くトイレに行きたがるそぶりを見せなかった。他の女子たちも多かれ少なかれ、かなりきつい状態だった子が多かったし、そんな中での美里の態度はすごく目立った。女子の場合だと、十人中九人が大しくじりした時、最後のひとりもしくじる真似をしてほしいと願うものだった。美里だけが落ち着いていることに、どこことなくジェラシーが感じられたのも、否定できない。

「それはそれ、あとで一人で想像して抜いてちょうだいよ」

「古川さん、いったい何考えてるんだよ！」

立村の反論を無視して続けた。

「クライマックスを迎える寸前にね、美里がその時、ちょっとした演説をしたの。『私も五年の時に教室でしたことがあるし、気持ちはわかる。男子のみんなにもどうか後ろの女子たちの行動を知らない振りしてやってください』って。心が一つになるって感じだったわね。男子たちはすぐにまとまったけど、女子がね。美里の次のお言葉にちょっとひっかっちゃったのよ」

「そんな余裕あるのかよ」

「『今、このバスの中で、絶対に持たない、間に合わないって人がいるんです』ってね。『絶対、このバスの中で、じゃあとしちゃう人がいるんです』ってさ。いや、この言葉自体は間違っていないよ。ほんと、じゃあとしちゃったからね。けど、その言葉によってさ、一部の限界すれすれ女子たちはパニックになっちゃったわよ」

「な、なんでだよ？」

「男子ってその辺わからないってねえばかよ。女子の場合、励まされているとなんとかがんばれるもんなのよ。もうちょっと、もう少しで休憩よ、がんばれ、がんばれって。たぶん隣にいた子たちもみな、パニックガールズを励ましていたはずよ。でもね、美里の言葉は一発でその希望を打ち砕いてしまったわけ。なんせ『絶対に持たない、間に合わない、絶対このバスの中で、じゃあとしちゃう人がいる』だもんね。悪いけど私、『じゃあっと』っていうリアルなお言葉のせいで、頭の中恥さらし状態の自分が浮かんでしまって、限界突破しちゃったもんね」

そうなのだ。「じゃあっと」。

美里に悪意はない、と私は立村に話したけれども、そこんところは彼氏ゆえの嘘。

「その時は美里によってみな危機一髪救われたし、男子たちも紳士だったし、それはそれでよかっためでたしめでたし。旅行中もみな、そのことについては全く触れなかったわよね。あんたの最大の脱出劇のおかげで、ほんとに些細な出来事の一つとしてまとまっちゃったわよ」

脱出劇、という言葉に立村はまた顔を赤らめうつむいた。

「でもね、美里の言葉って、結構尾を引いてしまったみたいなのよね。確かにみんなを助けてあげたくてああいうこと言ったんだと、頭ではわかってるのよ。でもね、なんというのかな、美里の言葉によってもう少しがまんできたはずのものが、がまんできなくなっ、とうとうはしたなくもってことに」

「はしたなくないだろ？ 結局は大丈夫だったんだし」

「あんたさあ、いくらなんでもバスの中で、男子たちがいるところで、しかも密室で、他の子に見られながらするって正気でできる？」

立村はやっぱり素直に黙った。

「やっぱり、非常事態よ。追い詰められていたからこそできたことよねえ。もし今この場でかばんの中に入って、できないよ普通はね」

「そんなの見たくもないしな」

どうやらこいつ、そちらの趣味はないらしい。

「女子たちとしては、やっぱり知られたくないわけよ。トイレに行きたいってこともそうだし、がまんでできないほどばたばたしているなんてさ。美里は善意でやったことだけど、結果としては男子にみな女子のトイレ行きたい願望がばれてしまったわけでしょ。理屈ではしかたないってわかってるよ。けど気持ちでは受け入れられないのよ。実際、『じゃあっと』やっちゃったわけだもの。いくら正しいことを美里が言ったとはいえ、どうしてもね、感謝よりも、逆恨みってことになっちゃうわけ」

「逆恨みって？ いまだに清坂氏、恨まれているのか？」

ようやく気付いたか。この馬鹿弟が。

「そうよ。自分たちのしちゃったことを男子たちに暴露したってことがまずひとつ、美里は結局他の子たちよりも自分は上なのによって優越感を感じさせちゃったわけ。あんなみっともないところ、私はあなたたちと違って男子になんか、見せないわってというようなものね。それと男子たちに貸しを作らせてしまったよね。鈴蘭優の歌で音消ししてくれたわけだもん。感謝しなくちゃいけないのはわかっているけど、なんだか男子たちに顔あわせらんないっていうかな。あと、決して美里こういう時にああいうパニックにはならないだろうな、という嫉妬の炎ね。あの時の美里すっごく大人だったもん。他の子たちが赤ちゃん戻りしたみたいにベそかいているのにね、堂々としてたもんね」「大体わかってきた」

「あれ以来一部の女子たちは、極端に言っちゃえば、教室の中で『じゃあっと』やってくれないもんか、とかいろいろ思っていたわけよね。男子たちの目の前で恥かかせたくてならないのよ。」

自分たちと同じようにね」

「女子って怖いな。男子はあまりそういうこと考えないよ」

「あんたがぼおっとしているだけよ。何はともあれ美里はがんばってきました。恥も晒さないようにして、きちんと評議委員のお仕事もしてきました。彼氏のボケぶりは頭が痛いけれど、とりあえずは別れてません。えらいでしょってことね。ところが今回、たかがあの程度のことでパニック起こすさまに、他の女子たちは『ざまーみろ』って気持ちで一杯なのよ。とにかくこのチャンスに美里を叩きのめして、男子たちからの評価をがたがたに下げさせてやりたいってね。そのひとつが」

—呼吸置く。

「『清坂さんが一日目、なぜ殿池先生の部屋に泊ったの？ おねしょが直っていないから真夜中、こっそり処理してもらうため』というデマよ」

「ああ、それよくあるデマだな。それ、本当のところは違うだろ？」

立村はあっさりとした。

「確かさ、難病指定されている病気の人が出て、その人の場合、普通の食事が取れなくて、特別なものを食べなくちゃいけないって聞いたことがあるんだ。病院指定の食事というよりも、点滴で食わせるようなものをさ。それかもしれないな。他の人と一緒にの部屋に寝泊りすると、どうしても間食の欲望に負けてしまう。だから、先生の見張りのもと、食事を管理するって人のことを聞いたことがあるんだ。その人たちは最初から先生と一緒にの部屋に泊るという話、聞いているんだ。確か女子で、一日目は都築先生の部屋だったって聞いたよ」

—なんだ、都築先生、デートじゃなかったんだ。

美里が泣き喚いていた時、相手にしてくれなかった都築先生のことを思い出す。

そうか。生理はそれこそ「生理現象」だもんね。正常なしるしだもんね。

保健の先生としたら、それよりも「病気」の人を最優先するよね。

「そうなんだあ。本当のことはそういう単純な理由なんだよね。大抵の場合、そうだよええ」

私はため息をついて、やはり続けた。

「けど、女子にはそんな関係ないんだよ」

たぶんこのままだと、修学旅行後美里は「一日目におねしょした人」という烙印を押されるだろう。もちろん、生理が終わったら精神的にも落ち着くだろうし、それほど心配はしていないけれども、いったんそういう下の噂を流されたら、美里を良く知らない男子たちからはどういう目を向けられるか、だいたい想像がつく。私もいろいろとかばうつもりではいるけれども、全てを網羅できるわけもないし、第一、自業自得だと思っているところもある。単純に「そんなわけないじゃない！」なんて言えないのだ。

一応、立村は美里の彼氏ということになっている。

私だけでは面倒見切れないところを立村に背負ってもらおうかな、という計算もなくはない。そのためには、いくつか美里のやらかした事件なども知ってもらう必要があるように思った。あのバスパニック事件も、本当は私もしかべっていないところがいくつか隠れている。やはり

、露骨にそんなこと言えないじゃないの。アダルトビデオとかやばい雑誌とか読んでネタにするんだったらいいけど、仮にも自分の彼女が関わっている事件だ。立村も正気でいられるとは思えない。うちの弟も、最近どうも色気づいてきたみたいで、こっそりスケベな写真を手に入れている。美人じゃない、ブスばっかだけど。あれ一枚で懸命に抜いているんだねえとからかったら、一切口利いてもらえなくなった。淋しいね。

「だいたいわかった。今の話は一応頭に入れておく」

「そうだよ、もしまた美里に変な噂が流れたりしたら、あんたもかばってやるんだよ。恥ずかしがったりしないでさ」

「うん、そうだよな。事情がわかっていれば簡単だよな」

すっかり解けてしまった氷とパフェの残りをつつきながら、もうひとつ私は記憶を呼び戻した。

立村には話していない美里の、もうひとつの一面を。

——美里、あんたさあ、ほんとは。

立村の部屋から戻ってきた美里はぶんむくれながらそそくさとユニットバスに入った。なんだか私はどうしてもなんか言ってやりたくなった。。

——加奈子ちゃんに、させたかったんじゃないの？

ドアの向こうに呼びかけた。

——美里さ「絶対じゃあっとしちゃう人がいる」とか言ってたよね。あれでみんな、がまんが出来なくなったんだよ。もしピンチが加奈子ちゃんひとりだったら、あんた、あのバック、貸してた？ 彰子ちゃんみたいに、すぐに他の子に差し出した？

小さい声で「ごめん」と聞こえた。

——こずえ、ごめんね。ごめんね、ごめんね。私、あんたがしたいなんて、思ってなくて、だから。巻き込んで、ごめんね。

再び激しく嗚咽する声が響いた。直感は当たっていた。

スネイクダンス状態の女子というのは、一年の時に立村がらみで絶交状態となった、杉浦加奈子ちゃんだった。私はいまだに彼女と付き合いがあるし、今の彼氏とCまで行ったらしいと聞いたりしているし、まんざら嫌いではない。むしろ、美里の方が大人気ないところもあったんじゃないかって気がした。

詳しい理由はよくわからないけれども、美里は心のどっかで、加奈子ちゃんに一発恥をかかせてやりたくてならなかったんじゃないだろうか。あの「じゃあっと」という言い方に何となく感じるものがあつた。言葉の効果は絶大だった。確実に、美里の無意識の悪意は伝わっていたはずだった。言葉でもって、追い詰めて、女子にとっては最悪とも言える恥をかかせたい。加奈子ちゃん以外のパニックガールズも私以外は、あまり好意をもっていなかったらしい子だったし、必死に守りたいという感情からは遠かったのかもしれない。

なんでそういうこまやかな感情とは関係ない私が感付くことできたのかは謎だ。

立村だったら別かもしれないけれども。でも、私が気付いたということは、もしかしたら他の女子たちも美里のそういう一面を見てむかついている子がいるのかもしれない。自業自得とは、そういうこと。美里も百パーセント罪がないというわけではないのだ。

だから、美里にはある程度、他の子たちからの怒りややっかみ嫉妬を受け入れる必要があるんじゃないか？と私は思う。あまり積極的にかばいたてするのは、その時「じゃあっと」で追い詰められた女子たちの気持ちを逆なでするんじゃないかと思ったりもする。表向きは「クラスの女子たちを守りたい」という意識でしたことだから決してばれることはないだろうけれども。

立村にもしつこいくらい言ったことだけど。

——女子には、自分がどう感じたか、それが大問題なのよ。

新しい客が入ってきたらしい。男女みたいだ。そっとついたての陰から顔をのぞかせてみると、うちの学校の制服で二人組が、さっきの「不思議の国のアリス」のポスター席についた。顔は見えなかった。

「誰だろね、うちの学校の誰かがいるよ」

「まずいなあ。声を出さないようにするか」

「大丈夫っしょ」

私は今度、アイステイーを注文することにした。まだまだ時間はあるんだから。

なんと羽飛と清坂氏コンビが同じ喫茶店に入って、僕たちと同じように三時間近くしゃべりっぱなしだったとは思わず、かなり内密な話をしまくった。聞かれてなければいいが。

「大丈夫じゃないの。席だって離れてるし」

「バスのことはやっぱり聞かれたらまずい内容だしな」

それ以外の話題はたいしたことじゃない。ばれても困らない。一言で言うと、古川さんの下ネタトークを僕が一方的に聞かされたにとどまる。いつものことだし、しゃべるのは向こうだから楽でいい。そういう点からいくと、僕としては古川さんとコンビを組ませてもらって楽だったといえるのかもしれない。

そろそろハンバーガー屋へ移動しようか、と立ち上がり、結局自分の飲んだり食べたりした分だけ割り勘にした後、例の「不思議の国のアリス」ポスター前を通りがかったところ、

「あっ！」

ふたり絶句しているじゃないか。僕から見ると、ふたりともかなり慌てている様子だった。

「あんたら、私とか立村とか、ネタにしてたでしょうが」

「そんなことないよ！」

清坂氏が必死に弁明する様みると、想像どおりと思わなくもない。

「ま、その辺はな、美里に後から教えてもらえよ、立村」

「羽飛も、俺のことまた変なこと吹き込んだんじゃないのか」

「おたがいさまだろが、さ、せっかくだから四人で座ってようぜ」

いつものことだがやっぱりごまかされたような気がする。ただ、同じ喫茶店にこれ以上居座る根性僕にはない。無理やり二人を立ち上がらせて、精算を済ませた。それにしてもこの二人、パフェ、マフィン、その他いろいろずいぶん食べまくったもんだ。残っている皿の枚数に唖然とした。場所替えして例のハンバーガー屋でしゃべった内容は当り障りのある内容ではない。いつも学校でネタにしていることあり、評議委員会のことあり、いろいろだ。ただ僕もなんだか疲れ気味だったこともあって、途中で少し居眠りしてしまった。三人とも元気な人たちである。

——バスの中の大事件、か。よくぞ、情報が流れなかったよな。

——けど女子はやっぱり複雑で怖いよな。

僕がもし、同じバスの中にいてその状況を観察していたとしたら、清坂氏以上の行動を取ることができただろうか。いくら僕がぼんやりだからといって、女子たちの羞恥心を想像できないほど無神経ではないつもりだ。反対の立場だったらどうするんだ、の一言だ。

——なるほどな。バスの前方に男子を固めて、後ろの座席に女子か。

——身動き取りやすいし、万が一の時もばれないですむだろうしな。

しかも、男子連中が歌を……鈴蘭優のシングルってのがご愛嬌だが……歌って状況がリアルに流れてくるのを押えるようにした演出力。青大附中評議委員会が演劇をやたらとやりたがる伝統は、もしかしたらこういう芝居じみた問題解決策として役に立つのかもしれないと思う。

つくづく、清坂氏はすごい。

だが古川さんの言う「言葉で他の女子を追い詰めた」というところには、首をひねるところもある。僕だって女子の気持ちがわかるわけではない。性を別にして考えると、言葉ひとことによって傷つけられることはあるし、相手の善意が……例・三年D組の担任など……相手を強く追い詰めるってのは経験済みだ。清坂氏としては、精一杯励ましたつもりなのだろうけれども、古川さんの言う通り、「そんなのは関係ない」のだろう。

——プライドを傷つけられたってことだよな。まあな。できれば闇で片付けてほしいよなとどこか。

仮に、僕が清坂氏だったとして考えてみる。女子評議としての想像だ。

女子四人が尿意の限界を訴えていて、休憩所も間に合わない。となるとたぶん僕も清坂氏と同じく、その女子たち四人をこっそりと後ろの座席に、なんらかの理由をつけて移動させるだろう。

はっきりと「トイレに行きたい人」と全員に尋ねるのではなくて、他の女子たちからの情報なども踏まえて、「車に酔っているようすなんでバケツといっしょに移動してください」みたいなことを言うだろう。問題は僕がそういうことを言える状態かどうか、車酔いで死んでないかどうかだが、その辺は保留にしておく。

古川さんが言うには、友だちのバックを利用したということだが、これについては僕もしばらく絶句するしかなかった。というか、もうそのバック、使えないだろ？ 清坂氏はともかく、奈良岡さんがいまだにそのビニールバックを使用しているということに猛烈なショックを受けた。古川さんは何も言っていなかったけれども、それこそ過去の恥ずかしい記憶を思い起こさせる媒介になってしまうんじゃないだろうか。僕ならやっぱりバックではなく、素直にバケツを使用しろと命令するだろう。

いや、しかし、僕としては何よりも怒りを覚えたのは、うちの担任だ。

結局そこへと行き着いてしまう。

——そこまで騒ぎになっていて、なんで移動先変更をいきなりやらかしたんだ、あの男は！ 去年とは違い、僕も感情を押えるよう心している。それこそ羽飛じゃないが「前科持ち」だからな。担任といえども所詮この男は二十九の若者なんだ、と無理やりにでも自分に言い聞かせて。その一方でなぜ、狩野先生と年齢が一緒なのかが僕には全く理解できない。この差はなんなんだ。一番の悪はやっぱり、菱本先生につきると僕は思う。もちろんいいところがあるから連れていきたい、いろんなところを見せたいと思う教師心、それはわかる。しかし、ただでさえ長時間バスに揺られて酔った奴だっただろう。清坂氏が直後のクラスミーティングで、「あんなにたくさん酔った人が出たのは、途中の変更のせいです！」

と叫んでいたけれども、まさにその通りだ。女子の生理的な問題は僕もわからない。でも、「あともうちょっとでホテルに戻ってトイレに行ける！」と祈っていた女子たちがいるのに、なぜ長時間、しかも渋滞にぶつかる可能性の高い変更をやらかしたのか？ 僕からしたら、教師のエゴに他ならない。もう一年前のことだし、今更蒸し返す気もさらさらないけれども、やっぱりあの担任、根本的に何か間違っているような気がする。清坂氏だってもちろんパーフェクトとは

いえないだろうけれどクラスの女子たちの面倒を見たわけだ。男子たちを説得するために、自分の失敗まで打ち明けたのだ。

——そうだ、一番驚いたの、そこだ。

——清坂氏、強いよな。

ちらっと羽飛から「小学五年の時、女子同士のいざこざが原因で、清坂氏が教室でトイレの失敗をさせられたことがある」という話を聞いたことはある。「絶対、美里には言うなよ」と念を押された。この辺は事情がいろいろあるらしいがあえて聞かなかった。トイレに行きたい時にはちゃんと手を挙げるタイプだろうし、そういうぐちぐちしたことを僕みたいに考える人ではない。きっと過去の失敗なんてさらっと流しているんだろうと思う。

でも、古川さんも言う通り、清坂氏からしたら、忘れたい過去だろう。

言いたくないに決まってる。

それを打ち明けてまで、男子たちに席移動などのお願いをしたわけだ。

はっきり言うけど、僕にはそこまで出来ない。自分のプライドを捨ててまで、過去の間違いを言い放って、頭を下げることはきっと無理だろう。

——それだけの修羅場があったにも関わらず、俺の部屋に来て、なんでもないような顔してくれたんだよな。大人気なく俺も口げんかやらかしたけど、もっと早くわかっていれば。

ちらっと薄目を開けて、清坂氏を覗き込んだ。目が合った。

——理由はどうであれ、清坂氏のこと、なんとかしなくちゃな。

僕はまた目を閉じた。

夕方四時半には旅館に戻る予定に組んでおいた。実際は五時半なのだが、その前に評議委員会を三十分くらい男子限定でやっておきたかったし、風呂にもさっさと入りたかった。あの問題教師・菱本守が堂々と自分の醜い物体を見せ付けつつ、

「な、立村、お前人より成長遅れだって落ち込んでるんじゃないか、ほら言ってみろ」

と勘違いしたことを聞かれるのはごめんだった。いつになったらユニットバスに入ることができるのだろう。明日の一夜こそ、唯一の自由かもしれない。

わやわやしながら同じ旅館に到着し、まずは担任にスタンプを見せて、報告を行なう。

まさか午前中ですべてのスタンプを集めたなんて、知る由もないからあっさり終わる。

その後は男子部屋に戻り、三日目用の部屋に移動する。昨日は評議四人組だったけれども、今日は南雲たちと一緒にだった。そう言えば南雲とは余りこの旅行でしゃべっていない。何となく淋しい。自由行動も別だ。あとでどんなもんか聞いてみよう。

「ああ、南雲な、なんだか奈良岡さんのことでやたらと走り回ってたぞ」

「水口も一緒にな」何かあの仲良しカップルに異変が起こったのだろうか。同室の男子連中...基本として南雲チーム.....に聞くと、少し眉をひそめるような感じで教えてくれた。

なにはともあれ、まずは風呂に入って、そこからすぐに評議委員会だ。

ちゃんとのりの利いた新しい浴衣と、本格的な兵児帯を持って風呂場に向かおうとした矢先だった。ちょうど、男女の風呂場境に当たる場所だった。

「ばかやろう！」

なぜか人だかりが出来ている。聞き覚えのある男子の声が響いている。

——誰だよこの疲れきったところにさ。

僕もさりげなく野次馬顔でそっと近づいてみた。

制服姿のふたりが、やはり浴衣一セットを抱えたまま激しく言い合いしている。人垣の陰からのぞきこむと、やっぱりいつものお二人だった。だからみんな和やかに観覧しているわけだな。

——公衆の面前でさ、いくらなんでも痴話げんかするのはやめろよな。

難波がめがねを鼻までずり下げる格好で、目をとんがらせていた。

見返す霧島さんも、髪の毛を完全に解ききったまま、ぎらぎらする目で見返している。

——昨日の今日だったのに。やりあうなら別の場所選べよ。先生たちに観られたらどうするんだよ。

まったく懲りない連中だ。清坂氏の話にも出ていたけれども、この二人のやりあいで、どれだけの男子女子が心を痛めているのかきっと知らないんだろう。ちらっと見たところ、C組とB組の野次馬はほとんどが男子だった。女子たちはC組の子たちが後ろの方で心配そうに固まっている。D組はと見ると、どうやら僕だけだ。

「更科、何があった？」

当然止めに入る予定の更科を見つけて、僕は隣に無理やり入り込んだ。

「いつもの大騒ぎ。まあ様子みて、仲裁しよっか」

なんてのどかな奴なんだ。さりげなく笑顔が洩れていたところみると、それほど心配するなよ、てことだろう。少しほっとして、僕も穏やかにお手並み拝見することにした。

難波の様子だけが妙にエキセントリックだった。むしろ霧島さんの方が挑戦的だ。

「お前、自分で何しでかしたのかわかってるのかよ！」

「なんで難波に断りいれなくちゃあいけないわけ？ ばかじゃないのあんた」

どうやら元の出来事から派生する怒りらしい。

「さんざん頭の軽い奴にちやほやされたってお前のレベルったらあんなもんだってのがまだわからねえのかよ！」

「失礼ね、見もしない人を罵ってる暇あったら、もう少しあんたも女子を誘ったりなんなりしてみたら？ 何にも行動取れないくせに、ただひたすら怒ってるなんてただのばかじゃないのよ」

「まったくなあ、お前、あいつらがどういう風に見ているのか、知って言ってるのかよ」

「わかってるわよそのくらい。でも、しょうがないのよ。そうしてほしいって言ってるんだから」

「だからお前は能無しっていうんだ！ いいかげん過去の経験から学習しろよ。お前、ほんとと学習能力ねえよな。何度同じこと繰り返したら気がすむんだ？ こんなこと繰り返してたらな、三度目の正直で」

その時はまだ、ぴんとこなかった。聞き流していたけれど覚えていた。

——三度目の正直。

難波の手が上から振り下ろされ、ぴっと人差し指を霧島さんへと向けた。

「また、スカートの中に手、突っ込まれて脱がされるぞ！ 何度やったらわかるんだ！」

風呂場近くの湿った湯気が、空気に混じって揺れていた。

一瞬だけ静まり返り、C組男女たちの塊から、何かひそやかな言葉がゆっくりとこぼれてきた。聞き取れず僕は、隣の更科をつついた。

「今、難波、何か言ったろ」

「……立村、止めに入ろう。これはまずいよ」

さっきまでの脳天気な笑みが、更科から消えている。

「止めるって？」

「後で説明する、立村、難波の後ろにまわってくれないかな。俺はキリコをなだめる」

——いきなり、なんだよいったい。

僕もわからぬなりに、更科の言う通り難波の背に回った。更科の動きの方がさらに早かった。二人の間に割り込み、またあの小型犬風の笑みを浮かべ、

「まあまあ、これから評議委員会あるし、少しおちつけよ難波、霧島姐さん」

両手を広げて笑顔で制しようとした。うっとくる難波に僕も肩を軽く叩いてやり、

「先生たちに見られたら面倒なことになる。風呂上がったら評議やるからその時にしろ」

ささやいたつもりだった。けど、難波は利く耳を持たなかったようだ。コナン・ドイルの描いた名探偵シャーロック・ホームズは沈着冷静なはずだが、その似姿を求める難波とは思えない言葉の羅列が続く。

「うっせえ、お前なあ、一度だけならともかくなんで二度も同じことされて、気付かねえんだよ！」

「写真取らせただけよ。何勘違いしてるのよ」

ぎらついたまなざしが変わらない霧島さん。堂々としている。

むしろ難波の方が理性を無くしかけている。

「霧島、写真取る男ってのは何考えてるか知ってるのか？ 知るわけないよな。お前の写真を全部保存して、スケベなことばかりに使ってるんだってこと、想像しろよ！ お前、誉められてることとなめられていることと、区別できねえくせに、簡単に写真なんか取らせるんじゃないよ！」

「あんたたちが喜んで見ている エロ雑誌なんかじゃないわよ。難波、あんたほんっとスケベなのね」

——写真？

このあたり、僕もよくわからなかった。難波にも、更科にも、もちろん霧島さんにも聞けやしない。

「いいか霧島！ いいかげんお前も覚えろよ！」

僕はまだ、難波が何を口走ろうとしているのか想像をすることすらできなかった。

更科がなぜびびりまくっているのか、なぜ、いきなり天羽が野次馬をかきわけて難波の真ん前

に立ったのか。そしてなによりも、

「お前にそんな隙があるから、あいつらはパンツ下げて手を突っ込もうとするんだぞ！　なんでそんなところにお前、自分から飛び込もうっていうんだよ！」

難波の言葉の意味がわからなかった。

繋がりが見えない。

ただ、あまりにも具体的な言葉の羅列に動けなかった。

僕がただ息を詰めたまま難波の後ろに立っている間に、真中へ割って入った天羽が物言わず、思いっきり張り手を食らわせた。とんがった張り手の音に、僕は思わず一步後ろへ下がった。よろめいた難波がぎゅっと唇を噛んだまま、振るえつつ霧島さんを見つめている。

霧島さんの目もぎらついている。そのままだった。片手が握りこぶし。おろおろする演技でもって更科がなだめようとしている。でも僕たち評議三人の存在は、たぶんこのふたりにとってどうでもよかったんだろう。霧島さんは燃え尽きそうな瞳のままで告げ

「よく調べたわね。小学校の連中から聞いた？」

返事が出来ずにいる難波をさらに見据えた。かすかに震えているように見えた。

「ひとつだけ間違い言っとくわ。下げたのは、私の方からよ」

静かに風呂場へと向かった。周囲の喧騒がテレビドラマの中のように思えて、僕はただ、難波がうつむいたままこぶしを握り締めているのを見つめていた。

「立村、悪い。あとで弾劾を要求するわ」

天羽が僕の耳にささやいた。当然難波も聞いているはずだった。評議男子四人の中でのみ交わされる会話をどう受け止めればいいのかのさ。言いかけた言葉を天羽は遮った。

「詳しい理由はこれから説明する。これから風呂に入るだろ？　つきあえ」

——こんなところまで裸の付き合いかよ。

女子には聞かれない内容なのだということくらい気が付いた。

——難波、ゆいちゃん相手にすごいこと言ってたよね！

——ゆいちゃんちっとも悪くないのに、酷いよね。

——やっぱりあの噂本当だったんだな。霧島も、やっぱりやりマンだったんだなあ。

——あの顔であの性格だから、まずねえよって思ってたけどなあ。

——顔だけだったら清純派なのに、結局は男狂いかよ。

どういうことかわからなかった。裸のままで天羽から話を聞くのには抵抗があったけれどもしかたない。僕は更科、天羽と一緒に男子風呂へと向かった。

「しっかしなあ、性格が出てるよなあ」

そそくさと汗を流して、三人、風呂場の湯船に陣取ることにした。ここの男風呂はかなり広々

しているのんびりと手足を伸ばせる。ひとりだったら何の抵抗もないのだが、隣に天羽、更科が全身堂々と伸びているのを見るとつい膝をひっこめたくなる。

「なんだよ、じろじろ見るなよ」

視線がなんだかいやらしい。男の裸見て何が楽しいっていうんだ。

「立村は性格と身体が同じだよな、ほんっとガキだし」

「悪かったな」

似たようなことを昨日、おとといと菱本先生に言われた。トラウマになりそうだ。

「更科はガキのように見えて肝心要のところはしっかり生えてるしな」

「へへ、その辺やっぱ俺も大人ですから」

そういつつ僕をまたにやにやしながら見るのはやめてほしい。僕は顔を数回洗った後に二人へわざとしずくがかかると感じるような感じに振った。

「のぼせる前にさっきの話、さっさと見えよ」

ちらっと天羽の全身も眺めた。この前聞いた話が頭にこびりついているせいか、顔も身体も完璧に大人だと思った。

「その前に言っとくがな、この話をもしばらしたら、お前らの一物千切るからな」

天羽がまた目線を湯船の中の物体にそれぞれ走らせながら言う。

「それは天羽、お前もそうだろ？」

「まあな、立村、これでいいか？」

秘密にするに決まっている。本当だったら難波も含めてその辺聞きたかったのだけれども仕方ない。僕は膝を抱えて首まで湯に浸かった。

「ややこやしい話なのか」

「まあなあ。二部構成と考えてくれ」

天羽は僕たちを角に、角にとおびき寄せるようにして、膝に手ぬぐいをかけ、湯船の縁に腰掛けた。心持盛り上がっているように見えるのは気のせいだろうか。

「まず第一部、いくわな」

きっかけは去年の秋頃に流れた噂だという。

「うちの学校に来た俺らの学年のある女子が、男子たちに『お医者さんごっこ』されていたらしい、という話が一時期流れたんだよな。立村、お前聞いたことねえか？」

「『お医者さんごっこ』ってなんだ？」

話にならないという顔をする天羽。更科に振る。

「更科はわかるよなあ」

「ああ、あったねそんな噂。すごい可愛い女子がいて、自分の方から身体をさわらせてくれる、いわゆる『させ子』みたいなことをするってさ」

「悪い、更科、『させ子』ってなんだ？」

二人顔を見合わせるのはやめてほしい。僕はただ訳がわからないから聞いているだけだ。

「このお子様委員長、こんなことまで説明しねえとなんねえのか。つまりだな、立村、こういう

ことをさせてくれるわけだ」

天羽はぼちゃんと湯船に飛び込み、いきなり腰のあたりへ手を伸ばそうとする。目的の場所がどのあたりかはわかるんで、思いっきり逃げた。

「ま、こういうことだ。わかったか立村」

「ちょっと待てよ。つまり何か？　うちの学校の女子に、いくらでも触らせてくれる奴がいるってことなのか？」

頭の中が混乱してきた。霧島さんの話のはずなのに、繋がらない。

「簡単に言っちゃまうと、霧島が小学校五、六年にかけて、クラスの男子たちにおさわりをやらせていたらしいという噂が、内の学校に流れたってわけだ。立村は知らなかったんだなあ」

「そんなの聞いたことあるわけないよ。けど、噂だろそれって」

言葉が湯気の中でくぐもっているみたいだった。もう一度顔を洗い直した。

「そう、噂だ。だからさっさと消えた。第一なあ、霧島のあの性格を知っている人間が、信じるわけねえだろ？　その噂にもあったんだが、その『させ子』はすんげえおとなしくて素直で言われたことは何でも言うこと聞くタイプの子だったらしいんだ。それ誰って感じで、誰も信じる奴はいなかった」

更科もこくこく頷いた。

「全く持って大嘘もいいとこ。C組の男子たちもさんざん大受けしてたけど、絶対ありえないと決め付けてそれはそれで終わったんだよな」

「あの、いいか天羽」

僕はもう一つ、少しずつ確認した。

「さわらせるって、肩とか顔とか髪とか、そこらへんか？」

まさか、と頭の中を整理したかった。

「立村、お前の最初に想像したとこだ。噂の内容がもし本当だとしたら、警察もんだぜ。っていうかな、かかわった男子連中はみんな補導されるぜ。『集団暴行』か『少女わいせつ』のどっちかだ」

「わいせつ？」

「そうだ。あんまりにもあんまりな話だったんで、かえって信じたくねえって気持ちがあったのかもしれない。なにせあの霧島だぜ。あんなことこんなことされていたら、キャラクターもこういう感じにはならなかったんじゃないのか？　もっと暗くなってるぜ。ってな」

「確かにな」

頷いてみるのだが、どうやら話の繋がりからすると、それもありえないらしい。

「けど、ここで話になるってことは、まさかなのか？」

「そう、そういうことだ」

更科と目を合わせて、大きく頷いた。

「よりによって、シャーロック・ホームズ様がいらしたからな」

——難波か？

咽に温泉の湯気がからまってきたようだ。風呂の湯がかなり熱いはずなのに、身体の中が冷え

てくる。更科が僕の顔を覗き込み、

「やっぱり、立村ショックだよな。そりゃあそうだよな。第二部まで聞いたらこいつ倒れるんじゃないか」

天羽にご注進する。余計なお世話だ。額を思いっきりひっぱたいてやった。なんで天羽もそう素直に頷くんだか。

「立村、この話はまだまだ先があるんだが、かなりグロだぞ。ほんとに聞く気あるのか」

「あたりまえだろ！」

これだけでもかなりグロテスクな気がするのだが。

「噂を耳にした難波ホームズ氏は、さっそく情報集めをりはじめたんだ。俺たちが霧島の性格を知っているために絶対ありえねえ、と決め付けたことをひっくり返したいって感じだったな。最初俺も、スケベネタの一種として知りたいと思ってたし、ホームズを応援していたってわけだ。ところが、ホームズの奴、霧島の小学校時代の友だちにまで取材を敢行しやがって、とうとう真相を突き止めた。ほら、一時期難波が五十番くらい成績落ちたことあっただろ。期末試験あたりだったか。あの時だよ」

僕が一学年下の評議たちに関するごたごたに巻き込まれていた頃だ。申しわけないが、同学年の恋愛沙汰まで目に止まらなかった。

「冬か」

「そう、難波の奴、口も利けないほど落ち込んでたんだ。かなわぬ『日本少女宮』つぐみちゃんへの恋煩いかと俺は軽く見ていたんだがな。元気出せってことでやらしい本をコンビニで仕入れて、ぽいっと渡したわけだ。そしたらな」

更科が割って入った。

「そんな時俺もいたから覚えてるよ。『見たくねえよそんなもん！』ってすっげえ剣幕で怒鳴ったんだよな。信じられないだろ？ まあかなりエロな本だったしな。けどストレス発散には一番いいことじゃないかって思ったのに」

「そうそう。でもって俺も、難波の様子が単なる恋わずらいではないってことに勘付き、何度となくあいつを締め上げたってわけだ。これも最初は堅物ホームズを柔らかくしてやっかっていう友情のしるしだったんだがな。今年の二月くらいになってあいつがとうとう、口を割った」

——口を割った？

「あれは本当のことだった、ってな」

「ちょっと待てよ天羽、俺にも言わせろよ」

難波がなぜそこまで調べる気になったのか、その辺がわからない。この前、霧島さんに関する話し合いの結果、難波は恋愛感情に近いものを持っているらしいということはわかった。でも、その前にやらかした行為はどう考えても、行き過ぎだ。なんで小学校にまで行く必要がある？

「難波、なぜそんなことをしたんだよ」

「あれはどうしようもねかったんだって言ってた。ホームズが元祖・シャーロックホームズとしての行動力および洞察力を発揮することができたのは、霧島に関することだけなんだって俺も思

ったよ。あいつ、霧島のことになると、自分でもどうしていいかわからないくらい動いちまうらしいんだ」

「動くってなにをだよ」

更科に目隠しされ、すぐ離された。

「つまり、気になるってことだよ。キリコ情報限定のアンテナがぴぴぴと反応するんだ。推理小説の途中『読者への挑戦』ってあるだろ？ あんなのまっとうに解いたことないくせにさ、キリコにだけは別なんだ」

「けど、そこまでしてなぜ知りたがる？ だってさ、もしもだよ、それが本当のことだったとしても、今の霧島さんには決して言われたくない過去だと思う。何かの偶然とか、事情があって、誤解されただけかもしれない。本当のことだとしても、今の霧島さんはそれを素直に反省して今のようにやっているのかもしれない。難波がそんな、調べる権利ないだろ」

「立村落ち着け。とにかく難波は、霧島に関する情報を一式手に入れた。で、あいつが『おさわり』を小学五、六年の頃に、クラス男子全員の前でやらせていたという事実だけは確認したんだ」

天羽が自分の股間を手ぬぐいの上から何度か叩くしぐさをした。

「ちくしょう、落ち着けての」

「立村、お前も鼻血出すなよ」

「出すかよ！ けど、それ知ってどうするんだよ？ 仮にそれが本当だったとしても、難波にはどういうメリットがある？」

背筋が寒くなった。難波のめがね面が浮かび、思わずむかっとくる。

「真実をとにかく知りたかったと難波は言っていた。俺たちもそこまで言ったからには全て教えろって要求したところ、以下のような事情が判明したわけだ」

上半身と下半身の反応は、気持ちとは裏腹だ。僕はさらに膝を抱えて、湯船の中から話を聞いた。

「まず、小学校時代の霧島は今と違ってめちゃくちゃおとなしいお嬢さまだったらしいんだ。おつむの程度は相変わらずだったけどな、やっぱりロリコンチックなあのお顔とかがかなりみなさん気になってしまったらしくって、しょっちゅう髪の毛引っ張って遊んでた。ていのいいいじめってやつか？ 難波の調べた相手によるとほのぼのとした感じで『ああ、いわゆる好きな子をいじめるって奴かなあ、懐かしいなあ』というお言葉だったらしい」

——人間として最低じゃないか！

僕も思い当たるふしがある。ちょっかいかけるほうがもしかしたら善意かもしれないが、されるほうからしたらたまらなく迷惑だ。そんなこともわからないのか。

「とにかく霧島はそういう特別な存在だったってことだ。そしたらある日、知らん男に声かけられて、写真を取ってくれるというのを信じきって、その男のアパートに通うようになったんだそう。その男、いわゆる『少女写真』ってのが好きな奴だったらしくて、近所の小学生女子たちにお菓子を与えては、ねらい目の女子を引きずり込んでお写真撮りまくりだったらしい。霧島はそいつに目をつけられたんだ。クラスの女子たちを言いくるめ、霧島をひとりでアパートに通わ

せるように言い、おつむの弱い霧島は素直に写真撮影を喜び、いつのまにかやばい写真が山のよう。結局そいつは別の事件で捕まったんだが、その時に大量のやばやば少女写真が出てきたんだそうだ。その中でも一番すごかったのは」

天羽は言葉を切った。

「嘘だと思うだろうが、難波は現物見たからな」

「なんだよそれ」

更科も決まり悪そうにうなだれる。

「霧島の写真集が、青潟限定の裏ものとして出回っていたらしいんだ。それこそな、霧島タイプの女子が好きな集団のために、ちゃんと製本して、立派な感じで、エロ本用の自動販売機に並んでいたんだそうだ」

——嘘だろ？

信じたくない。グラビア写真集の中にいる女の人たちは、写真の中だからこそ妄想できるけれども、もしそれが生身の人間だったとしたら？ しかも、知っている女子だとしたら？

「内容は、どんなだったんだ」

「いわゆる、『不思議の国のアリス』。ふわふわした服きて、帽子かぶって最初はきゃいきゃいと花を摘んだりしているらしい。最初のうちはいわゆる、うちの子の記念写真集って感じだったらしい。ちっともエロでない。ところが、奥に行けばいくほど、すごいことになっていって最後には！」 息を呑んだ。

「難波曰く、『スカートをそのまま持ち上げてすっぽんぽんのところを取られている』写真があったらしいんだ。その他尻捲り上げて野ションしているところとか、野原で寝てる場所とか。俺口リコンでないしわからねえけど、そういうの好きな奴はよろこぶかもな」

難波がさっきわめいた言葉。

——また、スカートの中に手、突っ込まれて脱がされるぞ！

あの時は単なる八つ当たりにはしか聞こえなかった。

ずいぶん露骨なこと口走るな、と思った程度だった。

「そういうことだったんだ」

それしか言えず僕は一度、膝を抱え直した。

「そ、とにかくその事件に巻き込まれたってことは、キリコは被害者なんだ。あいつがもう少し回りを見ていればとか、親になんで相談しなかったのかとか、さんざん攻め立てたらしいけれども、なにせキリコだろ？ どうやら全然覚えていなかったらしいんだ。なんでも、『私何にも悪いことされてないよ。お兄ちゃんと一緒に写真撮っただけ。パンツ？ 脱いだ方がすぐおしっこできるからいいって言われたから脱いでそのままだったの。お兄ちゃんといるといつも、おねむになるの』みたいなことを警察に言ったらしい。あ、この辺の情報は後日、キリコの弟くんから聞いた」

「被害者に決まってるだろうが！」

「けど、結局キリコは何にも自分のされたことに気付いてないんで、どうしてロリコン野郎が捕まったのか理解できない。一方キリコの家族は、自分の娘がやらしい写真を撮られたっていう証拠があるのに、なぜ娘が頑なに嘘言うのかわからない。このあたりかららしいよ。あのうちの家族の葛藤は」

「証拠があるんだな。それは本当なんだよな」

「あたりまえ。だから警察はロリコン男をさっさと捕まえたんだよ」

更科は大人びた口調でさらに続けた。

「けどさ、なんっていうか、やっぱり俺たちから見ても、全ての発端はキリコが馬鹿だったことに尽きるなって感じだろ？ 小学一年のガキだって、知らないおじさんについてっちゃだめだってこと、わかるだろ？ それを小学四年だぜ。しかも自分が何されてたかなんて全然気が付いてないなんてさ。被害者かもしれないけど、もう少し身を守る方法あったらお前、ってつつこみたくなるよな」

「どんな相手だったんだそれ」

「知らねえよ。たぶんお前の父さんがらみの『週刊アントワネット』の青潟女子児童わいせつ写真事件あたりを探してみたらわかるかもしれないねえよ。難波は青潟市外の図書館に行って調べたらしいがな」

「な、なんでそんなことする？」

難波の執念がわからない。

「さあな。とにかくキリコは写真こそバリバリ撮られたものの、無事保護されたってわけ。けど近所はやっぱりなあ、キリコがどういう教育されてるのかとか、頭が弱いんでないのとか、いろいろ言われ続けたってわけ。キリコ本人よりも、親だな。なによりも。一番まいっちゃったのがお母さんらしくってな。弟くん 言ってたよ。キリコのせいで家族がばらばらになったって」

——恨みか。

「キリコがもう少し常識もっていれば、さらにあんなこともなかったらうってな。これから第二部」 「まだあるのかよ！」

思わず大きな声を出してしまい、向こう側でたむろっていた奴らがこっちを見た。天羽に思いっきりはたかれた。

「何はともあれ、問題は片付いた。霧島もふつうの生活に戻った。けど、噂はあっという間に広がっちゃって、あいつは救いようのないお婆かな被害者として扱われるようになったと。その辺は異存ないな。自分の方からエロ写真撮られに行ってるわけだからなあ」

「いや、本人がわからなかったんだっつらしょうがないよ。それを責めたらかわいそうだろう」

僕の反論を全く無視、天羽は膝に手を置いた。

「立村、お前もしだぞ、クラスの女子、たとえば清坂あたりが同じ目に遭ったとしたらどう思う？」 ——どう思うって。

口籠もる。答えを強要はしなかった。

「もちろんかわいそうなことになったなあって思うけどその一方で、どういうすっぽんぽん写

真だったんだろうって気にならねえか？」

「それは侮辱だぞ天羽！」

声が荒立った。まあまあ、と更科が泳ぐように割って入る。

「例えだ例え。とにかくだ。霧島と同じクラスだった男連中はそういう想像に燃えてしまったわけだ」

「じゃあ一種のいじめなんかしだしたのか？」

「もっとたち悪い」

天羽は一緒に肩まで浸かり、更科の側でささやいた。

「話がここで戻るんだ。『おさわり』をやらせてもらえないかと要求し、叶えられたという、そんだけ」

お互い、何を想像していたのか。僕は膝を抱え直すと同時に、激しく後悔した。——おさわりって、まさか。

——嘘だろ？ そんな叶えられたって？

「五、六年までそれは続けられたんだと」「けどあの霧島さんが、いくらなんでもそんなこと許すわけないだろ？」

「キリコはばかだったんだ。ほんつとに救いようのないくらい」

冷めた口調の更科が補足説明する。

「もちろん、今のキリコはそんなこと要求したら半殺しの目に遭わせると思う。その辺は成長したんだと思う。けど、五、六年くらいの頃のキリコは全然すれてなかったらしいんだ。クラスの奴ですっげえ頭いい奴がいて、うまくキリコに取り入って、そのままはどうぞ、ってことで自分から触ってもらえるように仕向けたらしい」

「けどそれって犯罪だよな！」

声を立てられない。自分でもわからずに腹が煮え繰り返る。

「そう見えるけど、キリコは自分からそうしてくれって言ったらしいんだ。俺からするとたぶん、あいつのお得意で勘違いするかなんかしたんじゃないかなあとは思っただけだよ。けど他の奴らからしたら関係ねえよな。クラス男子のひみつの『おさわり』会は二年近く続けられたらしい。けど、それをキリコ、とうとう告発したんだ」

当たり前だ。当然だ。僕は声もう出ない。

「青大附中に霧島が受かって、妙に自信がついてしまったらしくって、いきなりクラスの男子たちを相手に『私はなぜあんなことをされていたのかわからない、どうしてですか！』と、新生キリコが誕生しちまったってわけだ。それまではずっと何も言わないでぼんやりしていて、自分がやらしいことされているかどうかすらわからねかったらしいあいつが、突如目覚めて、本当のことを言い出した。担任も、親もびっくりだ。卒業間際になってすっげえ大騒ぎになったんだ」

「それは当然だよ！俺だってそんな話聞いたら許せないって思うよ」

「だけでもしかし、それはあっさり、キリコの狂言なんだって結論で終わったらしいんだ。これ以上の話は難波と、キリオくんからの情報な」

周りにはまだ男子連中、風呂に入りきっているやつらが少ない。僕は唇を噛みながら、こぶし

を握り締めた。

「『おさわり』は霧島自身がやってほしくて男子たちに頼んだのだ、と訴えたらしいんだな。クラスの男子どもは。それをキリオくん、現場で何度か見て確認していたらしい。男子たちももちろん、多少は股間を膨らませたかもしれねえけども、本人がそういう目的なんだからしゃあねえなあってことでしたんだと泣きながら訴えたらしい。それでも霧島側は激しく食ってかかったが、最終的に止めたのはあいつの親だったんだ」

「親？」

天羽の言うことが理解できない。霧島さんのされたこと……「おさわり」は僕からしたら、どう見てもひどいいじめだ。もちろん霧島さんが騙されたのだろうし、もしかしたらそれは遊びの一種だと勘違いしていたのかもしれない。まだ小学校の頃だったらそういう男女の意識もないかもしれない。それこそ、一緒にプールに入って遊ぶような感覚だったのかもしれない。でも、二年近くも続けるなんてばれないほうがおかしい。僕が男女の差みたいなものを感じたのはやはり五年くらいの頃だったし、もちろんスカートの中に手を入れることなんて非常識以外のなにものでもないと思っていた。全く考えたことすらない。もし清坂氏や杉本が……考えるだけで煮え繰り返らんばかりなんだが……とにかく顔見知りの女子であろうが、顔を知らない子であろうが、同じことされたら僕は同じ怒りを覚えるに違いない。人間として、それはやっちゃいけないことだ。そんなこともわからないのか！と叫びたい。訴えた霧島さんは当然のことをしたのだろう。

「そ、親はせっかくキリオが青大附中に入ったんだから、ことを荒立てたくないと思ったらしいんだ」

更科も僕と同じように湯船の中で膝を抱えた。

「『お医者さんごっこ』は確かに悪い。けど、それを早い段階でなぜ、『いや』といわなかったのか。そのあたりをキリオはかなり叩かれたらしい。男子側はキリオが喜んでしているからお付き合いしただけであって、もしいやだと言ってくれたら絶対しなかったって訴えたらしいんだ。それこそ自分からパンツを下げたってな。それに例のロリコン写真集のこともあったら？ ロリコン写真集でいやあんな格好を撮られたことを認めようとしないうキリオに、親たちはたっぷり恥をかかせられてきたわけだ。そういうエッチなことに巻き込まれたのが一度だけじゃない、二度も、しかも学習能力ゼロってことをだ、繰り返したわけだ。悪いけど俺も、キリオはほんと、小学校時代馬鹿の極地だったんだなって思ったよ」

「だからか。親はなあなあにしるってったのか！」

霧島さんの気持ちはどんなだったか、僕にはやりきれないほど伝わってくる。天羽も更科も、「パンツを下げた霧島さんが悪い」と言い張っているけれど、僕からしたらどちらのケースも勘違いから発した出来事としか思えない。もちろん本人に確認したわけではないしする気もない。でも、彼女には彼女なりの言い分があったのだろう。小学校時代の痛みは、いじめではなくて単なる遊び、友情の派手な現れ、そういう言い分もあるだろう。でも、やられた相手にしてみれば殺してやりたいくらいの憎しみが残って当然だろう。周りからは「そんなことくらいで」とい

うかもしれない。確かに今の僕ならばそう言い聞かせることができるかもしれない。でも、あの時受けた悔しさや絶望に嘘はない。善意かもしれないけれど、僕にはどう考えても悪意としか感じられなかった。大多数が「善意」「友情」と訴えるならば、僕はただ黙ってうなだれるしかない。気持ちだけ、引きずるだけだ。

——霧島さんも、同じだったんだな。

今まで僕と一切接点のないタイプの人だと思っていた霧島さん。

涙がにじみそうになってきた。こんなこと、しばらくぶりだ。感情が高まってくる。

もう止められなかった。言葉が湯口から流れるくらいに太くたっぷり流れ出してくるのが自分でもわかる。

「立村、俺もあいつが哀れだとは思うさ。けどな」

「けどすでに終わったことだったら、知らんぶりどうしてしてやらないんだよ。それ違うんじゃないか？ だって許せないだろ、されたのが霧島さんじゃなくたって誰だって許せないよそれは！」

「とにかく学校側も親もうまく話し合って、新生キリコ発言はなかったことになったってわけ。卒業間際だったしね。学校側は問題が大きくなりませんだし、キリコの親は娘がこれ以上恥をかかないですだし、クラスの男子連中は言い訳ができたし、いいこと尽くめ」 割り込みたい。納得いかないものがある。そんないいこと尽くめなんてこと、あるわけじゃないか。

「けど親が黙っているってのは絶対変だよな。仮にも自分の子どもだろ？ 気付かないうちにひどいことを二回もされて、たまたまそれが悪いことだって気付かなかっただけなのに、それが悪いから泣き寝入りなのか？ そんなだったら悔しいに決まってるよ。天羽、更科、お前らもそう思わないのか？ お前らが親だったら、かばわなくちゃって、思わないのかよ！」

ふたりが顔を見合わせた後、大きくため息をつき、一緒に顔を洗った。

「霧島さんが馬鹿だっていうなら、難波の方が大馬鹿だ！ そんなにまでしていやがらせしたかったのか？ 相性が合わないのかもしれないけれど、そこまで相手の辛い記憶をひっぱりだして、そんなにまでしてどうして霧島さんにこだわるんだよ！ 好きでないんだったらあっさり知らんぷりしてやればいいのに、なんで相手が嫌がるようなこと平気でやるんだ？ 俺がガキならそれでいいさ。けど難波のやり方は『おさわり』会やらかした連中と同じくらい卑劣だと思うぞ。今の話、難波が仕入れてきたネタなんだろう？ そんな知らなくたっていいことを天羽や更科が知っているってだけでも霧島さん傷つくよきっと。難波の奴、一体何考えてるんだよ！」

口に入ってきた温泉の湯を吐き出しそうになりながら、言い捨てた。

「立村、そう怒るなよ、話聞け」

天羽と更科は顔を見合わせた。僕もなぜこんなに口汚く難波のことを罵ってしまったのか、わからない。

「それよか『思いっきり破廉恥なことされてるのに全く気付かなかった』キリコの方に腹が立つってのも、あるんだよな」

天羽は手ぬぐいで隠さずに立ち上がり、ゆっくりと僕を見下ろした。

「ほんとは難波が立村みたいな考え方すれば、すべて納まるような気がするなあ。そう思わねえか、更科」

「うん、ほんと、そう思う」

わけわからないことを言い捨ててここで話は終りにするつもりか。僕は天羽の手ぬぐいを強引に引っ張った。見たくもないものが顔に突きつけられるがそんなのかまやしない。

「もっとわかりやすく言えよ」「あんな立村」

今度は更科が側に来て、ぴちゃんと水を頭にたらした。

「ホームズの奴、さっきキリコと言い合いした時、確かに言ったの覚えているか？」

「何をだよ」

「さっきキリコに訂正されてたところ」

——また、スカートの中に手、突っ込まれて脱がされるぞ！

耳もとにささやかれ、またかっとなりそうになる。

「今のキリコはきっと、自覚しているんだと思う。だからあんな風にきっぱり答えたんだな。隠し事する気ねえみたいだな」

「けどそれで言っていていいってわけじゃあないだろ！」

「立村、よく考えろよ」

天羽は、ゆっくりと「また、スカートの中に手、突っ込まれて脱がされるぞ！」と繰り返し、「難波の奴、霧島が自分から喜んで脱いだなんて、これっぽっちも思っちゃいないんだ。すべて調べ上げた今でも、あいつ、その考え一切変わってないんだ。ホームズにしては、公平を欠いてる判断だけだな」

手ぬぐいをひったくると、僕の頭に三つ重ねにしてのせた。

「上がろうぜ、立村。このこと、難波には内緒な。あいつ必死に隠してるけど、霧島のこと、もう俺たちにはばればれなんだ」

それからどうやって部屋に戻ったのか、正直なところ覚えていない。

——また、スカートの中に手、突っ込まれて脱がされるぞ！

——ひとつだけ間違い言っとくわ。下げたのは、私の方からよ

——俺の感じ方って、やっぱりそんなに変なのか？ 天羽、更科。

——なんで、気付かなかったことが悪いって決め付けられるんだよ！

——傷ついたことは同じだってのにさ！

自覚できなかった傷が後で痛んだとしても、それは付けられたことに気付かなかった自分が悪いんだろうか。

グラビア写真の中にいる女の人たちは、みな、クラスの女子たちと同じく呼吸している人たちだってこと、どうして僕は忘れていられたのだろう。同室の連中には悪いけれども、その夜、

エロ話に盛り上がる気力はなかった。

夕食の後も、お風呂の中でも、ゆいちゃんと難波くんとの大喧嘩に関しての憶測情報は大量に流れていた。私もちょっとだけ知っていることがあったりしたので、話をあわせていたりもしたけれども、おおむねきっかけは以下のようなことだったらしい。

やっぱり、ゆいちゃんが可愛かったのが一番の原因だ。

三日目、C組女子たち何人かと真面目に一日中スタンプラリーを行っていたゆいちゃん。一通り終わって、他の女子たちの希望もあって、お買物ストリートと呼ばれる通りに出かけたという。もともとゆいちゃんは洋服とかそういうおしゃれにこだわりまくるのはよくないと思っているみたいで、一応、付き合いという程度だったそうだ。他の女子たちが色々洋服を試着している間はたいくつそうにしていたみたいだ。

大抵、ゆいちゃんが暇を持て余したかっこうでいると、いつものことなんだけれども知らないカメラマンのおじさんたちが寄ってきてゆいちゃんに「写真、取らせてもらえませんか」と話し掛けてくる。これはゆいちゃんに、だけだ。他の子たちがいても全く目も留めないで無視。とにかくゆいちゃんしか見ていない。そしてもっとというなら、そのカメラマンの人たちの多くは、ゆいちゃんに対してポーズをあしらこうしろと指示してくる。私は現場にいたことないけれど、いつぞやはゆいちゃんが「少しなら」と答えただけでカメラを持った男の人が十人くらい取り囲んで、ぱしばしやったらしい。帰りには名刺をそれぞれ押し付けた上で、

「あとでここにぜひ連絡を！」

ほとんどがモデルのスカウトだったみたいだ。取り残された他の女子たちが呆然としている中、ゆいちゃんは彼らがいなくなったあと、あっさり名刺を破り、

「私、モデルになんてなる気ないのに」

露骨にいやあな顔をしたという。

とにかく、ゆいちゃん狙いのカメラマンたちが青澗にはうようよしていた。全くゆいちゃんにその気がないので、そういう気配を感じたらすぐに逃げるようにしていたはずだ。

ところが今回、声をかけてきたカメラマンは違っていた。

ゆいちゃんではなく、他のC組女子たちにまず最初、声をかけ、

「ねえ君たち、修学旅行生？ 一枚撮らせてもらえる？」

と話し掛けたのだそうだ。ゆいちゃんを無視して。

ほとんどそういう経験のない子たちだったしかなり舞い上がってみんな、写真を撮ってもらっていたのだそうだ。もちろんうちの学校でそういう行動は禁止されていたけれども、かなりハイテンションだったらしい。様子をうかがっていたゆいちゃんも最初は、

「やめなよ、そういうことしてると先生たちに怒られるよ」

と注意していたらしいのだが、

「ゆいちゃんは撮られなれているからいいじゃないの、ここだったらばれないよ」

もう盛り上がりまくり。ひとり蚊帳の外にいたゆいちゃんは何を考えていたのかわからないけれども、とりあえずは落ち着くまで待とうと決めたらしい。

ところがだ。

ここからが卑劣極まりない展開となる。

しばらく撮影会は盛り上がっていたのだけれども、突然そのカメラマンたちが、「そういえば、青大附中の制服着ているけどこういうことしてよかったの？」

「学校の先生たちにばれたら困らないの？」

といろいろ因縁をつけてきたという。

ゆいちゃんの恐れていた通りのことだ。

「学校側に持っていったらきっと、退学、停学だよねえ。もし黙っていてほしかったら……」

C組女子たちはそりゃあ慌てたと思う。ゆいちゃんだけは何度も止めていたし、言い訳できるけれども、他の子たちはすっかり有頂天になっていたんだもの。この気持ち、私はわからなくもない。

「雑誌にも載せたいんだけどねえ。学校側に許可もらわないとだめかなあ」

「隠しておきたい？ だったらネガを買ってもらわないとねえ。お父さんお母さんに連絡しないと」

話を聞いている限り、ていのいい脅迫だ。しばらくゆいちゃんは様子を見ていたらしいが、とうとうあまりの酷い言いがかりにぶちぎれた。ゆいちゃんの性格なら当然だ。

「写真をとらせてくれと言ってきたのは、そっちじゃないですか！ 最初いやがっていたのを無理やり話し掛けたのは、あなたたちじゃないですか！ それをいきなりなんでそんなこと言うんですか！」

食ってかかったという。けど、悔しいことにみんなカメラマンは大人だった。

「撮っていくうちに、青大附中の制服だったと気付いたから……やはりこれは断りを入れないとまずいかなと思ったわけで。もし本気でモデルになりたいというのだったら、プロダクションへの紹介にまつわる大人たちへの話合いも必要だし……」

ふざけるな、と当然ゆいちゃんは思ったらしい。

「そんなに写真撮るのに大人の許可が必要なんでしたら、この子たちではなく、私にしてください」

凜と言い放ったという。

「私、モデルとして過去グラビア写真集出してますから、そういうのなれてますし、先生たちもその点は知ってます。制服のままだったらどんなポーズでもします。この子たちは全然そういう経験ないし、いきなり知られたら困るに決まっています」

この辺、ちょっとびっくりした。ゆいちゃんのはったりかもしれないけれども、「グラビア写真集出してる」とか「モデルしてました」とか。ゆいちゃんのような可愛さだったら当然あってしかるべきなんだろうけど、普段から写真大嫌いのゆいちゃんがそんなことさせるとは思えない

カメラマンたちはその申し入れに、即、手を打った。

ゆいちゃんはおびえている他の女子たちに、すぐに旅館へ戻り先生に報告するよう指示を出し、ひとりだけカメラマンの前に残った。どういう撮影が行なわれていたのかは、全くわからない。ただ、ゆいちゃんひとりだけが一番後に戻り、片手に名刺らしきものを何枚か持ち、すぐに殿池先生の部屋に向かったことだけは聞いている。近くの部屋の子によると、あの先生にしてはめずらしく、かなり厳しく叱っていたという。けどゆいちゃんは素直に、「ごめんなさい」と謝って、「もし、まずいようなら私、明日の自由行動何もしません。他の女子たちは悪くないんです、私だけを罰してください」と申し入れたそうだ。

——悪いのは、C組の女子たちじゃないのよ。

ゆいちゃんはちっとも泣いてなんてない。それどころか、他のC組女子たちに一生懸命、「大丈夫、親に報告なんてされないわよ。みんなあんなこといきなりされたら怒って当然よ。ああいうカメラマンの類はね、無視するのが一番だけど、あれだけしつこくよってこられたら、振り払っていきなり飛び掛られるかもしれないじゃない。大丈夫よ。私がちゃんと名刺もらって、先生に報告するからって言ってきたから」

笑顔で声をかけていた。たぶんゆいちゃん、写真関連のトラブルは経験済みだったのだろう。

まさかその後で、難波くんが血相変えて飛んできて、いきなりゆいちゃんを、

「ばかやろう！」

と怒鳴りつけるなんて、誰が思いつくだろう？

「お前なあ、一度だけならともかくなんで二度も同じことされて、気付かねえんだよ！」

最初はいつもつかかってくる難波くんの、ごあいさつみたいなものかなと思っていたんだけど、どうやら後半から話がどんどんエスカレートしていったらしいのだ。ゆいちゃんが以前、モデルさんやっていて、写真集まで出していたなんてこと自体、私はびっくりしちゃったけれどもそれ以上のことを難波くんは、確かに言っていた。

「写真取らせただけよ。何勘違いしてるのよ」

落ち着いているゆいちゃんに向かい、周りの男子たちになだめられながらも難波くんてばさらにわめきつづけていた。

「霧島、写真取る男ってのは何考えてるか知ってるのか？ 知るわけないよな。お前の写真を全部保存して、スケベなことばかりに使ってるんだってこと、想像しろよ！ お前、誉められてることとなめられていることと、区別できねえくせに、簡単に写真なんか取らせるんじゃないよ！」 そんなのわかるわけじゃないって私だったら言うだろう。ゆいちゃんも同じだったみたいだ。「あんたたちが喜んで見ているエロ雑誌なんかじゃないわよ。難波、あんたほんっとスケベなのね」「いいか霧島！ いいかげんお前も覚えろよ！ お前にそんな隙があるから、あいつらはパンツ下げて手を突っ込もうとするんだぞ！ なんでそんなところにお前、自分から飛び込もうっていうんだよ！」

やっぱり難波くんってば見境なくなっちゃうと怖い。外で聞いていた私たちは、ゆいちゃんの次の言葉にそれほど関心もたなかった。その時だけは。

「よく調べたわね。小学校の連中から聞いた？ ひとつだけ間違い言っとくわ。下げたのは、私の方からよ」

——下げたのは、私の方からよ、って、それって、パンツのこと？

だんだん身体に効いてくるこの言葉。部屋に戻ってから私も、だんだんわけがわからなくなってきた。ゆいちゃんの言葉は、どこまで本当なんだろう？ どこまで難波くんに対するはったりだったんだろう。そして何よりも、ゆいちゃん、本当にモデルしていたんだろうか？

「C組の霧島さんの噂、男子の先輩から聞いたことあるよ。ほんっとに噂だけどね」

同じ部屋の子たちが固まっておしゃべりしているところに私は戻った。こずえが他のクラスの部屋に遊びに行っている。彰子ちゃんの姿が見えない。ちょっと同じグループの子が少なめなので居心地が悪いのだけれどもしかたない。分けてもらったキャンディーをほおぼりながら、私はゆっくり着替えをした。もちろん 浴衣に薄い帯。

「小学校の時に、男子あつめていっぱいやらしいことさせてたんだって！」

「えー？ でもそれってガセネタでしょ？」

「わかんないけど。でもさっき言ってたよね、B組の難波もきっとそれ言ってるんだよ。男子たちに霧島さんいつも、パンツ下げられて触られてたらしいってこと」

「えーうそ、でもあの人言い返してたよね、自分の方から下げたって……？」

口籠もる女子の集団。私も背を向けたまま耳をそばだてた。

「つまり、やらせてたってことじゃないの？ あの人、そういうの好きらしいから。それにさ、みんなに言ったんでしょ。モデルやってて写真集とかって。あれきっと、やらしい写真なんじゃないの。隠してたってことはさあ」

なんでモデルさんやっていることイコールやらしい写真なのか、私には理解できない。

「男子たちが隠し持ってるあれ？」

「そ、あれよ。大股おっぴろげて、指パンツの中に入れてたりするの。それ考えると、写真なれしている霧島さんってすごいよねえ。年季入ってるし、好きだしねえ」

「そっか。だからか」

「何が？」

妙に納得した口調でひとりがつぶやいている。

「あんなに可愛い人なのにどうして南雲は振ったのかなって思って。それも告白された瞬間でしょ。なんで彰子ちゃんに行ったのかって不思議だったんだけど、そうだよ。そういう汚い女だったら、断然清純派の彰子ちゃんの方が上よね！ 南雲もまんざらばかじゃあないってことね」

頭の中が混乱してきて、帯がうまく結べない。だいが乾いた髪の毛を一つに束ねて私は布団の上に座った。背を向けたまま、後ろの情報と自分の気持ちの訴えをごちゃませにして聞いた。

「だって考えられる？ 男子の前でさ、足広げるなんて、普通できる？ 恥じらいあったらできないよね。パンツ脱ぐなんて信じられる？ 私たちだって、ジャージに着替える時男子たちのいないところに行くでしょ。トイレに行く時だって、男子たちに気付かれないうたってふつう思

うじゃない？ とんでもないよね。なんでもさ、小学校時代触らせてた方法てのがね」

声を潜めているけれども私には丸聞こえだ。

「自分から手をひっぱっていきようにして、指つっこませてたんだって。そういうこと、平気でしてたんだって！ こういう人こそ退学にしてほしいよ！ 本当かどうかわかんないけど今となったらさ。そういう子がだよ、C組の評議委員やってるんだもの、許せないよね」

——なによ、ゆいちゃんのことを罵る権利あるの？ それが本当のことじゃないかもしれないのに！

「頭悪いし、どうしてうちの学校に入ること出来たんだらうって、みんな不思議がっているけれど、もしかしたらそのあたりに理由あるのかなあって」

——そんなのわからないじゃないのさ。自分で確認してないこと言うの変だよ。そりゃ確かにゆいちゃんは頭よくないかもしれないけど。なんか評議仲間の一員として言わなくちゃと思って、私は仲間に入れてもらうことにした。

「なあに美里」

「C組のゆいちゃん、そんなことしないと思うなあ。同じ評議として思うんだけどね」

三人が私の顔をまじまじと見た。この子たちとはあまり仲よくない。けんかするほどではないんだけど、本音の話をするまでにはいたらない。三日目の夜はとにかくD組女子同士でというお約束だったので、向こうの三人組と、私、こずえ、彰子ちゃんの三人がセットアップになったってわけだ。けど、彰子ちゃんの荷物がいつのまにかなくなっている。布団も五人前しかしかれていない。なんだか嫌な予感だ。

「あっそうか、美里は知ってるんだよねえ。あの子のこと」

「そう。たぶん男子がそんなことさせてって言おうもんなら、思いっきりひっぱたくと思うよ。ゆいちゃん気強いから」

「ふうん」

納得しているような、してないような顔をして頷き、ゆいちゃんの悪口についてはひと段落した。私も納得いかないことをあまり耳に入れたくないし、話しているのを聞くのもいやだったから。

しばらくこずえが帰ってくるのを待っていた。なかなか戻ってこないのはよその組でいろいろ盛り上がっているからなのかもしれない。こずえって結構他のクラスの子とか、私があまりしゃべらないような子とも平気でおしゃべりする。もちろん嫌っている子については近寄らないかもしれないけど。でも、あの杉浦加奈子ちゃんにもいまだにおしゃべりができるってとこみると、あまり物事を気にしない子なんだろうなって思う。

——私、真似できないけどな。

あの杉浦加奈子ちゃんが、立村くんに対してしたことの数々を思い出すと、今でも腹が煮え繰り返りそうになる。班ノートをめぐるいろいろなトラブルから始まり、立村くに付けねられたとかいうありもしないデマを流したこととか、とにかくいろいろある。ずっと前に南雲くんからはっきり言われたことがあるんだけど、男子たちは杉浦さんのことをとにかくみんな嫌って

るんだそうだ。いじめはしないけれども、一歩ひいた感じで付き合っているんだそうだ。立村くんを傷つけたということで、うちのクラスの男子たちはそうとう怒っていたようだ。

けど、女子たちは余りその辺気にしていないみたいだった。私だけが加奈子ちゃんの態度に対してむかむかしてただけだったようだし、加奈子ちゃん本人もうちのクラスにそれほど携わっていたとは思っていなかったらしい。小学校の頃から付き合っていた男子……立村くんといざこざのあった、本品山中学の浜野って言ってたっけ……と、去年の夏休みに初体験したらしいという噂は聞いていた。なんだか気になってお風呂場で身体をみたけれど、こずえの言うとおりに「出るとこどーんと出て、しまるところきゅっと締まってる。あれはやっぱり、彼氏の作品かもね」って感じだった。ああ、私なんていつになったらそんな出るところが出るんだろう。

そういう子たちとも平気でははと笑えるこずえのことだ。いろいろとエッチな情報を仕入れてまた私に話しかけてくるんだろう。そういう性格がうらやましいと思う反面、なんだかなあって思わなくもない。こずえって信頼できる相手にしかいえないことって意外と少ないんじゃないだろうか。節操ないっていうのかな。今夜もきっと、ここにいる三人と何事もなく平気でゆいちゃんの話に調子合わせるんだろうな。で、いつのまにかうまくいってるんだろうな。私みたいに納得いかないところはとことん突っ込んだりしないんだろうな。

気のない調子でしばらく私は、前の三人と話をあわせていた。

ふと、ひとりが私の顔をじいっと見つめると同時に、他のふたりに目線を絡ませるようなしぐさをした。なんか私、悪いこと言った？」

「そういえばさあ、美里ってさあ」

「ん？」

「今夜、大丈夫？」

言っている意味がわからない。のほほんと問い返した。

「何が？」

「だから、その、一番気になるところって」

——こずえってば私のあれのこともうしゃべったの！

男子たちにばれているくらいだから、知らないわけがないとは思うけれども、焦ってしまう。もう一緒のお風呂に入ることができるくらいには落ち着いたし、ナプキンも一枚でなんとかなりそうだったし、その辺は「うん、平気」とこたえればいいだろう。でもなんか、この三人のしぐさに、気持ち悪いものを感じてしまい、うまく答えられなかった。

「ううん、大丈夫だよ」

「そっか、ならいいんだけどね、ほら」

また三人、物言いたげににやにやし、またいきなり言葉を飲み込む。

「昨日の夜もみんな美里のことで心配してたんだよねえ」

「なあに？ それ？」

とぼけたほうがいいのかどうかもわからず、ただ戸惑った。

「きっと言いづらいんだろうなって。けど、同じ部屋にいる子たちが協力すれば大丈夫じゃないかなって」

さらにわけがわからない。なんで同じ部屋にいる子が協力するわけ？ もし生理のことだったらもう大丈夫なのに。自分でできるのに。赤ちゃんじゃあないんだから。それにこずえがいるし。三人はとうとう、真っ正面から私に、じわじわと笑顔を向けた。

優しさなんてない、ただ面白がっているような。

「夜、何時くらいに起こしてあげればいい？ 大丈夫よ、美里、私たちが責任もって、失敗しないようにってしてあげるから」

本当に言われている意味がわからず、私が口をあけかけているところに、とどめをさされた。「中学になってもおねしょが直らないことなんて、たいしたことじゃないよ。みんな美里の秘密知ってるけど、隠すって決めてるから大丈夫」

完全に思考回路が止まった。

——ちょ、ちょっと待ってよ！ お、おねしょっていったい？」

想像してない展開だ。なんで、どうして、そういうことになっちゃったのか私にもわからない。

「なんで？ なんで私がおねしょしているなんてことになっちゃうのよ！」

声を押える余裕なんてない、叫んでしまい、口を押えてしまった。不覚。誤解されちゃう。なんでこういう時にこずえがいらないんだろう。こずえ、本当のこと知ってるくせに。なんで？ そりゃこずえも言った。「美里、おねしょしていると勘違いされてるかもよ」って。でも、男子たちに私が生理になったことばれればなんだから、女子たちが気付かないわけないってたかをくくっていた。なんでだろう？ なんで、クラスの女子たちが私をおねしょしたことに決め付けてるんだろう。まさか、私、物心ついてから、おねしょなんてしたことないのに！ まさか中学にもなってしているなんて、よっぽどのがない限り、ないに決まっている！

「だって、殿池先生のところに一日目泊ったでしょ」

ひとりが言う理由その一。震えが来て、言い返せない。

「去年旅行に行った先輩から聞いたんだけど、毎年先生と一緒に泊る子は、おねしょが直っていない人がほとんどなんだって。夜起こしてあげるのもそうだけど、おむつ持参で行く子もいるし見えないようにって心配りなんだって」

「違うってば！」

もうひとりが言う理由その二。言い返したくても、入っていけない。

「最近美里、トイレが近くなって悩んでなかった？ 授業中美里、トイレ行くなんてことめったにないのにこの前の数学の時間、真っ青になって抜けたじゃない？ みんな言ってたんだよ。美里もきっと膀胱炎かなんかにかかっているんじゃないかって」

まとめをするひとりの発言に、完全完璧、私は血が昇った。

「私もまさか、美里がおねしょ直ってないなんて思ってなかったけどね。でも去年の宿泊研修ですい君がおねしょのことで先生に起こしてもらって約束だったみたいだし、中学でもやっぱりあるのかなって思ったのよ。絶対美里って、おねしょしそうに見えないし、トイレに行く時でもめったにあわてたりしないよね。だからかえって口に出せなかったのかな、悪かったなとか思って。だからみんなで、美里のあのことについては、D組の女子たちの秘密にして、ばれないよ

うに協力しようって話になったのよ」

「こずえがそんなこと言ったわけ？」

さらさらそんなこと思ってないけど聞くしかない。

「ううん、こずえはなんかごまかしてたよ。美里が言わないでくれって言ってるから言わないって。でも、そんな恥ずかしがったって、おねしょが直らないんだったらしょうがないじゃない。みんな協力してあげなくちゃって思ってるんだもの。それにさ、おねしょしちゃったら布団水浸しになって、弁償しなくちゃいけないんだよ。男子にばれたら一大事だよ。立村に振られたらどうするの。美里、お願いだから信用してよ。私たち、真夜中二時くらいに起こしてあげる。その時トイレに行けるようにしてあげるから！」

「私、おねしょなんかしてないもん！　なんでそんな勝手なこと決め付けるのよ！」

悲鳴みたくなってしまう。かぶりをいくら振っても、目の前の三人は落ち着いたままだ。私の言い分なんて聞いてくれやしない。いつ、どうやってそんな結論に達しちゃったんだろう。こずえも何にも言ってなかったし。とにかく、違うって話をしなくちゃならないってわかってるのに言葉が出ない。

「美里、去年の宿泊研修の時にさ、私たちがバスの中で出した時、一生懸命間に合わせようってしてくれたよね。あの時のこと、みんな忘れてないんだから。一生懸命に私たちを恥ずかしい目に合わせないようにしようってしてたこと、みんな見てるんだから。だからこの機会に私たちに恩返しさせてよ、みんな、大賛成だって言ってるんだから！　ねっ、ねっ」

背筋が寒くなった。首を思いっきり振った。

「それとこれとは違うでしょ！　私、あの時は評議委員としてできるだけのことを確かにしたけど、それはみんなが追い詰められてたからしたことであって、今の私、そんなおねしょのことなんかで悩んでないもん！　私のため私のためって、そんなんじゃないよ！」

うまく言えず舌がからまる。真っ赤になっていくのに、どうして目の前の人たちこんなに落ち着いているんだろう。悔しくてならない。こずえ、早く戻ってきて証言してよ、そう言いたい。いつまでたっても戻ってこないこずえに、だんだん頭がかあとなってくるのを覚える。

去年の宿泊研修の二日目、バスの中でトイレがピンチになった女子四人がいて、結局、バックをトイレ代わりにして難を逃れたことがある。全くもってその通り、今、私を「おねしょ」していると決め付けている女子ふたりは、その当事者だ。必死にトイレ我慢している様子に私としては、なんとしても恥をかかせたくないと思って、男子たちに席を移動してもらうよう頼み、歌を歌って女子たちが何をしでかしてもばれないように音消ししてもらい、なんとか女の子のプライドを守ったつもりだった。だってあんなところでしちゃったら、学校卒業するまでずーっと言われるに決まってる。バックにした人は四人だったけど、他の女子たちもみんな我慢ぎりぎりだったんだってことは顔見ていたらわかる。絶対他の子には気付かれなくなかったから必死で平気な顔してたけど、あと十分到着するのが遅れていたら、私もどうなっていたかわかんない。

けど、それとこれとは別だ。あの時はみな、ほんとぎりぎり我慢している状態だってことが、ばればれだったし、私がもし指示を出さなかったらD組の大恥としてみなきまずい思いをしたに違いない。ちゃんと目に見える証拠があったのだ。

私がおねしょしている証拠なんて、どこにあるんだろう？

そりゃ、私も生理になったことでみっともないくらい騒いでしまったのはまずかったなっと思うけど、でもそんなありもしない「おねしょ」疑惑をかけられるほどのことじゃない。

「私、本当はね」

言いかけたのを遮られ、さらにまくし立てられた。

「美里、あれは生理だったのとかおなか壊してたのとか言いたいんだよね。でも、そんな嘘、言ってもいつかはばれちゃうんだから。私たちをもっと信用してよ！ ね美里。私たちちゃんと目ざましかけておくから。他の部屋の子もね、美里が心配だから、部屋にその時間帯に電話かけて起こすって言ってくれてるんだ。だから、ね」

「私してないって何度も言ってるじゃない！ 決め付けないでよ！」

「私たち美里が心配で言ってるのよ！ 美里が中学三年にもなって、おねしょしたらすっごく恥ずかしいだろうなって思うから言ってるのよ。もしあれだったらこっそりコンビニ言って、紙おむつ買いに行こうかって言ってた子もいるのよ。みんな真剣に美里のことを思ってるのよ！」

「余計なお世話よそんなのは！」

追い詰められていく。嘘だ、嘘だ、冤罪よって叫びたい。私、ただ生理になっちゃって、それでパニックになっちゃって、殿池先生に世話してもらったってそれだけなのに。中学三年にもなっておねしょなんて、絶対にしてない。してないのに！

「美里、いいからいいから、もう安心してよ」

「決め付けないでよ、私してないんだから！」

何か言葉を投げつけようとしたのに、力が入らなかった。ひっぱたきたいのに、ひっぱたけないのは、あくまでもこの人たちが善意で言ってるってことになってるから。そんなの嘘だって感じるけど、でも言葉ひとつひとつは「おねしょが直らない私を守ってあげる」という好意からくるものだ。悔しい。露骨にもっと「あんたおねしょしていないけどしてるってことにしてあげる」って決め付けてくれたらいくらでも文句言えるのに。涙が出るほど悔しい。ほんとに涙が出てきた。頬を拭いた。

「美里、ほら泣かないで。ほんとうのことはみんな知ってるんだから。三年D組の女子を信じてね」

「違う、違うってば」

もうこらえきれず私は首を振りながら布団にうつぶした。

慰めてくれる三人の声も、「おねしょが直らないで泣いている美里」へのねぎらいしか感じられなかった。

こずえの気配がした。

「あ、こずえこずえ、美里泣かしちゃったみたいなんだ」

「どうしたのよ」

かなりクールな口調に、私は顔を上げた。

「実はこずえに話してなかったんだけどね、D組女子同士で美里を夜、ちゃんと起こした方がいい

かなって聞いたのよ」

「起こすって……あっそっか。おねしょで？」

かっとなって叫びたい私。

「まさかこずえあんたが？」

「言っていない言っていない。そっかあ。美里がおねしょしているってやっぱりみんな、思ってたんだねえ。ふう」

やわらかい調子で、笑いを交えながらこずえは答えた。

「誤解されてもしょうがないシチュエーションだって美里もわかってるって言ってたじゃん。ごめんごめんみんな。私もはっきり説明しておかなかったのが悪かったんだけどね。美里、おねしょで別の部屋に泊ったんじゃないんだよね。これ私が証言しちゃう」

「えー？ でもみんな、美里がそうだって信じてるよ！」

「違う違う。要するに美里、初めての生理に一日目の朝、なっちゃってね。それでパニックっただけ。ほら、生理中ってやたらとおしっこ行きたくなるじゃんよ。それにはっきり言って、美里ナプキンの使い方も慣れてないし、生理用パンツも一枚しかないし、とにかく大変だったわけ。私ひとりで面倒みるわけいかなしいし、そこで殿池先生に預けたの。それが第一日目の真相」

みな、黙っている。不満そうな沈黙だ。

「みんな、次の日に美里がひとりで洗濯してたところ見たからそう言ってるんだよねえ。あれは血が思いっきりついちゃったから、さっぱりしたくて洗っていたっていうそれだけよ。私、証拠のシーツとタオルみたからね。もうまっかっかに染まってて、これじゃあ部屋に戻れないよね」

あっけらかんと言っているのけるこずえは、黙りこくっている三人をなだめるような口調でさらに続けた。

「ほら、美里って意地っ張りじゃん。絶対、自分がばにくってるところ知られたくないって意地になってるのよね。だから私も早いうちに、初めてのあれなんだって言い訳しなって言ったんだけど、がんとしてそれ聞こうとしないのよ。ナプキン集めるのだって、本当はみんなに頼めばよかったんだけど、とにかく誰にも生理のことは知られたくないってがんばっちゃったからさあ。ほんっと、これは美里の自業自得ってことよね。あれだけ私が言ったじゃないの、ったく」

なんか目の前の三人、むすっとしたまま黙っている。なのにこずえはあっけらかんと、

「美里の負けず嫌いってというか、見栄っ張り。そういうとこって去年もあったじゃん。ほら、宿泊研修のバスの中で私が、トイレがまんできずにバックにジャージャーした時のこと覚えてる？」

顔を見合わせあう三人。そのジャージャーがふたりいるんだから、知らないわけない。

「美里、あの時なんでもないって顔してたじゃん？ 私と同じ量のパフェとかジュースとか飲んでたはずなのって思ってたんだけどね。もうほんっと頭に来るかって思ったわよ。みんなバス降りる時、男女関係なく前抑え状態だったのにさ、美里だけ一番後から降りてって、『立村くんの部屋に行く』とか涼しい顔で言うんだもん。もう思いっきり腹立ったよ。なんでそんな余裕しゃくしゃくなわけ？って聞いたかったんだ。だって悔しいよね。私とか加奈子ちゃんがもう人生の終りを感じていたところで、美里ってばそんなの知ったことじゃないって顔して

るんだもの」

そんなの知らない。私だって、他の子たちの目の前だから、なんでもないふり必死にしてただけ。

立村くんの部屋に行くちょっとくらいの時間だったら、たぶんがまんでできるって思ってたし、そんなみっともない格好で降りたくなかったもん。

なんでこずえ、いきなりそんなこと言い出すわけ？

「これはねえ、みんなに内緒にしとこって決めてたんだけど、いいかげん美里の見栄っ張り直してほしいから言っちゃおうわ」

大きなため息をついて後、こずえは私の頭に片手を置いた。

「その後美里ってば、スカート真中で握り締めるようにして、部屋のトイレに駆け込んでったよ。もう典型的な、トイレの限界ポーズって感じだったね。ほんとはバスの中でも私たちと同じだったんだなってその時思ったよ。あんなえらそうなこと言っちゃった手前、言えなかつただけなんだよね」

悔しくて、別の意味で泣けてくる。なんでそんなことまで知ってるのか。思い出すといやな気持ち持ちがまた蘇る。

「だからさ、美里。見栄を張るのはいいかげんにしなよ。生理でもいいじゃん、トイレがまんしてるの知られたっていいじゃん。ま、男子にはちょっとなあって思うけどね。でも、みんな同じ状態の時にさ、私だけ平気ですって済ましているふりしてどうするのよ。みんなあんたがそういう風にしてるから、美里はお高く止まっているんだって決め付けるんだよ。ほんつともう、だからだよ。みんな、美里がおねしょしているって本気で思うのも無理ないよね。反省しな！」

声を出して私は泣き伏した。修学旅行に来てからというもの、私、泣き虫になっちゃってる。こんなに涙もろくなんでなるわけがないのに。うれし泣きじゃなくて、悔し泣きばかりだ。みっともない自分ばかりが突きつけられていく。こずえの言葉に、もう自分がどうにかなってしまいそうだった。

「美里、少し落ち着きな。こっちにおいで」

すっかり腰が抜けた状態で私はこずえの腕をつかんだ。腰に手を回すようにして、私は部屋の外に出た。こずえは何も言わず、廊下をちらっと見た後、例の自動販売機の前に私を連れて行った。

「いいかげん泣きやみなよ、美里」

「だって、だって」

こずえがなだめるように口を尖らせる。

「だから言ったでしょが。おねしょしてるって思わせるようなことしてるからあんなっちゃうのよ」「けど、あんな昔のこと言わなくたっていいでしょ！」

去年の宿泊研修のことなんて、そんな見られたくないところ、こずえしか知らないってわかってるけど、でもほんとは知られたくなかったのに。

「あれねえ、みんな、美里がなんでもないふりしててむかついてたから、言っただけだよ」

「え？ だって私みんなのためにしたのに」

「それが思い込みって言うの。トイレに駆け込みたいって思っている時に余裕ありありな顔されたら、頭くるよ。ばかにしてるんだってみんな感じちゃうからね」

「そんなこといえるわけじゃない！」

私はしゃくりあげながらつぶやいた。

「あまり言いたくないけどさ、もうD組の女子たちはストレスで一杯なんだよ。美里がなんでもできて、完璧で、しっかりものだってことはよっくわかっているけど、見下しているような感じが漂ってきてて、むかつくってみんな思ってるんだよ」

「そんなつもりない！」

「あんたはなくてもさ、周りにはそう伝わるの。一年前のことなんて恨み引きずるのかあんたらって私も思うよ。けどね、あの子たちがしたことは、私も気持ちわかるしね。それに美里」

こずえはいきなり真面目な顔をした。

「あんた、あの時、人間として最低なこと口走ったこと、忘れてないよね」

——忘れてないよ。

——あの時、ああ言っちゃったから、ああなったんだもん。

うつむいた。

「加奈子ちゃんに、あの場でさせようって思ってたでしょう」

悔しくてまた泣けてくる。自分が許せない。

「加奈子ちゃんにあやまるのは必要ないよ。そんな恥ずかしい過去引っ張り出されたらそっちの方が迷惑だもん。けどね、これから部屋に帰って、あの三人にはちゃんとごめんねって言うんだよ。納得行かないかもしれないけれど、あんたがしたことで確実に傷ついてるんだからね」

顔を覆ってしゃくりあげた。咽から魂みたいなものがえっ、えっ、っと出てくるみたいだった。背中をさすってくれるこずえの手が、浴衣の上から暖かくにじんできた。

「私、反省してる。後悔してる。ほんとだよ。あの時から、ほんとだよ」

「もういいって」

「だって、私、あの時言った後、すぐに後悔したんだもん」

思い出したくない記憶、こずえにしか知られたくない秘密。恥ずかしくてならないけどいわなくてはならないってわかっていた。

「あの、あの、みんなに席移動してって頼んだ後、それまで全然トイレ行きたくなかったのに、いきなり、だったの」

「え？ いきなり？」

目をこすった。顔を紅らした。

「加奈子ちゃんががまんしているところ見て、つい、そう思っちゃったのはほんと。けど、それから頭に、そのかっこうと、自分で言ったこととかがずっと焼き付いちゃって、こずえもいたし、頭にその、やっちゃんところが浮かんじちゃって、だんだん私、がまんできなくなってきたんだ、けど、そんな、言えないし」

「そっか、きたんだ」

「悪いこと考えたら、その報いすぐ、自分に降りかかってくるんだなって、その時思ったの。加

奈子ちゃんだけそうならばいいって、ちらっと思っちゃったら、まさかこずえまで。きっと罰当たったんだね。もう絶対、そんな人傷つけることなんてしたくないって、ほんとに思ったのよ。だから早く、トイレ行きたいって思いながら、もう二度とそんなことしないって、誓ったのに」

こずえは何も言わず、背中から私を抱くようにしてくれた。お母さんがちっちゃいころしてくれたような、だっこだった。

「もういいよ美里。もう、楽になりなよ。私は、あの時バックを差し出してくれた美里の気持ちの方が、加奈子ちゃんにやあなこと考えた時よりも面積広いんだって、信じてるからね！」

声を出して泣きつづける私を、ずっとこずえは暖めてくれた。

「さっきは、ごめんなさい。いっぱい傷つけちゃって、ごめんなさい」

こずえに付き添ってもらい、私は彼女たちに頭を下げた。少し不承不承だったけれども、とりわけ何かを言われることもなく、その夜は過ぎた。唯一変わったことがあったとすれば、彰子ちゃんが荷物ごと、どこかに消えてしまったことくらいだった。

朝飯後、いきなりD組だけ一部屋に集められた。せっかく四日目自由行動ということでスタンプレースダッシュに燃えていたのに。いらついていた俺たちも、次の菱本発言に思わずぶっとんだ。

「奈良岡は今日の朝、ご家族の事情で一足先に青湊へ戻った」

日焼け顔なのかごぼう色なのか、とにかくやつれている。いかにも徹夜明けといわんばかりの顔。きっと真夜中の一悶着あったんだな、と次の瞬間みな南雲の方を見る。

「この件については学校に戻ってから詳しく説明するが、みんなにお願いだ。学校で奈良岡と顔を合わせたら、いつも通り笑顔で振舞ってほしいんだ。そして旅行中は奈良岡に関しての噂を一切、しないしてほしい。他のクラスの友だちにもだ。わかったか」

しゃべるなって言われているのに、女子どもがいろいろ妄想を膨らませておる。

「だからなんだ……彰子ちゃん、戻ってこなかったのって」

「まさかデートってこともないだろうなと思ってたけど」

いろいろ、それこそまあいろいろ。肝心要の彼氏・南雲はどうしているかって言うと、こいつもいかにも真夜中枕投げを徹してやっていたって顔している。寝てない、不機嫌、近寄りたくねえよって感じだ。

「先生、なんかあったんすか」

一応は聞いてみるのが俺の役目だ。隣の立村も目を真ん丸くしてみているじゃないか。南雲と仲良いあいつでも、聞いていないことはあるんだと頷いてしまう俺がいる。

「詳しい事情はまた後で話すと言っただろ。羽飛、とにかくお前らは何も考えずに自由行動しろ。わかったな」

本来ならばもっとお説教やら面倒くさい注意やらいろいろされるはずだったのに、菱本先生あっさりと幕を下ろして背を向けやがった。ストレスたまる仕事だな、教師は。俺は立村をつついていた。

「お前、ほんとに知らんのかよ」

「聞いてない」

ちろっと南雲の様子をうかがうように振り返った立村はすぐに俺の方へ向き、

「とにかく、自由行動をさっさと開始しよう。みなばらばらになれば、余計な噂も立ちづらいしな」

余計な噂ってなんなんだ。そういえば美里は昨日、奈良岡のねーさんと同じ部屋に泊まっていたはずだ。その辺聞いてみてもいいだろう。家族の事情ってことは、親のどちらかが交通事故にでもあったかなにかしたんだろうか。せっかくの修学旅行を途中で抜けるなんて可哀想な奴だ。

「そうだなあ。ああ、立村、あとでねーさんに土産買ってってやっか」

「もちろん、そうするよ」

ちゃんと次のすべきことを考えている立村。気にならないことはないんじゃないだろうか。

奈良岡のねーさんと南雲を引き離すための学校側の罠、とか、単純に「家族の事情」だけなのか、その辺は全くわからない。南雲は取り巻き連中たちとさっさと部屋を出て行った。荷物を持ったまま移動用のバスに乗り込まねばならないんで、まずは整列だ。立村も声をかけたような顔をし、口を半開きにしたが、すぐにあきらめ俺に近づいた。

「あのさ、それで羽飛、悪いんだけど今日の自由行動なんだけど、俺だけちょっと抜けさせてもらっていいかな」

これは聞いていないぞ。いきなり何言い出すんだ、立村よ。

簡単に俺も納得するわけにはいかん。うっかり教師連中に聞かれるとせっかくの「午前中スタンプリー後の自由行動」計画が学年全員おじゃんになってしまう。立村の腕をひつつかみ、軽くねじった。俺にしてはそれほど力を入れたわけじゃないが、あいつは顔をしかめた。軟弱もんが。

「それはもっとはよように言うべきじゃあねえのかなあ、立村」

「悪い、ごめん、ほんと、申しわけない」

平謝りする立村だが、簡単には容赦しねえぞ。さらにぐいぐいと締め上げる。

「や、やめろ羽飛、ごめん、本当に悪かった」

「じゃあ理由言えよ」

「もちろん言うさ」

けどここじゃあ言えねえか。視点がほよほよしているぞ。もう一度、今度は腕の皮部分をつまんでひねった。

「は、羽飛頼む、やめてくれ、い、いた」

「じゃあ言えよ」

「評議、評議委員会の集まりを、さ、臨時で、やることに、なって、ごめん」

もうひとつだ。確認だ。せっかくの午後をおじゃんにするからには、当然泣かせる連中があとひとりいるわけだわな。

「美里には言ったのか？」

「い、言った。だから、羽飛、離せってば！」

美里に頭を下げたというのだったらしょうがない。その辺もう少し詳しく聞かせてもらうことにした。

「あいつ怒ってただろ？」

「いや、あの、近江さんと一緒に、あの、芸人関係のイベントに行くとか言ってたし」

「近江？ じゃあ天羽はどうしたんだ？」

「わからないよそんなのは」

俺の気づかないところでいろいろと裏があるわけだ。あまり突っ込んでいる時間もなさそうだし、仕方なく俺は荷物を担ぎ、もう一度あいつに振り返った。

「立村、今日は俺と熱い夜だよな」

「なんだよ意味不明な」

さっき俺がつねったところをしきりに撫でている。だから全体的に皮が薄すぎるんだ立村は。

「たっぷり、裏事情、聞かせてもらうからな、今回のことは貸しにしとく」

玄関先で美里を捕まえた。美里も午前中はひたすらスタンプラリーに燃えざるを得ないわけだ。女子同士で行動し、昨日と同じく俺たちと午後合流の予定だ。残念ながら俺との語り合いという、きわめて日常的なシュチュエーションに終わった昨日とは違い、あいつだってしっかりとしゃれのめしてきたんじゃないだろうか。と顔を見やる。お神酒徳利の古川が割り込んでくる。

「おう、今日もまた頼むな、古川も」

「いいけどさ、どうしたのよ立村」

美里が、「いいよこずえ、あとで」、そうたしなめる。立村が前もって美里に詫びを入れたというのはほんとならしい。ただ、怖い姉さん格の古川にまでは声が通っていなかった。詰めが甘いな、奴も。

「いや、俺もさっき言われてびびってた」

「だよねえ、せっかく美里が楽しみにしてたのにねえ」

また「だから黙っててってば！」と美里は古川を揺さぶる。やっぱりショックだったのかもしれない。せっかくのデートチャンスだったのに、しかも余計なことを言う奴がいない、ふたりっきりの甘いひと時……美里を前にこの「甘い」という形容詞を使うのには、寒気が走るんだがそんなことどうでもいい……を味わいたかっただろうに、哀れな奴だ。慰めてやるか。

「美里、夜があるだろ夜が。今夜は噂のほたるでナイト」

「別に、私、そんな楽しみにしてなかったし！」

口と顔との表情が全然違う。しっかり唇を曲げている。いくら美里にお熱の近江がくっついてきたとしても、この御機嫌簡単にはよくなるまいだろうな。立村にはあとでよおく、説教しとかねばならない。仮にも美里は立村の彼女なんだからな。ったく。

「ほんっと、羽飛、その辺立村にお灸据えておいてよ。まあね、事情が事情だし、しかたないといえはしかたないし」

「そうなの、だからもうこのことはやめようよ！」

ややかすれ声で美里は俺と古川に、話の終りを宣言した。

昨日、風呂に入る前、B組の難波とC組の霧島との間で繰り返された舌戦。いつものことだと周囲はのんびり構えていたらしいのだが、どうやらそれは甘かった。以前から上級生中心に流れていた噂、「三年の霧島は以前、ロリータ写真集に出ていたらしい」、それをどうやらいろいろなルートを辿って証明した難波の言葉が飛び出し、事情通の人間たちをびびらせた。俺はその場にいなかったんで、周りからの情報を集めたにとどまるが。まあD組内についていえば、「他のクラスよりも自分のクラス」の問題が一番大きいだろう。なんで奈良岡がさっさと夜中に帰ったのかとか、南雲との関係はいかにとか、そっちの方にみな盛り上がっている。それは反対から言うと、B組、C組も同じだろう。ただ男子サイドから言わせていただくと、「ほんとに霧島はそういう悪い女だったのか？」という下半身に訴える情報に偏っているような気がする。アマゾ

ネス霧島の過去に興味しんしん、というのは女子の前でそう口に出しづらいただろうなと俺は思う。
あえて今のところはノーコメントを通した方がいいだろうなあ。どうせ旅行が終わればみな忘れるだろうし。

ただ、評議委員長たる立村には放置しておくわけいかない問題なのかもしれない。残念ながら昨日俺は詳しい事情を全然聞くことができなかつたのでその辺曖昧だが。霧島がやたらと評議委員会の中をかき回しているとか、つい最近までずいぶんにぎやかだったA組天羽と西月、近江との三角関係とか。三年続くといろいろあるもんだ。もともと「事件を起こしたくないがいつのまにか矢面に立たされる運命」の立村だ。いろいろと大変なのはわかる。美里ルートでその辺は聞きつけている。

けどな、俺からすると、悩みは打ち明けて慰めあうもんでなくて、一緒に笑い飛ばすもんだ。

そういう路線で俺は考えている。立村とは全く大違いだ。
もしくはいい方法をさっさと考えて、まあく収めることだ。この前の金沢と芸術家の坊さん事件のようにな。

根本からして、たぶんあいつとはと違うんだろう。詳しいことを言ってくれねえのはその辺にあるんだろう。けっ。

立村と美里を先頭にD組の整列が終り、みな仲良くバスに乗り込んでいった。早めに出発し、まずは持ち歩きに必要な荷物をバスに乗せたまま、第一次解散地に向かう。そこで例のごとくスタンプラリーを行い、午後からは非公式の自由行動だ。昨日の自由行動では、霧島のカメラマンいらっしやい事件以外、取り立てて騒ぎになるようなことはなかったらしい。

「もし、見知らぬ人に声をかけられた場合は、かならず相手の身分証明書を確認しましょう。そして、自分の判断で校則に反していないかどうか、危険でないかどうかをよく考えるようにいたしましょう。自然とそうすれば、判断はたやすくできるはずです」

最初の注意は、C組担任の殿池先生から出たものだった。そりゃそうだろう。あの霧島の担任だ。心配だろうよ。

C組の先頭女子を見ると、ふわふわポニーテールのまんま、他の女子たちを叱り飛ばしている霧島がいた。

もったいない、あの顔だったらなあ、いくらでも芸能プロダクションがほっとくわけないだろうになあ。

美里には悪いが、やっぱり女子の中でそのまんま芸能界で通用しそうな顔ってのは、霧島くらいだろうな。ジェラシー燃やしたってむだだぞ、美里、そう言いたくなる。

「南雲、おい、なんとか言えよ」

「うるせえなあ」

俺の後ろ座席から眠たげな声がする。うっとおしくも天敵・南雲の前にいるのだ。席の都合上そうなってしまった。立村は俺の隣りでいつのまにかさっさと寝てやがる。ほんの一時間ちよっ

との移動も車酔いの可能性ありということで、安全策をとったに違いない。しかたないんで俺も寝たふりしながら後ろの声を聞く羽目になった。

「お前、なんであんな荒れた？」

「しょうがねえだろ」

かなりめんど臭そうだ。仲のよい友だち連中にも内容なのか？ まさか、南雲の奴、奈良岡のねーさんを押し倒し……いや、それはないだろう、ぽーんと腹で跳ね返されるような気がするぞ。ははん、もしやあいつ、あっさり振られてそれでやけになって、なんかやらかしたのか？

南雲ならやらかしそうだが、被害者になった奈良岡が、へたしたら加害者になっちゃうのかわいそうだとか、いろいろ思いつつ聞いていた。

「気持ちはわかるけどなあ、南雲。よりによってライバルの手伝いするなんてなあ、お前も人良すぎ」

「だから、うるせえよ、黙れよ」

——ライバル？

いや、俺も知らないわけではない。奈良岡のねえさんが実は過去、非常にもてもての時代を送っていたこととか、現在は第二次ブームの真っ最中だとか。女子は顔ではないということをやというほど思い知らされた次第だ。南雲の場合はどこまで本気なのかよくわからんが、奈良岡を狙うライバルがいることはたやすく想像できる。が、なんで今回の早帰りに関連する？

「人道的に間違っていないんだからそれでいいんだ、以上！」

「そう無理矢理終わらせるなよなあ」

——人道的に？

ますますよくわからん。バスの中がやたらと静かなのは、立村のように寝入っている奴もいるだろうが、主に南雲との会話を耳の穴かっぼじって聞いている奴の方が多からなのかもしれない。先頭席で無視している菱本先生に聞けば一発だろうと俺は言いたい。残念ながら席が少々遠い。美里と目が合い、思わず「やっぱりな」と頷いた。

「どうせ旅行終わったら、話すからそれでいいだろ！」

「けっ、結局ごまかされちゃったってわけかよ」

南雲ファンクラブの女子一同に見せてやりたいこの機嫌悪すぎな南雲の顔。俺はもともとこいつの性格も顔も趣味じゃないんだが、一応女子連中がぼおっとするのはわからなくもない。いつもにこやかにアイドルを演じている、かっこいいとこぼっか見せ付けているあいつがだ。奈良岡のことひとつにおいて、あつという間に性格が一変する。奈良岡の家庭事情とか、ライバル到来とか。ああ、立村が起きていたら、無理矢理でも調べさせてただろうなと、ふと思った。

若干お通夜の雰囲気漂っていたD組バスだが、誰も酔わずに目的地へと到着した。みな、予定表とスタンプラリー用の「しおり」を持ち立ち上がった。一刻も早く、バスから降りて、午前中一杯でスタンプを押し捲らなくてはならない。立村曰く、本条先輩からの教えとして、「とにかくスタンプは押したら即、次の場所へ。余計なことを考えないこと。観光とか歴史探訪は、修学旅行でやったって意味なし！」とのことだった。まあな、俺もそれは本気でそう思う。

「では、集合はここに四時半。厳守。遅刻したものは旅行終了後にグラウンド五周」

簡単な注意事項を菱本先生が言い放った。この辺りもクラスによって違うらしい。B組は「罰補習」らしいし、C組は「一週間の掃除当番」、A組は単なる注意のみ。カラーが露骨に表れている。うちのクラスはきっと遅刻者ゼロだろうなと改めて思うのだ。

一応先生の顔を立てるため、途中まではきちんと建前上の班グループで行動する。もちろんスタンプ押しのためだ。だが大抵途中で一人抜け、二人抜け、最後にはひとりだけ、となるらしい。俺の場合は立村と午後も一緒だったから、最終的にふたりだったが。昨日の流れがどのグループもうまくいったらしく、もう最初のスタンプ中継地である有名なキリスト教の教会……名前忘れた……のあたりでみな、好き勝手な仲間に分かれていた。もちろん俺としては途中まで立村にくっついて、少しでも午後の事情について聞き出したいところだった。

女子グループは男子たちと反対方向からスタンプラリーを開始している。青大附中生によりやたらとスタンプ会場が込み合わないようとの、評議委員長じきじきのご命令だったと聞く。

青錆色のとんがった教会の天辺で風見鶏が、ぎいこぎいこ鳴っている。

俺たちが教会内の金色っぽい部屋の中でスタンプをばしばし押し終わり、D組一同みなずらずらと出ようとした時だった。

「立村、さ、早く来いよ」

A組の天羽、C組の更科。背がでこぼこした二人。玄関のところでシルエットのまま立っていた。時代劇に出てくる正義の味方、登場ポーズに近いものがある。一步ひいたのは俺だ。後ろですい君が「なんだよあいつら、なんか演劇やってるのかなあ」と脳天気にはいていた。俺だってそんなこと知るもんか。呟く。

「知らねえよ」

肝心要の立村の方を見た。俺だけじゃない、他の奴ら全員が見ていた。あいつの方がすい君よりももっと脳天気だって初めて気づいた。

「あ、もうか？」

なにが「あ、もうか」なのかわからん。ゆっくりと、ブレザーのポケットに手を突っ込んだままふたりは立村を両脇から抱えるようにした。軽く肩を叩き、いかにも犯人を逮捕する刑事のような顔して両脇抱えてつれていくのはいったいなんなんだ？

立村も観念した犯人の顔して、隣りにいた俺に向かい、軽く笑って見せた。

「そういうわけなんだ、ごめん、また夕方」

「も、もういくのかよ！」

「詳しいことは後で話すよ」

立村はそのまますぐ背を向けた。まあいろいろあるんだろう。俺はのんびりと手を振った。俺たちだってスタンプもらったらもうこんなところに用事なんてないのだ。さっさと次のスタンプ地へと向かおう、そう足の向きをかえようとした時だった。

青い空、白い雲、薄緑色のでっかい教会。今にも壊れそうなひび割れの跡。手元のにじんだス

ランプひとつ。

金沢が口をぽかんと開けている。黙って真向かいの白い陸橋を指差した。高台に建っているこの教会、コンクリート道路を跨ぐような格好で目の前に白い陸橋が掛かっている。外に出て左側の小道を抜けるとすぐにわたることができるようになっている。だから、俺たちの目の前には誰が渡っているかとか、どういう顔しているかとか、どんな雰囲気かとかがオペラグラスなしで十分見られるようになっている。俺も視力が低い方ではないけれども、見えるものは見える。信じられないだけだ。あっさり目に映るものを信じている金沢はわかりやすい言葉で説明してくれる。

「今立村、B組の出っ歯の人と一緒に歩いてる。

「どこだよどこ！」

俺が金沢の指差す方を目で追うと、おそらく真向かいのコンクリート陸橋のようなところを仲良く歩いている立村とB組女子評議・轟琴音の姿が見えた。俺が信じたくないと感じてしまうのは、肩を寄せ合う仕種、互いに笑い掛け合っている姿、雰囲気が美里との間に見たことのないもばっかりだったからかもしれない。背を丸め、肩をすくめ、立村を見上げる仕種。ひとえに「出っ歯」としか言いようのないご面相の轟だが、立村へ話し掛けている時の笑顔は、どことなく恥かしげだった。立村もその轟に対して、余裕たっぷりに笑いかけている。美里に対してはどことなく、気遣いしまくっているのがありありだったのにだ。なんなんだ、この差は。

もやもやとしてくるこの気持ち、教会の中にいらっしゃる神様、浄化してくれよって俺は叫びたかった。

俺の後ろにつきしたがっている他の連中も

「あ、立村だ」「あ、なぜ轟と？」「清坂はいないのか？」「なんだあの雰囲気」

やっぱり、雰囲気の異様さにみな、足が動かないのかもしれない。そりゃそうだ。立村には美里、美里には立村、なんだかんだいってこのカップルがだんだん定着しつつあったのに、いきなりのダークホースだ。ひゅーひゅー攻撃しようにも、あまりにもカップリングがずれすぎていて、怖すぎる。もちろん、B組評議の轟が嫌な奴だとかそういう話は聞いていない。個性強すぎる女子評議の中では地味な方に入る、ということと、やたらと目が飛び出ている出っ歯だということくらいしか知らない。美里も轟と比較したら、きっと美人の部類に入るのではないかと俺は思う。単なる評議委員会の集まりにしては、美里抜きでなぜ、轟とふたり仲良く歩いてるんだ？

第一、美里、知ってるのかこのこと？

——それにしても、誰か追っかけようとししないのか。おい、

——しかもあいつ、遠めでもわかるが、笑ってるぞ。

約五メートルくらい後ろ、つき従うように天羽と更科の頭がでこぼこした感じで続いていた。神妙な顔してくっついて歩いている。もう刑事役も犯人役もない。俺から観たらどう考えても、「デート」にお付き合いするふたりの従士だった。

——なんでだ？　なんでなんだ？

——立村、なぜ轟と？

——しかも、なんでD組連中の目の前であんな派手なことする？

——もうすげえ騒ぎになってるぞ、後ろでは。

「おいおい、羽飛、あれってどういうことだよ？　立村の奴、清坂と付き合ってるんだろ？　なんで轟に切り替えたんだらうね。あんな出っ歯さんに」

そういうやらしい話に目覚めきっているすい君が、俺の背中に飛び掛ってくる。うざったい、追っ払った。

「やっぱり、『あれ』になったから、やになったのかな？」

「すい、お前正気でもの言ってるのか？」

思いっきり手の甲ではたいてやった。本気、かなり入ったと思う。

「だってさあ、どうみたってあの雰囲気、彼氏、彼女だよお」

スタンプグループに南雲が入っていないのが俺にとって救いだ。たぶんあいつがいたら俺がやりたい行動を先回りして取っちゃうだろう。この状況、理解できん。単なる評議委員の集まりにしては、妙に甘ったるい。これってなんなんだ？　これ、美里に内緒にしてるのか？　いや、なぜ俺たちD組にばればれになるような形で？

「羽飛、その辺詳しいこと知りたいなあ」

すい君にたきつけられたわけではないが、俺の血が妙に滾って困った。

「わかった、あの状況、俺も見捨てておけねえよ」

いきなり拍手喝采の嵐。スタンプブックをひらひらさせる奴までいる。純粋な観光客らしき老夫婦が盛り上がるD組集団を怪訝な目で追いながら追い越していった。

同時に金沢が俺の分のスタンプブックをひったくった。

「俺が代わりに全部押してってやるよ。この前のお礼さ」

しっかりスケッチブックと小さな絵の具入れを抱えたままだったのに。ここまでやってくれるクラス一同の期待を背負って、俺がとことん聞き出さないでどうするっていうんだ。

「金沢、じゃああとは頼む」

俺はついさっき追い越された観光客の老夫婦を一気に追い越し、評議四人組を追いかけた。すぐに捕まるだろう。たった今通り過ぎたばかりなんだから。いったいなぜ、俺に隠し事するような顔して、轟なんかと一緒にデートしようとしてるのか。美里に内緒で待ち合わせたりしてるのか、なんで天羽と更科がからんでいるのか。なによりも。

——なぜ、D組ほとんどの連中が揃っている前で、立村と轟のツーショットを見せつけたのか

。旅行後の修羅場は避けたいだろうな、そりゃ避けたいさ。

美里にとんでもない形で情報が流れる前に、俺が押えないと、こりゃ大事件だ。

捕まえるのは簡単だった。あれだけ楽しげに、鼻歌交じりで歩いているんだ、必死こいて走っている俺が追いつけないわけがない。さっさと立村の首根っこ押さえつけて、

「おい、お前、いったい何考えてるんだ？」

問い詰めてみてもよからうしだ。

走りながらも俺だって、一応は考えていた。

単なる評議同士の話し合いで、美里抜きでやらねばならないんだったらそれもありだろう。けどさ、なぜ、3D連中の真ん前で劇的に去らねばならなかったのか、しかもお迎えにきたのが。

——あの、出っ歯の轟なのか。

はっきり言って俺も、話の脈略が掴めない。単純に「美里に声をかけ忘れてだけ」なのかもしれないし、「たまたま轟が近くにいたから」なのかもしれない。ただ、このシュチュエーションのまんまでバスに戻ろうもんなら何が起こるかわからんぞ。美里だってそりゃまあ、轟を「恋のライバル」なんて思っていないだろうが、面白くはないだろう。ただでさえいらいら機嫌の悪げな美里がまた、いつぞやのように立村につっかかり、あいつがだんまり決め込んで、ずっと船酔い 確実な五日目帰り路を辿るなんて、俺はいやだ。はっきり白黒つけるべきところは、つけなくちゃあ、嘘だろ。

「おい、待てよ」

陸橋から降りてのんびりと先頭から約十メートル離れて歩いている評議A、評議Cを追い抜こうとした。教会から降りると暫く舗装された道路をてくてく歩いて次のスタンプ経由地、どっかの外人墓地へと向かい、やっぱりそこで記念のスタンプを押す。墓場のスタンプ押してなにが楽しいんだと思うんだが。まあ大丈夫だろう。金沢がしっかり預かってくれたことだし。余計なことは考えない。もう一度怒鳴った。先頭の立村・轟カップルにも聞こえるように。

「おい、ちょっと止まれってのがわからねえのかよ！」

止まらないのは先頭ふたり。聞こえているのか聞こえてねえ振りしているのかよくわからん。

振り返ったのは後ろのふたり。互いに内側からぐいと体をひねり、立ち止まる。

「羽飛、この節はどうも」

頭をかきかきA組評議の天羽がにんまり笑う。

「まあそんな熱くならないでさ、ゆっくり話そうよ」

同じく赤ん坊っぽい天然の笑みを向けるのはC組評議の更科だ。

どちらも立村繋がりでよく話す相手だし、別に馴れ馴れしくても腹は立たない。が、どうもこの二人、俺を通せんぼしようとしていると見た。ゆっくり、俺の方に真っ正面に向いて、ゆっくりと肩を叩く。その間にも先頭ふたりはぐんぐん引き離していくんだが、俺としては追いたい。評議ふたりにはあまり用がないのだが。

「ゆっくりゆっくり、もったいないだろが、なあ羽飛」

「そうそう、聞きたいことあったらたっぷり話してやるよ。とにかく今は」

更科の額に垂れている前髪を軽く掴み抜いてやろうとした。

「お前らには用ねえよ。うちの立村に用が」

「今はほら、ふたりっきりにさせてやってくれよな、野暮なことは抜き抜き」

野暮ってどっちが野暮なんだ！ 片腕ずつつかんで話そうとしないA、C評議を振り払うのは簡単だ。思いっきり本気を出せば天羽はともかく、更科はひっくりかえせるだろう。けど意味不明のけんかしたってどうするってんだ。俺は前かがみになりながら、一歩、二歩と歩こうとした。車がすうっと通り抜けてゆき、すれ違いざまに女の笑い声が聞こえた。そりゃ、面白いだろうな。関係なかったら、前を進もうとして二人の男子に両腕押えられてる奴の凶なんてな。

——ふたりっきり？

つん、と脳天に突き刺さった天羽の言葉。反応が遅い俺の頭。思い切り振った。わざとらしく更科の奴、「きゃあ、ふけが落ちる落ちる」とおどけてやがる。だったら腕、離せていうんだ。

「おい、天羽、今お前、ふたりっきりって言わなかったか！」

「ああ言ったぞ。その辺も聞きたいだろ？」

——なんなんだ天羽の奴？

俺はぐいと睨みつけた。それほど恨みはないにしても、天羽が立村と轟カップルのデート……そう断言していいだろう、あのシュチュエーションだったらな……の企画張本人らしいということ、立村もその辺しっかりと計算済みだったらしいということ、つまり俺にとってはまったく想像外だったということ。しかももっと言うならば、

「羽飛、きっと追っかけてくるだろうなとは思っていたんだけどな。読み通り、当たってたなあ。さすがトドさん」

更科の奴が、先頭のふたり……もう立村の背中が拳くらい小さくなっているのが見える……を長めやりながらすぱっと言った。「トドさん」とは、当然轟のことだろう。ということは何か？

轟もこの計画に一枚噛んでいたってことか？

「おい、どういうことなんだよこれ！」

「だから、これからゆっくり教えてやるからな。午前中は俺たちと一緒に行動しませんかって」

まだ蹴りを一発入れたい気分の俺に、天羽は髪の毛をぐるんと振り更科にウインクした。顔がしかめっ面に見えるだけだというのに、勘違いもいいとこだ。

「スタンプ、持ってるか？」

「ねえよ」

お前らを追っかけるためだってことは言わなかった。

「あっそ、俺も更科も、立村とトドさんにスタンプラリー全部やってもらうよう頼んであるんでさ。ま、特別思い入れあって行きたいお寺とか、有名人のお墓とか、そういうのがないようだったら、どうでしょう、俺たち男子同士のスリーショットってのは。あ、わびしいか？ まあなあ、俺もわびしいぜ」

どうせこいつ、旅行前にやらかした近江と西月をめぐる大騒ぎのことを言っているんだろう。クラスの女子同士でいちゃいちゃしやがってなあにが楽しいんだって俺は思う。俺の愛はひと

えに、

「いや、羽飛、お前の愛は鈴蘭優に捧げられていることはよくわかっているんだ。とにかく来い」

女子っぽい仕種で更科がもう片方の腕にしがみつく。なになよなよしたことしやがるこいつ。いったい青大附中評議委員会っていうのは、みんな少しずつつかれてるんじゃないだろうか。立村がはるかにまともに見えてくる。

「まずさ、まっすぐ行くとさ、この辺では有名なソフトクリームのお店があるらしいんだ。二軒向かい合っていて、目の前で売り子のお姉さんが押し売りしまくるんだとさ。ま、流れに任せて買ってみるのもいいんでないか？」

んなもん食いたい気分でもなかったが、もう遠くに立村たちの姿が消えているところみると、追いかける気力も萎えた。腕にしがみついている更科がじゃまってもあったしな。それになんだか、天羽の奴が俺の行動パターンまでしっかり読んで待ち構えていたってのが腑に落ちない。全部計画どおりってことだったら、しゃあない、今晚は立村と二人っきりの暑苦しい夜だ。あいつを問い詰めるのはその時にしよう。して、午前中の仕事としては、

「わかった。いいかげん気色悪いから、腕、離せ」

「ついてくる？」

しょうがない、「ああ」、そう答えた。

「じゃあ行くっか！ 天羽、いこいこ、ソフトクリーム、そーふとくりーむっ！」

「誰かと食べたいそふとくりーむ！」

「花いちもんめ」のメロディーにあわせて歌う二人の野郎どもは、どう見ても不気味だった。

とはいえ、ソフトクリームはまじでうまかった。なんてっか、生クリームをそのまま嚙んでいるみたいだった。ありゃあなめる、じゃなくて、「嚙む」だな。歯ごたえあって、しかも濃い。がしがし前歯で嚙んで、しっかり腹に収めた。

「名物のソフトクリームですよ！ さ、これ持って！ 二百五十円ですよ！」

あれは売る、なんてもんじゃない。売り子のお姉さんときたら、ソフトクリームを両手に持って、片方を俺の喉元に、もう片方を天羽の口許に押し付けるようにして、「もう触ってるでしょ、買わないと弁償よ」みたいな乗りで買って買ってとくるわけだ。一歩間違うとシャツにべっとりつくかもしれねえ恐怖。立村 だったら身動き取れなかつたらろう。「押し売り」寸前ギリギリセーフってもんじゃあねえだろうか。

まあ最初から俺も、天羽も更科も買うつもりでいた。前もって天羽からも、

「まじで売りこみ凄いやから、ポケットに小銭用意しておいた方がいいって本条先輩言ってたな」

ちゃりんちゃりんと金は用意しておいた。金さえ払えばすぐに退散するってところが現金だが、まあいい。三人、仲良く溶けかけたソフトクリームを片手にぶらぶら歩くことにした。石畳の路は青大附中以外の制服でかつ中学生っぽい雰囲気の中がうろうろしていた。他校生だからといってガンをつけようとする奴もいない。みなほのぼのとお土産店を覗き込んだりしていた。女子が圧倒的に多い。青大附中の連中はまだたどり着いていないようだった。そりゃそうだろう

。みなスタンプラリーに勤しんでいるんだからな。

「ほんと、うめえなあ」

口の周りをサンタのひげ状態にしている天羽は、拭いながら、

「ああ、せめてなあ、お前らみたいなむさい連中なんかより」

「近江ちゃんと来たかった、そうだろ？」

「突っ込むなよ。どうせ俺は、素人さ」

よくわからん会話を更科と交わしている。立村もよく愚痴っていたが、こいつら自分らの恋愛沙汰については非常におおらか、っていうか、恥知らずっぽいところがある。いくら今の彼女、近江にベタぼれだとは言っても、振った女子だっているわけだしもう少し気遣いせよ、と立村はいつも激昂していたもんだ。そうだよな、俺もそう思う。

更科だって顔はガキンチョだが、やっていることはそうとうやばいと聞いている。なんでも今、こっそり保健の都築先生と付き合いかけているそうじゃねえか。よくわからねえけど法律で未成年者と大人が付き合うことは一步間違うとお縄だってことも知らないわけじゃない。ほんと、一筋縄ではいかない連中だ。本当だったらもうひとり、「青潟のシャーロック・ホームズ」を名乗る勘違い野郎が混じっているはずなんだが、なぜかいない。いったいなんなんだか。

「羽飛、あんまり握り締めてると、ほら、尾っぽから雫垂れてるぞ」

「ほんとほんと、先走り汁って感じでさ」

にやにやしながらふたりは俺の持っているソフトクリームのコーンを眺めながら言う。

よくわかっているぜその辺は。俺は勢いよくコーンをかじり食った。

「あのなあ、俺がなぜお前らにくっついてきているかっていうとだ」

本題にもどさねばなるまい。わざと生真面目な顔をしてやった。俺だってそのくらいできるんだ。

「似合わねえなあ」

「うるせえ。とにかくだ。なんで立村が意味不明の行動を取ったのか、その説明だ」

「まあまああせらずに」

コーンの下からすす、っとアイスクリームの溶けた汁をすすりとり、天羽はにかっと笑った。

「今回については羽飛にも少々協力してもらわないとまずいんでな。ちゃあんと、俺のおごりでコーヒータ임、いたしやせんか？」

「なんだよ、ここでしゃべれねえのかよ」

「いやなあ、うちの学校の女子どもにばれたら、半端でなくしゃれにならねえから」

「もうならねえだろ。うちのクラスの男子連中全部、見てるんだからな」

「そこをなんとか、羽飛、君の腕で、な」

また片方の腕を、気色悪くも更科がつかんでくる。お前甘えたいんだったら都築先生だけにしろ。「お、いい雰囲気のところあるじゃねえか。いこいこ。団子食お」

いかにも時代劇に出てきそうな、ベンチに赤い布をひっかけて、でかい傘が脇にすんと刺さっている団子屋を発見した。話が話でなければ俺も団子を食いまくるだろうが、天羽、更科の顔を見てもたいしてうまそうには思えない。口を手の甲でもう一度拭くと、俺はA、C評議ふたり

にくっついて団子一皿を注文した。甘いソフトクリームの後にはずんたもち風味の緑色な団子。この名物らしい。甘すぎずちょっぴりしょっぱくて、うまかった。

じじいくさく天羽は歯を楊枝でつつきながら、
「羽飛、お前立村とは、言っちゃあなんだが、親友だよな」
聞くも恥かしいことを尋ねてくる。

「お前正気で言ってるのか？ 普通聞けねえだろ」
「じゃあ違うのか？」

また、つっこまれた。別に俺としてはたいしたこと言っているわけじゃあねえのだが。だってそうさ。女子ならともかく男子がだぞ、「親友」なんて言葉、さらっと吐けるかっての。そりゃ立村はかなりぼけているけれどもいい奴だと思うし、嫌いじゃあない。がしかしだ、いきなりこういう言葉聞かれて「ああそうだよ」と普通言えるか。

「まあ、おめえらよりは、お友だちかもな」
「そうかそうか。なら安心したぜ。でな、羽飛」

その辺でうろうろしている紺色の着物に白いエプロンしているお姉さんに聞かれないようにしたかったんだろうか。天羽は俺の耳の穴にぼそっと呟いた。

「じゃあ、今のことぜーんぶ説明してやるから、その辺をうまーく、調節してD組の連中に報告してくれねえか？」

「はあ？」

また身を摺り寄せてくるのは更科だ。だから普段から都築先生にしていることを俺にするのはやめろって！ 気持ち悪いっつうの。

「まだこの辺は未確認情報だし、ばれたら別の奴の名誉が傷つくことになるんで言えないんだがな」 天羽は膝に落ちたずんたもちの緑色の粉を払い、大股広げて両膝つかんだ。腰を入れたって感じだった。

「俺たちの仲間たるある人間が、諸般の事情により、青大附中を追い出されるのではないかという噂があるんだ。このあたりは学校側の事情だし、俺たちもその辺はあんまり聞けねえんだけどな。ただ、以前から噂がないわけではないんで、俺たちはトップシークレットとしていろいろ情報を集めてきたわけだ。せっかくの仲間がだ、学校側の陰謀かなんかで追い出されるなんてやだもんなあ」

「あ、二年の杉本のことか？」

あいつを仲間と思っているのはたぶん全世界探しても立村しかいないと思うんだが。思った通り天羽と更科は、肩を外国人みたくすくめて「NO、NO！」と首を振った。

「あれだったらみな大歓迎で追っ払うに決まってるだろ。ま、立村だけだ。心配しているのは。あまり詳しいことは言えねえけど、まあ、同じ学年だってことくらいは、ばらしていいよな」

「誰だよそれ！」

「だから言えるわけねえって言っただろ。とにかくだ。その件について調べたことをだ、今回の修学旅行中に少し、委員長にご報告したいということで、あえて今回召還したってわけだ」

そうそう、と更科が頷く。あどけないガキンチョの笑顔だが、そんなんで納得する俺と思ったかばかもんが。俺は腰を椅子斜めにずらし、天羽と向かい合った。

「立村、そのこと知らんのかよ。仮にも評議委員長ともあろう奴が、天羽の騒ぎを仲裁する程度かよ」

「あ、それは失礼しやしたってとこで。ご心配をおかけしましたが、なんとか片がつきましたんで。その辺ご報告」

ご報告もなにも、西月はまだ口利けないままなんだろうが。まったく、同情せざるをえない部分がないとも言えないけれども、他人様の心配するくらいだったら、自分で片をつけれっていうんだ。天羽はへらへら笑いを浮かべつつ、まんざらでもないって顔をしてみせた。

「立村も忙しいからなあ。ほら、『E組』のこととか、水鳥中学との合流会とか、あとご存知の杉本の面倒とか、いろいろあるし。それに清坂とも相変わらずいちゃいちゃしてるしな」

——いちゃいちゃしてるのか、あれで。

あいつなりに美里のことを思い遣っているんだろうな、とは思うが、「いちゃいちゃ」と言えるレベルかあれは。もし本気でいちゃつきたがってるんだったら、まかりまちがっても、

「じゃあなんで、轟とデートなんだ？」

核心を突いてやる。こんなミスマッチ過ぎる組み合わせ、誰が認められるっていうんだ。

「ああ、あれな、トドさんが説明した方がいろいろとわかりやすくいいかなってことでさ。立村もOKしてたし」

これは更科だ。「トドさん」っていう言い方が海の鯯そのものでなんとも言えない。出っ歯でやたらと上目遣いで人を見る女子っていう印象しかないし、立村から轟の話題が出てきたことはない。美里も、A組の西月とか近江、C組の霧島の話はよくするけれども、B組の轟についてはほとんどネタにしない。存在感、なさすぎ。

「そのこと、他の連中、ほら評議の連中、知ってるのか？」

「たぶん知らないだろな。近江ちゃんは知らないだろうしなあ、更科」

「キリコは知らないはずだしあと難波も」

「じゃあ美里も知らんってわけかよ」

ますますよくわからん。いったい天羽の言う「学校側から退学させられそうになっている奴」を救う情報を、なぜ轟だけが知っていて、なぜ立村とツーショットで話さなくちゃあならないのか。俺だったら男子同士集めていろいろと相談するだろう。仮に修学旅行中に動かなくてはならないとしても、一応彼女持ちの立村に女子を使って話をさせるなんて、普通じゃあない。伝言ゲームやってみればわかる。人を挟んで説明したら大抵話がずれていってとんでもないことになるって。「黒やぎさんが白やぎさんに手紙を渡しました」が「白やぎさんが赤やぎさんにお土産渡しました」になってしまっても驚くことはないだろう。そういうもんだろ？

「じゃあなんで、轟なんだ？」

俺はもう一度、ねとっと尋ねた。

「お前らだって、立村と美里が『いちゃいちゃ』していることは認めているんだろ？ だったらなんで、彼女たる美里を使わなかった？ あいつの性格知ってたら、そりゃ簡単だろ。いっちゃ

あななんだが、轟なんて立村とそれほど接点ねえのにな」「あのなあ、羽飛」 男子ふたり、口の周りにさっき食ったずんたもちの緑色粉をまぶしたまま、じいっと俺を見据えた。

「評議委員会にはな、それぞれの役割ってのがああるわけなんだわな」

「はあ？」

天羽はゆっくり指折りながら、

「お前だって噂には聞いているだろ。評議の女子同士、最近あんまり仲良くねえってこと」

「その発端になったのは天羽、お前だろ」

切り返すと天羽は素直に応じた。

「そうだな。その辺は全くもって申しわけない」

「それとこれとどう関係あるんだ」

「女子四人の面倒な派閥から一番遠いのが、トドさんってこと。単純だろ」

派閥って、四人……いや、西月も入れると五人か。そんな中でなにが派閥だってんだらうか。

「もっとわかりやすく言うとだな、男子と女子の間をうまく取り持つことができるのが、トドさんたった一人ってことなんだ。これでわかったか」

「わからねえよ」

全然わからん。俺には天羽の言うことが理解できない。

「じゃあなんだ？ 立村の彼女は美里だが、美里も派閥かなんかに入っているから話すことができねえってことなのか？」

「羽飛、お前の気持ちはよおくわかる。お前の幼なじみを貶すわけじゃあねえよ。ただなあ」

背中から肩を組んでくる天羽。腕には更科。だからお前らの彼女代わりに俺がいるわけじゃあねえっての。天羽が何か言いかけたところを俺はさえぎった。あえてそっちの方に話を向けないようにしていたんだらうが、俺にそれは通用しない。正攻法で言ってやる。

「轟が立村に惚れてるんだろ、回りくどいこと言わずに一言ではっきり言っちゃえよ。女々しいぜ」

天羽、更科の眼ががちっと固まった。なんだ、それで終りかよ。俺はずんた団子の串をもう一度横からすすとなめて、舌なめずりした。

「ってことは話は簡単だ。余計なことくっつけねえでその辺、説明しろよ」

最初からそのラインを考えていなかったわけじゃない。

たぶん見送り組全員、同じことを思っていると俺は見た。

まず冷静に考えてみろっていうんだ。立村と美里がしっかりカップルの……まあ、ちょっと手抜きと思えないところもないが、立村側の行動からしたら……付き合いをしているのはみな重々承知しているはずだ。しかも評議委員同士だぜ？ いくら轟が立村に横恋慕していたとしても、まずはあきらめるだらう。あの二人の間に入り込む隙があるとも思えないし、こう言っちゃなんだがあの面相だったら大抵の男子は即、美里を選ぶだらう。俺のそれこそ「親友」たる美里だからそう言ってしまうところもあるんだらうが。もちろんどんな美人でも美少女であっても… …こう言っちゃなんだが二年の杉本とか、C組の霧島とか……やな奴はやだし、どんなおかちめ

んこであっても……たとえば奈良岡のねーさんとか……華のある奴はもてるのだ。この辺のバランスにもよるが、もし立村だったとして、美里以上にどきんとする女子が万が一いたら、あの杉本以外考えられない。その辺は美里も気がついていてきちんと上級生らしい対処をしているようだし、当の杉本も美里から立村を下克上、なんてことは考えていないらしい。少なくとも轟が横入りして立村がふらつくことは、まず考えられないだろう。可哀想だが轟は、あっさり振られて終りだろう。男子どもの本音はいきつくところそこだろうな。

けど、女子連中の考えることはたぶん違う。

あの存在感ない評議委員長の立村が、怖い彼女の美里の陰でこっそり浮気している、なんて勘違いした情報を流しかねない。いや、ほんと、男子連中からしたら「絶対ありえねえよ」と片付けられることが女子同士だとかなり、すさまじい展開になることが実際多いんだ。もともと美里のことをよく思っていない女子もけっこういるだろう。さらに美里の精神状態も、昨日しゃべった感じだとまだまだ、落ち着いてないって感じだ。あいつなりにかなり勇気いることも……

いわゆるその、身体のこと、だな、保健体育系の……話してくれてほしい美里の扱い方については知識を得た。普段の美里だったら平気のへいざで笑って流せることかもしれないが、今の状態ではきいっとヒステリー一起こさんとも限らない。ここはひとつ、俺か古川か、そのあたりがクッションになって説明してやったほうがいいんじゃないかと、俺は思う。本当だったら話のわかる古川あたりに代行してもらいたいもんだが、残念ながらそれも無理。となったら俺だけだろ？

だからこうやって天羽と更科にくっついてきたってわけだ。悪いな、ちゃんとお見通しさ。

「だから、なんで、お前らふたりつるんで、轟をけしかけた？」

気まずそうに緑茶をすすっているふたりの前で俺は、串を三本まとめてつんつんと頬をつつくまねをしてやった。下手すると目に刺さるのであくまでも、振り、だけだ。動かないでお互いに「どうする、どうする」と目で相談しているところが笑える。俺を甘くみていたな、お前ら。

「羽飛、ごもっとも。さすがトドさん、恐れていた通りだな」

お茶を入れ替えてくれたエプロン姿のお姉さんに「あ、どうも」と愛想良くお礼を言った天羽は、足首を膝の上に乗せて、ぽりぽりと搔いた。

「更科、しゃあねえよ。計画変更だ」

「あいよ」

目と目で頷き合う二人。男同士でいちゃついている姿見ても楽しかねえや。更科は俺の隣りに軽く足を開いたまま座り直し、ぽんぽんと膝から緑色の黄粉をはたき直した。

「そこまで知られたんだったらしかたないよね。羽飛、このこと、絶対内緒にしてくれるか？」

「もう内緒にできる状況かよ、馬鹿野郎が」

もうD組連中の門前でだぞ。できるかっての。

「いや、なんでトドさんが、立村と一緒に行動したのかってことをさ」

「あいつに夜聞き出すからそんなのもどうでもいい」

なんてたってツインルームに二人っきりだ。

「俺が知りたいのはな、なんでお前らふたり、轟をそこまでひいきにするんだってことなんだがなあ。今の言い方からしてもそうだな。お前ら、轟のことを『トドさんトドさん』ってすげえ親

しげに呼んでいるじゃねえか。天羽が近江を『ちゃん』付けで呼ぶのはわかるさ。更科が霧島を『キリコ』って呼ぶのもわかるさ。けどお前ら、美里のことはずっと『清坂』のまんまだろ。お前らの話だと美里や霧島にこのことは話していないんだなってことはわかったけどな。でもな、もし轟がどうしても、なんかの理由で立村を独り占めしたいんだったら、彼女たる美里にもそれなりの仁義があっただろいいんじゃないか？ いきなりこっそり立村を捕まえて、なかよくるんってのはなんか違うんじゃないか？って俺は言いたいんだ」

言いたいことが少しこんがらがって、わけわかんなくなったが、だいたいのことは述べたつもりだ。更科は親指を軽く噛むような仕種をした後、天羽とまた視線を絡めながら、さりげなく呟いた。

「そっか、やっぱり羽飛、清坂のことが心配で、そりゃもう心配でなんないんだなあ。やっぱし、トドさんの言った通りだよ。な、天羽」

うん、うんと頷く天羽。さっきの「どうしよう、どうしよう」って目つきとは違う。ふたたび腹が据わって怖いものなしっていう、横長の顔に見えた。

「なんだと？」

むかっときて、更科を睨もうとしたとたん、俺の肩を天羽が両手でがしっと押えた。

「とにかく、次はコーヒータイムってしゃれこみましょうぜ。俺もお前にもっとたくさん聞きたいことがあるんでさ。お前と、清坂とのこととかさあ、な、羽飛」

——俺と美里のこととあって、お前らまた定番の勘違いしてるってのかよ！

いいかげんうんざりして無視していた「ほんとは清坂さん、羽飛と付き合えばいいのにね」のパターンかよ。立村がだらしなさ過ぎるといのはさておいてもだ、いったいなんだっていうんだ。なぜ、立村争奪騒動の話が俺と美里のつまらないパターンネタになるんだ？

「お前ら、いいかげん勘違いするのはやめろよな」

「わかってないのはお前だけだつての、さ、行くぞ。すいませーん、お勘定お願いしまーす！」

更科が素早く自分の財布から千円札を天羽に押し付け、すたすたと走りだした。逃げやがったかあいつ。

「あ、更科がコーヒーの美味しい店、押えるためにダッシュしてくれてるんだ。ちゃーんと本条先輩と結城先輩の用意してくれた修学旅行虎の巻に書いてあるんだぞ、いいだろ。十一時開店だからちょうどジャストだな。さあいくぞ！」

片腕で無理矢理俺の肩を抱き、もう片方の手で勘定を済ませた天羽は、「ずんたもちーは、おいしーなー」と「こがね虫」の節で歌いながら俺を引きずっていった。こいつ、想像していた以上に相当の腕力の持ち主だ。ここで暴れてもいいんだが、本気出し合ったら即、騒ぎになるのが見え見えだったので我慢するしかなかった。ここが青瀉だったらな、こんなやられっぱなしなんてこと、しないんだがなあ。ちくしょう。

黒いコーヒーカップを片手に、窓にもたれてたそがれようとする天羽。

「かっこいいねえ旦那」

太鼓もちよろしく、ぱちぱち拍手をしながらコーヒーフロートをすする更科。

「なんだこのカビくさいコーヒーはっ！」

俺はひたすら、苦いのかそれともしょっぱいのか、よくわからん泥水状のものを白いカップですすっていた。俺の知る限り、これ、コーヒーなんてもんじゃねえだろう。漢方薬あたりをごった煮にして混ぜ混ぜした代物だと信じて疑わない。やたらと毒々しい黒い水分のかたまりだ。

「名城」と小さな白い看板が掛かっている、煉瓦の積み重なったちっちゃい店に入り、「本条先輩と結城先輩お勧めの美味しいコーヒー」を注文したはいい。一杯七百円ってのは絶対ぼってるぞ。出てきたマスターらしきじいさんも俺たちの顔を見るや、「こいつらにコーヒーの味なんぞわかるわけない」というようなしかめっ面を見せやがった。朝、開けたしたばかりなんだろう。ちらっとのぞいたカウンター奥には生ごみが残っていた。見るからに売れなさそうな店だ。歴代評議委員長のお勧めなんだから味に狂いはないだろう。信じた俺が馬鹿だった。出てきた代物がかび臭いコーヒーときた。一応メニューには「名城オリジナルブレンド」とへたくそな筆ペンで書かれていたところみると、たぶんマスターお勧めの代物なんだろう。

——金沢の絵を評価するのと同じことだわな。

周りがどんなに絶賛しようとも、また俺も金沢本人のことがまんざら嫌いじゃないとしても、絵のよさについては理解できない。それと同じだろう。せっかく払った七百円を泥水に捨てた俺は、しかたなくちょびちょびとなめることにした。いや、苦い。俺でもこれだと角砂糖三つ入れちまった。

「静かで、またいい雰囲気じゃないか、なあ更科よ」

「まんざらでもないっすよ、旦那」

相変わらず二人でおちゃらけている。俺はずっとこのカビカビコーヒーと付き合わねばならないってわけか。

「とにかく、俺に何言いたってんだよお前ら！」

かすかにクラシック音楽……かなり雑音が聞こえてくるところみると、古いレコードなんだろう。肩越しにカウンターを覗き込むとどうやらマスターのじいさん、でかいLPレコードを取り替えひっかえして、そおっと針を落とす仕種をしている。いやおうなしに俺たちも小さい声にせざるを得ない。

「いいかげん言いたいこと言えよ、ばっかじゃねえの」

気持ちよく外で、でっかい声で「だからなんだっつうんだよおめえら！」とわめくことができたらどれだけすっきりするんだろう。全くもって腹が立つ。

「まあまあ、羽飛も少し落ち着きすって」

「何が落ち着けだよったく」

「本当のことが知りたくてなんねえんだろ？ だったら黙ってあっついコーヒー飲めっての」

すっかりどこかの世界に飛んでったかのように、まぶしそうに目を細め、カビくさいコーヒーを一口飲み、表情を変えずに、
「やっぱり、本場は違うねえ」
明らかに俺と味覚が違うってことを証明する発言をした。

「お前も評議委員会の裏事情、立村から聞いているだろ？」

「聞いてねえよ。あいつ関係ねえ奴にそんなことべらべらしゃべらねえし」

これは嘘じゃない。立村はその辺シビアだ。評議委員会がらみの悩みはそれほど相談してくれないし、聞くきっかけもない。たぶんだが、二年までは本条先輩べったりだったし、そのあたりで全部片付けていたんだらうな。その頃は俺と立村、ついでに美里も結構どんぱちやってたし、タイミングが合わなかったのかもしれない。

「じゃあ、さっき俺がしゃべったことなんて全然聞いてねえってわけか」

「あたりめえだろ。まあ、な。天羽の色ボケぶりについては立村に聞かなくても、十分情報としてD組まで流れてきているしな」

本当だ。修学旅行前日に行なわれたという「弾劾裁判」。カラオケボックス内で行なわれ、結局は和やかな話し合いで終わっただけという。ちらっと聞いた。美里も立ち合わせてもらえなかったそう。清坂氏がいたら、たぶん近江さんの味方につく形になるから、西月さんが可哀想だし」との判断だった。立村もあいつなりに考えてはいるんだらうなきっと。しかし問題を起こした天羽、お前に言われたくはないな。

天羽はそれほどショックを受けた風でもなく、さらっと答えた。

「俺はもう、暫く大人しくするけどなあ。羽飛。ただ、俺なりに何とかしたいぞって気持ちはあるんだわな」

「何をなんとかしたいんだよ」

よくわからねえ。立村だったら評議委員長なんだし、あうんの呼吸ってものもあるのかもしれないが、俺は百パーセント部外者だっけ。要するになにか？ 美里と俺ができてるかどうかなんていう、勘違いをもとにして、一発脅したってわけか。

「最初に言っとくがな。俺と美里のことで妙なこと言ったらこのかび臭いコーヒーぶちまけるからな」

「しーっ、聞こえるって！」

向かい側で慌てたように更科が両手を左右に振る。知ったことか。

「妙なことじゃあねえと思うんだがなあ。羽飛、先に飲め」

天羽はまた、肩ひじを突きつつふうっと溜息をもらし、前髪を日の光で金髪にとろけさせながら、「ま、俺の方から先に言うわな。羽飛。お前の知りたいことってのは、なんで立村とトドさんがふたり仲良くデートに出かけたかってことだろ？」

あたりまえじゃねえか。返事するのもむかつくぜ。

「昨日のお前さんと清坂との組み合わせと一緒に、ってことで片がつくんだけどなあ。羽飛、それじゃあ納得しないっすね、旦那」「当たり前だろ！」

意地でもコーヒー飲むもんか。いつぶっかけても構わないように最低限の泥水はカップの中に残しておく。

「それ言うならな、俺と美里が二人で歩いている間、立村も古川としゃべってたんだが、それと一緒に考えられてのか？ そりゃあ、無理だろ？ 第一古川と美里は友だちだしな。けど轟と美里じゃあ、ちょっと違うんじゃないか」

もともと美里は轟のことがあんまり好きじゃないみたいだった。あまりよく知らない奴を悪口言うのは避けるけれども、美里の性格から考えると「うじうじしてて、人の顔ばかりうかがっていて、やたらと愛想笑いばかりする」女子は大嫌いだろう。じゃあなんでそんな性格男子版の立村と付き合っているのかは謎だ。見た感じ、確かに轟は古川タイプでも、近江タイプでもない。きらきら目立つタイプじゃない。

「まあな、トドさん、清坂みたいなタイプあまり好きじゃあねえからなあ」

「そうそう」

なんだこいつら？ やっぱ轟びいきじゃねえか？ 美里よ、いったいお前、男子評議連中に恨み買うようなことやらかしたのか？ 俺の知ってる限りじゃ、十分仲良くやっているとか、問題起こしている女子たちの間を懸命になだめているとか、いいことばかり聞いていたんだが。

尋ねたいのはやまやまだが、誤解を招く恐れがある以上、不必要に言葉を発せられない俺の口。非常に痒い。

「まあいいか、一言で言っちゃおうか」

天羽はぐいとコーヒーを飲み込み、舌出してあへあへと息遣い荒くした。

「つまりだな、女子の間において過去現在、トドさんが評議のトップなんだわよ。信じられねえ話だがな」

「轟がトップ？ どういう意味だよ」

にかっとう更科が笑う。

「つまり、問題ばかり起こしている女子連中の中で唯一、まっとうに話のできる相手ってことだよ。お前の清坂のことくさすわけじゃないけどさ。あ、天羽も近江のことを……」

ぽこりと頭をはたく天羽。目は笑っている。小指を一瞬ぴっと立てて、すぐに引っ込めた。

「近江ちゃんは別。評議に浸かってねえもんな」

俺の隣りに真っ黒い手が伸びて、白いカップになみなみと泥水、もといカビの香りしたコーヒーが注がれた。なんも言わないうちにだ。頭の真っ白なじいさんが、俺のカップが空になったと見るや否や飛んできたらしい。七百円だけあるや。天羽も気取った格好をすぐにあらためて、

「あ、俺もお願いします」

とカップのまま差し出した。天羽の表情が窓辺の光でなんとなく、学校の先生っぽい顔に見えた。ひとりだけ年寄りになった感じだった。

それから始まる天羽と更科の言葉を、俺は口を挟まずただ黙って聞いていた。

コーヒーを注いでもらってよかったと思ったのは、時間つぶしができるからだった。

かび臭くても、やたら苦くても、口許だけ大人になれるから、やっぱしコーヒーっていい。

「まず俺たち評議委員会の成り立ちから説明するわな。最初に立村が評議委員長として本条先輩に選ばれて、その補佐を残りの連中で行なうというのが、一年の頃から決まっていた案なんだ」
そりゃあそうだな。立村が本条先輩のめんこだってことは重々承知だ。

「ただ、立村はあの性格だろ。いい言い方すれば人がいいけど、裏を返すと優柔不断っていうか、どうでもいいことを真剣に悩みやすいつてか。下の連中に突き上げ食らえば自分ひとりで抱え込んでしまうし。こりゃあやばいな、って前から俺も思ってたってわけだ。なあ更科」

頷いている更科。ほんとかこいつ。俺も人のこと言えた義理じゃないが、男子同士の友情の表れてるのは、基本的に「どつきあい」じゃないのか？

「種は一年の頃からいろいろ蒔かれていたってわけだ。俺も不本意ながら偽善者として振舞っていたし、立村も本性見せないし、更科もこんなエロ野郎だってこと隠してたし、難波も似たようなもんだったな。表沙汰にしないでこそそそしていたわけ。そんなかで女子連中だけは相変わらず仲よし同士でいいじゃございませんかってことだったんだが、状況が変わったのは二年以降だな。ご存知、立村の離脱っすね」

なんなんだ？ 立村の離脱って。俺はコーヒーをすすりつつ、ごくんと数滴飲み込んだ。喉がじわっとする。

「俺たちは最初、立村が付き合いかけたんだって思っていたんだわよ。清坂にさ。けどあとあとから情報上がってきたところによると、清坂からアプローチかけたんだってな。聞いた時かなりみなショック受けてたぞ」

そんなショック受けることかい、お前らと突っ込みたくなる。美里もいつも愚痴っていることだったし、別に先入観のあるなしだけの問題じゃないかと思ったりもする。立村と美里が「つりあわない」と勝手に思い込んでいる連中が多いだけのことなのだ。一回じっくりと立村と話してみればわかるが、女子受けはあまりしないかもしれないけれどもやることはきちんとやっているし、かなり根性入れなくちゃいけない時は授業サボろうが宿泊研修ぶつつぶそうが、なんでもやる。うちのD組男子たちは同じことを思っているだろう。二年時代のことを思えば、誤解されてもじゃあないか。

「で、一度俺たちは女子連中の行動がだんだん怪しくなってきたことにも気がついたってわけだ。一番の発端は下に新井林と杉本が入ってきたってこともあるんだけどな。立村、杉本のこと可愛がっていたし、清坂も睨んでいたしあまり俺たちもいえなかったけどな。ただ、あいつの性格上ちょっとあぶないなっていうことは感じてたんだ。そこで、評議委員会内でこっそりと、一部チームを結成したってわけ。それが俺、更科、あとトドさん」

よっくわからねえ。なんで轟がそこに出てくるんだ。美里とか、せめて霧島だったら話も通じるだろうが。俺の思いっきり苦みばしった顔を見たんだろう。まずいコーヒーの味ではないし、かめっ面に天羽はうんうん頷き、

「霧島は単純だが悪い奴じゃあない。あいつもいろんな面で被害者なんだ。あと、羽飛にはほんと悪いけどな、清坂はほとんど使い物にならねえわ。てか、立村の方が大変なんじゃねえかって思うな。気を遣い合ってるのが見え見えでさ、よくあいつら付き合ってるよなあって思う」

余計なお世話だったの。俺だってわからないわけじゃないが、あのふたりそれなりにうまくや

っているの知らんっていうのか、節穴め。

「ああそうだよな。難波も同じようなこと言ってた」

神経さかなですのようなことを今度また、更科がにこやかに笑う。

「別に仲のよしあしってわけじゃあない。ただ、野郎同士で集まってるんだな、立村の奴、もうすっかり神経ぼろぼろなんだなってことがよっくわかるんだ。その一端を担ったのが俺なんで言い訳は出来ねえけどな」

お前が西月を振ったから立村は胃が痛くなるような日々を送ったんだろうが。

「ただ俺としては、立村が清坂の行動で日々落ち込んで、どうすればいいかってストイックに悩んでいる様子を粒さに見てだな、こりゃあこのままだったらあいつ、つぶされるぜって思ったわけ」

——美里にかよ！

飲み込んだコーヒーがなんだか毒薬に思えてきた。

俺の方が変になってきている。天羽の視線は自然と黒いカップの中に落ちてゆき、唇からふうともれた息と一緒に白い点に集まった。妙にかっこいいんだが、気取っている風にも見えなくはない。隣りでしゃかしゃかとコーヒーフロートをつついて喜んでいる更科と対照的だった。

「おい、お前なあ、仮にも俺の前でな、親友同士の悪口をそう言うのは、あんまり趣味よくねえんじゃないかね？ 天羽、お前が美里のことを嫌ってるのはよっくわかったぜ。けどな」

「嫌ってなんかないっすよ。誤解、せんといえな、羽飛くん」

「気持ち悪いな」

吐き捨てた俺の言い方に気にすることなく、天羽はにまっと笑った。

「ただ、今の女子連中の行動は立村を追い詰める一方で、評議委員会にもプラスにはならねえなと。そう思ったわけだ。言っとくけど俺、霧島もそう嫌いじゃねえよ。てかあいつ、馬鹿いくらやっても、憎めないもんなあ。なんかからっとしてるだろ。裏表ねえし、納得すれば素直に自分を責めてくれるし。あれだけアマゾネスの破壊の限りを尽くしてもあいつのこと嫌いにならないのは、人徳だよな」

天羽の論理から行けば。裏を返すと、どんなに好かれようと努力しても嫌われる西月は、人徳がなかったってことになるんだろうな。

霧島と同じクラスの更科がうんうんと頷きくちばしを挟む。

「俺もキリコのこと、面白いと思うよ。無理に評議ならなくたって、十分みんなめんこがってくれるのになあ」

「それと美里とどういう関係があるんだ」

悪いが俺は評議女子たちの裏事情になんてそれほど関心がないのだ。評議の男子連中が美里のことをそれほど評価していないってことはよっくわかった。なら、うちの女子たちとは別の意味で「立村と不釣り合い」だと決め付けているのがなぜなのか説明しろ。

「うんそうだな、論理的に言えるかどうかは別としてだ。あいつ、無理してるよな、清坂のために、って思うことが多くてな」

「美里も相当無理してるぞ。あいつに合わせるために」

思わず口走ってしまい、やばっと思った。

落とされた。

愛かあらずにんまり笑う天羽と更科の前で、俺は「沈黙こそ金」という言葉をかみ締める羽目となった。

ったく、美里もなんでこういうところで、なにへましてるんだよ、ばかがっ！

「まあ、あのふたりも付き合っているんだったらそれなりに考えるところもあるんだろうけど、評議委員会の中だけでも自由にしてやりたいよなって思ったのがまあきっかけさ。どうしても女子との連絡は立村、清坂を使わないとまずい雰囲気だろ？ けど清坂を通して通達を送ると、大抵ろくなことにならない。霧島はあのまんますとんと言われたことをそのまんま過激に行動に移す奴だし、清坂は頭が働く反面自分のやりたいことを押し通すから結局立村の意としたことが伝わらない」「それは立村が説明、どへただからじゃあねえのか」

「違う。立村は立村なりに一生懸命やってるんだ」

天羽は小指を立ててまたコーヒーを口に運んだ。気取るなっの。

「立村なりに懸命に努力しているのに、大抵女子たちのあたりで話がひっくり返ってしまう。その理由ってのが、やっぱりナンバー2に清坂が入っているからじゃあないのか、という結論に達したんだ。で、話戻すな」

最初からその話に持って行っていうんだ、まどろっこしいな。

「この旅行が終わってから、大規模な評議委員会改革を行ないたいと俺は思っている。俺だけじゃあねえ、更科もそうだし難波も、それからトドさんもそうだ。俺たち三年が現役のうちに形をこしらえて、ゆくゆくは二年連中および生徒会連中に渡したい、そう思っているところなんだ。けど、このままいいかげんまま進んでいくとつまらん形にまとまってしまう。ってわけで、立村と一度ゆっくりと相談したいと思っているんだ」

「何もせっかくの自由時間使って、それで轟使ってか？ 轟が立村に熱上げていることを利用して、か」

「これは誤解。羽飛、お前さあ、ずっと思っていたんだけどさあ」

こいつらの思考飛躍に、俺、まじでついていけねえ。

「お前、なんでそうもトドさんのことそうも馬鹿にするわけなのかねえ。お前ほとんどあいつのこと知らないだろ？ 出っ歯女って程度だろ？ それを何故最初から、立村には相応しくないとか言って決め付けるわけだ？ いくら清坂がお前の幼なじみだからって、露骨に他の女子を馬鹿にするのはどうかって思うぞ」

「てめえになんか言われてくねえよ！」

「まあ、その気持ちもわかるさ。俺も嫌いな奴はとことん嫌う性格だしな」

天羽はあっさり認めた。

「だがな、俺は女子を顔で判断したりなんかしない。そ性格の悪い女子はとことんぶったぎるが、多少出目金だろうが前歯が二枚輝いていようが、自分の頭で考えて賢い行動を取る奴はえらい

って思えるんだ。男女関係なくな」

そうか、じゃあ西月は性格が死ぬほど悪かったから、ぶったぎったってわけだな。その辺は微妙なラインなんで答えるのが難しいが。

「要するに、トドさん以外の女子は、自主性ないよね。自分がないよね」

とどめを刺したのはやっぱり、更科だった。なんだかこいつら、妙にむかつくのは何故なんだ。

原因はなにがなんだかさっぱりわからん。要は美里が評議委員会関連で相当の大ポカを犯したらしい。で、男子一同相当頭にきていたってわけか。まああいつの性格だったら考えられないこともないんだが、でもそういうボケをかますのは大抵、相手の立村じゃあないだろうか。美里はむしろ立村をサポートしようが んばっていたんじゃないだろうか。立村だってしょっちゅう口にしてたぞ。「清坂氏の方が、俺よりしっかりしてるしな」ってな。でもそうじゃないってわけか。天羽も更科も、たぶん難波も、美里は霧島や西月レベルと同じだってふうに見ていたってわけか。

俺も男子の一員として思うが、否定はしない。たぶん。女子だしなあいつ。

でも、なぜそういうことをだ。俺に話す？ 立村も美里も同じレベルの友だちだって思っている俺にだ。仲間割れさせたいわけか？ ふざけるなっていうんだ。俺はくそにがいコーヒーを無理矢理飲み下した。はらいた薬みたいな味がするぜ。

「いいかげんまどろっこしいこと言うのはやめろよ。要はどうしたいわけなんだ？ お前ら。轟の評価が美里よりも上だってことはよっくわかった。自主性がないってこともよくわからねえけど、評議の連中からしたらきっとそうなんだろうな。けどなんでだ？ なんで俺なんかそんなネタ振るんだ？ それと立村轟のデートとどう関係あるんだ？」

「あせるな、もらいが少なくなるぞ」

意味不明の言葉を呟く天羽。こんな静かな喫茶店でなかったら、ほんとぶん殴ってるぞ俺も。

「つまりだな、羽飛」

この日何度目かの「つまりだな」を繰り返した。

「お前に清坂のことをなんとかしてほしいってわけなんだ。これから先」

「はああ？」

あんぐり口を開けてしまった。反撃の言葉も出ない。情けねえ。

「俺も清坂は悪い奴だとは思っていねえよ。ちゃっちゃかしているし頭は悪くねえと思うし。けどな、これから評議委員会の中で動き回られると、これからちょっとまずいんでないかって思うんだ」

「じゃあお前、直接美里に言えよ！」

当然だ。言い放つ。

「天羽なあ、お前なんでそういうこと、回りくどいやり方するんだ？ 評議委員会のことは評議の中で片付けろよ。それが彼氏の立村に言うかだ。美里だって馬鹿じゃねえから言われたらすぐ気づくだろ？ あんまり誤解めちゃくちゃされること言いたくねえけどな。あいつそういうとこ

ろはきっぱりしてるぞ。男子とかわんねえよ」

そこまでわめいて、はっと息が詰まった。

——男子とかわんねえよ。

胃が臭くなったような匂いが自分の口から漂ってきた。妙に横っ腹が痛くなってきた。

天羽と更科はふんふんどこ吹く風って顔で、俺を眺めていた。

「天羽さあ、たぶん羽飛、混乱してるよ。もっとわかりやすく言った方がいいよ」

何を今更とりなそうとするんだ、犬ころ顔した更科よ。俺が言葉を詰まらせたのを、てっきり別のことと勘違いしてるんだろう。

「そうだな。けど個人的な情報をばらしあうのもどうかと思うぞ。まだ決まったことじゃねえし」

「OKなとこだけ」

天羽は窓辺をすうっと眺めた。鼻の上あたりを両方の人差し指でつんと押した。くっと息を詰めた。

「しゃあねえ、また『アルセーヌ・ルパン』気分で演説と行くか」

——気取るなあほらしい。

けど、一瞬にして天羽の面は、気取りきった気障男の顔にはや代わりした。

「さっきの話と無理やりつなげるとだ。俺と更科、あとトドさんの三人はちよくちよく集まって、今後の評議委員会をよりよい形で、次の学年につなげるかってことを相談してたんだ。羽飛は変に思うだろうが、立村を間に入れてはやらなかったのには理由があるんだ」

なんなんだ、そんな理由。仮にも評議委員長さまを交えないでなにが。

「立村の場合、誰に対しても中立か、わりと弱い立場の相手に偏りがちな態度を取るんだ。この前の新井林と杉本の件でもそうだし、まあ言っちゃあなんだが俺のこともそうだった。とにかくどっちかが負けそうになると、そっちの方につく。結果はバランスよく終わるって感じだな」

言われてみると頷けるところもなくはない。過去のいろいろな事件を思い起こすと。

「そうだな、立村はとことん敵を叩きのめす性格じゃあねえよな」

「あいつのいいところっていうか優柔不断な性格っていうか、その辺はさておいてもだ。とにかく立村は丸くまああるく収めようとするタイプなんだ。けどな、すっげえ残酷な言い方するようだけど、あるところではとことん、きっぱり片をつけなくてはならない時もあるんじゃないかって思うんだ」

天羽と西月のいざこざのようにかよ。相手が口きけなくなるくらい痛めつけるってことかよ。ま、立村はそんなことできねえな。

「だから、今の女子たちの行動とか、まあ迷惑行為ってのか？　そういうことをされたら、ある程度のところで雷落とすべきなんじゃねえかってのが俺の考えだったんだ。評議委員を降りるとか、もしくは有力な地位から降りてもらおうとか、いろいろあるだろ？　たぶん立村だったらそういうきついやり方できねえって思うんだ。新井林と杉本、どちらを次期評議委員長にするかでもめた時も、結局まわりの意見を受け入れて新井林にして、杉本を別の路線で動かそうとしたけれ

どもな。あれはまずかったぜ」

よくわからん。立村があつたらと胸のでかい女子を可愛がっていたことくらいしか知らん。

「まずかったって、何がだよ」

「俺だったらまず、委員長指名制度つてもんをなくす。あ、これ誤解せんでほしいんだけどな。俺は立村が委員長で正しかったと思うし、自分が指名されなかったとかそういうことで恨んでいるってわけじゃねえからな」

すぐにそっちの言い訳するとこみると、やっぱり気にしてるんだな。

「要するに委員長指名制度つてもものがあるから、一年終りの段階であだこうだつてもめるわけなんだよな。単純に、二年の学校祭終了後に、民主主義万歳つてことで選挙やればいいんだよ。挙手でもいいし拍手でもいいや。生徒会役員選挙のようにな。けど、あいつは決してやらねえだろうな。その辺の違いだな。羽飛、お前良く立村に泣きつかれてなかったか。『俺より天羽の方が委員長には向いてるんだよな』とか。俺のこととことん持ち上げるつて」

ひょいと天羽の表情を伺ってみた。俺の眼が節穴でなければ、なあんも考えていないすぱっとした笑顔だ。更科も頷く。和やかだ。

「勘違いするなつて言つてやってくれよ。俺、立村をさっき、優柔不断だとか言つちまったけど、けどああいう奴だからこそみんな助けたいつて思うんだよな。いつのまにか周りがあいつの手をひっぱつていくつていう感じなんだよ。それが俺としては楽。だよな、更科」

「うん、難波も似たようなこと、言つてたよな」

何もここで、いない立村を称える会に変更しなくたつてよかろうよ。俺は無視だ。

「立村はあのまんまでいいつて俺は思つてる。けど、女子連中からの受けも悪いのがネックだ。本当だったら支えるべき清坂も女子単体としてはいいだろうが、サポートつてところになるとちょっとまずいだろう」

「だからどこがまずいつていうんだよ」

同じ質問だ。腹が燃える。

「たぶん立村のやりたいこととか、これからの方向を考えていく上では、サポート側をもう少し整えていきたいなつて思つたわけで、今回、顔合わせつてわけなんだ」

顔合わせ。頭の中が混乱してきた。更科が補足説明する。

「つまり、立村の委員会内の補佐役として、トドさんに入つてもらいたいつてことなんだ。単純だろ？」

「単純もくそもあるかよ！ お前らそんなことを言うために、こんな怪しいコーヒー二杯も」

「しーっ！」

更科の仕種に思わず黙る。天羽が割り込む。

「もちろん清坂に評議を降りて欲しいとか、そういうわけじゃあないんだ。二人の熱い仲を引き裂きたいともさらさら思つちやいませんつて。ただ俺としては、もしトドさんがこれから先、立村といろいろ相談を持ちかけたりした時に、清坂がまたよけいなことをやらかすんでないかつてそれが心配なんだよな」「だからそういうこと美里に言えよな！ 何で俺なんかに」

胃がぎゅうつと引き絞られるような感覚あり。押えて腹のどこをさすつてみる。角砂糖をか

じる。甘いのか苦いのか区別つかない味だった。

「そりゃあ、単純だろ」

更科も真似して口に角砂糖を放り込み、かりこり噛んだ後わんこの目で見つめやがった。

「今、一番清坂のこと考えて焦ってるの、お前だけだもんな。羽飛」

本当に聞きたかったこと、全然聞かせてもらえない間に、話は俺一本に絞られていった。

青大附中の教室の中だったら、青潟の街だったら。

俺は絶対、言い返すことができたろう。

こんなカビくさいコーヒーの出る、気味悪い店でなかったら。

「お前、さっきから清坂のこと『親友』って繰り返してるけどな」

天羽は肩ひじ突いて、俺の顔を覗き込む仕種をした。黒のコーヒーカップを置いた。

「『親友』ってのは、もっと自立してるもんじゃねえかって思うんだがなあ」

「自立してねえってのかよ？」

「そ。俺から見るとどうみてもお前、清坂のことを、『守ってやりたい』って顔して話してたぜ」

「どういう顔だよ。顔に文字でも書いてたか」

「そういうこと。一時期の天羽が近江見るたびに見せてた顔と同じだもん」

なんと天羽の奴、否定しなかった。更科の頭をぐりぐりと片手で撫でた。

「どうも俺、ここんところ恋愛感情をもろに顔だししている奴見ていると、ぴんと来ちまう体質になってしまったみたいなんだよなあ。例えばな、俺たちとトドさん、ありゃあ恋愛感情ねえってわかるだろ。けど友情ってもんはちゃあんとあるんだ。例えばお前がさっきちらっと言ったよな」

これだけでなぜ頭に蘇っちまうのかわからん。

——要するに、立村に轟が惚れているんだろ。

「俺もその辺は考えねえわけじゃあねえけど、でもな。お前が焦るようなことはねえよな、って信じてるんだわ、俺は」

「何が信じてるだよ」

「清坂から立村を奪っちまおうなんて、そんな汚いこと、トドさんがするわけねえし、その信頼裏切らないって奴だって思っているしな」

「どこからそんな意味不明な信頼持てるんだよ」

「けど、お前、清坂のこと心配でなんねえんだろ？ もしかしたらトドさんが立村にちゅーを迫ったりして、せっかくのベストカップルをぶっこわすんじゃねえかって。そうしたら清坂が泣くんじゃねえかって。いや俺からしたら、たぶんトドさんが本気だしたら清坂勝てねえと思うけどな。でも、お前からしたらそんなことよりも、清坂がどうなるか、が心配なんだろ？」

「付き合い長い奴をなぜ心配しちゃあいけないってな！」

「つまりだな、羽飛」

天羽はゆっくりとコーヒーカップを持ち上げた。何度目かの「つまりだな」だろうか。

「俺もただ今、お前と同じ気分を、上方漫才愛好家の彼女に対して覚えているってわけ。同志、

わかるぞその本音。だったらどうしたらいいか、わかるだろ？」

「わからねえよ！」

「前、清坂の面倒を見てやってくれよ。お前しかその辺できねえよ。それだけだ」

天羽が言いかけた言葉を全部聞かずに俺が千円札をテーブルに一枚、叩きつけて店を出た途端、煉瓦につまづいて思いっきりこけた。

同時に窓辺から手を振っている天羽と更科の顔が覗いた。

——なあにが、「清坂を面倒見てやってくれ」だあ？

学校に戻ってもあいつらとはもう金輪際口も聞きたくない。いつものパターンの誤解かと覚悟はしていたが。

俺だって気づかなかったわけじゃない。たぶん退学がどうのこうのっていうのは霧島のことだろう。昨日の「おさわり」発言とか、「オヤジカメラマン相手にモデルやった」とか、そのあたりの関係かもしれない。その辺は俺も想像していないことではなかった。そのことを立村に話すために轟がこっそりとツーショットの振りをして……と最初はあいつら、ごまかすつもりだったんだろう。凶星で俺が轟のことを匂わせた途端、今度は俺を攻撃かよ。最低もいいとこじゃねえか。ありもしない「羽飛と清坂は両思いだがなぜか立村と付き合っている」ってガセネタを投げつけられ、評議委員会のどろどろに巻き込まれた拳句、たぶん大泣きしちまうであろう美里の慰め役まで押し付けられたってわけか。お前らこそ「友情」と「愛情」の区別わかってねえよ。なあにが自立だ。なあにが「守ってやりたい」だ。俺も美里も十分、自立しているぜ。当たり前だろ、あいつ、ひとりで何もできないことなんてあったかっての……？

——D組連中に、本当のことなんか言い訳、しねえからな。

しょうがない。金沢たちを追っかけて、すぐに合流しよう。

今の話は全部ちゃらだ。嘘八百だ。そんなこと、しゃべる必要もない。

一番いいのは今夜、立村を真夜中までとことん正座させて白状させるって常套手段。

奴自身の口から出た事以外、ガセネタ誰が他の奴にばらすかってな！

美里と近江さんがお笑い芸人ショーで盛り上がっているのはよかったんじゃないかって思う。全然心休まる間なかったもんね。近江さんもそのあたりだいたい 勘付いているんだらう。余計なことを話し掛けることなく、ひたすら上方芸人の素晴らしさおよび漫才の面白さについて熱く語っていた。私がひいちゃうくらいに、だから相当なもんだった。

四日目、昼。私が語るべきことなんて、なんにもなかった。

美里のダーリンが急遽、別行動を取らざるを得なかったってことだって、帳消しになったんじゃないかって安心していた。私だけ、どうしようもなく未練がましく、

「ああ、羽飛とデートする最後のチャンスだったのに！」

と口走りたくても、できやしない。

だからホテルに戻ってD組男子連中が南雲ではなく、立村をネタにしてざわめいているのを発見した時は、そりゃあ驚いた。修学旅行最後の夜、ふたりっきり、ツインルームにて仲良し同士と一緒にどうぞ、けど不純異性交遊は厳禁よ。そんなお約束。けどみな、女子たちの前で、

「立村とトドさんがさあ」

「なんであんな出っ歯となあ」

「清坂とまた、喧嘩したのかよ、こええなあ」

などと「なあ」「なあ」の連発やらかしたら、美里だって気づくに決まっている。

なんでトドさん……たぶん、B組評議の轟さんのことだらう。評議女子とはみな仲いいつもりでいたけれど、どうも轟さんとだけはウマがあわないタイプだった。嫌い、というわけじゃあないんだけど、やたらと私たちの顔を見上げるようにして、無理矢理話をあわせようとするところとか、ほんとは関心全然ないくせに映画「砂のマレイ3」の予告を無理矢理もってくるところとか。なにそんなに卑屈なのあんた、ってどつきたくなる。この辺はたぶん、美里も同じだらう。しょっちゅう言ってたもんね。「琴音ちゃんもう少し堂々としなよって、言いたいよね」って。

けどなんで、立村と轟さんとがセットで語られているんだらう。

ネタの震源地、立村をまず探した。D組を初めとする男子連中が立村を遠巻きに眺めているのがなんか他人行儀だった。いつもだったら「おい、立村、お前なあにやらかしたってんだよ、ったくお前ばっかだよなあ」とか言って、どついたりするのが普通なのに。なんか男子たちも動きが変だった。みな、羽飛の方ばかり見ている。みな、といっても南雲たちのグループは除く。立村に近づかないように、恐る恐る、あいつの周りに空間を作ってやっている。その代わり、B組、C組の男子一部が「ひゅーひゅー」とか言って声をかける。

「立村がなあ、まさかなあ」

「評議委員長さまは根っからの女好きかよ」

何がなんだかよくわからない。立村の様子をうかがう。

でっかい茶色の紙袋をぶら下げて戻ってきている。轟さんと一緒に戻ってきたわけではなさそ

うなのだけれども、美里には声をかけてこない。私にもだ。羽飛の顔を見て、何か言いたそうにしていたけれども、睨まれてあっさり顔をそむけていた。立村と羽飛、本日仲良し二人ツインルームの夜のはずなのに、大丈夫なのかあいつら。

評議委員長さまの情けない面なんて見てても楽しくないので、いとしの羽飛を探す。

いたいた、ぶっくり顔を膨らませて、派手なくしゃみしてやんの。

近づいてみるとちょっと汗臭かった。何してたんだろう。聞いてみることにした。

「羽飛、なんか凄いことになってるよねえ」

ひとまずロビーで一度、先生たちのご注意を受けた後、荷物をそれぞれ抱えて自分らの部屋に戻るようになっていた。本当だったら最後のクラスミーティングが予定されていたらしいのだけれども、先生たちもかなり疲れていたようで急遽、風呂・夕食・即、就寝に切り替えられたようだ。ありがたかった。やっぱりお笑い楽しんだら腹の皮思いっきり避けそうになるもんね。

羽飛はロビーに黒いポストンバックを置いたまま、その上にどかっと座った。立村が私たちの目の前をすうっと通りぬけていった。私の見る限り、美里に声はかけていない。やっぱりやましいことしてきたんだなあいつも。

「ったく、なあ」

短く答えを返してきた。もっと詳しく聞きたい。私も自分の鞆をお尻に敷こうと思ったけど、やめた。ポテトチップス、入っていることをかがむ寸前に思い出したから。仕方なく突っ立ったまま羽飛を見下ろした。

「立村、あの馬鹿、また何かやらかしたの」

「まあな」

「轟さんとのこと？」

「古川もよく知ってるなあ」

「知らないわけじゃないのさ。だってもう、うちのクラスの男子どもみなトドさんトドさんの連呼じゃんねえ」

まだ数人、私たちと同じように友だち連中と語らっている奴がいる。先生たちが私たちに、「早く荷物置いて、風呂に入れ。明日は早いぞ、早く寝ろ」

一声かけて入っていった。早く寝たいのは、多分先生たちなんだろう。菱本先生だけが私たちに近づいてきて、

「よ、どうした。結局スタンプラリーはうまくいったのか？」

にまにましながら雰囲気合わない笑顔を見せる。

「全部押したっすよ」

「午前中、にだな？」

えっ、と羽飛の奴、絶句している。

この辺、言葉を返すのは難しい展開だ。私としては黙っている方がいいと判断。羽飛も同じだった。だんまりでへらへらしようとする私たちふたりの顔を面白そうに先生は眺め、

「ま、これは学校に戻るまで、内緒にしておくからな。立村にはあくまでも、ばれていないこと

にしておけや。本当になあ、あいつらも悪さしようとするくせに、全部ばればれだっるのが気づかないのかって感じだな」

ひとりごちた。

「あの、先生、まさか」

「とっくの昔にお見通しだ。この辺、お前らふたりにだけ言っとくな」

また唇をにやっとさせる。

「去年も、またその前の年も、同じこと三年生はやらかしてたんだ。ばれないようにってことなんだろうが、こちらもちゃあんと全部、裏を取ってお前らの行動監視してたんだからな。ま、今年はみなおりこうさんで、あいている時間はみんなデートしたりする程度だったからよかったもんだが、もし万が一、補導でもされてみる、来年から修学旅行なくなるぞ」

「えー、そんなあ」

こつと指で菱本先生は私の額を押した。お釈迦様の額の点、のとこだ。

「最近もうるさいんだぞ。遊び目的の修学旅行なんてやめて、体験学習旅行にしないかって話がしょっちゅうきているんだ。もしそうなってたらどうする？ ひたすら田植えの手伝いをさせられているかもしれないし、牛の乳搾りかもしれないしな」

「あ、俺そういうの好きだあ！」

話をひっくり返そうとしているのか、いやそんなこと考えないで単純にわあいつて思っているのか、その辺はあまりつまらない。私も、きっと、羽飛と一緒にいたら、

「私もいいなあ。だって生の牛乳飲めるんだよね、最高！」

二人ぱちぱち拍手する。ここも息合わせたわけじゃなくって、なんとなく合っちゃったってだけだ。

「お前らみたいな奴だったらなあ、俺も疲れなくてむんだよなあ」

ふう、と菱本先生はわざとらしい溜息をつき、私と羽飛の頭をがしがし撫でた。

「羽飛、立村のお守りはまかせたぞ、古川は清坂な」

「なんでだよお、先生、教師としてなにかこう、がしっと決める必要なくねえか？」

なんか羽飛も投げやりだ。受けを狙っているわけじゃあないんだろうけど、笑える。

「そうですよお、菱本先生、私だってもう美里のお守りたくさんよ」

「そうだなあ。じゃあ今度、この前連れてった美味しいラーメン屋、御褒美に食わせてやるぞ」

ゴールデンウイーク前、たまたま羽飛と私が菱本先生のうちへ遊びに行き、その流れで物凄く汚いけど美味しいラーメン屋のちっちゃい店に連れて行ってもらったことがあった。ほんと、ラーメンってこんなに美味しくていいの？って感動ものだったっけ。思わずつばが溜まってくる。隣の羽飛は、と見ると同じく目の色変わって舌なめずりしているじゃあないの。羽飛、私、なんか食い意地の張り方まで似てるって奴？

「そのもの欲しそうな顔するなよ、ほらほら、連れてってやるからな。とにかくお前らも部屋に戻れ。たくほんとお前らも大変だよなあ」

菱本先生は白いポロシャツにすっかり日焼けした顔でもって、ちょうど開いたエレベーターのドアに吸い込まれていった。

取り残されたのは、羽飛と、私だけ。

「お見通し、かよ、なあ」

「まあそれもそうよねえ。あのうるさい先生たちがだよ、全然何にも雷落とさないでいるんだからね。もしかしたら、とは思ってたけどね」

菱本先生の爆弾発言、だけど私はある程度予想していたことだったし、さほどの驚きはなかった。だって考えてもみなよ。いくら評議委員会で上級生から情報を仕入れて行動パターンを決めたって、百二十人もの生徒が全部秘密を守ってられるわけじゃないの。しかもA組には担任の妹までいるんだもの。どっかから情報の水漏れがないとも限らない。むしろ、先生たちが気づかない振りしてずっと、とぼけ通してくれたことに私はびっくら仰天だ。いつぞやの宿泊研修のように、立村を一発張り倒して「お前、いつになったら先生のことを信じてくれるんだあ！」とか言って号泣するんじゃないかって心配していたんだけども。

「やっぱりさあ、菱本先生も、大人になったのよねえ。チェリーボーイ卒業したかな？」

「ばか、あの歳でやってねえわけねえだろ」

軽く言っただけの羽飛に突っ込もうとして、もう一回見下ろして今度は私が絶句。

「あんた、なあに真っ赤になってるのさ！ ははん、さてはあんたもチェリーボーイ卒業してない……」

「そういう古川はどうなんだ？ さんざんスケベねたかますわりには純情そうに見えるんだが」

どつぼにはまっているのに羽飛ってば気づかない。私が「純情」に見えるのは、みんなあんたのせいだって！ 背中を一発どんと叩いてやった。

「ばあかねえ！ 羽飛限定じゃんよそれは！」

私が羽飛以外誰も見つめてないってこと、こいつも知ってるはずだ。

それを受け入れられないって何度も言われていることも、私は承知している。

けど、やっぱりこんないい奴、振られたって嫌いになれるわけじゃないのさ！

「ま、それはともかくとして、ちょっとご相談なんだけど、エレベーターの中で密室プレイなんぞいかがでしょう？ 襲ってもいいよ、これも羽飛限定」

「襲われるのは俺だろうな、やれやれ」

エレベーターの昇りボタンを押し、私はよっこらしょとおっきな鞆を背負った。どこぞの彼氏彼女と違って、重たい荷物をもってくれるなんてこと、羽飛はしない。

せめてエレベーター、一時間限定、閉じ込められるなんてことないかなあ。

残念ながら、三階にはあつという間に到着。

「あいつ、戻ってきているかなあ」

ぼそっと呟く羽飛に、私も思いっきりおっきな溜息をついてやった。

「立村ねえ」

「ああいうことやらかして、俺の前でどういう言い訳するんだかなあ」

「だから何があったのさ」

本当は女子と男子、階が分かれている。そりゃそうよね。不純異性交遊の温床になるなんて溜まったもんじゃないもんね。ほんとは私も四階まで昇ってってもよかったんだけど、男子連中からある程度、立村の件について情報を仕入れておかないと、泣き虫お姫さまの美里に言い訳が立たない。たぶん今夜もずっと愚痴ってるに決まっているんだから。それにさっき、近江さんとお笑いネタについてさらに語りたかったみたいだし。近江さん、相当美里のことお気に入りだ。馬鹿笑いして、例のことあっさり忘れてくれてたらいいいんだけどな。

羽飛には「荷物半分もってやろうか？」と声をかけた。いつもだったら「そんな俺に腕力ねえと思ったか？」と振られるのが常。だけど今日の羽飛には全身すっかすか、隙だらけ。私が見逃すわけがない。なんというか、そう、理科の人体模型状態に近いかな。

今なら、羽飛と語り合うチャンス、ありかもしれない。

ずっと羽飛と、二人きりで語る機会、ないわけじゃあないけど短かったり、あっさりしてたりと私としては物足りなかったのだ。別にさ、立村との三時間ツーショットがつまらなかったってわけじゃあないけど、弟とダーリンの差、埋められるわけじゃないの。

「じゃあ、わりい、来るか。立村いたら二人で締めるか」

「賛成」

たぶん、あのなまっちょろい評議委員長は他の男子たちからそろそろ質問攻めに合っているはずだ。廊下にはまだ何人か男子女子がたむろっていた。委員会関連の人たちかもしれない、彼氏彼女かもしれない。別に目立ったこともなく、私は羽飛にくっついて、ツインルームの鍵を代わりに開けてやった。ふうん、閉まってるんだ。立村の奴、鍵かけたのかなあ？

起立・礼・着席！と怒鳴られているような空気の匂いがした。ホテルにせよ旅館にせよ、どうして「宿」ってところはそういう匂いがするんだろう？ 思ったよりも手狭だった。左側にはユニットバスの扉が開いたままになっていた。右側にはクローゼットが引き戸形式で開きっぱなしになっていた。物置はその辺にしとけばいいよね。羽飛の荷物を入れるのを手伝った。立村の荷物らしいものは見当たらなかった。まだ来てないってことか。そりゃそうだよ。顔出しづらだろうね。

「あの野郎……」

苦々しいって顔でもって、羽飛は唇を思いっきりひん曲げた。

「評議連中とたむろってたって聞いたが、あいつ何にもわかってねえよなあ」

私に聞いている？ 嬉しい。すぐに答える。

「あんたたちと一緒にじゃあなかったんだあ」

轟さんとずっと一緒にわけでもないわけね。

「そんなの知るかよ」

ブレザーをそのまま床に投げ捨て、貴史はベットに大股開いたまま腰掛けた。中の机と椅子、ライトとお茶を沸かせるようになっている機械あり。私は羽飛の真ん前に椅子をひっぱってきて足を組み座った。

「とにかく、これから美里の『お守り』をする以上、ある程度の情報は欲しいわけよ」

「そりゃあなあ。古川も大変だよなあ」

妙に優しいぞ。変だぞ、羽飛。

「私の知っている情報だけだと誤解の種になるだけでしょよ」

「別にお前ら、あいつと轟が仲良くツーショットで歩いているのを見たわけじゃあないんだよな」

この辺は難しい。私たち三人……美里、近江さん、そして私……は見えていないけれど、D組の女子たちは午前中、仲良くスタンプを押しながら歩いている立村をチェックしていたらしい。さっき玄関から入ってきた時もちらちらとそんなことを囁いていた。ただ、D組の場合それ以上に謎の膨らむ「南雲は昨日の夜、彰子ちゃんに何をしていたのか？」という疑問の方が重要だったらしくって、それ以上のつっこみはなかったように思う。私と同じ聴力を持っているんだったら美里もそれらの噂を聞いていないわけがない。たぶん今ごろ、他の女子たちからもいろいろと話を聞かされているころじゃあないだろうか。

「けど、見ていた証人はたくさんいたみたいだけどねえ」

「万事休すって奴だよなあ」

指の関節を何度も鳴らしながら羽飛は呟いた。

「まあ見ての通りだ。いろいろなんか事情はあるらしいけどな。ただ美里がヒス起こすようなことはねえんじゃねえの？」

この辺り、私の眼を見ないでつぶやいている。かんにさわった。

「ちょっと羽飛、こっち見な」

羽飛の膝小僧を軽くタッチした。びくっと動いている。はは、面白い。

「あんたさ、なんか言いたいことを隠してるよね」

「やぶからぼうに、なんだよ」

「あんたって、ポーカークフェイスできない奴だよねえ」

ひょいっと奴の股座に手を突っ込む真似をするがさすがにはたかれる。まあね、女の子だもんね。「お前も女子ならもう少し『たしなみ』ってもんをだなあ」

「あんたに説教されたくないよね。それよかさ、羽飛」

一番のきもを確認する私。

「立村と、轟さんは、絶対、できてないよね？」

すぐに「んなわけねえだろ！」と笑い飛ばしてくれりゃよかったのに。

すぐに「立村は美里一筋だったの、昨日でよっくわかっただろ！」って思い出させてくれればよかったのに。

両膝にそれぞれ手を置いて、羽飛は思いきりがみ込み、ぶるんと首を振った。覗き込むと、やっぱりみしみしと顔が張り裂けそうな感じだった。言いたいことあるんだろうにね。言えないことなのかねえ。

「ほんとのこと知ってるのは、立村だけだろ。あいつに直談判するしかねえだろ」

ぼそっと呟くと、ぐわっとベットに転がった。埃が舞ったように見えたのは空気がやっぱりぴんと張っていたからだろうか。私は暫くあいつを覗き込んだ。

「言い訳、まだできないってことかな」

「真実は、当人同士しかわからねえってこと」 ずいぶん羽飛、哲学的なお言葉を口走る。

「俺が知ってるのは、あいつと轟が仲良しこよし、お手手つないでいなくなったってことだけだ」

「けどあんた、追っかけたんだよね。金沢やすい君たちが話してたよ」

「追いつけねかった、ってそれだけだ」

私は羽飛の投げ捨てたブレザーを拾い上げた。ポケットにはスタンプ帳の青い色がちろっと舌を出していた。

「羽飛、スタンプは当然全部押した……？」

「金沢にやってもらった。で、午後からは金沢たちと合流だ。立村？ あんな奴、知らねえよ」

知らねえよ、のアクセントがか細かった。羽飛、相当、疲れているんだなって思った。

こういう時美里だったらどうするんだろう。いろいろと黙って話を聞いてやるんだろうか。それとも「ばっかだねえ、そんなことで落ち込んでるんじゃないよってば！」と背中を叩いてやるんだろうか。それとも。

「こう言う時、慰めてほしいって思わないわけ、あんた」

私の口から出た言葉は、決して下ネタがらみの意識から出たものじゃなかった。

決して。

「別に」

喉の奥から答える声は、あっさりしたものだった。

「あっそ。じゃあ美里の様子を一通り見てくるよ。風呂にも入らないとね。ユニットって狭そうだよねえ。なんだかなあ。そうだあんたんとこの部屋電話番号教えてよ。あとで連絡しようよ」

「んだな」

羽飛が寝ころがったまま指差した、ダイヤル式の白い電話には、大きく「305」と記されていた。そうだね、とりあえずは。

あまり長居するとまた、女子たちからあらぬ疑いをかけられないとも限らない。美里はともかく、羽飛をひそかに想う女子が複数存在することは、元祖羽飛 ファン第一号の私も調査済みだった。あいつの操は鈴蘭優に捧げられちゃってるし、勝ち目のない戦いだとはわかっていてもどうしようもない。羽飛だって落ち込んでいるんだったら、手元にいる女子で慰めてもらったって罰当たらないじゃない、って思ったりする。たとえば今の私とか。

エレベーターで四階まで上がる。男子が二階と三階、女子が四階と五階。先生たちはそれぞれの階に振り分けられているので、そうそう身動きは出来そうにない。でも本当だったら、美里だって立村をとっつかまえて「あの噂、いったいなんなのさ！」と詰め寄りたい気持ちでいるだろう。私だったらそうするだろう。今ごろ美里、轟さんを捕まえて「私と立村くんが付き合ってるってこと、知ってるよね！」とか罵ってないだろうか。もともと轟さんのことを好きじゃない美里だし、その辺はどうなのかな。

415号の部屋に向かう。女子たちはとりあえずお風呂タイムってことで、みな静まり返って

いた。思ったよりも防音が利いている部屋のようにだった。軽くノックして、鍵を開けてもらう。

「美里、ただ今、入るね」

「遅かったね、どうしたの」

すっかり美里は靴下を脱ぎ、普段着に着替えていた。部屋の形としては男子のところとほとんど変わらなかったけれども、壁紙だけが淡いクリーム色で、メルヘンチックな緑色の草原を描いた絵が飾られていた。可愛い。

「まあちょっとね」

羽飛と二人で話をしていたってことは、言う必要もないかも。

「それより美里、近江さんと何話してたのよ」

「評議委員会のこと」

美里もちょこっと口ごもり、唇を尖らせた後に呟いた。

「いろいろね、あるんだ。大変なんだよ評議って」

「そうだよなあ。立村だってそうだしね。」

「ふうん。じゃあ美里、お風呂何時入る？」

時計を覗き込むと、ただ今六時前。夕食は一階のホールでいただくことになっている。

「ごはん六時半だよ。三十分しかないよね。いいや。食べてからでいい」

「それもそうだよ」

そういえば美里、もう生理四日目のはずだ。私の経験からいくと、たぶん出血は納まっている頃じゃないかなって思う。本当だったら一日目、二日目がこういう、ひとりでゆっくり入ることのできるお風呂だったらよかったのにね。そんなことを思う。

私は壁際の、ユニットバスに近い方のベットを選び、座った。やっぱり先に足だけでも洗っておきたかった。

「じゃあ私、先にシャワーだけ浴びるね。お風呂はその後でさ」

「うん、いいよ」

美里は髪の毛を鏡に向かい何度かほつれ毛を直す仕種をした。見た感じ、羽飛が心配しているようなヒステリーの発作もなさそうだった。もしかして美里ってばかなり鈍感で、轟さんのことなんて気がついていないのかもしれない。美里の性格からすると考えられないことではあるけれども、私としてはできればそうであってほしい。ただD組をはじめ女子たちの反応を考えると、そ知らぬ顔をしているのもよくないんじゃないかなって思う。

しょうがない。爆弾落とすか。

「美里、一つ聞きたいんだけどさ、いい？」

「なに？」

髪の毛を梳かし、さりげなくリップクリームを塗りなおしている美里。後姿に声かけた。

「あんた、立村と轟さんの噂って知ってるんだよね」

「ふたりで午前中歩いてたってこと？」

「あら、知ってるじゃないの。なんでヒス起こさない？ 彼氏の浮気だぞ？」

どきどきしてきたのは私だけかもしれない。美里は全然動じることなくリップをつけた唇を尖

らせたりしていた。

「琴音ちゃんね、今日午後から親戚の人と会う約束があって、みんなと行動が取れなかったんだって。噂は聞いてるけど、天羽くんとか更科くんも一緒だったんでしょ。方向が一緒だっただけなんじゃないの？」

あのねえ、美里にしてはずいぶん楽観的な発想なんだけど。まあね、あんたにヒス起こされるよりはましよ。

うそっぽくない。

「だって、絶対考えられないもん」

鏡を見据えて、背をぴんと張り、こくっと頷いた。私に振り返らなかった。

「琴音ちゃんと立村くん、だなんて、絶対ありえないよ。性格からして違うし。評議委員長としてなにか知りたいことがあったんじゃないかな、ってことくらいしか、想像できないもんね」

わからない。

私はシャワーを秒速で浴びた後、大急ぎで着がえた。

なんかわからないんだけど、美里の言葉にはところどころ、骨が混じっている。

昨日、美里が同室の女子たちに泣かされた時も思ったことなんだけど、自信過剰っぽいところがたまに鼻につく。そういうのってあるんじゃないかな。

もちろんあの子の性格が悪いわけじゃないし、むしろまっすぐでひたむきだからこそ、気持ちいいって思っているけどもだ。

曖昧さってのがないんだよな、美里って。

今の言葉だってそう。きっと美里、轟さんのことなんて気にしてないよ、って言いたかっただけなんだと思う。それだけ立村を信頼しているのかもしれないし、評議委員会のことでってことならば、色々裏事情にも通じているのかもしれない。でも、どこかぬめっとしたところが感じられる。たまあに、美里ってそういう言い方をする。隠しているように見えて、実はばればれの言葉。

——琴音ちゃんと立村くん、だなんて、絶対ありえないよ。

そうだろうか？

頭をざざっと水シャワーで浴びてすっきりさせて、なおさら思ってしまう。

私はそれほど轟さんと仲がいいわけじゃないけれども、性格はだいたい把握しているつもりだ。なんとなくなんだけど、立村にそっくりな性格かもしれないって思う。

やたらと人の顔色をうかがうところとか、無理矢理話をあわせるところとか。

最近はそれほどでもなくなったけれども、一年から二年にかけての立村はもろ、轟さんと同じ行動ばかりしてたんじゃないだろうかって気がする。

美里だって一度はぶちぎれたことあるくせに。

もちろん、美里からすると、「そんなのありっこない」って単純なことを言いたかっただけな

んだろう。けど、今の口調を思い返すともっとどろっとしたものを感じてしまった。

もし相手が、ゆいちゃんだったら美里はどう言ってただろう？

「ゆいちゃんと立村くん、だなんて、絶対ありえないよ」って答えられたらどうだろうか？

美里がしょっちゅうゆいちゃんの可愛さに溜息をついていたことを私は知っている。

「ゆいちゃん可愛いもんね」ってしょっちゅう口にしていたし。

ゆいちゃんだったら、いくら立村が朴念仁だったとしてもにたにたデートしないとも限らないし、男子は単純だから可愛い顔に落とされる。ゆいちゃんの性格がすばっとしているからあまり気にしないけれども、もし女の武器を使って立村に近づいていったとしたら、今みたいに美里、冷静に対処できていただけだろうか？

轟さんだから、安心しているんじゃないかな。

轟さんの、顔だから。

美里だけを突っ込むことはできない。鏡の向こうでずぶぬれの髪の毛を乾かしている私と比べても、歯は轟さんほど出てないし、目も飛び出てない。深海魚みたいな顔ではない。

まさか、轟さんなんか。

思っている自分。美里だけを責められない。人は自分の鏡ってえらい人が言っただけだけど、本当だ。今私、美里を鏡にして、本音語っているのかもしれない。

たぶん、D組をはじめ他の連中の噂にはなっているだろうと思っていた。

「立村、その辺は覚悟しろよ」

天羽が耳もとで囁いた。

「大丈夫よ、ちゃんとああいう風におおっぴらに見せ付けておいたからうまくいくわよ」

隣りあった轟さんは、天羽に振り返り答えた。わあわあ騒いでいるD組連中の前で、少し足を速めつつ、

「陰でこそこそやっているなんて思われたら、かえって困るよ。こうやって堂々と歩いているのを見れば、いくらでも言い訳できるしね。それに」

轟さんは前髪を軽く横に流すような仕種をした。

「美里も私には、関心持ってないから大丈夫よ」

正直、言っている意味がわからなかった。口を半開きにした状態で聞き返そうとしたら、後ろできょろきょろ目を凝らしていた更科が、

「あ、やばい、ダッシュしてるぞ、羽飛、羽飛」

きわめて楽しそうに指を差した。軽い感電感覚が背中に走る。

「じゃあお前ら、先にGOだ。あとは羽飛と話つけておくからな！」

天羽は僕と轟さんの背中を軽く、ぽんと押した。

「わかった、じゃあとりあえず先に行くな」

「ありがとう。ちゃんと借りは返すね！」

なんだか今隣りで天羽を相手に話しかけている轟さんは、女子評議たちの中で大人しく座っている時とは全然違う。顔形が変わったわけではないのに、なんだか人懐っこく感じる。こっちでぽんと言葉を弾ませると、にっこりキャッチしてくれる、そんな感じがする。

あとが大変なのは覚悟の上だ。

「少し走るか！」

「オーライー！」

一度も青濁では聞いたことのないはじけるような声に、僕は完全に戸惑っていた。

もちろん評議委員会で三年も一緒なのだから、全く知らないわけではない。それどころか評議委員会内のこまごました事務仕事とか体力勝負の荷物担ぎとか、そういったことを自分からどんどんやってくれるような人だった。B組評議といえば難波だが、あいつも轟さんには一目置いているらしく、C組評議の霧島さんに対してぶつけるような罵詈雑言を一度も投げかけたことはない。それどころか、きちんと仕事の分担を互いに分け合い、不必要な騒ぎを起こさないように心がけてくれている。問題の多いA, C, D組に比べて、なんとB組の静かなことか。決して、入学試験時の上位者をまとめて組み入れたと呼ばれる「ガリ勉B組」だけある、と噂されるけれどもそんなことはないだろう。D組になぜ学年トップの水口が入っているのかという事実だけで

はなくてだ。文句を言われそうなことを、さっさと刈り取ってしまう習慣がついているだけのことだとも。僕も見習わないといけないのだが、うまくいかない。これは思いっきり愚痴だ。

轟さんという人そのものについても、あまり話を親しくする機会は少なかった。

もちろん側に清坂氏がいたのも確かだろう。いや、むしろ一年の頃は轟さんにいろいろわからないことを教えてもらったりもしていたし、それほど会話がなかったわけではなかっただろう。ただ、二年以降僕と清坂氏がそれなりの付き合いになったりとか、杉本のことを気かけたりとかしているうちに、他の女子たちのことまで考える余裕がなくなったという方が正しい。

車道の歩道を進んでいくうちに、トンネルを発見した。後ろを振り返ろうとしたら、轟さんに止められた。

「やめといたほうがいいよ。もし羽飛くんが追っかけていること立村くんが知っているって気づいたら、きっと友だちの縁切られるよ。ここは知らないふりした方がいい」

「でも、やはりさ」

「立村くん、どうして私がみんなの前でああいう風に連れ出したかその理由を考えてほしいな」

困った。僕も正直なところ、とりたてて違和感なく……信じられないんだけど、これは本当だ……轟さんと並んで歩いてしまったし、天羽たちもからかい言葉ひとつなく、当然のごとく僕たちを守ってくれていた。「僕たち」という言葉自体が違和感有りのはずなのに、なぜか轟さんとの会話は自然に繋がり、楽に息を吸うことができた。風が通り抜ける車と一緒に、僕の頬を軽く叩いていく。埃が舞いくしゃみをした。トンネルの奥に橙色のライトがしつけ糸の縫い目みたく繋がっているのが見えた。

「ここ、通っていこうか」

「そうだね。向こうにもスタンプ押すところあるからね」

僕よりもすでに、轟さんは全部把握しているようだった。方向音痴で知られる僕が一人で行動するなんて、正直なところ不安だった。今のところ安心だ。轟さんのてきぱき能力には脱帽している僕だから、任せておこうと決めた。男らしくない、と思われるかもしれない、そうちらと思ったら、

「立村くん、今日は私に好きなようにさせてもらっていいかな」

「好きなようにって？」

「私ね、こういう風に人を案内したり、適当に話したり、真面目な会話したりする方が好きなんだ。立村くんもしかして、私が退屈なんじゃないかとか思ってるんじゃない？」

言葉に詰まった。清坂氏相手の時はそれを感じているのだから何も言えない。

トンネルでコンクリートをするタイヤの轟音に負けないよう、轟さんが叫んだ。叫ぶ必要もない言葉なんだろうが、聞こえないんだからしょうがない。くぐもって聞こえたが、確かに聞いた。

「私の願いはね、立村くんに一日のほほんとしてほしいだけなんだ。そうしてくれれば、今日は大満足なのよね」

の、のほほん？ 耳がつんと鳴ったようだった。

「私に全部、任せてもらって、立村くんのしたいようにしてほしいなって思っただけよ。だから

、安心して案内させてよね」

橙色のライトが顔をてらてらせていう。また反対車線から走り抜ける車のライトを浴びて、轟さんの眼が白く光る。浮かべているのは薄紙を軽く丸めたような笑顔だった。どこか、肩の力がすうっと抜けたようにだらんと下がった。

「じゃあ俺は、何にも考えないでいいってわけか」

「そういうこと。今だけは、そうしてほしいな。大丈夫よ。絶対、美里に振られたりしないから」

羽飛の声が追いかけてくるんじゃないかと、また背筋で神経を尖らせてしまう。「美里は私なんて、ライバルだなんてちっとも思っていないしね。人前で堂々と連れ去ったのはね、私の勝手な片思いなんだってことをみんなに知ってほしかったから、それだけよ」

「あのさ、轟さん、それ誤解招く……」

言いかけた。お子様だの鈍感だの罵られまくってきた僕だって、轟さんの言葉になにか意味がないなんてこと、感じないわけない。

「だから、私は最初っから立村くんが好きなの。それだけよ。それ以外何にもないの。付き合う付き合わない、惚れた晴れた、関係ないの」

——どうということだ？

トンネルの闇から出るまで、僕は周囲がざわめきで溢れているのをいいことに、何も答えなかった。答えられないと言った方が正しいだろうか。言葉なんて、なんの意味もない。

「さてと、予定は天羽くんたちから聞いている？」

「一応、ざっと」

あの、トイレ前での朝の集会時に耳打ちはされた。女子評議たちには内緒で話しておかなくてはならないことがあるから、午後に別ルートで集まり話し合いをしようという天羽の提案だった。ただし難波には話していないとも。それはそうだろう。霧島さんとの一件をなんとかしたいと真剣に思っているのは、あいつ一人なのだから。天羽と更科も、いろいろ思うところがあったのだろう。「今回だけは俺の指示通りに動いてもらえねえかなあ、立村。決して悪いようにはしない」 両手を合わせて拝まれたから受けたわけじゃない。

「でもなんで轟さんと話すんだ？ お前から教えてもらったっていいだろうに」

僕が尋ねたところ、更科と一緒にぶるぶる首を振り、

「いや、それがそうもいかないんだ。悪いな」

天羽の言うことを聞きたくないわけではなかった。清坂氏や羽飛、古川さんには途中の予定変更で迷惑をかけてしまったと思うものの、あの三人だったら僕がいなくても十分盛り上がるだろうしまあいっか、と割り切ってしまったのもある。ただ、轟さんである理由が直接会うまで理解できなかったのも事実だ。実際僕に、たっぷりした笑顔を向けてくれるまでは。

「そうか、だったらまず先に、私が立村くんのスタンプを一気に押すね。さすがに女子連中に見つかったら大変なことになるし。預かるよ、スタンプ」

「あ、でも」

すでにD組合む男子連中にはばれているんだから今更隠さなくても、と思う。

口に出すと轟さんは手を目の前で軽く振り、

「女子の心理は面倒なのよ。男子ならまだ私が言い訳すればいいことだけど、女子は変なこと勘ぐる人がたくさんいるからね」

「もう変なことになっているしいんじゃないのかな」

四日目宿泊ホテルに戻る頃にはたぶん修羅場だろう。羽飛と顔をつき合わせてどういう風に罵られるのかが怖くないと言えようそになる。さっさと逃げ出してもいいはずなのに、なぜかそうする気がさらさら起きない。轟さんはまた優しい笑顔を見せた。目が細まった。

「男子たちの前では見せない陰険な感情ってのが女子にはあってね、面倒なんだ。まず午前中回る部分のスタンプ押しなんだけど、先に立村くん、ここの図書館に入ってて待っててもらえる？」
「図書館？ そんな旅先のところなんて調べていやしない。ここって言われても戸惑うだけだ。轟さんの指さした方向真っ正面には、木目がでかかかと猫の目状態に浮かんでいる、三角屋根の家が見えた。児童館みたいなところなんだろうか。」

「轟さん、これっていったい」

「修学旅行で図書館に行く物好きなんてまずくないよね。ここなんだけど、結城先輩から情報もらって調べたところだし、ばれる心配ないよ」

「けど轟さんは？」

人差し指を天に向け、うんと頷く。

「とにかくスタンプだけどどどと押しまくってきて、すぐに戻ってくる。それだけよ。学校でこしらえたしおりではやたらと時間が掛かるような時間設定にしてあるけれども、タクシー使えば十分もしないうちに終わっちゃうよ」

タクシー。そんな金遣い荒いことしていいんだろうか。轟さんのお財布が心配だ。

「大丈夫よ。私、昨日ほとんどお金使っていないからね。小遣いも貯めていたもの全部持ってきたし。怪しまれないようにくだらないお菓子とかお土産とかそういうものには使わないようにしてきたんだ。さっき言ったでしょ、立村くん」

轟さんは一気にざざざと話し続けた後、つけ加えた。

「のほほんとしてほしいだけなんだ。お願い聞いてくれないかな」

目の前でしゃべる女子が、青潟でいつも清坂氏や霧島さん西月さんの影に隠れていた轟さんと同一人物とは思えない。性格の正反対な双子の片割れなのかと疑いたくなる。顔を付き合わせると委員会関連のことしか話すことのなさそうな女子だったはずだった。なのに。

自然と、こっくりと頷いている僕がいた。しかも、

「ありがとう。早く戻ってくるよな」

まるで清坂氏や古川さんに対して話しているような言葉遣いをしているのは、確かに僕だった。

町の図書館と言われる建物だったが、蔵書の数はいくらでも多くもなさそうだった。入ると、司書の男性が「こんにちは」とあっさり答え、また本をめくっている姿が見受けられた。本を読む

でもいいんだろうがなんだか面倒で、雑誌専用のマガジンラックが置かれているロビーに腰を下ろした。結構いるのが、五十代から六十代くらいの、おそらく近くでペンキを塗ったりしているような格好をした男の人たちだった。灰皿の用意されている席はぎっしりと人で埋っていて、一部子ども連れのお母さんたちが絵本を開いていろいろと話し掛けていた。ひとりの男の子なんて絵本を思いっきりびりびりに破こうとしていて、その子のお母さんが必死に手を押さえつけていたのが笑える。

適当に新聞の挟まっている銀色のラックから引き抜き、目を通した。

頭に全然入ってこないのは、きっと経済情報ばかり、数字の羅列で具合悪くなったせいかもしれない。たばこ臭いのが少し苦しいので、男の人たちのグループから背を向け、新聞を読んでいる振りをした。新聞の見出しの代わりに思い浮かぶのは、さっきの轟さんの言葉と、天羽たちの様子だった。まんざら僕も、話の内容に見当がついていないわけではないのだ。

難波と霧島さんの激しい言い合いが愛の裏返しなのか、その辺は天羽がよく把握していることだろう。僕には理解不能なことなので任せておこうと思う。霧島さんに関する危険な噂についても、天羽の話によれば大々的な事件だったのに学校側が知らない振りをしているということは、僕たちも知らん振りしていた方がいいのではないかと、という結論に達している。不必要に傷を広げるようなことはするもんじゃないと心に戒めるだけだ。

たぶん、問題は別のところにあるのではないだろうか。

僕が評議委員長として動き始めてから、取り立てて問題は起こらなかった。天羽と西月さんと近江さんの一件については個人の恋愛沙汰だから、冷たいようだけど評議委員会には関係ない。弾劾裁判を開いてしまったのは、僕の私的憤慨からくるものだし、表向きはなんとか丸く収まったからあとで考えればいい。

けど、天羽が西月さんをああいう力技で評議から追い払うには、好き嫌い以外にもいろいろ理由があるのではないだろうかと思わずにはいられない。形式としては西月さんが自分から降りたようなものだけど、単に嫌いなだけだったらいくらでも知らん振りができるだろうとも思う。もしかして、天羽は西月さんが評議委員会にとって害のある人間なのだと思っていたのではないだろうか？ いや、僕もそれを認めるわけではないけれども。ただ西月さんがいなくなって後、女子たちの団結力が一気に弱まったような気はしていた。女子の裏事情はいろいろあるのだろうし、僕だって清坂氏を悪く言いたくはない。でも、西月さんがいなくなった後からどんどん、物事がいい方向へまわるようになったのも、感じていた。

今まで女子たちがひっぱってきたものを、男子の手に取り返した、と言えいいのだろうか。

旅行が終わってから行なわれる予定の水鳥中学との交流会もそうだ。更科がうまく間に入ってくれてなだめたところがあるのだけれども、実際女子には裏、および花のような存在として手伝ってもらっている。本当だったら杉本あたりに僕の手伝いを頼みたかったのだが、周りの事情を考えるとそれは考えられない。となると、三年男子に絞って中心で動いてもらう、これがベストだと感じていた。

しつこいようだけど、女子を見下しているわけじゃない。僕より清坂氏の方がずっと頭がい

いし、切れるし、何でもできる。周りの受けだっていい。僕よりも向こうが委員長やってくれれば一番丸く収まったんじゃないかと思う時だってある。

でも、一応僕が評議委員長になってしまった以上、どうしても男子連中の方が使いやすいというのも本音だった。僕が一言、清坂氏に「悪いけどこれ手伝ってもらえないかな」と頼んだとする。机配置とか、プリントを配る順番とか。僕なりに考えてまとめていることなのだが、清坂氏はすぐに自分のやりやすいように組替えてしまう。いや、僕だったらそれでいいとあっさり思うし、やっぱり清坂氏って頭がいいな、と素直に思う。でも、僕だって頭のないなりに懸命に努力はしたつもりなのだ。「ね、立村くん、私のやった方がうまくいったでしょ」と微笑まれると、自己嫌悪に陥ることも多々ありなのだ。似たようなことは霧島さんも、西月さんもあった。

だからこそ、気心知れた男子連中に「悪いけど、この通りやってもらうってことでいいかな」と声をかけ「オーライー、そうするか！」と気合入れて僕の頼み通りに形を作ってくれるというのが、嬉しかったりもするのだ。なんだか心が狭いと思うのだけれども、みっともない本音だ。

いろいろと女子が僕の指示をあっさり翻して……なんといっても杉本の一件については何も言いたくない……自分のやりたい風に進めてしまう。正直、疲れていないと言えば嘘になる。

天羽はたぶん、女子をもう少し評議から外すような形で運営することを訴えたいのだろう。

お気に入りの近江さんはあまり積極的に評議へ関わるような性格ではないし、むしろそれでうまく回っているところもある。轟さんの方はとりあえず女子とうまくやっていけないという風にうまく隠れているという印象を持っていた。人畜無害。一番近いかもな。

まだ何か意見があるみたいだったけれども、天羽の「じゃあとりあえず、トドさんと詳しい話を煮詰めてくれねえかな。後で俺たちも合流すっからな」の一言で話は終わった。そのあたりを聞かないとわからないけれどもだ、とにかく。

——轟さん、本当に十分でスタンプ押し切れるのかな？

「立村くん、お待たせ」

本当だ。全部、押し終わっているじゃないか！

差し出されたスタンプ帳には、屏風畳みで丁寧に、赤、青の二色でどこかのお寺さんの絵が押されていた。まっすぐ、ずれるところなく、見事に。

「あ、ありがとう、でもタクシーでって」

「時間がもったいないよ。まず話をしようよ」

轟さんは僕の隣りにさっさと座り、軽く息を切らせたままポケットから透明な飴玉を取り出した。

「ひとつ、あげる」

「ありがとう」

なんも考えないで、すぐに口に放り込み、くどくない甘味を楽しんだ。

「これね、塩飴っていうんだって。甘ったるくなくて美味しいよね」

「ほんとだ」

時間がもったいない、と言ったくせに轟さんは暫く黙ってまたにっこりと天井を見上げていた

。話、無理に始まらなくてもいいかもな、なんて僕も思っていた。

「とりあえずなんだけど、このことは表面化するまで女子たちには内緒にしてほしいんだ」

やっぱり念押しか。気を引き締め、背筋を伸ばした。

「やっぱり内緒のことなんだな」

「そう。もう学校内部では決まったことだし何も言えないけれども、ただこういう事実があるってことだけは、今のうちに把握してほしいんだ。委員長としての立村くんに」

「委員長としての」僕というところにひっかかりを感じた。飴が口の中で小さくなったところで、こっくと飲み込んだ。

「そういう事実って？」

「ゆいちゃんのことなんだけど」

笑顔は消え、小声。青大附中の生徒がいらないからまだ僕の耳には届く声。

「霧島さんのことって、まさか昨日の騒ぎと関係が」

「ないよ、それは絶対ない。ただ学校側はもう別の動きをしているんだ。ちょっとだけ二学期以降の評議委員会にも関連することだしね」

僕が想像していた女子がらみのことではなさそうだ。ほっとしたのかがっかりしたのか、半々だ。霧島さんの個人的なことなのか。

「ゆいちゃんは来年、高校青大附属には進めないってこと、噂には聞いたことなかった？」

「え？」

全くのフェイントだった。そんなこと聞いてないぞ。

僕もさぞ仰天顔していたことだろう。轟さんは唇を結んで口角を揺らすようにした。

「美里からも、聞いてなかった？」

「全然」

もし聞いていたとしたら、僕だって周りをもう少しかぎまわったりしていた。

「けど難波がそのことで霧島さんをつついているようなことは、確かに」

「難波くんは知らないよきっと。今知っているのは天羽くんと更科くんだけ」

「じゃあなんで轟さんが知ってる？」

「とある情報筋から。決してガセじゃないよ」

もちろん成績上の理由から青大附高への進学許可が下りないということはあるかもしれない。霧島さんの成績は、「たまに僕よりも数学の点が低い」というところからして想像はつく。でも、仮にも三年間評議委員を勤めた人を、単純に成績が悪いという理由だけで落とすなんてこと、学校側もするだろうか。そんなこと言ったら僕だってあぶないじゃないか。いつ、数学の点数が危険だという理由で追っ払われるとも限らない。

「それに、殿池先生だって霧島さんのことを評価しているだろ。一生懸命押し込んでくれるよきっと」

「いや、それはないと思うんだ。殿池先生もきっと、学校から出した方がいいと思っているはずなんだ」

「どうして……」

それから始まる轟さんの説明は、昨日の夜風呂場で天羽から聞いた話とだぶり、僕の頭の中は完全にごった煮と化した。何度か僕は轟さんに質問を投げかけ、即、返事を返してもらった。話の内容は黒々とした暗黒の事情ばかりなのに、どろどろした感情が轟さんを通すとみな、澄み切って見えるような気がした。時折唇を引き上げるようにして笑い、目を細める様子には僕はいつのまにか見入っていた。

「もしゆいちゃんが純粋なコネ入学者で、かつやる気のないなあなあ子だったとしたら、学校側も何も考えないで、そのまんま高校へ進学させてあげてたと思う。もう知っていると思うけれど、天羽くんのクラスがもろにコネクラスだということは周知の事実でしょう」

まあな、その通りだ。天羽が裏を全部ひっくり返してしまったから知られたくないものも知られてしまったわけだけれども。ただ噂によると僕たちの下にいる学年はその辺曖昧にしているらしい。

「ゆいちゃんみたいに一生懸命努力をして、それでも報われないという現実を学校側はいろいろ考えているらしいのよね。言っとくけどゆいちゃんは決して頭が悪いと思ってないよ。単純かもしれないけれども後ろ暗いこと考えてないし、どんなにきついことやっても嫌われないし、それに可愛いしね」

最後の「可愛いしね」が小声だった。唯一轟さんのうつむいたところだった。僕は黙っていた。

「やる気がなくて、本気でやれば復活可能というのだったら、学校側も生徒減らしたくないしその辺一生懸命やっているはずよ。だって生徒がいればいくらでもお金入ってくるんだもんね。ゆいちゃんうちは呉服屋さんだし、いくらでもお金を搾り取れるとわかっているはずよ」

「それでもなぜ」

霧島さんについての情報よりも、むしろ「なぜ、轟さんがそういうことを知っているのか？」が謎だった。あとでそこは聞き出さないとまずいだろう。単純に情報提供なんだろうか。それとも何か訳があるのだろうか。

「詳しい大人の事情については私も曖昧なことしかわからないし、その辺は関係ないからいわないけど、とにかくこのままだとゆいちゃんは来年の春、推薦で別の高校に行くことになると思う。学校側もそのあたりはゆいちゃんの両親に連絡入れているはずだし、知らないのは本人だけみたい」

「なんでそんなこと知ってる？」

うーん、と困った顔をする轟さん。首をかしげるがうつむかない。いつもこうしていればいいのにとふと思う。

「あとで天羽くんたちにも話すけれど、ゆいちゃんのうちの人から直接、とだけ言っとくね。ゆいちゃんの家がかなりすさまじいことになっているのはみんな知っていると思うけど、家族も敵となったらもうゆいちゃんたったひとりよ」

「家族って、まさか弟か？」

確か天羽が「キリオ」君と称する、姉貴をとことん嫌う優等生の弟の話をしていて、確か天羽と更科が直接対面して、話を聞いたとも。もっと気になるのは生徒会関係にも色気を出していると聞いている。学校に戻ったら詳しい事情を調べないとな、とは思っていた。

「そこまでわかっているのだったらしょうがないね。そうだよ。弟くん」

「けど家族を売るなんてそんなのは」

「そうね、ゆいちゃんはあまりにもあんまりだと思う。でもそれとこれとは別として」

轟さんはきちんと手を膝の上で重ね、僕に静かに告げた。

「私も、ゆいちゃんの今後を考えるんだったら、その高校に進んだ方がいいと思うんだ」

「轟さん、なぜ」

「この学校だったらゆいちゃん、もう窒息しちゃうと思う。こう言ったら変だけど、ゆいちゃんもうぎりぎりまで追い詰められているし、頼みの小春ちゃんもああいう状態でしょう。ずっとゆいちゃんと同じ委員会で活動してきた私が言うのは変だけど、本当だったらゆいちゃんと同じ学校行きたいよ。でも、もう限界だよ」

もちろん西月さんと霧島さんの仲が良いことは知っていたけれど、それと何か関係あるのだろうか。僕の質問を読み取ったかのように轟さんは続けた。

「今までゆいちゃんがC組の評議として堂々と振舞ってこれたのは、小春ちゃんが裏でいろいろコーチしていたからだって、知ってた？」

「まさか、それは」

驚き隠せず、声が大きくなり慌てる自分。

「私も最近気がついたことだけど、ゆいちゃんは入学した当時、すごく大人しい子だったはずなのよ。それが小春ちゃんの教え通りに評議へ立候補して、その後小春ちゃんの教え通りに堂々と振舞うことを覚えて、すべて小春ちゃんのハウツーをマスターして行動していただけだってこと。たぶん、今でもそうだと思っているんだけど、やっぱり小春ちゃんのサポートが受けられない状態でしょ、だからなのよ」

「だからってなにが」

なんだか間抜けな質問しかできない僕だった。あきれられているんじゃないだろうか。自己嫌悪の癖がむくむく顔を出しそうだった。

「最近の評議女子たちの暴走、よ。もしもね、小春ちゃんがゆいちゃんのことをしっかり見ていたら、まず修学旅行中の自由行動は一緒だっただろうし、オヤジカメラマンたちの対処についてもなんとか片付けたはずよ。それにもっと言うなら、杉本さんの件についてもそうね。ゆいちゃんも小春ちゃんも彼女のことを可愛がっているし、何とか守ってあげたいと思っている。それは立村くんの指示だったと知っているからそこでとどめておけばよかったはずよ。でも、水鳥の副会長の件についてはゆいちゃんと美里が小春ちゃんの元気がないところを突いて、ぶっ千切ったようなものよ」

「けど轟さんもあの時は」

清坂氏たちと一緒に行動をせざるを得なかったのではないかなと思うのだが。

「今だから言えるんだけど、天羽くんたちに連絡していたわよ。いわゆる、内部スパイ」

言葉を切り、僕の顔を正面から見つめた。続けた。

「たぶん立村くんは軽蔑するか、あきれかすかのどちらかだと思うけれど、私は一年の頃から、評議委員会の女子となじめなかったのよね。むしろ天羽くんや更科くんたちと集まって戦略を練ったりする方が向いていたみたい。今回立村くんを呼び出して話をしたのも、本当はそれ、謝っておきたかったってだけなんだ」

「謝ってって」

「今までは私が女子たちの行動情報を流して、天羽くんたちがうまく回避するって形でもって運営していたところがあったの。でも、やっぱり立村くんには知られたくなかったんだ」

僕に、って、単純に僕が鈍感で気づかなかっただけだろうか。

「裏汚いことしているって自覚がないわけじゃないけれど、そうしないとまずいという展開がいくつもあったことは確かなの。ソ連のKGB、アメリカのFBIみたいなもの。私結構スパイのドキュメンタリー読んだりするのが好きだったし」

それと関係あるのか。ちなみに初耳だ。

「小春ちゃんたちは気づいてなかったし、もしみんな仲良くやっていけるんだったらこのままでいいって思っていたんだ。でも、もうお互い限界にきているのも感じていたしね。天羽くんもそうだし、難波くんもそう、みんな我慢していたものが爆発しかけている状態なんだ」

「じゃあ聞くけどさ、轟さん」

聞いていた方がいいとわかっていてもくちばし挟まずにはいられない。

「西月さんと天羽の一件も、同じくそうなのか？ 情報を集めてってことなのか？」

「あれは、天羽くんから直接聞いたと思うけど、小春ちゃんが全面的に悪いと思う。小春ちゃんは悪い子じゃないし、むしろ一生懸命だけれども、それによって学校を退学せざるを得なかった女子がいたことも知らなくちゃいけないんじゃないかって思う」

過去の傷がうずく。あれも旅行中だったんだよな。苦い思いで唇を噛む。

「A組ってひとり退学者がいたこと知ってるでしょ」

「俺も一枚かんだからな」

「それとは別よ。立村くんは関係ないよ。小春ちゃんは評議として毎日、学校に来なかった湊さんのところへ通って、ノート届けたりいろいろしてたんだよね。それは評議として当然のことだったかもしれないけれど、小春ちゃんの行動は常識を逸していたんじゃないかって言われているよ。湊さんという子もよくわからないけれど、一部の仲良したちと一緒に遊んだり会ったりすることはないわけではなかったみたい。でも、それをね、情報集めて待ち伏せして、学校に来てねってことをしつこく伝えていたらしいの。これって一種の脅迫だよな」

知らなかった。頷いていた。

「だから、湊さんが退学したのは、一番の理由として小春ちゃんのしつこい追っかけから逃れるためと言ってもいいと思う。学校が合わなかったっていうのもあったと思うけれどもね」

「そういう情報どこから仕入れたってわけなんだよ。疑うわけじゃないけれども、でもさ」

単純に女子同士のリークごっこなんだろうか。いやそうは思えない。今、轟さんの口から出た事実は僕もなんとなく感じていたことばかりだった。ただ確固とした情報ソースがないから信じ

られなかったというそれだけだ。ただの噂であれば信じるわけにはいかない。噂で動いたらあとで人をいやというほど傷つけることになる。真実の証拠が欲しいと思わずにはいられない。

「私、性格悪いよね。顔悪いだけじゃなくて。けど、ほとんどのことはみな私、直接話を当事者から聞いているんだ。ほら、私、こういう顔しているし、女子の前ではへらへらしているし。みんな私なんて、しょせんその辺に転がっている石ころ扱いして見るわけ。子どもの頃からそういうのは慣れているけれど、内緒話する価値もないと思われているみたい。けどその代わり、みんな私を空気みたいな扱いしているから」

言っている意味がわからない。それに顔ってなんだ？

「女子はね、ランク付けというのを無意識にやっちゃうもんなんだよね。少なくとも私以下の顔じゃないとか、ゆいちゃんほど頭が悪くないとか、そういうところで計っちゃうところであるんだよね。私の場合、とにかく顔。出っ歯だとか出目金だとか。だからみな最初っから馬鹿にしているってことが伝わってくるんだ。むしろ男子たちの方が楽よ。好きな子以外は顔で判断したりしないから」

「あのさ、それとどう繋がる？」

「ごめんごめん。つまり、女子たちはみな、いろいろな情報を私に教えてくれるってことよ。それを一応は私も裏付けとって確認するけれどもね。このA組の一件もそうだし、ゆいちゃんたちのこともそう。立村くんが信用しないのは当然だと思うけれど、私は私なりに情報をきちんと整理しているつもり」

僕が答えの出ないまま黙りこくっているのを見て、

「いいよ。立村くんはそういうのが好きじゃないこと聞いているし。軽蔑されてもしかたないとは思うしね。ただ、あとで私のやっていることが他の女子たちからばれるよりは、私の方から最初に話しておきたかったっていう、ただそれだけ」

全く目をそらすことなく、僕に言い放った。

何度も言うようだけど、こういう顔して堂々と話しができるようだったら、女子たちもそんなに轟さんを軽蔑したりはしないだろう。清坂氏が今ひとつ、轟さんと相性合わないと感じているのは知っていたけれどもだ。それに顔がどうのこうのって言うけれども、こうやって一対一で話す轟さんは気持ちいい人だと思う。なんでそこまで「顔」にこだわるんだ？ 歯並びか？ それとも目が細いことか？ それもこうやってにこにこ話してくれれば全然気になるどころか、むしろほっとするんじゃないのか？

「詳しくはこれから天羽くん、更科くんと合流した時に説明するけれど、たぶんゆいちゃん的一件についてはこれから先、どうしても他の女子たちにばれればなる可能性が高いと思う。それも絡んで評議委員会からゆいちゃんを下ろしたほうがいいという方向に進むとも思うんだ。もちろんそれは殿池先生なりの判断も入ると思うけれども。それで今度は女子たちがゆいちゃんのことを守ろうとしてまた騒動を巻き起こすと思う。ゆいちゃんもいやだと思う。けど、それを押える必要が私はあると思うんだ。自然に、これ以上ゆいちゃんを女子たちのストレス解消のおもちゃにしないために、すうっと他の高校に進む準備ができるようになって」

「つまり、轟さんは、霧島さんが退学することに賛成ってことか？」

「そう。いろいろな情報と、ゆいちゃんの現状を考えるとそう思う。けど、周りがゆいちゃんを守りたいという理由でもって、『署名運動』なんかしたらもう惨め以外の何者でもないはずよ。わあっと騒いで盛り上がって、ゆいちゃんを話の種にしたいだけ。そういう人たちから守るためにもゆいちゃんを評議からさりげなく外していく必要があると思うのよ」

どこまで信じればいいのか。とりあえずは昼、天羽たちと別の駅で合流する予定だ。そのあたりでもう少し頭を整理しなくては。でももうひとつ言っておきたいことがあった。

「轟さん、あのさ」

話が完全に飛んでいるとわかっていても言わずにはられない。

「俺、正直言って、轟さんと話していて、おもしろいよ」

初めて轟さんは僕の言葉に息を呑んだ。

食事が終わり、琴音ちゃんとすれ違った時廊下で、

「美里、ごめんね」

小さい声で謝られた。二言三言で話をつけたくなかったので、私も立ち止まった。少し日焼けしたようなほっぺたが真っ赤で、なんだかひよっとこのお面にそっくりだった。

「噂のこと、私気にしてないよ」

まずは最初に安心させたほうがいいかなって思った。

「琴音ちゃんもいろいろ周りから噂されるかもしれないけど、私がそんなことないって言っとくから大丈夫だよ」

「誤解させちゃって、ごめんね。私、ただ」

いつも思うのだけど、琴音ちゃんはどうして人を見上げるような顔をするんだろう。顔色を伺うような態度で、言葉の折々に私の目がどっち向いているかどうかをチェックしようとする。むかむかする。なんでかわからないんだけど、いらいらしてくるのは私だけじゃないと思いたい。

「旅行終わったらでいいよ、詳しいこと教えてもらうのは」

ここでヒステリー起こしてしまい、「やっぱり美里も普通の女子なのね、やだねえ」って噂されるよりは、ここで少し落ち着いて見せたほうがいいに決まってるもの。昨日、こずえに怒られたけれど、でもこういう時、他の女子たちのようにぎゃあぎゃあわめいて鬨鬨買うのだけはいやだ。

たぶん、他の女子たちはみんな楽しみに待ってるんだろうな。

私が琴音ちゃん相手に、大泣きしちゃうところを見たいんだ。

立村くんに嘸み付いてひっぱたくところ、きっと楽しみたいんだ。

そんなところ、どんなことあっても見せたくないもの。

「私、一年の頃から立村くんのが好きだったんだ」

寝耳に水。

「けど、立村くん私なんかおよびじゃないってわかったの」

ふうん。

「だから、悔しくなかったんだ。美里を選んだのは当然だって思ったの」

どきんとする。

「だって私、立村くんにふさわしくない顔なんだもの。だから最初っから、あきらめてたんだ」
けどなんで今更。

「修学旅行、最初で最後、一度でいいから立村くん本当に本気の気持ち、打ち明けたかったの」

で、立村くんはどう答えたの？

「やさしかったけど、即答だった。美里がいるし、最初から私は評議の仲間以上じゃないって。だから、友だちとしてこのままでいいって」

私はこれ以上琴音ちゃんの告白を聞きたいと思わなかった。

だって最初からわかっていることだったから。

ありえないことだって思っていたから。

「いいよ、琴音ちゃん。気付いてあげられなくてごめんね。私、琴音ちゃんの前で」

「ううん、でもこれですっきりしたんだ。美里。私これで立村くんへの気持ち、すばっと断ち切ることできたから。後悔してない」

相変わらず上目遣いで背を丸くするようにして、琴音ちゃんは私に数回頭を下げた。ぺこぺこ。こめつきばった。

「これからは評議委員会で協力するって、ちゃんと伝えたから。美里、立村くん本当に思われてるんだね」

——本当に思われているのかなあ。

こずえと一緒に泊まる部屋に戻り、シャワーを浴びるかどうか迷った。夕食中もほとんど立村くんと話ができなかったし、なんだか消化不良、おなかの中がたぶたぶした感じだった。食欲がなかったのはきっと、昼ずっとお菓子ばかり食べていたせいかもしれない。

——けど、私に一言くらい断ってくれたっていいじゃない。

——私だって、もし琴音ちゃんが立村くんのことを。

そんな心狭い人間じゃないって言いたかった。私だって、立村くんと両想いになるまではいろいろ悩んだし、なったらなったでいろいろあったし。琴音ちゃん の気持ちかわからないわけじゃない。もしこっそり、私に打ち明けてくれたら一度くらい、ふたりっきりで話をさせてあげたってよかったのに。

そうなのだ。立村くんだって、好きでもなんでもない女子を冷たく突き放す人じゃないってわかってるもん。人を傷つけることを極端に恐れる性格だって知っている。だからひどい言い方で琴音ちゃんを振ったりしないと思っていた。彼女としての私が、そう断言する。 だから私に言ってくれればよかったのだ。

私はぼんやりと窓の向こうを眺めていた。本当だったら今夜は、全員で蛍狩りをする予定だったのに。クラス女子の何人かは、蛍を見つめながら好きな男子に告白するんだと心に決めていたらしいけれど、残念ながらそれもお流れになってしまった。理由は単純で、「夕方から大雨が降るから」。きれいな夕焼けがめいっぱい空に広がっていたのに、どうやらそれは雨の前触れだったらしい。明日の朝一番でバスにのり、すぐに連絡船へ乗り込み、青潟へ帰る。

——立村くんとちっとも話、していない。

ほんとはそれが何よりも楽しみだったのに。

いつも一緒にいるんだから、なにもって言われるかもしれない。けど、うるさい親の目を盗んでふたりっきりで歩くのと、まったく他人の目を気にしないでおしゃべりするのとではまったく違うってこと、どうしてわかんないんだろうって思う。立村くんと付き合っていることをうちの

親たちはあまりよく思っていない。貴史と仲良くしてればいいじゃないっていつも言う。立村くんの礼儀正しさを見せ付けられているから表立って文句はいわないけれども、陰でこそこそ「品山の子は、レベルがねえ」なんて話をしているの、知らないわけじゃない。そういう差別意識って大嫌い！ 貴史にもいつもそのこと話していた。けど、そんな親たちの意識を平気で跳ね返せるほど、子どもは強くないのだ。だったら、そんなの無視できる場所で思いっきりおしゃべりしたい、そう思うのがいけないわけ？

まさか旅行一日目に、あれになっちゃうなんて思ってなかったし、せっかくふたりきりで歩く予定だった三日目も結局は貴史に愚痴聞かせるだけだったし、最後のチャンス四日目も琴音ちゃんに邪魔されてしまった。近江さんと一緒に楽しいおしゃべりができたのは収穫だけど、でもやっぱり、違うのだ。

「外は雨だね」

「船酔いしやすい奴が約一名、いるね」

こずえが歌うようにつぶやいた。

「ほたる見たかったな」

「しょうがないよ。雨なんだから」

意味がつかないことくらい、よっくわかっているけど。でも。

「立村のこと考えてるんでしょ」

「違うの、蛍のこと！」

見たかったのは確かなんだから。窓にぶつかる白いしずくがつつるつつる滑り落ちるのが見える。立村くんと貴史が同じ部屋だというのは知っているけれど、男子ってこういう時に見つめあったりなんてふつうしない。

「まあいっか、女同士でしっぽりと語り合うのも悪くはないよね」

「そうよね」

こずえはさっさとシャワーを浴びていた。さっきまでほかの女子たちとおしゃべりに行って、また戻ってきたところだった。私と違ってこずえは、他の女子たちと話をうまく合わせることができるから、敵が少ない。それで助けてもらったといえばそうだけど、でも私のことをさんざん遠慮なくばかにするのはやめてほしいなって思う。悪意なんてさらさらない子だから気持ちはなんとかかなるけれど。

私もシャワー浴びようかな。それともお風呂に入っちゃおうかな。最後だし。

のりがぱりぱりにくっついた浴衣を枕もとから取り出し、私はしばらく足を投げ出した。

「美里、轟さんと話したの？」

「話したよ。なんでもないんだって」

さすがに、琴音ちゃんが本当に立村くんのことを好きだったことは話さなかったけれども。

「ほんとにほんと？」

「うん、本当だって」

私が力強く言うと、こずえもしかたなさそうにうなづいた。

「よかったよねえ。立村、ああ見えても押されると弱いからねえ」

「見た目からして弱いわよ。もし少しでも好きな子だったらよろめているかもしれないし」
こずえはにやりと唇を上げた。

「ははん、彼女として自信あり？」

「ないから言ってるの。私のことを選んでくれるかどうかわかんないもんね」

「よかったよね、ゆいちゃんじゃなくて」

どきんとした。なんだかいやあな感じだった。雨音がばばばと響いてくるみたいだ。

「琴音ちゃんだってゆいちゃんだって、立村くんが好きだったらしょうがないけどでも」

「でも、相手になんてする気、さらさらなかったってことなんだ」

「わかんないけど、ね」

私はテレビのスイッチを入れるため四つんばいになって手を伸ばした。いきなりお尻の片っ方をはたかれた。

「痛いっ！」

「ぺんぺんしてあげる！ 何年ぶりかなあ。おしりぺんぺん」

「そんな悪いことしたことないから、経験ないもんね！」

「大嘘つき！ けど美里のお尻、ちょっとボリュームアップしてなあい？」

どうせこずえはスレンダーでお尻がきゅっと締まっているから、プロポーション自慢したいんだらう。やだなあ。

「どうせ私、こずえみたいにやせてないもんね！」

つけたテレビには、歌のベストテン番組が映っていた。貴史の愛する「鈴蘭優」が音程の外れた声で「第三位」にランクインした「初めてってなあに？」を歌っていた。歌詞が白い文字で画面に流れている。この子確か中学一年だったはずだけど、ずいぶんどきどきものの歌歌っているんだって、今気付いた。

「いやあん、『はじめての夜のこと、思い出にしたくないの』って、もろ、あれだよねえ。鈴蘭優の事務所ってこの子をどういう風に位置付けたいんだらうねえ」

「知らないけど、貴史はショック受けてると思うよ。あいつあれでも清純派好きだもんね」

ちょっといらっときてたせいか、こずえの心をずきんと言わせそうな言葉を口走ってしまった。まずいまずい。

「いいのいいの。夢と現実は違うもんね。あいつもきっと、いつか肉体派に目覚めてくれるって、ね、美里」

どうせ私は肉体派と関係ないもんね。胸のどこを軽くなでた。ちっとも、膨らんでない。

しばらくふたりでベストテンのランキング曲を口ずさんだりしていた。

菱本先生がノックしてきたのは、だいたい十分くらい経ってからだった。一応最後の見回りってところなんだらうか。

「清坂、古川、どうした、ゆっくりしてたか？」

「先生、美里がずっとむくれてるんですよー！ ほたる、見られなかったって」

「そんなこと言ってないじゃない！」

私だってほたるほたるって騒いでなんかいないのに。別に入ってこられても見られてまずいもの持ってなかったし、そのまんまベッドから足をぶら下げたまま待っていた。菱本先生も機嫌よさげに部屋の中へ入ってきた。

「お前も今回はいろいろ大変だっただろうが、まあ、これも青春だな」

「いろいろすみませんでした」

確かに私が散々クラスに大迷惑かけたことは事実。謝っておいた。

「古川にあとでおいしいものおごってやれよ。それとだな、お前に一応話しておいたほうがいいかなあ」

椅子を引っ張り出して菱本先生は両腕を組んだ。コサック踊りの格好にちょっと近い。

「なんですか？」

「立村のことなんだけどなあ」

また何かやらかしたんだろうか、そうってしまうのは、前科持ちの「彼」だから。どきまきしたところ見られないよう、足を組みなおすだけにした。

「なんですか？」

「あまり野暮ったいこと言いたくないんだが、やはりお前ら、中学生だろ？ 中学生らしくいろいろ悩んでるんじゃないかなと思ってな。先生というよりも、人生の大先輩としてだ」

やだ、もう先生たちにもばれていたんだろうか。ふわっと顔が赤くなるのがわかる。

「付き合う付き合わないとか、できたできないとかいろいろ騒いでいるようだけどな。そういうどろどろしたことで悩むよりも、もっと軽く、楽しく、男女付き合い楽しむってのはできねえものなのかなあと思ってな」

どう答えればいいんだろう。また身体が熱くなってしまう。けど動いたら動揺しているのがばれてしまう。こずえが代わりに話し相手になってくれた。

「先生、男と女の仲にくちばしはさむもんじゃないって！ たとえ担任でもバツ！」

「いやいや、なんというかなあ。俺なりの経験もあってな」

うつむいて聞き流すふりをした。

「大人になると、人を好きになるのもいろいろ面倒なことが多いんだ。好きになるはいいが、相手にされないとか、無視したらヒステリー起こされるとか。まあ一筋縄ではいかないもんだ。今の時期、好きになるななんて言えないが、もっと大切なことがあるんじゃないかって俺は思う」

「勉強にいそしめっていう白々しいことですか？」

こずえにまぜっかえされた。

「そんなことを言ったって、お前らがうなづくわけないだろう？ 俺も古川たちとおんなじ歳の時はそうだったぞ」

「じゃあなんですかって」

「お互いを大切に思うことを、まずは覚えるほうがいいんじゃないかってな。いや、俺もお前たちとおんなじ歳の頃はな、ガキそのものだったからさんざん女子をからかったり、スカートめくりしたり、関心もってほしくてパンツいっちょで踊ったりしたもんだ」

見たくないな。顔を思いっきりしかめてしまった。こずえはのりのりだ。

「わあ、今でもやってるの？ 彼女の前で」

「ばーか、んなわけないだろ。そういうところが大人なんだよ」

いきなりまじめな顔をしてにらまれた。

「けどそんなことばかりしていた男子はな、ちっとももてなかった。かわいそうなくらいもてなかった。かえって女子に嫌われてしまう悲しい運命をたどっちまったな。けど、そういう形でしか男子たちは、『俺に関心を持ってくれー、プリーズ！』という言葉が出せないんだよ」

「わああ、ばっかみたい！」

「ほんと！」

思わず声が出て、三人で笑いあった。

男子って、ほんと、ばっかみたい。

菱本先生はさらに話を続けた。

「男の俺が、いくら担任とはいえ、こういうことをゆっくり話す機会はないと思うけどな。お前たちたぶん、男子たちがスケベなことを話し掛けたり、いきなり緊張したり、いろいろしちまったりするのを見て軽蔑してるのも当然なんだと思うんだよ。男子は男子なりにももちろん、身体の成長もあったりして悩んでいるんだが、まだ女子にそれを理解してくれってことは言えないなあ。気持ちはまだガキんちょのまま、けどなあ。ほんと想像つかないと思うけど、身体の変化でどうしていいかわからないんだよ。これからゆっくりと俺も、担任としてだけでなく、男の先輩として男子どもと話をしていく。簡単なことじゃないしな。なにせ男は女よりも大人になるのが時間かかるんだ。気持ちの方がな」

「ふうん、だからすい君みたいにえっちなこと言うんだ。ガキだねえ」

からから笑うこずえ。どうして笑ってられるのかわかんなくて、うつむいた。

「清坂、いろいろつらかったな。恥ずかしい思いさせたのはかわいそうだったな」

——そう言われる方が恥ずかしいって知ってた？

菱本先生は「まだガキだから」とか言って男子をかばっているけれど、私からしたらそういうことを平気でいう当のご本人がまだまだ幼いんじゃないかって思う。

ほっといてくれたら一番いいってこと、気付いてないんだ。

「これからもし、清坂のことをからかう奴がいたら、その時は俺でもいいし、殿池先生、都築先生どちらでもいい。助けてくれってSOSを出してほしいんだ。なんてっか、俺は男子の代表として謝ったり相談に乗ったりすることしかできないがな。とにかくみんなを守ってやりたいって気持ちだけはめいっぱい持っているんだ」

顔を上げてきっぱりと「それだったら今すぐ男子たちに、いやらしいこと言うのやめさせてください！」って言いたかったけれど、口を開けなかった。

「先生、もういいじゃん。あのさ、悪いけど先生たちの発想ってさ、もろ男子的なんだもん。今、美里に受け入れろって無理よ無理」

こずえはテレビ番組をニュースに切り替えた。ちょうど明日の天気予報が入っていて、青瀨地

区の天気は曇りマークが示されていた。海、荒れるかな。

「こういう時はね、先生。知らん振りしてもらおうほうが一番いいんだって！ それよか私もこの機会に先生へ質問があるんだけど、いい？」

「おう、なんだ古川」

「もしかしてさ、ほたる見物の時間が空いたから、クラス全員の部屋を回って熱く語り合っていたりするわけ？」

はっと気がついた。そういえばそうだ。さっさとみんな自分らの部屋に戻っておしゃべりしたり帰り準備をしていたわけだけど、夜十時以降は男女問わず他の部屋訪問禁止となっているはずだ。本当だったらもっと他の子たちとおしゃべりしたかったんだけども。そろそろ九時半だった。消灯時刻なのかもしれないけれども、男の先生が女子の部屋を訪問するというのは、ちょっとおかしいと思う。

「まあそういうことだ。男子連中をまず先に訪問してきてだな。いろいろ語り合ったぞ」

「ふうん。そうかあ。この機会に深く、熱く、語りましょうってこと？ じゃあ私たちが一番最後？」

「ご名答、古川、お前そういうことに関しては鋭いなあ」

菱本先生は大きくうなづき、こずえの頭をがしがしとなでた。いやがらないでこずえもされるがままになっている。

「だったらひとつ質問。先生もいい歳なんだから恋愛経験も豊富なんじゃないかなって思うんだけどね」

せっかく熱く語ろうとしている相手を無理に押しのけることはない、ってのがこずえの考えなんだろうな。私もふだんだったらそう思えるんだろうけど。

「もしも、彼女に浮気されたとしたらさ、先生だったら相手にどうしたいか聞く？」

息を飲み込んだ私を、たぶんふたりは気がついていないようだった。だってずっと笑いつづけていたもの。

——浮気じゃないけど、どうするの。

菱本先生の答えはあっさりしていた。

「そうだなあ。時と場合にもよるが、もしも古川と同じくらいの歳でそういうことがあったらだ」

言葉を切った。

「まずは話をするなあ。だってなあ。いろいろ事情があるかもしれないだろ？ 別の男と付き合いたいのかもしれないし、ただの勘違いかもしれないし。ほら、親戚のおじさんと歩いていただけだったとか、たまたまそのおじさんが若かったので彼氏と勘違いしたとか。まずは本当のことと気持ちを聞く。それがわからないとこちらも怒りようがないし、な」

「私たちと同じくらいの歳ならそうかもしれないけど、今では？ 現在、二十九歳の男性としては？」

かなりつつこむこずえ。頭をかきながら菱本先生は、照れ隠しに一笑いした後、

「大人になると、人間関係にも複雑怪奇な糸がからんでくるもんだ。素直に聞けない時も、ない

とはいえなあ。本当はさっさと事実関係を証明して、その後で片をつけるのがいいんだろ
うが、ある程度様子を見て知らん振りしておいた方がいい時もあるさ。だが、それはあくまでも
大人になってからの話だ。今の段階でそんなみみっちいことするよりも、まずは正面からぶつか
ってみるのもいいんじゃないのか？ と俺は思う」

「はは一ん、先生って、結構正面突撃で痛い思いしたことあるんじゃないのー？」

すっとんきょうなこずえの声にまたがはは笑いする菱本先生。

「まあな。だけどそれで後悔したことは、一度もないぞ」

ほんとだろうか。こずえの突っ込みを上手に交わしつつ、菱本先生はしばらく、「中学生の
恋愛」と「大人の恋愛」について熱く語りつづけた。

最後に付け加えた。

「いいか、古川、あと清坂。中学時代の恋愛はな、なにはともあれ『語り合う』ことが一番大切
なんだぞ。スケベなことばかり考えてしまうのも仕方ないといやあしかたない。だが、それに集
中するのは大人になってからで十分堪能できるもんだ。それよりもまず、男子と女子、互いの違
いを理解するために、とことん本音で話し合え。勉強の邪魔になるから恋愛するなと、俺は口が
裂けても言えないが。好きだという感情があるのなら、まずお互い、どういう気持ちを持って
いるのか、どういう思いで生きているのか、それをぶつけ合うのが一番大切なんだ。恋愛ドラマ
みたいな話は、大人になってからいやってほど経験するんだからな」

結局、菱本先生も建前ばかり話しているような気がしたけれども、いやな気持ちはしなか
った。私も素直にうなづいた。

「わかりました。先生、ありがとう！」

「これは他の女子には内緒だぞ、あともうひとつ、男子を扱うための秘密を教えて進ぜよう」

こずえが受け取った。

「なにになにそれ？」

けど私に向けて放たれた言葉みたいだった。私もしっかり受け取った。

「男はな、おだてられるのが一番うれしいんだよ。うちの男子連中に何かさせたかったら、とこ
とん誉めまくってみろ！ びっくりするほど、本気出すぞ！」

——本当かな。

立村くんをおだてて、何してくれるんだろう。部屋を出ていく菱本先生を見送りながら、私は
少し考えた。

こずえは少し乱れた浴衣の襟を合わせなおし、男っぽく帯を結び直した。

「いやあやっぱり、男の本音は男がよく知ってるって本当だよな。ああ、せっかくだったら初
体験の話も聞かせてもらえばよかったなあ」

「何言ってるのよ、やらしいこと言わないで！」

私が菱本先生の言葉をすんなり受け取ることができたのは、きつといやらしい話がほとんど
混じっていなかったからだろう。もちろん男子たちの好奇心について多少のオーバーな表現は出
てきたけれども、いやな気持ちはしなかった。もしこれが別の先生たちだったら無意識に耳栓を

していたかもしれないけれども。

「まあまあそれは冗談。けどさあ、先生たちもこういうの好きだよなあ。一対二で語り合うんだもんねえ。男子たちの部屋を先に回ったということは、たぶん」

「貴史たちも回ってきたってことだよなあ」

貴史と同じ部屋にいるのは立村くん。立村くんと菱本先生は長年犬猿の仲。決してほのぼのとしたムードでは終わらなかったに違いない。

「今ごろ、立村のご機嫌は悪いんだろうなあ」

「絶対そうよ」

そろそろお風呂に入ろう。こずえはシャワーだけで済ませたらしい。私はやっぱりゆっくりたっぷりしたお湯につかりたい。ユニットバスの栓をしめて、お湯と水、両方の蛇口をひねった。あふれんばかりに水が勢いよく溜まっていった。この旅行中ほとんど手足を伸ばして入る機会がなかったし、生理も四日目でだいぶ出血が収まってきていたし、時間関係なくゆったり入りたかった。

「美里も、一度立村と話し合ってみたらどうよ」「どうって、別にそんな話する必要ないもん」

「とかなんとか言っちゃって！ 轟さんのこと、気になってしかたなくせにさ！」

「気になってないもん！」

思いっきり怒鳴った。おへそのところがぴくっとするくらいに。

「私、他の子みたいに浮気したとかいやらしいこと考えていたとか、そんな風な目で立村くん見てないから大丈夫なの！」

「男はわかんないよ。本能だもんね」

ぐっと息が詰まる。こずえは余裕ありありの表情で、大きな目をぐるぐる回した。

「今の菱本先生だって、男子の大先輩として語っていたじゃないのさ。中学生の恋愛はまず、語りあうことが大切なんだって！ どう思っているか、どう感じているか、それをとことん語りつくすことが大切だって！ 美里だってうなづいてたじゃないのさ」

「それはそうだけど、私と立村くんは」

言いかけて、こずえにノンノンとさえぎられた。

「私もちょっと悪いことしちゃったなとは思ったよ。三日目せっかく美里が楽しみにしていたのにあなたのダーリンとのツーショット奪っちゃってさ」

別に、あの時は貴史と話をしたかっただけだから、そうしただけ。こずえには悪いなと思ったけど。

「今日はきっとふたりっきりになるチャンスあるかなと思って誘ったけど、あんなことになっちゃったでしょう。私の想像なんだけど、立村きっと、美里に言い訳したくてならないんじゃないのかなって思うんだよね。轟さんの話よりも、美里が知りたいのはそっちでしょが」

「そんなこと」

言いかけた。首を振って言葉を搜した。うまくいえないけど、違うんだって言いたかった。

「それともなに？ 立村からもしかしたら、別れ切り出されるかもって思った？」

「そんなことないけど、でも、しつこい女子は嫌われるに決まってるし」

小春ちゃんが天羽くんにとことん嫌われてしまった事件を見たあとのことだ。私だって用心しているのだ。

「じゃあ、聞いてみたらいいよ。どうせ明日の朝になったら噂は広まってるし、学校に戻ったらまたさんざんしょうもない噂流されるよ。あのバスの中の事件みたいにね」

「立村くんが言いたがってないんだったら、それでいいの！」

こずえに背を向け、シャンプーとリンス、下着一式を取り出し、準備をした。

「後悔しないの？」

肩をすくめるようにして、こずえは私の肩に手をかけた。髪の毛を軽くくしですいてくれた。

「するわけないもん。他の女子たちみたく、付き合ってるから他の女子としゃべらないでなんていわれたら、男子は嫌がるに決まってるじゃないの！」

「そうやって、物分りのいい振りしようとしているから、美里はやっかまれるんだよ。他の女子たちにどう思われたっていいじゃないのさ。ずうっとおなかの中に溜めておいたら、爆発しちゃうよ」

「爆発したらしたでその時だもん、いいもん！」

なんでこずえってば、私のおなかに飼っているいらいら虫にえさをやるようなこと言うんだろう。

「もういい、お風呂入る！」

私は髪の毛を振り払うようにして、こずえに背を向けた。ちょうどお風呂も一杯になったところだし、実は秘密の楽しみを試してみる予定だったし。こずえがわざとらしく「はあー、もうやだよお」とため息ついているのを無視することにした。

今回、こっそり楽しみにしていたことは。

よくアメリカの映画で出てくる、「泡いっぱいのお風呂」。

旅行用品をそろえた時、たまたまバスタイム用品コーナーで見つけたのだ。

水道の水が垂直にぶつかる部分に、数滴、緑色の液体をたらしておく。お湯を溜めると同時にぶつかり合う水のしぶきで泡がふくらみ、お風呂一杯にお湯がたまるころには泡いっぱいお風呂の出来上がりとなるわけだ。私も一度、自宅で試してみようとしたのだけれども、いかんせん家族の反対を押し切ることはできなかった。お姉ちゃんと妹は賛成してくれたんだけど、お母さんにきっぱり「水がもったいないでしょ！ 誰が水道料金と電気代払うわけ？」却下されてしまった。

だから今回、四日目のバスタイムがユニットバスということを知ってからしっかり計画を立てておいたというわけだった。ビニールのカーテンを湯船の中に入れたまま、そっと開けた。赤ちゃんの頭くらい大きな泡が、もこもこっとふくらみ浮かんでいた。私の大好きな花の香り一杯だった。

——うわあ、ほんと、映画みたいなお風呂よお風呂！

さっきこずえ相手に言い合ったことなんて、どうでもよくなってしまった。

「こずえ、ちょっと見てよ！ ほら、お風呂見て！」

浴衣を脱ぐ寸前にこずえへ声をかけた。返事がなかった。

「こずえってばあ！」

ユニットバスの白いドアを開けた。顔だけ出した。さっきまでベッドの上で寝転がっていたこずえの姿が消えていた。

——どこ行ったんだろう？

せっかく泡いっぱいのお姫さまバスタイムを、雰囲気だけでも味合わせてあげようって思ったのにな。

たぶん女子たちの部屋へこっそりもぐりこみに行ったんだろうな。

待っていてもしょうがない。せっかくこしらえた真っ白い泡も時間が経つと消えてしまうと説明書に記されている。

——残念でした！ まあいっか。こずえにあとで自慢してやるんだ！

私は浴衣を脱いで、お姫さま気分で湯船に浸かった。ふわふわした泡を手ですくうと、すぐに溶けてぶくぶくした水に戻ってしまうのが物足りなかった。まずは思いっきり顔と髪に泡を乗せて、洗面台の鏡を覗き込んだ。ついでに鼻のところにも白い泡をつぶさぬように乗っけてみた。

——思いっきり、きれいになってやるんだ。

家族で共同使用するシャンプーよりも高級な試供品を今回、初めて使ってみる予定だった。あと、額に増えたにきびを減らすことのできる化粧水も用意してきた。明日着る予定のブラウスも洗面所で洗っておこう。乾燥気味の部屋だからすぐに乾くんじゃないかな。余計なことを立村くんに聞くよりも、まずは自分の状態を最高のものにしておけばいいんだ。そうしたらきっと、気付いてくれるんだ。やきもち妬いてるなんて思われるよりも、そっちのほうが絶対いいもの。爪だってきれいに磨いておきたいし。大丈夫、大丈夫。

言い聞かせながら私はもう一度、鏡を覗き込んだ。

一度お湯を抜いて後、もう一度シャワーをたっぷり浴びた。せっかくの泡お風呂に入ってみたはいいけれども、やはりごしごし手ぬぐいかなにかで身体をこすらないと、垢が落ちた感触がない。映画では片足を上げて泡をたっぷりと乗せてポーズを取っている女優さんも、あとでこういう風に身体を洗ったりシャワー浴びたりしたんだろうか。時間が経つごとに泡も消えていき、最後は普通の石鹸水しか残らなかった。きちんと髪も洗い、リンスもして、私なりのお姫さまバスタイムは終わりを告げたというわけだった。ターバンみたいにタオルを髪に巻き、スキンケアもたっぷり行った。こずえ、そろそろ戻ってきているかな。女子同士だし恥ずかしいことなんてそれほどない。よくシャンプーのコマーシャルに出てくる女の人が胸のところまでタオルを巻いて、きゃっと小さな声を立ててお風呂場から出てくる場面を見るけれど、あれも一度やってみたいことのひとつだった。明日うちに戻ったら一気に現実の世界に引き戻されてしまう。こずえだったらその辺、ジョークで受けてくれるだろうし、浴衣の前に一度、試してみようかな。

しっかり胸のところにもタオルを巻き込むようにして、こずえに声をかけた。

「こずえー、いる？」

「いるよー！」

ひとりでポーズ取ったってばかみたいじゃないの。

「お風呂から上がるよー！」

「どうぞー！」

次の瞬間、私はユニットバスのノブをばしっと閉じた。

「なによっ！」

「ごめんねえ、美里。悪いけど、あとはお二人で語らってね！ 私もやぶ用があるからね！」

——やぶ用って、何よ何！

ドアを開け閉めした音が聞こえない部屋だってことに、今さらながら気付くのが遅すぎた。

こずえが返事したからといって、こずえひとりしかいないと考えた私がばかだった。

——だって、なによ、なんでよ！

もろ、私はバスタオル一枚を巻き、ターバン姿で突っ立っていたところを見られてしまった。

さっきこずえが座っていたところには、浴衣姿の立村くんが口を半ば開いたままでいた。私と目が合うなり、両足をベットに引き上げるようにして、ぎゅっと膝株を抱えていた。

「ふ、古川さん！ まずいよ、まずいって！」

「あとはお二人お楽しみね」

慌てて扉を閉め、浴衣に着替えつつ私は、なぜ立村くんがこずえと一緒にベッドの上に腰を下ろしていたのか、どうして立村くんだけがここにいたのか、頭の中で整理しようとした。だって、ここは女子部屋だ。女子しかこの部屋にいないはず。男子が四階に立ち寄ることだって禁止じゃないの。どうしよう、どうしよう。

外へ出るドアを閉める音がかすかに聞こえた。一生このバスルームにこもっていたらいいって、本気で思った。

夕食後、即、菱本先生のご訪問を受けた俺と立村はしばらく、あったかいお説教を頂戴していた。

俺自身は菱本先生の言葉を「説教」とは思わないしむかつきもしなかったけれども、立村は違った。もう、見るからにぶっちぎれそうだった。

「いろいろあった四日間だったが、立村、どうだった？」

さっき俺に話してくれた通り、菱本先生は立村の計画した「スタンプラリー一午前中に片付けて、午後は自分らの時間。自由に過ごそう！」をあっさりと看破しているはずだ。修学旅行後、たっぷり締め上げる予定でいるらしい。ただ、評議委員長という奴の立場も考えて表向きはなあなあにしてくれるとのことだった。立村の奴、きっと菱本先生を含む大人どもに勝ったと思っ込んでいるに違いない。まったくもって、こいつはガキだって思われていることちっとも気付かないでやんの。

普通の俺だったら、すぐに「立村、実はな、菱本先生がな」と教えてやるんだが。俺だって少々むかつきかけているわけだ。

話の展開によっちゃ、このあたりでばらしてやるか、とも考えていた。

ほとんどしゃべってねえしな。あいつとも。もちろんなんもしゃべらないで一晩明かすつもりはない。「修学旅行中に起こった出来事は、修学旅行中に片をつける」これが原則だ。うだうだ引きずってもめるよりも、すぱっと言いたいこと言い合って、しゃっと終わらせる。これが一番だ。菱本先生だって、そうだろう？

「いろいろありましたが、楽しかったです」

無表情かつ丁寧語を遣う立村だが、いかにもふてくされているってのがわかる。こいつ、ポーカーフェイスだと思っ込んでいるが、すねてる幼稚園児とおんなじだと周りが見ているの、気付かないんだろうか。

「そうだな、本当に、いろいろあったな」

菱本先生は軽く流すと、次に俺へ話を持ってきた。

「羽飛、お前も楽しんだか？ それこそいろいろあったみたいだが」

「そりゃあもう、たっぴりと！ 喜怒哀楽なんでもありって感じでさ」

「いいこと言うなあ、そっかあ、『喜怒哀楽』かあ」

ただいま俺の気分は「怒」なんだが、あえて先生の前では言わない。余計なこと言って巻き込むのはやだもんな。

「やっぱし今回一番盛り上がったのは、金沢とお坊画家さまとのご対面じゃねえかと」

「そうだな、あれはよかったよかった。羽飛、お手柄だったな。ああいう風にして、やりたいことを俺たち大人に訴えてくれれば、少しでもいい方向へ持っていけるんだぞ」

知ったことか、って顔で立村はそっぽを向いている。こいつ、自分を抜きにして起こった事が

むかついてならないに決まっている。

「立村も詳しい話はあれから聞いてないだろ？」

「はい」

聞きたくねえよ、って面だ。聞かせてやるって。俺は話を無理やり菱本先生からひっぱり出すことにした。

「けどさ、先生、あの後金沢舞い上がりまくったままだったけど、どうなった？」

「詳しいことはわからないが、もし何かお力になれることがあれば、いつでも、とおっしゃってくださいったんだぞ、住職がな。もちろん今回は挨拶程度だったろうが、金沢もこれで面識ができたし、文通という方法で交流させていただくこともできるってわけだ。ぶつかったことは決して、無駄じゃないんだぞ」

まったくもって「知ったことか」との立村。相当、自分の目が届かない場所で起こった出来事に関心持ちたくないらしい。身動きひとつせず、唇をかんだままだ。

「それとだ、立村」

菱本先生はもう一度、立村に膝を向けた。露骨に後ろずさる立村を追うようにして、

「スタンプはきちんと押してきたか？ 午前中だけで、回るのは疲れなかったか？」

ひゃあ、とうとう来たぜ。こういうことか。

いつもだったら俺も助け舟を出してやるどころなんだが、自業自得だ立村、ひとりでなんとかしろ。

思った通り立村の横顔は蒼白だった。そりゃそうだな。百パーセント、完璧さって気取っていたところでだ、しょせんは先生に筒抜けなんだもんな。必死に何か言おうとしているんだが、言葉がでないでやんの。俺の顔を見て、まさかって目で見た後、またぎゅっと唇をかみ締めた。

「このことは旅行が終わってからゆっくり話そうと思っていたんだが、いい機会だ。お前らが頭をひねって自由行動タイムを増やそうと努力したことについては、敬意を表したいとこだ。今回はおとがめなしにしよう先生たちとも意見が一致した。だがな、基本的に修学旅行とは、単なる遊びのためのものじゃない、自分の身になることをひとつひとつ蓄えていくことが必要なものだよ。わかるかな、立村『くん』」

菱本先生、完璧に立村の反応みて面白がってるとしか思えない。笑えるなあ。怪人二十面相の口真似してなにが楽しいんだ。

「ひとつひとつスタンプを押していくことによって、この旅行で何を感じ、何を得たのか、それをじっくり考えることも大切なんだ。あまった午後の時間をお前たちがどういう風に過ごしたかはあえて触れないがな。自分の心の中にいったい何が蓄えられたのかを、学校で作文に書いて提出してもらおうから、今から準備しておけよ。いいな」

だんだん耳まで真っ赤になっていく立村の反応を、菱本先生も俺も、むちゃくちゃ笑いをこらえながら見つめている。完全におもちゃだなこりゃ。まあな、立村は今回の自由時間を通じて、そうとう「得るもの」があったとは思わず。古川と語り合ったり、今日みたいにだな、出目金出っ歯の……いや、それ以上は何も言わんが。ちゃんと、作文に残せるだけのもの、持ってるのか

いなと突っ込んでやりたくなる。友情ゆえにその辺はこらえるが。

「まあ今回はな、お前も相当勇気がいっただろうがすっぱだかで風呂にも入ったしな」
アキレス腱をゴリゴリとのこぎりで切っているって感じだけ菱本先生。

「それなりに、お前も成長しているんだってことがわかったしな」
目つきにだんだん血走ったものを感じるんですが立村よ。

「それに、お前も清坂のことを大切にしようとしているってことが、無意識の行動でよくわかったぞ。お前もだんだん、男になったなあ、なんだか安心したぞ。お前このままだったら頭でっかちのガキになるんでないかって、ずっと心配だったんだが、ほんと良く育った育った」

野菜じゃないんだからそういう誉め方まずいと思うぞ菱本先生。あとが怖いぞ。

「今回はお前の男らしい努力を認めて不問にするが、来年はもう手の内がばれていることを認識した上で、下級生たちへのアドバイスをしよう心がけるんだな。あ、そうだ、お前も知りたかっただろ？ どうしてばれたか」

完全に無言地蔵状態となった立村に対し、菱本先生、とどめを刺した。

「こういう時はな、女子を巻き込まないのが一番なんだ。男子だけなら目的意識もあってうまく秘密も守られただろうが、お前、女子に受けが悪いだろ？ かならずどこかで水洩れがあるもんだ。秘密はできるだけ少ない仲間内で守らないと、こういうことになるんだって、いい勉強になっただろ？」

言い返す言葉もなく、ただうなだれている立村を見据え、俺にはちらっと笑ってみせ、菱本先生は去っていった。

完全ノックアウト状態。さてこれから、どうなるか。

こういう時、俺ならば「ま、元気だせよ、いつものことじゃねえか」と声をかけてやるんだが、残念ながら俺もあいつにだまされたばかりだ。少しお灸を据えてやるのも悪くはないんじゃないかと思うわけだ。

「……ちくしょう！」

小さい声でののしる声だけは聞こえたが、知らん振りを決め込んだ。

「ばかにしやがって！」

ほんと、ささやく程度の声なんだが、立村相当切れている。

「狸と狐の化かし合いなだけじゃねえか」

かなりのいやみなんだが、俺の性格上はっきり断言してしまうのがつまらん。

「化かし合い？」

露骨にぶちぎれた声で立村が言い返す。こちらのカードは断然有利。なんせ、午前中のことがあったからな。

「お前が悔しがったって、菱本先生の方が上手だったんだ。しゃあねえだろが」

「誰がばらしたんだよ！」

「だから言っただろ、女子サイドだってな。お前も一生懸命学年のために尽くしたんだし、だから『不問に処す』って結論になったんだろ？ 努力した甲斐あったじゃねえの。今度は女子を

巻き込まないようにしてのんびりやれや」

そうだ、女子を巻き込んだじゃあいけません。

俺の言い方はあまりいやみやみに聞こえないらしく、立村もぴんと来なかったらしい。

「なにがのんびりだって！ せっかく喜んでもらえたって思ったのにさ！」

「喜んでもらえたって、女子はクールだからな。お前に恩義は感じちゃいないさ。そういうもんだぜ」

「別に恩義なんて感じてほしくないけど」

口籠もり、立村は浴衣姿のまま膝を抱えた。先にさっさとシャワーを浴びたので、あとは寝るだけの態勢だ。窓は完全に防音がなされているらしく、土砂降り状態にもかかわらず雨音は響いてこない。

「わりい、これからベストテン見ていいか？ 優ちゃんの歌声で気分をリフレッシュ！」

「勝手にしろよ」

完全に臍を曲げてしまった立村は、遠くを見ながら静かにつぶやいた。

「本条先輩に、言い訳できないよな……」

まあな、立村オリジナルの案だとは思っちゃいなかった。たぶん本条先輩あたりからの入れ知恵だろうな。

おそらくなんだけど、本条先輩が率いた修学旅行の時は、ばれなかったんだろう。

詳しいことはわからん。ただ、菱本先生が言うには、「女子ルート」から情報が流れたいらしい。立村にとって一番の弱点は、そこだ。

女子受けが恐ろしく悪い。なぜか付き合っている美里がさんざんばかにされているのも、その原因なんだろうな。

その辺は素直に反省して、次回に生かせばいいじゃねえか。ったく、そこで膝抱えていじいじしてるんじゃねえよ、うぜってえ！

しばらく鈴蘭優ちゃんのかわいい顔と歌声を満喫しつつ、俺はちょろちょろと立村の様子を伺った。

優ちゃんの歌とトークが終われば、後はまったく関心なし。テレビのスイッチを切った。

「あのな、立村、ご機嫌斜めなところひとつ聞きたいんだがな」

「なんだよ」

こいつ、問い詰められること覚悟してるんだろうか。俺の追求にびびってないとは思わないが、最大の敵・菱本守氏に撃墜されて、再起不能となっているようだった。やさしく手を差し伸べる気にはなれない。とことん叩くぞ覚悟しろ。

「今朝のあれ、なんだ？」

しばらく膝を抱えて、顔を引きつらせてうつむいている。当然だな。

「なんで俺、天羽と更科にかびくせえコーヒーを飲まされる羽目になったんだ？」

そろっと横目で俺を見た。首をそのままにしていた。

「なんでなんだ？」

もう一度尋ねると、立村は口のはしっこにでかいえくぼをこしらえた。

「ごめん、悪かった。俺がすべて悪い」

肩を怒らせ、膝と腹の間に顔を思いっきり押し込んだ。人間、だるま状態だった。

「そうやって逃げるなよな。結局あれか？ あの、轟だったか、B組の女子とラブラブデートか？」

「らぶらぶっていったい」

びくっとした顔で俺を見返した。とんでもないってか。そりゃあそうだよな。お前の彼女は美里だし、いくらなんでもなあ。

「きちんと、普通の話をしていただけだよ」

「ほお、普通の話って、二人っきりでねえとできねえことか？」

「そういうんじゃないくて」

その癖、言葉が出せないでやんの。ったくなあ。こいつ、自分で自分の墓穴掘ってるよな。完全に立村は俺に勝てそうにないことを理解しているんだろう。とにかく下手に、下手に出ようとしている。いつもなら適当にあきらめてやるのが俺のやり方なんだが、そうは問屋が降ろさねえ。覚悟しろよ。

「美里は相当ご機嫌斜めだと、某所の放送局から情報が流れている、とな。夕飯の時も見ただろ？」

「だからそういうんじゃないって！」

「けど、美里には内緒なんだろが！」

すごんでやる。

「俺はなあ、立村。天羽たちに拉致されてだ。一方的に評議委員会事情を聞かされてだ。いわゆるひとつのパターン『俺と美里はいいかげんくっつけよ』説を押し付けられてだ、すげえまずいカビくさいコーヒーを飲まされてだ。お前がやるべき、美里を飼いならすってことを俺が代りにやってくれと命令されたんだ。すげえ失礼だと思わないか、それ」

「清坂氏を飼いならすっていったい」

「あーあ、これ美里にばれたらしゃれにならねえぞ。いくらお前がボランティアで轟にお情けデートしたんだって言い訳したって、女子には通用しねえぞ。菱本先生じゃあねえけど、お前女子には受け悪いからなあ。『あーら、やっぱり立村には轟みたいな女子がお似合いなのよねえ』とか言って、騒ぐぞ騒ぐぞ。美里がヒステリー起こしたら俺じゃあ手に負えねえし、どうすんの立村。お前やったのってな、相当やばいことなんだぞ。どういう事情あるかわからんけど、覚悟しとけよおらっ！」

ううまずい。俺としたことが。やっぱりしゃべりだすと熱を持つっていうのか？ があっと叫びたくなるってのか？ すげえ勢いで言葉があふれ返るんだが。一緒にぶっちぎれて頭に来ちまうっていうのか？ こういう時、さりげなく冷静なふり……あえて「ふり」って言うぞ……している立村を見るとこちらの方が切れそうになっちまうもんなんだ。こいつみたく、つらっとした顔で「まあいいじゃねえか」って通すことが、俺にはできない。未熟ものって言われようがど

うしようもねえんだなこれが。

「ボランティアじゃないよ」

しばらく俺が凄まじくした後、立村はぼつとつぶやいた。

「はあ？」

「だから、轟さんと話したのって、ボランティアじゃないよ」

んなこと、言ったか？俺？ 自分で何言ったか覚えていないってのが情けねえな。

立村は膝をがっしり抱えたまま、覚悟を決めた人みたいに目をこわばらせ、

「轟さんと話したのは、評議関連のことだけど、羽飛が想像しているような変なことじゃないよ」

「じゃあなんで美里に内緒なんだ？ 天羽ら言うには、霧島にも内緒なんだってな」

「うん、だけどそれは、いろいろ事情があるんだ」

「評議委員同士で隠し事し合っただけにやってるんだ。だからお前らはうじうじしてるってんだよ」

「違うって」

けど、説明できないところがやっぱり立村だ。相変わらず女々しい奴だぜ。天羽じゃねえが「優柔不断」そのもんだ。

「清坂氏には、修学旅行終わってから、全部話すつもりでいたんだ。だから、今すぐ説明しなくてもいいかなって思っただけであって、隠してたわけじゃないんだ」

「じゃあなんだよ。天羽言うには、『うちの学校から追い出される奴がいる』とかなんとか言っただけが」

話の内容なんてほんとは覚えていなかった。いかにもって顔で天羽が気取って語っていたのをうる覚えに語っただけだ。意外や意外、立村の奴青ざめてやんの。

「天羽の奴、そんなことまでしゃべってたのかよ」

「誰が、とは言わなかったがなあ。美里たちに内緒ってことは、美里にばれないようにってことなのか？ けどそれ聞くんだったらなんで轟が出てくる？ 結局轟、お前とデートしたくて、それでか。あーあ、立村、どうするどうする、このままだと修羅場だぞ。美里がぶちぎれた時の怖さ、知ってるだろ？」

殴られんばかりに噛み付かれた経験をもつ立村なら、想像はつくはずだ。

俺はじいっと立村を見つめてやった。

「わかってる、それくらいさ」

結局立村は、さっきと同じ態勢で膝を抱え、顔をかくしただけだった。

俺としたら、このあたりで立村に本当のことを吐かせて、古川たちの部屋に電話で連絡を入れるつもりだった。

まさか轟に乗り換えたいなんてことはないだろうよ。あいつの美的センスおよび、モラルから考えてまずありえない。

天羽たちが話していた通り、評議委員会にはそれなりの事情があるんだろう。退学者が出るとか出ないとか、そのあたりの問題が絡んでいるのだったらまあしょうがない、ある程度の隠し事もしょうがないだろう。俺の想像ではたぶん、霧島がこの修学旅行でお色気トラブルを無意識に起こしてしまったゆえの問題なんじゃねえかと思うんだが。けどもし協力してほしいって言われたら、俺だって霧島の退学を取り消してほしい旨の署名運動に参加する気はあるぞ。

はっきり言っちゃえばいいんだ。霧島の問題なんだったってことと、轟に泣きつかれてデートしただけだったことをあやまるってことと。それと、さんざんばかやらかしたことについて、美里に土下座して許してもらえばいいんだ。なあに、あいつ立村に根っこからほれぬいているから、ちょっと低く出られたらすぐに機嫌直すわな。

直接美里としゃべって、謝って。あとは明日、船の中で船酔いぼろぼろになりながら美里に甘えりゃあいいんだ。立村の奴、乗り物に弱いから、一度介抱されたらすぐに轟への浮気を後悔するに違いない。

簡単じゃねえか。世の中、そんなもんよ。

「じゃあ、せっかくだし、反省の弁を以下に述べよ」

おぞそかに告げた後、俺は受話器を取った。確か、美里たちの部屋は四階だったか。部屋番号を三桁押すと、そのままつながるシステムなんだそうだ。もちろん電話料金はかからない。外にかけない限りOKだとは、先生たちのお話だが。まあ今夜はほたる観賞もできなくなっちゃったことだし、多少の真夜中のおしゃべりは大目に見てくれるのでは、と周りでは噂している。

「あ、なんだよ羽飛」

「お前が直接、美里と話、しろ。それが一番いいんだ」

慌ててベッドの上に立ち上がった立村。さっそく膝の裏をキックしてぶっ倒した後、俺は遠慮なく「ハロー」と声をかけた。美里か、それとも古川か。やたらときんきん声なのは明らかに、下ネタ女王のあいつだ。

——はろはろ、羽飛、あいらびゅーん！

なんだこいつ。完全にテンション、ハイだぞ。

「古川か。今そこに美里いるか？」

——ううん、ただいまお姫さまの優雅なバスタイムなのでーす！

「誰がお姫さまだったの」

言いかけて、ひとりそう思う輩がいることに気がついた。悪い悪い。

「そうかあ、いやな、ただいま約一名、反省の色濃い男がいるんだが、いかに？」

古川とはさっき部屋の中でうだうだ話をしたんで、すぐに飲み込んでくれた。ありがたい。切れるぜナイス！

——ははん、私の弟ね。

「その通り。じゃああとどのくらいであいつ出てくるか？ こっちからもっかいかけるか？」

言った後、美里の長風呂は相当なもんだってことに、今気付いた。羽飛家と清坂家合同の家族

旅行中、美里の奴、いっつもだらだら風呂に使っていて、それこそ「お姫さま」気分が上がってくるもんだから周囲からはど響鬻買ってたんだ。いつになるかわからんな。しかも今日は最終日。おめかしにもさぞ、余念がないだろう。ちっともありがたくない幼馴染の特権だったりする。

——あ、羽飛。今、そこにわが弟がいるんでしょ。

「ああいるぞ」

——いいこと思いついたんだ。仲直り作戦に協力してほしいんだけどいい？

古川の考えることは下ネタオンリーと考えてよいだろうなあ。

「なんだよなんだよ、おい」

——悪いんだけどあいつをうちの部屋に来るように言ってくれないかなあ。

おいおいちょっと待った。それはまずいぞ。一応夜はもう、野郎同士でも部屋の出入りが禁止になってるんだ。しかもここのホテル、エレベーターしかねえぞ。もし女子部屋に男子がこのこの訪問していて、あわや「不純異性交遊」扱いされたらどうするんだ？

言おうとするのを三Dの誇る下ネタ女王古川はさえぎる。

——直接立村出してもらえる？ 悪いけど、あ、美里がお風呂に入ってるってことは内緒ね。

あたりまえだろうが。いくら美里の貧弱な胸……別に見たわけじゃあねえからな……にくらくらしなくたってな。「お風呂」なんて言って、立村が鼻血噴いても俺は素直に同情するぞ。

「なんだよ」

ぶっ倒れたまま耳をふさいでいた立村は、俺に無理やり起こされてめちゃくちゃ不機嫌そうだった。

「お前と話したい彼女がいるんだけどな」

「いいよ、俺から話す」

「だから、電話先でぜひにのご指名だよん」

わきの下をこちょこちょやりながら無理やり受話器を握らせる。しゅしゅ立村は返事をした。

「ああ、古川さん」

はたして古川の奴よ、どういう風に説得するんだか。相手はきわめて紳士でかつポーカークフェイスを理想とする立村だぞ。下ネタ女王のお手並み拝見といくか。

「先生か？ うん、来たよ。何って？ 一人で語って一人で感動して去ってった」

たぶん菱本先生登場のいきさつについて聞かれたのだろうな。仏頂面したまま事実関係だけを説明する立村。さすがにスタンプラリー秘術敗れたり！までは語れなかったらしい。立村の言葉はそれ以降、

「いや、うん、そんなことないよ。ただ相変わらず俺のことばかりにしてるなとは思ったけど」

と、菱本先生罵倒と化していった。日常なんで取り立ててネタにすることはない。

「そう、そう。なんでだろうな。でも旅行終わるまでは何も起こらないと思うから大丈夫だよ」

何が大丈夫なんだか。立村、自分の立場が危うくなるのを恐れてか、あえて真実を語らない。

「そんなことないってさ！ 古川さんあいかかわらず俺のこと誤解してるだろ」

さては、古川、例の隠密デートについて、つつこみを入れたのか？ 残念ながら立村側の相槌では判断ができぬ。

しばらく無言でこくりとうなずきつづけている立村の様子を眺めていると、いいおかずになる。ちらと俺の方を見て、テレビのスイッチを入れろと合図するんだが、甘いな。すでに優ちゃんの出番が終わった今、最大のエンターテインメントはお前、立村のバラエティーショーなんだ。

「まったくな、腹立つよな」

あいつが激していないのはおそらく、さっきのデート疑惑を突っ込まれなかったからだろう。たんと話は続いているようだった。時折、

「何が見抜いているだよな、そんな知ったかぶりするなよって言いたくなるだろ？ 古川さん」

まさに姉弟の会話をしている。この二人、昨日は一対一で行動していたんだよな。男子と女子って感じじゃねえ。美里がやきもち妬かないのもなんかわかるぞ。

「そうなんだ。清坂氏にもそんなこと言ったのかよ」

ううむ、残念だ。どういうこと言ったのか俺にはわからないが。俺をもう一度ちらっと覗いた後、立村はかなりひそひそ声となり、

「ああ、うん、俺の方から直接話すつもりでいたし。うん、そうだよな。それがいいかもな」

聞き取りたくても聞き取れないしゃべり方で俺をシャットアウトしやがった。古川、あとで俺に詳しい説明プリーズだぜ。

「うん、わかった。今から行く」

今から？ どこへだ？

「移動」を意味する動詞「行く」を用いるってことは、立村いよいよ、行動か？

さっき古川が「立村を来させてちょうだい」と話していたのをつなげてみると、どうやら目的は達成したらしい。

けどどうやってだ？ いや、もしもだ、ばれたらあいつ、殴られるだけではすまねえぞ。

なにはともあれ電話が切れるのを待つ。俺は両足をしっかりと地面につけて、電話側でため息をついている立村の腕を軽くひねった。顔が引きつっている。答えが出ないと困るんで、手加減しといた。

「どうしたんだ、立村。今な、『行く』って言ったようなんだが」

「ちょっとだけだよ」

相変わらず仏頂面は変わらない。俺の手を振り払い、浴衣の帯と裾のところを合わせなおした。男子のくせにそういうところはめかしこみやがるんだな。美里にいいところ見せたいんだろ。男だよそこそこあいつもな。

一応俺も、連帯責任を取らされる恐れありなんで詳しく聞きたい。「古川がなさっき、立村を部屋によこせて言ってたんだが、そのことだよなあ当然」

「わかってるならいいだろ」

「見つかったら停学食らうぞ、どうすんの。お前これで前科三犯になっちゃうじゃん」

もちろんいとしい美里のところに行きたいのだったら、自分なりの浮気事情を説明したいのだ

ったら、俺は万歳三唱して送り出してやるぞ。だがな、疑問代名詞「なぜ？」だけは確認したいもんだ。英語エキスパートの立村に。

立村はしばし黙った。うん、罪の意識はあるんだなきっと。指をもそもそさせながらつばをのみこむように喉を膨らませる。覗き込む俺と目が合い、いきなりかっと見開いた。ぶち切れる予兆だって、俺はこいつの付き合い二年半のつながりから感じ取っていた。

「ばれるようなへま誰がするってか！ 勝手に決め付けるなよな」

「おいおいどうしたよ」

「なんでもかでも、そういうことになんで、つなげたがるんだかな。真面目な話をしたいだけじゃないか」

「ちょっと待った、よおわからんぞ立村」

「何が人生の大先輩だ、知ったかぶりしやがって！」

おい、と口に出しかけてはっと気付いた。立村の奴、てっきり俺をののしってるのかと思いきや、なんのことはない、天敵菱本守に対しての宣戦布告ってことじゃあないのか？

立ち上がり、もう一度襟元を鏡の前で合わせ、クローゼットにかかっているブレザーへ手を伸ばそうとし、すぐにひっこめた。そりゃあそうだな。浴衣にブレザー、似合うわけねえじゃん。ろくろく説明もせずに、あいつは音を立てぬようドアを閉めて出て行った。

すぐに戻ってくるだろうとは思っていた。

テレビのスイッチを入れ直し、二時間ドラマの山場をぼけっと眺めながら大の字になり横たわっていた。

まあな、立村も美里へ言い訳したいって思ったってことは、より戻したいって気持ちの表れなんだろうな。

天羽、更科の評議ふたりには思いっきり勘違いしたことを叩きつけられたが、今更ながらの勘違いに頭が痛くなる程度のことにはすぎない。たまたま男子と女子ってだけでめちゃくちゃ話の合う奴と、なんで区別されなくちゃあいけないんだ。あいつらきっと、男と女イコールやらしい話をする間柄、としか思っていないんだな。さびしい奴だぜ。だから天羽は、西月にしなしなされた時に叩き潰すことしかできなかつたし、更科は思いっきり年上の女にしか感じなくなっちゃってるわけなんだ。俺なんて十分健全じゃねえか。俺の愛は鈴蘭優ちゃん一筋だ！

もちろん、美里と立村がこじれてしまった暁には、俺なりになんとかしてやりたいとは思っている。

親友同士がいざこざしていたら、そりゃあ気になるに決まっている。

あいつらからは、俺と美里をいわゆるふつうの「お付き合い」にまとめてしまい、立村と轟のニューカップルを誕生させたいという目論見がぷんぷん漂ってくるわけだ。むかつかないでどうするってんだ。俺は轟なんて単なる出っ歯出目金の女という印象しかないし、性格もいい悪いなんてわからない。もしかしたら奈良岡以上の性格美人なのかもしれないがそんなの俺に関係ねえよ。もし美里より轟の方がよかったら立村だってそれなりに考えるかもしれないが、俺の見限り、その気はさらさらなさそうだ。せっかくいちゃついているカップルを、評議委員会の都

合で引き離して何が楽しいんだ。クラスでのほほんと楽しく過ごしている俺たちを、意味不明なラブラブ光線にさらしたがるのはなんなんだ。

ああ、むかつくぜ！

俺はぼおとしながら、画面ドアップの警察手帳・桜田門の紋を眺めていた。

ノックの音が、三回した。内側オートロックなんで、俺が開けてやらないとまずいんだ。早く終わったんだなきっと。顔を見ないで相手を入れた。戸を閉めたとたん、ぎょっとした。

ピースして俺に笑いかける相手は、かの下ネタ女王・古川こずえだった。

慌てて締めた俺も、とうとう停学予備軍か？

「悪いんだけど、ちょっと長丁場になりそうなのよね、あのふたり」

二回目の二人きりといえばそうなんだが、なぜかこいつとはやばい気持ちにぜんぜんならない。美里も似たようなものなのだが、こいつはもっとすきっとしている。最初のショックはすぐに落ち着いた。明るいエンディングテーマに乗せられた格好で俺は自分のベッドに腰掛けた。古川もさっさと夕方腰かけた椅子にまたいで座った。大またおっぴろげて浴衣ははだけ、かなりセクシーな格好なんだろうが、こいつぜんぜん色気ないせいかどきんともしない。

「あのふたりってなあ、古川お前、さっき立村に何言った？」

「電話ででしょ。あのねえ、たいしたこと言ってないんだけどねえ」

「たいしたことねかったら、あいつがいきなり動き出すわけねえだろ。男女同室・しかも十時以降ったら停学の対象だぞ。ま、四人で停学なら怖くねえか、な」

「お互いさまよ。そんなへましないって立村も言ってたけどね」

いや、へましてるんだな、これが。俺は簡単にさっきの菱本先生ご来室時の会話について説明してやった。

「ははん、修学旅行後にお説教の予定が、早まっちゃったってわけねえ」

「そういうこと。あいつ相当めげてたんだぞ」

「だからなんだね、あっさり落ちたのは」

落ちた？ かなり気になる発言に俺は耳をそばだてた。古川もあごを椅子の上に載せてピースサインを俺に送ってきた。

「つまりねえ、立村、菱本先生と相変わらず戦ってるじゃない。羽飛の言う通り、あいつは美里と同じ部屋で二人っきりで話したいってそんな恥ずかしいことできないって思い込んでるのよ。校則違反はしたくないだろうし。評議委員長様だしね。けどあいつ、ふたつの点においては理性失うよ」

「理性って、美里のことか？」

思いっきり疑問をこめて尋ね返す。

「ノンノン、それはなし。あいつのアキレス腱はね、本条先輩と、あと菱本先生」

「なるほど」

頷ける。立村にとって兄貴分でかつ「ホモ説」のお相手本条先輩。今は公立の青湊東高校で相変わらず女に不自由しない生活を送っているのだとか。弟分たる立村の口癖は、「もし本条先

輩だったら、どうしているか、だよな」なのだ。もし本条先輩に万が一のことがおきたら、たぶん尋常の精神状態ではいられまい。

それに匹敵する相手と考えるならば、確かにひとりしかおらんわな。

我が三年D組担任、菱本守教諭。二十九歳。独身。たぶん、彼女、あり。

「そうよねえ。菱本先生のことどうしてあんな嫌うんだか私もよくわかんないんだけどね。立村、同じことを狩野先生にもし言われたら素直にこくんとうなだれると思うんだ。けど、なぜか菱本先生だと、火に油を注ぐ状態に陥っちゃうんだよねえ。面白いし」

「面白いことを、どうやって利用して落とした？」　くくく、と古川は喉を鳴らして笑った。

「つまりね、美里が菱本先生のご来室でいろいろと痛いところを突かれてしまったということを軽く説明したのよ。詳しくは言わないけどね。ちょっと落ち込んでいるのとか、また男子女子とのお付き合いは適度にねってことを言われたとか。まあそんなとこ」

「それくらいのことで立村の奴、なぜ熱くなる？」

「さあ。で、美里はかなり落ち込んでいるんだってことと、菱本先生の言い分がすべて下ネタにつながっているってこととかを付け加えて。そんなことないよって言い聞かせてやれるのは、立村、あんただけだってこと」

「そんな程度であいつ動いたのかよ」

信じがたいが、今すでに立村は美里の部屋にいるんだから、本当なんだろう。

「とどめはね、『このあたりで菱本先生の鼻明かしてやりたいと、思わない？』と」

「なあるほど！」

一度両手を打ち、人差し指を古川に向けて指すポーズ。でかしたぞ！だ。

「あいつたった今、ぶちのめされてたからなあ。ここいらで一発、ざまあみろってやってやりたいという本音か」

「そういうこと。私もスタンプラリーの話でつまこまれてたこと知らなかったし、ずいぶん簡単にひっかかるなって思っていたんだけどね。そうかそうか。まあねえ。立村ってやっぱりガキよねえ」

まったくだ。すでに終わった二時間ドラマのチャンネルから、報道番組に切り替えると、俺はあぐらをかいてベッドに座り直した。古川は肩をまたくくく、と震わせながら声を潜めて言った。

「さっき立村が来た時、お姫さまバスタイムの真っ最中だったのよね」

「美里は風呂なげえからなあ」

「しょうがないからずっとしゃべってたんだけど、そうしたらなんと、美里がバスタオル一枚巻きつけてあがってきたのよ！　髪はタオルで巻いて！　あんた鈴蘭優が同じ格好したと想像してみなよ、びんびんものじゃない！」

「……まさに、なあ」

美里には悪いが、優ちゃんに想像するとかかなり来るものがある。顔がにやけるぞ。

「羽飛もやっぱりスケベなところはスケベだねえ。ま、来たこと教えていなかった私も悪いんだけど、立村と目が合ってもうパニック！　きゃあー！　って悲鳴上げてただいまお風呂へ籠城中」

いや、ちょっと待った。思わず声を潜めてしまいたくなるのは、これも本能か。

「ちょっと待った。じゃあ、今、立村ずっと部屋で美里が出てくるのを待ってるってわけか？」
「チェリーなあいつにはそうとう刺激的だったみたいね。立村顔真っ赤にして、ベッドの上で膝抱えて座っちゃったわよ」

「鼻血は噴いたか？」

「さあ。ただ明らかに、上半身と下半身の意思統一はできなかったみたいね」

古川は顔をきゅっとしわだらけにして笑いつづけた後、真面目な顔をして続けた。

「けど、こうやって一晩とことん話し合ってもらうのが、一番いいのよ。菱本先生だって、『中学生のお付き合いはまず語ることなんだ』って言ってたし。立村には言わなかったけどね」

雨はだんだん激しく降り続けている。

「たぶん見回りはもう来ないと思うけどね。話し合いか初体験かどっちかが終わったら美里に電話させるようにって、立村へは伝えてるからさ。少しここにいて、いいかな」

「行けねえだろ、適当になんか食うか」

残り少ないスナック菓子の残りあり。俺はかばんから最後のポテトチップス一袋を真中から開き、ベッドへ広げた。

「あんがと、羽飛」

ニュースは、局地的な豪雨についてだった。明日の朝には上がるだろうってことだった。

まったく、私のお色気大作戦は効果ないんだってことがわかって落ち込みたくなる。

羽飛のお誘いに乗って、今度はベッドの上のにのっかって、くちゃくちゃポテトチップスを食べているだけなんだけど。

きっと上では、美里が立村とふたり、いちゃいちゃしているのかもしれないな、と思うとジェラシーを感じないわけないけれども、仕方ないよねとあきらめもある。あのふたりの付き合いは二年の六月から。いろいろあって、けんかもしてただろうし、浮気もされただろうし、けど、やっぱり好きなら好きでそれなりのことがあっても不思議じゃないと思うのだ。

「けど、あいつゴム持ってるのかなあ」

せっかく私たちも二人きりなんだし、ちょっとはいい感じになりたいじゃないの。

下ネタで突っ込んでやりたい。

「男子って全員、持ってるんでしょ。学校側から渡されて」

「まあなあ」

「C組の更科、できれば旅行中に使いたって言ってたよ」

「まじかよ、相手、都築先生だぜ」

ほほう、やっぱり噂は本当だったのね。あの子犬ちゃん男子評議、更科の恋人がなんと保健の都築先生とは！

「いいじゃないの、愛があればね。することはいっしょだし」

さりげなく、混ぜてみる会話の中身。けど羽飛の反応はまったくなし。鈴蘭優の話についてはいくらでも語ってくれそうな予感がするんだけどね。一日何回ポスターにキスするかとか、一晚につき何ページ抜いちゃうかとか、どのあたりで下半身反応するかとか。いろいろありそうなのね。

「そうかあ。けどさ、あれ初めて使う時、一度穴があいていないかどうか調べないとまずいてよ。あとつける時に破かないようにしなくちゃねって。私、男子の保健授業残念ながら聞いていないんだけど、そのあたりの具体的なテクニックについては説明あったの？」 学校側でそんなとんとんやらしいことしましよ うなんてお勧め、するわけないってわかっている。

けど、こちらから持っていかないと、反応してくれないじゃないの、羽飛が。

「学校では適当に、ってことかなあ。けどなあ古川、お前これ、立村にも同じこと聞いているのかよ」

「もちろんよ。あいつ答えなくて逃げちゃうけど」

美里と立村を一对一で話し合わせたほうがいいんじゃないかってことは、言い合いの前から考えていた。本当だったら消灯時間前までにどこかロビーかで、の方がいいかなとも思ったんだけど。ベストは今夜予定されていたほたる観賞の時だったんだけどなあ。暗闇の中、まあるいほたるがふわふわ飛び交う中、二人は愛を確かめ合う……いい雰囲気じゃないのって思っていた。けど世の中そんな甘くない。局地的豪雨の影響で、夕食以降の予定はすべて中止。おとなしく明

日の朝までおねんねしなさいというのが先生たちのご命令だった。

「結局どうなのよ、轟さんとのこと」

美里が言うには、轟さん本人から誤解を解く旨の説明を受けたとのことだった。評議関連のな
らなかで話があったけれども、ただそれだけ。別に美里から立村を奪いたいという気はさらさら
なかったらしい。けど、それならそれでこんなややこしいやり方、普通するか？ 女子たちの多
くはかなり疑っているに違いない。もちろん、立村が轟さんを選んで美里を振る、なんてことは
ありえないと思っているだろうけども。

「評議委員会の裏事情がいろいろあるんだとさ、どっちにせよ、あいつ美里に説明したいとは言
っていた」

「ふうん、けどさ、なんで美里をはずすわけ？」

羽飛はぐぐっと奥歯をかみ締めて首を振った。

「評議委員会にはいろいろあるんだろ。あすこ、なんだかんだいって男尊女卑の世界観だから
なあ」

「まあね、この前の小春ちゃんのことといい、杉本さんのことといい。外から見てて思うね」

美里の性格上、間違っていることは間違っている、納得いかないことは納得いかない、はっきり
言い過ぎてしまう嫌いはあると思う。なあなあにしておきたいと思う立村の性格とは正反対か
もしれない。そこらへんでこぼこぶりがもしかしたら、うまくいっている秘訣なのかもしれない
けれども、評議委員会の男子たちからはあまりいい顔されないうらな、とは思っていた。こ
れも外から見ている私の感じ方なんだけども。

「評議の連中ってさ、男同士で固まっていたい、女子はお飾りにしときたい、そういう匂いがぷ
んぷんするのよね。第一さ、ふつう委員会って委員長がいて、副委員長がいて、書記がいてって
流れじゃない。それがさ、なによあれ。委員長の独裁体制であとは委員長のお気に入り下級生が
ひとりくつつくだけ。去年は本条先輩がいて立村が腰ぎんちゃくだったけどね。こんなんでやっ
ていけるわけ？ あまり私もふつうふつうって言いたくないけど、せめて女子の副委員長とか、
補佐とかつけれって言いたくなるよね」

「評議委員会における美里の位置付けっていったいどんなもんなんだ？」

羽飛は唇にくわえたままのポテトチップスはずして質問してきた。

「一応は立村委員長の補佐、かなあ」

「じゃあ三年男子って仕事あるのか」

「あるんじゃないの？ ああ見えても立村、男子限定で信頼されてるから」

私の目からすると、決して性格の悪い奴ではないと思うのだけど、ただ彼氏に好んでしたいタ
イプではないだろう。女子にとっては自分の考えでどんどん決断してくれるような男子がかっこ
よく見えるもの。たとえば羽飛みたいに。

「クーデターの起こる可能性ってのは今までなかったのかよ。俺もなあ、立村から評議委員会か
らみのことぜんぜん聞いてねえからわからねえんだよ」

「どうなんだろ。去年、委員長を決める時にいろいろどたばたあったのは知ってるけど、同期同
士では聞いてないよね。ただそれは男子関係のことだけよ。女子はね、やっぱりあるんじゃない

のいろいろと」

あまりべらべらしゃべってしまうのもまずいだろうし、私はこくと飲み込んだ。

なんとなくだけど、羽飛、その辺わかってるんじゃないかって気がしてきたからだった。

ニュースは豪雨情報から、殺人事件、政治問題、国際問題、いろいろと流れ、また同じ天気予報に戻った。見てないけど、万が一声が洩れないようにということでそのまま付けっぱなしにしておいた。

「そういえばさ、ずっと前なんだけど」

思い出したことが見つかったんで、羽飛に話しておくことにした。

「耳より情報か？」

「もう期限切れ」

なんてたって本条先輩だもんね。

「かなり前なんだけれどもね、噂で聞いたことがあったんだ。立村が評議委員長に指名される前、周りでは天羽を推したかったらしいんだけど、本条先輩が絶対に立村でなくちゃだあってだこねて、ああなったって」

「あれ、今の二年と対抗したってのじゃなくてか？」

「ほら、『ビデオ演劇・忠臣蔵』の年よ。あの時立村、杉浦加奈子ちゃんに付きまとして菱本先生からお叱りを受けて、ってことがあったじゃないのよ。いい噂聞いてないよってことで、二年上の先輩たちはみな立村を指名するのを反対したらしいって。でもねえ、本条立村ホモ説を覆すことはできずって」

あくまでも噂なんだけども。ただ天羽がもともと目立つし人気ものだったってのは否定できない。小春ちゃんがずっと片思いしていたのもうなづける。うちのクラスでいえば、男子評議委員を選ぶ際必ず挙がる名前が羽飛と南雲だ。立村なんて過去の実績と羽飛の推薦がなければ、絶対浮かび上がるわけがない。そういう奴を指名するとなると周囲も黙っちゃいないだろう。噂だけど、自然な話だなって思っていた。

「まあ、天羽なら順当だっただろうな。関西ギャグ男」

「もしクーデター起こしたいと思う人がいるとしたら、一番可能性高いのは、天羽かなあって。でも立村と仲がいいんだったら、それはありえないか」

羽飛の目が光ったような気がした。どきり、ぴくん。私に、じゃないのね。

「いや、いいところついてる。姐さん、あんたは偉い」

「え？」

今度はほんとに私に向かって、ぎらり。うわあやっぱり、かっこいいじゃないのさ、ねえ羽飛

。うっかり舞い上がるとまたけん制されちゃうのも経験済み。

羽飛はもう一度私を静かに見つめて、言葉を流し始めた。

「立村のことは評価してるみたいだな。あいつらは」

ポテトチップスの塩を、つばつけた指ですくいとり、なめる。

「ただ、やっぱりな、美里のことは気に入らなかったと、そういうのはあるだろうな」

「どうしてよ」

「よくわからねえけど、美里がしょっちゅうへましでかして、立村のやろうとしていたことをつぶしていたらしい」

「それ反対じゃないの。立村が優柔不断だから、美里が尻叩いてやっただけじゃないの」

男っていつもそうだ。自分の都合が悪くなると、強い女子の方を叩くんだ。

「詳しいことはわからねえけどさ、ほら、立村がめんこがっていた杉本って子がいたろ？ あの子のこととか、最近だと西月のこととか。立村がなあなあに収めようとしていたことを、美里が表出しして騒ぎにしちまったってな」

「まあねえ、美里はそういうの得意だからねえ。けどさ」

羽飛が言うことはやっぱり、男の論理だと思う。

「まあ聞けよ。立村はああいう奴だから怒らないし、美里を立ててるけどな。周囲が迷惑だからなんとかしろってのかなあ」

「何言ってるのよ。そりゃ美里ははっきり言い過ぎるところあるけど、そうでもしないと動かないから言ってるだけじゃないのよ。立村はもちろんいろいろ考えてるんだらうけど、やはり決断力なさ過ぎ。私思うんだけど、美里が委員長やって立村が副委員長やったほうが一番まとまったんじゃないかって思うけど」

「すげえなあそれ、怖え」

それでも受けてるとこみると、納得できるんだらうなと思う。

「けどどっちにせよ、評議委員長は立村なんだから、立村のやりたいようにやらせてやりたいってのが男子評議連中の考えらしいんだなこれが。要は立村に美里をもっと押さえ込んでくれって言いたいということなんじゃねえのか」

このあたり口籠もっていたのが気になる。

「美里をおとなしくさせて、男子に仕えさせろってわけ？ ふざけんなって言いたいわよ。それって天羽が言ったわけ？」

「いや、他の評議連中のご意見らしい」

このあたりもあいまいにぼかされた。あいつの口ぶりからすると、たぶん羽飛はもっと詳しいこと知っているんじゃないかって思うんだけどな。第一どうしてなんだろ。評議関連のこととか、美里の位置付けとか知らないくせにね。天羽のねらいを知ってるんだらうな。

「ふうん、そうなんだ。けどねえ」

「俺もわからねえよあいつらの考え。立村も評議委員長だったらそいつらをもっとびしっと言えて、言いてえよなあ」

立村が結局が一番悪いんじゃないの、これは私も同感だ。

「とにかく立村は何事もあいまいにぼかしすぎ。杉本さんのことだってそうよ。あんないい子をねえ、結局は評議から降ろすんだから。陰でいろいろ面倒見させてるのはわかるよ。他の三年女子だってそれはやらなくちゃって思ってるよ。けどねえ、男子だけで固まりたがってて、まる

で『三年男子評議ホモ説』浮上じゃないのさ」

ほんと、気持ち悪いったらない、ねえ羽飛？

「古川。これはな、俺が勝手に想像したことだから、他言するなよ。美里にも言うなよ」

コマーシャルの音楽がやたらとうるさい。小さくしようと手を伸ばしたら止められた。

「ふたりの秘密、きゃー、あぶない」

「ふざねんじゃねえよったく」

口をとんがらせて、それでも羽飛は推理を展開してくれた。私だけのごほうびだ。

「あいつらがどういうことを考えているかはまったく想像つかないがな。ただお前が言うように美里が評議委員長になれなかった以上、長は立村なんだ。あいつを守り立てるためには美里じゃない誰かが必要なんだってことなんでないか」

「どういうことよそれ」

言っている意味がわからない。羽飛にしては珍しい。やたらと硬いことばかり言う。そのくせほったにはポテトチップスの塩がいっぱいついていてアンバランス。男前の顔が台無しだぞ、羽飛。

「美里のやってることがいいのかそれとも間違ってるのかなんて見当つかねえけど。ただ立村の性格を考えれば、美里のやり方にうなづけないってのもあるんだろうなあ。わからんけど」

「だから立村があほすぎるだけなのよ！」

「その辺は俺も見当つかねえよ。ただな、立村もこれから評議委員会でいろいろと計画していることがあるんじゃないか？ 美里には手を出してもらいたくないようなことをな。それこそ、女子には手出ししてほしくねえよってところをな」

やっぱり男子なんだろうな。別に女子が手出ししたっていいじゃないのさ。

「なによその手出ししてほしくないことって。羽飛、あんた知ってるんじゃないの」

「知るわけねえだろ。とにかくだ」

断言しているようにみえてなんとなく口はぼったいことを羽飛は言う。

「今までだったらほれたはれたくつついた離れたとか、ま、命は取られねえよって内容だったけど、今抱えている問題ってのはちょっと違うんじゃないかかって気がするんだよな。つまり、その、んだな。美里がもし下手に手を出したりしたら、第三者に多大なご迷惑をおかけしますって内容のな」

「羽飛、あんた立村の優柔不断が移ったんじゃないの？」

だんだんいらいらしてくる。だっていつもの羽飛じゃないんだものね。こういう時だったら羽飛、もっとはっきりと「あのぼけははっきり言えよな！ 要は美里のだんなとしてもう少しびしっとしろよびしっと！」とか言って怒鳴るはずなのにね。

「移ってねえよ。あれはあいつのオリジナルだ。それはともかく俺としちゃあ、あいつの性格上評議委員会では美里が邪魔だとは言えない。たとえ本音でそう思っているても」

「あんた美里の幼馴染なのに良く言うねえ」

「間違えんなよ。あくまでも評議委員会の中で、だ」

よくわからないなあ。羽飛の言い方だと、どうも美里が邪魔なので追っ払いたって感じなんだけどな。

「じゃあなんで轟さんが出てくるのよ。なんで轟さんにこそこそとそういう話をさせなくちゃいけないのよ」

「ま、それが男女の仲って奴よのう」

古風な言い方をする羽飛に、思いっきり腹へパンチを食らわしてやった。ひっくり返って浴衣はだけて紺の柄パンが丸見え。変なところチェックするようだけど、なかなかセンスいいねって惚れ直し。

「轟がどう思ってるかこっちは知らんが、とにかく立村には、恋愛と仕事の一線をきちんと引いてくれっていうのが天羽の言い分なんじゃねえか？ どうせ美里にあいつがほれぬいているのは周知の事実って奴だしな。そんな引き離そうっていうんじゃねくて、あくまでも、評議委員会の中では美里よりも轟を重んじよ、ってことなんじゃねえのか」

「轟さんのどこがいいのさ」

頭がいいことは認めるけど、私はおろか、美里だってたいしてあの子を評価しちやいないはず。「さあな。評議男子にとってはいろいろあるんだろ」

羽飛の言い分はやっぱり、歯切れが悪かった。

評議委員会なんてよくわからない。私も今は図書館に入って盛り上がっているけれども、こんなややこしい問題はなかったように思う。美里の性格でよくやっていけたもの。男子たちがふんぞり返って、ちょっと頭のいい子が来ると追っ払おうとする態度。なんというか、去年の杉本さんがらみの事件を思い出すとほんとむかむかしてくる。

もちろん、いろいろ事情があるんじゃないかなと思わなくはないのだ。

「委員会最優先主義」みたいなのが、私たち入学前から出来上がっていて、それに乗っかってずっと来たわけなんだから。仕切っていたのが男子ばかりで、副委員長も書記もいないって組織。先生も「きちんと運営されている」という理由で大目に見てくれているからやりたい放題。もちろん仲良しのうちはよかったんだろけれども、一度団結力が弱まると組織がぶっ壊れるのは早いものなんじゃないかな。大人の社会はすごいもんだってうちの母さんから聞くけれどもね、中学でこんなすさまじいのを目にするとは思わなかったよ。ほんと。

去年の評議委員長、本条先輩はもろに男子パワー炸裂、って感じの人だった。彼女が学外にふたりいて、かなりきわどいお付き合いをされてたとか。噂ではラブホテルにちょくちょく出入りしていたという話も耳にしている。図書館の先輩から聞いたことだけでも、本条先輩は一年前期においてかなり同期をやめさせたり殴りつけたりと、一歩間違ったら退学になりそうなことをやらかしていたらしい。当然、女子は男子に仕えるもの。もしくはいちゃつくもの。そういう認識の持ち主だったから、評議委員会の雰囲気は相当すさんでいたに違いない。

立村はその本条先輩べったりだったけれども、方針はまったく異なっているみたいだった。あくまでも私がクラスで見る立村の行動パターンを見て思うことなんだけれども、女子に対してはとにかく腰が低い。声を荒立てて怒鳴ったりすることがない。むしろ飲み込んでしまうタイプだ

ろう。むかつく男子がいたとしても……たとえば去年の冬、一学年下の新井林との揉め事があった時も……ぶん殴って服従させるよか、自分の方が譲歩して納得させるという手段を取る。女子に対してもおんなじで、ゆいちゃんや小春ちゃん、当然美里に対してもそうだ。杉本さんからの事件では最終的に先輩たちの意向に従わざるを得なかったみたいだけど、それでも「E組」で面倒みたり、「他校交流」関連で協力させたりと、それなりに心配りしているようだ。

女子からしたら、悪くはない。けど、男らしくない。女々しいって見えるのも本音としてある。

女子には得なことしてくれる男子だけど、「男子」としての魅力は感じない。

本条先輩がもてもてなのに、立村がいまだ美里以外に評価されてないのは、その辺にあると思う。

それ考えるとやっぱり、男子最優先組織の方が男女問わず受けがいいのかもしれないし、いくら立村が私たち女子に対して気持ちよくしてくれたとしても好かれないのはしょうがないかもしれない。そういう考えが大多数である以上、簡単に男尊女卑思想が根強いいる評議委員会が変わるのは難しいんだろうな。美里はきっと立村を応援したいし味方になりたいとは思っている。でも、ほんとは自分で思いっきり組織を動かしたいはずだ。補佐するよりも、自分から動きたい。守りたいって。男子たちはそんな女子よりも、「お手伝い」タイプの子の方が便利だし、助かるって思っている。応援してくれて、おだててくれて、にこにこしてくれるような女子。たとえば奈良岡彰子ちゃんみたいなタイプがもてるのは、その辺に理由があるんじゃないだろうか。菱本先生も「おだてられると男は力を二倍だす」とか寝言みたいなこと言ってたしね。

けど、そんなの悔しいじゃないの。

おだててほしいのは、ほんという、私たち女子の方なんだから。

誉めてほしい、応援してほしいのは、私たちだっておんなじだ。

男子たちは当然のように応援してくれる相手を求めてくる。自分を一番だと思ってくれる相手ばかり大切に。けど、トップに立ちたい、動きたいっていう美里みたいな子がやってくると一気に団結して蹴飛ばすわけだ。男女なんてほんとは関係ないのに。どんどん評価してほしい、おだててほしい、力を二倍出したい、そう思うのは男子だけじゃないのにね。

「羽飛、あんたって誉められるとうれしい？」

聞いてみた。きょとんと、「はあ？」と返事。

「だから、おだてられたらうれしい？ 菱本先生セイド」

「嘘っぱちでおだてられてうれしくなる奴いねえよ」

「ふうん」

あぐらをかいた両膝を交互に押しながら身体を左右に動かした。

「けど、立村はどうかわからねえけどな」

「あいつは誉められなれてないから？」

「それもある」

言われてみるとそうだなって思った。だって立村を評価する人って英語の先生と美里くらいじゃないの。

「じゃあ美里がさ、仮に『立村くんあなた素敵よ!』とかいう、歯が浮くような台詞を口走ったとしたら、燃えるかねえ」

「俺も鈴蘭優ちゃんがそういうこと言ったら」

あっそ。結局あんたは鈴蘭優命なのね。わかったわよ。

「じゃあやっぱりさあ、ひとつ私なりの提案があるんだけど、聞いてくれる？」

のろけ話をきかされるのはたまったもんじゃないんで、私は話を断ち切らせた。

「私ね、美里にとことん『あんた素敵、あんた最高!』を連発するように勧めてみようと思うんだ。そうすればあいつだって多少は鼻の下伸びるだろうしね。本当は美里、立村の代わりにどんどんやりたいんだろうけれどもそうしたら評議の連中が怒るんでしょ。むかつくけどそれが男子最優先主義の評議委員会ではしょうがないよね。だったら美里が立村をめろめろにして、かばってもらえるようにするしかないじゃないのさ」

「なんだそりゃ」

「わからないと思うんだよね。ほんと女子としては頭くるよ。けど、いくら文句言ったって天羽たちは立村のためっていう言い分があるから勝ち目ないんだよね。初の女子評議委員長を狙った杉本さんですら、本条先輩の命令で追い出されたようなもんじゃないの。それならあとは、レディーファーストを重んじる立村 委員長を味方につけるしかないよねえ。女子は女子の武器を使うしかないのかなって思うよほんと、うちの母さんじゃないけどさ」

しゃべっているうちになんだか、すごく惨めな気分になってきた。

私は美里や杉本さんみたいに、どんなことあっても男子たちの上に立ちたいって気持ちはない。おだててOKならいくらでもおだてられるし、ほれてる相手 だったらいくらでもプッシュしたくなる。男子も女子も関係ない。けど美里はそういうのがいやなんだと思う。いくら好きな相手だとしても納得いかないことは受け入れない。親友でも恋人でも。

上を求めつづけた結果、杉本さんは評議委員会から追い出され、美里も補佐から外されるはめになった。

男子たちの団結力に女子が勝つためには、人一倍の努力とあきらめが必要なのもかもしれない。

——男子たちはねおだててやるのが一番。そうすればいくらでも仕事やってくれるんだよ。

「お前の母さん、『女の武器』とか言うのかよ、すげえなあ」

羽飛は腹を抱えて笑い続けた。私は笑えなかった。

「だってさ、うちの母さん、『コンチェルト』のホステスなんだよ、知ってた？」

あんまり口に出したことの無いほんとのことだった。

羽飛は笑い声をびたっと止めた。

『コンチェルト』とは青潟で知る人ぞ知るキャバレーの店名だった。キャバレーというと、でれでれしたおじさんたちがきれいなお姉ちゃんをはべらせて酒飲んで、「一番テーブルへいらっしゃーい!」とかやっている光景を思い浮かべるかもしれないけども、母さんがいうには「あ

んた、がんばってるホステスさんに対してそれは偏見よ！」ってことになるらしい。私だって見たことないもんね。子どもの頃はキャバレー直営の託児所で弟と一緒に過ごしていたし、今でも母さんは週三回程度店に出ている。最近は有名な歌手がやってくることも多いので、女性のお客さんがたくさん来るんだそうだ。決して、スケベ根性丸出しの場所じゃないんだそうだ。ごめん、私もいまだに良くわかんないんだ。

「一応、父さんはほんとの父親だから、悲劇の想像はごめんなすってね」

「誰がそんな想像するかって」

親の職業を誇る気もないしけなす気もない。ただ、働いている、ってそれだけだ。父さんも母さんも弟も仲いいし、私にとってはそれだけで十分だ。けど、やっぱり女子の友だちには口に出しづらいものがあるのも確かなんだ。

よりによって、初めて話した相手が、羽飛とはね。

「たださ、悪いんだけどしばらく美里には内緒にしてほしいんだけどさ」

「なんでだよ」

「ほら、美里潔癖じゃない。ホステスイコール、きゃーやらしいって思わないとも限らないじゃない」

テレビドラマの影響である。うちの母さんが言うには、子持ちのホステスさん、うちみたいに結婚している人妻ホステスさんだってたくさんいるんだし別に隠す必要はないのだそうだ。私だって恥ずかしいとは思わないけど、ただ先入観ありありの相手に、「それは違うのよ」と説明するのも面倒だ。

「ついでに女子たちにもね、いろいろとほら、面倒だし」

「わあった」

それ以上追求されなかったんで、ほっとした。説明できないことがいっぱいうちの親の仕事。将来「ご両親のお仕事は？」なんて面接で聞かれたら、どうしようかなあ。やっぱり「接客業」って答えるしかないのかなあ。

「とにかく、そういう経験もあってうちの母さんから、男を誉めたら百人力ってことをレクチャーされてるってわけよ。だからいくらでも私、羽飛のことほめちゃうわよ、ほめて、ほめて、誉め殺し？」

「いらね、そんなん」

意外にも無口になった羽飛。できれば先入観なしでいてほしかったんだけど、やっぱり私に対しての見かたが変わったなんていわないよね。

「けど、古川の話はわかりやすいわな」

「でしょでしょ。羽飛の話だと、評議委員男子連中の意見は一致しているみたいだし、そうそう簡単にひっくり返るとも思えないから、まずは美里に少し押さえてもらって様子を見てもらったほうがいいと思うんだよなあ」

「そうだな。けど美里がそんなの聞き入れると思うか？」

「まあね」

一番の難題だったりするわけだ。すんなりいくとは思っていない。

「だから、今晚立村にがんばってもらうしかないんじゃない？ 四十八手あの手この手」

「なにをだよ」

「『俺を信じてくれ、支えてくれ、ただ側にいてもらえればそれでいいんだ！』って、言ってもらわないとき。一応ご本人には頼んどいたけど、さあて今ごろ何してるかなあ」

テレビの画面には、「夜の歓楽街をうごめく蝶たち」の特集が流れていた。こういう番組が日常だから、うちの母さんたちの仕事って誤解されるのかなあ。あらら、ストリップ劇場のお姉さんが着物姿で裾はだけさせてちらり見せてるよ。うわあ、セクシーなんてもんじゃないね。これ。私が男だったら鼻血噴いてるよ。

羽飛が手を伸ばし、スイッチを消した。あらあ残念。いいところなのに。

「電話、来ねえな」

「そうだね」

妙に静かな部屋の中、今まで気付かなかった激しい雨音が、ばつんばつんとぶつかるように聞こえた。

私たちはふたり、残りのポテトチップスを口の中へ片付けた後、ふうとため息を吐いた。

口では言ってみたことだけど、私も納得しているわけではなかった。

女の武器、って効果があるのは認める。彰子ちゃんタイプの性格美人がもてるのもわかる。

杉本さんが男子たちに無視されるのも、ゆいちゃんがあれだけのかわいこちゃんなのに疎まれるのも。

理由は単に、男子に受け入れられないから。男子を気持ちよくさせてあげられないから。そういうことができる子でなければ、委員会の中で男子と対等に扱ってもらうことはできないんだろう。

いやがられて嫌われてあっち行けって言われるだけだ。

轟さんみたいにやたらと卑屈で相手を持ち上げるような子の方が、もしかしたら男子はほっとするのもかもしれない。美里はそのあたりまったく問題にしていないうみただけど、私のアンテナがずいぶんぴくぴく言うのだ。男子は自信をつけてくれる女子を好むという。今まで美里は立村をかばって守ろうとしてきたけれども、それは本人の求めているものと違うのかもしれない。はたして轟さんがどういう考えを持って近づいたのかわからないけれども、立村がもともと女子の外見をあまり気にしないタイプだとしたら、美里かなり状況不利だ。頭がよくて、きりりとしていて、どんどん前もってつきってくれる子よりも「あんたが最高、あんたが一番！」とささやいてくれるようなタイプに負けてしまうだろう。

簡単になれるようだったら、私だって苦労しない。

羽飛好みの私になれるんだったらと思ったこともあるんだしね。でも、どんなに努力したって私は下ネタ女王の古川こずえ、鈴蘭優のそっくりさんにはなれない。だからそれでつきるしかない。ありのままをぶつけて、跳ね返されて、それでも元気一杯でいることしか、できない。それで振られるんならしかたない。今、ありのままの私はこうやって羽飛としけたポテトチップスをつまんでいるけれども、決していやじゃないんだから。満足しきってはいないけど、こう

しているのが楽しいって、素直に思っているんだから。悔いはない。

けど美里は？

美里はありのままの自分を立村にぶつけて、受け入れてもらってるのだろうか。

なんとなく口に出せないような気がした。上の部屋で、行われていることは語り合いの四十八手なのか、それとも。

「俺、死ぬほど眠いんだ。わりい、古川、立村の方で寝ろ」

「わーい、二人でらぶらぶじゃあん」

わざとはしゃいだ声を出したけど、羽飛はあっさりと首を振った。枕とバスタオルを身体に巻きつけた。

「風呂場で寝る」

「ちょ、ちょっと待ちいなおとつつあん！」

冗談めかして声をかけたけど、羽飛はいっさい振り向かず、バスルームへ入っていきこうとした。それはまずい、私だって寝る前にお手洗いくらい使いたいじゃないのさ。

「あ、わりい。先に入れ」

「けどあんな湯船の中でさ、寝たら腰痛くなるよ。無理しないでさ。私も襲ったりしないし」

「ばあか、冗談じゃねえよ」

ほんとは二人並んで眠るのも悪くないって思っていた。もちろんそれが目的だしね。それにいくらなんでも羽飛はやらしいことしたりしないでしょうが。いっしょにしゃべりあって、それで一夜を明かすってロマンチックだしね。

「さて、これでいいか。じゃあ寝るぞ。電話来たら呼べよ」

「そんなあ」

ちょっと駄々をこねてみたくなった。向こうだって私の気持ちくらいよくわかっているはずだ。「あのなあ、古川」

羽飛はじっと私を見つめた。さっききてから初めての、おっかないまなざしだった。

「お前、女子だからわからねえかもしれねえけど、犯罪者にならないようにするってのは、男にとってしんどいんだぞ」

うるうると訴える瞳をつくって見つめてみたけど、羽飛はあっさり背を向けた。

——もしかして、ちょっとだけ「女の武器」効果あった？

鈴蘭優以外でももしかして、あいつの心を揺るがしたのは、私だけかもしれない。

まったく手付かず、のりの利いたシーツをめくって私は目を閉じた。朝五時半起床。どうやって部屋戻るかほんとは考えなくちゃならないんだろうけれど、なんとかなるよね。今、同じ部屋に羽飛がいる、同じ空気を吸っている。同じ夜の雨音を聞いている。同じく目を閉じている。

ずっと前に南雲へ相談したことがある。

——なぐちゃん、もしさ、もしもだよ。なんかの拍子で、ほら、変なものを見たりしてさ。

——変なものって、たとえばあれとかこれとかあそことか？

勘の鋭い南雲はその辺すぐにわかってくれたみたいだった。

——そう、それを見てしまって、その場所だとそんなことしちゃいけないってわかってる時にさ。そうなったら、どうすればいいと思う？

思い出すところそあど言葉の連発だなんて思う。だって露骨に言えないじゃないか。

——りっちゃん、そういう時は開き直ればいいんだよ。

南雲の言葉は、僕の情けない質問に対してあっさりしていた。

——だって、男の体はそう反応するように出来ているんだからしょうがないって。

——けど女子の前でそんなことになったらどうすればいいんだろう。どうすれば大人しくなるかいい方法、知らないかな。

——うーん。

南雲はそういう話題を素直に取ってくれる相手だった。だから相談できる。打ち明けられる。

——ひつじを数えるとか、うまくブレザーを羽織りなおすとか、けど一番いいのは普段から溜めないようにしておくことじゃないかなあ。ごめん、りっちゃん。俺、そんなこと真剣に考えたことなかったから、役立つこと言えないなあ。

——よりによって、最悪じゃないかよ！

古川さんがいなくなり、ユニットバスへ清坂氏が閉じこもり、僕はひとりで部屋の中、膝を抱えている。スリッパをつま先から落として、浴衣の裾をうまく隠すような格好に緩めて、石ころに化けた気持ちで座っている。

やましい気持ちなんて全く感じてなかったはずだった。決して夜這いしたかったからじゃない。ちゃんと古川さんと相談して、話し合いをきちんと清坂氏としなくては、と思ったから、それだけだ。変なこと考えていたら僕だって、古川さんや羽飛に行き場所はつきり言う訳がないじゃないか。

僕が清坂氏に誤解を招くような行動をしたのは事実なんだからちゃんと話をしなくてはならない。やはりこちらの方から頭を下げた方がいいかもしれない、と心に決めていた。

清坂氏の方が僕よりずっと大人だから、「そんなこと気にしないでいいよ」と言ってくれるんじゃないかって気がする。ふだんだったらたぶんそうだと思う。だけど、なんというかこの旅行中の清坂氏は少し不安定な様子だった。僕がたいしたことない、って思っていることもかなり大げさに受取ってしまうかもしれない。轟さんはあとで清坂氏に、ちゃんと詳しい説明をしてくれると話していたけれども、僕も早い段階できちんと誤解を解いておきたいと思っていた。

だけど、まさかだ。なんでこうも自分が自分の理想を裏切るんだろう。

完全に「修学旅行自由時間」スタンプラリー作戦、成功していたと信じていたのだ。

あのD組担任に、あそこまで勝ち誇った顔されてだ。

僕はどうしようもなく役立たずなんだってことがよくわかったってわけだ。D組担任野郎の言う通り、僕は女子受けが悪くて秘密があっさり洩れてしまったのもしかたないんだろう。だけど、古くは結城先輩、本条先輩、それぞれが参加した修学旅行ではばれていなかったはずだ。本条先輩なんて男女ともに敵だらけだって話じゃないか。なんで僕の代になって、あっさりとばれてしまうんだろう。

救いだったのは、旅行中にいきなりスタンプラリーの禁止令が出なかったことだろうか。

あれも教師面して「大目に見てやったんだぞ、感謝しろ」とばかり鼻の穴膨らませるD組担任の顔がむかついてならない。羽飛じゃないが、僕はこれで前科二犯になったってわけだ。そうだな、まさにそうだよ。僕の考えていることは、みんなお見通しなんだもんな。そうだよな。やっぱり評議委員長になんて、僕は向いていないんだ。やっぱり、評議委員長は天羽を指名してくれば一番よかったんだ、本条先輩、そうじゃないですか？

罵りたい。わめき散らしたい。どうしようもなく暴れたいってこのことだ。

さすがに同室の羽飛に蹴りを入れるのは思いとどまった。タイミングよく、古川さんから電話がかかってきて、

「あのさあ、立村。あんたが轟さんとなにしたかはわからないけどさ、この辺りできちんとけじめつけときな。今も、美里ご機嫌斜めなんだよ。ほら、菱本先生が『中学生の恋愛』とか『初めてのあれ』とか、いろいろ語るだけ語ってってさ。ものすごいナーバス状態なんだ。ちょっとだけ話、聞いてやりなよ。あんたも彼氏なんだからさ」

と聞かされた段階で、完全にぶちぎれた。

僕に対してだったらしかたないだろう。どんなにむかついたって、やらかしたことは確かなんだから。責任を取る覚悟はある。だけど、清坂氏にそんな話を思い出させる必要ってあるものなのか？僕は絶対ないと思う。もちろん女子のいわゆるあれとかこれとか、見当つかないわけではないけれど、清坂氏は旅行中の嫌な思い出なんて、一瞬も思い出したくないに決まっている。D組担任にとっては、「青春のほろ苦い一ページ」なんだろうが、その当人からしたら地獄を見たのと同じだってことに、どうして気づかないんだろう。本当に僕よりも十四才上なのか？本当に狩野先生と同年なのか、あいつは！

「わかった、今から行く」

本当は清坂氏と話をするのを後回しにしようと思っていた。夜這いなんて思われたらしゃれになんてならないじゃないか。旅行が終わっていわゆる、あれが終わったんじゃないかという頃にふたりでどこか行こうかとも考えていた。でも、あの馬鹿D組担任野郎の非常識な行為プラス、僕の不必要な行動、これが重なってしまったらきっと清坂氏、修学旅行が真っ暗い思い出だけになってしまうだろう。そういえば、清坂氏が思いっきり笑っていたところを、この旅行中一度も見たことがない。いつも苦虫噛み潰した顔している僕に、

「ね、立村くん、せっかくだから楽しもうよ！」

と明るく声をかける清坂氏がない。

もう今更遅いかもしれないし、僕の顔なんて見たらさらに面白くないことばかり思い出させるかもしれないけれど、話をしたら少しはすうっとまぎれるかもしれない、そんな気がした。本当は羽飛の仕事なのかもしれないけれども、僕だってそれなりに、動くことはできるんだから。

そうだ、あんな馬鹿D組担任・菱本守氏よりははるかに。

運良く誰にも行き会わなかった。

古川さんもすぐに部屋のドアを開けてくれた。けどなぜかいきなり、反対側のクローゼットにもぐりこむよう指示された。古川さんとふたり、制服と重なるような格好でもぐりこみ、「今から私、あんたの部屋に行くからさ。美里と話し合いが終わったら、内線の電話で連絡してよね」

「羽飛とか？」

「そう、あんたたちだけがいい思いなんて勿体ないでしょうが」

いい思いなんてする気なんてない。何考えてるんだ、この下ネタ女王様。そこまで僕が恥知らずだと思っているのだろうか。

「いい思いなんてしないけど、話し合いはするよ」

「まあまあ、だけど、もしばれそうになったらすぐに私のベットにもぐりこんで、顔かくしな。たぶん私と髪型似てるから、寝ているところだけ見たら気づかれないと思うよ。」

言われてみれば古川さん、僕とかすかに似たような形に髪型を整えている。ショートカット、たぶんうまく潜ればばれないだろう。

「とにかく、あんたたち一度もこの旅行中、まともに話してないじゃないのさ。お姉さんは悲しくて涙が出るわよ。ほらほら、美里今、お風呂に入ってるからね。少し覚悟して待ちな」

あまり声を出すと、近くの部屋の女子たちにばれてしまう可能性がある。僕も古川さんも、それ以上の話はしなかった。先に古川さんがクローゼットから出てベッドに座り、僕を手招きした。

何事もなく僕は座ったはずだった。

何事もなく、清坂氏がユニットバスから上がってくるのを待つはずだった。

白いタオルを胸の辺りに巻き付け、髪をインドのターバンのように丸めてやはりタオルで包み、いかにも女子のお風呂上りの雰囲気を出てこられるなんて、僕は一度も経験したことがない。だから、まさかこうなるなんて思ってもみなかったのだ。予想なんてつかなかった。もちろん、僕だって全くそういう手のことを知らないわけではないけれども、まさか、こんなに急激に身体の奥が反応するなんて信じてことができなかった。いつもなら写真集のグラビアくらいでしか反応することなかったのに、なんでこんなことになるんだろう。よりによって、清坂氏の前で。

——自分で自分に裏切られるなんて、最低だよな。

絶対に、こういうことにならないように、どうして準備しておけなかったんだろう。

「じゃあね、立村、あとは仲良くねー」

「古川さん！」

ただ膝を抱えて、一方的に暴れている身体のもとをなだめるしかなかった。こんな時に、よりによってこんな場所でだ。清坂氏は僕の顔を見るなり慌てて引っ込んだ。それは当然だ。僕がいるなんて気づいてなかったに決まってる。D組担任を馬鹿と罵る権利が僕はもうない。もう前科三犯、覚悟の上だ。どんなことがあっても、いやらしい目で清坂氏を見たりなんてしないし、これ以上傷つけたりなんてしない、そう自分と約束していたのに、僕の本能だけが勝手に今みた清坂氏を汚そうとしているわけだ。どんなに別のイメージを膨らませようとしてもだめだった。全身の血液が物凄いスピードで血管を走り抜けているようだった。天羽の言葉を思い出し、また僕の身体はどつぼにはまった。そうだ、天羽は、もう経験しているんだ。この状態の後、どうなるか、どうしないとおさまらないのか、ちゃんと知ってるんだ。

——よりによって、なんでこんなことになるんだよ。

がちりと膝を喉元までひきつけたまま、羊を数えてみた。十匹目でばかばかしくなって次に英語のリーダーを暗誦してみた。一ページやってみて詰まってくる。少し歩いたらおちつくかなと思って部屋の中をうろうろしてみた。隣のベッドには、たぶん清坂氏の着ていたものなんだろう、小さい布の巾着みたいなものの口が少し開いていた。白っぽいものがちらちらしていた。なんでかわからないけど目が留まって、すぐにそらそうとした。まったくもって逆効果もいいところだ。見当つけるまで見ているなよって自分に言いたかった。窓辺の手ぬぐいかけには青いタオルにかかるような感じで靴下もひっかかっている。花柄のハンカチは何かを覆っているような感じだった。どんなものかわからないけど、かくさなくちゃいけないものなんだろう。目に入るものすべてが、余計なことばかり思いつかせてしまう。

しかたなく椅子に腰かけることにした。もし僕一人の部屋だったら、なにはともあれトイレに飛び込んでいわゆるそちらの始末をつけるだろう。いわゆる生理的現象なんだから異常なのではない、と保健体育の授業では習っているし、そんな余計なお世話だと鼻で笑いたいと思っていた。本条先輩のノートにあったように、グラビア写真集を男子たちに一ページずつ分配したのはまさにこの状態を逃れるためだったのではないかとやっと気づいたわけだ。それも自分の情けない状態においてだ。

早く、なんとかならないもんだろうか。

たった四日しか経ってないのに。

他の奴は同じようなことになってないんだろうか。羽飛を見る限り、全くそんなむらむらした気持ちにはなっていないようだった……鈴蘭優の歌番組で喜んでいる程度だ……し、南雲も、他の連中も今の僕みたいにどきまきなんてしてないはずだ。僕だって、この場で、まさか清坂氏のおあいう姿を見てしまうまでは、決してありえないと思っていたのだから。上半身と下半身がここまで繋がらなくなってしまうなんて、最低だ。

浴衣の裾を堅く合わせた。気づかれないようにすることはできなくもないだろうが、何かの拍子で足を崩さないとも限らない。決して今の僕の精神状態を気づかれてはならない。あくまでも、冷静沈着に、話し合わなくてはならない。それができるって信じていたから、僕は清坂氏とふたりっきりになることを決めてきたんだ。そういうことをしない、という前提でもって。もしD

組担任に見つかっても、決してそういうやましい気持ちなんてない、と断言できるって思ったからだ。

ユニットバスの方から、水を流す音が聞こえた。たぶん水洗トイレを使った後なんだろう。

——たかがそんなこと、気にするのか、お前は。

目に入るもの、耳に入るもの、すべてが本能を沸騰させようとしている。

本条先輩にもっと教えてもらえばよかった。

——先輩、こういう時、どうしてるんですか？

もう誰にも相談できなくなっている、絶体絶命ってこのことだ。

ユニットバスのドアが開いた。僕は足をしっかり組んで、思いっきり溜息を吐いた。視線を清坂氏とあわせないようにして、まずは一言謝った。

「ごめん、さっきは、何も言わなくて」

間の抜けた言葉だと思ったけれども、しかたなかった。見上げると、清坂氏は浴衣をきっちりと着付け、着替えをタオルにぐるっと包み、胸に抱えるようにして僕に頷いていた。

「こずえに連れてこられたの？」

怒ってないみたいだ。怒鳴られてもひっぱたかれてもしかたないと覚悟していたのに、拍子抜けした。

「さっき、菱本先生と何かあったんだろ。だから、そのさ」

だめだ、完全に全身のコントロールを失っている。舌が回らない。ちゃんと浴衣を着ているのに、頭の中ではなぜか清坂氏の何もきていない姿が浮かんでくる。そんなの見たことないくせに、さっき見たタオル一枚の姿だけが引き伸ばされたって感じだった。それに伴って、落ち着いてほしい場所は全く落ち着かないままだ。目を閉じても逃げられない。動けない。

清坂氏はスリッパで一步ずつ、ゆっくりと近づいてきた。

「俺たちの部屋にも結構勘違いしたこと言いに来たんだよ、あの人。だから、相当、失礼なこと言われたのかなって思って、ただ、それだけだけどさ」

「立村くんたちのところにも？」

「ほたる狩りが中止になった分、担任のほたる狩りってところだろうな」

思わず口走った言葉ではあるけれども、なんか的を射ているような気がした。

僕たちが好き勝手に飛び回っているところを、夜になってから一気に捕まえにかかる、というんだろうか。でもほたるが飛び交うのは真夜中のはずだ。甘い水を求めて飛び交うはずだ。誰があいつらにつかまえられてたまるかよ、そう言いたかった。

「立村くん、おもしろいね、それ、うまい」

清坂氏は初めて、僕だけの前で笑った。一瞬だけ、ほっとした。

どちらにしても話をするにはたくさんあるわけだ。清坂氏には、午前中轟さんから言われたことをまず伝えなくてはならないというのがひとつ。轟さんと途中別行動を取り天羽や更科たちと顔を合わせて、いろいろと相談して決めたことがひとつ。丸ごと説明するわけにはいかないので、僕なりに清坂氏を傷つけないように考えながら、話をしなくてはならないだろう。

もう一度足をはっきりと組んで、膝に手を当てるようにした。たぶん、気づかれまいだろう。

「立村くん、さっきね、琴音ちゃんから話、聞いてるよ」

やはりそうか。息を呑んだ。

「評議委員会で、これからも仲良くしてあげてよね」

予想通りだ。というか、轟さんの読み通りだ。絶句した。ぬれてない髪の毛の先を何度もつまみながら、清坂氏は古川さんのベッド端に腰掛けた。こんな近くにこないでほしいとは、言えない。

「他の人たち変なこと言ってたけど、きっと琴音ちゃんもなにか事情あるんだなって思ったから、大丈夫。私も明日、ちゃんと他の人たちに言っとくから」

「言っとくって、何を」

声が上がっているのが自分でもわかる。いいかげん、抱え込んだままのタオルとその他のもの、隠したらどうなんだって言いたくなる。

「琴音ちゃんも、きっと勇気がものすごく必要だったんだって思うもの。ね」

「あ、うん」

言葉を濁しながら、僕はあらためて轟さんの切れに舌を巻いた。

よくここまで考えられるものだ。心臓の音がまだおなかの辺り、それからだんだん下の部分に響いているようだった。絶対に、勘付かれないようにしなくては。あらためて足をきっちり組み直し、浴衣の裾を深く合わせなおした。椅子で隠れているから見えまいだろうと思うが、念のため。

ふたりで部屋の中、ふたりきりというのは、何度か経験していた。

去年の宿泊研修の時も、ほんの五分くらいだったけれども清坂氏とふたりでいた。最後は口げんかで後味悪かった。その時ももらったタータンチェックのキーホルダーはまだ、ちゃんと使わせてもらっている。

その後、十二月くらいに杉本の家へふたりで出かけた時も、数分だけふたりっきりだったような気がする。すぐに杉本が入ってきたからそんな長い間ではなかった。でも、厳密に言えば密室だったし、ふたりっきりと言っていいだろう。

本当の意味で意識するような「ふたりっきり」はそれから数日後のクリスマス・イブだった。あの時は清坂氏に「品山に連れてってほしい」と言われたのを受けて、僕の家でだった。父もいないし、返って気楽かもな、と何も考えずに居間でそれなりの料理を食べたりした。ちなみに全部僕がこしらえたのだが、清坂氏 本人には内緒にしておいた。たぶん二時間か三時間くらい一緒だったろうか。途中で父が突如帰ってきたのは計算に入れてなかったけれども。でも、こんなに全身がはれぼったくなってしまったことはなかった。

一度だってなかった。

もし、これ以上針のような刺激がちくつきたら、どうなるか。

だから僕は目を細めるようにして、今日の午後天羽更科コンビから聞き出したことをしゃべるしかない。もちろん、重要な部分は曖昧なままにしてだが。

「あのさ、清坂氏」

まだタオルを抱いたまま、清坂氏が僕の方を見た。とりたてて変だと思っていない様子だ。

「なあに」

「一応、説明しとくよ。今日実はさ」

時間を少し巻き戻し、僕はもう一度、話すべき内容と話さない方がいい内容を頭の中でより分けた。



午後から轟さんは、親戚の家に行く予定があるそうで別の汽車に乗った。見送った後は天羽と更科ふたりと待ち合わせていろいろと評議委員会に関する話をした。この辺りは僕もいろいろ考えて自分なりの意見を伝えたりもしたけれど、二人の考えはやっぱり違うようだった。

——とにかく、清坂はお前のプライベートハニーにしとけよ。悪い奴じゃないが、評議委員会ではいろいろとまずいだろ。

なにが「プライベートハニー」だ天羽。お前にそういうこと言われたくないさ。

——いや、だって俺より向こうの方が頭いいからさ。だから、そういう意味じゃなくて。

しどろもどろになって言い訳をしたけれど、この時の天羽は怖かった。旅行前のこと、そうとう根に持ってるのかこいつ、って思った。

——旅行が終わって、すぐ水鳥との交流会だろ。立村、お前自分のこと、ろくでもないって思っているだろ。女子たちに気、遣い過ぎてぼろぼろになってるだろ。見てりゃあわかるって。ここいらでお前が頭なんだってこと、きっちりと女子どもに見せ付けてやれよ。

——頭、って、いや、俺はただたまたま本条先輩に指名されただけであって。

遮られ、すごまれ、結局僕は黙るしかなかった。情けない。

——だからな、立村。女子が悪いとは言わねえけど、清坂が口出したせいでかなりの予定がお流れになっちゃっただろ？ 「交流サークル」転じて「E組」がそうだろ？ 水鳥中学との交流会だって危うく女子だちの血迷った行動でやばかっただろ？ あとのひとつは俺が悪かったからしゃあねえにしても、もし男子たちだけで考えたとしたら絶対しないことだろ、大抵は。

確かにその通りだと思う。でも、それとこれとは話が別だ。

——さっき、トドさんと話をしただろ？

更科が僕のすっかり萎縮しきった表情を見たのか、さささっと話に割り込んだ。

——評議委員会と、つきあいを別にすればいいんだよ。それだけだったら簡単だよ。

——いや、付き合いもなにも、お前らが考えているようなことないし。

きっと夜這いしろだとか変なことしろとか思っているんだらう。冗談じゃない。

——ふたりっきりの時にあまあい言葉を口走ってやったり、デートしたりするだろ？

デートって、帰り道一緒に帰ることがそうなのか？

——もう一年経ってるんだからなあ、もう少し、ほら、進展させてさあ。

——更科お前えらい。そうだ、その通りなんだよ、立村。お前、評議委員会と同じ乗りで清坂と付き合ってるんじゃないかねえのか？ いやさ、お前が清坂を嫌いだとは思ってねえけどさ、それだ

ったらもっとそれなりにいちゃいちゃしたっていいんじゃないかねえの？ 評議委員会ではトドさんの方がお前にぴったり合ってるけど、余計なやきもち妬かれたら面倒だろ。ふたりっきりの時は清坂と仲良くしてだ。委員会上のパートナーとしてトドさんにきてもらう。俺としてはこれが一番ベストだと思うんだ。立村、自分でもそう思わないか？

天羽の目的は決してやましいものではない。天羽なりに評議委員会の今後について考えてくれていることはわかっているし、僕もその方向が正しいと感じている。このまま結城先輩以来続いてきた評議委員会の立場を、元の形に戻す必要があるだろうとも思っていた。すなわち、完全に先生の御用機関と化した生徒会を自主性のあるものに戻し、立場以上に権限の広がった評議委員会を生徒会のサポート機関に戻す。これは僕の代できちんと処理しなくてはならない。前から思っていた。

なによりも、評議委員を始めとする「委員三年任期生」……もちろん暗黙の了解だけど……の弊害が多すぎる。西月さんと天羽の一件だってそうだ。三年間一緒に委員会やって仲良くやっていられればいいけれども、部活のように途中で抜けられないというのは大変だ。それに。

——俺のことはどうでもいいよ。それより霧島さんのことだけど。

——キリコだよなあ。ただ今ホームズが「じゃじゃ馬ならし」にお出かけ中。

——難波が？

今朝、難波に思いっきり八つ当たりしてしまったのが影響したんだろうか。

——いやいや、立村のせいじゃねえよ。あいつさあ、結構霧島のこと心配でなんねかったみたいでさ。一度きちんと話をつけたって、スタンプ終了後午後から、おふたりでデート。

——デートっていったい。

——修羅場になっている可能性もあるがな。

くっくと二人で顔を見合わせて笑う天羽と更科。

——けどな、トドさんからお前も聞いただけ。あのままだとほんっとまじいぞ。お前にあえて、清坂を評議から少し遠ざけるてのは、霧島のこと絡んでいるんだ。

霧島さんのことという、確かにいろいろ問題がないわけではないだろう。僕もその辺わからないわけではない。

——霧島さん、青大附中をやめさせられるってことか。でもまだ噂だろ？

——いや、本当だ。厳密に言うと、中学で卒業ってことだよ。

更科がきっぱりと断言した。

——別に変な噂が影響したとかそういうわけじゃなくて、殿池先生曰く、単純にキリコにとって一番いい環境に送ろうよってことだけらしいよ。ただ、そういう学校って、いわゆる「底辺高校」って奴だしさ。想像できるか、キリコ発狂するだろうな。

——うんうん、それは確かにそうだ。努力したってどうしようもないことってあるんだよな。

天羽も更科も、結局どうしたいのだろうか。西月さんのようにとことん嫌っているわけでもないし、かといって頭の程度を馬鹿にしているようではいるし。

——大人の決めることを正しいってというのは俺もむかつくけどな、けど霧島の一件については全面的に殿池先生支持だな。

——同感。

僕も何かを言おうとして遮られた。天羽、またかよ。

——とにかく、このことが女子にばれたら一大事だ。霧島姐さんがぶちぎれるのは仕方ないとしても、また例のごとく女子どもが立ち上がって「霧島をこの学校に置いとく署名運動」なんかされたら大変だぞ。勘違いもいいとこだって。なあ更科。——そうだよ。俺もキリコが違う学校に行った方が絶対うまくいって思うもんな。たぶんけどなあ立村、キリコを入れる学校はたぶん、可庭女子高校じゃないかと思う。

——可庭？

思わず絶句した。可庭女子高校といえば、青瀬私立高校の中でもランク的にはかなり下と聞いている。天羽が詳しい説明を施してくれた。

——立村青ざめてるなあ。そうそう。いわゆる最低ランクの学校だ。けど、俺の知り合いで何人かあそこ行ってた先輩いたけどさ、不良はまず学校こないし、普通の生徒はぼーっとしてるしで、なんだかんだ言って居心地いいんだってよ。朝から帰りまでずっと掃除、あとボランティア活動に力入れてるって有名らしいしな。成績ランクは悲惨だけど、他の私立にくらべたらずっとまともだってなあ。

そういうこと、お前が判断していいのか天羽。僕はずっと、天羽と更科の言葉を顔引きつらせながら聞いていた。いったい、僕が気づかないうちになんでこんな、いろいろと調べてしまうんだろう。どうして手はず整えてしまうんだろう。なんだかみっともない自分に泣けてきそうだ。

——そこまで準備するんだったらさ、どうして天羽、お前委員長にならなかったんだよ！

もちろん最後の一言は飲み込んだ。僕だってそのあたりを心得ていないわけじゃない。情報をまとめてくれた二人には感謝の意をこめてホットドック一本ずつ奢らせていただいた。



このまま話すのはやっぱりよくない。今、目の前で僕の方をじっと見詰めている清坂氏に、いくらなんでも天羽たちの本音をオブラートに包まず語ってしまうのはいいことじゃない。評議委員長としてとか相棒としてとか、そういうだけではない。一対一の、大切な繋がりを持つひととして。

「言わずらいことなのかな、立村くんの言いたいこと」

少し喉を詰まらせたような言い方をした清坂氏。どの辺りから話していけばいいんだろう。

「最初に言っとくけど、轟さんたちと話をしたのは、評議関連のことだけなんだ。いわゆる、あの、変なことなんて言ってないからさ」

「そう、琴音ちゃんもそう言ってたしいいよね」

平らな声で清坂氏は返した。少しは落ち着いている、と見ていいだろうか。

「清坂氏を無視したわけじゃないんだ。とにかく違うから」

「わかってる」

本当にわかってくれているかどうかは僕にも見当がつかない。評議委員会に関連することを思い出して考えていくうちに、さっきまで全身をびくつかせていた得体の知れないものがすうっと

消えていったような気がした。とにかく、集中しよう。僕は両膝を小さく抱え込むようにして、椅子の上で安座した。まずこれで大丈夫だ。万が一また反応しやがっても。

「旅行終わったら、水鳥中学との交流会があるだろ。それから、いろいろ行事があるだろ」

「うん、あるね」

頷いた表情はまた固まっていた。

「その行事の関係で、これから俺、男子中心に話を進めることになるかもしれないんだ。これ、清坂氏を無視するんじゃないから、それだけは」

「わかってる。わかってるけど、どうしてって聞いたらいけない？」

あえてきっぱりした言い方にしているところを見ると、危険信号か。清坂氏の場合、感情を押えて後に爆発、というのではなくて、一度火がついたらあとはまっしぐら、というパターンが非常に多い。もう誰も止められない状態。以前かなり修羅場となった。僕だって学習能力はあるのだから。

「私たちが、邪魔だから？ いいよ、はっきり言っても」

「違うって、ただ、ほら」

うまく言葉が出なくてどもってしまいそうだ。

「私やゆいちゃんが男子たちに迷惑かけてるから？ 杉本さんみたいに迷惑だから？」 「そんなことはない！」 思わず腹に力が入った。慌てて声を押し殺し口をふさいだ。隣の部屋に聞こえたらどうするんだ。「じゃあなんで？ 私だって、立村くんに協力したいって思ってるし、それに、私」

小声で、目を伏せるようにして、

「立村くん、すごく、変わったって思うの。変な意味じゃなくて」

変な意味じゃないならどういうところなんだよって聞きたい。せっかく先輩たちの秘伝・修学旅行スタンプラリーの術を、あっさり担任に見破られてしまい物笑いにされた僕がだ。僕よりも羽飛の方をみんな頼りにしていることがよくわかった金沢のお坊さん事件とか。この調子だと、クラス全員にくばったグラビア写真 ページのことがばれてしまう可能性だって無きにしも非ずだ。僕が評議委員長になってから、ろくなことが起こらないなんて思われてしまったらどうするんだらう。

「その、なにが」

声出すとまた、変なところに力が籠ってしまいそうで、小さい声で返事した。

「うん、あのね、ありがとう」

頭の中の回路が繋がらない。思わず清坂氏の座った姿をじじっと見つめてしまった。ありがとうってなんだ？ 何か、したか？

清坂氏は少し無理矢理、といった風に顔をしかめ、それから自然にそのしかめっ面をすうっと開いていった。いつもの自然な笑顔が浮かんだ。

「恥かしくても恥かしくなくても一緒だって、言ってくれたよね」

そんなこと言ったか？ 暫く記憶を全力で巻き戻してみる。

「私のこと、守ってくれたよね。だから、ありがとう、なの」

羽飛だったら「なあにしおらしいこと言ってるんだよ、美里！」と笑い飛ばすだろうし、南雲だったら「俺の精一杯の愛が伝わったんだなあ、彰子さん！」と激しく抱き締めようとするだろうし……笑顔でぼんと押し返されるのは目に見えているかもしれないけれど……、けど僕は？
——最低だ、まだ変なことばかり考えてるのかよ俺は！

膝を抱え、膝頭の上に頬をつけるようにして、僕は清坂氏から目をそらした。もう一度顔を見たら、座っている清坂氏の姿が、バスタオルしか巻きつけていない風に見えてしまいそうだったから。いや、そのバスタオルを目の先ではがしてしまいそうだった。そんなことをもししたら、僕は二度と自分を許せなくなるだろう。これ以上、自分の中の自分にせせら笑われるのはたくさんだ。

雨の音を聴きながら、僕は呼吸を浅くした。

しどろもどろになりながらも、頭の中でなんとかまとめた。

「あのさ、清坂氏。もしも、もしもなんだけどさ」

「はっきり言っていていいよ。怒らないから」

それ保証してもらえそうにないから言っているのにな。僕はもう一度息を整えた。膝を抱えるようにして、顎のところをとんがっているところに乗せた。

「これから先、もしかしたらまた俺は、清坂氏を怒らせるようなことするかもしれないけど、でも、そういうのとは違うから」

「そういうの、って何？」

応清坂氏に「これから先、俺は男子たちと轟さんとで評議委員会を回していくから、口出ししないでほしいんだ」と伝えるだけなら簡単だ。実際、天羽たちの求めているものたらそれだけなんだから。それの方がいいと、納得している僕もいる。だけどそれを伝えたたん、清坂氏がどれだけ傷つくか想像できない僕じゃない。うまくいい言葉がないものかと思案している最中だ。

「ほら、なんというかさ、清坂氏をおっぱらいたくてしていることじゃないんだってことだけ、信じてほしいんだ、うん、ただそれだけ」

かえって怪しまれるんじゃないだろうか。僕はしばらく頭をひねった。いい方法ないだろうか。

「おっぱられるなんて思ったこと、一度もないけど」

「いや、そう、そのさ」

完璧どつぽにはまってしまったらしい。僕よりはるかに頭のいい人なんだから。「つまり、立村くんは、これから先、私に口出しするなって言いたいのか？」

そのとおり、なんて誰が言えるか。僕は膝を抱えたまま、黙った。

「そうなんだ、そうだろうなって思ってたけど」

「え？」

「だって、旅行中男子たちいつも言ってたもんね、私たちに口出しするなってさんざん文句言ってたもんね。私に、じゃないけど、ゆいちゃんに。小春ちゃんにもそう言ってるようなものでしょ」

まあ、確かに。返事のできない言葉を僕は何度もかみ締めた。

「じゃあどうすればいいの。私、立村くんのしてほしいこと、教えてくれればなんとかするのに」

「してほしいこと？」

もちろん、旅行後においてだ。「今」じゃない。また勘違いした部分が反応しやがる。杉本じゃないけれど、「男子はみな馬鹿ばかり」というのも頷けなくはない。真面目な話している最中に、本能に引っ張られるんだもんな。

「けど、そうだよ。私がすること、あんまり、嬉しいことじゃないんだよね」

タオルを抱いたまま、しょぼんとうなだれる清坂氏。

こんな気弱になったところを見たのは始めてだった。

「そういうわけじゃないよ」

「小春ちゃんのこと、杉本さんのこと、そうなんですよ」

「いや、あの」

「ゆいちゃんを評議から降ろした方がいい、と思っていたりするんですよ」

困った。完璧に悩むところだった。

清坂氏がはたして、霧島さんの事情をどのくらい知っているのか見当がつかないというものもある。天羽たちが言うには、すでに教師連中の辺りで情報が流れているのだから、ばれるのも時間の問題じゃないかということらしい。だから、知っている連中でなんとか情報が洩れるのを食い止め、不必要な噂が広まらないように、自然に片がつくようにしたいのだという。自然に片がつくとは、すなわち「霧島さんが満足して青大附中を卒業し、別の学校へ進学する」ことを意味する。僕からしたらどう考えても丸く収まるとは思えないのだが。だって、霧島さんは青大附中へ行きたいんだろ？ 無理矢理行かされるなんてそんな殺生なこと、誰が望むかって。僕が公立を受けなおせといわれるのと同じじゃないか。 たぶん女子たちにばれたら……清坂氏にと言った方がいい……絶対に怒るに決まってる。

清坂氏にとって霧島さんは仲間なのだ。一緒に評議委員会でやってきた同志だ。

成績上の理由という、動かしがたいものがあっても、まずは引き止め作戦を実施するだろう。先生たちの情に訴えるやり方でだ。もしくは杉本の時のように、直接ぶつかっていくように仕向けるか。でも、無理だろうと最初からわかっている、別の学校に進学した方がいいと周りが判断しているのだったら、それに任せた方がいいような気もする。男子連中はそう判断している。長期的視野からして。女子の場合は目の前しか見えないというのが欠点なのかもしれないと今思う。杉本のことだってそうだ。もし杉本の想いを煽り立てたりしなかったら、あのまま交流グループの一員として自然な形で関崎と再会することができただろう。自分のクラスから追い出されて、掃き溜めクラスのような「E組」に追いやられることもなかっただろう。

仮に、霧島さんを評議から降ろす形を取ったとする。裏工作がかなり必要だし、成功するとはとても思えない。でも、更科が自信満々に「それは大丈夫！」と言い放っていたところみると、勝算ありなんだろう。天羽・更科コンビの頭の中は僕にもわからない。だけど、霧島さんが大喜びでその提案を受け入れるかどうか？とはとても思えない。侮辱されたと怒鳴るかもしれないし、周りの応援以前に自分の方から殿池先生へ訴えに行くかもしれない。それだけの行動力のある人だ。

それに、いったい後釜誰にすればいいんだ？

轟さんが言うには、「一応、候補者はいるわよ」とのことだけど、僕には全く見当がつかない。

第一、あの霧島さんを差し置いて、周りの輿感を買いながら、喜んで評議委員会に入ってくる女子がいるとも思えない。もちろん、近江さんはさておいてだ。

天羽・更科の意見については、僕も女子と同じく無理なんじゃないかと正直、言いたい。

こんな修羅場、もう抱えたくないよ。

でも、長い目で見れば、霧島さんのためには先生たちの判断の方が正しいのではと思う、やたら大人びた僕もいるわけだ。ゴムの伸びきった状態についていけない青大附高に進学するよりも居心地のいい学校に進んだ方がきっと楽だろうし、楽しいだろう。僕がもし同じ理由で公立中学へ戻れ、と言われたらたぶん反抗するだろうから、そんな白々しいこと言いたくはないのだが。

そうだ、自分の立場だったら絶対嫌なことばかりだ。天羽たちがしようとしていることは。でも、第三者からすると、一番いいことなんだってことが見えてくる。

女子たちの意見に賛同できない部分が、やっぱり僕にもあるわけだ。男の視点ってところなんだろう。霧島さんが青大附属にこのまま残っていた方がいいのか、それとも出ていかせたほうがいいのか。友だちとしてそのまま引き止めておくことが善なのかどうか。本人の意思を無視してでも動かした方がいいのか。答えは僕なりに出ているけれども、それをしているかがどうかわからない。自然に任せて、霧島さんひとりがすべての出来事を受取り、周りはそれを見守ってあげる、それがベストなんではないだろうか。どうやっても変えられないことならば、せめてこれ以上傷つけないようにつかず離れずにいるとか、いろいろ女子だって霧島さんの側でしてあげられることはあるだろうに。

——やはり、清坂氏と決戦は、避けられないか。

僕は覚悟を決めた。切り出した。

「霧島さんのことについては、まだ全然決まっていなくてだしさ、俺もどうしたらいいか正直なところわからないんだ。一応噂は聞いたけど、真実じゃないかもしれないし、今の段階ではしゃべりたくないんだ」「どうして？」

ちくりと痛い切り返しがきた。

「だから、本当のことじゃないかもしれないし、もしそれが噂でさらに流れたら」

「私のこと、信用できないの？」

「信用できないんじゃないかって、嘘かもしれないことをこれ以上、俺もしゃべりたくないんだ」

ここまで言い切って、やはり、と思った。清坂氏の眼が釣りあがっている。手に抱えているタオルを膝の上でぎゅうぎゅう押ししている。ちらっと紐のようなものが見えたのだけでも、見ないことにしておいた。慌てて目をそらしたので気づかれていないと思うけど。

「もちろん清坂氏がそういうこと言いふらす人じゃないってことは、俺だってわかってるよ。けど、もし俺がそのことを噂にせよなんにせよ、しゃべってしまったら、そういうことが本当のことになってしまうかもしれないって思ってさ。ほら、言霊ってあるだろ」

無理矢理引き出した言い訳だけど、清坂氏は頬と口を少し和らげて頷いてくれた。

「そうだね、言霊だね」

「俺が噂で聞いたことは、正直言って、絶対本当になってほしくないことなんだ。だから、あえてここで他の人にしゃべって膨らませたくないんだ。霧島さんにせよなんにせよ。けど」

息を吸った。さっきちらっと覗いたタオルの下の部分でまた、全身が熱くなってくる。真面目な話していれば落ち着くと思っていたのに、なんでこうも身体は非常識なこと考えるんだろう。

「もしそうなった場合、俺は評議委員長として自分なりの判断を下すつもりなんだ。あくまでも仮にそうなったら、ってことだけどもさ」「評議委員長、として？」

「うん、全体を見て」

「立村くん、こっちを見て」

はっと顔を上げると、清坂氏が再び目を硬直させて僕を見つめていた。唇は真一文字、だけど少し泣きそうにまぶたがしばたいている。

「今の話、ゆいちゃんのことを話さないって立村くんが決めたのはわかった。そうだよ、やなことこれ以上ふくらませたくないって気持ちわかるもん。言霊、って私もわかるよ。一度言っちゃったら、必ず何かが続いちゃうってあるもんね。いやなこと考えたら、全部自分に返ってきちゃうんだってこと、私だってわかってる。だからそれはいいの」

そうか、追求されないですみそう。少しほっとしたのも束の間、

「だけど、立村くんが評議委員長だとしても、人間でしょ、青大附中の三年でしょ、十五歳でしょ」「いや、まだ今は……」

九月まではまだ十四なんだよな、と改めて自分の弟的立場に溜息つきたくなった。

「先輩だって、先生だって、人間だもん。大人かもしれないけど、人間だから間違いがないってこと、絶対ないと思うの。ひとつの意見をすべて正しい、と決め付けるのはよくないと思うんだ。もっといろんな意見があるだろうし、みんなの意見を取り入れて、まとめていくのが評議委員長なんじゃないの？」

「もちろん、その通りだと思う。清坂氏の言うことは正しいよ」 その通りだ。と僕も思って、天羽に言い返したのだ、そしたら「お前、だけど全部の意見取り入れるって不可能だぞ。上に立つ長ってものはな、責任を取るってことが大切なんだ。お前が最終的にきちんと結論だして、女子ども、いや男子どもにも文句言わせねえってのが必要なんじゃないか？」と説教されてしまった。今は確かに僕も、そう思う。

いざって時に自分ひとりで決断した責任を取れるかどうか、なんだろう。本条先輩もことあるごとに言っていた。僕が評議委員長に内定される前も、先輩たちからいろいろ反対意見をもらっていたらしいけれども、「俺の後釜は立村以外考えてません。あいつがへまやらかしたら、その時は俺がすべて責任取ります」とか言っていたらしい。そういうことなんだろう。今の僕をみたら本条先輩、どういう責任の取り方してくれるんだろう。

「だけど、最終的に決断するのは、やはり俺になると思う。その時、もしかしたら俺は、清坂氏や女子たちの意見を選べないかもしれない。それはわかってもらえないかな」

曖昧模糊な言い方だけど、それが一番近いと思えた。

「わかってる。全ての意見を聞いて、みんなできちんと話し合っ、その上でってことよね」「そうもちろんそう。その上でだ」

言いながら、そうではないという突っ込みをしたくなる自分に気がついた。もし女子たちの意見をそのまま取り入れて、話し合いをしたら最後、勢いであっという間に飲まれてしまうんじゃないだろうか。女子たちの迫りに飲まれてしまい、冷静な判断が出来なくなる、というのが天羽たちのご意見だ。確かに霧島さんのように噛み付かれて結果、というのもなんだかなと思う。

前もって裏で手回しをしておき、意見を整えて、その上で多数決を取るとか、そういうやり方ではないとやっぱり厳しいんだろうか。

「それならいいの。もちろん決まったらちゃんと納得しなくちゃってわかってる。けどね、立村くんの出した意見がどう考えてもおかしいとか、なんだか不公平だとか、そういう風を感じたとして、それを無視することって、正しいと思う？」

言葉に詰まる。清坂氏は続ける。

「選ばれた意見を支持しなくちゃいけないのは、決まっちゃったらしかたないよね。でも、どう考えたっておかしいということが選ばれたりしたら、その時はちゃんと私も『おかしい』って言わないといけないと思うの。それを押しつぶすようなことされたくないの」

「うん、それはそうだよな、わかってる」

「立村くんわかってないの！」

いきなり清坂氏がいきりたつかのように立ち上がった、僕が膝を抱えている椅子の側によって、見下ろすようにした。また膝を抱得なおさなくてはならなくて、僕は身を竦めた。「わかってるわかってるって言わないでよ！ 私だって、立村くんと意見が一緒になるなんて思っていないよ。だって違いすぎるもん、考え方とか、感じ方とか。私だったらそんなこと全然ないよ、ってこと立村くん気にしちゃうもの。私だったらはっきり言って正解だって思うこと、立村くんは飲み込んだじゃう性格だもん。それが間違ってるとは思わないよ。だけど、立村くんがそうやってたら、ずっと損しちゃうってことも、私からは見えてるの。うちの女子たちだって、立村くんが一生懸命頑張ってること気づかないで馬鹿にしてるんだもん。そんなの変だと思っよ。それでもいいって立村くんいつも言ってるでしょ？」

気づかないわけじゃない。もちろん。でもそれはどうしようもないし、僕だってしかたないと思っていることだから。

「そんなこと言わないでよ！ だから立村くんのいいところかをちゃんとみんなに説明したいって思ったらいけない？ 周りは多数決で立村くんが大したことない奴だって決め付けたかもしれないけど、私だけはちゃんと立村くんのいいところ知ってるもん。だから決まった後でも言いつづけるの。それと一緒になの！」

言葉が雨、剣のように突き刺さる。そんな突き刺さった経験ないけど、首からおなか、全身がちくちくしてきて苦しくなる。清坂氏の言葉はいつもまっすぐだ。だから、受取らなくてはいっつも気を張ってしまう。

熱気みたいなものが頬に当たってくるようで、また全身がどきまぎしてきた。

「もちろん立村くんがそういうことに決めた、って言うんだったら評議委員会の中では頷くしかないよね。だけど、評議委員会じゃなくたって別のところでなら反対意見出したっていいよね。だって納得行かないんだもん。せつかく反対だって手を挙げたのに、負けちゃったんだもの。だけど気持の上では全然納得してないんだったら、それを別のところから違っって言いつづけることって大切だと思っよの」

息が苦しい。僕はうなだれ、膝をぐっと頬に近づけた。

「だから、私約束できないよ」

清坂氏はきっぱりと言い放った。

「私、立村くんの考えがもし間違ってるって思ったら、ちゃんと反対する。それが立村くんに対しての、礼儀だと思うもん」

——そう簡単に受け入れてくれるわけ、ないか。

天羽たちの意見に百パーセント頷くことはできないにしても、清坂氏を少し牽制しておく必要は感じていた。これから先、轟さんが手伝ってくれることについては今のところ、それほど問題もなさそうなのだけど、これから先のことを考えると不安がよぎる。

僕なりに、やはり根回し作戦しないと、やはりまずいのか。

うまい言い方が見つからず、僕はしばらく膝を抱えたまま、突き出た足の親指を上下させていた。返事を待っているような清坂氏の、部屋の中をうろつく様子になんとか言葉を見つけた。

「そうだよな、うん、清坂氏はそうだよな」

繰り返した後、

「俺の判断の基準だけ、今の内に言っといていいか」

絶対に譲れないものを、伝えておけばいいか、そう決めた。

「基準って？」

「つまり、もし真っ二つの意見が出てきた場合に、俺が何を基準にして決めるかってこと」

「なあにそれ」

「一番傷つく人が、将来一番救われる方法を、俺なりの判断で選ぶ。それだけは譲れない」

清坂氏はわけのわからない顔をして、首をいち、に、とひねった。

「どういうこと？」

「具体的にはうまく言えないけど、今大変だとしても、将来その人にとって一番うまく行く方法だと思ったら、それを選ぶ」

「じゃあ、それがどうみても間違いだって思ったら、文句言ってもいいのね」

「うん、それはそれでしょうがないって俺も思う」

近い将来、きっと意見がぶつかり合うだろう。僕なりにこれから、どういう風にしてそのぶつかり合いをうまくなだめていけばいいのだろうか。本条先輩だったらこういう時どうするんだろうか。しばらく物思いにふけりながら僕は、言葉を重ねた。

「でも、もし反対意見が出ても、一度俺が決めてベストだと思ったことは、とことんそれで進めるつもりだから、かなりぶつかり合ってももしかしたら、清坂氏と話が合わなくなるかもしれない。そうなりたくないけど、そうなったら、ごめん」

確実に意見は分かれるだろう。僕がこの段階で頭に浮かべていたのは、霧島さんの高校進学に関わる評議委員選出問題だった。もしも清坂氏が、霧島さんのことを思う余りに「追い出さないで下さい運動」みたいなことをしたら、僕は全力で阻止するだろう。そうされた霧島さんの惨めさと、どう努力しても変わらない現実を突きつけられた時の衝撃を考えたら、そんなことできやしないと思うからだ。それよりも、もっと暖かく見送る方法を考えて、精一杯残りの日々を青大附中で過ごしてほしい、そう思う方が僕には自然だ。

もっとも、まだ噂に過ぎないことだし、僕がここで口にしなかったことによってもしかしたら、「噂」で消えてしまうかもしれない。だから、悪いことなんてできるだけ考えない方がいい。「けど、それはその時のことだから」

つけ加えた後僕は、もう一度清坂氏の顔を見上げてみた。犬みたいな感じだった。清坂氏はしばらく僕を細い目で睨んでいたけれども、ふうっと息をつき前かがみになった。

「そうよね、まだ決まってないことでけんかしても、しょうがないよね」

轟さんとのことについては、余り突っ込まれなかった。それどころか向こうから「仲良くしてあげてね」と言われたのだから、それ以上泥沼にはまるようなことを口走る必要はなかった。

それにしても、そろそろ戻らないとまずいだろう。

机の上のデジタル時計を見ると、緑色の数字が「11:35」とアピールしていた。

ずっと膝をかかえっぱなしだったこともあって、関節がくきくき痛い。

かといって、ゆったり足を伸ばして座れるほどには、まだ落ち着いていないのもまた事実だ。

「立村くん、膝伸ばせばいいのに」

「いや、なんかこれの方が落ち着くんだ。心臓の音が聞こえて」

なにを馬鹿な言い訳してるんだか。清坂氏は自分のベッドに座り、やっとタオルの中をバックの中に詰め出した。だいたいどういうものか想像はつくのだが、見てしまうとまたとんでもないことになるのがわかるので、天井を見上げてごまかした。

「変なの」

せめてテレビくらいつけてくれと言いたいけれども、今更という気もする。

雨音が壮絶に窓ガラスへぶつかっている。風もあるのだろうか。明日、船揺れるんじゃないだろうか。この旅行中、一度も酔わないで済んだのに、最後でへろへろにされるのだろうか。なんだかやりきれなくなった。もう一度膝を抱え、部屋への戻り方を考えた。

いくらなんでもここに泊りこむなんてことは、まずいだろう。

今の時間帯だったらまだ、なんだかんだいいわけできるだろう。十二時くらいまでだったら、たまたま用事があったとか……いや、できないか。でも、シンデレラじゃないけれどもこの時刻を過ぎたら何が起こるかわからない。もし部屋で清坂氏と二人……なんてところを発見されたら、どんなに言い訳したってむだだろう。下の古川さんと羽飛だって同じことだ。いくらなんでもふたりっきりで夜を過ごすなんて、停学どころか退学にも匹敵する大罪だ。

そのくらい、僕だって気づかないわけじゃない。

「どうしたの、蜘蛛とかいた？」

「いや、いないけど」

「喉かわかない？」

「大丈夫」

短い言葉を数回交した。ずっと鞆をいじくっている清坂氏、何も、考えていないんだろうか。

「あのさ、清坂氏、そろそろ下に戻った方がいいかもしれないからさ」

「え？」

清坂氏が僕の側まで来て、ベッドのマットレスの上に腰掛けた。裾をちらちらと直しながら。

「時間、やっぱりまずいだろうし」

「けど、まだ大丈夫じゃないの」

さらっと答える清坂氏。そうだろう、羽飛相手にこういう風に語り合うってこと、日常的にしてたんだろうな。家も近いし、家族旅行もよくしたって話だし。もし僕でなければ、なんともなく普通に感じたことなのかもしれない。でも、今ここに座っているのは僕だ。羽飛じゃない。

「だって、ね。こずえだって貴史と話いっぱいしたいって思ってるしね」

「思ってるたって、もうこんなに時間経ったしさ」

「私と一緒にいるのが、いや？」

思わずまた窒息しそうになった。喉だけじゃないまた全身が。

——なんでこういうことになっちゃうんだよ！

理性ってこういう時、どういう風に働いているんだろう。

僕の顔を不思議そうに見つめる清坂氏には申しわけないけれど、なんとかこの場を離れないととんでもないことをやらかしそうな自分に気がついた。本条先輩がよく話していた通りの状態だ。いまもう少し、清坂氏が僕に寄ってきたら、何をしでかすか自分でもわからない。情報だけはたっぷり本やらビデオやら写真やらで仕入れているんだから、ハウツーは全て頭の中に入っている。だからなおさら、怖い。もし手を差し出されたりしたら、どうすればいいだろう。もし何かの拍子で裾がはだけたとしたら、どうなるだろう。生まれて初めて感じたこういう気持ちをどう処理すればいいのか、一応学校では教わっているのに、うまくできない。

「いやじゃないけどさ、やはり遅いだろ、それに校則違反だし」

「いいよ、誰も気付いてないもん」

「けど、朝どうするんだよ。着替えもないしさ」

「貴史に朝一番で持ってきてもらえばいいじゃない」

「向こうだって困るよそんなことさ」

「それより立村くん、そんな窮屈な格好しないで、こっちに座ったらいいのに」

座れるかよ、何にもわかってないんだ。清坂氏はなにも勘ぐっていないんだろう。僕がただ真面目な顔をして言い張っているだけだと思っている。もしここにずっといたら、何されるかとか、想像なんてきつとしていないんだろう。それだけ、信じてくれているんだろう。僕がそういういやらしいことばかり考えているなんて、一瞬だって思ったりしないんだろう。もちろん裏切るなんてことしたくない。胸から上の感情はそう言っている。だけど、それを押えられないもうひとつのものがうごめいている。最低な自分だとわかっていても、どういう風に言い訳すればいいかわからない。

「いいよ、帰る、古川さんに電話するよ」

「だめ！ 盗聴されてたらばれちゃうよ！」

清坂氏は頑なだった。

「けどさ、このままってわけいかないよ」

「いいじゃない。私がいいって言ってるんだもん！」

振り返り、清坂氏をじっと見つめてみた。決して乱れた格好なんてしていないのに、僕の視線だけが何もきていない姿を蘇らせようとしているなんて、きっと、絶対、気づいていないんだ。

この場で一気に空間移動できたら。いつか見た超能力者の力が、たまらなくほしかった。

「立村くん、私と今までこんなしゃべったことなかったよね？ いつも、いつも貴史やこずえたちと一緒にだったよね？ たまに外で会ったりしても、一目ぼっかり気にして、何にも言いたいこと言ってくれなかったよね」

清坂氏は僕の顔から目をそらさなかった。僕もそれをしないとまずいって思った。

「しょうがないよそれって。周りからいろいろ言われてるし、立村くんだって辛いこと一杯あるんだし。評議委員会だって忙しいし、私は役に立たないし！」

「立たないってことないよ」

「ううん、だって私を外して話し合いしたってことがそれでしょ！」

その通りだと頷くしかない。

「今の話聞いて、それもしかたないなって思うよ。私、そうだよ、立村くんのしたいこと、邪魔してきたんだと思うもん。琴音ちゃんみたいに話してくれた方がいいんだったらしょうがないよね。だけど、私だって立村くんと話、してればもっとわかってもらえたんじゃないかなって気するの。いつも貴史やこずえを挟んでしゃべってるだけだったら、なんもなんないじゃないの。だから、今夜とことんおしゃべりしたいって言ったら、どうしていけないの？」

いけないわけじゃない。

そうするつもりだった。

もし昼だったら。外の喫茶店だったら。誰かがいる部屋だったら。

どうして女子はそういうところ、分かってくれないんだろう。

今すぐ押し倒されたらきっと悲鳴あげるだろう。それでもいいんだろうか。

僕は目を閉じ、一度膝に顔をうずめた。「清坂氏」と呼んだ。

「わかってくれた？」

「だったら、なんか縛るものあるか、紐とか」

「え？」

脈略のない言葉で戸惑ったんだろう。清坂氏は僕の横顔を覗き込むようにした。背を向けたまま僕は、僕なりの答えを返した。背を向けたまま立ち上がり、裾をうまく重ねるようにしてごまかした。うまく隠れた。古川さんがたぶん使う予定だったんであろうベッドに背を向けたまま座った。

「わかった。清坂氏、悪いんだけどさ、今から布団に入ったら、俺の手首、思いっきり縛ってくれないかな」

「縛るっていったい」

目を白黒させている清坂氏。

「そうしないと、怖いだろ。何されるか、わかんないだろう」

うまく言えず、返事を待たず、僕はシーツをめくって足を滑り込ませた。

「俺もそんなことしたくないから」

完全に身体が隠れて初めて、大きなほおっと息をついた。清坂氏がまだ無言のまま突っ立っている。足を伸ばしたところを見下ろして慌ててもう一度膝を抱え直した。膝の頂点で両手を組み、僕はお縄を頂戴する犯人のような顔で、その手を差し出した。

「縛ってって、なんで？」

立村くんの真剣な目に、おちゃらかすことなんてできなくて、でもどうしてそんなこというのかわからなくて、私はそれしか返事を返すことができなかった。

「だから、怖いだろ、俺もそんなこと、したくないから」

ずっと唇をかみ締めるようにして、膝をかかえた窮屈な格好で座りつづけていた立村くん。ゆいちゃんのこととか、評議委員会のこととか、そういう硬い話ばかりしていたのに、どうしていきなり変なこと言い出すんだらう。これがもし貴史とかだったら、「なあにさ、あんたばっかじゃないの、監禁ゲームでもするつもり？」とか言ってからかうんだらうけど、立村くんにそんなこと、言えるわけがない。だから聞きかえすしかできない。きっと、真面目は返事が返ってくるだらうから、それに答えを返すしかない。

「怖いって、どうして？」

「そんなこと、言わないとまずいのか」

少し乱暴な口調になったけど、すぐに気がついてくれたのか、すっとうつむいた。膝と膝の間に両腕を挟み込むような格好になり、立村くんはもう一度からだを竦めた。

「だって、言ってくれないとわかんないよ。私、前から言ってるよね。立村くんがどうしてほしいか、どうすればうれしいか、そういうこと、ちゃんと言葉にしてくれないと伝わらないんだよ」

「けどさ」

言いかけて、すぐに黙り込んだ。立村くんって困った時はすぐにこうやって口を閉ざしてしまう悪いくせがある。いつも私、泣かされていた……んじゃなくて、腹がたってならなくなったものだった。だから何度も「立村くん、どうして言ってくれないの！」って文句ばかり言っていた。

「私、立村くんのこと、絶対嫌いにならないって前から約束してるでしょ」

「それとこれとは違うだらう」

「違わないよ、立村くん、さっきから変だよ。なんでそんな窮屈な格好して座ってるのか、どうしていきなり縛ってくれなんていうのか、私、ちっともわかんないもん」

立村くんは私の顔から視線を逸らし、ぎゅっと唇を噛んだままでいた。その後、背を向けた。

「ごめん、やっぱり眠くなってきたから、横になっていいかな」

「だめ、こっち向かなくちゃまずいよ。もし先生たちが覗きにきたらどうするのよ！」

口に出してみても、すぐに解決策を発見した。今後ろ向きになっている立村くんの寝姿、なんかこずえにそっくりだ。

「じゃあ、なんか飲み物出すね。サイダーあるんだ！ 冷蔵庫に入ってるかなあ」

ちょうどいいところで、喉が渴いていたのを思い出し、私は冷蔵庫へかがみ込んだ。真四角の白い冷蔵庫を開けてみると、大丈夫、ネクターとサイダーが一缶ずつ並んでいた。立村くんにはサイダーをあげよう。冷たくなったサイダー缶を取り出し、まだ手錠待ちしている立村くんの手

に握らせた。

「これで、いいでしょ」

私に目を合わせずに、立村くんはひとこと、「ありがとう」とぶっきらぼうに答えた。貴史みたいだった。ここんところだけ。

「あのさ、清坂氏」

ふたり、黙ってまずは喉を潤した。なんかわからないけど、からからに乾いていた。お風呂から上がって何も飲まなかったからだろうな。立村くんは一気に半分くらい飲み干していた。口を手の甲で拭いて、

「なあに」

「もう、大丈夫なのか」

言葉を濁すような感じで、やっぱり私と目を合わせたくないような顔をしてうつむいている。膝、伸ばせばいいのに。缶を両手で握りしめたまま、か細い声で私に尋ねている。顔あげればいいのに。言っている意味が最初わからなくて、聞き返した。

「だから、具合もう、悪くないのかなって思ったんだ」

きっとあれのことだ。急に口の中に残ったネクターがどろっとしてくる。さっきお風呂に入った時確認したら、だいぶ終わっていたので大丈夫だと思うけど、いくら立村くんでも、そんなこと聞いてほしくなかった。だって答え方、わからない。

「うん、平気」

「それならよかった」

立村くんは両手の指を絡め合わせたまま、数回缶を握り締めるような仕種をした。

「俺って馬鹿だから、もしかしたら清坂氏に、酷いことしたかもしれないけど」

「ううん、してないよ、平気」

琴音ちゃんのことなんて、気にしてない、そう言おうと思った。けど、そんなこと言ったらかえって気にしているって顔に見えてしまうかもしれない。本当に琴音ちゃんのことなんて、どうでもいいって思ってるんだから、ちらっとでも想像されるのはいやだった。立村くんはやっぱり目を私に向けずに、ぼそぼそと話しつづけた。

「けど、もしさ、もし、さっきのことのよう、清坂氏が一番傷つく立場にいて、清坂氏にとって一番いいことを選べるとしたら、俺はそれを支持するから。それは変わらないから」

さっきのゆいちゃんに関する話をしているんだろうか。少しだけびびっとくるものがあった。

「誰も、傷つけないようにして、うまくいかせるってこと、やっぱり無理なんだろうな」

——そんなこと言われたって、私わかんないよ。

胸にひりひりするものが走るの、どうしてなのかわかっている。

だから知らん振りしていたかった。

立村くんもきっと気がついていないのかもしれないけど。

「無理だよ。誰かが必ず傷ついちゃうよ。それは、しかたないことだと思うよ」

ちょっと冷たい言い方を返してしまった。

あの立村くんが、精一杯私へ言葉を伝えようとしてくれる。それがどれだけ大変なことか、わからないわけじゃなかったし、それはそれでいいと思っていた。だけどきっと立村くん、気がついていない。「誰も傷つけないように」って言葉は裏を返すと、私を含めたほかの人たちもみんな救いたってことなんだから。私だけ、ってことじゃないんだから。

——私、いつになったら立村くんの特別になれるんだろう。

きっと、ゆいちゃん琴音ちゃん小春ちゃん、みんながピンチになった時に、立村くんは評議委員長として権限を駆使して、プラスに向かうようにしようって努力するだろう。私の時もきっと。だけど、立村くんは私だけが助けを求めている、他の人たちがどうでもいいって時、一番に助けに来てくれるんだろうか？　なんかそのあたりがあやふやに思えてならなかった。

ううん、違う。きっと大切にしてくれるって思いたい。

二日目の朝、バスへ荷物を運んでくれた時だってそう。

彰子ちゃんから聞いた話。男子たちに「もし余計なこと言い出したらぶっ殺す」とか言って、木刀の短剣をかざしてみせたとか。

本当だろうし、それがどれだけ嬉しいかってことも、わかっているつもり。

だけど、いつも思ってしまうのだ。

きっと他の人たちが苦しんでいる時も、この人はそうしようってするんだということ。

私だけが特別なんじゃないってこと。

——ううん、いる。立村くんにとっての特別がいるよ。

立村くんの横顔をのぞきこんでいるうちに、つい、意地悪な言葉が滑り落ちた。

「杉本さんに、お土産買った？」

ずっとうじうじした感じでうつむいていた立村くんが、ふうっと顔を上げた。目が覚めてスッキリしたって感じだった。

「買った。そうだ、買ったよ、忘れるとこだった」

——やっぱりね。

どうして「やっぱり」なのかわからないのだけど、私は思わず呟いた。

「どこで？」

「ホテルの売店で」

なんてしけたとこで買ったんだろう。一番のお気に入り一年女子なのに？　じりっと気持ちが擦れるような音が聞こえた。

「何買ったの？」

「俺が買ったんじゃないくて、ええと、西月さんに選んでもらったんだ。そうだ、そうだ」

何一人で頷いてるんだろう。私相手にずっと、落ち込んだ顔したりひざ抱えて妙なこと言い出したりした時とは違う。全く違う表情で、頼みもしないのにしゃべりだした。声も明るいのはどうしてなんだろう。私の顔をしっかりと見ながら、ちょっぴり笑ってくれたのだけが救いだった。

「ここについてすぐ、売店に行ったんだ。うちの母親と、あと関係の人とかに買わないと半殺しに遭うのが目に見えてるからさ」

まあね、立村くんのお母さん、怖い人なんだもんね。貴史が見かけたことあるって言ってたけど、すっごくべっぴんさんなんだって話は聞いたことあるよ。怖い人なんだよね。

「食べ物でいいかな、と思ってさっさと買いためたら、たまたま西月さんがいたんだ」

「小春ちゃんが？」

ひとりでいたんだろうか小春ちゃん。自分のことで頭が一杯だったせいか、小春ちゃんがこの旅行楽しんでたのかどうか、全く気にしないでいた。ちょっぴり自己嫌悪を感じてしまう。甘いはずのネクターがちょっぴり苦くなる。今夜小春ちゃんは、ゆいちゃんと一緒にの部屋に寝泊りしているはずだ。どんな話してるんだろう。ううん、ゆいちゃん、また一方的に小春ちゃんにしゃべりかけているのかな。明日きちんと話してみよう、そう決めた。

「ひとりでいたから、話し掛けてもいいかなって思ってさ。ほら、西月さん、杉本のことめっぽう可愛がっているだろ。なんとなくキーホルダーとかそのあたり弄っていたから、聞いてみたんだ」

「杉本さん、どういうのが好きなのかなって？」

どうして私に聞かなかったんだろう、というのは僻みだから飲み込む。

「そう、無理に筆談しなくても、話しかければそれなりに身振り手振りで話も通じるからさ、西月さんも杉本のことよく知ってるし、結局二人でお金出し合って、少し大きめの手鏡を買うことにしたんだ。千円くらいのを」

なんとゴージャスなんだろう。っておどろいたらいけないかな。立村くんの好みは和風。私もそういうのが好きなんだと思い込んで、去年のクリスマスにはちりめんのくしゃくしゃとした緑色のハンカチをもらった。

「どういう感じなの？」

「プラスチックなんだけど、黒地に黄色い満月と、あとほたるが飛び交っている様子が描かれているんだ。そうだな、金沢の書く絵になんとか似ている雰囲気」

大体イメージが湧いてくるってのが不思議だ。金沢くんの書く絵は、どこか上品で女の子受けするところがあるんだ。私も好き。立村くんは絵がわからないなんてコンプレックス持っているみたいだけど、私と同じ好みのところあるんだって、嬉しくなった。

でもそうか。立村くんと小春ちゃんが選んだということは、誰がお土産として持っていくんだろう。やっぱり小春ちゃんだろうな。評議委員会から出されて『E組』送りになってから、杉本さんは立村くんに対してめっぽう厳しく接するようになった。それは当然だと私も思う。立村くんもどうしてそうされるのがをよおく考えるべきじゃないかって思う。この旅行が終わったらすぐ、水鳥中学生徒会のみなさんと合流会をやる予定なのに、杉本さんには一切参加させないようにするって約束しているらしいのに。そんな酷いことされて、怒らないわけじゃない。そっとしてあげればいいのに。旅行前も小春ちゃんと近江さんとのことごとがあって、立村くんてば私じゃなくて杉本さんを無理矢理、弾劾裁判の付き添いに連れていった。杉本さんだって迷惑だったろうになって、ほんと可哀想に思っちゃったのは私だけだろうか。

杉本さんのことを考えていると、ついいらいらしてしまう。

変わった言葉遣いと、無表情で男子に対してきつい以外は、すごくかわいいい子なんだけどな。

立村くんってば、ところどころ笑い声を立てながらしゃべっている。なんだか泣きたくなった。

「それでレジに行って、割り勘で払って包んでもらっていたんだ。そうしたらさ、なんだか背中に変なものを感じたんだ」

「変なものってなに？」

まさか、私がドッベルゲンガーになって取り付いたとか？　なんか冗談みたいなことを言いたくなった。立村くんがあまりにも楽しそうだから。そんなに小春ちゃんと一緒にいるのが楽しかったんだろうか。いや、思い遣ってあげてるだけだってわかってるけど。

「うまく言えないんだけどさ、ほら、視線を感じるっていうのかな。授業中、絶対当てられないようにってうつむいていたら、頭の上がちりちりしてきて、頭を上げたとたん先生に名指しされるって。それに近い」

「なんだかわかるよそれ！」

私も頷いた。経験、おおいにあり。

「変だなって思って、振り返ってみたらさ。売店の通路の方でひとり、ジャージ姿で俺を睨みつけてる奴がいるんだよ。誰だろうって思ってこちらもじっと見てたら、いきなり背向けて走り出したんだ。西月さんは気がついてなかったみたいだったし、俺も何も言わなかったけど、ただ怖かったな。誰かにこれ、言いたくてなんなかったんだけど、言う機会なくてさ」

一人で受けてるのはやめなよって言いたかった。けど、どうしてこんなに楽しそうに笑うんだろう。睨まれて恨まれてるって可能性だってあるのに。

「どういう男子？　どこのクラス？　またけんか売られたらどうするのよ」

「あまり見覚えがないんだ。俺、人の顔覚えるの苦手だからさ」

それにしてもほどがある。

「じゃあ特徴、言ってみてよ。背はどのくらいだったの？」

「俺とほとんど変わらないんじゃないかな。背は同じくらいで、大人しそうな顔してて、そうだな、水鳥中学のほら、佐川っていただろ、ああいう感じ」

一度しか会ったことがない相手だったけど、だいたいそれだけで見当がついた。小春ちゃんに関係する人ったら、あの「彼」しかいない。

「立村くんさあ、ほんと、人の顔覚えるのって苦手だよな」

私も思いっきり笑ってやりたくなった。

「その男子、たぶんA組の片岡くんだよ。絶対そうだと思う！」

「片岡、って確か英語で最近俺の次に入っている名前の、奴か？」

やっぱり英語学年トップとしてはそちらの方での認識が強いんだって改めて思った。

もっと有名な事件がたくさんあるっていうのに。立村くんのお父さんは「週刊アントワネット

」の記者だっていうけれど、もう少し息子たるあなたも、学校内の事件のこと気にしなさいって言いたかった。

「ほら、小春ちゃんに毎日薔薇の花を持って通って、想いを伝えたっていう、ロマンチックなあの男子よ。それと、あの」

「ああ、そうか」

また立村くんはうつむいて、小声で呟いた。

「それなら話は通る。怒るはずだよ、無理ないな」

一年の時、プールの授業中に女子の下着を盗んで捕まり、つい最近自分からその罪を認める発言をした彼のことだった。立村くんはどうだか知らないけど、私たち女子はみな「危険人物」として片岡くんのことを認識していた。近寄られるのも汚らわしいって思っていた。ゆいちゃんも怒っていた。「なんであんな下着ドロなんかと小春ちゃんがかくつかなくちゃいけないのよ！」って激昂していた。私も小春ちゃんに、そこまで落ちることはないんじゃないのって言ってあげたかった。小春ちゃんとの旅行中ほとんど話をする機会がなかったのは、なんとその片岡くんと一緒に歩いたり、行動したりしているところを見かけていたからだった。小春ちゃんが言葉を失ってうつむき加減でいるのを、片岡くんらしき男子は懸命に鞆もったり、道案内したり、話し掛けたりと一生懸命に何かをしていた。きっと小春ちゃん、天羽くんにそういうことをしてもらいたかったんだろう。けどそれは叶わない。だからって、「下着ドロ」にそういうことしてもらって、うれしいんだろうか。私だったら、絶対いやだ。小春ちゃん、どういうつもりであの片岡くんって子と一緒に行動しているんだろう。このままだったら一緒に、馬鹿にされるってことわかっているはずなのに。

「立村くん、小春ちゃんのこと、どう思う？」

さっきまで杉本さんのことで頭が一杯だったのに、どうしてだか脈絡もなく小春ちゃんの方に話を持っていきたくなくなってしまった。私もやっぱり、なんだか変かもしれない。立村くんがきょとんとした顔で私を見る。いっぱい、言い返さないと気がすまない。

「旅行の前の日に、立村くん小春ちゃんと天羽くんのこと、弾劾やったんだよね。その結果については私、何も言わないよ。だって立村くんが精一杯考えてやったことだってわかってるもん。だけど、これから先、小春ちゃんどうなるか考えたことあるの？ さっき立村くんが言ってくれたことどおりに考えると、一番あの事件で傷ついているのは小春ちゃんだよ。言葉も出なくなっちゃったし、それにあの、片岡くんって人と付き合うことになっちゃったんだから。それをどう考えるの？ 一番傷つく人が、将来一番救われる路ってのが、それなの？」

こっくり頷く立村くん。膝をいつのまにか伸ばしている。

「俺なりに、これがベストだって思ったんだ。もちろん、西月さんがどう思っているかはわからないけどさ。けど、その……片岡、だったっけ。俺が噂で聞いた話だと、A組でちゃんと今までの問題を解決して、周りからも少しずつ受け入れられていってるってことだし。もちろん西月さんの気持ちが落ち着くのはまだ先だろうけど、きつとうまくいくような気がするんだ。なんとなくだけどさ」

「けど、このままだと小春ちゃん、下着ドロとくつつく扱いになっちゃうんだよ！」

声が出た。まずいって思ったけど、叫ばずにはられない。

「だって、男子にはわからないよね。女子の下着を盗む奴が、どんなにお金持ちでも性格よくても、人間として認められないに決まってるじゃないってこと。A組の男子、あと天羽くんはその片岡くんって男子を、仲間として受け入れたかもしれないよ。だけど、盗まれた女子の気持ちってどうなるの？ 被害者の気持ちって無視なわけ？ そんなのずるいよね。私認めたくないよ。小春ちゃんだって」

「いや、西月さんは、自分からその片岡と一緒に歩くことを選んでいたわけだから。俺も何度か見かけたけど、ばい菌扱いもしてなかったし、たまに笑いかけてもいたみたいだし」

「そんなの男子にはわかんないよ！ 立村くんもやっぱり男子なんだね！」

悔しい。男子ってどうしてそうなんだろう。いったん謝って「みそぎ」をすれば、すべて許されると思ってるんだ。スカートめくりされて恥かしくて学校にいけない子とか、さっきの私みたいにお風呂上りを見られて慌てて隠れた子とか、そういう子たちの気持ち、ちっとも理解しようとしなないんだ。私がああ、あれになったことを、水口くんはさんざんはやしたてたけど、ああいうのもきつと冗談のうちだと思うんだらうな。きっと立村くんも、私に対しては特別扱いしてくれたけども、小春ちゃんに対しては「ああ、それでいいんじゃないの、下着ドロと付き合うのも悪くないんじゃないの」とか思っているに決まっている。

「小春ちゃん、学校帰ったらきっと悲惨なことになっちゃうんだよ。いくらあの下着ドロって子が小春ちゃんのこと大好きでも、女子たちには思いっきり馬鹿にされちゃうんだよ。今まで小春ちゃんが一生懸命努力してきたことも、みんなに仲良くなってもらうために頑張ってきたことも、あの子と付き合うことによって、帳消しになっちゃうんだよ！ そんな的可哀想だよ。もちろん、天羽くんと近江さんはお似合いだからそれを壊しなさいって気、私もないの。あの子は仲良くしててほしいの。だけど、小春ちゃんが、そうだよ、小春ちゃんが一番傷ついているのに救われなくて、あんまりよ。どうすればいいと思うの？」

「杉本が話してたけど、あの子と付き合うって奴、人間としてまともだって話だよ。杉本の判断はかなりのところ鋭いところって思うし、あまり清坂氏が心配することないんじゃないかな」

「杉本さんの判断はどうでもいいの！ 他の女子たちに馬鹿にされちゃう小春ちゃんのこと、どうしてもっと思い遣ってあげないのよ！ あの下着ドロなんか。いやらしい奴に、ってみんな馬鹿にされちゃうんだよ、なのに」

「清坂氏、それは違うと思う」

きりりとした目で、いきなり立村くんがきっぱり言い放った。

少し怒っているような口許と、まっすぐな視線。どきんとした。

「俺も、その片岡という奴についてはそれこそ、英語の試験でいつも二番なんだなっていうことしか知らないけど、知らないからこそこれ以上の悪口を言うべきじゃないと思う」

「けど、本人は認めたんだよ！ 下着ドロしたってこと！」

「天羽はそう言ってたよな。けど、ちゃんと口に出したことで、すべてけりはついていると思う」

「そんな男子の言い分よ！　じゃあなに？　そういういやらしいことした奴を、許せてこと？」

「片岡がその時どういう精神状態だったか想像つかないけど。けど」

言葉をとぎらせ、立村くんは缶をぎゅうぎゅうに握りつぶした。柔らかい缶だったんだ。

「俺だって、そういうことをやらない保証はないんだ。男子だったら、特に」

きりっとした眼差しに、突き刺された。顔かされた。言い返せなくて、突然背中に寒気が走った。

「どういうこと」

立村くんの手がもう一度缶をふわっと守るようにふくらんだ。「そういう気持ちを押えられなかった片岡に問題があるとは思いうし、罰を受けるべきだとは思うんだ。女子が許せないのも、俺は当然だと思う。だからそれを求めたりはしないけど、俺は責められない。それだけだ」

「それって逃げだよ。それってなに？　立村くんが将来そういう、いやらしいことをしてしまった時の言い訳を残しておきたいってだけなんじゃないの？」

きつすぎる言い方かもしれないけど、ぶつけずにはいられない。

「私、立村くんに限って絶対、そんなことないって信じてるけど、今の言い方だったらそういう可能性もある、ってことになるよね。そんなこと、ないよね！」

静かに立村くんは私を見つめ、横に首を振った。

「今の俺は、片岡のことを全く責められないんだ。だから、もう一度言うよ」

手を伸ばし、立村くんは私にさっきと同じことを口にした。

「手首を、ハンカチでも紐でもなんでもいい、縛ってくれないか」

考えたくなかった。

——まさか、そんなこと、ないよね。

あの「下着ドロ」片岡くんの噂を聞いた時、私もぞっとした。あんな奴、女子の敵、どうして学校で追い出そうとしないんだらう。狩野先生甘すぎ、とか思ったものだった。そんな奴とよりによって小春ちゃんが付き合う羽目になるなんて、なんて世の中酷いんだらうって思った。

いくら男子がいやらしいこと好きそうだとしても、立村くんだけは別だと思ったかった。

立村くんだけは、そういうことを決してしない人だと信じたかった。

貴史が鈴蘭優にしか熱を上げないのと同じように。

きっと貴史とこずえは、いやらしいことなんて決してしてないに決まってる。

私にとって大切な人たちは、決して夜ふたりっきりになったからっていっても、いやらしいこと想像したり、スカートめくったり、抱きついたりしないはずだと信じていた。

けど、立村くんは自分の言葉で、それをはっきり否定した。

自分も、あの「下着ドロ」と同じ本能の持ち主だから、気をつけろって言っている。

そんなこと、絶対ないって信じたいのに。

考えるより先に、私は鞆の中を開いていた。背筋につつと冷えるものが走り、背中を向ける

のも怖くなった。立村くんがいい、って言ってるなら、そうしたほうがいいのかも说不定。

ギンガムチェックの、手付かずのハンカチを見つけた。三角に折って、もう一度たたみなおした。細長い平方四辺形になるまで、たたみつづけた。

これで縛れば、立村くんだって落ち着くし、私だって危険から守られるというわけだ。

でも、本当だろうか？

「立村くん、本当に結んでいいの？」

「俺も、それの方がいい」

そんなのってずるい。男子の逃げだ。

不意に心が囁く。

立村くんは最初からこんな感じで泊りこむ羽目になるなんて、思っていなかったに違いない。詳しい状況は私もわからないけど、たぶんこずえに丸め込まれたかなんかしたんだろう。何度か帰ろうとしたのも、こういう状況を逃れたかったからだろう。男子の衝動って想像を絶する、と雑誌にいろいろ書いてあったけど、立村くんだけは別だと思っていたからあまり気にしていなかった。でも、今の立村くんはまさに、そういう状態なのかもしれない。目の前の私を、押し倒したいとかそういう気持ちで一杯なのかもしれない。いくら顔を覗き込んでも、そういういやらしさは見い出せない。ずっと唇を噛んで、頑なに自分を律しようとしている姿、ずっと一緒にいたい、そう思えるものだった。なのにどうしてだろう。男子はどうして、そんないやらしい気持ちを捨てられないんだろう。私は絶対、そんなこと考えやしない人だと信じているのに、立村くんを。

信じていたものを裏切られたくなかった。

私は立村くんの腕に、赤いひも状のハンカチを軽く結んだ。そのまま、腕を両手でくるんだ。ベッドの上に転がっている空のサイダー缶を枕もとに寄せ、もう一度紐の部分から両手を押えた。

「立村くん、私ね」

私の腕よりずっと細い手首。思いっきり握り締めた。

「私、立村くんを縛る資格、ないと思う」

こんなにぐっと近く、立村くんに触れたのは初めてだった。ハンカチの下から伝わってくる熱いもの、なんでかわからない。ただ、離れたら終りになってしまいそうだった。

「私、ひどいこと考えたり、傷つけたりしてると思うの。こずえにもこの旅行中、いっぱい怒られたし。それに、嫌いな女子を恥かかせてやりたいって思って、絶対許されないこと、しちゃったこともある。けどね、私、立村くんの前では、恥かしくない女子になりたいって思ってたの」

「恥かしくないって、いったい」

戸惑うような立村くんの声、掠れている。「私、立村くんがもし、そういうことしたら、たぶんその場で悲鳴あげると思う。立村くんを裏切られたって絶対思うよ」

今まで耳に響かなかった外の雨音が、突然激しく鼓膜を打った。

「けど、私、立村くんがそういう人じゃないって信じてるから、そう、信じさせて」

そっと赤いハンカチの紐を右手に丸めて納めた。

「でないと、私、立村くんにふさわしい女子に、なれなくなっちゃうから」

立村くんはしばらく私のするがまま、身動きひとつしなかった。やがてゆっくりと溜息をつくと、

「うん、わかった」

そっと私の手を外すようにした。うつむき加減で私の眼をじっとみつめ、

「どんなことがあっても、そんなことしない。約束する」

そのまますうっと布団にもぐりこみ、身体にそれを巻きつけるようにして、瞳を閉じた。

立村くんの寝顔は真っ白くて、そして静かだった。

しけたバスタブの中で落ち着いて寝るなんて、不可能だ。
ってことで俺は睡眠をあきらめて、現実を見ることにした。
別にすっぱだかになったわけじゃあない。単に、これからどうするかってことだ。
布団を身体に巻きつけて、膝をかかえるような格好。なんだか棺おけの中だ。入ったことは当然ねえけど、こりゃあ窮屈だろうな。俺はまだ生きていたい、改めて思った。

——とにかくだ。古川と立村をどうやって交換するか、だ。

もう少し早い時間だったらさっさと連絡を取り合って、廊下に誰もいないのを見計らい脱出させていざらう。成功確率は五分五分と微妙なところだが、それは賭けだししょうがない。捕まったとしても、泊りこんだわけじゃない。停学は食らうかもしれないが、美里と立村の仲をうまく取り持つためならそのくらい、しょうがないか、とも思っている。

だがだ。

とうとう、一夜を共にしちまったわけだよ、俺と古川は。

話題がしょせん美里と立村のネタしかなかったという現実を差し置いて、見た目からしたらどうみたっていわゆる「不純異性交遊」だろう。そりゃ、男女ふたりっきり、夜のお色気番組と一緒に見て感想言い合ったのはまあ事実だがなあ。なんもなかったとしても、やっぱり狭い部屋で二人きり、「語り合った」ことは否定できない。「愛」じゃないと言っても、現行犯逮捕されたら一貫の終りだろう。俺と古川はまあ何とかなるだろう。もともと友だち関係なだけだし、証拠を見せるわけにはいかないにしても、まあ言い訳はなんとかなる。

けど問題は、あの二人だ。

本当のところはどうだか俺だってわからないあいつらだ。

古川はあいつらをふたりっきりにしてやりたいなぞと申ししていたが、果たしてどうなんだろうか。一応、立村と美里ときたら、「青大附中評議委員同士カップル」だぞ。

しかも一年いろいろあるにせよ、続いてきた仲だぞ。

ふたりっきり、狭い部屋。何もない、と考える方が変じゃあねえか？　なあ、古川？

なんでかわからんが、俺もそういう本能のざわめきとは縁のない性格ではないんだと思う。

古川は何を考えたか、一緒にベッドで語り合おうなどと言っているが、男の本能がどんなもんなのかちっとも気がついていないんだな、きっと。俺も残念ながら男だし、寝ている女子を見て、ひょいっと胸のでかさを確認したくなったり、すっぱだかにしたくなったりっていう本能は感じてないわけじゃあない。立村が一日目に配ったグラビア写真集のページだが、俺もそれなりに使わせてもらい、さっさと処分した。やはり、可愛い子には弱いんだな、これが。いつか俺もそういう生身の可愛い子、願わくば優ちゃん似の子といちゃいちゃしたいなあとか思ったりもする。チャンスがあればたぶん、やっちゃうんじゃないかとも思う。

古川がもし、もっとなんか言い出したら、俺の理性は飛んでいた可能性ありだ。

浴衣の上から見ても、美里以上にでかい胸だったし、意外と顔も派手目なんだなって発見もあった。いやあいつがもう少しお嬢さん風の口の使い方してくれれば、俺もどうなったかわからん。ただ、露骨になあ、あまりにも、その「抜く」だとか「びんびん」だとか言われて見ると、なんだか、ひよろひよろっと萎えてしまうのも確かにあるわけだ。

俺が「不純異性交遊」に走らんですんだのは、むしろ古川の下ネタトークにあったのかもしれない。皮肉だけど、それほんとだ。スケベなことをどっさり並べられる女子はなかなか楽しいし、しゃべっていて気楽でいい。けど、話せば話すほど、単なる「実験材料」になってしまい、そられるものがなくなっちゃうってのはどういうことなんだかわからん。

美里とも、ちょっと違う。なんだろう。ま、いい奴なんだってことだけは再確認できたし、それはそれでいいかなとも思う。もう一回、ここ出る前にすっきり抜いておけばいいさ。

けど、しつこいようだが、立村と美里。

——あいつら、本当に、やってるのか？

古川は「たくさん語り合ってもら方がいいのよ」とかのたまっていたが、それで済むだろうか。

俺が思うに、立村はかなり、こらえてるもんがあるんでないか？

もともとあいつはそういう、「やりたい」というところを見せない奴だった。風呂場でも自分の身体を必死に隠すようなことしてたし、スケベ話の最中でもできるだけ黙っている様子だし、そのくせグラビアはそれなりに持っているって奴だ。男子同士、もちろん「あ、あいつも本能が反応してるなあ」と気づくことはある。男の身体はその辺、わかりやすいし隠す時の行動も丸見えだ。女子にはわからんだろうが、男は影で戦っているものなんだ。

もしもだ。愛しいハニー美里の湯上り姿で立村がのぼせてしまったとしたら？

果たして冷静でいられるか？ もし俺が優ちゃんの姿を見たら何してるか？

たぶん、即、押し倒してるだろうなあ。もちろん妄想イメージの中でだが。

立村にとって美里がもし、そういう存在だったとしたら、これはきっと地獄だぞこりゃ。

全身はすたんだっぶ状態だろう。しかも二人きり。耐えられるか？ 男として？

それにあいつ、ゴムなんて持って行ってないだろうが。いや、それ以前に、あいつら今までそういう経験したことないのか？ 立村も美里もいわゆる「いちゃいちゃ経験」を否定しているけれども、口だけならなんとも言えるわな。俺の知らねえところで、もしかしたら、ちゅーとかぶっちゅーとかしてるんだろうか。美里を見ている限り限りなくシロに近いと思うんだが、世の中わからんぞ。

とにかく、今、上の部屋でラブラブカップルのラブラブな夜が繰り広げられている可能性は、大だ。まああのふたり、ずっとそういうチャンスがなかったんだし、それはそれでいいんでないかと、俺の頭ではそう思う。けど、もう一方で思うのは、

——けっ、立村に出し抜かれるのかよ、童貞喪失をさ。

すんません、すげえ下劣な本音だ。

俺だってやはり、そっちの卒業を立村より先に済ませたいわな。うちの学校で正々堂々・非童

貞だったのは一年上の本条先輩しか知らないが、次に立村っていうのはまず想像したくないもんだ。しかも相手が美里とくるわけか。美里が裸になるわけか。美里が素っ裸で……。

余計な想像するもんじゃねえ。すたんだっぷ状態なのは俺の方だ。まずはそういうところをきっちり処理して、頭をすっきりさせて、まずは考えよう。

することだけして、便所の水を流して、外へ出た。

古川はどうしてるんだろう。きっとすやすやおねむなんだろな。ベッドでシーツに包まって寝ている姿は、妙にきっちりしている。どうやら目、もう覚ましているんだろう。寝たふりしたって意味ないっての。机の上の、デジタル時計は「4 : 3 4」と蛍光グリーン色に光っている。

「おい、そろそろ起きろよ」

ためき寝入りしたってだめだっての。そんな背中むけたって、襲いたいなんて思わないっての。

返事がないのでもう一度、ささやく。

「今、四時半なんだけどなあ、どうするかあ」

「……四時、半？」

やっぱり起きてるんだろう。多少口ごもり気味だってとこみると、眠けはさしているんだろう。そりゃそうだな。肩までしっかりとシーツにくるんだまんま、古川は寝返りを打った。かなり髪の毛が跳ね返っている。もし美里だったらきゃあきゃあ騒ぎながら「ねえ、寝癖直し、ない？」とか騒いでるんだろうが古川はそんなことなさそう。

「そ、四時半。脱出できる最後のチャンスだぞ」

「もう無理に決まってるじゃん」

こいつが男だったら、思いっきり髪の毛ひっぱって起こしてやるんだが、やっぱりそこらへんは俺だって気遣ってやってるんだ。女子としてだな。俺の顔を見上げて、次に時計の方に首を回し、

「私が脱出できたって、もうひとりどうするのさ」

「ああ、そうだな」

ちらっと、やばめのイメージが頭の中を駆け巡る。全く可能性がないわけじゃあないんだからな。

「けどどうするんだよ。このままな、二人で部屋を出てったらあとで大騒ぎだぞ。それこそ『不純異性交遊』じゃねえの」

「私、羽飛とだったらそれでもいいけどさ」

「おめえがよくたって美里と立村どうするんだよ！」

「そんなわめかないでよ、眠いんだからあ」

古川は俺の方をじろっと睨み、枕の上に顔を押し付けた。

「大丈夫、ずっと考えてたんだから、いい方法あるもんねえ」

「いい方法？」

腰がくきくき痛い。俺は数回ラジオ体操のポーズを何度か決め、腰を両方にひねった。

「あたりまえじゃないのさ。私だって、ここに泊る以上それなりに言い訳できる方法、考えてこなかったわけじゃあないだもんね」

言われてみればその通り。合点した。今まで古川が、俺たちのやらかす面倒ごとに関わってきた経緯を考えると、後片付けをしない奴だとは思えない。後始末、って言えばいいんだかな。とにかく古川が、ただ素直に「不純異性交遊」で停学食らうのをみすみす受け入れるとは思えん。最後の最後まで脱出する方法を 考えるだろうし、困った二人の後始末だってそれなりにいい方法見つけているんじゃないだろうか。うん、可能性はあるな。

「じゃあ起きて、それ、教えろよ」

「教えてもいいけどさあ、私眠いのよお」

「寝てたらばれるぞ、どうすんだ」

「大丈夫、このまんまで話聞いてよ」

それでもうつぶせになったままではまずいと思ったのか、古川は俺の立っている机の前まで身を起こし、上半身だけ思いっきり伸びをした。だいぶ浴衣の胸が はだけているんだが、ぜんぜんやらしくないのはこいつのキャラクターだろう。カーテンの濃い橙色の光りがぷっくりふくらんでいるように見えた。

「カーテン開けるぞ」

外からは気づかれないだろう。とにかく古川の眼を覚まさせて、その「計画」とやらを聞かせてもらおうか。

「じゃあ、水かなんか一口ちょうだいよ。私、朝一番で水飲まないと、便秘になっちゃうんだよねえ」 だからこういう奴とは、むらむらっとこないんだ。俺は素直に洗面所の「消毒後」ビニール袋に包まれたガラスコップに水を汲み、そのまま渡した。ごくごく喉を震わせて飲んでいた。

「あーあ、おいしかった！ 羽飛サクス！」

「お前もなあ、もう少し女子らしくしろよなあ」

俺のつぶやきなんか全く聞こえなかったんだろう。古川は照れる様子もなくはだけた胸を掻き合わせ、ふっと息をついた。ガラスコップを両手で包み込んだまま、

「そうそう焦らないでよ、たぶん、上の二人、どういう関係になってるかわかんないけど、ぐっすり寝てるよ」

「どういう関係って、んなわけねえだろうが。第一立村、ゴム持ってってねえしなあ」

おちゃらかしてごまかした。まあ、あいつの性格上、そういう度胸はまず、ないだろう。

「そうよねえ、美里にそういうことしたら、ちょっと鬼畜よね」

よくわけのわからん言葉を使う古川。なにが「鬼畜」なんだか。

「まずは電話を上のおふたりにかけて、それから相談するのが一番よ。たぶん私たちが誰も探しにこなかったってことは、先生たちにばれていないんだろうし、それならそれで私たちが片つけられるしね」

「まあなあ、ばれちゃあいねえだろうなあ」

なんで、菱本先生たちの目を気にしないでいられたのか、俺も自分でよくわからん。

美里と立村のことを最優先せねば、とは思ったし、停学の恐れもありじゃねえかとあせったりもしたけれども、まず見つからないだろうとたかをくくっていた。古川もかなり冷静沈着だ。

「それでさ、ひとつ聞きたいんだけどね。立村の着替えと荷物ってどれなの？」

自分の着るもんならすぐにわかるんだが、相手のものはよくわからん。

「じゃあさあ、羽飛は制服どこにかけてるわけ？　そこだよ、一緒に置いてあるよね」

思い出した。クローゼットの中に適当にひっかけておいたんだ。立村の奴がなんとも言えず丁寧にハンガーへかけたりアイロンかけたさそうな顔するもんだから、真似してしまったんだ。

「へえ、じゃあさあ、あいつ、この旅行中しっかり洗濯してたわけ？」

「まあな、袖口とか、スラックスの裾とかはくそ丁寧にごしごし洗ってたぞ」

「やっぱりあいつ変よねえ」

古川は起き上がると、はだしのままクローゼットの引き戸を開いた。

「だいたいわかった。こっちよね」

両肩ずれないようにグレーのブレザーをかけ、その中にワイシャツ……確か一度も袖を通してないとか言ってたなあ……とネクタイ。立村はなぜか、ワイシャツをしっかりと五日分持ってきたんだとか。洗濯してないシャツを着るのは耐えられないんだとか。こういう潔癖野郎ってやだっと思うぞ。男なら。

「ま、私は羽飛みたいなのが一番いけてると思うけどね」

別にこんなところで持ち上げなくてもよろしいっての。どうせ俺の制服は、半分肩が抜けそうだし、シャツは二枚しか持ってこねかったし、スラックスは旅行前からはきっぱなしだしな。

「じゃあ悪いけど、これ、なんか手提げ袋かなんかに詰め込んでもらえない？」

いきなり古川は立村の制服一セットとスニーカーを両手に持ち、顎で俺にしゃくってよこした。

「あいつ怒るぞ、人の服勝手に触ったってな」

「そんなこと言ってる暇ないの。あ、手提げなんかよか、これに詰めちゃえばいいじゃないのさ」

立村の鞆二つを目ざとく発見し、俺が止める間もなく古川はチャックをささっと開いた。初めて俺も見る立村の鞆内部。かなりでかい鞆なんだが、いやあ、全部きちんとたたまってるってところが怖すぎるぞ。俺なんかぬぎっぱなしの靴下はそのまんま押し込んじゃってるし、下着も食べ物もみんな、とにかく足でぐいぐい詰めてから隙間にぶちこむってやり方をしているんだが、立村ときたらまあ。

「ほんと、立村っておとめ座の性格よねえ」

「几帳面野郎ってことさな」

「全部風呂敷か手提げにぴたーっと平べったく入ってて、鞆の隙間にはさ、全部詰め物が入ってるみたいなんだよ。すごいよ、これ。あんたできる？」

「できるわけねえよ、だってこれ立村のだけ、あまり中見たらあいつに殺されるぞ」

「いいじゃん、私たちがあいつらを救ってやるんだから。そのくらいのおだちん、もらったって

いいじゃないのさ」

全く「他人のものを覗く」という罪悪感を感じていない様子だ。要は鞆に制服がきちんと収まるかどうかを確認したかっただけのようだ。きちんとハンガーをかけたまま、袖をたたんでスラックスの膝を崩さないようにふたつ重ねし、古川はきれいな形のまま鞆に納めた。

「あと、立村の持ってきたものってある？ この鞆に全部ぶちこみたいのよね」

「ええと、ないんじゃないの？」

机の上に広げた食べ物とか、タオルとか、そういうのはあるがほとんど捨てることできるか、もしくはホテルの借り物かのどっちかだ。言われてみると立村、いつのまにか自分の荷物を全部こしらえ終わっているらしい。

「そっか、準備万端か。これは完璧だわ」

「なにが完璧なんだ？」

俺には正直、古川の考えていることがよくわからなかった。たぶん、立村に荷物を持ってってやらないとまずいと思ってるんだろう、そのくらいのことは見当がつくけれども、どうやって持っていけばいいんだ？ 古川が部屋に戻ればいいが、いくら着がえたとしても立村がこの部屋に戻ってこれるかどうか、わからねえぞ。

古川はチャックをきちっと閉じると、裾をはだけさせたまま電話の受話器を取った。

「悪いんだけど羽飛、今から美里の部屋に電話かけてもらえるかなあ」

「はあ？」

お前がかけりゃいいじゃねえか、そう言い返すつもりだった。

「ほんとは私がかかけられればいいんだけどさ、万が一ってことあるじゃないのさ」

「なに、万が一って」

「盗聴されてたら一発でアウトじゃないの」

盗聴？ スパイじゃああるまいし。

「ここで私の声が壁伝わって聞こえたりなんかしたら、一貫の終りよ。たぶん美里が出るはずだから、今から私の言う計画をそのまま伝えてほしいんだ」

「だからなあ、古川早く言えよ、いったいどういう計画なんだ？」

「まかせなさい！」

やたらときゃぴきゃぴしているのはどういうことなんだ、古川よ。

さっき飲ませた水、もしかして酒が入ってたとか、いわねえよなあ。

テンションの高い古川にこう言う時は任せたほうがいいと、なんとなくわかっていても、俺としてはちょっと、ついていけそうになかった。

古川は足を組み、細っこい足をつるんと出して、俺にひとつひとつ説明し始めた。

「まず、美里が電話に出たらね、私の着替えとか出しっぱなしにしたものとかを全部詰め込んで持ってきてって伝えてほしいんだ。今私が入れたみたいにさ」

「荷物を、まとめろってか」

少しずつだが古川の考えていることが伝わってきたような気がする。背筋がぶるっと震える。

「そう、それが終わったらクラスの連中がおきだしてばたばたし出すまでここで待機すんの」

「すぐに戻るんじゃないかってか」

「戻れるわけじゃないの。今の時間だったらホテルの人起きちゃってるし、下手したら菱本先生たちだってさ」

そりゃあそうだ。じゃあどうするつもりなんだ。

「ある程度クラスの連中が起き出すじゃない。そしたらさ、悪いんだけど羽飛、美里とタイミング合わせて向こうのエレベーターで待機しあってほしいんだ。このでかい荷物持って！」

指差したのは当然、立村の鞆二つだ。

「お前、俺が向こうの部屋に運べってか」

「ううん違う。運べるわけじゃない。つまり美里とエレベーターの中で荷物を交換して、持ってくるの！」

古川の言う意味がよくわからん。俺はもう一度聞き返した。

「エレベーターの中ってどういうことだよ」

「つまり、美里とあんたの持っている荷物を交換するの。エレベーターの中だったら怪しまれないじゃない？ それにあんたらの仲だったら、預かり物とか貸しあったりするものとか、それなりにあるだろうし、いつものことだって誰も疑わないよ」

いつものこと、か、まあそうだな、否定はしない。けどあんなどでかい鞆を交換して怪しまれないと思ってるんだろうか。信じられねえよ。

「それから、もっかい自分の部屋に戻ってくればそれでOKよ。あとは私がお風呂場で服を着替えて、誰かが入ってこないようにあんたの方でうまく見張っててもらえればさ」

「俺が、か？」

「当たり前じゃないのさ！」

ばっかじゃねえの、という顔で古川は頷いた。つま先がちょこっと動いた。

「男子ばっかでしょ、ここのフロア。だったら男子が全員ここからいなくなるまで私と立村は、それぞれ隠れてればいいのよ。だあれもいなくなった段階でダッシュしてエレベーターに駆け込んで、あとは知らん顔して『遅れました、ごめんなさーい！』って反省してればいいのよ。寝坊したことにでもしておけばいいじゃないのさ」

「古川、お前、いったいこういう計画、いつ立てた」

口を半ば開いたまま、しばらく絶句した後、俺は尋ねた。古川はベッドのシーツをボンボンと叩き、

「寝てる時に決まってるじゃないの。羽飛、あんた、なんも考えてなかったってわけ？」

「そんなことねえよ！」

俺の方が、何千倍も頭を悩ませてたなんて、きっと想像つかないんだろうなあ。お前が寝ている間にスケベな本能をなだめておかねばなんて、立村ちっくに気を遣っていたなんて、なあ。

「まあいいけどね。じゃあ、今から立村へ電話して」

はいな、といわれるがままに俺は四階の女子部屋へ電話ボタンを押した。

——はい……。

電話の向こうは少し寝ぼけた声の美里だった。

「俺だ、美里、起きてるか」

——うん、起きてる。

古川が受話器の側にべったりくっついて、俺の顔を見上げる。

「奴もいるか」

——いるよ、立村くん、起きてるよね？

話し掛けている様子だった。あいつの声は聞こえないんで、きっと眠ってるんだろう。ほんとはここで、「お前と一緒にいるのか、それとも、別か？」と聞いたかったけど、なんかまた変なところが反応しそうでやめておいた。んなわけねえじゃねえか。

——私も、連絡しようと思ってたんだ。どうしようかなあ。貴史、今から部屋に戻るって難しいよね。

「だから連絡したんだろうが。今古川から、ナイスでグットなアイデアをもらったからな、今から伝授するぞ、よく聞け」

——こずえが？ そこにいるの？

古川がこくこくと頷きつつも、電話に出られないという風に手をばたばた振る。

「ああ、俺は風呂場で寝たんだからな」

なんか言い訳する必要あるんだろうかって感じだが、口から出ちまったんだしょうがない。

——風呂場って、どうやって？

「丸まって寝たに決まってるだろうが。やらしいことしてねえから安心しろ」

なんで美里にそんなこと言う必要があるんだろうか。よくわからねえが、これも俺の本能のしゃべらせる技、しかたない。

「とにかくだ、お前ら今から俺の言う通り、準備して待機しろ。それとだ」

——なあに？

とぼけてるんだか、いいかげんなんだか、ねぼけてるんだか。

美里の声にはいつも通り、隠し事をしているような雰囲気はなかった。

——立村、せっかくのチャンス、活かせなかったと見えるなあ。ったく、なあ。

思わず顔が笑えてくるのを押えられなかった。今日船の上で、詳しい話、聞かせてもらうぜ絶対に！ 古川が俺にところどころ説明を加えつつ受話器の方を見ながら頷いている。ふと、立村は美里の隣でどんな顔して聞いているのか、見てみたいもんだって思った。もう太陽はびんびんに昇っているのが、窓から丸見えだった。

羽飛がでかい荷物を抱えて美里と待ち合わせ場所へ向かった後、私はユニットバスの戸を開け、もぐりこんだ。まずはトイレを済ませて、髪の毛直して、ちっとはべっぴんさん……これ羽飛の口癖ね……になれるかな、と努力して。さっき羽飛が私に持ってきてくれたカップを洗って、口をゆすいだ。確か「消毒後」とか書いた袋に入ったままだった。間接キスなんてこと、ないかな。

——やっぱり、必死さが違うよね。

鏡に向かい、ちょっとばかり跳ね上がった頭のとっぺんを数回叩いた。なんか変なのだ。はてなマークが立っているみたいで、かなり間抜け。片手で水をすくい、髪の毛をひっばってなんとか寝かせた。髪の毛乾いてないうちに寝ちゃったのが悪かったのかな。いつもだったら美里から、寝癖なおしスプレー借りるのだけれども、羽飛にそれを求められないのもまた確か。

あ、立村なら持ってたかな。羽飛がふたりへ電話をした時に、ちょっと聞いてみればよかった。

女の子の身支度を整え、あとは予定通り荷物を持ってきてもらうのを待つだけだろう。

羽飛のことだしきつとうまく行くに決まってる。

美里もその辺はしっかりしてるもんね。

私は蓋をしめたままのトイレに腰かけて、大きく息を吸い込んだ。バスルームは扉を閉めると自動的に換気されるみたいで、ごおごおとうるさい音が鳴っていた。

——やっぱり、羽飛はそうなんだよなあ。

短めの髪の毛がかなりバスタブに残っていた。うちだったらすぐに水洗いして拾っておくんだろうけど、そんなことするのもばかばかしい。いくら羽飛の髪の毛でも、こっそり集めておまじないのなにかに使うような真似もしない。ここで確かに羽飛は寝ていた。それだけを確認するだけでいい。

本当だったら、私ももう少し焦ってどきどきするんだろう。だってとうとう、男子と同じ部屋で、一晚過ごしちゃったんだもの。なにもなかったけど、浴衣姿で二人きり、他の人にはたぶん言えないようなことまで話してしまった。そう、私の母さんの事情なんかも、ついついと。

たぶんこのあたり、菱本先生あたりはともかくとして、他の人は知らないと思う。

決して、恥かしいことなんかじゃないんだから、隠すようなことはなにもない、とも思う。

だけど、女子たちがやはり「ホステス」とか「水商売」とか「キャバレー」とか、そういう言葉に示す反応を想像すると、やはり言えない。本当のところはどうなのか、と言われても困るけれども、私はうちの母さんが家にいる時の姿しかわからないわけだし、変なことと言われても「それが？」としか言いようがない。説明できればまだ、あっけらかんと言えるのかもしれないけど、わからないんだからしょうがないじゃないの。

私なりに判断して、美里には隠していた。

特にあの、下ネタについては耐性のなさげな美里には。

けど、羽飛にはなぜかわからないけど、するっと話せた。

なんもいやな顔しないで聞いてくれた羽飛見てて、なんだかほおとした。どうしてか、私もわからないけど、嬉しいことだからあまり勘ぐらなくたって、いいよね。

頬を両手で軽くはたいた。ぱっぱと叩くみたいにした。

実はまだちょっと寝不足なのかもしれない。目の下は隈が残っている。美里だったらこういう時、どうするんだろう？ きっと水を懸命にぱちぱち目の周りにはたいて、「どうしよう、こんな顔じゃ外に出られないよ！」とか騒ぐんだろうか。少しは私も、美里の真似をした方がいいんだろうか。もし、羽飛に好かれたいのだとしたら。

そうだ、羽飛はやはりそうなんだから。

私のことよりも、美里のことが気になってしかたないんだから。

美里に電話をしていた時、羽飛は何度か、「何もない」とかいう言葉を口にしていた。

私も眠くて、実際どういう会話をしていたかは記憶に曖昧だけど、でも私と何もなかったってことを懸命に否定していたことだけはずっと伝わってきていた。もちろん、それは本当のことだし、そう言ってもらったほうがいいってこともわかっている。だけど、なにもあんな一生懸命に私と何もないんだってこと、強調しなくたっていいじゃないのさ。

考えすぎは立村の専売特許かもしれない。だけど、羽飛にはつつい、そう思いたくなくなってしまう。もしもあの夜、羽飛とふたりで川の地になって眠れたら、どんなことが起こったか想像してしまう。きっとふたりっきりで、もっと甘いこと話せたかもしれない。二年の夏に羽飛が一時的に付き合っていた下級生のこととか、最近やたらとラブレターをもらうことが多いこととかの真実とか、南雲との一騎打ちの予定はいつなのかとか、それと、そうだ。キスは、未経験なのかなとか。

なんとなくだけど、羽飛はキス経験あるんじゃないかな、って気がしていた。

これは私の直感だけ。

それ以上はどうかかわからないけど、なんか立村を含む男子連中に比べると、落ち着きがありすぎる。真面目に聞いたら「おーそうさ！俺は毎朝、優ちゃんのポスターにちゅーしてるさ！」と開き直られそうなのでやめておいた。私の目からみると、あとキス経験者は南雲かな。ひとりふたりじゃないと思う。彰子ちゃんもあいつの魔の手……南雲には恨みなしだけど……にかかったのかな。あのぷりぷりした唇を南雲めもし奪いやがったら……とひとりでエキサイトしてしまいたくなる。

ただ、初体験はまだかな、ってのも直感でなんとなくわかる。

だってもし、羽飛が経験していたら、あの場で「据え膳食べない」訳がないもの。

せめて、キスくらいはしてくれないわけ、ないもの。

鏡をもう一回覗き込んだ。なんか冴えない今日の私。

羽飛も、この顔みたら、食べる気なくしたのかな。ああ、旅行が終わったら美里に教わって、こっそりメイクの方法教えてもらおうと。

——けど、じゃあ、立村は？

美里のダーリンがどうしていたのか？ このあたりは私も想像がつかない。

羽飛の電話状況によると、「全くその気なし」らしい。けどわからんよ。私と羽飛のカップルに比べて、あの二人曲がりなりにも一年間付き合ってるからね。キスくらいは済ませても、私は驚かない。ってか、それくらいしなよ、って言いたくなる。あの立村がどういう面して、美里の唇に食いついたかを考えると爆笑もんだけどもだ。どこかの映画女優さんのセリフで「鼻がぶつかりあわないの？」という言葉が有名だけど、立村のことだ、鼻を骨折するくらいぶつけて、美里に鼻の先撫でられてたりして。あのふたり、ほんと、シュチュエーションを想像するだけでも楽しいわ。

他人のことだったらいくらでも、楽しめるのに、なんでだろう。私自身のことになると、なにも手も足も出なくなってしまうなんて。小さい部屋で一人きりでいると、考えたくもないことばかり、浮かび上がってくる。そうだ、結局羽飛は、美里でないとだめなんだってことが。

わかってないわけじゃなかった。

いくら羽飛と美里が「大親友」と言い張ったって、私の目には「両思い」としか映らなかった。立村と美里が付き合い始めてからも、目は慣れなかった。本当だったら、最大のライバルだった美里があっさり別の男子に走ってくれたからラッキーって素直に思えたのに。なんだか違和感ありありの状態が続いていた。

もちろん美里は、立村のことが本当に、それこそ本気で好きなんだ。

どんなに野次馬たちから「あんな奴のどこいいのさ！」と馬鹿にされたって、全く心揺るがない様子見ていたら、誰だってわかる。これって女子にとってはすごいことなんだから。美里くらいのルックスと元気な性格のふたつが揃っていたら、それこそ男子の交際申し込みは殺到すること請け合いだ。さすがに最近では、立村が評議委員長になっちまったこともあってなりを潜めているけれども、かなりの男子たちが指をくわえてみているらしいという噂も耳にする。その一方で美里に敵意を抱いている女子たちからすると、「彼氏があの立村」だというのは最大のつつこみ場所だ。立村なんか美里でなければ付き合いたいなんて思う子、まずいないだろうし。頭もいいのか悪いのかわけわかんないし、はっきりした言い方しないでうじうじしているし、それに暗い。話をすれば悪い奴じゃないとわかるんだろうけど、でも恋愛対象にはならないってタイプだ。一部では、杉本さんが評議委員会にいた頃に異様なほど面倒を見ていたのを聞いて、「だから立村は、美里よりも杉本さんの面倒を見ていたほうがいいのよ！」という声も挙がっていた。このあたりは私も、まあ、そうだな、と思わなくもなかった。私自身のためにはできれば美里と立村のカップルが壊れないでほしかったけど、立村サイドからしたらたぶん、それが自然だろうとも思えてならなかった。美里がもし、立村に告白するのがもう少し遅くなったとしたら、きっとこの四角関係も今のような状態じゃなかったんだろうな。

いつもだったら目をそむけていたいことばかりだ。

立村と美里が自然と、彼氏彼女になって行ってそれなりに仲良くなって行って。本当だった

らもっと嫉妬したっておかしくないのに、つつい応援したくなってしまふのはどうしてか。

——私が、あのふたり、本当にカップルなんだって、思えないからなんだ。

何か無理矢理どきどきものの展開に持っていかない限り、あのままのような気がする。

思いっきりどかんとなにか、しなくっちゃ。

けど、もしもだ。もしも美里が立村と、いたしちゃったとしたら？

まずないだろう、立村の性格だったら。それに美里はつい五日前、あれになっちゃったばかりだ。いくら妊娠しない時期だとわかっていても……けど、わからない。好きな女子とふたりきりになったら、必ず手を出して当然だって雑誌にも書いてあった。羽飛は手を全然出してくれなかったけどそれは、好きな女子じゃなかったからだろうな。それに下半身の要求はすごいって聞くけど、それって中学生じゃまだ早いよ。高校生になって足にすね毛が生える頃でないと無理だよきっと。

ふたりきり、というシュチュエーション。全く可能性がないわけではない。

美里がもし、そうだったら。

初めて、経験しちゃってたら。

女子ってその日の朝、どういう顔してるんだろう。

男子もその時、どうしているんだろう。

立村には軽く突っ込んでやれるかもしれないけど、美里にそれはできそうにない。

なんだか気分が悶々としてきてしまった。要するに私は、美里にやきもち妬いてるんだ。

三年前からずっと。普段の私だったらそんなこと思わないのに。きっと、このバスルームに落ちていた、髪の毛のせいだ。

物音がした。うっかり顔を出して先生とご対面なんてなったらしゃれにならないので、物音させず黙って座っていた。すぐにこちらの方へ向かう足音。誰だかすぐにわかったけど、動かない。「古川、古川、開けるぞ」

「サンキュー！」

無事、物々交換は終わったみたいだ。ありがや。私のかなり大きな鞆を大事そうに抱え、そっと差し出してくれた羽飛。なんだか遠慮がちだったのがちょっと意外だった。

「うわあ、完璧、やるじゃあん」

「やばかったんだぞ、まったく、俺に感謝しろ！」

羽飛の格好はもう完璧、制服姿だった。浴衣はベッドの上に投げっぱなしだった。私はありがたく受取ると、すぐにバスルームへ籠って着替えすることにした。鞆のチャックを開けてみると、美里の気遣いかきちんとたたんでくれているのがわかった。靴下も入ってる。全部荷物まとめてくれたなだなってわかる。やっぱりこのあたり、女の子らしい美里に軍配上がっても、しょうがないかな。全部着てから髪の毛をもう一度直した。よかった、靴も入ってる！

身だしなみが整ったところで私はバスルームから出た。ブレザーを着込み、朝のテレビニュー

スを眺めている羽飛。なんだか眠そうな顔だった。後ろに回って軽くぽんぽんと叩いてやった。

「ああ？」と意味不明な言葉を呟く羽飛に、私はお得意のマッサージをしてあげた。

「さっきのお礼、ありがとうね」

「あ、ああ」

照れてるのかな？ 少しは意識してくれたんだろうか。じゃあもっと気合入れて揉んじゃうぞ

。

「美里はこういうこと、してくれないでしょうが」

「お前、感謝の気持ちを表すのはありがたいんだが、もっとやりかたあるだろう」

とか言いつつも、羽飛の奴全然、いやがってないのがわかる。嬉しいなあ。

「ところでさ、美里の様子どうだった？」

やっぱり気になるのでまずは質問してみた。答えによっては指先はかなり力が入るかもしれない。あまり過敏反応しなくてもよさそうな調子で羽飛は返事した。

「仲良くやってたみたいだぞ」

「え、やってたって、やっぱりい？」

「んなわけねえだろ、しゃべっただけみたいだ」

「ふうん、だけど密室で二人っきりって何があるか、わからないよねえ」

ちっとも私だって信じてなくせに、つつこみたくなってしまう。

「立村に限ってんなことねえよ」

不機嫌そうになったんで、これ以上つつこみを入れるのはやめた。羽飛の背中を思いっきりぽんと叩いて、

「さ、感謝終了！あとは立村と連絡取るからね。電話貸して！」

「そうだな、遅刻作戦だな」

まずは羽飛を先に部屋から出す。荷物をぐっちゃぐちゃにして詰め込んでいた羽飛は面倒臭そうにあくびしていたけれども、私を手伝わせてくれないんだから自業自得だ。私はトランクの詰め替えとか得意なんだから任せてくれたっていいのにさ。忘れ物確認はきちんとした。たぶん、何にもないと思うし、ふたりっきりでいたような証拠も隠したはずだ。

「じゃあ、あとでよろしく！」

「成功を祈る」

妙にかっこつけるような調子で羽飛は呟き、私の方を全く見ずに出て行った。せめて一度くらい、ひょいっと私に向かってウインクして「君の瞳に乾杯！」とか言ってくれたっていいじゃないの。いやそれって、ないものねだりかもね。

しばらく私は様子をうかがっていた。計画で行くと男子が全員部屋を出てその後ダッシュで廊下を駆け抜けエレベーターに乗る、言ってみればこれだけだ。たぶん先生たちは先に集合場所に下りているだろう。けどあまり遅いと様子に戻ってくるかもしれない。このホテルの客室、カード式の鍵だし外からは開かないようになっているからすぐにばれることはないかもしれないけど

、用心に越したことはない。

廊下の物音を神妙に聞く。

——おいおい、お前寝てねえの？

——やべえ、忘れてきちゃった！

——あれ、捨てたのかよ。

——知らなねえよ。

男子たちの会話はほんとはつまらなかった。もっと恋の話に燃えているんじゃないかとか、好きな子への想いとか、一杯詰まっているんじゃないかって期待してたのに残念だ。男子ってやっぱり、恋愛のことなんて二の次、三の次なんだろう。羽飛を例外としてみたわけではなく、みんなそうなんだろう。どんなに私が思いを込めても無駄なんだろう。

声を潜める格好で、私はベッドとベッドの間にしゃがみこみ、受話器を取った。電話をかけた。

「もしもし美里？」

——あ、こずえ、もう貴史出た？

少しご機嫌斜めかな、とも思ったけど、たぶん朝食抜き状態だからだろう。

「うん、もうたつたと。だから美里ももうそろそろ動いた方がいいよ。立村にも言っというて。女子たちがいなくなったらこっちに二回ベルを鳴らして、それから切ってって」

——けど、大丈夫かなあ。

側には立村がいるんだろう。語尾が柔らかかった。

「大丈夫だって。私が立てた計画、こけるわけじゃないのさ。あんたの側にいる立村に言っというて。絶対、女子全員が出て行くまで待ちなさいってね」

——うん、わかった。

「それとさ、もう一つ聞きたいんだけどいい？」

——なあに？

「結局、あんたと立村、どこまで行ったの？」

怒るだろうなあ。ちょっとからかってやりたかったただけだけど、やっぱり美里の反応は予想通りだった。声のトーンが上がっている様子だ。どもっちゃうところが怪しいぞ。

——な、何よ！ そんな変なことしてないんだからね！ 話しただけ、話した！

なんだか羽飛と同じようなこと言っているようだけど、それはしょうがないか。あとで……船の中でこっそりと話すのも悪くはないかな。

——こずえの方はどうなのよ。

「どうも何もないわよ。な一んもないってね。あ、そこで妄想にむらむらしている奴に言っというて私と羽飛のことで明日以降の夜のおかずに使おうとしたってむだだよってね」

——そんな変なこと言わないでよ！

「じゃあ、あとはよろしく！」

立村とも打ち合わせしておきたかったけれども、あまり長話するのもなんなのでやめておいた

。こんなとこだらう。指紋を調べるとは思えなかったけれど、シーツの端っこで受話器を拭いておいた。念には念を入れて、だ。

バスルームの中に隠れてほしい十分くらいだろうか。二回、ぷぷ、ぷぷ、と鳴って切れた。いつのまにか廊下は静まり返っていた。

集合時間まであと一分程度だ。もう動いても構わないだろう。

——さあ、いくか！

自分に気合をつけてみた。羽飛が持ってきてくれた荷物を肩に担いで、スカートのしわと髪の毛のくせを確認した。さあ、これから勝負。一階上の立村にも念を送っておいた。届いているかわからないけど、

——あとあんたがドジ踏まなければ完璧なんだからね！ 頼んだよ！

あのどうしようもない軟弱委員長も、美里のためだったらもう少しがんばってくれるだろう。

廊下に出ると人はやっぱりいなかった。どの部屋も全部戸が閉まっていた。当たり前だけど。とにかく荷物を持ったまま、全速力で駆け抜けた。万が一、誰かが出てきたら大変なんだけども幸いそんなこともなく、エレベーター前にたどり着いた。下に向かうボタンを押し、じりじりしながら待つ。ここで女子が乗ってきたら一貫の終りなんだけどそれは私なりにシナリオ設定済み。「さっき頼まれて男子たち呼びに行ったんだ！」とか言えば大丈夫だ。私だってそのくらいのことはできる。美里にできないことを私がやったげたっていいじゃないのさ。私が羽飛にできることったら、せいぜいそのくらいなんだから。

エレベーターに乗り込み私は、乗り込んでいる人たちの顔を覗き込んで「おはようございます！」とにっこり笑顔で声をかけた。成功、間違いなし。

ロビーの真ん前、エレベーターから、歌番組の歌手みたいな顔して登場した時、一気に「おっせー」の合唱に迎えられた。腕時計を見ると集合時刻五分オーバー、三年D組の女子たちは全員揃っていた。誰一人怪しんでいない。ただし菱本先生を含む教師一同はかなりのお冠だった。予定通りとはいえ、怒られるのは嬉しくない。すでに美里は列の先頭に立って点呼を取っていた。ちゃんとおめかししていたみたいだ。ここで詳しい話をすると怪しまれるので、私は両手を合わせて「ごめんね」のゼスチャーをしておいた。なあにが「ごめんね」なんだかよくわからないだろうけれども。

「古川、どうしたんだ、ひと風呂浴びてきたのか、ったく女子はあ」

「ごめんなさーい！ やっぱり先生、女子には身だしなみってもんがあるのよ！」

「遅刻厳禁だぞ、旅行終わったら罰掃除だぞ」

やだなあ、なんでこういうのりなんだろう。そそくさと女子たちの列に交じり合い、全員眠そうな顔をしている中に忍び込んだ。羽飛を探し、ちらっと目で合図したけれども、あいつ全然私の方を見ようとしなかった。舌打ちして、時計覗き込みながら、ずっとエレベーターあたりを眺めている。立村が来ないからいらいらしてるんだろう。けどちっとくらい私の方みて、「よくやった！」みたいなこと言ってくれたっていいじゃないのさ。なにさ、せっかく一夜を共にした

仲なのになさ！

「おーい、清坂、あとは誰がこないんだ」

「ええっと……」

美里が口ごもるようにして、ちらっと私と貴史の方を見た。立村くんが、って言おうとしているんだろうな、理由がわかっているだけに、言えないか。

「評議委員長かあ。ったくあいつはあ」

菱本先生が舌打ちした時、目の前のエレベーターがしゅうっと開いた。

予定通り、怒られて、これで終りのはず、だった。私の計画通りだったら。

「すんませーん、先生、ちょっと一風呂浴びてきたわけで、かなり遅刻しました、申しわけないです！」

昨日とは打って変わって明るい口調の、気障男が一人。本人の申告どおり、奴の髪の毛はきれいにブローが決まっている。女子ファンたちのささやき声に包まれた中、もうひとりの地味な奴がその脇から幽霊みたいに顔を出した。まさに真っ白。おしろいはたいてきたかってくらいだった。

「なんだあ、南雲、規律委員長ともあろうもんが！ 十分近く遅刻だぞ。こういう場合、お前だったら違反カード何枚切るんだ？」

「罰掃除、お任せあれです。もう一人、相棒もいるし。ぴっかぴかに磨きますよ！ な、りっちゃん？」

私と美里、あと羽飛にきれいな三角形の視線を送った後、南雲規律委員長はぺこっと一礼すると、「さ、りっちゃん船の上で、掃除の段取り、相談しような」と立村の肩を叩いた。私たちに流し目したあの態度と、やたら勝ち誇ったあの表情、いったいなんなんだろう？ 羽飛がぶちぎれてないといいんだけど。おそるおそる羽飛の方を覗き見ると、予想通り物凄い目で南雲を睨みつけていた。美里が立村の方に話し掛けようとしてたけど、先生の手前かシカトされちゃったみたいだった。

立村が私たちの方を振り返った。一瞬だけ両目を閉じて、こくっと頭を下げた。誰もいなかったら思いっきりどついてやりたいところだった。いったいあいつ、最後の最後で何をしくじったんだろう。唯一、ご機嫌よさげな南雲はのんびりと他の仲間連中と言葉を交わしていた。すぐ側に並んでいる羽飛が仏頂面しているだけですんでるとこみると、私たちの一夜についての話をしているわけではなさそうだった。

「よーし、全員揃ったな！ 最後の最後までお前らなんやかんややらかしてくれたなあ。まあいい、最後はきっちり締めるぞ、いいか、みなさん、どうもありがとうございましたってでかい声で言え、いいな！」

菱本先生は実に平和な人だと、つくづく私は思った。

最後の最後まで、ほんと、何が起こるかわからないって、私たちの方だってば。

これできっちり、どうやって締めれっていうの。

バスから降りてすぐ、南雲は僕の隣に立ち、囁いた。

「ということで、罰そうじ当番のことなんだけど、相談したいんだけど、いいかな？」

なにがいいかな、なんだ。僕が逆らえないのを知ってか。

空は気持ちよく澄んでいて。真夜中の雨がすっきり上がって、いかにも南雲に相応しい空の色をしている。風もほとんどない。この調子だと酔わないですみそうだとほっとしていた矢先のことだった。どうせ船に乗ったらすぐに寝るなり甲板に出るなりして気を紛らわそうと思っていたのにだ。なんで僕をそう、船酔いさせようとするんだろう。

南雲もそうだし、羽飛も、古川さんも、そして清坂氏も。

今回の旅行で一番の驚きは、本当だったら僕が一度も乗り物酔いしなかったことにつきはずだったのだ。自分でも驚いていたんだから。いろんなことがあったけど、とりあえずは無事に片付いてほっとしていたのにだ。最後の最後に、よりによってだ。

「りっちゃん、目が死んでるよ、どうした？」

どこかでこの表情、見たことがあるような気がする。

僕はその人の名を混ぜて、南雲に答えた。

「本条先輩と同じ顔、するなよな」

やっぱりなぐちゃんは、本条先輩と同じ顔をしたまま、含み笑いを洩らした。

A組から船のタラップを進んでいった。銀紙を大量に海へ放り込んだような重たい青色が、海いっぱい広がっていた。いくら凪いでいるとはいえ、やはり波間は揺れている。あえて見ないようにしようとしたけれども、どうしても目に入る。こういうのが弱い。すぐに胸にむっときてしまう。

「りっちゃん、どうしたのかな。顔色悪いよ」

「もともとそうなんだからしょうがないだろ」

「だから、乗ったらすぐに甲板に出ようよ。それの方がりっちゃんも、いいだろ？」

本当だったら僕は、そこで評議委員男子のみ集まって、最後の相談をするつもりだった。本条先輩からももらったノートにもそのあたりは詳しく説明されている。「どうせ旅行次の日は死んだように寝るか、一日中布団に潜ってストレス解消に励んでいるかのどちらに決まっている。やるべきこと片付けるべきことなどがある場合は、旅行中に目処をつけておくこと。どんなに前日、寝不足でもやっておくべきだ」とのことだ。全くその通りだと思って、集合かけておくつもりだったのにだ。最初に南雲の予定が入ってしまうと、もう身動き取れなくなる。

「そういえばさあ、俺もあまりりっちゃんと、この旅行中、話、しなかったもんなあ」

一応南雲とは三日目夜だけ、同じ部屋で寝泊りしたはずなのだ。しかしいろいろな事情があったらしく、その夜僕は一度も話をしないままに終わった。早い話、僕は霧島さんがらみの一件で疲れていたし、南雲は奈良岡さんのことでいろいろトラブルに巻き込まれていたらしいし。何が起こったのか、本当はD組評議委員として知っておきたいことだけれども、急ぐつもりはなか

った。

「一時間じっくり、語ろうねえ、よろしく」

僕は返事をせずに塩分濃い空気を吸い込んだ。船に近づくにつれ、その匂いはガソリンだか油だかわからない、むかむかするものになる。なんだか南雲に聞かれそうなことを考えるだけで、めまいがしそうだった。背中に感じる羽飛・古川・清坂三人の視線もなんとなく、痛かった。

——どうやって、ごまかせていうんだろう？

「じゃあなあ、お前ら、さっさと寝ろよ！ どうせ昨日は寝てないんだろうが！ さあ、ほらほら一番眠そうな羽飛、その辺でどざえもんになってろ。それと、ほらほらその女子たちも、目の下に隈じゃあせっかくの美人も台無しだ。早く座れ。おい、南雲、立村、どうした」

ークラススペースという感じで、六等分の座敷が用意されている。もちろん二等客室だから贅沢なことはいえない。通路を挟んで三列にスペースが用意されていて、真ん中で荷物置き用の棚が備え付けられている。その中には合皮の四角い枕がたくさん詰め込まれている。自分のクラススペースについての連中はさっさと枕をひったくり、角に積み込まれた毛布を抱え、ごろんとひっくり返っている。みな、昨日は寝てないんだろう。僕だって本当だったらそうしたいが、目の前に天敵がいて顔を見下ろされ、下手したら寝顔を撮られる可能性のことを考えたらそんなことできるわけがない。ここで寝るなんて、絶対ありえないのだ。

「すみません、先生、ちょっと立村と、語り合いたいことがあるんで、甲板行ってまあす」

間の抜けた声だが、それでもさっと答えるものだから、南雲の本心を誰も気付きはしない。

これから僕は南雲から何を聞かれるのか、何を言われるのか、どういう判決を下されるのか。

心配そうに見るのは一人だけ、清坂氏だった。僕の方を何か物言いたげに見つめるのだけれども、しゃべったら最後危険なものだから僕も無視するしかなくて申しわけなかった。古川さんは物凄い眼差しで僕を睨んでいる。きっと怒ってるんだろうな。僕がよりによってしくじったそのわけ、知りたがってるんだろうな。羽飛は僕よりも南雲の方ばかり睨んでいる。きっと旅行終わったらまた騒動が起こりそうだ。羽飛と南雲は天敵だからな。へたしたら僕と菱本先生よりも険悪かもしれない。

そうだ、だから僕しかいないというわけだ。

あのことを、うまく納めるためには、僕がなんとかしなくてはならないというわけだ。

「お前らも元気だなあ。立村、お前のことだ、さっさと寝てたんじゃないのか？ 羽飛も寂しい夜だったろうなあ。こういう時こそ友情を語り合うとかだなあ……」

「そんなのいらねえって」

吐き捨てるように言う羽飛。まさにその通り。友情語り合うなんて暇がなかったんだ。しょうがない。枕を器用に両足裏で持ち上げて、サーカスの玉転がしみたいなことをやっている。当然、落ちる。近くにいた連中のうち誰かにぶつかり響きかう。

「じゃあ俺は、これから立村と一緒に友情語りあってきますんで」

「おお、それもよいぞ。ほら立村、お前ももう少し、南雲に感謝しろ！」

この担任と僕とは、地球滅亡の日がやってくるまで、きっと天敵状態変わらないだろう。

明白なるその事実を心に刻み、僕は一礼し、南雲の後ろについていった。悪いが羽飛たちの姿を見ると船酔い状態に陥る可能性大なので、目をそらさせていただいた。

甲板に出ると、すでに他クラスの人たちが数人固まって水平線の向こうを眺めていた。さっき船出したばかりの陸地に向かい、なぜか手を振っている男子がいる。いきなりハーモニカを片手に「ドナドナ」を吹いている奴もいる。男女、仲良く記念撮影としゃれこんでいるカップルもいる。人それぞれだ。時折拭いてくるしぶき交じりの風に顔を向け、僕は南雲の言葉を待った。横顔をさりげなく覗き込んだ。

たぶん、だけど、ご機嫌は悪くないと思う。

僕はまだ、南雲が本気で怒鳴ったりわめいたりしたところを見たことがない。もちろん羽飛相手にあわや、一騒動か、そう感じて割り込んだこともあるけれど、大抵の場合南雲の表情は静かなままだった。基本として愛想は決して悪くないし、だからこそ女子からの人気もうなぎのぼりなのだろう。自然、さらりと、明るい。僕には真似の出来ない笑顔。そういう南雲だったから、昨日の朝に見せたむっつり顔には少々心ざわめくものがあった。見たことのない南雲の表情、というのは僕が感じただけではないのではと思う。南雲と仲のいい他の男子もかなり驚いていた。もっとも南雲の性格上、不機嫌を一日持たせるといのはまずありえないだろう。奈良岡さんとどうい事件に巻き込まれたのかは聞かないけれども、その関係の八つ当たりというのではなさそう。

どうせ向こうから何か言ってくるだろう。僕は白いペンキのはがれかけた壁にもたれ、水色の山々を眺めた。すうっとかすかに浮かんでいる、淡い景色だった。

「りっちゃん、朝のシャワーはどうだった？」

とうとうひとこと、すかっとした笑顔と一緒に南雲は僕の方に問い掛けた。

「寝癖直し、結構使えただろ？」

——ああ使えたさ、完璧に頭のはねきったところが直ったよ。

いまいまくも、結局は僕の失敗なんだから、言い返すことができなかった。

「青湯についたら返す、ありがとう」

もうなんとでも言え、僕はできるだけ無感情になるよう返事した。

「けど、やっぱりどんな時でも清潔さを守るってところが、りっちゃんの性格だよなあ」

しょうがないだろうと言いたいが、これもいろいろと誤解を招くので口を閉ざす。どう思っているのかわからないけれども、南雲は楽しげに語りつづける。

「ひとつ、聞いていいかな？」

「答えられることと答えられないことがあるけど、それでいいなら」

「じゃあ聞くけど」

周りには他の男子女子誰もいない。下の機関室らしきところからごりごりと響いてくるうるさい音に負けないように、南雲ははっきりと尋ねてきた。聞かれたらどうするって文句も言えやしない。

「シャワー浴びなくちゃいけないようなこと、したの？」

答えだけだったら簡単だ。南雲の想像しているようなこと、しているわけじゃないか。そのくらいはわかる。だけど、「じゃあなんで、シャワーをわざわざ浴びたわけ？」とたずね返されるともっと困る。だから僕は黙るしかない。うつむいて返事を選ぶしかない。

「あと、今のうちに言っとくけど、たぶんあのこと、俺以外にはばれてないと思うよ。保証はできないけど」

だから保証できないからあぶないんじゃないか。なによりも南雲、どこまで僕たち四人の事情を知っているのか、本当はそここのところを知りたい。今ここで南雲の側にいるのも、僕なりに状況を把握したいからだ。果たして古川さんが男子部屋からうまく脱出したことを知っているのか、それとも単純に僕が清坂氏の部屋にもぐりこんでいることに気がついたのか、その辺もよくわからない。聞きたいが、まずは南雲の質問に答えないと前に進めないだろう。

「最初の質問の答えだけど、してない」

目を向けず、単純な答えを返した。

「もったいない」

南雲の反応は僕の読みと違っていた。

「いや、別にいいんだけど、りっちゃん本当に、してなかったわけか？」

「あたりまえだろ。俺だって退学になりたくない」

「じゃあなんで？」

シャワーを浴びていたことだろうか、それとも僕が清坂氏の部屋に潜っていたことだろうか。

それによって答えは大きく変わる。いつもだったら「たかが女子の部屋で話をしていただけだっただけなのに、なんでそんな妙なこと考えなくちゃならないんだ？」と言い返していただろう。説得力なくても、それなりに口にしたらさう。できなくなったから、シャワーだったんだとは、今の僕に言えるわけがない。

「俺だったら絶対、逃さないけどなあ」

「そういう問題じゃないだろ」

南雲が何を聞きたいのかがだんだんつかめなくなってきた。南雲の性格上、僕を脅して何かの利益を得ようというところはないだろう。そんなに僕も使える人材じゃない。評議委員会と規律委員会の繋がりも取り立てて問題のあるところはない。唯一ひっかかりがあるとすれば、羽飛との天敵関係くらいだろうが、まさか僕を通してそういうつつこみをするとも思えない。単純に、「したの？してないの？ だったらどんなことしたの？」という問いだけでいいんだろうか。

「じゃあ、証拠を拝見」

「なんだよ証拠って！」

「変なところ見たりしないから安心しろよ、りっちゃん。ほら、こういう時に使うものってあるだろ？ それ使ってなんてないよなあ」

わざと手もみして笑顔で尋ねる南雲、こいつ、敵に回したら絶対怖いぞ。今後、規律委員会がらみでトラブルがあった場合は新井林たちにきつく言っておこう。僕ならもう、逆らえない。

「……わかった、見せればいいんだろ」

一応は「男子のたしなみ」……体育の先生がそんなこと言って配ってたがどんなもんだろう…
…として、生徒手帳には挟んでおいている。もちろん中身が何か見えないように、薄い和紙でく
るんで扉のカバー脇に押し込んでいる。大抵他の連中も同じことしているはずだ。去年の夏段階
ですでに、実用品扱いで持ち歩いている南雲とは違う。

生徒手帳をそのまま抜き出し、渡す。

受取る南雲は勝手知ったかのように扉を開き、溜息をつく。外したか、とでも言いたいのか。
「りっちゃん、あのさ」

少しだけ日焼けしたような南雲の顔には、相変わらずさらっとした笑みが浮かんでいた。

「これはまずいよ。肝心要の時に使えないじゃん」

「使うもなにも」

「学校でよっぽどのことがないと使うことないだろ。こういう時はだいたいさ、ズボンのポケッ
トに入れておくとかさ、専用のケース使うとか、そちらの方がいいと思うなあ」

いったい何を言い出すんだ、こいつは。なぐちゃん、本当に何を僕にしたいんだ。

「それに一番の問題はさ、こうやって持ち歩くと、袋が擦れるだろ。りっちゃんは紙に包んでい
るけど、やっぱりさ、肝心な時に破れてしまったら、意味ないじゃん、そういう時のために三ヶ
月に一回は交換した方がいいと思うんだ」

いったいどこで、そういう知識を身に付けたんだよなぐちゃん。羽飛たちも、天羽だって言っ
てないぞ。

ここで僕がどういう反応しめせば満足なんだろう。

「ま、だいたいのところはわかった。じゃあさあ、せっかくだし、もう少し詳しい事情を教えて
ほしいんだけどさ」

完全にまずい状況に陥ったような気がした。なんとか雰囲気変えて話を逸らしたいのに、でき
そうにない。かといって僕なりにどうすればいいのかわからないのもまた事実だ。南雲の表情に
は悪意なんてひとつも感じられないし、たぶん僕ひとりのことだったら素直に白状して反省する
だけだろうし。でも、今回のことは他の人間が絡んでいる。女子もいる。南雲を信用しないわけ
ではないけれども、羽飛との以前から絡んでいる問題なども考えると、そう簡単に口を開くわ
けにはいかない、そういう気もする。

どうしようか。深呼吸した。ゆっくり吐き出し、南雲をもう一度見た。

「事情聞いてどうする？」

「いや、俺だけの楽しみにしたいかなあと。ほら、修学旅行中いろいろあったからさ、ひとつく
らい他人の話を着に盛り上げるのも乙なものかなと思っただけであって」

もし天羽の言葉だったら、「ふざけるな！」くらい言えるだろうが、南雲に対してはそれがで
きないのが不思議だ。

「自分のことを棚に上げてかよ」

「それはお互い様、そうかあ、じゃあさ、こうしよう」

別に頼んでもいないのに、南雲は自分の後ろ髪を軽くかき混ぜるようにして、空の鳥を目で追
いながら、

「俺の質問に答えられるとこだけでいいからさ、穴埋めをよろしく。そのくらいならば、いいだろ？ イエスノーだけでいいからさ」

なんでそんなに執拗に知りたがるんだか、僕には理解できない。規律委員長としての制裁を下したいのか、それとも羽飛の弱みを知りたいのか、それとも。

「わかった、そんな中途半端なことするくらいなら、俺から話すよ。けどひとつだけ条件あるんだ」

「なにになに？」

疑ってるなんて思われないうらさうか。だんだんべとついてきた髪の毛と服の感触が気持ち悪かった。危うく胸がむかつきそうになる。まずい、酔う前兆だ。しかたない、しゃべって自分の気をそらすしかない。

「このことは俺ひとりが悪いんであって、他の奴は関係ないんだ。だから、関係した人たちにはこのことで一切、話を振らないでほしいんだ。あとはほんとに、全部白状する」

「そうか、かばうときたか」

「そういうわけじゃないけどさ。ただ、このことは全部俺の責任だし、それでまた、誰か、退学になったりしたらいやだから」

なんだか南雲の表情がまぬけっぽく見えたかと思いきや、すぐにきりりと引き締まった。

「いいよ、りっちゃん、まずは俺に、ざんげしなさいや」

相変わらず、悪意なき笑みのまんまだった。横目で他に人がいないことを確かめると、僕は「人生において最大」の恥さらしを語ることにした。いや、別に南雲との間には何もなかったんだから、恥かしがることは一つもない。ただ、僕個人においてはすべてを白状するなんてことは、全くもって自分のプライドをずたずたにするしかないことでもある。

もう二度と、旅行前に持っていた自分の像と重ならないことを覚悟して。

菱本先生の各部屋訪問でねちねちしたいやみを言われ続けて僕が頭にきたことについてはあっさりと流した。南雲も僕が以前から菱本先生との間に不協和音を鳴らしまくっているのは知っている。羽飛と古川さんが同じ部屋で一晩過ごしたのも飛ばした。要するに僕ひとりのネタにすればいいわけだ。

「だから、本当はすぐに向こうへ話をして、それから部屋に戻るつもりだったんだ。けど、タイミングがずれて、いろいろ話しているうちに、眠くなってさっさと寝てさ」

このあたりもあまり深くつっこまれたくない部分だったので飛ばしたかったが、規律委員長はさすがに鋭い。「ストップ」と軽く合いの手を入れた。

「本当に、寝ること、できたのかなあ、りっちゃん」

「寝たにきまってるよ」

このあたりはごまかしだけれど、見られたわけじゃないからいいのだ。

「だってさあ、仮にも自分の彼女がだよ、隣にいるんだよ」

「いたって関係ないよ」

嘘つけ、結局ずっと、呼吸ひとつにしても布団の擦れる寝返りらしい音にしても、びくびくし

てたのはどこのどいつなんだって自分に言いたい。幸い誰にも気付かれていないはずだ。

南雲は話をさらにひっぱる。

「俺もまさかなあとは思ったんだ。朝いきなり、りっちゃんの部屋から古川さんが出てきた時にはさ、それもものすごいスピードで駆け抜けてったんだからさ。何かあるぞと思わずにはいられないよな。あのホテル、内側ロック形式だったから中に入ってない限り、開かないだろ？」

そうか、だんだん事の発端が見えてきた。すなわち古川さんが僕から「女子全員脱出完了」の合図、ベル二回、鳴らした段階でまだ男子は部屋から全員出ていなかったってわけだ。でも他の男子には気づかれていないはずだ。南雲ひとり、どうして気づいたのか、その辺がわからない。

「一応、これでも規律委員だからさ、部屋の点検とかなんとかしたほういいかなってのもあったのと、まあ白状するとひとりですらいろいろと片付けたいものもあったりしてさ、たとえばあの写真とか」

なんもいやらしさのない笑顔で言われると、僕も何も言えない。

「りっちゃん、ちゃんとあれ、処分した？ ほらあのきれいなおねーさんの写真」

捨てるタイミングを失ってしまったとは言えない。

「まあいろいろとばたばたやってたわけっすよ。髪の毛もまとまらなかったしさ」

またここでもこっと笑うのはなぜなんだ。

「そろそろ出ようかなと思っていたらいきなり古川さんの大移動じゃないですか。俺も変だなあと思ったんだけどさ、なんとなくひらめくものがあったさ」

いや、違う。たぶんだけど南雲はきっと早い段階で気づいているんじゃないか。なんとなくそういう気がしてならない。僕は黙っていた。風がさらに水っぽく触れた。

「だから四階まで行ってみたってわけ。いや、ほんとこれ直感。まさか俺だって、りっちゃんが髪の毛ぬらしてさ、せっけんの香りに包まれて現れるとは思ってなかったしさ」

最大の失策かつどうしようもないボケと言われてもしかたあるまい。

「なんで朝っぱらからシャワー浴びるのかなとも思ったけど、それが必要なことしたあとだったならしょうがないかなと思うわけであって。ただ、なんかなあ、もしこれみたのが本条先輩だったらどういうこと言ってるかな、とふと思ったんだ」

——本条先輩？

ずきり、と刺さる名前。結局僕は本条先輩の指示通りに動けずしくじりまくった奴だ。目に塩水が入ったのだろうか。ちくちくとまぶたが痛くなる。

「俺、本条先輩にも言われてたんだ、りっちゃんのことよろしくってさ、だから、かなあ」

ここまで南雲はよどみなく、にこにこしたまま続けた。たぶんあいつの顔だけ見ていたら、こんな鋭いことを口走ってるなんて思いもしないだろう。南雲だってきっと僕に、とどめを刺しているなんてこと、気づいていないのかもしれない。いや、確信犯なのかもしれない。先生に言いつけるとかそういう低次元のところでないところが怖いのだ。南雲という奴は。本条先輩の名を出されると、今だに心の奥底で骨抜きになる自分がある。それを知られているのはきっと、南雲だけなのだろう。「南雲のことをこれからは頼れ」と本条先輩にも「遺言」されたし、実際南雲は本条先輩からも高く評価されているのだ。たぶん、誰よりも上。

だからこそ落ち込んでしまう。僕はやっぱり弱いのかと。

どんなに完璧に後片付けしようとしても、結局は本条先輩、南雲によって面倒を見られてしまう自分のふがいなさ。情けないったらない。もしももう少し自分が完璧だったなら、うまく切り上げられたことだってあるはずなのにだ。どうして南雲や羽飛や古川さんのように、何もなかったようにできなかったんだろう。

「じゃあもっかい最初の質問に戻るけど」

返事をせずに僕は空を見上げた。

「今、すごくストレスたまってる？」

「え？」

「だから、何もなかったんだったらさ」

このあたりの答えは難しい。「たまっている」と答えれば今の段階でもうがまんの限界だと思われるだろうし、「たまってる」と言ったら嘘つきだと思われるだろう。実際、僕も朝が来た時は本当にどうしようかと思うくらいだったなんて、言えっていうんだろうか。

「だからさ、シャワー浴びたくなるのもそりゃあ当然だなんて思っただけ。俺もそうしたらどうし。ちなみに彼女が出て行った後だろ」

全くもってその通りだ。嘘をついてもしょうがないので頷いた。

「そっか、以上大体わかりました」

なにがわかったんだか。南雲が僕に何を聞きたいのか、何を知りたがっているのかがよくつかめないまま、僕はぼんやりと細長い雲を目で追った。しょうがないじゃないか。本能を爆発させたままで下に降りていくわけいかなと思っただけなのに、なんでそうもねちねち言われるんだかわからない。

南雲はしばらく僕の方を横目で見ただけで、同じ方向を眺めるようにした。遠くの水平線に小さな白い船体らしきものが浮かんでいた。少し揺れが大きくなったような気がしたけど、まだ吐き気とかはしなかった。たぶん酔っていないんだ。きっと。

清坂氏が目を覚ます前に本当はトイレを済ませたり身支度したかった。でもよく考えれば服も荷物も全部、三階に置きっぱなしだったってわけだ。朝一番で古川さんの「荷物を交換して持ってきて、遅刻ぎりぎりですべてから脱出する」という案を勧められ即飛びついたのは、これ以上いい方法なんて見つからないと思ったからだった。

実際、古川さんは今のところ南雲以外には気づかれていない。完璧な案だったはずだ。

「あのさりっちゃん、ひとつ聞いていい？」

「なんでもどうぞ」

どうでもいい、と思いながら僕はあっさりとした。答えた。

「女子ってさ、どうなんだろう？ 朝、目覚めた時、何するのかわかるか？」

「顔洗ったりするんじゃないのか、あと着替えしたり」

今朝はたしかそうだった。清坂氏は僕がずっとベッドに顔まで潜らせて寝ているあいだ、バスルームに籠っていた。テレビの音と換気音をうるさくさせながら。

「やっぱり、おめかしは、最優先なんだなあ、わかる、わかる」

「けどシャワーは浴びてなかったよ」

「必要ないからなあ」

「そうかあ、衣擦れの音とかも響くわけなんだなあ。それはつらいよな」

つらいついてなにがだ、そう言い返そうとして僕は息を呑んだ。これ以上嘘をつけない。

「ああ、そうだよ、よくわかるよな」

なんで「先に立村くん、顔洗ったりしないの？」と聞かれた時に「いいよ、清坂氏が先で」と答えたのは身体がどうしようもなかったからだなんて言えるわけない。一晩寝て少しはおさまるかと思ったのに全く落ち着きやしない。自分のあさましさに腹が立つけど、こういう時どうすれば一番いいかだけは知っているから、まずは清坂氏がなくなった後にすべて片をつけようと思っていた。

「そうかそうか、じゃあすなわち、りっちゃんも彼女がいなくなった後に、着替えなりシャワーなり浴びたってわけっすね」

「そこまでわかればいいだろ」

そうだよ、どうせそういうことだ。トイレの中でするべきことをして、僕のいた形跡をすべて消して、髪の毛も全部拾って、全部着換えてとにかく身体の芯を落ち着かせようとした、ただそれだけのことだって。そういうことを一切考えないですむ僕だったらどんなに楽だったか、つくづく思ったなんて言えるものか。たとえ、南雲にだって。

「りっちゃん、よくわかりました。ほんと、よくこらえたなあ」

悪意はない、とわかる笑い声を立てた。

けど馬鹿にされているって感じるのもまた事実だ。

「それなら聞くけど、なぐちゃん」

一矢報いてやりたかった。

「お前、経験したことあるのかよ」

南雲は真顔に戻った。明らかに「なぜそんなことを聞く？」と言いたそうな顔だった。

「けいけん、って、すなわちりっちゃん、いわゆるそのあのそれですか？」 全く持って冷静沈着なんだかなんなんだか。すぐに元に口許を戻した後、

「いや、チャンスがあればそりゃあ、なあ。でも世の中なかなかそううまくいくものじゃないよ、りっちゃんみたいに」

「俺は至りつくせりのチャンスがあってもできない奴なんだよ、悪かったか！」

南雲に八つ当たりしてどうするっていうのか。冷静に戻れと叱る自分があるのに、それが押えきれない。目の前の南雲は少しびっくりした顔をしたまま僕を見つめていた。困ったように後ろ髪をかきながら、

「りっちゃん、あのさ、あの、ひとつ誤解しないでほしいんだけどなあ」

僕がやっぱりガキなんだってことを思わせるひとことを続けた。

「俺、ちょっとだけりっちゃんをからかいたかっただけ、って前もって説明しなかったのが、間

違いだったかなあ」

——そんなの気づくかよ！

本条先輩と同じだ。結局僕は、いつまでたっても誰かの弟分なんだ。

ばつが悪くてもう南雲の顔を見てられなかった。僕は壁にもたれたまま、ずっと進行方向の海を眺めていた。うっすらと水色のかすれた山がちらついている。旅行の終りも近いつてことだろうか。いろんなことがありすぎて、そのうち九割は絶対に文集の作文になんて書けなくて、しかもその半分は墓場まで持っていかなくてはいけない秘密ばかりだ。何が起こるかわからない修学旅行、と本条先輩はいつか話してくれていた。でも、僕の中からあふれ出る未知の感情は、自分で制御することができなくて、こぼしてしまうはめになる。

——なにが、評議委員長だよな。

「りっちゃん、もういいかげん、ご機嫌よかですか？」

どこの方言か知らないが、南雲は優しく声をかけてくる。幼稚園児に話し掛けるような感じだった。どうせそうだろう、僕の面倒を見るようにと本条先輩から頼まれたそうだしな。

「もう頼むから、ほら、許して、ほら」

「怒ってないからもういい」

そっと横目で睨んだ後、僕なりに返事した。

「どうせ本条先輩に報告するんだろう」

南雲は答えなかった。吐息だけ聞こえた。隣の壁に僕と同じく背もたれしたまま、どこか海を眺めているんだらうということだけはわかった。動く気もないのだということも。

——なりたいものになれない、理想の自分になれない。

本条先輩にはなれない。それは早い段階で割り切っていたけれど、修学旅行のような場所ではやはり、本条先輩の持つ能力が欲しくてならなかった。男女問わずどんどんひっぱっていき、さらに表裏同時に物事を動かすことができ、チャンスがあればどういふものであってもしっかりつかんで本懐を遂げる。そういう評議委員長だったらと思う。

今隣にいる南雲も、A組評議の天羽も、僕が欲しくてならないものをすべて備えている。

たぶん南雲や天羽だったら、好きな女子と同じ部屋の中にいたら、必ず何かをしていたことだろう。僕のように情けない声だして「手首縛ってくれないか」なんて言うことは決してないだろう。清坂氏へもきちんと、納得させるまで話をしようとしただろう。僕みたいにいいかげんな形でもって物事を終わらせることはなかつただろう。本条先輩だったら絶対そうしてたはずだ。

何にもできない、周りに守られている自分。弱弱しい、みっともない自分。

「そうだ、りっちゃん、昨日さあ、売店で買物してただろ？ 結構大きい鏡、あれ、誰かのプレゼント？」

自己嫌悪に浸る時間を南雲はすぐに邪魔してくる。ぱたと思考が止まると同時に、思い出した。

「そう」

「誰の？」

「後輩の」

「ふうん」

誰のだよ、とは聞いてこなかった。

「俺もさ、買っちゃったんだよねえ」

はは、と声をあげて笑った後、南雲はポケットから赤い印鑑のようなものを取り出した。水玉模様の小さなビニールに入っている、赤いもの。

印鑑ではなく口紅ケースだと気づいたのは、僕の母親が使っているのと同じものだったからだ。

「おい、これって」

「そ、リップクリーム。やっぱり一番身近に置いてほしいものをあげたいもんじゃあないですか」

口紅ということは、まず女子へのみやげであることは確かだろう。同時に、南雲が買ってあげたいと思う相手といえば、ふたりしかいないだろう。こいつの最愛なるおばあさんと、もうひとり。

「あのおばあさんじゃあないよな」

細いながらも可能性のある方の糸を切る。

「じゃあもうひとりの」

「大当たり。やっぱりさ、いつでも使ってもらえるものが一番かなあと思ったわけだけど、りっちゃんの見せてくれたと思った」

なにが負けた、なんだろう。杉本への土産だとは、一緒に買った西月さんと昨日の夜話した清坂氏しか知らないはずだ。同時に南雲は、杉本への土産だということを知らないはずだ。ただ後輩に渡したいものだから、使ってもらえるもののほうがいだろう、と判断して買っただけのものなのに、また何か想像しているんだろうか。

「鏡だったら、割ったりしない限り、ずっと使ってもらえるもんなあ。俺もそっちにすればよかったって思ったけど、まあいっかってとこでさ」

いや、リップクリームって唇に触れるものだろう。思わずまた身体がぞくりとする。

「これからまだまだ先かもしれないけど、いつか使用させていただくために、ですね」

こうやって聞くと南雲は、かなり際どい発言をしているんでないだろうか。そのリップクリームを使っただき、唇を保護してもらい、その唇をいつかはわがものに……そういう発想に行き着いてしまい、また天を見上げたくなった。やわらかいんだろう、食べたくなるんだろう。そうしたらためらうことなく身体が動くんだろう、僕のようにびくびくすることなく、堂々と。またいじけた気持ちが生まれてくる。また女々しいって言われそう。

「りっちゃん、あの鏡なんだけど、どうして買おうって思ったわけ？」

また話し掛けられた。どうせ南雲は渡す相手のことをほとんど知らないんだから、本当のことを話したって構わない。横を向いたまま素直に答えることにした。

「買おうと思った相手ひとりしかいなかったから」

「へ？」

言葉を節約しすぎただろうか。まずうちの父さんに買ったってなんの意味もない。お付き合い上、うちの母さんとその関係……いわゆる日本伝統芸能関連の人たち……に渡すためせんべいを三箱、あとは後輩の評議委員たちへ、三年評議全員がお金を出し合って買うのが一箱。これは清坂氏にまかせてある。あと渡す相手といったら、評議から外れてしまい、評議委員に行くはずのお菓子が回らないであろう杉本しかいない。さらに言うなら杉本の味好みは僕と非常に似ている。すなわち、美味しいものは美味しいけれどもまずいものはまずい、下品なものは嫌い、といったきわめてお高い性格と味覚だ。それをものさしにして考えると、旅館の売店で売っているお菓子はどれも不合格ということになる。本当だったら自由時間中に探そうと思っていたけれども、いろいろなアクシデントが重なってそれもできなかった。他の女子たちに頼むのも考えたけれども、すでに杉本は評議から外れている以上、あまり巻き込むのもなんだろう。唯一、杉本の面倒を見てくれている西月さんとだったらそれほど変にも思われないうし、お菓子以外のもので、となると鏡しか思いつかなかったというそれだけだ。意味なんてない。

「清坂さんには？ 買ってやろうとか思わなかったわけか？」

「だって一緒に旅行している相手になんで？」

「だって俺、帰る前からこれ買ったよ」

南雲も言葉を略しすぎる。補うと、つまり南雲は奈良岡さんが三日目の夜にひとりだけ帰る前に、「奈良岡さんのため」にプレゼント用として、物を買ったというわけか。けど旅行中に買ったもの渡したってどうするって気もする。要は南雲、なにかかしら理由つけて奈良岡さんへリップクリームをプレゼントしたかっただけなんじゃないだろうか。僕にはそう思えてならない。

「旅行してもしなくても同じだろ、買うのは」

「身もふたもない言い方しますなあ、りっちゃんは」

僕が杉本に買おうと思ったのは単純に、「評議委員会」のからみで渡せないと思ったからというそれだけだ。南雲とは違う。

「りっちゃん、あのさ、どうしようもなく、プレゼントしたいとか、そう思ったことって今までないんか？ ねだられたとか、頼まれたとか、そういうんでなくてさ。こちらからこれをプレゼントしたい！ どうかもらってくれ！とかいうような感じでさ」

「渡したことはあるよ」

一応、つきあっている以上はバレンタインデー、およびホワイトデーのやり取りはしている。もらい物にはきちんとお返しをするのが礼儀だろう。

「いや、りっちゃん、バレンタインデーは違うよ。俺も毎年もらって返したりするけど、あれは一種の『おつきあい』だろ。俺が言うのは、そういう義理のおつきあいではなくて、腹の奥からぐぐっと、渡したい、やりたい、抱き締めたい、っていうもの、そういう気、ねえの？」

「ないよ」

あっさり答えた。真夜中に身体の方が一方的に求め出すというのはまあ、もちろん、ないとは言わないけれども、南雲が言うのはそういうことじゃないだろう。もちろん清坂氏にプレゼントを渡したことがないとは言わない。去年のクリスマスにはちりめんのふくさを買って渡したことがある。あれは義理じゃないが、そんな激しく燃えたわけでもない。

「そうか、けどさ、りっちゃん」

波が少し大きく膨らんだ。揺れたけど気分悪くないのは話しつつづけているからか。

「とりたててあげる必要のない人に、あげたくなったら、それはやっぱし、そういう気持ちだと思うんだけどな。りっちゃん、たぶん自分で気がついていないと思うけど」

言葉を切った。僕が南雲の方を見るのを待っているような気がして、仕方なく首を元に戻した。

「りっちゃんが無意識のところで、他の奴のこと一生懸命かばったり守ったりしているところ、俺しょっちゅう見てるんだよな。ほら、さっきの鏡の相手みたいにさ」

だからその相手が誰だか知らないからそういうことがいえるのだろう。

「俺、あまりうまく言えないけどさ、他の奴はみんな認めてるんだよ」

「まさかだろ」

ちゃかしたくて、吐き出すように呟いた。南雲の言葉遣いは変わらなかった。やわらかかった。

「りっちゃんが他の評議の人のために一生懸命動いてるところとかさ、ほら、今みたいにさ、昨日の夜のこと誰にも言うなって言ったりさ、そういうの見てるんだもん、りっちゃんが一生懸命にやってくれてるってことがさあ、俺には丸見え。しゃべってることよか、ずっとわかりやすいもん」

僕が返事をしなかったので、南雲はさらに続けた。

「去年の夏にさ、りっちゃん言ったよな。恋愛感情感じないことって異常なのとかなんとかさ。あれ、りっちゃんは大したことないと思って言ったのかもしれないけど、俺もちょっと気になってさ。けど一年たって見て気づいたんだけど、好きとか嫌いとかそういう前に、身体で示してるなって思うようになったんだ。恋愛感情持ってるかどうか別にして」

「身体で示してるって？」

どきんとする。また身体の変化とかそういうものを、気づかれてるなんてことないのか？ 学校ではできるだけ、そういう状態に陥らないよう気をつけてはいるんだが。

「ほら、水口いるだろ。あいつ、三年になってからさかりついた猫状態にやあらしいことばかりわめいてるだろ？」

ごもつとも。水口のエロ用語連呼については僕も頭が痛い。誰かなんとかなだめてくれと言いたい。南雲も同じなんだろう、きっとそうなんだろう。

「けど、面白いことにさ、彰子さんには別なんだよな。目の前で一生懸命スケベな三文字叫んだり、いろいろ卑猥なこと言ったりしてるくせに彰子さんのためには、動いちゃうんだよなあ」

「動くって何をさ」

さびついた直感アンテナに電波が入る。奈良岡さんが帰った理由に繋がっているかもしれない。僕は言葉を選ぶことにした。

「ほら、動くというか、なんというか。あのすい君がだよ。一生懸命に自分のうちに電話してさ、すぐに入院させて、手術してくれとか頼んでるんだよ。もうとっくに救急車で運ばれてるって聞いているのに、もう別の病院に移動されてるってのに」

「ちょっと待て、今の話、もしかして奈良岡さんの家族のことか？」

噂に肉付けした形で解釈すると、だいたい形が見えてきた。奈良岡さんは確か、家族の事情で帰ったとっていた。お父さんかお母さんが入院したという知らせという噂もあった。けれども、水口が絡んでいるなんて、それは初耳だ。南雲は言葉を切った。

「そう、だけど。まだわからない」

人のプライバシーにあまり突っ込まない方がよさそうだ。僕はこれ以上聞くのを差し控えた。「そういうこと。つまり、あのお子様すい君でも、彰子さんのためなら何とかしようって行動するってこと。それ見てたら、どういうことか誰だってわかるよな」

「……確かに」

水口が奈良岡さんのことを、本気で好いているということ。誰でもわかる方程式だった。「そういうことなんだよ。りっちゃん。今俺がすい君の話为例に出したのと同じ現象が、りっちゃんにも起こってるってわけ。みんな、りっちゃんがどう思ってるかとかどれだけ努力してるかとか、評議委員長としてどれだけ仕事してるかとか、みんなお見通しなんだよ。だから、もうこれ以上、無理しなくてもいいと思うんだ、これ俺の考えだけどね」

——みんなお見通しってか。

僕の言葉よりも、やっていること、していることか。今こうやって、南雲と話していることでもか。

「それともいっこ。念のため言っとくけど、別に今回のことで弾劾裁判やる気ないから、安心してちょうだいな」

肩をぼんぼんと叩かれた。去る気配はなかった。

しばらく何もしゃべらずにいた。なぐちゃんもあいつなりに考えたいことがあるようだし、そういうところは放っておくのがたしなみだ。最初心配していたようなことは何も起こらず、無事に青潟で解散することになるんだろう。僕の考えすぎか、とまた落ち込みたくなるのだけれども、それはなんとか我慢した。

——けど、やっぱり認められないだろう。

なぐちゃんは僕を慰めようとしてくれたのだろう。それはありがたいと思う。だけど、結局僕の欲しい評価というのは誰からも与えられていない、それも事実だ。青大附中に戻ればすぐに、水鳥中学との交流会直前準備が待っている。二年の評議たちにある程度手伝わせているのだが、状況を全部把握できないまま修学旅行に突入してしまったので、いったいどういうことになっているかわからない。また、外部の評価は僕よりも二年の新井林に流れているはずだ。一年前の本条先輩の時のように、委員長という尊敬の念なんて感じたことがない。僕はやはり、まだまだ頼りない奴なのだ。だから、だからここで。

自分でも意識していなかったもやっとしたものが、浮かび上がってきた。まるでさっき、波間から顔をだしたいるかの頭みたいに。どんなに努力しても、どんなに頑張っても、自分ひとりではなんにもできない自分がいる。精一杯考えるだけ考えても、最後の最後でしくじってしまうどうしようもない自分自身を海の中に投げ込み、いるかのえさにしてやりたかった。

「あのさ、りっちゃん」

どのくらい海を見つめていただろうか。身体がだんだん潮風で冷えてきていたけれど、船室へ入ろうとは思わなかった。ぬるぬるしたあの空気と匂いが我慢できない。あとで風邪ひいたとしても、酔ってグロッキーになるよりはましだ。僕は南雲へ顔を向けた。相変わらず、さっぱりした表情だった。腹も立てていない、クールなままだ。

「せっかくだし、ご相談なんだけど、いいかなあ」

僕の顔を見ればだいたい、いつものいじけ癖でめげていることくらいわかるだろうに。それでも全然平気な顔をして、僕に接してくれる。出来た奴だ。僕なんかよりはるかに、男だ。

「なんだよ」

下手すると涙声になりそうで、少し低めの声で答えた。

「今日さ、これから青大附中に戻るだろ？」

「そうだな、バスに乗って」

船の次は長距離バスだ。しかも途中休憩が入るとくる。着くのはたぶん、昼すぎだろう。

「その時にさ、俺、一足先に抜きたいんだよな。諸般の事情があつてさ」

「事情ってなんだよ」

突き放した言い方したつもりはないのだけど、自分でもうまく調節できない言葉の響き。なぐちゃん、いやな気分になってないかな。全然気にした風でもなく、南雲は続けた。

「たぶん、全員整列して、先生の挨拶やって、それから解散になるだろ？俺、できればそれも無視してさっさと脱出したいんだ。みんなくたびれ果てて、俺がいよいよがまいがどうでもよくなると思うんだけど、羽飛あたりがぎゃあぎゃあ言わねえかな、とかそのあたりが少々心配だったんだ」

「どうしてそんな早く帰りたい……？」

返事はない。僕はもう一度南雲の顔を見上げた。奴の手元には、ビニールに包まれたリップクリームがしっかりと握られていた。目に入っているのに、どうして僕は気づかなかつたんだろう。そうだ、きっとそれしかない。

「奈良岡さんここに、行くのか？」

理由は聞かなかつた。たぶん、南雲しか知る必要がない内容だろう。

僕は部外者だ。南雲以上に詳しい事情を掘り起こす必要はない。だいたいの情報は耳にしているし、もし家族の大病とかそういう問題だとしたらなおさら、余計な噂で奈良岡さんを傷つけるようなことをしてはならない。

「うん、すぐにさ」

「行って、いいのか？」

家族の事故か病気かわからないが、「水口病院」の長男が懸命に奈良岡さんの家族を入院させたがっていたところみると、かなり大変な状況なんだろう。もっと南雲から深い事情を聞き出せば、いろいろわかるかもしれないし、話してくれるんじゃないかとも思う。でも僕にはそれができない。今、南雲ひとりの胸の中に納めているものを、引っ張り出すのは拷問だ。

だから、状況だけ僕なりに想像して尋ねた。見舞える状況なのか？と。

「わかんないけど、とにかく動かないとだめだと思うんだ。俺、頭悪いからなあ、どうしてかってわかんねえけど、とにかく、早く、行きたいだけ」

南雲はゆっくりと僕の顔を見返した。

「だからさ、今回のこと、俺は一切言うつもりないし、りっちゃんたちをつるす気もない。ただもし、俺に貸しがあるのがやだったらさ、俺が規則違反なことちょこっとやっても、大目に見てくれて羽飛たちに言うておいてくれないかなあ」

「規則違反って、しょせんエスケープするだけだろ？ 学校でだろ？」

「ほら、俺だけじゃなくてさ、すい君も同じこと考えてる可能性、大だからさあ」

前髪をかきあげ、ぶるんと振り、南雲は唇を一瞬だけへの字に曲げた。

「あいつもさ、今回の一件で、『愛』に目覚めたらしいからさ」

「『愛』？」

僕なりに推論を立てていくと、どうやら南雲とすい君との間で、奈良岡さんを巡るトラブルが起こったらしいというところにたどり着いた。非常に不機嫌だった南雲の顔からして、騒ぎが起こったのは三日目の夜あたりだろう。あの日、僕もかなりナーバスだったのでさっさと寝てしまい、南雲が戻ってきたかどうかすら気づかなかったけれども。奈良岡さんが先に帰る原因が家族の病気だったとすると、そのあたりが原因で言い合いかなにか、したというんだらうか。

いや、下種の勘ぐりだそんなことは。南雲が言いたくないなら、それ以上尋ねてはならない。

「そ、彰子さんは偉大だよ。あのがきんちょすい君をだよ、『男』にしたんだからなあ」

「『男』にした？」

僕がひとりで想像たくましくしているだけだ。すぐに頭の中のイメージを訂正した。誰もが『愛』でもって天羽みたいなことになるとは限らない。

「とにかく、一刻も早く、俺はとんずらさせていたげきたいと、そういうことなんだけど、どう、りっちゃん、受けてくれる？」

そのくらいお安い御用だ。簡単なことだ。要は羽飛に「頼むから今日のところは南雲と絡まないでくれ」と言い含めておけばいいだけのことだ。念のために清坂氏と古川さんにも、女子たちが騒がないようにしてやってくれ。とか言うておけばいい。弱み握られていて、へたしたら退学覚悟になるようなネタを黙っててくれるんだから、みな納得するに違いない。それに、素直に理由を説明してもいいじゃないか。南雲は単純に、自分の大切な人のところへ、一刻も早く駆けつけて、勇気付けたい、そう思っているだけなんだから。そういう気持ちを理解できない羽飛たちじゃない。

「俺はしくじってばかりいるから、もし、うまくいかなかったらごめん」

つい卑屈な気持ちが顔を出してしまう。

「俺もその辺はご迷惑かけないように、うまくやるつもりだから安心してちょうだいな、りっちゃん。ま、これでご破算ってことで」

南雲はそろばんをじゃらっとはじくような手まねをして、上手なウインクをひとつしてみせた。

「じゃ、俺、先に入ってるわ」

南雲が船室へ向かうと同時に、反対側からばたついた足音が聞こえた。振り向くと、羽飛と清坂氏、そして古川さんというオールメンバーが様子伺いありありの顔で、僕を見上げた。どうやら、僕と南雲が語りあっている様子をうかがっていたのだろう。たぶん、モーターや波のしぶきで会話は聞こえなかっただろうが。僕は首を振ってまずは安心させようとした。

「なんでもないよ、たぶん、大丈夫だから」

「大丈夫って、ねえ、立村くん」

不安げに清坂氏が僕へ唇を動かす。さっき南雲から「リップクリーム」のお土産について話を聞いていただけに、ついつい気になってしまう。どんな顔して塗るんだろう。

「立村、あの野郎になに脅されてたんだあ？ 言ってみろ！ 別に俺ら悪いことしてたんじゃあねえからな」

いや、同じ空間に男女ふたりきりでいたのは事実だ。それはまずい。「ったく、あんたはほんっと最後の最後までガキなんだから！ 立村、いざとなったら全部あんたが責任取りなさいよ！ ちょっと頭貸しな！」

意味がわからず頭を古川さんに近づけると、手加減なしに思い切りぼこっとやられた。かなり痛い。かなり頭にくるって、このことだ。けど先生がくるかもしれない場所で騒ぎを起こしたくない。僕はもう一度、首を振って説明することにした。

「南雲とは取引したよ。今日一日、もし南雲が何か言ったりやったりしても、俺たちは何も言わないでいる、ってことだけ。今日だけは大人しく、あいつのやりたいようにやらせてやってくれてことだけ。それさえ終われば、内緒にしてくれるって言うてるよ」

「あいつの言い分、素直に信じるのかこのぼけが！」

どうも羽飛の奴、南雲に対してだけは真っ黒い感情が煙のように立ち上ってしまうたちらしい。これはしょうがないことだとも思う。僕もそういう感情を、うちの担任へ感じているからして。

「ねえ、その、南雲くんのやりたいことってなに？」

清坂氏はあくまでも冷静に、聞きたいことを尋ねてくる。

「たいしたことじゃないよ。学校で整列している最中に、どうしても先に帰りたいから、そのところだけ見逃してくれって、それだけだよ」

ほんと、口に出してみると、それだけ、先生にばれたって困ることではなさそう。清坂氏も同じように思ったらしく、髪の毛を耳にかけるような仕種をして頷いた。「ね、貴史、よかったよね、それだけだったら大目に見てあげなよ。今日だけは！」

「あいつがそれだけで満足するかと思ってるのか？ 立村、いいかげん気づけよ。お前もし、あのことがばれたらどうするんだ？ 俺たちはいいけどな、いくらでも言い訳利くぞ、な、古川？」

「まあね、私たちはいつものことだからねえ」

誤解を招くような発言は慎んでもらった方がいいんだが、古川さん。

「けど、お前と美里はどうするんだ？ 言い訳できるのか？」

「できるに決まってるでしょ！」

噛み付くのは清坂氏だ。羽飛が別の意味で僕に尋ねていることくらい、わかっている。あいつが言っているのは、直接行動に出たかどうかじゃない。ああいう気持ちでむらむらしたかどうかだ。それ尋ねられた時、僕は素直に「違います」なんていえるだろうか。あの夜を境に僕は、清坂氏相手に絶対悪いことを想像しないという自分を否定する羽目になってしまった。また同じシチュエーションにはまったら、きっと、今度こそ、行動してしまうかもしれない。そういう自分が見えている。

「まあまあ、羽飛、いいじゃんいいじゃん、いざとなったら立村にぜーんぶ、押し付けておけばいいのよ。朝一番、美里に会いに来ただけだってことにしとけば。南雲だって立村ひとりが罪かぶることになったら、一方的にけりいれたりしないよ。私たちだけと違ってさ。そうでしょが」

古川さんは非常に正しい読みをしている。まだ後頭部が痛いんだが、この人の案なしには無事に収まらなかったのもまた確か。僕はしばらく古川さんに頭が上がらない。

「とにかく、今日のところは絶対に、南雲の行動を見て見ぬ振りしてくれ。それだけ、頼む」

僕は深く頭を下げた。同時に足元がふらついて、思わず腰くだけして羽飛にもたれた。

「おいおい、お前、甘えるのはこっちだろ、ほら、古川、こういう二人は無視していくぞ」

悪い、と謝る間もなく、僕の背中清坂氏の胸元へ押し付けられた。あ、あ、という間もなく、僕と清坂氏はへらへらしながら手を振る羽飛と古川さんを見送るだけだった。

——甘えるっていったい。

「立村くん、寝てないでしょ」

ちっとも怒らずに、清坂氏は僕の腕を掴み、安定させるように押えていてくれた。

もう一度僕は、デッキの向こうを眺めた。だんだん青潟の方の景色がうっすらと近づいてきているのが見える。そろそろ船室へ戻って下船準備した方がいいのかもしれないと思ったけれども、何かこのままでいた方がいいような気もした。

うまく言えないのだけど、たぶん清坂氏はこうした方が喜ぶんじゃないかと感じた、それだけだ。

「うん、でもちゃんと寝たけどさ」

「ほんと？」

全くの大嘘だ。隣で清坂氏の寝息聞きながら、冷静な状態で眠れるわけがないじゃないか。

僕は静かに隣で揺れている髪の毛を見つめてみた。すっとまっすぐに光り、そよいでいた。もし僕が南雲のような性格だったら、それなりにすることもあるのだろうがなぜかできない。もう一度海に向けて波が揺れるのを眺めた。

「ごめんね」

不意に、清坂氏が僕の方を見つめてこくと頭を下げた。

「別に謝られることないと思うけどさ、なに？」

「あのね、立村くん」

覚悟したような黒々とした瞳が、細く揺らいでいた。訳がわからなくなって思わず背筋を伸ばした。

「だから、なんだよ」

「なんにもさせてあげなくて」

唇をまっすぐに結んだまま、僕をまっすぐに見上げた。風に前髪が揺らいでいるようだった。

自律神経がどこかおかしくなったみたいだ。ぐらっと船が転覆しそうなほど傾いたような気がして、すっころびそうになった。意味が通ったとたん、目の前が白い雲で覆われたみたいに見える。

「き、きよさか……」

「だって、貴史が言ってたもの！」

いささか怒っているような口調で、清坂氏は畳み掛けた。謝りたいっていうよりも、むしろ攻め立てたいって感じだ。やましいところありありの僕には何も言い返せない。

「だって、がまんしてるのって、苦しいのになって」

——いったい羽飛、なに吹き込んだあの馬鹿がっ！

「だから、ほんとは、そういうこと、すればよかったのかもしれないけど、けど」

とどめだった。

「私、そういう人じゃないって立村くんのこと、思ってたんだもん。そう思ったら、いけない？」

清坂氏がもともとまっすぐ潔癖な性格だということは、三年近くの付き合いで重々承知していた。羽飛が一体何を吹き込んだのかはあとで締め上げるなりしておかないといけませんが、とにかく、誤解だけは解いておかなくてはいけない。

もちろんそういう欲望みたいなのを感じなかったなんて言えないし、一步間違ったらほんと理性を本能が凌駕してしまう可能性だってないわけじゃない。けど、そうしないように、そうしたくない、清坂氏に軽蔑されるようなことだけはしたくないって、それだけを必死に唱えて僕は一晩、あの部屋にいた。一緒の部屋にいただけで押し倒したり、それ以上のことをしたりして当然だとか、そんなことは絶対に思っていやしない。手を出さなかったのはゴムを持ってなかったからとかそういうんじゃない。苦しかったけど、でも、一瞬だって、死んでも絶対にしないって、誓っていた

「清坂氏、違う、違うって！」

全身全霊で言い訳することに徹しようと思った。

「どう違うの？」

「羽飛が何言ったか知らないけどさ、俺はそんなこと、しようなんて思ってない。本当だよ。清

坂氏が嫌がるようなこと、わかってるのに、そう思うの当たり前だろ！」

僕が必死に否定しているのを、清坂氏は素直に聞いてくれた様子だった。

「そうなの？ 本当なの？」

「当たり前だって！」

評議委員会では、いつか「清坂氏が嫌がるようなこと」を実行しなくてはならない。帰ったらすぐ、交流会の準備をすすめなくてはならないし、轟さんおよび男子評議たちと密談をしなくてはならない。清坂氏を外に置く形で話を進めることは、もう決定事項として僕の頭にある。

このままだと清坂氏をとことん評議委員会の枠の中で傷つけることになる。迷惑かけるなという男子の発想でもって、枠から外す形となる。その枠から外れた形で、僕が精一杯信頼しているんだってことを伝えるやりかたってないのだろうか。その時が近づいているとわかっているから、だから自分の幼さが許せない。本当は菱本先生の無神経な言葉を罵倒するため、清坂氏とふたりきりになる予定だったのに、どうしようもない衝動でおたおたする自分が許せない。

僕が清坂氏にできることって、今みたいに言い訳したり、謝ったりしてご機嫌取りをするだけなんだろうか。

南雲みたいに精一杯、奈良岡さんを想うような気持ちで、どうして僕は清坂氏を守ってあげられないんだろう。

「だから清坂氏、こんど二人きりになっても、俺は絶対に変なこと考えたりしたりしないから、安心していいから、本当に！」

海上で誓った。

一刻も早く、清坂氏を僕なりに守る方法を探すのだと。

一刻も早く、大人になるんだと。

立村さんと南雲さんが甲板に出たあと、私とこずえ、あと貴史も一緒に反対側の甲板に向かった。本当の言い方わからないけど、とにかく反対側。船のしっぽの方だった。どんどん遠のいていく陸地がまだかすかに揺らいでいるのが見えた。どんどん、薄くなっていく。

うちの学校の生徒しかこの船乗っていないから、見かける奴はみんなブレザーにネクタイ、襟元の赤いリボンにブレザーとスカートばかりだ。全部じゃないけど、海を眺めておしゃべりしている子の中に、女子同士の群があまりいない。それよりもむしろ、

「しかし、うちの学校中学のくせに、カップル比率高いよねえ」

こずえがしみじみと言う。片手にはポテトチップスの缶を持って、貴史に差し出している。

食い気にはあっさり負けてしまう貴史は、五枚くらいざくっと摘み取った。すぐばりばり噛んだ。

「サンキュ、ほんと、古川の言う通り、なあ」

なにをお互い頷き合っているんだか。バスの中で私にしつこいくらい、

「ねえ、どうだったの、結局、どこまでやったの？」

と聞いてきたくせに、肝心要の自分たちのことはちっとも教えてくれない。

「別に、ただお菓子食べながらテレビ観て、寝ただけだって、美里たちとは違うの！」

だもの。ちっとも違わないと思うんだけどな。だって貴史、こんな風にこずえからお菓子、さりげなくもらって食べたりする奴じゃなかったものね。私は別としても、こずえに対してはもっと、用心深く振舞っていたんじゃないかって思う。これは私が貴史の親友として思うことだけでも。本当のところなんてわかんない。とにかく私の眼からみて、貴史とこずえだって十分「カップル」になっちゃってるんじゃないかって思うのだ。

「あのさ、羽飛、とりあえず例の問題なんだけどさあ」

こずえはまた、顔をほころばせながら貴史の隣にくっつく。貴史もまんざらじゃないんだろうな、私にするのと同じようにして、またポテトチップスの缶へ指を突っ込もうとする。ひょいとこずえがその手をよけるように引っ張り、

「おいおい食わせろよちっとくらいいいだろうが！」

と笑いを交えながらやりあっている。

「ああ？」

「ただ今、愛を語り合っているであろう、あのふたりについて」

「愛？」

語り合いたいのはこずえのほうじゃないの？ 水しぶきがしゃきしゃき響いている。下の方からモーター音ががたがたいう。私たち三人以外はほとんどが、「カップル」ばかり。いいよ、どうせだったら貴史とこずえ、あんたたちだってこの中に入ればいいんだから。ふたりの話なんてほとんど聞いていなかった。私は海を眺めているカップルのうち、知り合いがいるかどうかをまずはチェックすることにした。顔と名前がわかっているだけではだめ。知ってて、どういう恋し

ているか、そのくらい最初に情報もらってないと面白くない。

真っ正面で掌サイズのスケッチブックを開き、一生懸命何か描いている男子と、その側の女子ふたり。厳密に言うと私たちと同じ三人組だ。ただ、そのうち二人の事情というのを私は知っているから最初に目が行ってしまう。

——小春ちゃんかあ。

修学旅行中、私も顔を見かけるたびに手を振ったりしたけれども、もう評議委員時代の小春ちゃんは戻ってこなかった。かすかににっこりするけれど、すぐにうつむいてしまう。私たち、女子評議と顔を合わせるのもつらいのかもしれない。天羽くんにされた酷いことを考えると当然なんだろうけれども、どうして関係のない私たちにまで、遠慮するんだろうと思うとなんだかいらっとする。身勝手なんだけど、別に私たちは小春ちゃんのこと、いじめようだなんて思っていないのにだ。立村くんが昨日、小春ちゃんと一緒に、杉本さんへのお土産を買ったと言っていたけれども、それだって私たちに声をかけてくれればもっといいもの探してあげられたかもしれないのに。

小春ちゃんはスケッチブックを持っている男子に、直角に背を向けていた。海を見つめている。薄い雲がふんわり掛かっている青い空と、重たいゼリーみたいな海と。もう一人の女子がその男子へいろいろと指を指したり、頭を撫でたり叩いたり、よくわからないことしている。一言で言っちゃうと、「からかってる」ってこと。小春ちゃんはその様子もあまり関心なさそうに、黙って反対側を見つめている。

たぶんあの男子、小春ちゃんのことを好きで好きでならないという、下着ドロの片岡くんだろう。立村くんは、「もう罪は償っている」みたいなこと言ったし、それは正論だなんて思う。だけど、もしそういう相手が彼氏だったとしたら、これから先小春ちゃんはずっと女子たちから軽蔑されてしまうってこと、気づかないんだろうか。本当に小春ちゃんが好きなのは天羽くんなのに、「あんたはこれで十分な人なんだ、下着ドロで満足しろ」とか言われてしまったようなものなんだから。女子にとってそれって、致命的な傷だって、どうして男子気づいてくれないんだろう。

私は小春ちゃんの視線の向こうを追った。ずっと、唇を結んで、切なげに見つめている先はきっと天羽くんがいるような気がしたからだった。小春ちゃんが本当に見つめたくて、受け入れてほしい相手ってひとりしかいない。けどそれが届かないことを知っているからなおさら切ないって、どうしてわかってあげられないんだろう、天羽くんも、立村くんも。

望遠鏡にお金を入れると五分間遠くの陸地を眺めることができる。おもちゃみたいなものをどうしてそんなに使いたがるんだろう。天羽くんはやっぱりそこにいた。見た目はずっとがっちりしていて男子って感じなのに、やってることが妙にガキっぽく見えてしまう。こういうところが天羽くんの人気の源でもあったんだな、って思うけど、今は素直にそう感じられなくなっている。嫌いな女子には遠慮なく、「嫌い」って言うってしまう天羽くんの姿が、時折怖いって感じる。同時に男子同士でそんな天羽くんを持ち上げている、評議委員会にも。

なんでだろう。私、やっぱり、変になっちゃったのかな。

隣にはめんどくさそうな顔してやっぱり近江さんがいた。昨日私と話していた時とは違った顔していた。眠そう、といえはいいのかな、それとも退屈っていうのかな。かなり大人っぽい雰囲気だった。私と一緒に、

「ねえ、清坂さん、三番の新人漫才師、結構将来性あると思わない？ 名前、覚えておいてね。いつか有名になった時には清坂さんにも教えてあげるから！」

とか言って、ずっと笑い転げていたあの人とは思えない。天羽くんとは感じるところが一緒だから、付き合っているのだからって言うけれど、観た感じなんか信じられない。

ずっと小春ちゃんの視線を追っていたけれど、あれだけじいっときつい眼差しを送られていて、あのふたりが気づかないわけないと思う。同時にまだスケッチブックを握り締めている片岡くんという男子も。だけど、みな知らない振りしている。小春ちゃんだけひとり、ぽつんと立ち尽くしている。誰も、振り向いてもらえない、無視されたまま、ただ見つめている瞳。

ふつうの私だったら「可哀想な小春ちゃん」と思えただろうにな。

今の私は、やっぱり不気味、と感じてしまう。どうしてか、わかんない。

そのうち、小春ちゃんをもうひとりの女子……さっきまで片岡くんをからかって遊んでいた、背の高い子だった。確か、泉州さんだったっけ？……が無理矢理腕を取るようにして、片岡くんの隣に並ばせた。小春ちゃんは嫌がらないで、ただ黙って言われるままになっていた。

「ほら、小春ちゃん、観てやんなよ、片岡の奴、ずっと描いてるんだよ！」

一方的に泉州さんがべらべらしゃべりまくっているのが聞こえる。

「あんたさ、私が持っていけていった色鉛筆、使ったの？」

「使ったよ、そんな大きい声、出すなよ」

「馬鹿だねえ、で色塗ったの？」

「塗ったよ、暇だったし」

「よーし、じゃあここで大公開ってわけよね、ほら片岡、なあに恥かしがってるのさ、貸しな、一番見てもらいたい子に見てもらいなよ」

「あ、ああ、だめだよ、泉州さんああ、まずい、ちょっと」

さっと取り上げて、一枚一枚楽しそうにめくっていく泉州さんは、小春ちゃんの肩を抱くようにして、ぬっと見せてあげていた。指差して小さい声でひとつひとつ説明している。後ろで、鉛筆を片手に

「あ、早く返してよ、返してよ」

と騒いでいる片岡くんを軽く肘鉄くらわせると、泉州さんはにやにやししながら小春ちゃんにスケッチブックを押し付けた。一ターンして離れ、小春ちゃんと片岡くんふたりだけにした。

「ほらほら、片岡、あんたもいいかげん男なんだから言うこと言っちゃいな」

「あ、泉州さん、あの」

言葉は途切れた。小春ちゃんがこくりと頷き、片岡くん小さなスケッチブックを閉じて渡したからだった。そこのところの片岡くんの顔ときたら見ものだった。もう言葉が出てこないんだ

もの。近くでないから確認できないけれど、足ががたがた震えていそう。まっすぐ小春ちゃんに向かって、卒業証書を受取るような緊張した顔して、

「あ、あの、どれか、気に入った絵、あったら、うちで、塗るから、教えて」

ずっとどもりっぱなし。しかも、片岡くんという人は震える……確認してないけど……手で一生懸命返してもらったスケッチブックをめくり、そろそろと、

「これ、いいかな、あと、これも僕、いいかなと思うんだけど、書いて、気に入ったら」

——とにかく小春ちゃんにプレゼントしたくてならないのね。

私の肩をぽんと叩くのはこずえだった。もう私以外のギャラリーさんたちもみな、小春ちゃんと片岡くんを巡る謎の会話にささやき声と笑いを携えて集まってきたようだった。天羽くんたちだけはいなかったけど、A組の男子の数人が「ひゅーひゅー！」と口笛を吹き、手を打ち鳴らした。からかってるのかな、と思ったけど違うみたいだった。

「よっしゃ、片岡、がんばれ！」

「そうだそうだ、西月さんよ、もう少し優しくしてやれよなあ」

「ほんとほんと、ここまでしてくれる奴、普通いねえぞ」

男子ってほんと、馬鹿なのかなんなのかわからない。

この時小春ちゃんはどうもつかないで、その男子たちにこっくり頷いて、片岡くんのスケッチブックを開きながら指差ししていたけど、どんなに悔しい思いしてたなんて誰も考えられなかったんだろうなって、思う。女子たちの反応みればそのくらい、見当つくじゃないの。みんな、顎上げて見下すような顔して、笑ってるじゃない。もし私が立村くんのことでもこんなことされたら、思いっきりひっぱたいてやるけど、小春ちゃんはそうしたくなるほどきつと片岡くんのこと好きじゃないんだから。天羽くんと約束したからしかたなく、がまんしなくちゃいけないのに。

なんか、涙が出てきそうだった。こずえが私の顔を横から覗き込んだ。

「どうしたのさ、美里、妙にセンチメンタルだねえ」

「なんでもないけど、別に」

余計なこと言うから、貴史も反対側から私の顔を覗き込んできたじゃない。面倒なんだから。

「あのなあ、お前、人様のことより自分のことだろうが。ちっと来い。真面目な話だ」

一番真面目な話が似合わない奴が、貴史、あんたよ。

貴史は私とこずえを連れて、反対側の甲板へ移動した。立村くんたちいるかと思ったけど、いなかった。どうしたんだろう。南雲くんがこれからどう動くかについては、さっきこずえと話をして、「たぶん大丈夫よ」って結論に達したけど。もともと南雲くんと仲の悪い貴史にはそんなんでは終わらせたくないのかもしれない。先生にはばらさないと思うんだけどな。なんとなく。

「南雲くんのことだったら、たぶん立村くんがうまくやってくれると思うよ。評議委員長と規律委員長同士だし、たぶん」

「違うって、美里、そういうことじゃないって」

こずえがまげっかえした。

「あととさ、羽飛、ちゃんと言って聞かせてあげてよね。美里きつと、立村にどうしようもな

く苦しい思いさせたはずだし、ね！」

「古川よ、お前ももう少し、その言い方気をつけろよなあ」

やれやれって顔で貴史はこずえに頷いた。なんだかやはり、一夜でこれだけ雰囲気が変わるのって、何かがあったんだとしか思えない。もうこずえは貴史に告白南十回もしているんだけど、肝心要のご本人がつかないだけなんだもの。チャンスがあれば、もしかしたらって思うのも無理はないよね。でも、貴史とこずえだなんて、想像つかない。

「じゃ、まずは例のふたりを探しに行ってくるからね！」

こずえはさっき泉州さんがやったみたく、くるっと一回転し、バレリーナっぽく優雅にお辞儀をしたあと、ばたばた足鳴らしてさっき来たほうへもどっていった。

「なによ、私なんも悪いことしてないんだもん！」

「美里、いいか、こういうことはな、本当は立村から習えって言いたいんだがなあ」

少なくとも、私はこずえ以上のこと、きつとしてないって断言しちゃえる。立村くんに聞いたって同じだと思う。ちょっぴり、腕のところ触れたりしたけど。ほら、手首を縛ってって言われた時にちょっとだけ。でも、それだけなもの。

「お前、立村とふたりでいる間、あいつが何考えてるか、想像できんのか？」

「できないけど、言ってくれたからそれでいいじゃないの」

「へ、あいつ何言ったって」

「あんたには関係ないじゃない」

噛み付くのもなんとなくめんどくさかった。貴史相手だからかもしれない。

「美里、じゃあ聞くがな」

貴史は鼻の下をぼりぼり搔いたあと、顎を引き加減にしてひとこと尋ねた。

「ちゅーくらいは、させてやっただろ？」

——ちゅー？

ねずみじゃないんだから、なんて受けないギャグは言わない。

無意識のうちに私は貴史の足を右の靴先で蹴り飛ばしていた。

「いってえ、お前海に蹴落とす気かよ！」

「あんた、何スケベなこと想像してるわけ？」

こっちだってある程度、加減はしてやったのだ。感謝しなさいよ。

「貴史、あんたもまた、変なこと考えてるわけ？」

わめきたい、だけど、周りには他の生徒もいる。聞かれたらまずいから叫べない。

全身が鐘になったみたいにがんがん鳴っている。

「ばあか、何勘違いしてるんだよ、ちょっとこっちさ来い！」

腕を無理矢理ひっぱられ、海と向かい合わされた。かたんと揺れた足元からの響き、モーター音で少し言葉が聞き取りづらい。

「あんた達だって似たような状態だったくせに、なんで私たちが」

「あのなあ、ったく、だからなあ」

腕をしっかりひっぱってふたりくっつきあった。なんだか誤解を招くツーショットだった。たぶん私たちも、カップルだと思われてる。違うってわかってるのはお互いだから別にいいんだけど。なんかおかしい。

「お前ら一応つきあってるんだろ？ 俺と古川とは、違うだろ？」

そりゃそうだけど、けどなんにもなかったもの、しょうがないもの。私は貴史の顔を思いっきり睨み返した。なんだか面倒くさそうに大きくあくびしてるのが妙にむかついた。

「じゃあ、お前、な一んも立村に、させてやらねかったのかよ」

「当たり前じゃないの！ 立村くんだって変態じゃないんだから」

「あのな、美里」 大きく肩を怒らせ、両手を手すりにつけたまま腕立て伏せをした後、貴史は脱力した。

「だったらさっさと部屋に帰してやれよな。お前、後で立村に謝っとけ」

「なんで謝らなくちゃいけないのよ！ 話したくらいでなんで」

「俺がもしだ、優ちゃんと二人っきりで泊ったとしたらとを考えてみる、何してるか想像つかねえのかよ」

絶対ありえない仮定をなぜするんだろう、貴史って。貴史は続けた。

「美里がやってたことってな、腹空かせた犬におあずけを一晩食らわせたようなもんだぞ。いつ、噛み付かれても文句言えねえぞ。もしお前がやばいことになってたとしても、男子は誰も同情しねえぞ、わかるかよ」

人のこと言えないくせに、何言ってるんだろう。むかつとくる。

「じゃああんたたちはなんだったのさ！ こずえとふたりっきりで、なんもなかったでしょうが！」

「それは俺が風呂場で寝たからだ！」

いきなり仁王立ちで開き直るのはやめてほしかった。頭の中がうまくまとまらない。貴史が何言いたいのがちっともわけわかんない。

「とにかく、謝っとけ！ 美里が昨日な一んもさせなかったってことは、あいつにとっちゃ、地獄だったんだからな」

「なんで男子がそういう気持ちになったら、そうさせてやらなくちゃいけないのよ！ そっちの方が絶対変よ！」

もうがまんできない。どうせモーターの音で聞こえないんだから叫んだっていいじゃない。

「貴史、あんたさ、男子がそういう気持ちで私になにかしたがつてるって時、じゃあって受け入れなくちゃいけないって言いたいわけ？ そんなの絶対変だよ。そんなの自分でうまく我慢すればいいことじゃないの。私は普通に話をしたいだけで、向こうだってそういう風にしゃべってくれたのに、なんで私が謝らなくちゃいけないのよ！」

そうだ、立村くんだって、ふたりっきりだったからこそ、いろいろ秘密の話してくれたもの。

「しゃあねえだろ、あいつだって男なんだからそういうこと、考えたっておかしくねえだろ」

「だけどそんなの関係ないよ、男子ってだから馬鹿！」

「馬鹿で悪かったな！ お前もしやられてたらどうするつもりだったんだっての！」

「もちろん悲鳴あげてたに決まってるじゃない！」

「あのな、お前、自分の相手でもか！」

「当たり前じゃない！ 嫌なことは嫌ってこたえなくちゃ、嘘でしょ！」

「男だって男の都合ってのがあるんだぞ！」

「そういうのは我慢するのが男でしょ！」

まずい、視線が私たちに集中してきている。こずえもいつのまにか貴史の背後にまわっている。そんなに「男の都合」ばかり要求するんだったら、これから貴史がなにされるか教えてやらないから。両腕の脇の下にこずえが手を差し入れて、「こちょこちょこちょ」と擬音付きで、「あんたたち、いちゃついてる暇あったらさ、様子見した方がいいよ。ただ今立村、しっかり南雲につるされてるよ」

「ふ、古川、おい、や、やめろ」

勝手に身悶えてなさい。私は貴史にふいっと背を向けた。こずえが来た方の通路へ向かい、立村くんの姿を探した。すぐに追いかけてきた貴史たちを立ち止まって待った。口をひんまげてまだむくれている貴史と、にやにやしながら指を指すこずえ。やっぱりあんたたち、お似合いのカップルじゃないの。

「ほら、南雲としゃべってるっしょが」

こずえが耳打ちするのを振り切り、私は壁に寄りかかってなにやら話をしているふたりの様子をうかがった。私の後ろには貴史もきていた。うるさいったらない。

「あの野郎」

あの野郎が立村くんなのか南雲くんのかはわからない。両方だろう。

貴史を思いっきり睨み、まずは隠れた方がいいかなってことで甲板までまずは引き上げることにした。ずっと立ちっぱなしだけど、うっかり座ったらすぐ寝てしまいそうだった。お互い、ほとんど寝てないってことは承知済み。そういえば立村くん、しっかり寝てみたいだ。具合悪くなってないところみると、体調もいいんだらうな。

「大丈夫だよ、とりあえず立村くんがなんとかしてくれるよ」

「あいつが丸め込まれるだけだろうが！」

「貴史もいいかげん、南雲くん相手にやきもちやくのやめなよ、みっともない」

だんだんカップル度よりも、同性同士の塊が目立ちはじめた。一生懸命記念撮影する場所を見繕っている子もいた。そういえば私、旅行中せっかく使い捨てカメラを持ってきたのにほとんど使ってない。

「そうだ、貴史、こずえ、ちょっと海バックにして立っててよ」

ポシェットに小さい使い捨てカメラを入れておいたままでよかった。

「はあ？」

反応してピースサインを送るのをしっかり、納めさせていただいた。

話し合いが終わったんだろうか。南雲くんが立村くんから離れ、向こう側の甲板へ向かった。立村くんだけが肩をがっくり落とすような格好で、突っ立ったままだった。

「まったくこんなくだらんことやらかしてる暇あったら、早く行けっての！」

頭を思いっきりはたかれた。背中をどんと押すのはこずえの手だった。

「そうだよ、行きな、行きな」

あとでこずえのためにだけ、現像しなくちゃなんないんだから、お礼ひとことくらい言ってくれたっていいのに。しかたなく私たちは立村くんの側へ寄った。振り向いた顔には、「疲れた」って書かれているようだった。やっぱり、南雲くんになにかいろいろ言われたんだろうか。私のことでいろいろと、なのかな。立村くんはいかにも無理って感じの笑顔を搾り出して、首を軽く振った。

「なんでもないよ、たぶん、大丈夫だから」

「大丈夫って、ねえ、立村くん」

私の方をじっと見て、すぐにそらした。今朝部屋を出てから、まともに話をしていないのに。すぐに貴史に視線をそらすのはどうしてなんだろう。

「立村、あの野郎になに脅されてたんだあ？ 言ってみろ！ 別に俺ら悪いことしてたんじゃあねえからな」

貴史もなにエキサイトしちゃうんだろう。わかってること今更言わなくたっていいじゃない。立村くんは貴史に「まあまあ、押えろよ」って感じに手で押えるような仕種をした。なのに全然話をしないのはどうしてなんだろう。いらいらしてきたのはこずえも同じみみたいだった。私と貴史の間からぬすっと頭を出して、

「まったく、あんたはほんっと最後の最後までガキなんだから！ 立村、いざとなったら全部あんたが責任取りなさいよ！ ちょっと頭貸しな！」

何されるかわからないわけじゃない、何考えてるんだろう立村くん。馬鹿正直に首をかしげてこずえの方へうつむくような格好するのはやめなさいよって言いたかった。瞬時に立村くんをぶったのは予想通り。波の音にも負けないぼこりとした音が聞こえた。こずえ、本気出してる。そうとう頭にきてたんだなって思った。文句言えばいいのに、って言いたかった。

「南雲とは取引したよ」

首を振って立村くんは頭の後ろに手をやりながら、いかにも「無理して落ち着いている」って顔しながら繰り返した。

「今日一日、もし南雲が何か言ったりやったりしても、俺たちは何も言わないでいる、ってことだけ。今日だけは大人しく、あいつのやりたいようにやらせてやってくれってことだけ。それさえ終われば、内緒にしてくれるって言ってるよ」

「あいつの言い分、素直に信じるのかこのぼけが！」

なんて単細胞なんだろう。こういう時は私が割って入るしかない。いっつもこうなんだから。海風が髪の毛をぺたぺたさせてて気持ち悪かった。耳にかけながら知りたいことだけすぐに聞いた。

「ねえ、その、南雲くんのやりたいことってなに？」

「たいしたことじゃないよ」

やっと私の方をまともに見てくれた。また目をそらしそうにしたから、首をかしげてもう一度じっと見つめてやった。唇を尖らすようにして、立村くんは「いかにも無理に冷静な」振りして答えてくれた。

「学校で整列している最中に、どうしても先に帰りたいから、そのところだけ見逃してくれて、それだけだよ」

——あ、それだけなんだ。

本当に、大したことじゃなかったんだ。

思いっきり、拍子抜け。

ずっと私はこずえや貴史に「大丈夫、大丈夫」と繰り返していた。立村くんと南雲くんは仲良しだから……下手したら貴史よりもずっと、かもしれない……、菱本先生にあのことを言いつけたりするようなこと、絶対しないって思っていた。けど、どこかで私、「もしかしたら」って気持ちがひっかかってきていたのかもしれない。だってこんなに、立村くんの言ったことでほっとしたことって、今までなかったもの。思わず泣けてきそうになって、慌てて目をぱちぱちさせた。こうすると笑っているように見えるんだ。まだ噛み付こうとしている貴史の足を軽く踏んで黙らせた。

「ね、貴史、よかったよね、それだけだったら大目に見てあげなよ。今日だけは！」

効果なし。まったく頭が痛いつたらない。他の男子にだったらこんな裏の裏を読もうなんてしないくせに、南雲くんに対してだけは違うんだもの。全く子どもなんだから、みっともない。

「あいつがそれだけで満足するかと思ってるのか？ 立村、いいかげん気づけよ。お前もし、あのことがばれたらどうするんだ？ 俺たちはいいけどな、いくらでも言い訳利くぞ、な、古川？」

「まあね、私たちはいつものことだからねえ」

「けど、お前と美里はどうするんだ？ 言い訳できるのか？」

「できるに決まってるでしょ！」

ったく、何勘違いしてるんだろう。だから立村くんが言ってるじゃないの。南雲くんがしてほしいのは、エスケープの準備をしてほしいってことくらいなんだから。それにエスケープするまでもなく、学校に戻ってすぐ解散だって決まってるし、そんなわあわあ騒ぐことじゃないじゃない。

同じこと思っていたのは、私だけじゃなかった。やっぱりこずえは親友だった。

「まあまあ、羽飛、いいじゃんいいじゃん、いざとなったら立村にぜーんぶ、押し付けておけばいいのよ。朝一番、美里に会いに來ただけだってことにしとけば。南雲だって立村ひとりが罪かぶることになったら、一方的にけりいれたりしないよ。私たちだけと違ってさ。そうでしょが」

——なんだか、すごいこと言ってるよ、こずえ。

「とにかく、今日のところは絶対に、南雲の行動を見て見ぬ振りしてくれ。それだけ、頼む」

立村くんは貴史に四十五度体を曲げて、しっかりお辞儀をした。とたん、一瞬くらくとしたみ

たいで、おとととって感じで一、二歩かに歩きし、貴史のシャツにしがみついた。やっぱり船酔いしたのかな？ 何か言おうとして私は口を開きかけた。とたん、

「おいおい、お前、甘えるのはこっちだろ」

私と目が合ったのは、貴史の方だった。にやっと笑ったように見えたのは、気のせいだろうか。立村くんがあいかわらず貴史の方ばかり見ている。貴史は立村くんの肩を片手でぐいと押した。ボールを跳ね返すみたいに、今度は私の方に立村くんがよろけて、そのまんま胸のところへぺたんとくっついた。大丈夫、胸は触られてない。いやらしくない。

「ほら、古川、こういう二人は無視していくぞ」

——貴史！ あんたって！

立村くんが慌てて姿勢を正し、私の顔を見て何か言おうとした。けど聞こえなかった。貴史とこずえはしっかりカップル態勢で私たちをにやにやしながら見つめていた。

「じゃあね、仲良くね、お互いに！」

学校だったら思いっきり怒鳴ってやるんだけど、今は船の上だった。

前髪をかきあげるようにして、おそろおそろ私の顔をうかがっている立村くんがいた。

貴史とこずえがいなくなった後、周りは声の響かない距離のもと、男女カップルだらけだった。

——今が、最後かもしれない。

立村くんと一緒に、思いっきり近くで話ができる機会は、船から降りたらこれっきりかもしれない。潮風の冷たさと一緒に、旅行中立村くんと一緒にいた時間の少なさが染みてきた。ふたりっきりの部屋の中でも、こんなに近くで感じたことなんてない。

一呼吸おいて、私は立村くんの腕を掴んだ。

今だけは隣り合いたかった。

デッキの向こうを眺め、立村くんは私の方をちらっと見た。動かないで、私の隣にいてくれた。

あと二時間くらいで、旅行も終わってしまう。ヒステリー起こしたり泣きじゃくったり、みっともないとこばかり見せてしまった私だけど、立村くんはそんな私でもかまわないって顔して、ここに立っていてくれる。

私のことをいやらしい目で見たりしないでくれた。手首をしばったりしなくたって、立村くんは私に変なこと、しようとしなかった。

いつもだったら隠しておけた私の本性みたいなもの。

——生理になったり、ちょっとひどいこと言われたくらいで、あんなに泣いちゃうなんて。

——あんなの、ほんとの私じゃない。

——あんなみっともない私、立村くんに見せたくなかったのに。

さらけ出してしまった自分。ほんとだったら鞆の中につめこんで、ぽいと捨ててしまいたかった。

けど、立村くんは今私の側に、いてくれる。恥かしいことばかりして、ほんとだったら無視

したって構わない「彼女」のために、逃げないでいてくれる。ぐぐっと、胸が詰まった。

「ごめんね」

いぶかしげに立村くんは、私を横から覗き込んだ。

「別に謝られることないと思うけどさ、なに？」

「あのね、立村くん」

「だから、なんだよ」

ぎゅっと心臓のところが苦しくなった。ちょっぴり酔ったのかもしれない。なんだか泣けてきそうだった。私、何も立村くんにしてあげてない。いつもだったらずっと立村くんの役に立つようにって、評議委員会とかクラスの行事とかで動いていられたのに、旅行中はずっと足手まといのままだった。

「なんにもさせてあげなくて」

何にもできない自分が情けなくて、悔しくて、思わず言葉が零れた。

「き、きよさか……」

目をひん剥いてそんなに驚かないでほしかった。がくっと体を斜めにしてふらついた。私から一歩離れた。どもっている。私の方が焦ってるのがわかる。強気な私が戻ってきた。涙の代わりに気の強い私が、一気に叫ぶ。

「だって、貴史が言ったもの！　だって、がまんしてるのって、苦しいのって。だから、ほんと、そういうこと、すればよかったのかもしれないけど、けど、私、そういう人じゃないって立村くんのこと、思ってたんだもん。そう思ったら、いけない？」

もし抱き締められてたら、もしキスされていたら、もし押し倒されていたら。　そんなこと絶対ありえないってわかってる。だから一緒にいられたんだもの。

けど、それをしてほしかったとしたら、私はどうすればよかったんだろう。

「清坂氏、違う、違うって！」

立村くんの声が一気に震えた。びっくりするくらい、大きな声だった。モーターの音でかき消されてて、たぶん他の人たちには聞こえなかったと思う。

「どう違うの？」

「羽飛が何言ったか知らないけどさ、俺はそんなこと、しようなんて思っていない。本当だよ。清坂氏が嫌がるようなこと、わかってるのに、そう思うの当たり前だろ！」

「そうなの？　本当なの？」

「当たり前だって！　だから清坂氏、こんど二人きりになっても、俺は絶対に変なこと考えたりしたりしないから、安心していいから、本当に！」

立村くんの目が震えていた。嘘なんて絶対言わないと言いたげで、沈着冷静な皮みたいなものが剥げていた。疑うな、絶対に信じてくれ、そう伝わってきた。　私は立村くんの瞳をじっと見つめた。

言葉の奥でどこか、反応するちりちりしたもの。どうしてだろう。もしこずえに尋ねたら、「あんたさあ、それは女子の直感よ。男子のエロチックな本能に反応した女の賢い知恵よ」

みたいなこと言いかねないだろう。

立村くんが懸命に弁解しているのを、おなかの一番深いところで静かに観察していた。

——本当に考えてなかったら、こんなに言い訳しないよ、立村くん。

下船準備のため、各クラスごと整列した。海がないでいたせい、誰も酔った人がいなかったのは……なにせ立村くんが無事だったんだから……よかったって思う。具合悪くなる前に寝ていた人が圧倒的に多かったってのもあるだろうし。A組から順番にタラップを降りていくと、やっぱり船の上と地上とは全然違うことが足の裏から伝わってきた。まっすぐ、揺れないし、頭がまっすぐしているって気がする。

「それでは、これからバスにクラスごと分かれて乗るからな。はぐれるなよ、まだ気を抜くんじやないぞ！」

菱本先生が気合つけるみたいに、がっと怒鳴った。他のクラスの様子を人の頭ごしに様子伺いしてみると、A組は狩野先生が真っ白い顔したまま天羽くんに関係話しかけているのが見えた。C組はゆいちゃんが元気よく

「さ、早くみんな並びな！ 早くしないと迷惑するんだからね！」
とはっぱをかけているのが聞こえた。B組は難波くんがそっくりかえったままなあんもしないでつたって、琴音ちゃんが背を丸くして女子たちに頼みごとしている様子が見えた。

——で、立村くんは。

私の方をあまり見ずに、立村くんはいつものように

「じゃあ数えるから、悪い、肩触らせろ」

そう言いながら、男子たちの肩に手を置いて点呼を取っていた。もともと数字に弱い立村くんだから、いつもだったら「私がやったげるよ！」と言うんだけど、なんかそうしちゃ悪いような気がした。具合悪くないみたいだし、私は女子のことだけ考えていればいよいよね、勝手に決め付けた。

「清坂、全員揃ったか？」

「はい、大丈夫です」

半分作った感じで笑って答えた。なんか素直にこっとする気力が、なかった。立村くんが少し間を置いて菱本先生の元へ足早に飛んできて、

「男子全員揃ってます」

こちらはきちんと礼儀正しく答えた。いかにも無理してるってところは、菱本先生相手なんだからしかたないとわかっているけれども、ほんとわかりやすい性格している人だと思う。

「そうか、じゃあ先にだ。A組から乗り込んでいくから、俺たちはまだ動くなよ」

わかりきってること何言うんだろう。

立村くんと顔を合わせて、「ねえ」って言いたかったけど、言えなかった。

さっき船の上で語ったことが、魚の小骨がひっかかったみたいに取れなくて、いやだった。

ちらっと立村くんの横顔が私の目の端に映る。私の方を気にしてるんだって感じがする。

——変なこと、思ってなんかないよね。立村くん。

A組の天羽くん、近江さんたちが筆頭となり、クラスメートを全員連れて移動し始めた。バス

は船から降りて後、駐車場まで五分くらい歩くことになっている。船着場からバスで大体一時間半くらいかかる。途中休憩が入るけれども、結構遠いと感じずにはいられない。あと一時間半で、修学旅行も終わる。立村くと夜中まで話し込むことも、もうできなくなる。

脳天気なのは菱本先生だけだった。他のクラス担任の先生や都築先生と何か意味不明な冗談を言い合っている。B組が移動した後、C組と続き、最後はD組だった。お昼少し前のせいか、もう車がたくさん海に向かって駐車しているのが見えた。きらきらと、車の青さや黄色さ緑さ、すべてが入り交じり光っていた。その一番奥に、四台のバスが留まっていた。

「清坂、お前も疲れただろ、少し寝ろ」

「大丈夫です！」

「もう語り合うのも疲れただろ」

いやだ、この先生何言ってるんだらう。私だけじゃなくて立村くんも反応しているのがその証拠だった。

「いやあ、青春は実にエネルギッシュだなあと、人生の先輩としてそう思うわけだ、なあ立村」
まずい、いつものパターンだ。立村くん、これだまたすねてしまう。菱本先生に対してのみ、どうしてこんなに意地っ張りなんだらう。私もあまりこういう風につきあいのことでやんわりからかわれるのって好きじゃないけど、立村くんの過剰反応を見るとばかばかしくなってしまうやむやにしていまいたくなる。

「先生、もうやめてください。早く、C組移動してますよ」

「まあ待て、人生は長いんだ」

各クラスの担任たちもみんな、自分たちのクラス生徒にくっついて、足早に乗り込む準備をしていた。都築先生がちらっと菱本先生に耳打ちしていたのを見かけたけれども、すぐにいなくなった。私たちD組連中だけ突っ立っている。ずっと船の中で立ちんぼしていたせいか、早く座りたくてならなかった。なのに、全然動く気配がない。

「……っと、そうだな、そろそろだな」

何がそろそろなんだらう。後ろで他の連中がぶつくさしゃべっているのが丸聞こえだった。

「南雲、水口、ちょっと来い」

「へえ？」

髪型が怖いくらい崩れていない南雲くんと、少しぼおとした顔で「なあにい？」と答えるすい君の二人が後ろからのそのそ現れた。

「悪いがお前ら、先頭行け、立村、清坂、お前ら二番手で少し、いちゃいちゃしてろ」

顔色変えた立村くんを私は無視することにした。ここで私がかつとなったら、立村くんに油を注ぐことになってしまう。ちらっと私の方を見たけど、幸い「いちゃいちゃ」する気はさらさらないみたいだった。南雲くんが、

「りっちゃん、すまぬ、この借りはいつか！」

と明るく両手を合わせ、すい君が、

「この前、悪い」

と妙に男子っぽい言葉で頭をこくっと下げた。「なによこの前って」 言いそうになったけど、飲み込んだ。わかってる「あれ」のことなんて、もう思い出したくもないって、どうして男子、わかってくれないんだろう。立村くんが隣にいるのに、そんないやなこと、なんで言い出すんだろう。うつむきたくないのに、うつむいてしまう。

「ねーさんが、あのさ」

いきなり何言い出すんだろう。なんだかすい君ってば、顔ににきびが一杯増えてほとんど月のクレーター状態じゃないだろうか。顔が真っ赤だった。私が全然聞きたがってないのに、すい君は続けて私にしゃべった。菱本先生にくっついて列が動き出しても止まらなかった。

「清坂にあやまらないと、受験勉強一緒にしないって言うからさあ、ごめん」

顎にできた膿んだ白い粒をぽりぽりかきながら、すい君は余計な説明をつけてしつこく謝ってきた。立村くんが鞆を担ぎ直すようにして片方の口角をあげ、

「水口、しゃべるのいいから早く歩け。遅れるからさ」

静かに話に割り込んだ。

「じゃあ、こんどねーさんに会った時、ちゃんと謝ったって言っといて」

「はあ？」

言っている意味が支離滅裂。全然わからない。私は立村くんに首を軽く振って「これ以上話を膨らませないで」と頼んだつもりだった。けど立村くんには伝わらなかったようだった。南雲くんだけは私たち三人の会話に一切くちばし挟まないで、いかにも規律委員長ですって顔してまっすぐ歩いていた。へんなの、南雲くんの最愛なる彼女、彰子ちゃんの話が出てきてるっていうのに、気にならないんだろうか。

「どうして彰子ちゃんに言うのよ、よくわかんない」

「だって、そうしないとさ」

すい君はやっぱりクラスの赤ちゃんなんだって、再確認した次の瞬間だった。

彰子ちゃん、大切な秘密は、すい君に言っちゃだめだよ。

「ねーさん、僕と同じ高校に行ってくれないって、言われたもん」

——ちょっとちょっと、どういうこと？

——彰子ちゃんが、すい君と同じ学校って？

驚いたのは私だけじゃない、立村くんも同じだった。

「おい、なんだよそれ、同じ高校って青大附高じゃないのか？」

「ううん、違うよ」

こういう時に大人が割り込んで止めるもんじゃないの。頼みの菱本先生は二メートルくらい先で、おっきな声で洋楽のヒットソングを歌っている。南雲くんの背がぴくっとしたようだけど、かすかにうつむいてそれ以上口を挟んでこない。

「すい君、青大附高に行かないの？」

成績学年トップのすい君が進学できないなんてこと、絶対ない。青澗大学には医学部がないから、もしお父さんの仕事を継ぐんだったら他大学に進むかもしれないけど、でも高校は一緒に

んじゃないんだろうか。運良く他の子たちはあまり私たちの会話に関心を持ってないみたいだった。彰子ちゃんがどうして帰ったのかについてはいろんな噂が飛び交っていたけれども、本当のところを誰も知らないままでいる。もう少し知りたいって気持ちも、確かにある。

「行かない、かもしれない」

「しれないって、じゃあ行くとしたらどこに進学するんだ？」

立村くんがさらに話の核心へ駒を進めていく。私も聞きたい。少しずつ声を潜めるよう小声で尋ねる。

「水口くん、将来お医者さんになるんだよね？」

「もちろん！」

「じゃあ青大附属じゃいけないの？」

「さあ」

全く見当がつかない。はぐらかしているわけではなさそうだった。

「じゃあどうして彰子ちゃんが同じ学校に行くの？」

すい君が大きく口を開けて説明をしようとした。

振り返ったのは南雲くんだった。

「水口、いいかげんにしろ！」

あの南雲くんの口から出たとは思えない太い怒鳴り声。一瞬、後ろに続く男女連中がぴたっと足を止めた。ひとり菱本先生だけが先頭を歩いているのが間抜けだった。

「まだなんも決まってねえことをだ、嘘八百ずらずらと並べやがって！　そういうのは決まっただけからにしろって言っただろうが！」

慌てて立村くんが割って入る。立ち止まるなって風に南雲くんの背中を軽く片手で押して、「とにかくさ、清坂氏に謝ったってことは、今俺がちゃんと確認したからさ。とにかく早くバスに乗ろう。ほらなぐちゃん、とにかく歩こうよ」

不承不承、南雲くんは肩を怒らせたまま大股に歩き出した。少しうつむき加減で、近くに石ころなんかあったらバスの留まっているところまで蹴飛ばせるんじゃないだろうかってくらい、がしがしと歩き続けた。立村くんだけが手を南雲くんのバック肩紐に当てて、特に何も言わないで背中を押していた。やっぱり南雲くんの事情、立村くんは知っているんじゃないだろうか。すい君も南雲くんに怒鳴られてしゅんとなったのか、私にそれ以上何も言わないでとぼとぼ菱本先生のあとを追いかけた。

空は少し薄く白いもやみみたいな雲に覆われていた。空の青さがうすく透けて見えるので暗さを感じない。でももしかしたら青潟の方は雨かもしれない、そんなふかふかした雲が進行方向に向かって膨らんでいた。旅行中は昨日の夜を除いていいお天気ばかりだったのに、終わるやいなや大雨が続くなんてことないかな。帰ったら天気予報だけ見ておこう。目の前にだんだん橙色のストライプ模様が入ったバスが近づいてきた。行きに乗ったのと一緒のバスだった。確か一日目、私、車に酔っちゃったんだよな。大丈夫かな。思い出して思わずむかむかしそうになった。今日は睡眠不足だし、立村くんのことばかり心配してられない。

「清坂氏、大丈夫？」

顔を上げてみると、立村くんがかすかに口許をほころばせるような感じで私を見つめていた。

「なにが」

「いやなんとなく」

立村くんが私のことを気遣ってくれてるんだって、いつもだったら喜んでしまえるのに。やはりさっきの話が心のどこかに淀んでいる。

「大丈夫、なんでもない」

きつとした感じで言い返してしまったかもしれない。また落ち込みそうだった。

何がショックだったんだろう。

絶対に認めたくないことを、私の直感で感じ取ってしまったことかもしれない。

立村くんが、私に対して、そういう意識を確かに持っていたんだってこと。

いつ、怖いことになっていても、言い訳できなかつた夜だったってこと。

知らない振りして向こうむいてたけど、立村くんはずっと、私をそういう目で見たくてならなかつたんだってこと。

もちろん、貴史の言うように、私が悪かったのかもしれない。私が立村くんと一緒にいたいって言ったから、そういう気持ちを無理矢理我慢させるはめになってしまったってことなのかもしれない。謝ってしまうのはなんか納得いかなかつた。でも立村くんが私に何もしなかつたってことは、それだけ大切に思ってくれたことなんじゃないかって気もする。船の上での言葉も、素直に受取ればそれなりに、私のことが好きなんだって事に繋がるのかもしれないし。だけど、どうしても頷けない。

今、この瞬間も、立村くんはいやらしいことばかり考えているのかもしれない。

——そんなことないよね、絶対ないよね！

——私のこと、いやらしい目でなんて見ないよね。

絶対しない、って力強く言ってくれたけど、あんなに必死に言い訳するところ見たらかえって怪しまずにはいられなかつた。いつもの立村くんらしくなかつたから、なおさらだった。もし貴史みたいに

「まさかお前と一夜明かした程度で、けっ、そんなむらむらしてたら世話ねえよ、ったく風呂早く上がれよったく！」

ってかましてくれたら、きっと今みたいに余計なこと考えないですんだらろう。

私を信じて、めいっぱい、本当のことを語り尽くしてほしい、それだけ。

お互い違う意見かもしれないし、もしかしたら評議委員会でまたけんかになっちゃうかもしれないけど、語り合うことさえできればきっと繋がっていける。それが一本の綱だから。立村くんが好きとか嫌いとか、そういう「恋」に関心もてないことはもうわかってる。昨日の夜のように、本当に言いたいことをすべて、話してくれるだけでいいのに。そんないやらしいこと、触ったり触られたり覗いたり覗かれたり、そんなことじゃない。どうして男子にはそれがわかってもらえないんだらう。語り尽くせないうちに、あと一時間半で旅行も終わってしまう。終わったら

またうるさい両親たちから

「あの品山の男の子はねえ、気をつけたほうがいいわよ。たあちゃんじゃあなんでだめなの？」ってねちねち嫌味を言われるから、こんなに長い時間おしゃべりなんてなかなかできなくなっちゃう。それに。

——琴音ちゃんだって、もしかしたら。

もう琴音ちゃんの気持ちを立村くんは知っているはずなんだから、いくら振ったとしても決して邪険にすることはないだろう。私という彼女がいたとしても、立村くんは関係ない。評議委員としてこれからもお付き合いしていこう。たぶんああいう性格の子、立村くんは苦手だと思うけれど、でも、そういうところ優しい立村くんだから、どうなるかはわからない。

今の空みたいに薄いガーゼのような雲が伸びているのが、明日からの学校生活。

隣同士でぐっと側に寄り添って、ずっと語り合うことすら、もう難しくなってしまう。

こんなに側にいたいのに。してほしいことが違いすぎる。私には、立村くんが本当にしてほしいかったこと、何もしてあげられないし、してあげる気もない。立村くんは私がしてほしいこと……全て語り尽くすこと……を、全然してくれない。

何もお互いに、あげられない。こんなに近くに、四泊五日、一緒にいたのに。

胸が詰まって、顔を上げるのがやっとだった。立村くんが不安げに私から目を離さないでいるのだけが視界の片隅に映っていた。

「おい、あれ」

目の前にいたすい君が立ち止まった。南雲くんもバスの真横で静止した。立村くんが一テンポ遅れて続いた。後ろの男子女子たちの声がまだそれぞれのおしゃべりのまま続いていたが、ふと、途絶えた。

すい君の視線がすうと、バスの車窓一枚に留まり、「あ、あ」と二度発した。

お口が埴輪状態だった。つられて私も視線を追った。そこにいた人の名を呼ぶ前に、誰かに突き飛ばされそうになり私はよろけた。すい君よりも一歩早く、足の長い南雲くんが前に出たからだだった。

「な、南雲、ずるいぞ！」

「うるせえ！」

すい君も一歩遅れたものの、すぐにちっちゃい身体と足ですすすっと、バスのヘッドライトをおなかでするようにしてすり抜けた。

「邪魔だったの、いいかげん邪魔するんじゃないっていつてるだろうが！」

「やだよ、先に通せよ！」

「誰が通すかって！」

乗り込む寸前の会話はどう聞いても、かっこよさが売りの南雲くんに似つかわしくない言葉ばかりだった。なんだか貴史っぽいやんちゃな言い方だった。

後ろですぐに腕を取って支えてくれた人がいた。

誰かはもう、振り向かなくても気づいていた。私は振り向かずにそっと、言いかけた名を呼んだ。

「彰子ちゃん、だよね」

「そうだな」

「なんだか、貴史みたいな言い方してるね、南雲くんって」

立村くんは答えなかった。黙って彰子ちゃん的笑顔が掠れてうつる窓ガラスを眺めていた。やがてその窓ガラスが、南雲くんとすい君の手によって開かれ、よっと三人の顔が覗いた。さすがに彰子ちゃんはびっくりしているみたいだけど、怒ってはいなかった。怒っているのはすい君だけのようだった。

「ここ僕だよ、僕が座るんだよ！」

とか自分の席は彰子ちゃんの隣なんだってことを必死に主張したがっているみたいだった。側で大きな声あげて笑いこけているのはわが担任、菱本守先生なり。三回、ぱん、ぱん、ぱんと手を打って後、

「ま、そういうことだ。めでたしめでたしだな。こりゃ」

目の前に黒いちょっと怪しげな車……上にスピーカーがくっついていて、日の丸のマークがでかでかと張り巡らされている車だった……が停まっていた。その中から、サングラス姿の男の人が菱本先生に向かって何度も頭を下げていた。

すぐ質問を浴びせたい私を片手で制するようにして、立村くんは静かな口調で尋ねた。

「先生、奈良岡さんはなぜ、戻ってきているんですか」

「そんなことはお前らには関係ないことだろう。それよりお前らも早く乗れ」

まずい、やっぱり最後の最後で立村くんやっちゃうよ。怒っちゃうよ。私はすぐに腕を引っ張った。私になだめないと誰も立村くんを押える人がいないんだから。そう、去年の宿泊研修みたいなことになったらろくでもないことになっちゃう。立村くんは全く微動だにしなかった。私の方なんか全然感じないって顔していた。

「奈良岡さんのことはどうでもいいのですが、今、南雲と水口を予定通りのバス席に着かせることは不可能だと思います。僕もそうさせる気はしません。ですから一つ提案させてください」

ちらっと、私のつかんでいる手を見た。外したりはしなかった。

「これから帰りのバスの席順を、それぞれ仲のいい友だち同士で固まって座るという形にしてもらえませんか。最後の最後だし、たぶん南雲たちもそれの方が落ち着くと思います」

凜とした声。背をぴんと伸ばしていた。私は立村くんのブレザー袖から手を離しぶらんとぶら下げた。立村くんは続けた。

「発車時刻に間に合うよう、すぐに二人ずつ組を作らせます。後ろの水口だけ補助席だして奈良岡さんの側に座らせてあげてください」

菱本先生の眼をじっと見すえたままだった。

だんだん状況がつかめてきて騒ぎ出す後ろの男子たちが騒ぎはじめている。立村くんの「いきなりのバス席順変え」の提案に名にこれって気持ちなのかもしれない。

貴史の声が混じってないのは、さっき立村さんと約束したことをたがえる気がないからだろう。

「おお、奈良岡あ、復活かあ！」

「彰子ちゃん、どうしているの？ 戻ってきたの？」

「ちょっと、南雲、すい君なんであんなら！」

最後のひとはこずえだった。こずえはきっと、立村さんと約束したことなんてすっかりかんに忘れてるんだろう。

「先生、南雲たちのために、今回だけお願いします」

ぐっと唇をかみ締め、立村さんは九十度しっかり腰を曲げて、頭を下げた。

——彰子ちゃんの隣に、みんな行きたがってたんだ。

——それ知ってて、立村くん、だから。

私だって立村さんと友だちになって……途中彼女になって……長いから、だいたいどういう気持ちでそんなことを考えていたのかは見当がついた。このまま「修学旅行のしおり」通りの席順とした場合、男子は男子同士、女子は女子同士、それぞれペアになって席に座ることになる。だから普通だったら、南雲さんと水口くんがふたり、彰子ちゃんの近くに行きたくてもあきらめざるを得ないことになってしまう。私からしたらそれだっていいじゃない、と思う。だってあさってからまた学校でいくらでも会えるんだし、今こだわらなくていいじゃない。だけど、普通よりも人の気持ちをすくい取れる感性の立村くんは、「今、彰子ちゃんの側にいられること」を求めている南雲くん、すい君の想いを守りたいって思っている。

彰子ちゃんがどうして、帰りのバスだけ一緒に乗り込むなんて、そんな不経済なこと考えたのかはわからない。

そして彰子ちゃんがどうして途中で修学旅行を抜けたのかも、今だ謎のままだ。

先生に頼まれたから、よけいな詮索しないようにしているけど、でも不思議なことには変わらない。

南雲くんたちもどこまで彰子ちゃんの事情を知っているのか、私にはわからない。

だけど、立村くんはきっと、南雲くんたちがどれだけ彰子ちゃんのことばかり考えてきていたのかを、見抜いていたんじゃないのかな。今すぐ会いたい相手のために、命賭けたい相手のために、って、その二人を何とかして応援してあげたいって思ったんでは。私にはそこまでしたいと思うだけの感覚がよくわからない。たぶん、一生そう感じることはできないだろう。

ただ、そう感じている人を、好きでいることは、できる。

たとえ、私には、何もしてくれなくて、してあげられなくても。

菱本先生は日の丸黒車の人に、立村くんよりも半分度数の少ない角度……大体四十五度……で頭を下げた。

立村くんの頭のがしっと手を当てた。軽くかき回すような仕種をした。露骨に嫌そうな顔をしたけれど、すぐに元のきりりと引き締まった顔に戻した立村くん。がまんしてるってことがよお

くわかる。

「そうか、そうか。じゃあ時間がないからな、すぐに組み分けしろ」

「わかりました。ありがとうございます」

もう一度礼をした後、立村くんはD組のみんなに片手を振りながら合図をした。

「今の話の通り、これからバスに乗るに当たって、バスの中の席を二組ずつ、それぞれがそれぞれ仲のいいもの同士にまとまって座ってください。男女同士でもいいですし、もちろん男子同士女子同士でも構いません。とりあえず、早い者勝ちなのですぐに固まってください」

即座にこずえのすっとんきょうな声が飛んだ。

「なによ立村、ずうっと男子前、女子後ろって固めてたくせに、いきなりってこと？ ったく面倒なこと、したがる奴よねえ」

「古川さん、あなたはですね」

次の瞬間立村くんは、つかつかとこずえの腕を取ってすばやく男子列の貴史の側に追いやった。ふうっと女子同士のグループから溜息が洩れる。どきんとする。私は動けずにいた。

「おい、おい、立村、俺がなんで古川とペアなんだ？ お前、どうするんだ？ あと美里もさ」

「一時間半、楽しく盛り上がっててください」

「ちょっと、あんた、じゃあ立村、あんた美里はどうする気なのよ！」

男子たちが状況を把握できないのが見て取れる。私も同じだった。立村くんはすばやく他の男子女子を見遣ると、

「とりあえず、早い者勝ちで席を取らせてもらいます。すぐにペアを作って、即乗り込んでください。見つからない場合はしかたないんで、グーとパーのじゃんけんでまとまってください。では」

小走りに私の側に寄ってきた立村くんは、私の手をしっかりと取った。

「先に乗り込みます。あとは羽飛と古川さんに任せます」

それだけ言い残し、他の三年D組連中にちらっと視線を投げた後、立村くんは私をバスの入り口まで引きずっていった。

握り締められた手首の感触は、がっちりしていた。逆らえないくらいの強度を持っていた。もし昨夜、本気で私にこわいことしようとしていたら、きっと逃れられないほどの腕力かもしれない。全身が熱くなる。言葉が出ない。車の柵のところを鞆ぶつけながらすり抜けた。足をひっかけそうになった。立村くんが支えてくれるのを感じる。腕が少し軽くなったような気がした。荷物を持ってきていた。

「俺が行きのバスで座っていた、先頭の席に座ろう」

車酔いしやすい人専用の、揺れない席だ。

「清坂氏は、窓際に座ってほしいんだ」

「え？」

「絶対酔わないから、経験上」

立村くんはそれ以上何も言わず、私の鞆を自分の鞆と一緒にかけ、タラップを上がって

った。

南雲くんたちは一番後ろの長いす席に、彰子ちゃんを間に挟む形でしっかり座り込んでいた。やがてD組連中が貴史とこずえの指示によりそれなりに組み分けされて乗り込んできた時には、もう誰も文句を言わせないような三人の世界が出来上がっていた。これを崩せてというのは、かなり酷なことだと私も思う。

「南雲、お前、最愛のハニーに対してのひとことをどうぞ！」

「もう、最高っす！」

照れもせずさりげなく言い放つ南雲くん。きっと彰子ちゃんはいつものようににこにこしながら、

「あきよくん、みんながあきれちゃうよ。ほらほら、すい君もそんなに拗ねないで。いい子にしてた？」

とか語りかけているんだろう。彰子ちゃん大好きなふたりならば、それも当然と言える。

だけど、私と立村くんは？

全然、似合わない。立村くんの方からひっぱってくれたことなんて、これがほんとに初めてだった。

立村くんの言った通り、貴史とこずえはうまくグループ再編を素早く取りまとめてくれたようだった。そんなに時間はかからなかった。私たちの後から乗り込んできたコンビのほとんどは男子、女子同士だったけれども、中にはいつのまにかなぜこうなったの？というような男女カップルも混じっていた。きつとこずえ 辺りが気を利かせて、くっつけてあげたのだろう。

「立村、とうとう年貢の納め時って奴か？ もうめろめろだなあ。さては何かあったのかよ」 さっさと先頭の席に腰掛けて、男子たちの冗談めいた冷やかしを受け止めるのに、慣れていなかった。貴史とこずえが一番最後に菱本先生と乗り込んできた。ふたり、結構いい雰囲気だ。楽しげにあちらこちら指差してにやにやしている。年貢の納め時は貴史、あんたのことよ。

私たちの顔を見て、何か言いたそうだったけど、先生に先手を取られてしまい仕方なくついた。私たちとは反対側の席だった。宿泊研修の時と同じ位置だったけど、あの時は私と貴史、こずえと立村くんの組み合わせだった。初めてバスでの二人席。立村くんと肩と肩、近くで座ったことって、今回が初めてかもしれなかった。立村くんと貴史の間へ補助席を出し、菱本先生がどかっと座った。

「単刀直入に聞こう、立村、とうとう恋人宣言か？」

菱本先生のにやけ顔、貴史、こずえのピースサイン、後ろでざわめく男子たちのひゅうひゅう声。包まれて私は身動きが取れなかった。先生の冗談めかしたからかいに、いつもだったら立村くんは「いいかげんにしてもらえませんか！」と噛み付くだろう。それともクールに無視するか。身が固くなる。いつもここで切なくなるのが私のくせだった。

視線を一切向けないまま私は膝のところを見つめていた。エンジンがかかってまたバスが揺れる。

立村くんは唇をしっかり結んだまま、軽くすうっと息を吸い込んでいた。呼吸の数もわかるほど、今は近いところにいる。

——そんなこと、してくれるわけじゃないじゃない。だって立村くんは。

「そう考えてもらって結構です」

立村くんの答える声が、確かに聞こえた。

—終—

ほたるたちの合言葉

<http://p.booklog.jp/book/78001>

著者：舞夜じょんぬ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/maiyouaogata/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/78001>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/78001>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ